

東野土居遺跡 I

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅶ
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ)



2014.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

東野土居遺跡Ⅰ

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅶ
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ)

2014.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

東野土居遺跡の発掘調査は、国土交通省が進める高規格道路南国安芸道路建設に伴う緊急調査として平成21年4月から24年3月まで3年にわたって実施いたしました。香南市は西部を流れる物部川流域や東部の香宗川流域については数回にわたって発掘調査が行われており、考古資料をとおして地域の歴史復原がある程度可能になってまいりました。しかし中央部においてはこれまでに発掘事例がなく、どのような遺跡が存在しているのか、その内容を把握することのできていない地域がありました。今次調査は、このような空白の地帯に初めて考古学のメスを入れることで大きな期待が掛けられていました。

一連の調査をとおして、弥生時代前期末に生活の営みがはじまり弥生時代後期末から古墳時代前期にかけて最初の盛行期を迎え、古墳時代後期から古代・中世、戦国期にかけて繁栄した遺跡であることが明らかとなりました。古代の瓦の出土や中世の大溝に囲まれた屋敷群の存在は、今後高知平野の歴史を語る上で重要な位置を占めるものと思います。

今回の報告書は、東野土居遺跡の西部に展開している近世集落を中心としたものですが、東野土居遺跡の変遷や当該地域の土地利用史を考えるうえにおいては興味深い成果が記録されたものと自負致しております。本報告書が地域の歴史や文化の解明や斯学の向上に役立つことができれば幸いです。

今次調査に於きましては国土交通省土佐国道事務所、香南市教育委員会をはじめ地元の皆様には多大なご理解とご協力を得ることができました。また発掘作業・整理作業に従事していただきました作業員の皆様に対しましても厚く御礼を申し上げます。

平成26年3月

公益財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 森田尚宏

例言

1. 本書は南国安芸道路の建設に伴い、平成21～23年度に実施した東野土居遺跡調査第Ⅰ区及び調査第ⅡA・B区の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター）が発掘調査を実施した。
3. 東野土居遺跡は香宗川右岸に広がる野市台地の縁辺部に立地する弥生時代から近世までの複合遺跡で、弥生時代及び古墳時代の集落跡や古代の掘立柱建物群、中世の屋敷群、近世の屋敷跡など多くの遺構・遺物が確認されている。

調査第Ⅰ区及び調査第ⅡA・B区の発掘調査は調査対象区域の買収状況に応じて平成21年度に調査第ⅠA区、平成22年度に調査第ⅠB・C区、平成23年度に調査第ⅠD～G区及び調査第ⅡA・B区と3ヵ年にわたって実施し、平成21年度の調査面積は3,510㎡、平成22年度の調査面積は5,128㎡、平成23年度の調査面積は12,114㎡で、発掘調査延べ面積は20,752㎡であった。

4. 発掘調査・整理作業は次の体制で行った。

平成21年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 小笠原孝夫
総務：同次長 森田尚宏，同総務課長 里見敦典，同主任 弘末節子
調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：同調査第四班長 出原恵三，同専門調査員 藤野明弘，同主任調査員 下村裕，技術補助員 坂本憲彦，測量補助員 都築愛・秋山英洋
事務補助員：松吉佐和

平成22年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 小笠原孝夫
総務：同次長 森田尚宏，同総務課長 里見敦典，同主任 弘末節子
調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：同調査第四班長 出原恵三，同主任調査員 久家隆芳，技術補助員 坂本憲彦・大原直美・大賀幸子，測量補助員 岩原明美
事務補助員：友永可奈

平成23年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 森田尚弘
総務：同次長 嶋崎るり子，同総務課長 里見敦典，同主任 黒岩千恵
調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：同調査第四班長 出原恵三，同専門調査員 安岡猛・小山求，同調査員 山崎孝盛・菊池直樹，技術補助員 坂本憲彦・大賀幸子，測量補助員 都築愛
事務補助員：友永可奈

平成25年度

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 森田尚宏
総務：同次長 宮田謙輔，同総務課長 野田美智子，同主任 黒岩千恵

例言

整理 総括：同調査課長 廣田佳久

整理 担当：同調査第一班長 出原恵三, 同主任調査員 久家隆芳・下村裕, 同調査員 山崎孝盛・菊池直樹, 調査補助員 坂本憲彦・大原直美・矢野雅子

事務補助員：廣内美登利

5. 本書の執筆は第二章の2と第三・V章を出原, 第四章を久家, 第I・VI・VII章を下村, 第二章の1と第八・IX章を菊池, 第X章を山崎, 第XI章をパリノ・サーヴェイ株式会社が行い, 編集は下村が行った。現場写真は平成21年度は出原・下村, 平成22年度は出原・久家, 平成23年度は山崎・菊池が撮影し, 遺物写真は下村が撮影した。
6. 遺構についてはSB(掘立柱建物), SA(柵列), SK(土坑), SD(溝), SE(井戸), P(柱穴), SX(性格不明遺構)で表記した。また, 掲載している遺構平面図の縮尺はそれぞれに記しており, 方位Nは世界測地系のGNである。
7. 遺物については原則として縮尺1/3で掲載し, 一部の遺物については縮尺を変えているが, 各挿図にはスケールを表記している。また, 遺物番号は調査区ごとの通し番号とし, 挿図と図版の遺物番号は一致している。
8. 現地調査及び報告書作成をするにあたっては, 下記の方々のご指導及び貴重なご教示, ご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。
公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏, パリノ・サーヴェイ株式会社
9. 調査にあたっては, 国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所のご協力を頂いた。また, 地元住民の方々に遺跡に対するご理解とご協力を頂き, 厚く感謝の意を表したい。
10. 整理作業については, 下記の方々のご協力を頂いた。また, 発掘作業については多くの方々に酷暑・酷寒のなか, 労を厭わず現場作業に従事して頂いた。
中西純子, 内村富紀, 岩貞泰代, 横山めぐみ, 黒岩佳子, 川添明美, 澤田美弥, 西山麻美, 久家朋子, 若江紗映, 鈴木美保, 西内広美
記して感謝の意を表したい。
11. 出土遺物は「09 - 1KH」, 「10 - 1KH」, 「11 - 1KH」と注記し, 高知県立埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

I 章 序章.....	1
1. はじめに.....	1
2. 調査の契機と経過.....	1
3. 調査の概要.....	3
(1) 遺跡の概要.....	3
(2) 調査の方法.....	3
第II章 周辺の地理的・歴史的環境.....	5
1. 地理的環境.....	5
2. 歴史的環境.....	6
(1) 縄文時代.....	6
(2) 弥生時代.....	7
(3) 古墳時代.....	8
(4) 古代.....	10
(5) 中世.....	11
第III章 I A区.....	13
1. 調査の概要と基本層序.....	13
(1) 調査の概要.....	13
(2) 基本層序.....	13
2. 検出遺構と遺物.....	13
(1) 掘立柱建物.....	13
(2) 土坑.....	16
(3) 溝.....	21
(4) 柱穴.....	37
(5) 遺物包含層等.....	37
3. 小結.....	38
第IV章 I B区.....	41
1. 調査の概要と基本層序.....	41
(1) 調査の概要.....	41
(2) 基本層序.....	41
2. 検出遺構と遺物.....	41
(1) 掘立柱建物.....	41
(2) 土坑.....	43
(3) 溝.....	55
(4) 柱穴.....	69
(5) 遺物包含層等.....	71
3. 小結.....	72

本文目次

第V章 IC区	73
1. 調査の概要と基本層序	73
(1) 調査の概要	73
(2) 基本層序	73
2. 検出遺構と遺物	74
(1) 掘立柱建物	74
(2) 柵列	75
(3) 土坑	75
(4) 溝	98
(5) 柱穴	112
(6) 性格不明遺構	113
(7) 遺物包含層等	113
3. 小結	113
(1) 遺構	113
(2) 遺物	115
第VI章 ID区	117
1. 調査の概要と基本層序	117
(1) 調査の概要	117
(2) 基本層序	117
2. 検出遺構と遺物	117
(1) 掘立柱建物	117
(2) 土坑	118
(3) 溝	149
(4) 井戸	165
(5) 柱穴	166
(6) 性格不明遺構	166
3. 小結	175
第VII章 IE区	177
1. 調査の概要と基本層序	177
(1) 調査の概要	177
(2) 基本層序	177
2. 検出遺構と遺物	177
(1) 土坑	177
(2) 溝	185
(3) 性格不明遺構	187
第VIII章 IF区	193
1. 調査の概要と基本層序	193
(1) 調査の概要	193

(2) 基本層序.....	193
2. 検出遺構と遺物.....	194
(1) F - 1区.....	194
(2) F - 2区.....	195
第IX章 I G区.....	199
1. 調査の概要と基本層序.....	199
(1) 調査の概要.....	199
(2) 基本層序.....	199
2. 検出遺構と遺物.....	199
(1) G - 1区.....	199
(2) G - 2区.....	201
第X章 II区.....	205
1. 調査の概要と基本層序.....	205
(1) 調査の概要.....	205
(2) 基本層序.....	205
2. 検出遺構と遺物.....	206
(1) II A区.....	206
(2) II B区.....	208
3. 小結.....	210
第XI章 自然科学分析.....	211
1. はじめに.....	211
2. 試料.....	211
3. 分析方法.....	211
(1) テフラ分析.....	211
(2) 植物珪酸体分析.....	212
4. 結果.....	213
(1) テフラ分析.....	213
(2) 植物珪酸体分析.....	213
5. 考察.....	215
(1) 立地環境と層序.....	215
(2) 植物珪酸体群集.....	220

挿図目次

図 1 - 1	東野土居遺跡位置図	1
図 1 - 2	調査区配置図(S=1/8,000)	2
図 1 - 3	グリッド設定図(S=1/13,000)	3
図 2 - 1	東野土居遺跡と周辺の地形	5
図 2 - 2	周辺の遺跡分布図(S=1/40,000)	8
図 3 - 1	調査区セクション図	14
図 3 - 2	調査区グリッド設定図	15
図 3 - 3	SB1	16
図 3 - 4	SB2及び出土遺物実測図	17
図 3 - 5	SB3	18
図 3 - 6	SB4	19
図 3 - 7	SB5	20
図 3 - 8	SB5出土遺物実測図	21
図 3 - 9	SK2及び出土遺物実測図	22
図 3 - 10	SK3・4及び出土遺物実測図	23
図 3 - 11	SK5・6・8及びSK5～7出土遺物実測図	24
図 3 - 12	SK10・11・13～15・18及びSK13出土遺物実測図	25
図 3 - 13	SK19・20・23・24及びSK23出土遺物実測図	26
図 3 - 14	SK25・27～29	27
図 3 - 15	SK30・31	28
図 3 - 16	SD2～4	29
図 3 - 17	SD4出土遺物実測図1	30
図 3 - 18	SD4出土遺物実測図2	31
図 3 - 19	SD4出土遺物実測図3	32
図 3 - 20	SD4出土遺物実測図4	33
図 3 - 21	SD4出土遺物実測図5	34
図 3 - 22	SD4出土遺物実測図6	35
図 3 - 23	SD5及び出土遺物実測図	36
図 3 - 24	SD7及びSD6・7出土遺物実測図	37
図 3 - 25	SD8～13及びSD8・9出土遺物実測図	38
図 3 - 26	SD14～18及びSD15出土遺物実測図	39
図 3 - 27	柱穴及び遺物包含層出土遺物実測図	40
図 4 - 1	調査区グリッド設定図	41
図 4 - 2	SB1	42
図 4 - 3	SB1出土遺物実測図	42
図 4 - 4	SB2・3	43

図 4 - 5	SB4.....	44
図 4 - 6	SB4 出土遺物実測図.....	44
図 4 - 7	SB5.....	45
図 4 - 8	SB5 出土遺物実測図.....	45
図 4 - 9	SK1 出土遺物実測図.....	45
図 4 - 10	SK3 出土遺物実測図.....	46
図 4 - 11	SK6 出土遺物実測図.....	46
図 4 - 12	SK9 出土遺物実測図.....	46
図 4 - 13	SK14.....	47
図 4 - 14	SK14 出土遺物実測図.....	47
図 4 - 15	SK16 出土遺物実測図.....	47
図 4 - 16	SK18 出土遺物実測図.....	48
図 4 - 17	SK19.....	48
図 4 - 18	SK22～27 出土遺物実測図.....	49
図 4 - 19	SK29.....	50
図 4 - 20	SK32・33 出土遺物実測図.....	50
図 4 - 21	SK35.....	51
図 4 - 22	SK35・37・38 出土遺物実測図.....	51
図 4 - 23	SK39 出土遺物実測図.....	52
図 4 - 24	SK41.....	52
図 4 - 25	SK43・44 出土遺物実測図.....	53
図 4 - 26	SK48・49 出土遺物実測図.....	53
図 4 - 27	SK66～68.....	54
図 4 - 28	SK92.....	54
図 4 - 29	SD1.....	55
図 4 - 30	SD1・3 出土遺物実測図.....	55
図 4 - 31	SD5.....	55
図 4 - 32	SD5・10・13 出土遺物実測図1.....	56
図 4 - 33	SD5・10・13 出土遺物実測図2.....	58
図 4 - 34	SD5・10・13 出土遺物実測図3.....	59
図 4 - 35	SD5・10・13 出土遺物実測図4.....	60
図 4 - 36	SD5・10・13 出土遺物実測図5.....	61
図 4 - 37	SD5・10・13 出土遺物実測図6.....	62
図 4 - 38	SD8・9 出土遺物実測図.....	63
図 4 - 39	SD11 出土遺物実測図.....	63
図 4 - 40	SD12 出土遺物実測図.....	64
図 4 - 41	SD15.....	64
図 4 - 42	SD15 出土遺物実測図.....	65

挿図目次

図 4 - 43	SD18・19 出土遺物実測図.....	65
図 4 - 44	SD20 出土遺物実測図.....	66
図 4 - 45	SD21.....	67
図 4 - 46	SD21 出土遺物実測図.....	68
図 4 - 47	SD22 出土遺物実測図.....	69
図 4 - 48	柱穴出土遺物実測図.....	69
図 4 - 49	遺物包含層等出土遺物実測図.....	71
図 5 - 1	調査区北壁セクション図.....	73
図 5 - 2	調査区グリッド設定図.....	73
図 5 - 3	SB1.....	74
図 5 - 4	SB2.....	75
図 5 - 5	SB2 出土遺物実測図.....	76
図 5 - 6	SB3.....	77
図 5 - 7	SB3 出土遺物実測図.....	77
図 5 - 8	SB4.....	78
図 5 - 9	SB5.....	79
図 5 - 10	SB6・7.....	80
図 5 - 11	SB6・7 出土遺物実測図.....	81
図 5 - 12	SB8, SA1.....	81
図 5 - 13	SK1・2 及び出土遺物実測図.....	82
図 5 - 14	SK3～5 及び出土遺物実測図.....	83
図 5 - 15	SK7・8・10～12 及び出土遺物実測図.....	84
図 5 - 16	SK13・14・16・18 及び出土遺物実測図.....	85
図 5 - 17	SK19～22 及び出土遺物実測図.....	86
図 5 - 18	SK24 出土遺物実測図.....	86
図 5 - 19	SK27・36・39・42.....	87
図 5 - 20	SK30・31.....	88
図 5 - 21	SK27・36・39・42 出土遺物実測図.....	89
図 5 - 22	SK33・34・37.....	90
図 5 - 23	SK38・40 及び出土遺物実測図.....	91
図 5 - 24	SK41 及び出土遺物実測図.....	92
図 5 - 25	SK43～45 及び出土遺物実測図.....	93
図 5 - 26	SK46～48 及び出土遺物実測図.....	94
図 5 - 27	SK53 及び出土遺物実測図1.....	95
図 5 - 28	SK53 出土遺物実測図2.....	96
図 5 - 29	SK53 出土遺物実測図3.....	97
図 5 - 30	SK53 出土遺物実測図4.....	98
図 5 - 31	SK54～56 及び出土遺物実測図.....	99

図 5 - 32	SK59～62・69及び出土遺物実測図	100
図 5 - 33	SK64～66及び出土遺物実測図	101
図 5 - 34	SK70～76・79	102
図 5 - 35	SK70・71出土遺物実測図	102
図 5 - 36	SK80出土遺物実測図	103
図 5 - 37	SK80出土瓦刻印1	104
図 5 - 38	SK80出土瓦刻印2	105
図 5 - 39	SD1及び出土遺物実測図	106
図 5 - 40	SD2～5及び出土遺物実測図	107
図 5 - 41	SD7及び上層出土遺物実測図1	108
図 5 - 42	SD7上層出土遺物実測図2	109
図 5 - 43	SD7上層～下層出土遺物実測図	110
図 5 - 44	SD7出土遺物実測図	111
図 5 - 45	SD8～11及び出土遺物実測図	112
図 5 - 46	柱穴出土遺物実測図	113
図 5 - 47	SX1出土遺物実測図	114
図 5 - 48	遺物包含層等出土遺物実測図	115
図 6 - 1	調査区東壁セクション図	117
図 6 - 2	調査区グリッド設定図	118
図 6 - 3	SB1	119
図 6 - 4	SB2	120
図 6 - 5	SB3	120
図 6 - 6	SK1・2	121
図 6 - 7	SK5	121
図 6 - 8	SK1・5出土遺物実測図	121
図 6 - 9	SK11出土遺物実測図	122
図 6 - 10	SK13	122
図 6 - 11	SK13出土遺物実測図1	123
図 6 - 12	SK13出土遺物実測図2	124
図 6 - 13	SK13出土遺物実測図3	125
図 6 - 14	SK13出土遺物実測図4	126
図 6 - 15	SK13出土遺物実測図5	127
図 6 - 16	SK13出土遺物実測図6	128
図 6 - 17	SK13出土遺物実測図7	129
図 6 - 18	SK21	129
図 6 - 19	SK21出土遺物実測図1	129
図 6 - 20	SK21出土遺物実測図2	130
図 6 - 21	SK28	131

插图目次

图 6 - 22	SK28 出土遺物実測図 1	132
图 6 - 23	SK28 出土遺物実測図 2	133
图 6 - 24	SK28 出土遺物実測図 3	134
图 6 - 25	SK28 出土遺物実測図 4	135
图 6 - 26	SK28 出土遺物実測図 5	136
图 6 - 27	SK28 出土遺物実測図 6	137
图 6 - 28	SK28 出土遺物実測図 7	138
图 6 - 29	SK30	139
图 6 - 30	SK33・35 出土遺物実測図	139
图 6 - 31	SK40・41	140
图 6 - 32	SK40 出土遺物実測図 1	141
图 6 - 33	SK40 出土遺物実測図 2	142
图 6 - 34	SK41 出土遺物実測図 1	143
图 6 - 35	SK41 出土遺物実測図 2	144
图 6 - 36	SK41 出土遺物実測図 3	145
图 6 - 37	SK42	146
图 6 - 38	SK42・43・46・49 出土遺物実測図	146
图 6 - 39	SK50・51・54 出土遺物実測図	147
图 6 - 40	SK53・55	147
图 6 - 41	SK55 出土遺物実測図	148
图 6 - 42	SK68 出土遺物実測図	149
图 6 - 43	SK71～74 出土遺物実測図	149
图 6 - 44	SD1・2 出土遺物実測図	150
图 6 - 45	SD2	150
图 6 - 46	SD3・4 出土遺物実測図	151
图 6 - 47	SD4	152
图 6 - 48	SD5 出土遺物実測図	152
图 6 - 49	SD6	153
图 6 - 50	SD6 出土遺物実測図 1	154
图 6 - 51	SD6 出土遺物実測図 2	155
图 6 - 52	SD7・8 出土遺物実測図	156
图 6 - 53	SD9	157
图 6 - 54	SD9 出土遺物実測図 1	158
图 6 - 55	SD9 出土遺物実測図 2	159
图 6 - 56	SD9 出土遺物実測図 3	160
图 6 - 57	SD9 出土遺物実測図 4	161
图 6 - 58	SD9 出土遺物実測図 5	162
图 6 - 59	SD10～14・18 出土遺物実測図	163

図 6 - 60	SD13・14.....	164
図 6 - 61	SE1.....	166
図 6 - 62	SE1 出土遺物実測図.....	166
図 6 - 63	柱穴出土遺物実測図.....	167
図 6 - 64	SX3.....	168
図 6 - 65	SX3 出土遺物実測図.....	168
図 6 - 66	SX5 出土遺物実測図.....	169
図 6 - 67	SX19 出土遺物実測図.....	171
図 6 - 68	SX20.....	171
図 6 - 69	SX27・28・30・32・33 出土遺物実測図.....	172
図 6 - 70	SX40・42・46・49 出土遺物実測図.....	174
図 6 - 71	SX50・51 出土遺物実測図.....	175
図 7 - 1	調査区北壁セクション図.....	177
図 7 - 2	調査区グリッド設定図.....	178
図 7 - 3	SK3・5.....	178
図 7 - 4	SK3 出土遺物実測図1.....	179
図 7 - 5	SK3 出土遺物実測図2.....	180
図 7 - 6	SK4.....	181
図 7 - 7	SK8.....	181
図 7 - 8	SK9・13 出土遺物実測図.....	182
図 7 - 9	SK14.....	183
図 7 - 10	SK19.....	183
図 7 - 11	SK19 出土遺物実測図.....	184
図 7 - 12	SK23.....	185
図 7 - 13	SD2.....	185
図 7 - 14	SD3.....	186
図 7 - 15	SD3 出土遺物実測図.....	186
図 7 - 16	SX2.....	187
図 7 - 17	SX2 出土遺物実測図1.....	188
図 7 - 18	SX2 出土遺物実測図2.....	189
図 7 - 19	SX6・9 出土遺物実測図.....	190
図 7 - 20	SX15.....	191
図 8 - 1	F - 2区西壁セクション図.....	193
図 8 - 2	調査区グリッド設定図.....	194
図 8 - 3	F - 1区SD1.....	195
図 8 - 4	F - 2区SR1.....	195
図 8 - 5	F - 2区SD1.....	196
図 8 - 6	I F区出土遺物実測図.....	197

挿図目次

図 9 - 1	G - 2区東壁セクション図	199
図 9 - 2	調査区グリッド設定図	200
図 9 - 3	G - 1区SU1出土遺物実測図	201
図 9 - 4	G - 2区SK2	202
図 9 - 5	G - 2区SD1	202
図 9 - 6	G - 2区SD3	203
図 9 - 7	G - 2区SUエレベーション図(東西)	203
図10 - 1	II A区北壁セクション図	205
図10 - 2	II B区西壁セクション図	206
図10 - 3	II A区SU1～4	206
図10 - 4	II A区SU5・6	206
図10 - 5	II A区SK1	207
図10 - 6	II A区SD1・2	207
図10 - 7	II A区SD4	207
図10 - 8	II A区第III層出土遺物実測図	207
図10 - 9	II B区SB1	208
図10 - 10	II B区SK1, SD1・2, 遺物包含層出土遺物実測図	209
図10 - 11	II B区SK2	209
図11 - 1	II A - 1区重鉍物および火山ガラス比分析結果	212
図11 - 2	II A - 1区の火山ガラスの屈折率	213
図11 - 3	植物珪酸体分析結果	214
図11 - 4	遺跡の位置図と自然科学分析を実施した周辺遺跡	215
図11 - 5	遺跡周辺の地形分類図	216
図11 - 6	東野土居遺跡調査区配置図と分析地点位置図	217
図11 - 7	東野土居遺跡東西方向地形断面図	218

表目次

表 2 - 1 周辺の遺跡地名表.....	9
表11 - 1 植物珪酸体分析試料一覧.....	211
表11 - 2 重鉍物・火山ガラス比分析結果.....	212
表11 - 3 火山ガラスの屈折率.....	213
表11 - 4 植物珪酸体含量.....	214

遺物観察表目次

遺物観察表 1 (I A区).....	225
遺物観察表 2 (I A区).....	226
遺物観察表 3 (I A区).....	227
遺物観察表 4 (I A区).....	228
遺物観察表 5 (I A区).....	229
遺物観察表 6 (I A区).....	230
遺物観察表 7 (I B区).....	233
遺物観察表 8 (I B区).....	234
遺物観察表 9 (I B区).....	235
遺物観察表10(I B区).....	236
遺物観察表11(I B区).....	237
遺物観察表12(I B区).....	238
遺物観察表13(I B区).....	239
遺物観察表14(I B区).....	240
遺物観察表15(I C区).....	243
遺物観察表16(I C区).....	244
遺物観察表17(I C区).....	245
遺物観察表18(I C区).....	246
遺物観察表19(I C区).....	247
遺物観察表20(I C区).....	248
遺物観察表21(I C区).....	249
遺物観察表22(I C区).....	250
遺物観察表23(I C区).....	251
遺物観察表24(I C区).....	252
遺物観察表25(I D区).....	255
遺物観察表26(I D区).....	256
遺物観察表27(I D区).....	257
遺物観察表28(I D区).....	258

土坑計測表目次

遺物觀察表29(I D区)	259
遺物觀察表30(I D区)	260
遺物觀察表31(I D区)	261
遺物觀察表32(I D区)	262
遺物觀察表33(I D区)	263
遺物觀察表34(I D区)	264
遺物觀察表35(I D区)	265
遺物觀察表36(I D区)	266
遺物觀察表37(I D区)	267
遺物觀察表38(I D区)	268
遺物觀察表39(I D区)	269
遺物觀察表40(I D区)	270
遺物觀察表41(I E区1)	273
遺物觀察表42(I E区2)	274
遺物觀察表43(I E区3· I F区)	275
遺物觀察表44(I G· II 区)	276

土坑計測表目次

土坑計測表1(I A· I B区1)	279
土坑計測表2(I B区2)	280
土坑計測表3(I B区3· I C区1)	281
土坑計測表4(I C区2· I D区1)	282
土坑計測表5(I D区2)	283
土坑計測表6(I D区3· I E区)	284
土坑計測表7(I F· G区, II 区)	285

図版目次

- 図版 1 東野土居遺跡遠景(北西より)
調査前風景(南西より)
- 図版 2 遺構検出状態(北西より)
遺構検出状態(西より)
- 図版 3 調査区南北バンク東壁セクション(東より)
調査区東西バンク南壁セクション(南より)
- 図版 4 遺構完掘状態(西より)
遺構完掘状態(南東より)
- 図版 5 SK27完掘状態(北より)
SD4～6完掘状態(南より)
- 図版 6 SK2バンクセクション(南より), SK3バンクセクション(南より), SK5バンクセクション(南西より), SK6磁器(11)出土状態, SK27バンクセクション(東より), SD1バンクセクション(西より), SD2バンクセクション(南東より), SD2陶器出土状態
- 図版 7 SD3バンクセクション(西より), SD4バンクセクション(南西より), SD4陶器(19)出土状態, SD4磁器(37)出土状態, SD4陶器(44)出土状態, SD4陶器(62・73)出土状態, SD4陶器(76)出土状態, SD4石製品(78)出土状態
- 図版 8 SD4石製品(91)出土状態, SD5バンクセクション(南より), SD7バンクセクション(東より), SD7陶器(103)出土状態, SD8バンクセクション(南西より), SD9バンクセクション(南西より), SD11バンクセクション(東より), SD15バンクセクション(東より)
- 図版 9 磁器(瓶), 陶胎染付(碗), 陶器(碗・小皿・鉢)
- 図版 10 陶胎染付(碗・火入), 陶器(碗)
- 図版 11 磁器(瓶), 陶器(碗・皿・鉢・甕・焼締め火入)
- 図版 12 磁器(小皿), 陶胎染付(碗), 陶器(碗・皿)
- 図版 13 調査前風景(南西より)
調査前風景(北西より)
- 図版 14 遺構完掘状態(北東より)
遺構完掘状態(北より)
- 図版 15 SK1バンクセクション(南西より), SK2～4完掘状態(北より), SK29バンクセクション(南東より), SK32バンクセクション(南西より), SK44バンクセクション(南西より), SD1バンクセクション(南東より), SD5・10・11完掘状態(東より), SD9バンクセクション(南西より)
- 図版 16 SD10・11・13完掘状態(西より), SD10・11バンクセクション(南東より), SD12バンクセクション(南西より), SD15・22完掘状態(北より), SD15バンクセクション(南西より), SD21バンクセクション(南西より), SD21磁器(158)出土状態, SD21瓦質土器(170)出土状態
- 図版 17 磁器(碗), 陶器(碗・皿), 石製品(叩石)
- 図版 18 磁器(皿), 陶器(鉢)
- 図版 19 磁器(瓶), 陶器(鉢・甕)
- 図版 20 陶器(碗・片口鉢・甕), 石製品(砥石・不明)
- 図版 21 東部遺構完掘状態(南西より)
西部遺構完掘状態(南より)
- 図版 22 SK19・20完掘状態(南西より)
SK27・42完掘状態(北より)
- 図版 23 SK33礫床検出状態(北東より)
SK33完掘状態(北東より)
- 図版 24 SK43～45礫出土状態(南西より)
SK43～45完掘状態(南西より)
- 図版 25 SK53遺物出土状態(北西より)
SD7遺物出土状態(北より)
- 図版 26 SK4バンクセクション(南より), SK4

図版目次

- 石列検出状態(北東より), SK19・20バンクセクション(南西より), SK21 断ち割りセクション(南西より), SK21 完掘状態(南西より), SK22 完掘状態(南西より), SK27 バンクセクション(南西より), SK27 礫検出状態(北より)
- 図版27 SK27 完掘状態(北西より), SK30 完掘状態(南西より), SK33 断ち割りセクション(北西より), SK38 完掘状態(北西より), SK41 バンクセクション(東より), SK42 完掘状態(南西より), SK46 完掘状態(北より), SK53 バンクセクション(南西より)
- 図版28 SK53 陶器(41)出土状態, SK53 磁器・陶器(43・70)出土状態, SK53 磁器(57)出土状態, SK53 磁器(58)出土状態, SK53 磁器(69)出土状態, SK53 磁器(69)出土状態, SK56 完掘状態(南東より), SK70 バンクセクション(南東より)
- 図版29 磁器(碗), 陶器(碗), 石製品(砥石)
- 図版30 磁器(碗), 陶胎染付(碗), 陶器(碗・小皿)
- 図版31 磁器(碗・瓶・鉢), 陶器(片口または鉢・壺), 石製品(砥石)
- 図版32 磁器(蓋物・仏飯具), 陶器(碗・片口または鉢), 石製品(太型蛤刃石斧)
- 図版33 調査前風景(北東より)
調査区東壁セクション(西より)
- 図版34 遺構検出状態(北より)
遺構完掘状態(北より)
- 図版35 遺構完掘状態(南より)
SK24・25 完掘状態(北より)
- 図版36 SK28・49・51・53・55・62・66 完掘状態(北東より)
SK30～32 完掘状態(北より)
- 図版37 SK5 完掘状態(南西より), SK13 バンクセクション(南より), SK21 完掘状態(北東より), SK28 バンクセクション(南東より), SK28 完掘状態(東より), SK51
- バンクセクション(北東より), SK51 完掘状態(東より), SK53 完掘状態(東より)
- 図版38 SK55 完掘状態(南東より), SK62 完掘状態(東より), SK64 完掘状態(南東より), SK72 バンクセクション(南より), SK72 完掘状態(東より), SD9 バンクセクション(東より), SD38 完掘状態(西より), P1 須恵器(356)出土状態
- 図版39 磁器(碗・蓋・徳利), 陶器(碗・瓶掛)
- 図版40 磁器(瓶), 陶器(台付灯明皿・茶釜・甕), 石製品(砥石)
- 図版41 磁器(碗・蕎麦猪口), 陶器(壺), 石製品(砥石)
- 図版42 須恵器(甕), 磁器(碗), 陶器(甕), 土製品(竈), 石製品(砥石)
- 図版43 磁器(碗・蓋・水滴), 陶器(鉢)
- 図版44 磁器(碗・杯・鉢), 陶器(播鉢), 瓦質土器(火鉢)
- 図版45 磁器(鉢), 陶器(碗・蓋・土瓶), 土製品(竈・箱庭道具)
- 図版46 磁器(碗・杯・鉢), 石製品(有舌尖頭器)
- 図版47 調査前風景(南西より)
調査区北壁セクション(南より)
- 図版48 遺構検出状態(東より)
遺構検出状態(西より)
- 図版49 遺構完掘状態(東より)
遺構完掘状態(南西より)
- 図版50 SK3 バンクセクション(北より), SK3～5 完掘状態(北より), SK8 完掘状態(北より), SK13 完掘状態(南より), SK19 磁器(26)出土状態, SK13 土師質土器(23)出土状態, SD3 バンクセクション(南より), SD2～4 完掘状態(南より)
- 図版51 磁器(碗・瓶), 陶器(甕), 土製品(人形)
- 図版52 磁器(鉢), 白磁(紅皿), 陶器(蓋・土瓶), 土師質土器(羽釜), 土製品(竈)
- 図版53 I F - 2区 遺構検出状態(西より)
I F - 2区 遺構完掘状態(西より)

- 図版54 I F - 1 区 遺構検出状態(南東より),
I F - 1 区 遺構完掘状態(西より), I
F - 1 区 SD1 完掘状態(北東より), I
F - 2 区 遺構完掘状態(南東より), I
F - 2 区 SR1 バンクセクション(南東
より), I F - 2 区 SD1 完掘状態(南東
より), I F - 2 区 SD1 バンクセクショ
ン(南東より), I F - 2 区 SK1 完掘状
態(東より)
- 図版55 I G - 2 区 遺構完掘状態(北西より)
I G - 2 区 下面遺構完掘状態(南西
より)
- 図版56 I G - 1 区 遺構検出状態(南より),
I G - 1 区 遺構完掘状態(南東より),
I G - 1 区 遺構完掘状態(北東より),
I G - 1 区 北壁セクション(南東よ
り), I G - 1 区 SD1・2, SU2 セクショ
ン(北東より), I G - 2 区 遺構検出状
態(西より), I G - 2 区 東壁セクショ
ン(南西より), I G - 2 区 SK1 完掘状
態(南より)
- 図版57 I G - 2 区 SK2 完掘状態(北西より),
I G - 2 区 SD1 完掘状態(北東より),
I G - 2 区 SD1 バンクセクション(南
西より), I G - 2 区 SD2 バンクセク
ション(南東より), I G - 2 区 SD3 完
掘状態(南西より), I G - 3 区 遺構検
出状態(北西より), I G - 3 区 遺構完
掘状態(北西より), I G - 3 区 東壁セ
クション(北西より)
- 図版58 I F 区 土師器(皿), 土製品(土錘)
I F 区 瓦(平瓦)
- 図版59 II A 区 西部遺構検出状態(南西より)
II A 区 西部遺構完掘状態(西より)
- 図版60 II A 区 東部遺構検出状態(南東より)
II A 区 東部遺構完掘状態(南東より)
- 図版61 II A 区 西部遺構検出状態(北東より), II
A 区 調査区東壁セクション(西より),
II A 区 調査区北壁セクション(南よ
り), II A 区 SD1・2 バンクセクショ
ン(南西より), II A 区 SD3 バンクセ
クション(南西より), II A 区 SD4・5
バンクセクション(南東より), II A 区
SU13~19 バンクセクション(北東よ
り)
- 図版62 II A 区 西部遺構完掘状態(北より),
II A 区 西部遺構完掘状態(東より),
II A 区 SD5 完掘状態(南西より), II
A 区 SD1・2 完掘状態(南西より), II
A 区 SD3 完掘状態(南東より), II A
区 SD4・5 完掘状態(南より), II A 区
畝状遺構完掘状態(東より), II A 区
SK1 完掘状態(南より)
- 図版63 II B 区 西部遺構検出状態(北西より)
II B 区 西部遺構完掘状態(西より)
- 図版64 II B 区 中央部遺構完掘状態(南西より)
II B 区 東部遺構検出状態(西より)
- 図版65 II B 区 SB1 完掘状態(西より)
II B 区 東部遺構完掘状態(西より)
- 図版66 II B 区 調査区西壁セクション(東よ
り), II B 区 SD1 バンクセクション(南
東より), II B 区 SK1 バンクセクショ
ン(北東より), II B 区 SK3 バンクセク
ション(南より), II B 区 SK4 バンク
セクション(南より), II B 区 SB1 -
P3 半裁(南より), II B 区 SB1 - P4 半
裁(南より), II B 区 SB1 - P5 半裁(南
より)
- 図版67 土師質土器(小皿), 陶器(皿), 石製品
(砥石)
瓦器(椀), 金属製品(不明)
- 図版68 須恵器(杯蓋)
緑釉陶器(椀)
- 図版69 重鉍物・軽鉍物(II A 区)

付図目次

- 付図1 東野土居遺跡調査第Ⅰ A区遺構平面図(S=1/200)
- 付図2 東野土居遺跡調査第Ⅰ B・C区遺構平面図(S=1/200)
- 付図3 東野土居遺跡調査第Ⅰ D・E区遺構平面図(S=1/200)
- 付図4 東野土居遺跡調査第Ⅰ F・G区遺構平面図(S=1/200)
- 付図5 東野土居遺跡調査第Ⅱ A区遺構平面図(S=1/200)
- 付図6 東野土居遺跡調査第Ⅱ B区遺構平面図(S=1/200)

第 I 章 序章

1. はじめに

本書は、高知県教育委員会が平成 20 年度に実施した試掘調査及び平成 21 年度に実施した確認調査の結果を受け、平成 21～23 年度に実施した高知南国道路外 1 件埋蔵文化財発掘調査のうち東野土居遺跡における調査第 I 区及び調査第 II A・B 区の発掘調査成果をまとめたものである。

この調査は、国土交通省(四国地方整備局土佐国道事務所)が計画し、実施している一般国道南国安芸道路建設工事に伴い、工事によって影響を受ける遺跡(埋蔵文化財)について事前の発掘調査を行ったうえで出土遺物等の整理作業を行い、遺跡の記録保存を図ることを目的としている。

東野土居遺跡は平成元年に行われた分布調査によって発見された遺跡で、平成 20 年度に実施した事前の試掘調査によって周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)範囲が拡大している。本書で報告するのは平成 21～23 年度に行われた東野土居遺跡の発掘調査報告書である。

本遺跡は香宗川右岸に広がる野市台地上に立地する弥生時代から近世までの複合遺跡で、弥生時代及び古墳時代の集落跡や古代の掘立柱建物群、中世の屋敷群、近世の屋敷群などが確認されている。

2. 調査の契機と経過

南国安芸道路は、高知市と安芸市間 36 km を結ぶ一般国道 55 号の自動車専用道路である高知東部自動車道の一環として安芸地方生活圏と高知中央生活圏の連携強化を図るほか、四国横断自動車道と接続し広域交通ネットワークの形成を目的とする道路で、昭和 62 年には国の高規格幹線道路網計画に組み込まれている。高知東部自動車道は延長 36 km と長く、高知県内で最も周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)が集中する高知平野を横断する路線であることから大規模で長期的な発掘調査が予想された。埋蔵文化財について具体的な調整を開始したのは平成 15 年度からであり、まず埋蔵文化財の取り扱いについて国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育委員会が調整を行った。その結果、当面の工事予定区域については周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)があるものこれまで発掘調査が実施されておらず、遺構の遺存状態が全く不明であるため土地の買収が完了した箇所の試掘調査及び確認調査を平成 19 年度までは財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター(現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター)、平成 20 年度からは高知県教育委員会が順次実施した。

平成 20 年度の南国安芸道路

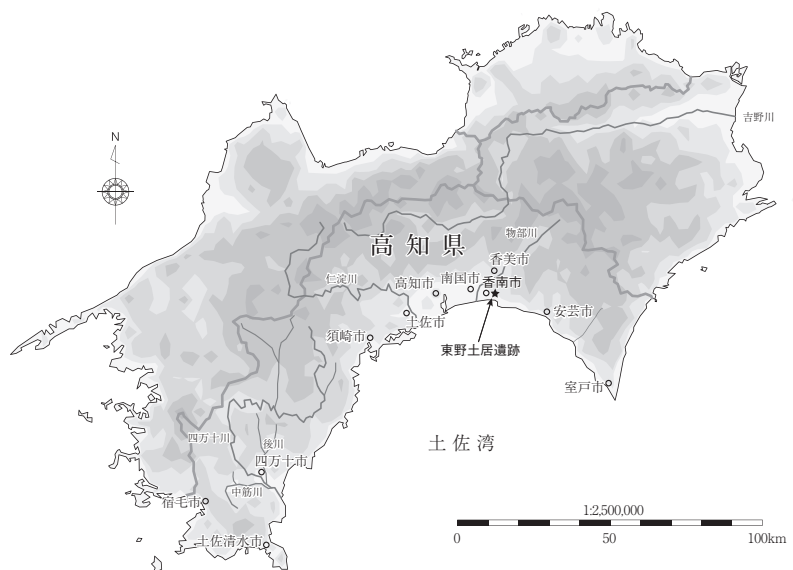


図1-1 東野土居遺跡位置図

2. 調査の契機と経過

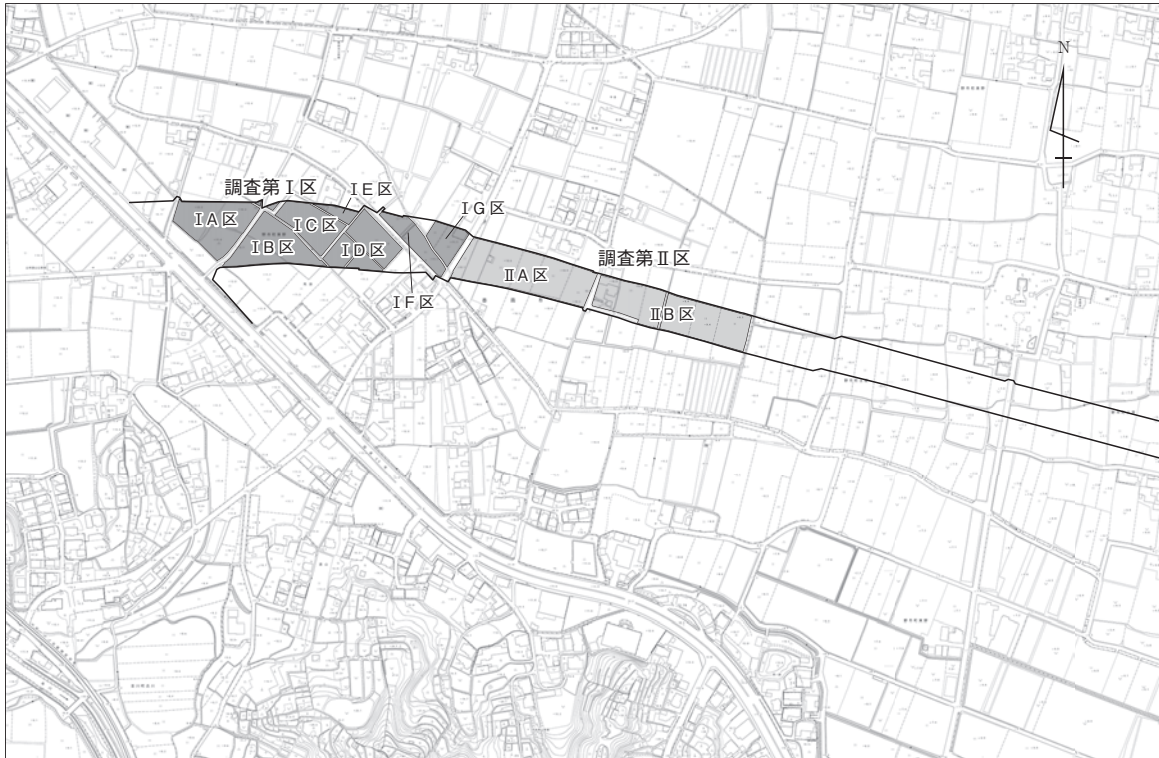


図1-2 調査区配置図(S=1/8,000)

関係では東野・土居地区が対象となり試掘調査が実施された結果、調査対象地に設定したトレンチから遺構が検出され、当該箇所が本発掘調査の必要があると判断された。また、平成21年度には確認調査が実施され、調査対象地で36カ所のトレンチから遺構が検出された。本遺跡は平成元年に実施された分布調査の結果確認された遺跡であり、地名をとって「東野土居遺跡」と命名されていたが、この試掘調査の結果を受けて周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)の範囲は拡大することとなった。このため、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育委員会の間で本発掘調査について協議を行い、平成21年度に本発掘調査を実施することとなった。調査は国土交通省四国地方整備局から高知県教育委員会が業務委託を受け、平成21年5月11日付けで高知県教育委員会と財団法人高知県文化財団(現公益財団法人高知県文化財団)との間で業務委託契約を締結したうえで、本発掘調査を実施した。また、平成21年度において未買収であった箇所については、当年度に高知県教育委員会が試掘調査及び確認調査を行い遺物包含層及び遺構が確認されたことから、平成21年度と同様に国土交通省四国地方整備局から高知県教育委員会が業務委託を受け、平成22年度は平成22年4月1日付け、平成23年度は平成23年4月1日付けで高知県教育委員会と財団法人高知県文化財団(現公益財団法人高知県文化財団)との間で業務委託契約を締結したうえで、本発掘調査を実施した。

平成16年度以降に南国安芸道路の路線内で本発掘調査が実施された周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)は、本遺跡のほか口槇ヶ谷遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅰ)や花宴遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ)、徳王子前島遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅲ)、坪井遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅳ)、徳王子大崎遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅴ)、徳王子広本遺跡(南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅵ)であり、順次発掘調査報告書が公開されている。

3. 調査の概要

(1) 遺跡の概要

東野土居遺跡は平成元年に実施された分布調査で確認されていた遺跡で、平成20年度の試掘調査によって周知の埋蔵文化財包蔵地範囲は拡大され、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物が確認される複合遺跡となった。

本遺跡は香宗川右岸の野市台地上に立地しており、弥生時代では調査対象区域東部において弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴建物が100軒以上検出されており、当該期には大規模な集落が存在していたことが明らかとなった。

古代では調査対象区域東部で掘立柱建物群が確認されており、当該期の瓦なども出土していることから当時の官衙関連施設や寺院に関連する施設があった可能性が考えられる。また、中世では調査対象区域中央部から東部にかけて一辺約35～55mを測る10区画以上の屋敷跡や幅3～4m、深さ1.5～2mを測る堀に囲まれた一辺約80mの屋敷跡などが確認されており、当該期の屋敷群が展開していたものとみられる。

近世では調査対象区域西部で溝に囲まれた屋敷跡が確認されており、当該期の村落が広がっていたと考えられる。

(2) 調査の方法

試掘調査の結果を受けて、平成21年度に世界測地系の3級基準点及び4級基準点を設置し、発掘調査に備えた。

測量は世界測地系第4座標系(IV系)の基準点を使用し、X=61,800m、Y=19,400m(北緯33° 33' 25"、東経133° 42' 32"、真北方向角-0° 06' 56")を原点とし、X軸にA～G、Y軸に1～15(100mグリッド:大グリッド)を配した。100mグリッドの中にはそれぞれの大グリッド番号を冠する20m(中グリッド:1～25)グリッドを設定し、調査で使用する4mグリッド(小グリッド:1～25)にはA1-1-1と枝番を付した。なお、遺構図にはグリッド名ではなく座標値を標記している。

堆積層の掘削は原則として遺物包含層直上までは機械力を導入し、遺物包含層以下は人力掘削を実施した。なお、遺物包含層でも遺物量が少ない場合などは作業効率を考慮し、機械力で遺構検出を行った。また、遺跡の成り立ち等を明らかにするために地質学や土壌学等関連分野の協力を得て、古

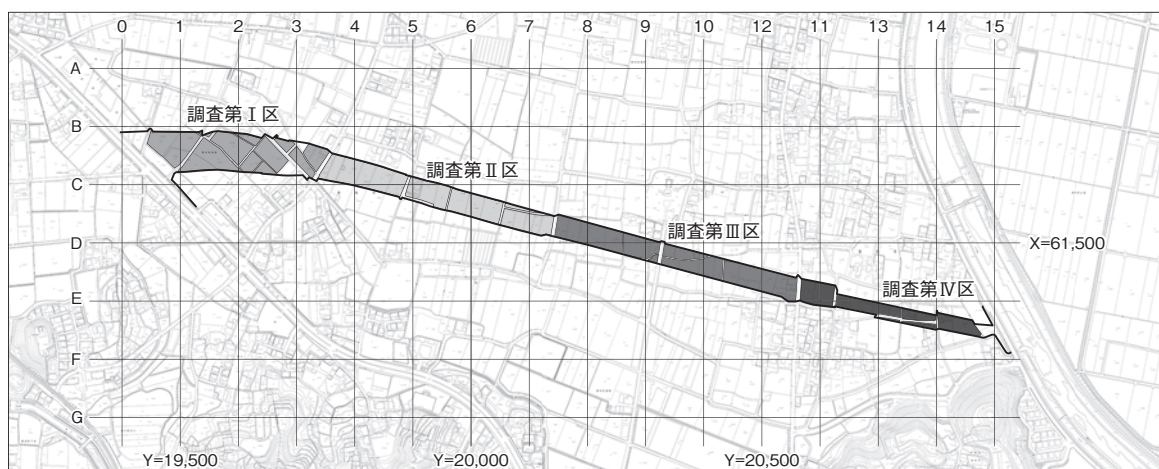


図1-3 グリッド設定図(S=1/13,000)

3. 調査の概要 (2) 調査の方法

環境の復元にも重点を置いた。なお、下層確認調査も含めた調査第Ⅰ区及び調査第ⅡA・B区の調査総面積は20,752㎡であり、出土遺物の総コンテナ数は94箱を数える。

第Ⅱ章 周辺の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

東野土居遺跡が所在する高知県香南市は県中央部に広がる高知平野の東端に位置し、平成18年3月1日に、香南5町村(赤岡町, 香我美町, 野市町, 夜須町, 吉川村)が合併して誕生した市である。本市は東西約20km, 南北約15km, 面積126.49km², 人口34,369人(平成25年6月末現在)で、東は安芸市・安芸郡芸西村, 西は南国市, 北は香美市に接しており、県下三大河川のひとつ物部川の左岸に位置している。市域には県都高知市と県東部を結ぶ国道55号が東西に走っている。主要産業は、かつては米作中心であったが、近年は米作に加えて園芸農業が盛んとなっている。

地形的にみると北側から北東側に標高約300～600mの山地地形があり、南西側が台地～沖積地などの平坦地形である。山地は、北西側から三宝山のある秋葉山地, 月見山のある香美山地, 手結山のある安芸山地に区分される。山地はそれぞれ北東及び北西方向に延びる。これらの山地は海洋プレートの沈み込みにより形成された付加体により構成されている。秋葉山地は秩父帯南帯三宝山帯にあたり、海溝充填堆積物である砂岩泥岩等と遠洋性堆積物である石灰岩, チャートなどが混在している。香美山地から安芸山地にかけては四万十帯北帯に属し、低地部は主に海溝充填堆積物である砂岩泥岩互層を基盤として、香美山地(月見山), 安芸山地(手結山)は海洋地殻, 遠洋性堆積物などのブロックが混在するメランジェ帯から構成される。

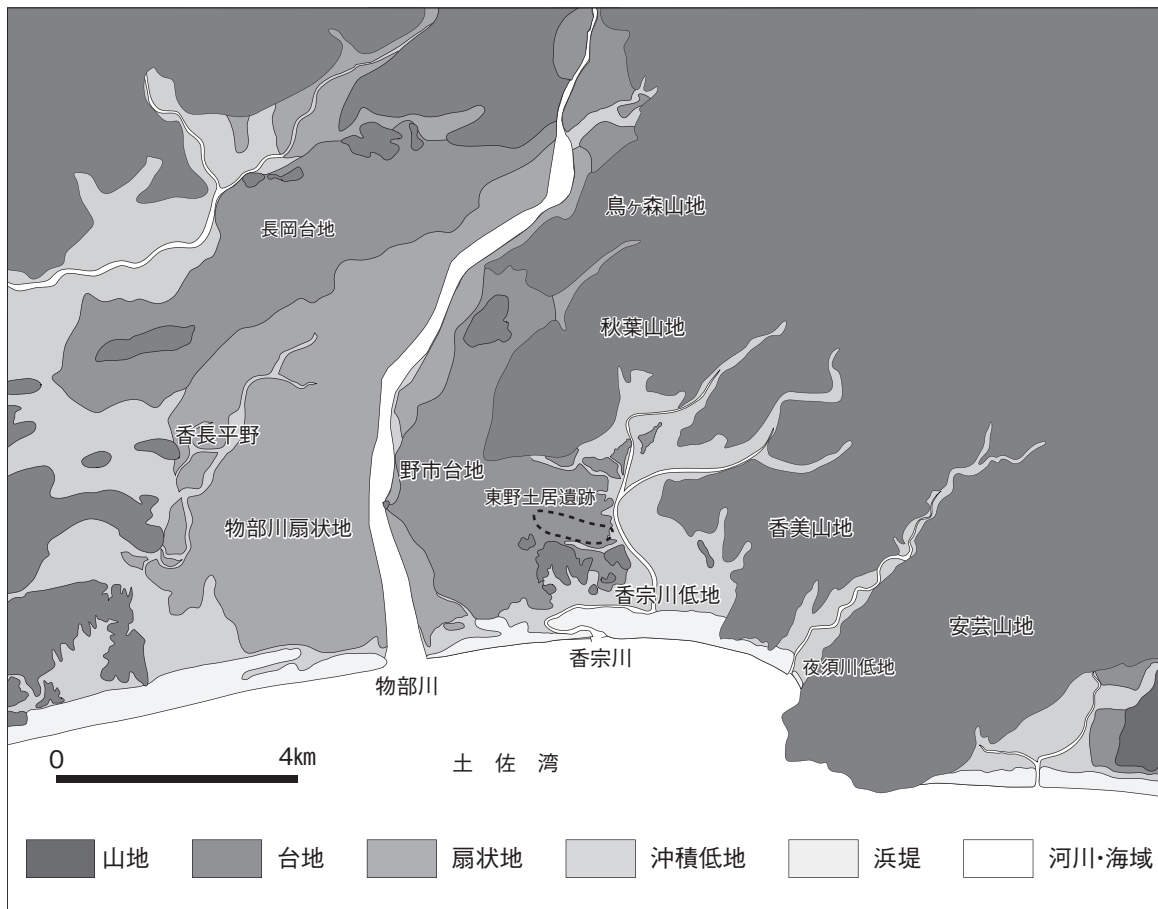


図2-1 東野土居遺跡と周辺の地形

2. 歴史的環境 (1) 縄文時代

一方、平坦地は秋葉山地南側と香美山地の間に野市台地と香宗川低地があり、野市台地西側は野市市街地となっている。市街地以外は灌漑によりほぼ全体が水田となっている。また、海岸側には砂嘴状の浜堤が2列存在し、浜堤上に赤岡、岸本地区等の市街地がみられる。香美山地と安芸山地間には溺れ谷が埋積された夜須川低地が存在し、海側に浜堤がみられる。段丘は香宗川支流の山北川流域に小規模な川岸段丘がみられ、安芸山地には数段の海岸段丘がみられる。これら両地域は地盤の隆起量が大きいとみられる。一方で、秋葉山地、香美山地には谷底平野がみられ、谷の開析が進んでいることから、隆起量は小さいとみられる。

東野土居遺跡の所在する野市台地は、物部川古期扇状地であり、緩傾斜の平坦面が数面みられる。また、野市台地南側に物部川、香宗川の影響を受けた還流丘陵とみられる残丘が香美山地の延長部に残されている。この丘陵地は野市台地を大きく2つの斜面に境界しており、この境界に沿って烏川が流れている。台地東側は東側に傾斜し、平均7.5/1,000の傾斜である。一方、野市市街地を有する台地西側は南側に傾斜し、6/1,000とやや緩やかである。

野市台地は更新世後期に物部川により形成された扇状地であるとみられており、形成時には物部川の分流が現在の香宗川流域に流入し、野市台地の東側斜面が形成されたとみられる。また、香宗川低地地下においても物部川もしくは香宗川により開析された谷を扇状地性堆積物が埋積していることがボーリング資料により明らかであり、古期扇状地は香宗川低地下に及ぶ。

近年、この物部川古期扇状地の表層を覆うローム層中に始良丹沢火山灰を挟在することが明らかとなりつつあり、古期扇状地の離水は約3万年前以前とみられる。また、長岡台地では阿蘇4火山灰に類似した角閃石がローム中にみられるという報告もあり、古期扇状地の離水は12万年前まで遡る可能性もある。

野市台地上には離水後に形成されたとみられる河道跡がいくつかみられ、これらは烏川の旧河道である可能性が高い。従って、旧来、烏川は赤岡ではなく下分から須留田間で香宗川に合流していたとみられる。

現在、野市台地は開墾され主に水田域となっているが、地籍図によると、野市台地上は江戸時代に新たに付けられたとみられる字名のみで、旧来の字名は残存しない。このことから、江戸時代前期の野中兼山による灌漑施設整備を皮切りに、江戸時代を通して大規模な開墾が行われたことが窺われる。

東野土居遺跡はこの野市台地東側に所在し、台地中央部の残丘に規制された河道跡の北側に沿って東西方向に展開する。特に本遺跡の中心となる弥生時代～中世集落(調査第Ⅲ・Ⅳ区)は旧河道と香宗川の合流地点を中心として展開している。本遺跡所在地の傾斜は2.5～8/1,000であり、調査区内での傾斜をみると、西側から調査第Ⅰ区は2.5/1,000と非常に傾斜が小さく平坦であり、次の調査第Ⅱ区では8/1,000とやや傾斜が大きくなり、東側の調査第Ⅲ・Ⅳ区では5/1,000と再び傾斜が緩く、台地は香宗川低地の沖積層下に没する。本報告の中心となる調査第Ⅰ区の近世集落跡は野市台地上の傾斜が小さい平坦地に立地するといえる。

2. 歴史的環境

(1) 縄文時代

南四国における縄文時代の遺跡分布は西高東低である。高知平野東部に位置する東野土居遺跡周辺においても分布密度は稀薄であり、香宗川上流域で後期と晩期の遺跡が数例確認されているのみ

である。後期は拝原遺跡から後期前葉の宿毛式土器、松ノ木式土器、同中葉の片粕式土器が数点出土している⁽¹⁾。十万遺跡からは貯蔵穴が確認され埋土中から晩期中葉と考えられる深鉢と黒色磨研浅鉢が出土している⁽²⁾。さらに上流域の庭が淵遺跡からは晩期末の刻目突帯文土器が遠賀川式土器とともに比較的まとまって出土している。ここからは北陸系の土器や孔列文土器が出土していることは注目される⁽³⁾。高知平野東部の晩期遺跡は安定した沖積平野の広がる中央部には立地せず、山麓部に分布することが知られるようになったが当該地域においても例外ではない。

(2) 弥生時代

高知平野の弥生文化は前期初頭に物部川右岸の田村遺跡群に成立し周辺部に広がりを見せる。東野土居遺跡の周辺で最も古い弥生遺跡は香宗川左岸の徳王子大崎遺跡である。潟湖性の海岸低地に張り出した丘陵端部に立地し、前期前葉(田村前期1b期)の土坑と同中葉(同1c期)の竪穴建物が確認されている⁽⁴⁾。ついで上流域の庭が淵遺跡を挙げることができる。ここでは明確な遺構は未確認であるが、上述したように前期中葉の土器と刻目突帯文土器が共存する二重構造が見られ、伝播の状況を看取することができる。前期前・中葉の遺跡は西部の物部川流域には認められず東方に展開している。

前期後葉(同2期)には下分遠崎遺跡を挙げることができる。下分遠崎遺跡は低地性の遺跡で4次にわたる調査が実施されており、鋤・鍬などの木製品や炭化米やドングリ類、メロンやヒョウタンの種子、獣骨など自然遺物が出土している⁽⁵⁾。竪穴建物は検出されていないが、数多くの土坑や溝が確認されている。当遺跡は中期中葉まで継続して営まれ、それ以降廃絶される。周辺部には前期後葉に始まる遺跡が多く見られる。拝原遺跡、十万遺跡、徳王子広本遺跡、花宴遺跡⁽⁶⁾を挙げることができる。何れも小規模な遺跡で、十万遺跡と花宴遺跡は中期中葉まで継続する。また西方の物部川流域においても前期後葉になると上岡遺跡、西野遺跡群、北地遺跡が営まれる。前2者は前期後葉で一旦廃絶されるが北地遺跡は中期前葉と中葉、後期前葉の竪穴建物が検出されている。中期前葉の竪穴建物は高知平野全体でも確認例がなく稀少な資料となっている。北地遺跡からは遺物も注目すべきものが出土している。中期前葉の竪穴建物からは陰石と陽石が一点ずつ出土している。弥生時代のこの種の石器は初めての出土であり、当時の精神生活を知る上で重要な遺物である。また後期前葉の竪穴住居からは舶載鏡片が出土している⁽⁷⁾。鏡式を正確に把握できないが漢代の中国鏡であることは間違いない。田村遺跡群や周辺の遺跡からは4点の舶載鏡片が出土しているが、物部川以東では初めての例である。北地遺跡は、下分遠崎遺跡とともに当該期、香南地域において中心的な役割を果たしていた集落と考えられる。

中期後葉は中部瀬戸内からの影響で凹線文土器が登場し、田村遺跡群が発展期に向かって動き始める時期であるが、香南地域においては現状では中期中葉から継続する遺跡は皆無であり、笹ヶ峰遺跡や本村遺跡が突然登場する。前者は標高230mにある遺跡で、スカイライン工事中に偶然発見されたものであり、詳細は不明であるが凹線文土器が出土している。後者は低丘陵の斜面部に立地し、中期末を中心に後期前葉まで営まれた集落で竪穴建物5軒、テラス状遺構、土坑などが検出されている⁽⁸⁾。高知平野の場合、田村遺跡群を除くと中期末の集落遺跡はそれ以前の集落とは断絶した形で登場する例が多いが、香南地域においても例に漏れず典型的な展開を示している。

後期前葉には下ノ坪遺跡⁽⁹⁾や上岡北遺跡⁽¹⁰⁾が登場する。前者はトレンチ状の調査であったが後期前・中葉の竪穴建物が15軒、溝、土坑などを検出している。遺跡全体の広がりを見ればこれに数倍する竪穴建物を擁する規模の集落と考えることができよう。ここからは鉄斧や摘鎌、鉈などの鉄

1. 歴史的環境 (3) 古墳時代

器が多く出土し、ガラス小玉 80 点が出土した大型竪穴建物も確認されている。当遺跡は田村遺跡群が最盛期を迎えた時期に併行して営まれており、田村遺跡群を核とする衛星集落として位置づけられている。そして田村遺跡群同様に中葉段階に洪水砂に見舞われ集落は終焉を迎える。これは高知平野に展開してきた伝統的な弥生集落全体の終焉を意味する。

香南地域の青銅器は、先に挙げたものの他に、東野土居遺跡の北方2kmにある兎田八幡宮に伝世されていた絵画銅剣を挙げなければならない。中細銅剣の翼にシカやカエル、カマキリなどが陽刻されているものである⁽¹¹⁾。南四国の銅剣は高知平野西部の仁淀川流域やさらに西方の新荘川流域に分布の中心があり、八幡宮例は最も東部出土の例となる。中期に周辺の遺跡にもたらされた可能性が考えられる。

(3) 古墳時代

高知平野の弥生集落が一旦消滅した後、深淵遺跡⁽¹²⁾や拝原遺跡、十万遺跡に竪穴建物1～2軒からなる小規模な集落が登場し、やがて後期後葉から古墳時代前期初めにかけて盛行期を迎える。後期後葉には西野遺跡群や徳王子大崎遺跡、幅山遺跡⁽¹³⁾、稗地遺跡⁽¹⁴⁾に竪穴建物が見られ古墳時代前期初

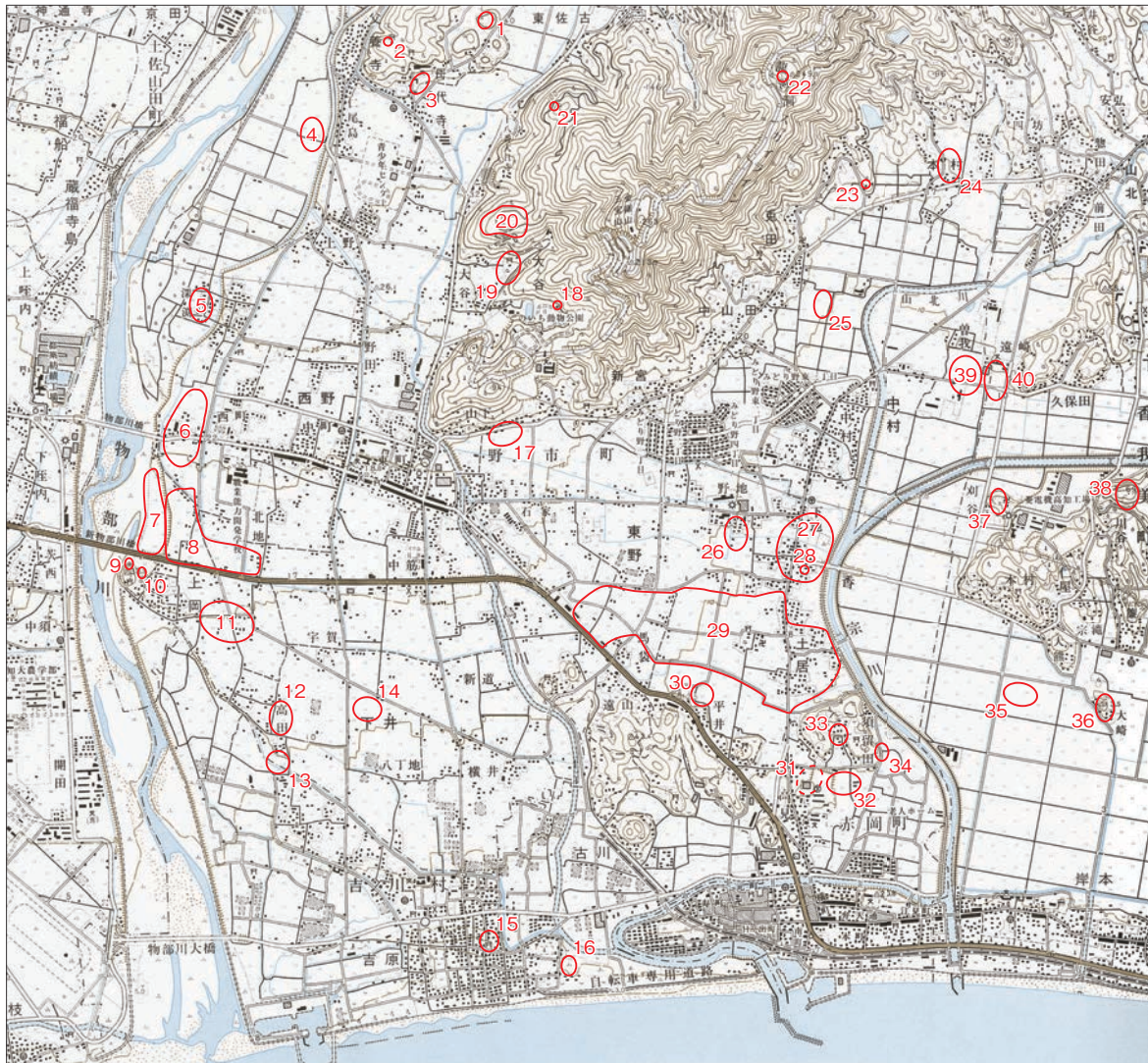


図2-2 周辺の遺跡分布図(S=1/40,000)

めにかけて営まれる。このうち西野遺跡群からは中広形銅矛の転用品が出土している⁽¹⁵⁾。弥生時代の青銅祭器としての役割を果たした後、転用された可能性がある。また、これらの集落からは河内産の庄内式土器や東阿波型土器などの搬入品が見られる。東野土居遺跡もこの時期に一つのピークを迎え、香南地域では最も大規模な集落として位置づけることができよう。後期後葉、ヒビノキ2式土器から始まるいわば新興的集落の中でこれまでの伝統的な土器組成が大きく改変され、長胴叩き甕と鉢を主要器種とする組成が成立し、竪穴建物も円形から方形に変わる。古墳時代前期初めのヒビノキ3式土器(古式土師器1期)を過ぎると集落遺跡は再び激減する。古式土師器2期の遺跡は認められず、3期の竪穴建物2軒が拝原遺跡で確認されているのみである。

周知のように古墳時代前期は瀬戸内側においては前期古墳が多く築かれるが高知平野においては認められない。いわば前期古墳空白地域を形成している。このことは田村遺跡群の終焉とも関係があるであろう。続く古墳時代中期においてもほとんど見るべきものがない。徳王子地区には中期古墳とされる徳善天皇古墳の記述が『香我美町史』⁽¹⁶⁾などに見られるが、確証を得ることはできない。香南地域に古墳の造営が始まるのは後期を待たなければならない。香南地域の古墳分布は、三宝山系の西側斜面部や母代寺のある丘陵の西部、東野土居遺跡のある中央部分、香宗川上流の東部の3地域に大別することができる。西部には大谷古墳や溝渕山古墳、日吉山古墳群など消滅したものも含めると9基を数える⁽¹⁷⁾。中央部は大崎山古墳、東部は幅山古墳や鳴子古墳など数基の古墳が存在したことが記録されている。これらの古墳で発掘調査が実施されたのは大谷古墳⁽¹⁸⁾と大崎山古墳⁽¹⁹⁾のみである。前者は径12mの円墳で玄室4.5m×2mを測り、ガラス切小玉や金環、銀環、鉄鏃などが出土している。須恵器から6世紀後半に築造年代を求めることができる。近接する溝渕山古墳は大谷古墳より一回り小さいが須恵器とともに轡、鉄刀などが出土している。大崎山古墳は東野土居遺跡から北に2kmの丘陵端部に所在する径10mの円墳であり玄室5.4m×1.9m、面積10.2㎡を測る。床面から長脚二段透高杯6点を始めガラス小玉などが出土している。香南地域の中では最も古相で、且つ大型の石室墳であると捉えることができよう。東部のものについての詳細は不明であるが、西・中央部に比べると総じて小規模と考えられる。

表2-1 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	亀山窯跡	古代	15	南中曾遺跡	弥生・古墳	29	東野土居遺跡	弥生～近世
2	日吉山古墳	古墳	16	住吉砂丘遺跡	弥生	30	平井遺跡	古墳～古代
3	母代寺土居屋敷遺跡	古代～中世	17	山下遺跡	古代・中世	31	須留田城跡(消滅)	中世
4	深淵北遺跡	弥生～中世	18	大谷古墳	古墳	32	御所の前遺跡	弥生～中世
5	深淵遺跡	〃	19	大谷遺跡	古墳・古代	33	ハザマ遺跡	〃
6	西野遺跡群	弥生～古代	20	大谷城跡	中世	34	大東遺跡	古墳・古代
7	下ノ坪遺跡	〃	21	溝渕山古墳	古墳	35	花宴遺跡	弥生
8	北地遺跡	弥生～中世	22	笹ヶ峰遺跡	弥生	36	徳王子大崎遺跡	弥生・中世
9	上岡北遺跡	弥生・近世	23	大崎山古墳	古墳	37	刈谷城跡	中世
10	上岡遺跡	弥生・中世	24	本村遺跡	弥生	38	国吉城跡	〃
11	高田遺跡	古代	25	兎田柳ヶ本遺跡	古墳	39	曾我遺跡	弥生～中世
12	野口遺跡	弥生～中世	26	東野遺跡	古代	40	下分遠崎遺跡	弥生
13	吉原城跡	中世	27	香宗遺跡	中世			
14	下井遺跡	弥生	28	香宗城跡	〃			

2. 歴史的環境 (4) 古代

香南地域の古墳は未調査例が多いが、開口例や伝承などからほとんどが円墳で横穴式石室を有するものと考えられる。高知平野における横穴式石室の導入は6世紀後半に求められるが、大崎山古墳や大谷古墳は導入期のものとして捉えることが可能で高知平野中枢部と同時期に展開している。清家章は、「舟岩型」と分類される長方形の玄室について超大型、大型、標準型、小型に分類し、大型石室墳は領域を代表するレベルの地域首長墳としている²⁰⁾。大崎山古墳は東野土居遺跡などを基盤とする地域首長墳として位置づけることができよう。

このような後期古墳の登場に併行するように集落遺跡も6世紀後半頃から認められるようになる。西部では深淵遺跡と下ノ坪遺跡、東部では拝原遺跡を挙げることができる。深淵遺跡からは竪穴建物4軒と掘立柱建物4棟を確認している。竪穴建物は初現を6世紀中葉に求めることができ、後葉まで継続する。長方形及び方形の平面形態を有し2軒に竈が敷設されている。後者も6世紀中葉に現れ7世紀代まで継続する。下ノ坪遺跡は竪穴建物4軒と掘立柱建物2棟が確認されている。竪穴建物にはすべて竈が造り付けられている。拝原遺跡からは、竪穴建物3軒、掘立柱建物1棟が確認されており、前者のうち2軒には竈が敷設されている。当遺跡では灌漑用と考えられる幅2.6m、深さ0.7m、確認延長60mに及ぶ大溝が掘削されている。

古墳時代中期の遺構・遺物は確認できないが、後期に入ると6世紀中葉頃から竈を有する新興集落が営まれ始める。これらの集落は背後の丘陵に築かれる横穴石室墳の造営主体であるとともに灌漑水路などの掘削工事などを通して農耕地の拡大が促進され、同時に地域首長の政治的な成長が図られていったものと考えられる。河川流域を単位とする西部、中央部、東部の3地域は古代における深淵郷、宗我郷、大忍郷などの原型をなすものと考えられる。

(4) 古代

西部では下ノ坪遺跡や深淵遺跡、東部では十万遺跡や曾我遺跡²¹⁾が挙げられる。両地域ともに水運の要衝に立地している。先ず下ノ坪遺跡では8世紀前半から9世紀前半にかけての掘立柱建物群が登場する。香長条里と整合し大型で規格性を帯びた建物が15棟確認されている。特に9世紀前半に盛行期があり建物規模も大きくなる。3間×7間の側柱に西庇を持つSB20や3間×4間の総柱建物SB19は県下で最大規模を誇っている。遺物においても注目すべきものが多い。SB20の東北隅の柱穴掘方から八稜鏡が出土している。革帯具の蛇尾や石鏝、円面硯、風字硯、佐波理椀、緑釉陶器火舎、多量の赤彩土師器、鍛冶工房の存在を示す取り瓶、土坑から当該期の土師器・須恵器の一括資料が出土しており土佐における律令的土器様式の変遷を理解する標識的資料となっている。下ノ坪遺跡は、遺構の規模、遺物の質・量から見て土佐における最も官衙的な性格を帯びた遺跡として捉えることができる。森公章は当遺跡について河川交通の拠点として捉え「香美郡の群津、あるいは郡司物部鏡連氏の私的な津と考えられ、古代の津のあり方を知る希有な事例」²²⁾としている。

深淵遺跡は建物の規模や性格に付いては明確に把握できるものはないが、鉈尾や二彩陶器片、緑釉陶器片、円面硯、風字硯などが出土している。概ね8~9世紀の中で捉えることのできるものである。また下ノ坪遺跡になかったものとして古代瓦が比較的まとまって出土している。上限は白鳳期、下限は平安期に求められる。これらの瓦とともにスサ入りの窯壁塊が出土しており古代瓦窯の存在が想定される。小字名を冠して「殿の内瓦窯跡」と呼ばれている²³⁾。なおこの地域の古代の窯跡としては1km程上流にある亀山窯跡があり、京都の法勝寺や平安京大極殿に使用されていることが知られている。物部川の水運を利用して運ばれたものと考えられる。

香宗川上流域の左岸にある十万遺跡からも8世紀代の規格性をもった建物群が14棟検出されている。中央部に「コ」の字状に配置された中心建物が建ち、西部には倉庫群が並び、中心的建物は3間×5間で東庇を持つ。倉庫は2間×3間と下ノ坪遺跡に比べると小規模であり、香長条里には沿わないがN-24°-Eに主軸をもって整然と配置されており官衙的性格を帯びた建物群と捉えることができよう。建物群は概ね8世紀中に終わるが、区画溝と考えられるSD2は10世紀に埋没している。SD2の埋土中から石鏃(巡方)が出土している。

曾我遺跡は十万遺跡から西方1.5kmの地点に位置する。9世紀代を中心とする建物が8棟確認されている。調査区の関係で規模を正確に復元できる建物は少ないが、軸線を共有し整然と配置されており官衙的な性格を帯びる。中心的な建物SB1は3間×5間である。ここからは円面硯6点、転用硯4点、緑釉陶器45点、黒色土器、灰釉陶器などが出土している。また低湿地に立地していることから他の遺跡からは得ることのできない柱根、掘り方からは桃の種子が検出されている。十万遺跡がほぼ8世紀に終わることから地域の拠点がこの地に移動したことも考えられる。

東部には徳王子から古代窯跡が2基確認されている。徳王子1号窯は登窯で残存状況はよくないが7世紀末～8世紀前葉の須恵器杯(身・蓋)、高杯、鉄鉢などが内部から出土している。同2号窯は瓦窯で縄蓆文が見られる⁽⁶⁾。1号窯は十万遺跡に対応するものと考えられよう。この他、遺構は確認されていないが、拝原遺跡から徳王子窯で焼成された可能性のある布目瓦が数点出土しており、郷寺の存在も考えられている。

香南地域の古代遺跡は8世紀代に官衙的性格を持った建物群が河川交通の要衝と考えられる地点に登場する。『倭名類聚鈔』によれば古代の香美郡は8郷よりなっていたとされ、香南地域は西から深淵郷、曾我郷、大忍郷が該当する。これまでに検出された諸遺構が律令による地方支配とどのような関わりを持っているのか詳らかでないが、末端組織である郷との関係を有する可能性は十分に考えることができよう。これらの建物群は、9世紀代まで継続するが10世紀に至ると激減する。これは高知平野全体の様相に一致する。10世紀以降は荘園公領制の展開期にあたり土佐においても大開墾時代の到来を迎える。古代社会の変容とこれまで見られた官衙的遺構の消滅にどのような関係があるのか興味深いところである。

(5) 中世

周辺の遺跡において中世の遺物の出土している例は多いが、まとまった遺構が検出されているのは十万遺跡と東野土居遺跡調査第Ⅲ区を中心に検出された屋敷群を挙げることができよう。十万遺跡では古代の建物群を検出した面の上層から大溝によって区画された屋敷地群が見られ、多くの掘立柱建物群が検出されている。屋敷群の東側(上流側)の山上には十万城が屹立する。屋敷地はL字形に巡る3条の大溝によって1,000㎡前後あるいはそれ以上の面積を有する3つの区画からなっている。

山城に近い東の屋敷地が最も広く大溝の規模も幅3m前後と最も大きい。屋敷地の中には14世紀から16世紀の掘立柱建物が39棟確認されており、8割が15世紀代に属する。15世紀代の建物は5つの群から構成されており各群には中心的な建物の存在も明らかとなっている。大溝の掘削時期を明らかにすることは難しいが、埋没の時期は15世紀代に求められる。15世紀代に盛行期を迎え16世紀を待たず廃絶している。戦国期の高知平野は、中小河川単位に山城とその麓の屋敷群をセットとする景観復元が可能であるが、十万遺跡はその典型として捉えることができる。周辺の河川流域には多くの山城が確認されており、戦国期の地域社会のあり方を示している。

2. 歴史的環境 (5) 中世

鎌倉期を中心とする中世前期の遺構には恵まれていないが、東野土居遺跡の北には香宗我部氏の居城である香宗城跡があり、土塁の一部が残存しており市史跡となっている。甲斐源氏的一条忠頼の家人であった秋家は建久四(1193)年源頼朝に任官した後、深淵郷と宗我部郷の地頭職に任じられ土佐入部後に居城としたところである。城跡の周辺には同氏の菩提寺とされる宝鏡寺跡があり五輪塔が並んでいる。鎌倉期から南北朝期を通して地域支配を固め勢力を拡大し戦国期には東の安芸氏や西の長宗我部氏などと並ぶ「土佐の七雄」と数えられるまでに成長している。香宗城跡の南に位置する現在の香南市赤岡町は香宗我部氏の支配する市場、特に河川・海上交通の拠点としての湊町にまで遡るものと考えられる。

長宗我部氏の強大化の中で香宗我部氏は長宗我部国親の三男親泰を養子に迎え、長宗我部氏に吸収される。天正六(1588)年の『長宗我部地検帳』によると香宗城の周辺は旧香宗我部の有力家臣の給地となり、現在の立山神社参道の西側付近にまで及んでいる。しかしそれより西側の広大な土地は検地の対象となっていない。今次報告する東野土居遺跡調査第Ⅰ・Ⅱ区は近世初頭まではほとんど開墾されていない「鏡野」と呼ばれる原野であった。この地が近世農村の景観を呈するようになるのは、17世紀の野中兼山による治水事業をまたなければならない。東野土居遺跡周辺の弥生時代から中世にかけての遺跡は香宗川流域に集中し各時代重層して展開している。このことは当地が各時代を通じて香美郡の要衝であったことを示す何よりの証である。

参考文献

- (1) 香我美町教育委員会『拝原遺跡』1993年
- (2) 香我美町教育委員会『十万遺跡発掘調査報告書』1988年
- (3) 香南市教育委員会「庭が淵遺跡現地説明会資料」
- (4) 高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『徳王子大崎遺跡』2013年
- (5) 香我美町教育委員会『下分遠崎遺跡』1987年
- (6) 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター『花宴遺跡』2010年
- (7) 香南市教育委員会『北地遺跡』2011年
- (8) 野市町教育委員会『野市町本村遺跡調査報告書』1993年
- (9) 野市町教育委員会『下ノ坪遺跡Ⅰ・Ⅱ』
- (10) 野市町教育委員会『上岡北遺跡』
- (11) 岡本健児・岡本桂典「高知県香美郡野市町兎田八幡宮と絵画を持つ銅剣」『高知県立歴史民俗資料館研究紀要』第3号高知県立歴史民俗資料館1993年
- (12) 野市町教育委員会『深淵遺跡発掘調査報告書』1989年
- (13) 香我美町教育委員会『幅山遺跡』1999年
- (14) 香我美町教育委員会『稗地遺跡』1993年
- (15) 更谷大介「香南市西野遺跡群ルノ丸地区南A」『埋文こうち』第21号高知県教育委員会2008年
- (16) 吉田萬作「第三章 古墳時代」『香我美町史』高知県香我美町1986年
- (17) 廣田典夫「古墳時代」『野市町史 上巻』野市町1992年
- (18) (財)高知県文化財団『大谷古墳』1991年
- (19) 香南市教育委員会『大崎山古墳』2013年
- (20) 清家章「まとめ」『小倉山古墳測量調査報告書』高知大人文学部考古学研究室2012年
- (21) 野市町教育委員会『曾我遺跡』
- (22) 森公章「律令体制下の土佐」『高知県の歴史』吉川弘文館2001年

第三章 I A区

1. 調査の概要と基本層序

(1) 調査の概要

調査区西端の調査区で、面積は3,510 m²である。調査区の中央部を南北に走る溝を境に東西に分かれるが、遺構は東側の北半分に集中している。近世の屋敷地で掘立柱建物5棟、柵列1列、土坑32基、溝21条、多数のピットが検出されている。遺物は陶磁器が溝から多く出土している。現代攪乱が多く残り具合は余りよくない。

(2) 基本層序(図3-1)

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

調査区東部北壁セクション

- I層 耕作土である。層厚30～40cmを測る。
- II層 旧耕作土である。小礫を含む褐灰色(10YR4/1)シルト層で層厚は10～25cmである。
- IIIa層 黒褐色(10YR3/1)シルト層で層厚は5～10cm前後である。近世の遺物包含層である。
- IIIb層 黒褐色(10YR3/2)シルト層で層厚は5～15cm前後である。西部には堆積が見られない。近世の遺物包含層である。
- IVa層 地山である。黄褐色(10YR5/6)粘性土層である。
- IVb層 地山である。黄褐色(10YR5/6)粘性土層に風化のない円礫を多く含む。

調査区中央部バンク東西セクション

- I層 耕作土である。
- II層 小礫を含む褐灰色(10YR4/1)シルト質極細粒砂層で層厚は5～10cm前後である。
- II'層 小礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂層に地山の明黄褐色(2.5Y6/6)粘性土のブロックを多く含む。西方の一部に認められる。
- III層 小礫を含む明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質極細～中粒砂層に地山土をブロック状に含む。層厚は5～10cm前後である。
- IV層 小礫を含む暗褐色(10YR2/3)シルト質極細～中粒砂層に地山土をブロック状に含む。層厚は5～10cm前後である。近世の遺物包含層である。
- V層 黒褐色(10YR3/2)シルト質極細粒砂層である。IV層の下に部分的に堆積する。
- VI層 褐色(10YR4/4)シルト質中粒砂層で層厚5cm以上である。無遺物層である。

調査区西部東壁セクション

- I層 耕作土である。
- II層 小礫を含む黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒～粗砂層で層厚は5～15cmである。
- III層 小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)シルト質中粒砂層でII層・III層土がブロック状に入る。

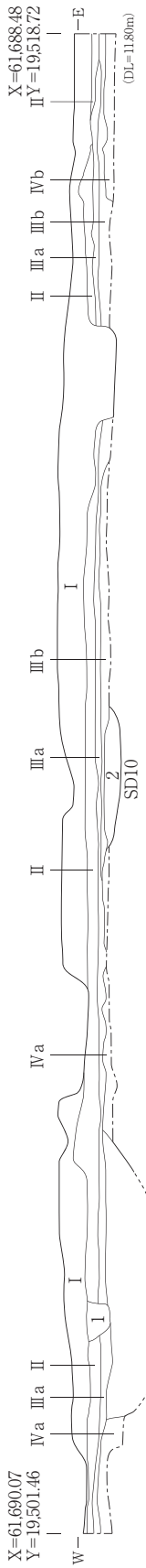
2. 検出遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

SB1(図3-3)

桁行3間(7.8m)梁行2間(4.0m)の南北棟で軸方向はN-22°-Eである。側柱の間隔が著しく開いて

2. 検出遺構と遺物 (1) 掘立柱建物



東部北壁

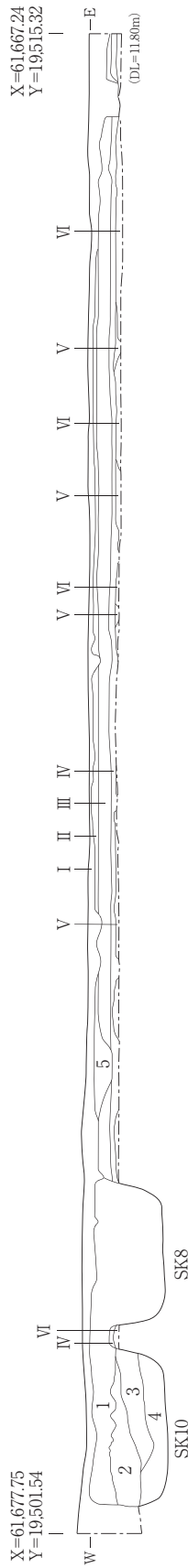
層位

- 第I層 耕作土である。層厚30~40cmを測る。
- 第II層 旧耕作土である。小礫を含む褐灰色(10YR4/1)シルト層で層厚は10~25cmである。
- 第IIIa層 黒褐色(10YR3/1)シルト層で層厚は5~10cm前後である。
- 第IIIb層 黒褐色(10YR3/2)シルト層で層厚は5~15cm前後である。
- 第IVa層 西部には堆積が見られない。近世の遺物を含む層である。

- 第IVb層 地山である。黄褐色(10YR5/6)粘性土層である。
- 第V層 地山である。黄褐色(10YR5/6)粘性土層に風化のない円礫を多く含む。

遺構埋土

- 1. 黄色シルト粘性土のプロックが入る暗褐色(10YR3/3)粘性土
- 2. 灰褐色(10YR4/1)砂礫(SD10)



中央部バンク東西

層位

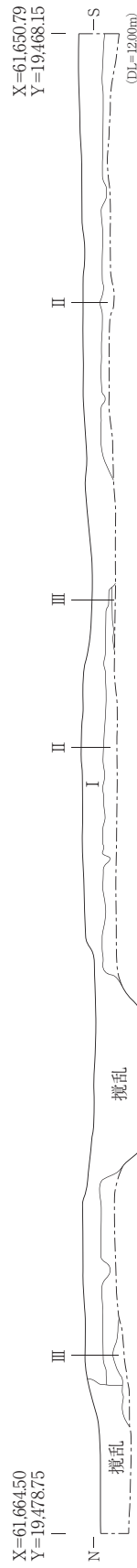
- 第I層 耕作土である。
- 第II層 小礫を含む褐灰色(10YR4/1)シルト質極細粒砂層で、層厚は5~10cm前後である。
- 第III層 小礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂層に地山の明黄褐色(2.5Y6/6)粘性土のプロックを多く含む。西方の一部に認められる。
- 第IV層 小礫を含む明黄褐色(2.5Y6/6)シルト質極細~中粒砂層に地山土をプロック状に含む。層厚は5~10cm前後である。
- 第V層 小礫を含む暗褐色(10YR2/3)シルト質極細~中粒砂層に地山土をプロック状に含む。層厚は5~10cmである。近世の遺物を含む層である。
- 第VI層 黒褐色(10YR3/2)シルト質極細粒砂層である。IV層の下に部分的に堆積する。

- 第VI層 褐色(10YR4/4)シルト質中粒砂層で層厚5cm以上である。無遺物層である。

遺構埋土

- 1. 小礫を含み炭化物混じりの褐灰色(10YR4/1)シルト質中粒~粗粒砂(SK8-10)
- 2. 褐色(10YR4/6)シルト質粗粒砂(SK10)
- 3. 小~大礫を含む暗褐色(10YR3/3)シルト質粗粒~極粗粒砂(SK10)
- 4. 2層をプロック状に含む黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒砂(SK10)
- 5. 小礫を含み、明黄褐色(2.5Y6/6)地山プロックが多く混じる暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質中粒砂

図3-1 調査区セクシヨウ図



西部東壁

層位

- 第I層 耕作土である。
- 第II層 小礫を含む黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒~粗粒層で層厚は5~15cmである。
- 第III層 小礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)シルト質中粒砂層でII層・III層土がプロック状に入る。

いることから本来は桁行4間であった可能性がある。柱穴間は平側、妻側ともに2.0m前後で柱筋通りは良い。掘方は概ね円形を呈し径40～60cm、深さ60cmを測る。隅柱P9では柱根跡を唯一確認できた。10×15cmの楕円形の平面形を呈する。P1・2・4・5の床には根石が置かれている。すべて扁平河原石を用いている。P3・8にも同様な河原石が見られるが浮いている。柱抜き取り後に入れられたものと考えられる。P9の掘方床にも同様な河原石が見られる。

埋土は小礫を含む黒褐色(10YR3/2)シルト質細粒砂である。遺物はP5から肥前産の刷毛目を施した陶器鉢の細片が出土しているのみである。

SB2(図3-4)

桁行4間(8.6m)梁行2間(3.9m)の東西棟で軸方向はN-22°-Eである。柱穴間は平側で1.9m～2.7m、妻側では1.8～2.0m前後で、柱筋通りはあまり良くない。柱穴掘方は概ね円形を呈し径40～60cm、深さ40～60cmを測る。P6とP11で柱痕跡が認められた。径20cm前後である。P1・8・10の床面には扁平な河原石を利用した根石が置かれている。

埋土は小礫を含む黒褐色(10YR3/2)シルト質細粒砂である。遺物はP6から土師質土器小皿(1)、P11から磁器染付小皿(2)、P9から寛永通宝(3)が出土している。2は肥前波佐見産である。

SB3(図3-5)

桁行3間(5.62m)梁行2間(3.90m)の東西棟で軸方向はN-24°-EでSB2と一部重複するが先後関係は不明である。柱穴間は平側で1.5～2.2m、妻側では1.6～2.2m前後である。柱穴掘方は概ね円形を呈し径35～60cm、深さ30～60cmを測る。P6とP7で柱根跡が認められ径15～20cmである。埋土はSB1・2と同じである。遺物はP8から肥前内野山窯産の銅緑釉を施した小皿細片が出土している。

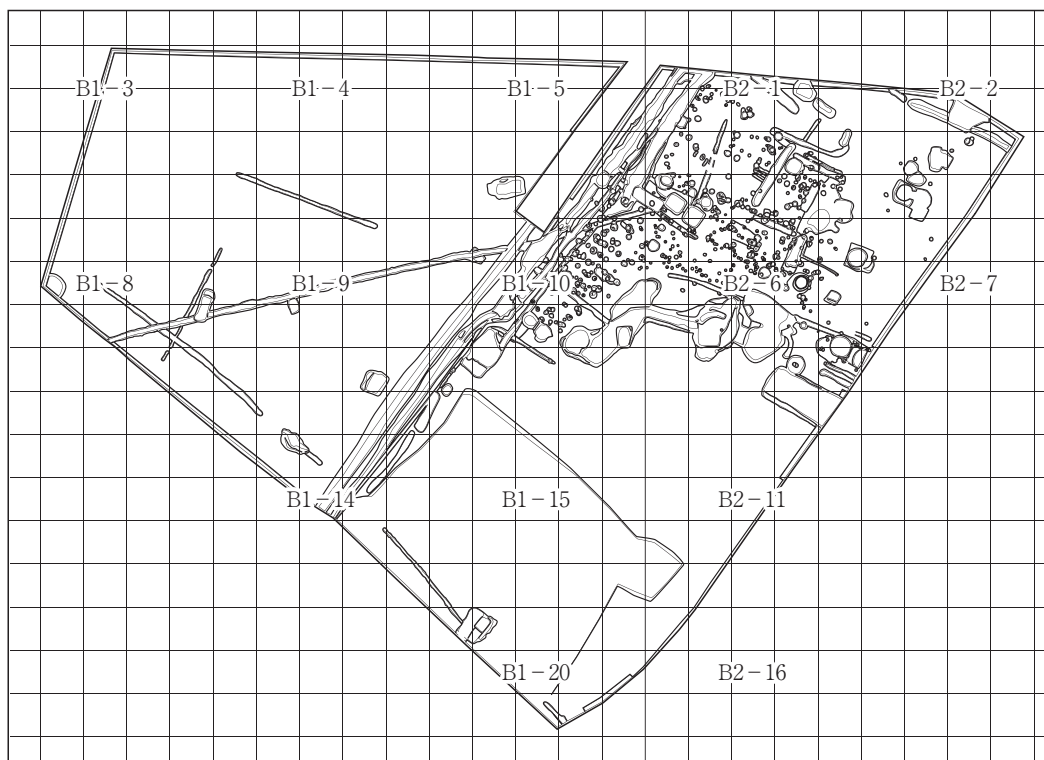


図3-2 調査区グリッド設定図

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

SB4(図3-6)

桁行4間(7.6m)梁行2間(3.0m)の南北棟で総柱建物である。軸方向はN-34°-Eである。SD4と平行しSD8やSD9, SB5と大きく切り合っている。側柱の柱穴間は平側で1.8m前後, 妻側では1.1~1.9m前後である。柱穴掘方は概ね円形で径40~50cm, 深さ50~60cmである。P5・9・15で柱根跡が見られ径15~20cmである。P4の床には扁平河原石を利用した根石が見られる。同様な河原石がP2の埋土, P6では検出面で見られた。埋土は小礫を含む黒褐色(10YR3/2)シルト質細粒砂である。遺物はP4から土師質土器細片, P6から須恵器細片が出土しているが図示できるものはない。

SB5(図3-7・8)

桁行4間(7.6m)梁行2間(3.0m)の南北棟で総柱建物である。軸方向はN-34°-Eで側柱の柱筋通りは良い。SB4とほとんど同じ規模を有している。SD8と切り合っているがSD4・9とは平行している。側柱の柱穴間は平側で

1.8m前後, 妻側では1.1~1.9m前後である。柱穴掘方は概ね円形で径40~50cm, 深さ50~60cmである。P6・12で柱根跡が見られ径15~20cmである。P3・7・14の床には河原石を利用した根石が見られる。P11の礫は栗石と考えられる。埋土はSB4と同じである。遺物はP3から肥前産陶器中碗(5), P11から備前播鉢底部(4)が, P2から土師質土器細片が出土している。SB4・5は先後関係を明らかにすることはできないが規模・構造ともに共通している。

(2) 土坑

SK2(図3-9)

遺構が集中する中央部(B1-10-17)に位置する。平面形は長方形を呈し長軸5.0m, 短軸2.8m, 深さ30cm前後である。埋土は1層が暗褐色シルト, 2層が黒色シルトのブロックが混入する褐灰色シルトである。南側にはテラス状の段が見られ, 南西隅からは小溝が4.0m程延びている。北部はSD8と切り合っているが先後関係は不明である。遺物は叩目のある弥生後期土器細片十数点, 近世陶磁器

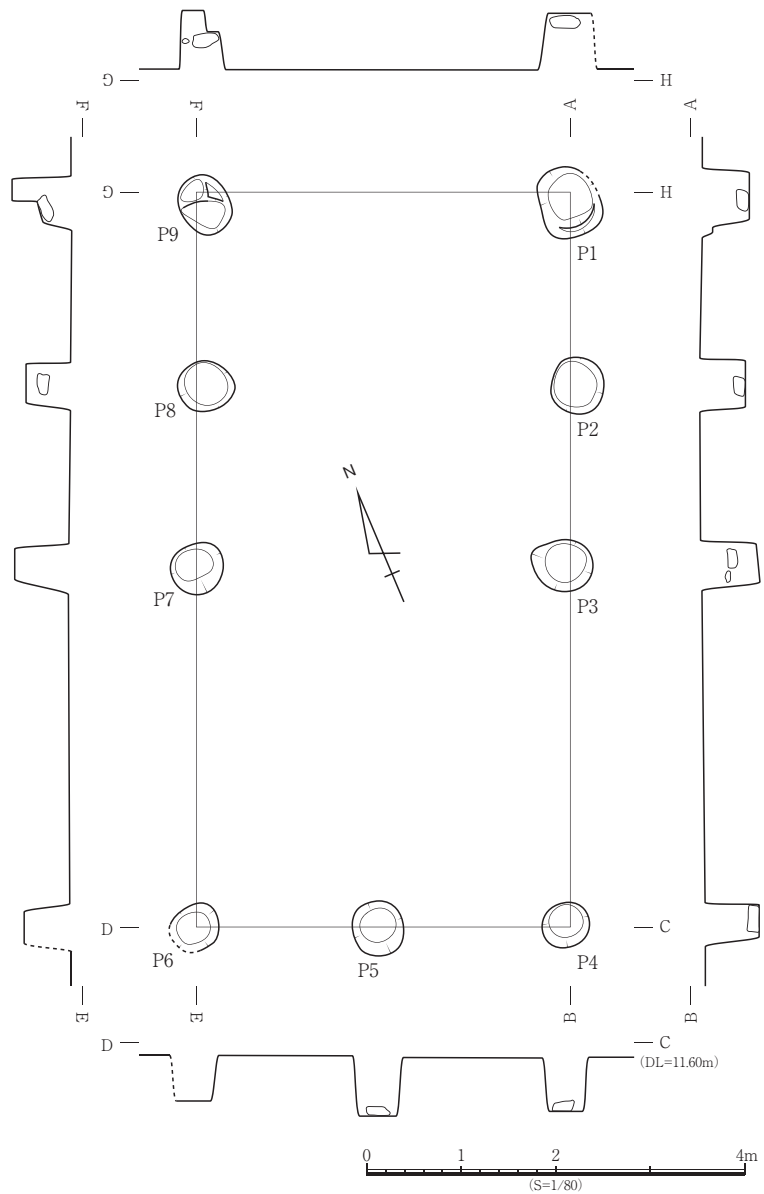


図3-3 SB1

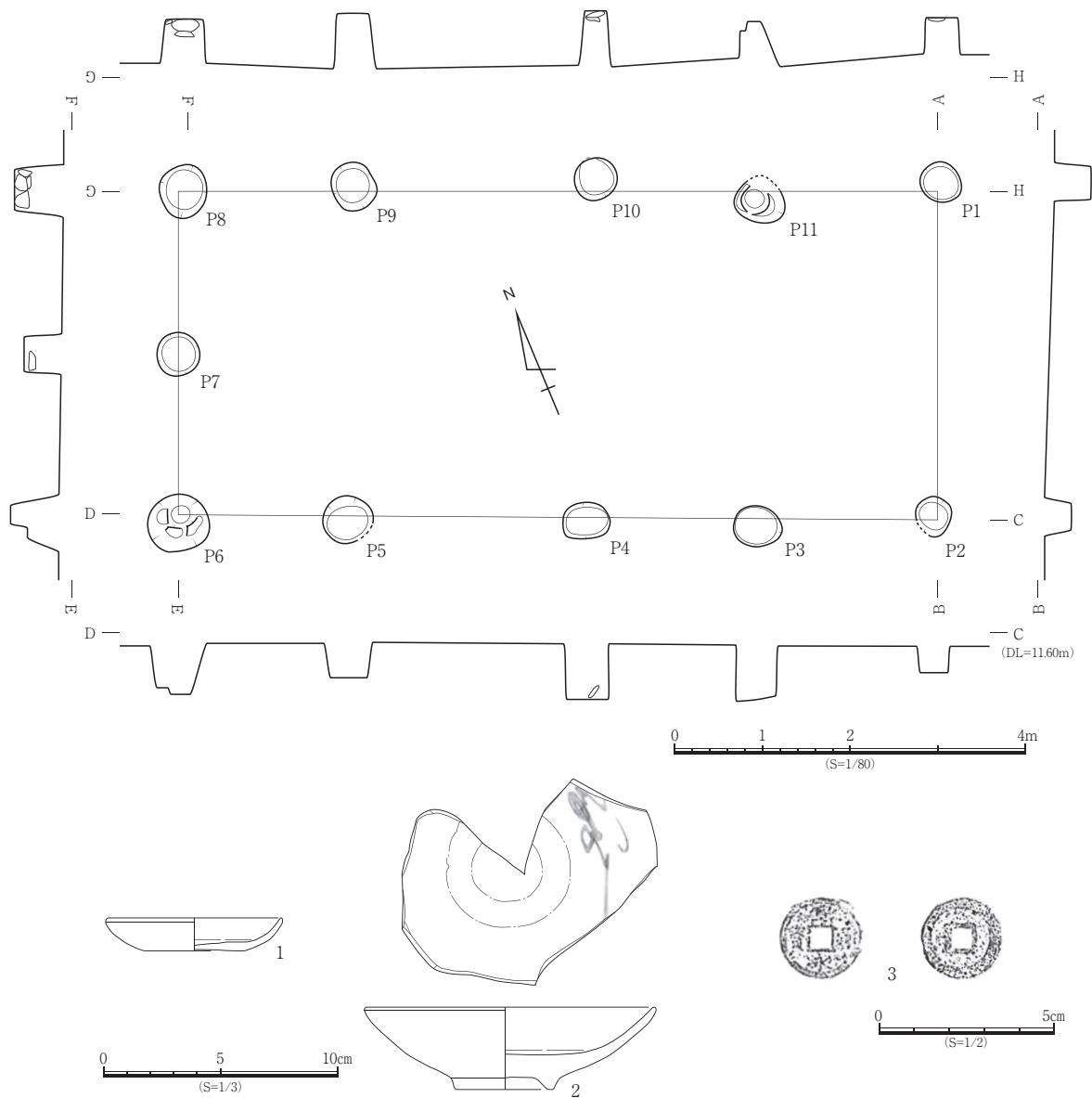


図3-4 SB2及び出土遺物実測図

片8点が出土しているが、図示できたのは鉄釉の施された陶器壺(6)のみである。SK2は屋敷境の溝と考えられるSD4に平行していることから近世屋敷を構成する土坑として捉えることができよう。

SK3(図3-10)

調査区の中央部(B1-10-19)に位置する。長軸3.00m、短軸2.15m前後の楕円形状の平面形を有するものと考えられるが東側を現代攪乱によって大きく抉られている。深さは30~55cmである。埋土は1層が茶褐色シルトのブロックを含む黒色シルト、2層が暗灰色シルトに地山の黄褐色粘性の小ブロックを含む層序である。遺物は1層からは肥前内野山窯の小皿(7)を含む陶磁器細片、瓦質土器細片、土師質土器細片が、2層からは肥前内野山窯の皿、須恵器細片、弥生後期土器細片が出土している。

SK4(図3-10)

遺構群の西より中央部(B1-10-5)に位置する。多くの遺構が重複しており正確な形状をつかむことができないが、長方形を呈し長軸3.2m以上、短軸1.3m、深さ30cmである。SD3を切っていること

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

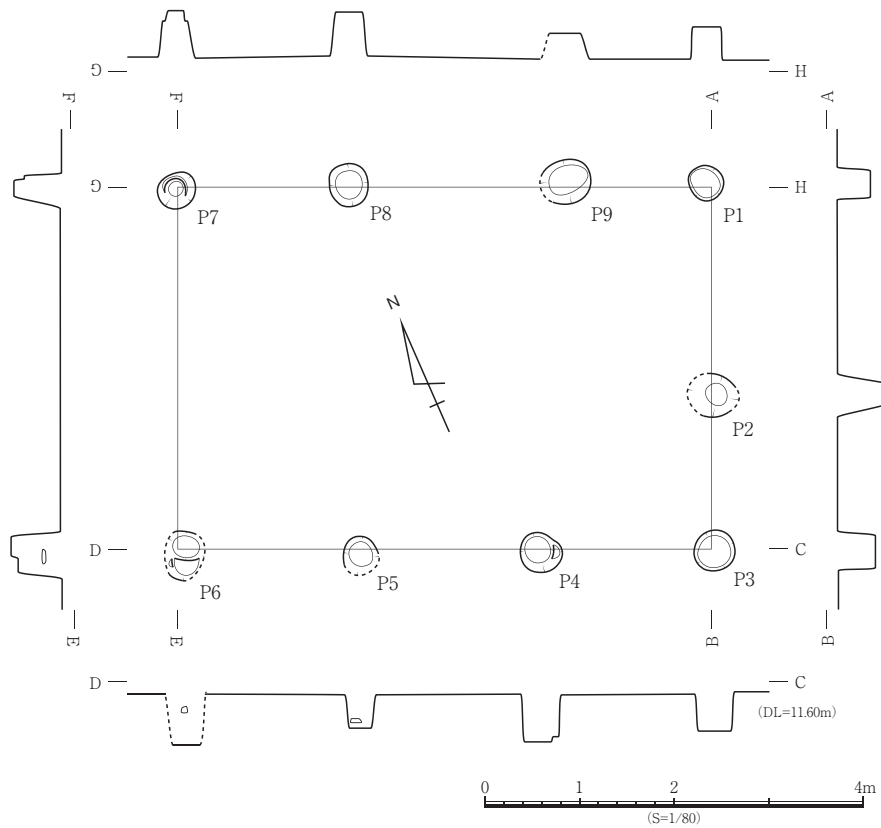


図3-5 SB3

は間違いはないが、SK10やSD5・12との先後関係を明らかにすることはできない。共存している可能性もある。埋土は濃茶色粘性土に拳大の砂岩礫や風化礫を含んでいる。遺物は近世陶磁器片と瓦片が出土しているが、図示できたのは肥前内野山窯の陶器小皿(8)のみである。

SK5(図3-11)

調査区中央部(B1-14-5)に位置する。長方形を呈し長軸4.0m、短軸0.9m、深さ10cmである。埋土は小礫を含む黒褐色シルト質砂である。遺物は肥前産陶器碗(9)の他に近世磁器細片が1点出土している。

SK6(図3-11)

中央部(B2-6-2)に位置する。楕円形を呈し長軸1.78m、短軸1.20m、深さ30cmである。埋土は小礫を含む暗灰色粘性土である。出土遺物は図示した2点(10・11)である。10は肥前系の陶器皿で見込の釉剥部分に砂が輪状に付着している。11は肥前産の磁器染付蓋で外面にはコンニャク印判による桐文が施される。

SK7(図3-11)

調査区北端(B2-1-1)に位置しSD4に切られ、SD5を切っている。不整形のプランを有し大部分が調査区外に出ていることから規模などを明らかにすることはできない。埋土は拳大の礫を多く含む黒褐色シルトである。埋土中から肥前産陶器鉢(12・13)が出土している。外面に白化粧土と刷毛目が見られる。接合関係にはないが同一個体と考えられる。

SK8(図3-11)

中央部(B2-6-2)に位置する。方形を呈し長軸1.9m、短軸1.8m、深さ50cmである。埋土は小礫を

含む黒褐色シルト質細粒砂である。同じ形態・規模を有すSK10と隣接している。セットとして機能していたことが考えられる。埋土中から弥生後期土器、須恵器、近世陶磁器、瓦の細片が出土している。近代遺構である。

SK10(図3-12)

中央部(B2-6-1)に位置する。方形を呈し、長軸 1.85m、短軸 1.65m、深さ 40～55cmである。埋土は黄褐色シルト質中粒砂がブロック状に入る黒褐色シルト質中粒砂である。埋土中から近世磁器細片が数点出土している。

SK11(図3-12)

中央部(B1-10-21)に位置する。隅丸方形を呈し長軸 1.14m、短軸 0.90m、深さ 20 cmを測る。埋土は小礫を含む黒褐色シルトである。

SK13(図3-12)

中央部(B1-10-18)に位置する。不整形を呈し長軸 1.7m、短軸 1.7m、深さ 37 cmである。埋土は小礫を含む暗褐色シルト質砂である。埋土中から備前播鉢(14)が出土しているが、近代遺構である。

SK14(図3-12)

SB5と切り合っているが先後関係は不明である。溝状を呈し長軸 2.1m、短軸 0.9m、深さ 27 cmである。埋土は1層が褐色シルト、2層が暗褐色シルトである。遺物は見られない。

SK15(図3-12)

中央部(B2-6-8)に位置する。隅丸方形を呈し長軸 0.8m、短軸 0.5m、深さ 50 cmである。埋土は黄褐色シルト質中粒砂である。埋土中から近世磁器細片が出土しているが、図示できるものはない。

SK18(図3-12)

中央部(B2-6-2)に位置する。現代攪乱に大きく切られている。隅丸長方形を呈すると考えられるが、長軸は不明、短軸 0.9m、深さ 10 cmである。埋土は小礫を含む暗灰黄色シルト質中粒～粗粒砂

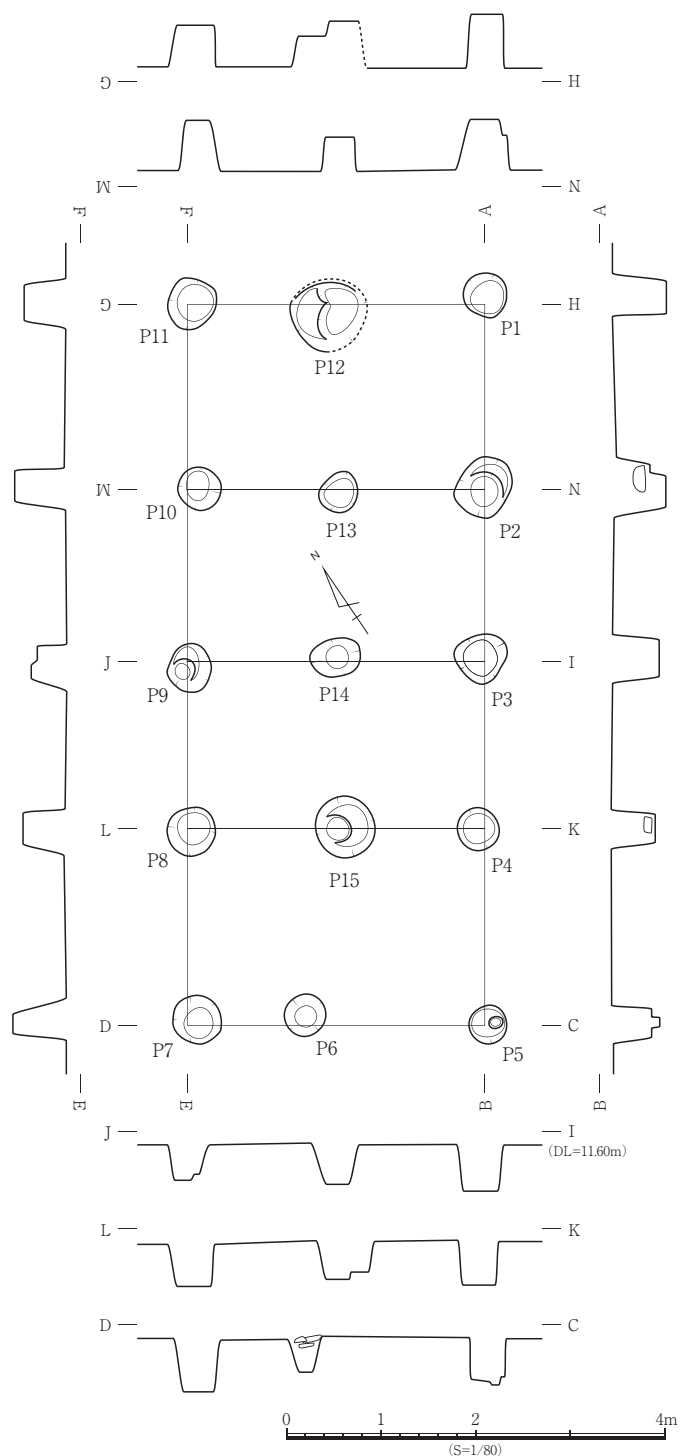


図3-6 SB4

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

である。

SK19(図3-13)

北部(B2-1-19)に位置する。隅丸長方形を呈し長軸2.38m, 短軸0.95m, 深さ48cmである。埋土は小礫を含む黒褐色シルト質細砂である。近世土坑には例の見られない埋土であり, 遺物は見られないが, 時期的にかなり先行するものと考えられる。

SK20(図3-13)

北部(B2-1-25)に位置する。長楕円形を呈し長軸1.68m, 短軸0.70m, 深さ30cmである。埋土は1層が暗褐色シルト質砂, 2層が黄褐シルト質砂, 3層が黒褐色シルト質砂である。土師質土器細片が出土している。

SK23(図3-13)

中央部(B1-10-8)に位置する。SD4に大きく切られており平面形は不明である。埋土は小礫を含む暗灰褐色シルト質砂である。埋土中から肥前産陶器碗(15・16)が出土している。15は灰釉を施し, 16は外面に白化粧土刷毛目, 内面は白化粧土打刷毛目である。

SK25(図3-14)

東部(B2-6-4)に位置する。長方形を呈し長軸3.8m, 短軸1.3m, 深さ22cmである。多くのピットと切り合っている。埋土は砂混じりの褐色シルトである。

SK27(図3-14)

東部(B2-6-14)に位置する。円形を呈し径1.9m, 深さ40cmである。埋土は砂混じりの褐色シルトで他遺構埋土と

異なり腐食土の混入がない。床面には幅5cm前後, 深さ5cm前後の溝が径1.1mで円形に巡っている。桶を置いた痕跡であり便所であったことが考えられる。廃棄に際して清潔な土を用いて丁寧に埋め戻した清めの行為が行われた可能性が高い。

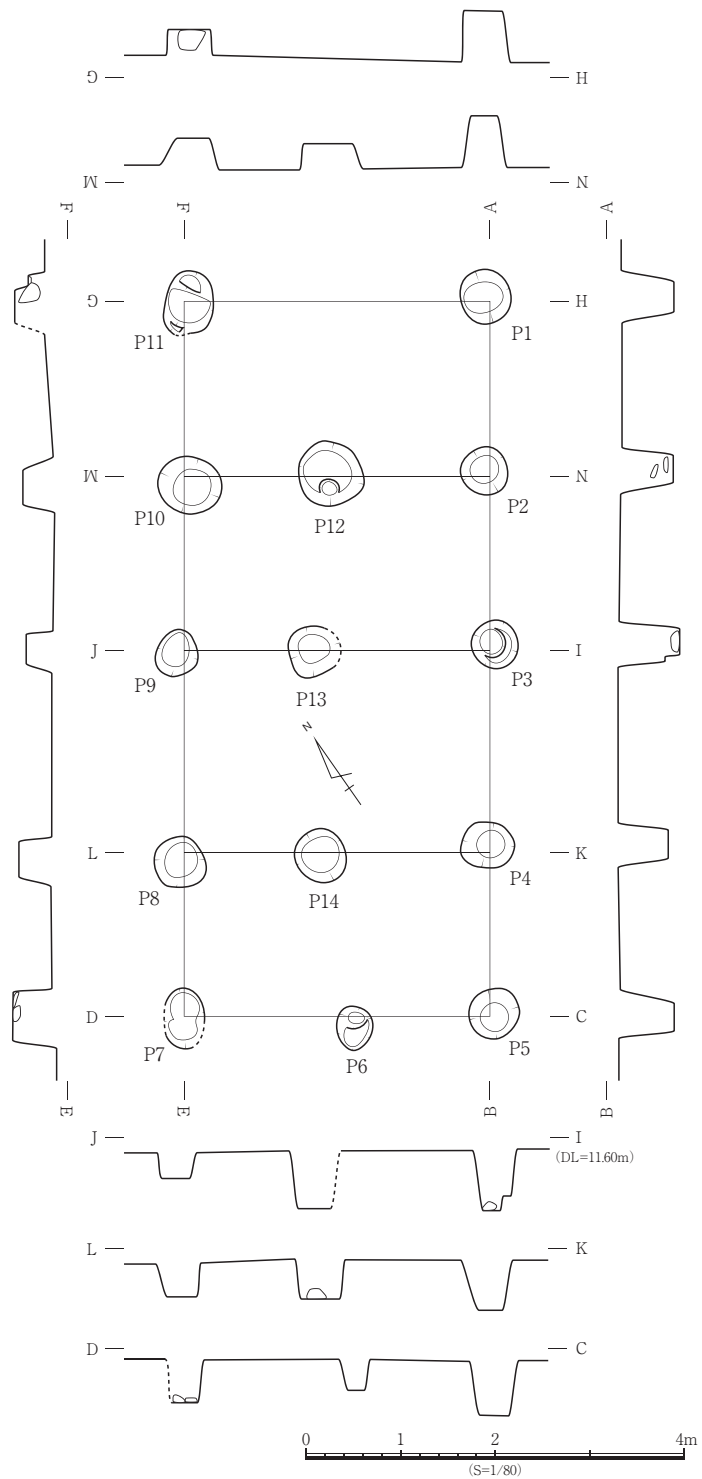


図3-7 SB5

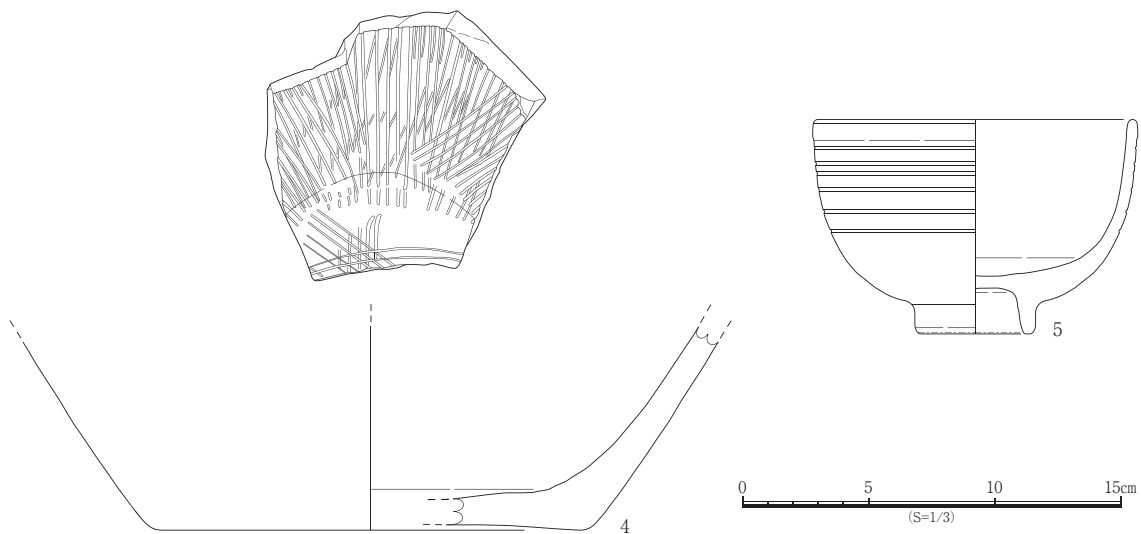


図3-8 SB5出土遺物実測図

SK28(図3-14)

東部(B2-6-10)に位置する。円形を呈し径1.8m, 深さ72cmであるが, 上部を方形に大きく攪乱されている。埋土は砂混じりの黄褐色と褐色のシルトである。

SK29(図3-14)

東部(B2-6-15)に位置する。西側を大きく現代攪乱に切られているが, 長軸1.20m, 短軸1.16mの方形プランを有する。深さは30cmで南側は二段に掘られている。埋土は小礫を含む黄褐色シルトの地山土混じりの灰黄褐色シルト質細粒~中粒砂である。遺物はみられない。

SK30(図3-15)

東部(B2-6-20)に位置しSD16・19に切られている。円形を呈し径2.0m, 深さは50cmである。埋土は1層が灰黄褐色シルト質細粒砂, 2層が1層に地山の黄褐色シルト質細粒砂がブロック状に混入する。遺物は見られない。隣接するSK32と対をなしており, 便所あるいは肥溜の遺構と考えられる。

SK31(図3-15)

東部(B2-7-1)に位置し南隅を現代攪乱に切られている。隅丸長形状を呈し長軸3.7m, 短軸2.0m, 深さ18cmである。埋土は小礫を含み地山の黄褐色シルトをブロック状に含む。床面は西半分が壁に沿って5cm程掘られ溝状に巡り, 中央部が鍵穴状の高まりとなっている。遺物は見られない。

(3) 溝

SD1

調査区西半分の中央部(B1-9-2)に位置し東西方向に走る。延長14.0m, 幅0.3~0.4m, 深さ20cm前後である。埋土は小礫を含む黒褐色シルト質細粒砂である。遺物は糸切り底の土師質土器や近世陶器細片が少量出土している。

SD2(図3-16)

調査区南部(B1-8-19)を北西方向から南東方向に走る。途中検出できないところや攪乱に切られているところもあるが延長60.0m以上で調査区を貫いていたものと考えられる。幅0.3~0.4m, 深さ20cm前後である。埋土は小礫を含む黒褐色シルト質細粒砂である。遺物は糸切り底の土師質土器や近世陶器細片が少量出土している。

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

SD3(図3-16)

調査区を東西方向に55.0m走り北に屈曲して7.5m延びる。確認総延長62.5mである。西端では幅55cm, 深さ30cm, 北端では幅30cm, 深さ7cmである。西に行くほど幅・深さが大きくなっている。埋土は黒あるいは黒褐色シルトを基調とする。東北部では近世遺構に随所で切られている。遺物は全く認められない。中世以前の溝である。

SD4(図3-16~22)

調査区の中央部(B1-10-4)を地割りの方向に沿って東北から南西に向かって延びる溝である。遺構集中付近で幅1.0~1.5m深さ30~40cm前後を測り, 南に下がるほど幅, 深さともに減少する。確認延長は52.0mである。南端から23.0mのところ屈曲しそこからSD5が枝分かれしている。屈曲部から北で近世遺構が集中している。SB4・5の棟方向に一致することから屋敷境の溝として機能していたものと考えられる。埋土は1層が黒褐色シルト質中粒砂, 2層が黄褐色シルト質中粒砂混じりの暗褐色シルト質中粒砂, 3層が暗褐色シルト質細粒砂である。各層序ともに多くの遺物が出土している。遺物は人工層位で上層, 中層, 下層で取り上げた。

上層遺物は17~35である。18・21は肥前波佐見産の染付小皿, 19は肥前内野山窯の陶器小皿で内面の釉剥ぎ部分に砂目が付着している。20は唐津系灰釉陶器の小皿で, 内底に胎土目が見られる。25は陶器小碗, 22・26・28・29は陶器中碗で26には外面楼閣山水が描かれている。30・31は陶胎染付の中碗でともに圏線の下に山水が描かれている。23は外面に草花文を描いた磁器染付小碗, 27は肥前産の染付小碗で, 外面に花唐草文と圏線を描き, 畳付には灰白色の粗粒砂が付着してい

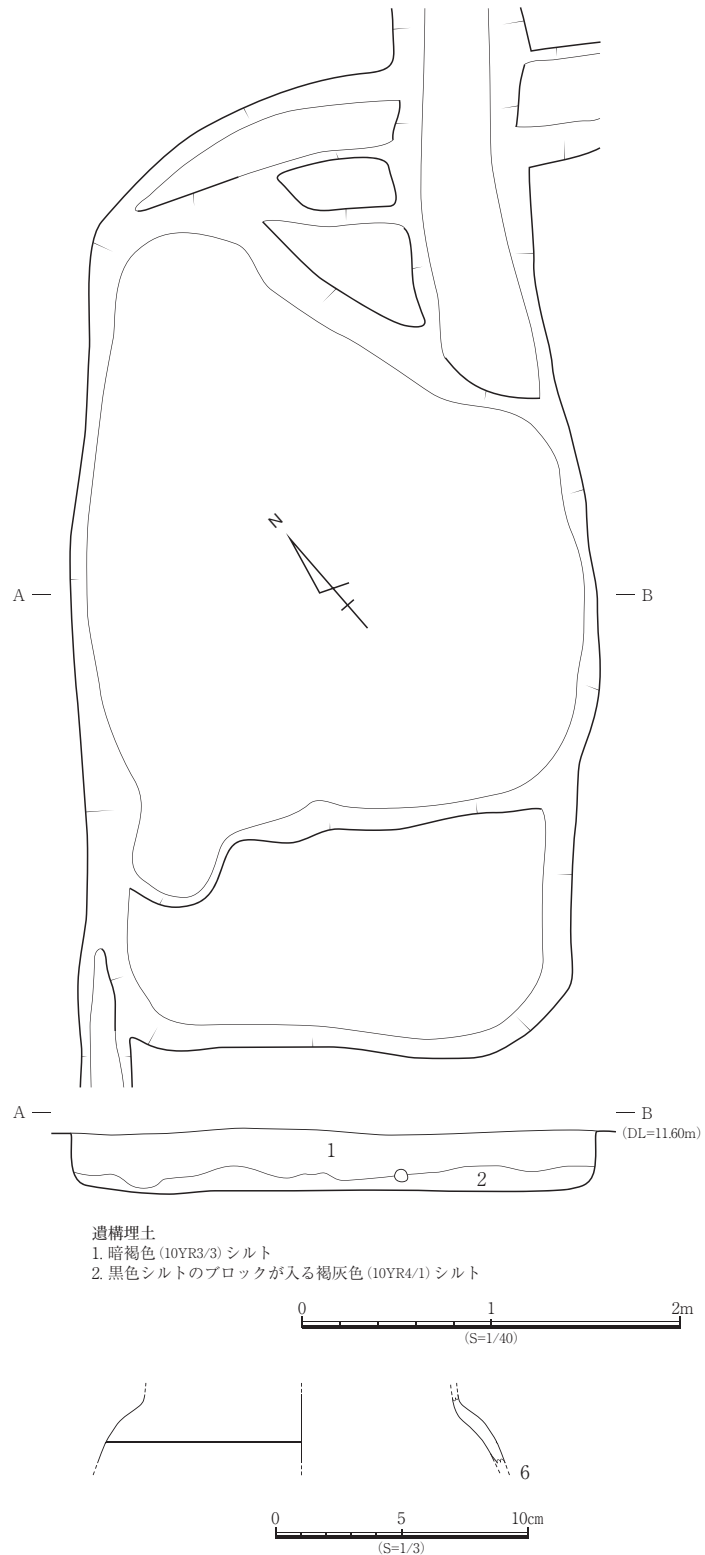


図3-9 SK2及び出土遺物実測図

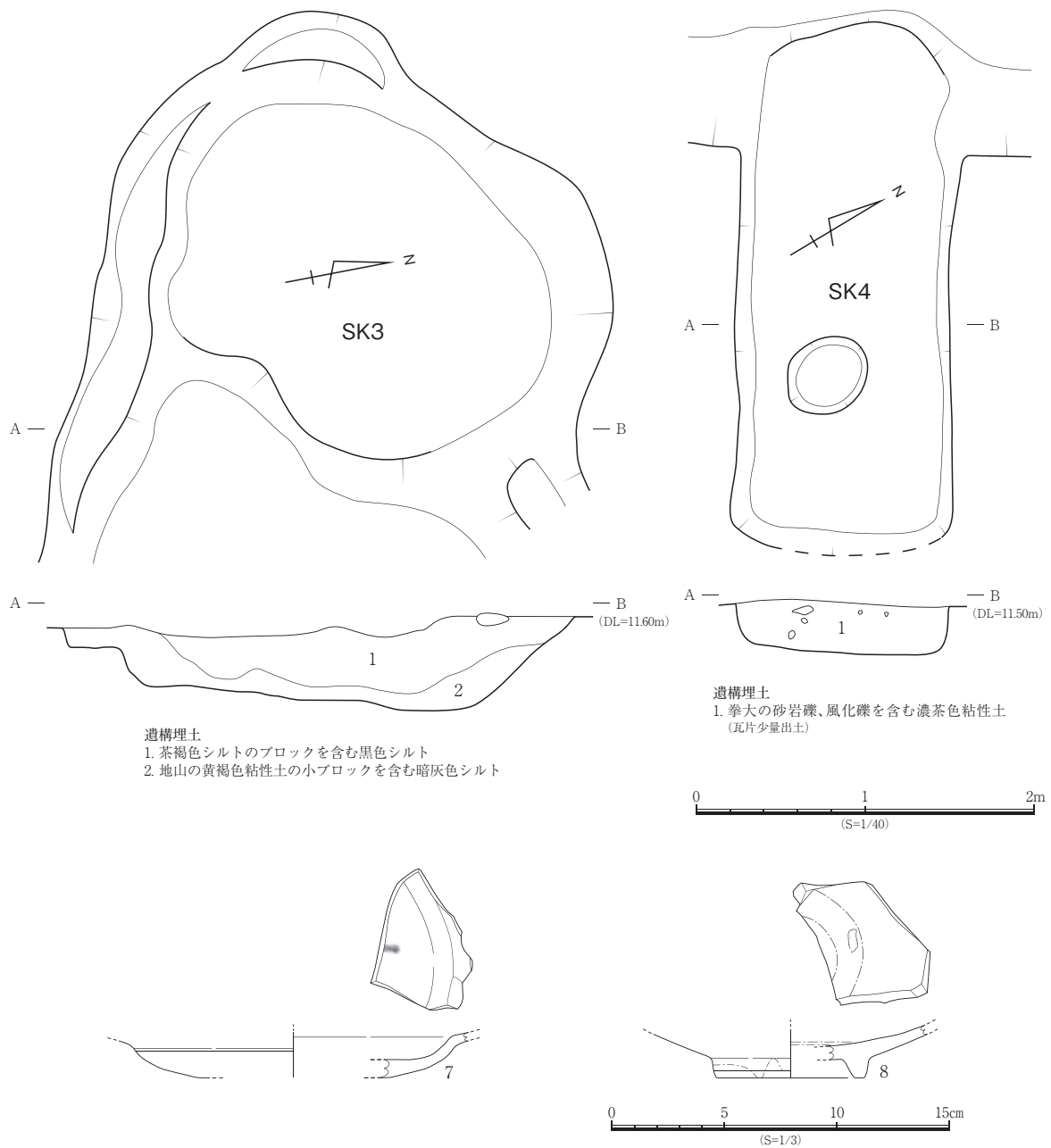


図3-10 SK3・4及び出土遺物実測図

る。32は雲竜文を描いた磁器染付け中碗である。24は色絵付けを施した京信楽系の陶器碗である。17・33・34は肥前産陶器の鉢で、17と34は外面に白化粧土刷毛目仕上げ、33は内面に白化粧土刷毛目である。35は砥石片で石材は泥岩である。

中層の遺物は36～54である。36・37は肥前産の磁器染付け小皿、後者は内面型打による菊弁を有す。39は内面型打による菊弁の紅皿、41は内野山の陶器小皿で見込は蛇ノ目状の釉剥が見られる。38は磁器仏飯具である。40は土師質小皿である。44は京焼風陶器皿で内面に山水文が描かれている。42・43は肥前産陶器中碗、46は京信楽系の陶器小碗である。45・50は肥前産染付け中碗で後者はくらわんか手で見込は蛇ノ目釉剥を施している。48は端反りの陶器皿または鉢である。47は陶器小碗、49は上絵付けを施した陶器小碗である。51は焼締め陶器の火入である。52・53は肥前産染付け瓶で草花

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

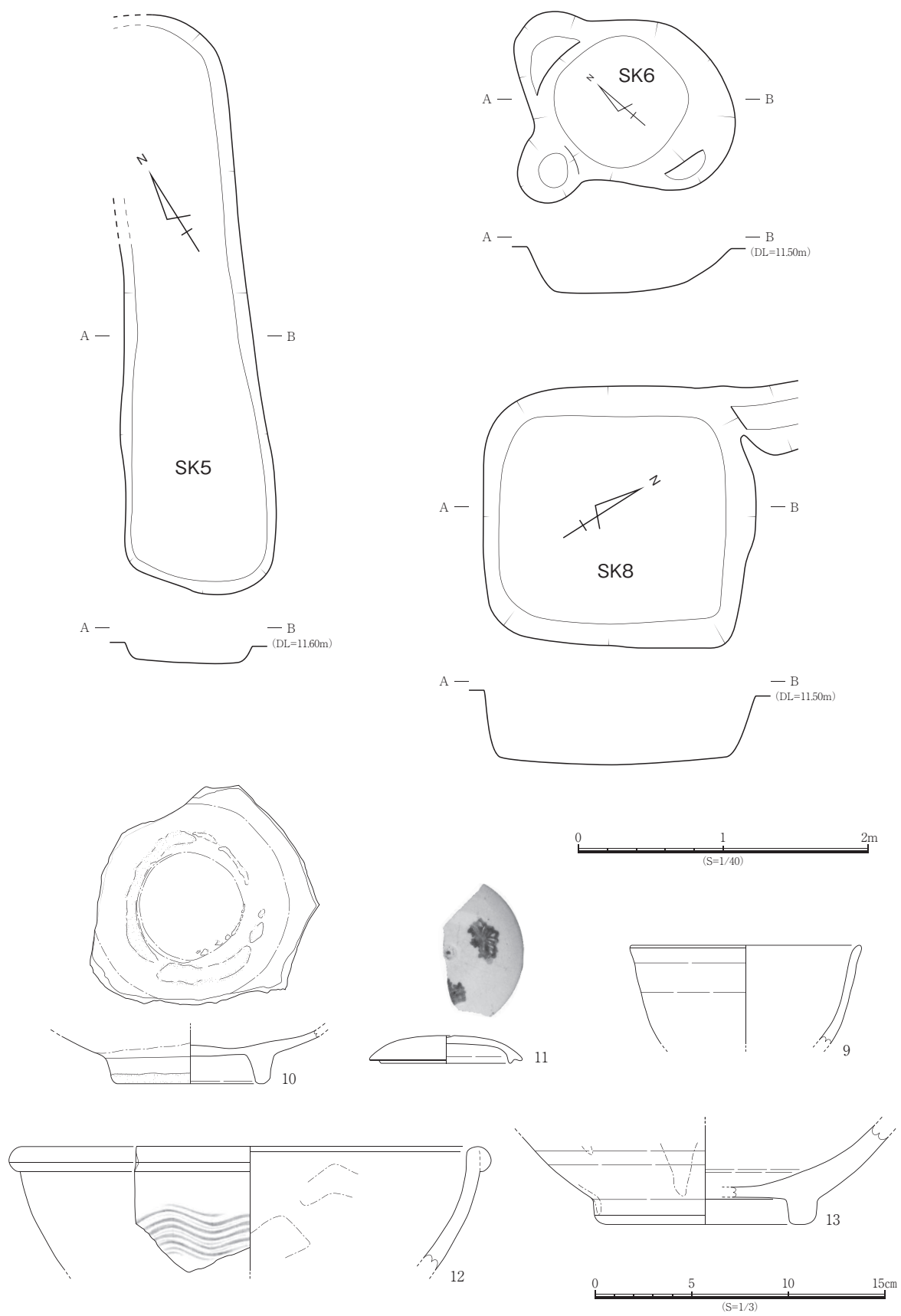


図3-11 SK5・6・8及びSK5~7出土遺物実測図

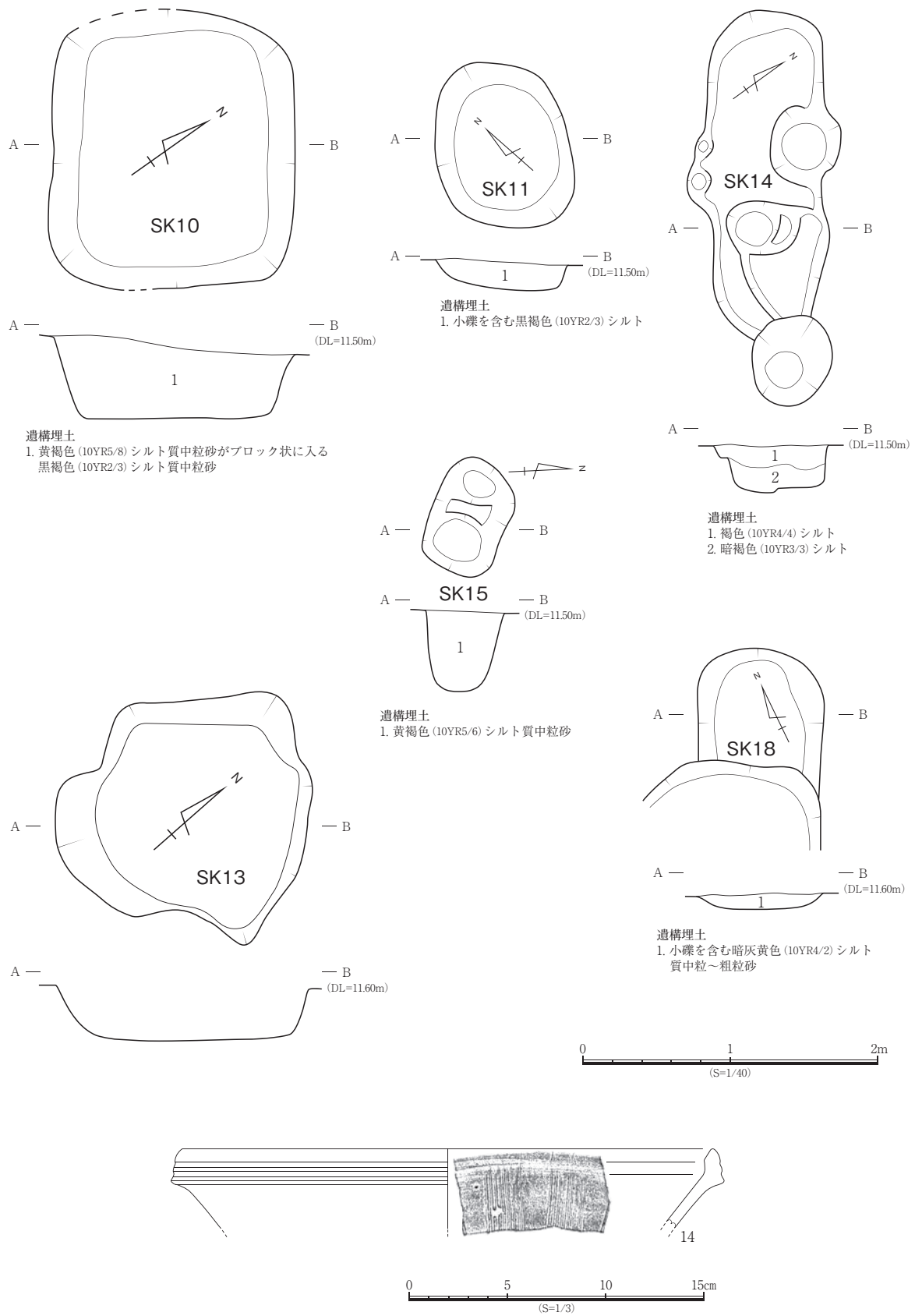


図3-12 SK10・11・13～15・18及びSK13出土遺物実測図

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

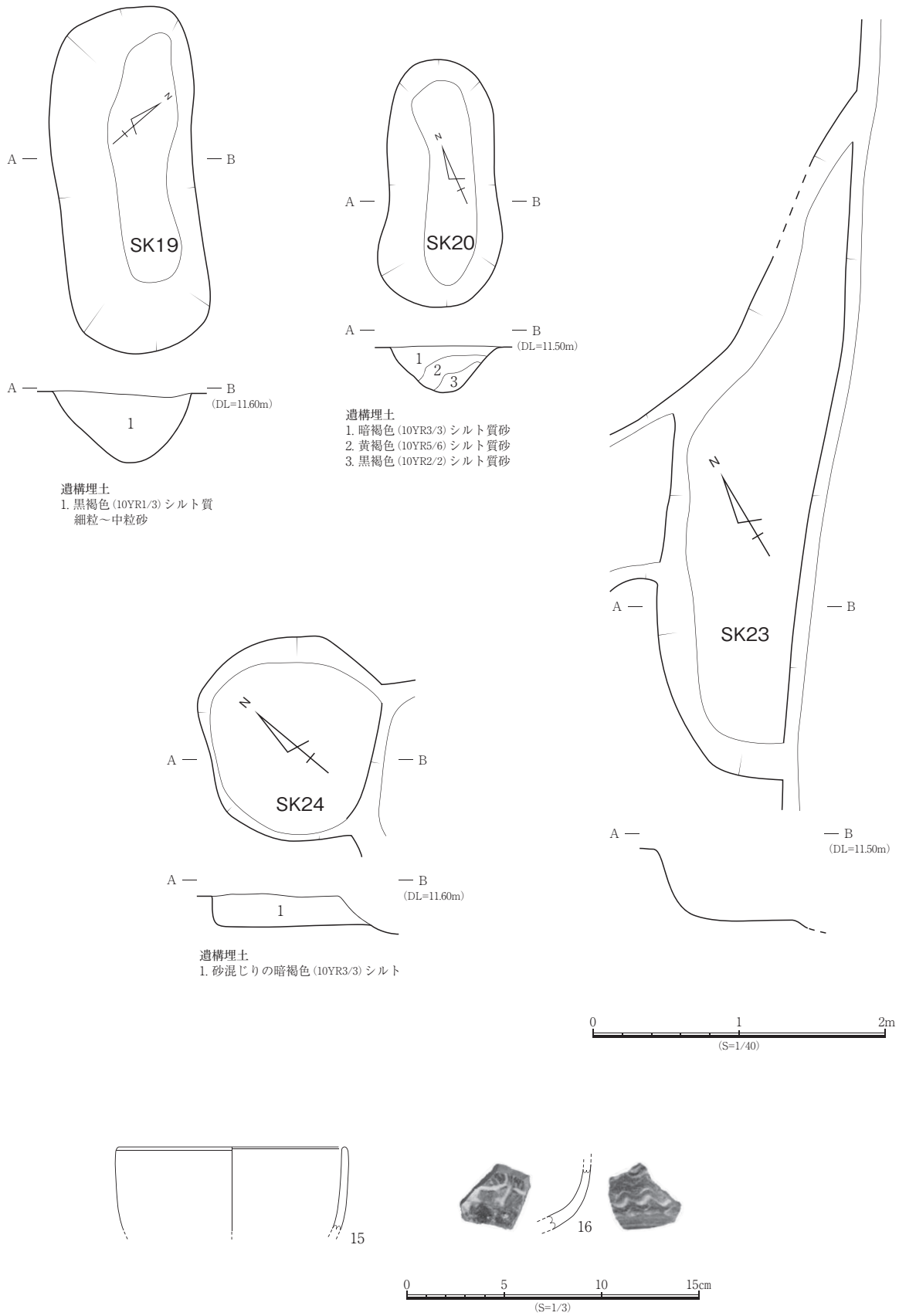


図3-13 SK19・20・23・24及びSK23出土遺物実測図

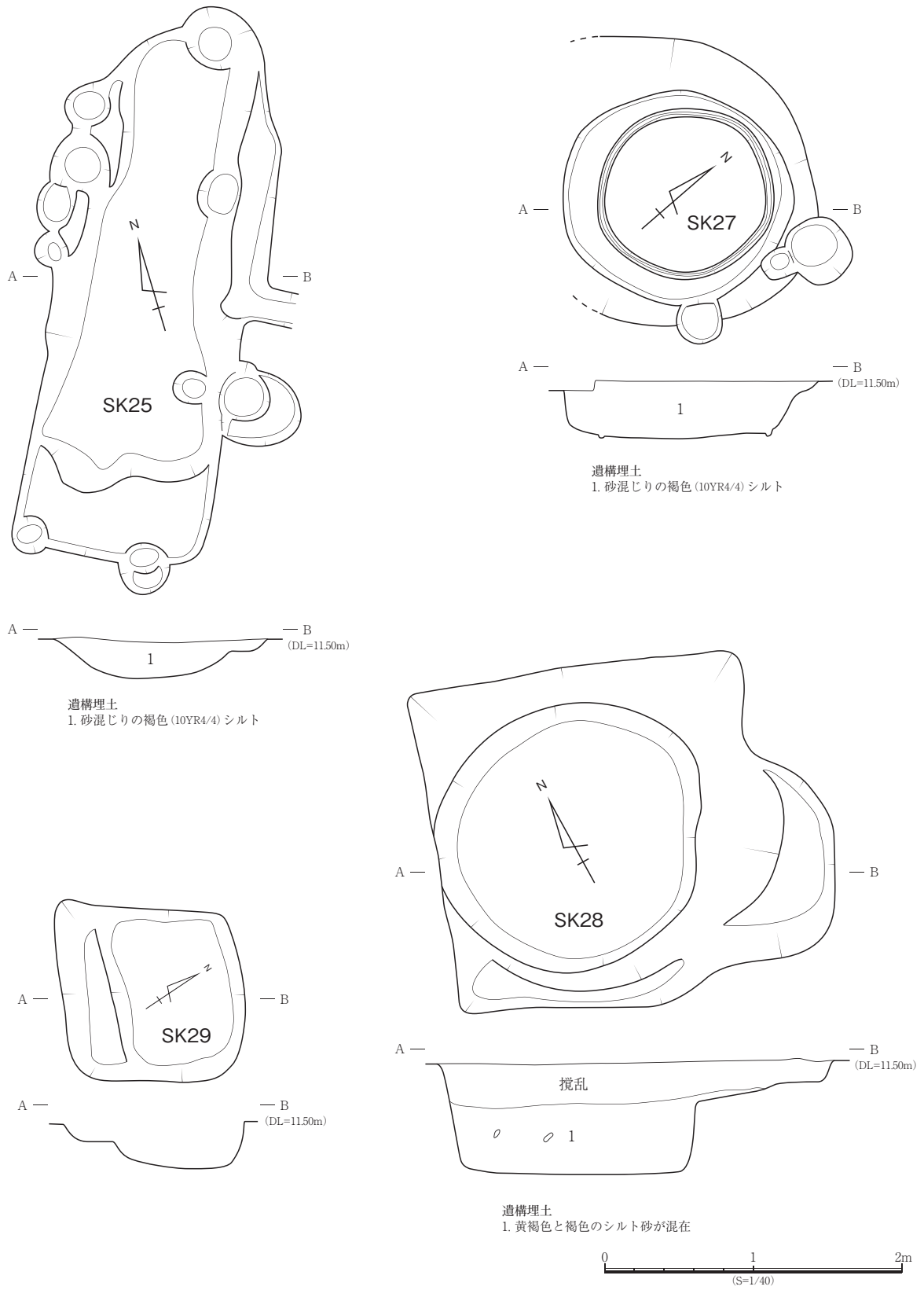


図3-14 SK25・27~29

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

文を描いている。54は備前播鉢である。この他中層からは93の古銭が出土している。「寛永通宝」で直径2.5cmを測る。裏面に「文」が鑄込まれている文銭で、1668年(寛文8年)～1683年(天和3年)に江戸亀戸村で鑄造されたものである。

下層の遺物は55～79・87である。55は碗の蓋である。外面に雲、つまみ内には卍を、内面にはコンニャク印判による五弁花を描く。

56は肥前内野山窯産の陶器小皿、72も肥前産の陶器小皿である。57は変形の陶器小皿である。58・61は肥前産染付け小碗で前者は山水を、後者は雨降り文を描いている。59・63・64は肥前産染付中碗、65は陶胎染付中碗で、いずれも外面には草花文が描かれる。60は陶器中碗、62・71は甕形の陶器中碗である。66は陶胎染

付の火入、67は陶胎染付の中碗である。68～70は京信楽系の上絵付け陶器小碗である。73・79・87は白化粧土刷毛、鉄錆が施された肥前産陶器鉢である。74～76は備前産播鉢である。77は丹波産の焼締め陶器甕である。78は砥石で裏面には5mm幅のノミ跡が顕著に見られる。粘板岩製である。

80～86・88～92は層位的に取り上げるることのできなかった遺物である。80は肥前産染付け小皿、81は土師質土器小皿、84は瀬戸天目、82・83は肥前産陶器中碗、85は肥前産磁器染付小碗、86は肥前産陶器中碗である。88は備前産播鉢である。89～91は砥石で石材は91が頁岩、89・90は砂岩である。92は砂岩の河原石で部分的に激しく煤けている。

SD4からはI A区全体の6割の遺物が出土している。屋敷関連遺構が廃棄された時に捨てられた

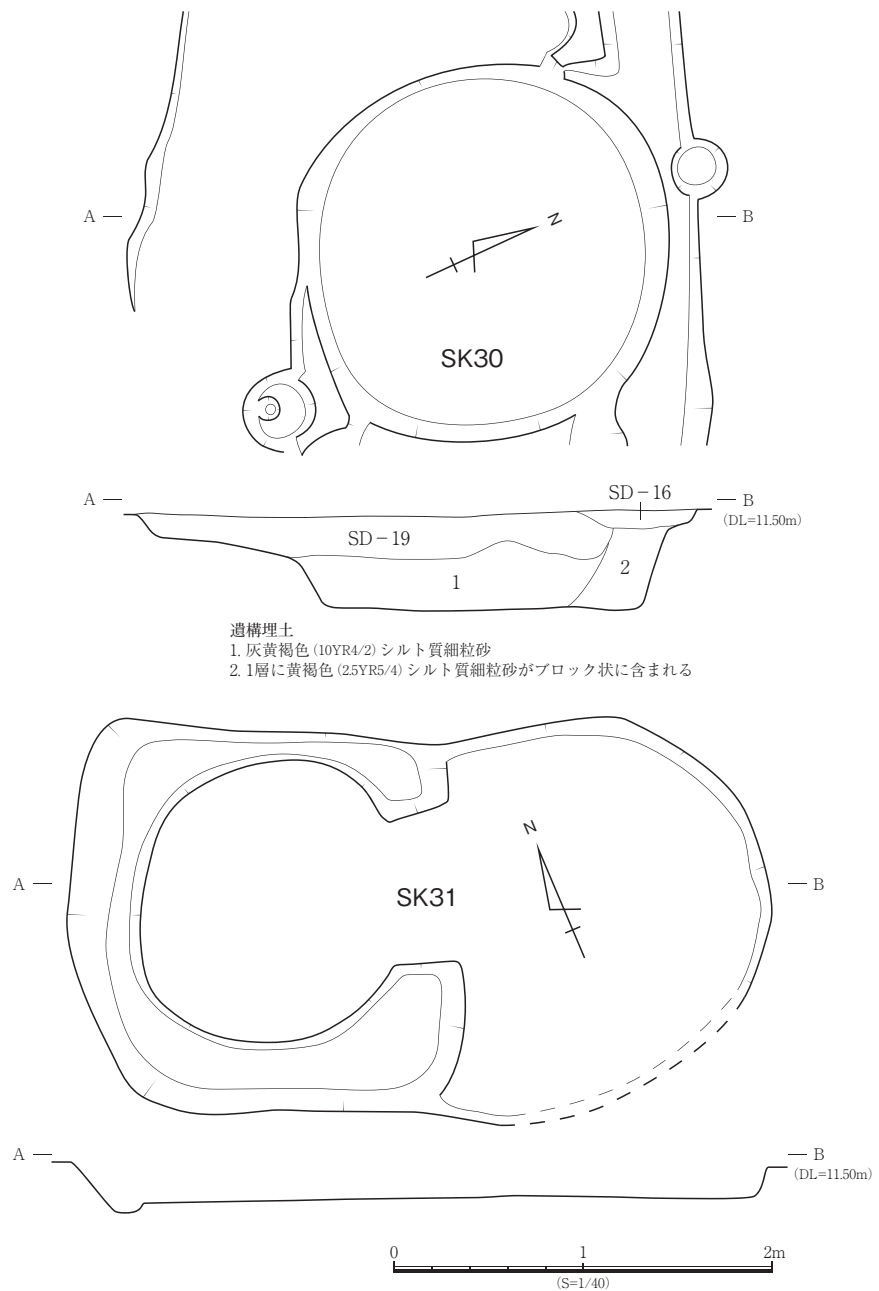


図3-15 SK30・31

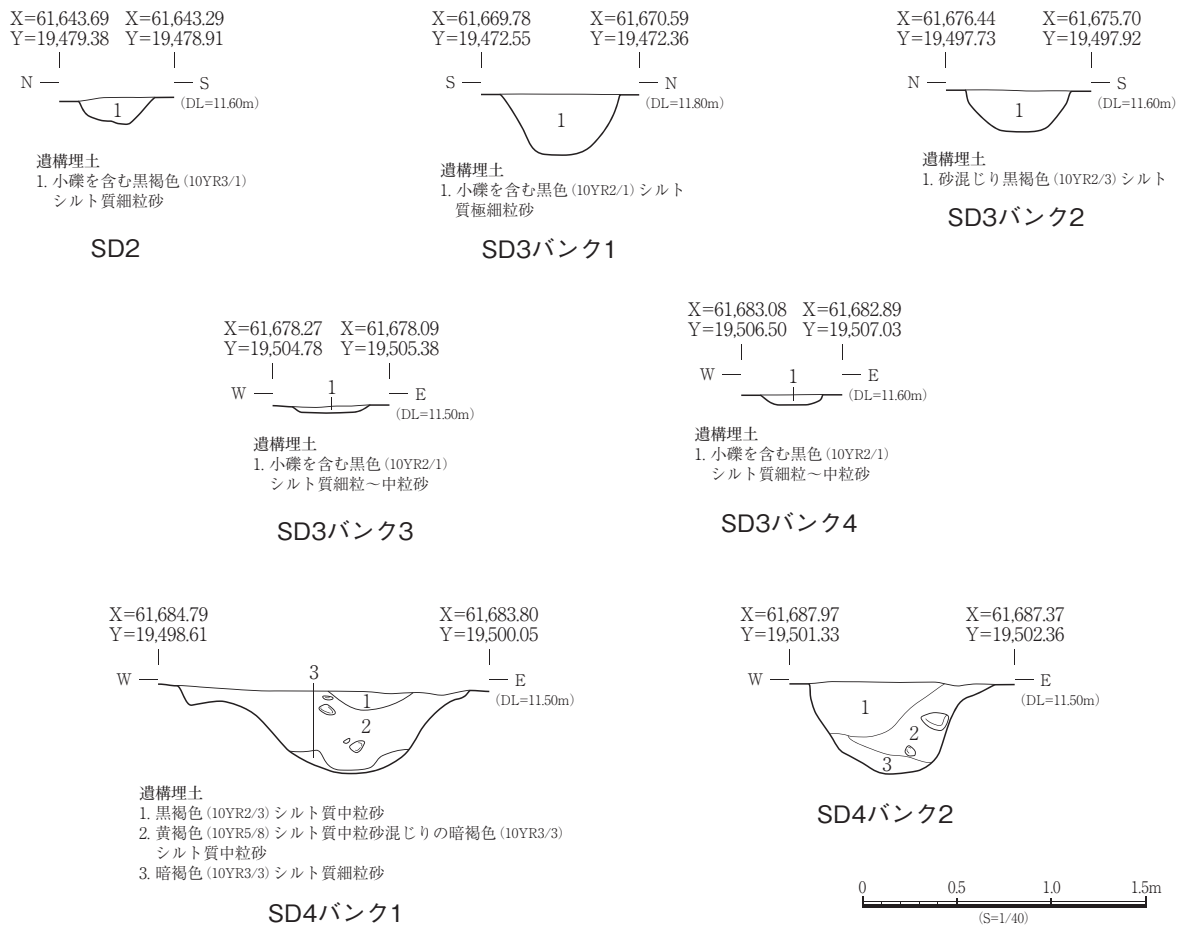


図3-16 SD2～4

ものと考えられる。上・中・下層で時期差は認められない。遺物は皿・碗類が多く京信楽系の上絵付けを除けば総じて日常雑器で占められている。時期的には17世紀後半から18世紀前半でまとまっている。

SD5(図3-23)

調査区北部(B2-1-21)に位置する。SD4と平行して走る溝で確認延長16.0mである。幅は1.4～2.0mで深さ30cm前後を測る。南部でSB4やSB5と切り合っている。南端からSD8が平行して延びているが、SD5から派生したものか先後関係があるのかは不明である。埋土は細・中粒砂混じりのシルトである。遺物は近世陶磁器、弥生土器や須恵器が出土している。94は肥前産の陶器中皿、97は同じく陶器中碗である。98は直方体の瓦、95は土師器高杯の柱状部、96は須恵器杯身である。近世遺構の掘削時には弥生時代から古墳時代の遺構や遺物包含層が形成されていたことが考えられることからSD4などに先行して掘削された可能性がある。

SD6(図3-24)

SD4とSD5の間(B1-14-10)に位置しSD4に切られる。確認延長4.5m、幅0.6m、深さ10cm前後である。南端はSD9と接しているが先後関係は不明である。埋土は褐色中粒砂混じりの黒褐色シルト質中粒砂である。遺物は近世陶磁器とともに弥生土器や古墳時代後期の須恵器細片が出土している。99は肥前波佐見産の染付け小皿、100は肥前内野山窯の小皿である。101は肥前産陶器碗で外面に白

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

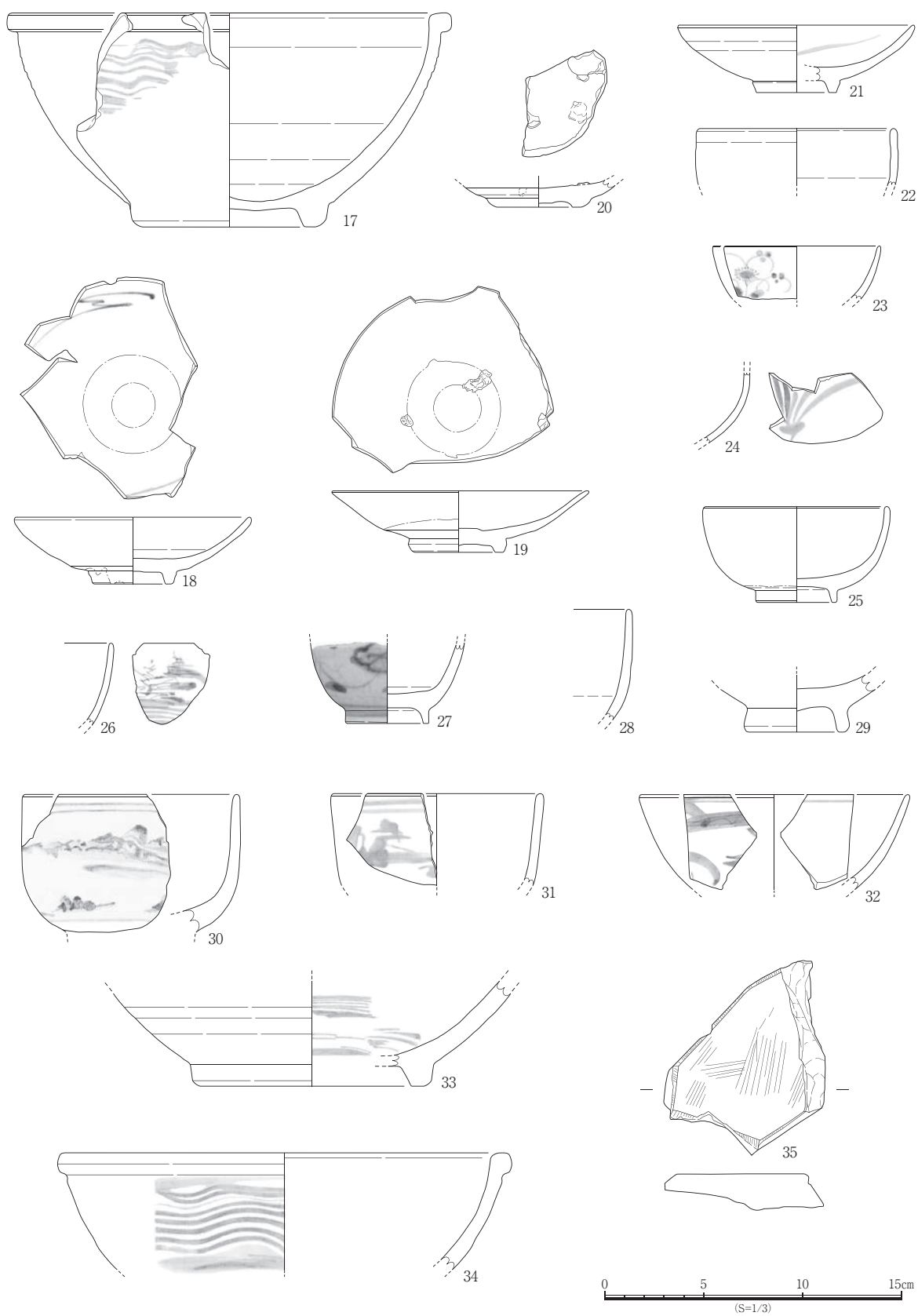


図3-17 SD4出土遺物実測図1

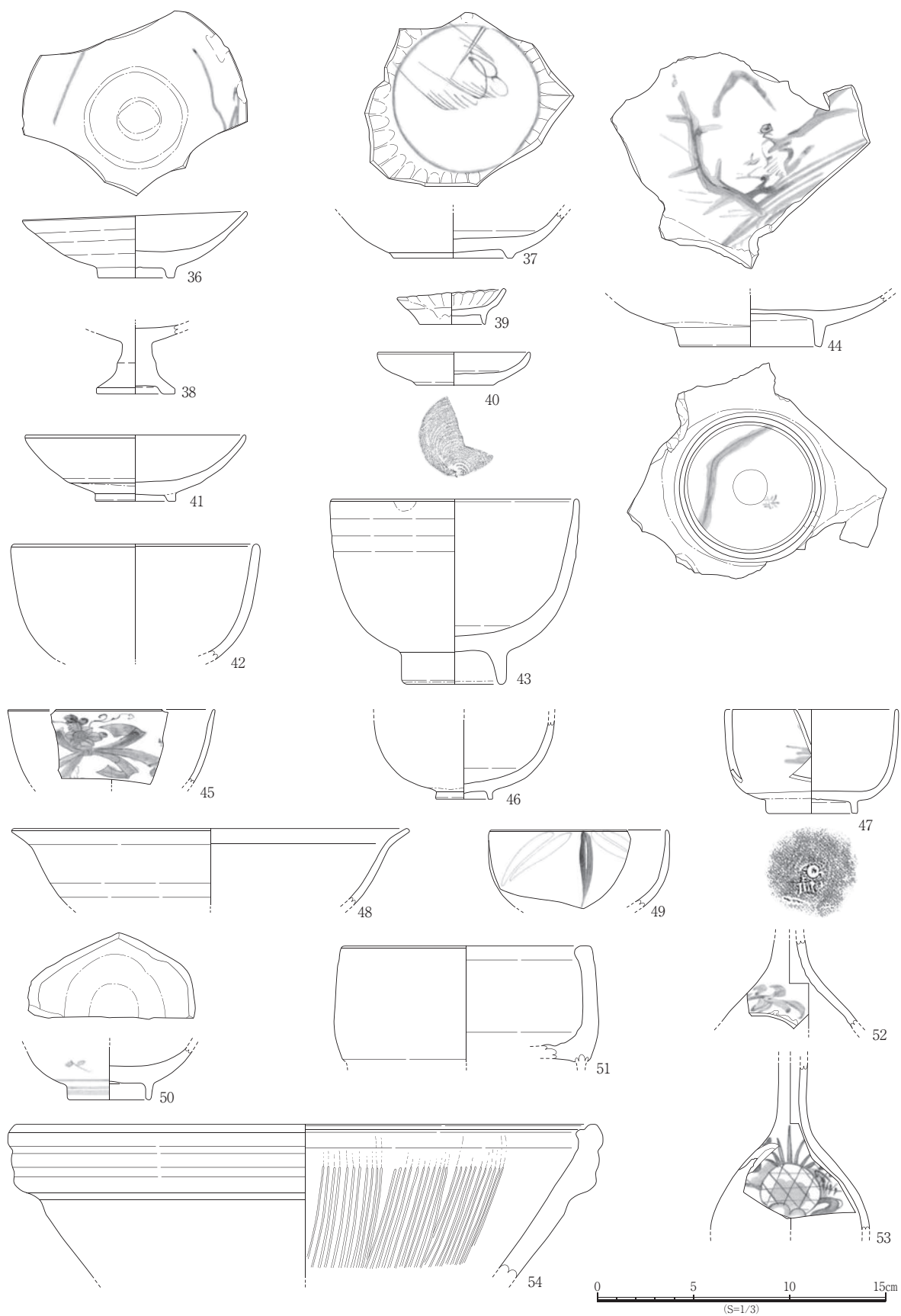


图3-18 SD4出土遺物実測図2

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

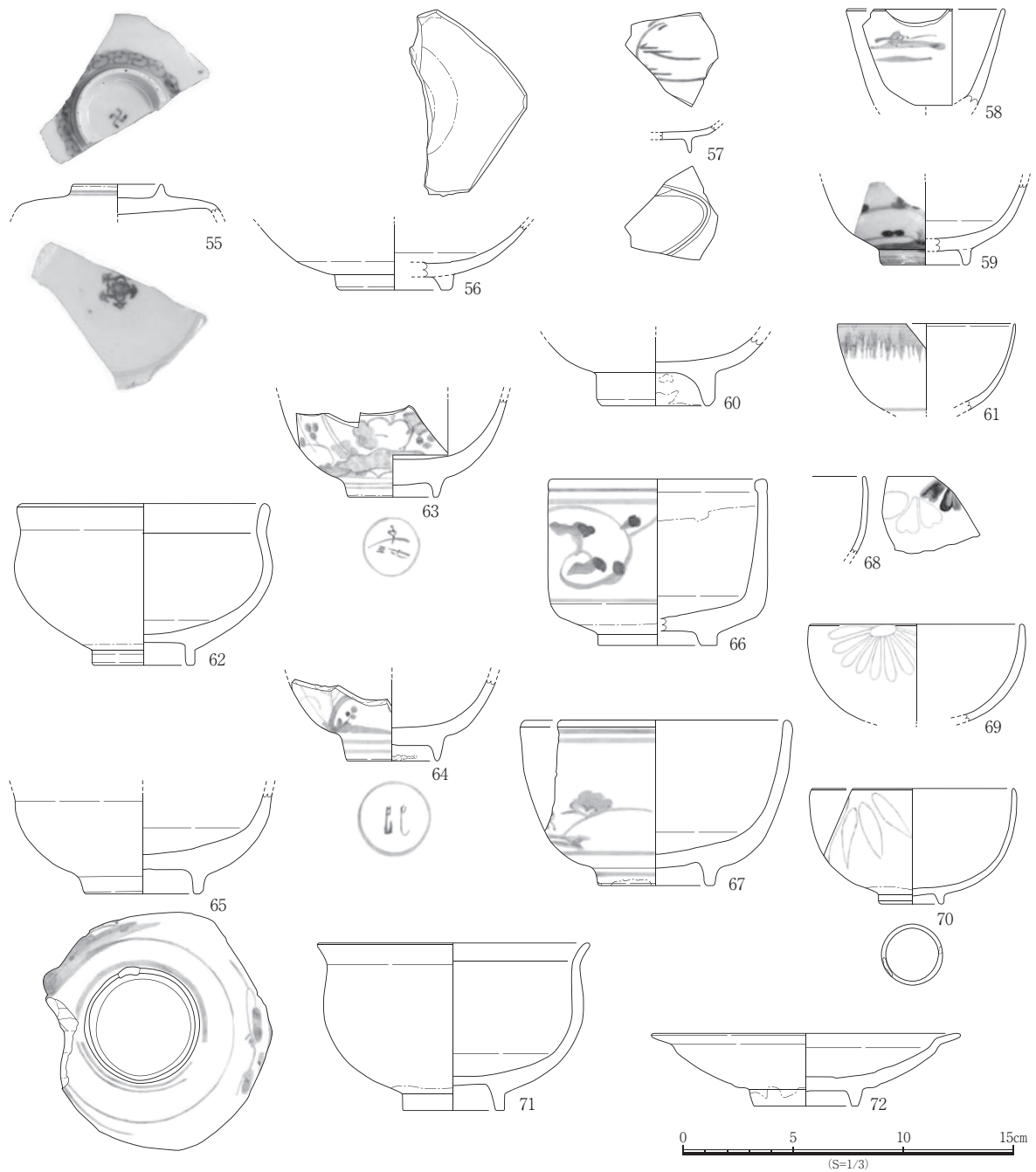


図3-19 SD4出土遺物実測図3

化粧土刷毛目, 内面は同打刷毛目が施されている。

SD7(図3-24)

東部(B2-11-4)で検出したが大部分が調査区外に出ている。確認延長 6.5m, 幅 3.5m, 深さ 20 cm 前後である。床面に凹凸が見られる。長い土坑の可能性もある。埋土は小礫混じりの黒褐色シルト質細粒～中粒砂である。近世陶磁器片とともに多量の弥生後期末の土器細片が出土している。SD7 掘削時に弥生後期の遺構あるいは包含層があったものと考えられる。102 は肥前産染付小皿で内側型打による菊弁が見られる。103 は陶器小皿である。

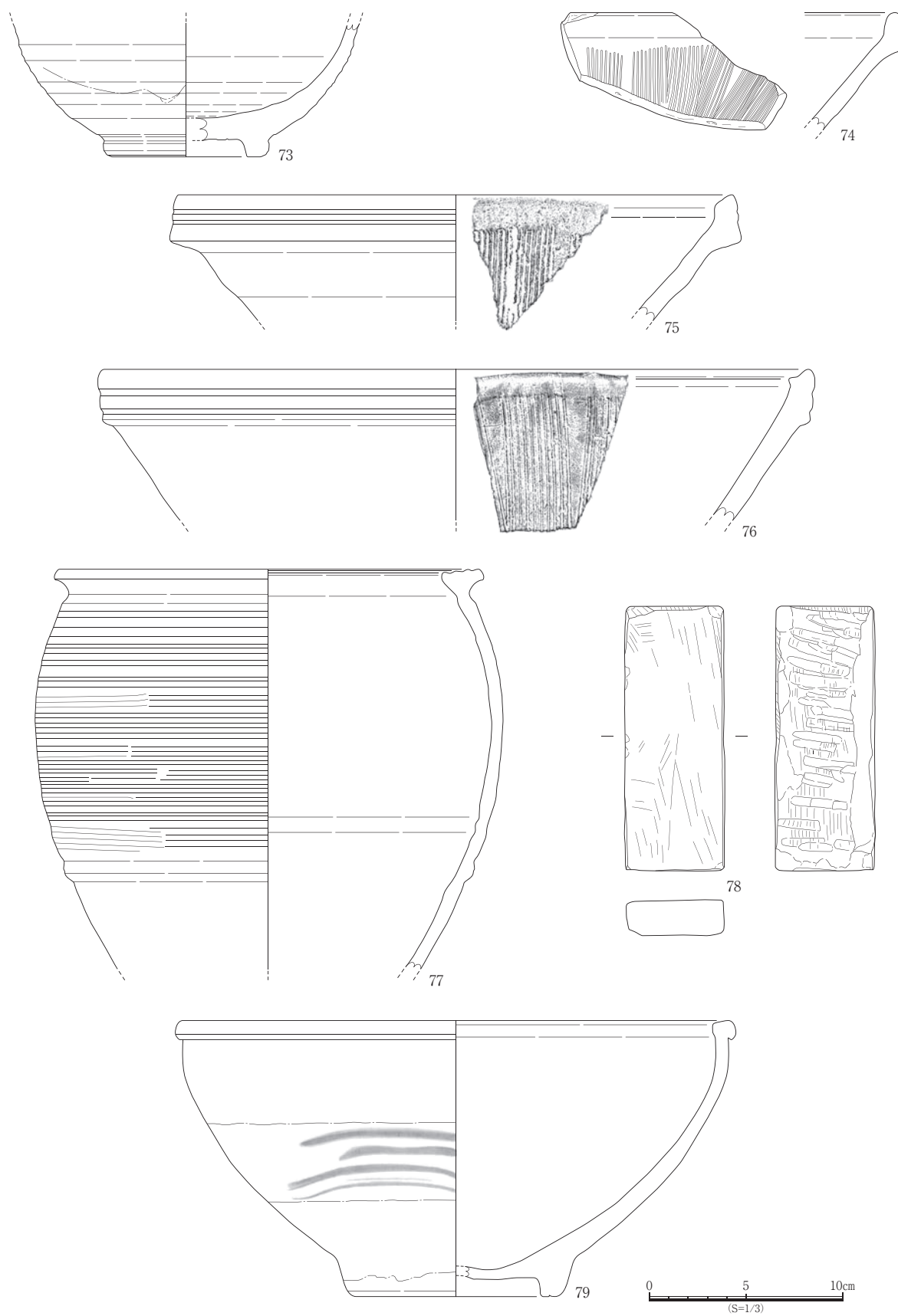


图3-20 SD4出土遺物実測図4

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

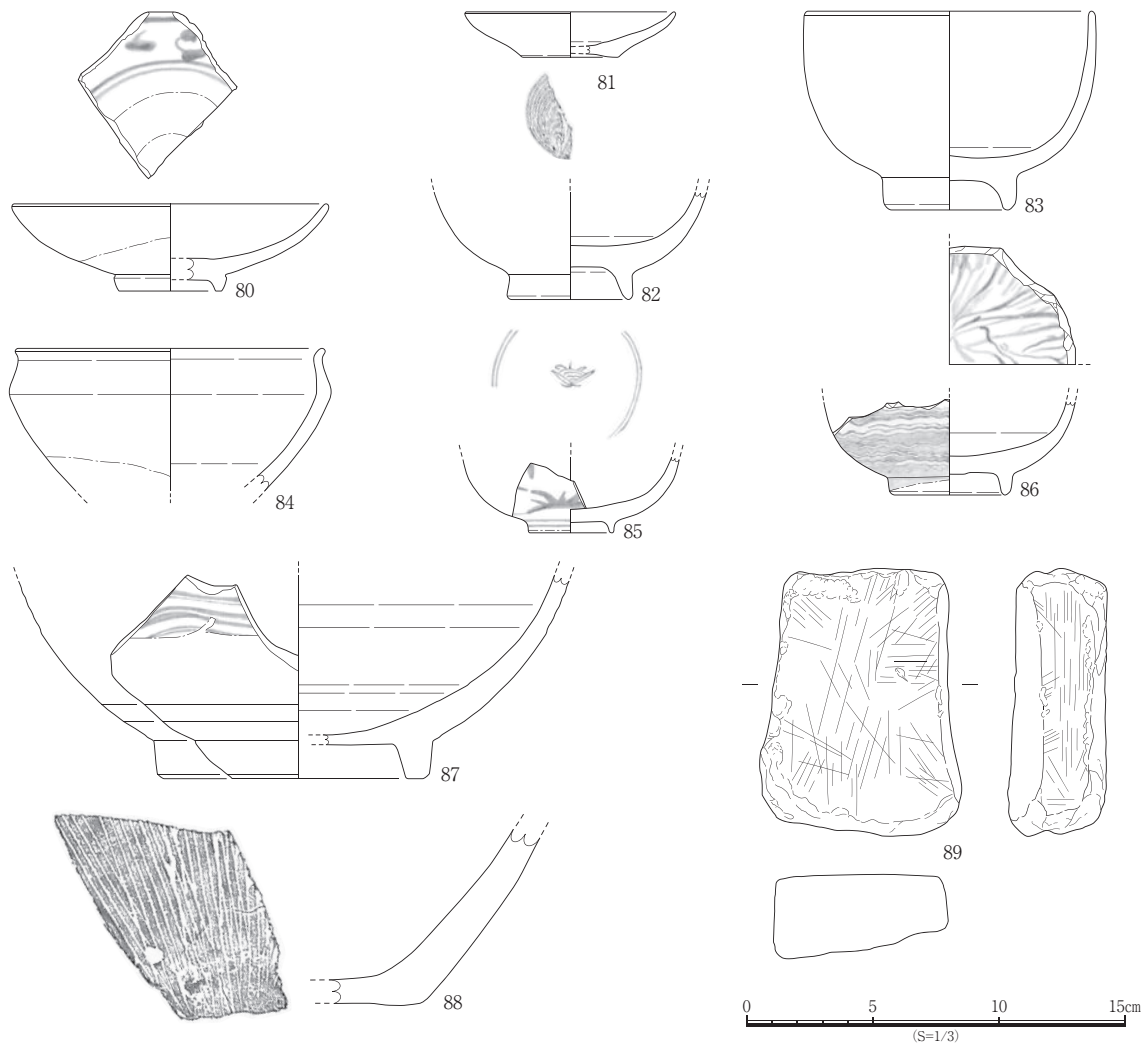


図3-21 SD4出土遺物実測図5

SD8(図3-25)

SD5から南に伸びSK2に繋がっている。確認延長は15.0m、幅0.3～0.4m、深さ20cm前後である。埋土は砂混じりの黒褐色シルトである。遺物は近世陶磁器片が少量出土している。104は肥前産染付中碗、105は肥前産陶器小皿である。

SD9(図3-25)

SD5から分岐するように出て南端はSD4に繋がっているが、先後関係は不明である。確認延長20.0m、幅0.7m、深さ25cmである。埋土は小礫を含む黒褐色シルト質中粒砂である。遺物は近世陶磁器片が少量出土している。106は焼締め陶器の火入である。108は肥前内野山窯の中皿で内面は緑釉と鉄釉に掛け分けている。

SD10(図3-25)

北端(B2-1-19)で検出した。確認延長5.5m、幅1.0m前後、深さ10cmである。埋土は中粒砂混じりの褐色シルトである。埋土中から近世陶磁器細片が出土しているが図示できたのは107のみである。肥前産陶器中皿である。

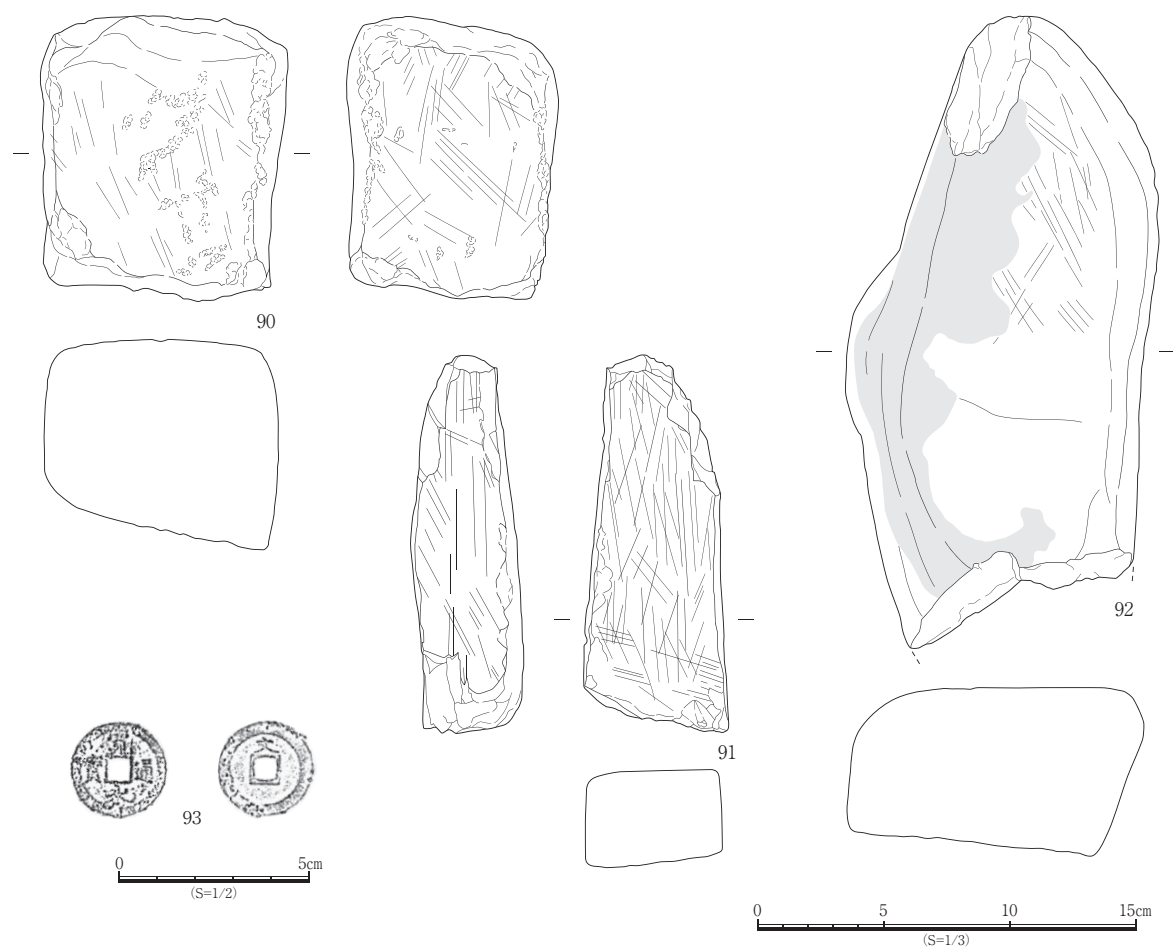


図3-22 SD4出土遺物実測図6

SD11(図3-25)

調査区中央部より(B2-6-12)に位置する。延長4.5m, 幅0.6m, 深さ15cmである。埋土は砂混じりの褐色シルトに黄褐色シルトが混ざる。埋土中から近世陶器細片が2点出土している。

SD12(図3-25)

中央部(B2-6-6)に位置する。延長4.5m, 幅0.5m, 深さ5cmである。埋土は小礫と黄褐色シルトの地山土を含む灰黄褐色シルト質中粒砂である。遺物は近世の陶磁器や瓦の細片が出土している。

SD13(図3-25)

北より(B2-1-24)に位置する。長さ6.9m, 幅0.8m, 深さ25cmである。SB2と切り合っているが先後関係は不明である。埋土は1層が小礫を含む褐灰色シルト質細粒～中粒砂, 2層が小礫が混じり1層をブロック状に含む灰黄褐色シルト質粗粒砂, 3層が黄灰色シルト質細粒～中粒砂である。

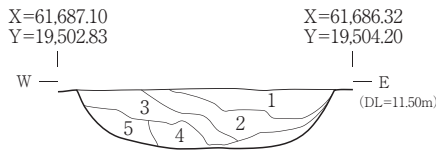
SD14(図3-26)

北より(B2-1-24)に位置する。東西方向に伸び東端は北に屈曲してSK20と接している。延長8.0m, 幅0.4～0.8m, 深さ10cmである。埋土は暗褐色シルト質砂に黄褐色シルト質砂がブロック状に入っている。

SD15(図3-26)

東北隅(B2-2-17)に位置し, 東西方向に走り東は調査区外に出ている。確認延長10.3m, 幅1.0m,

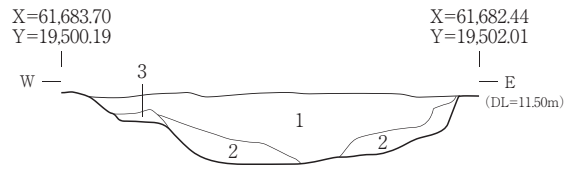
2. 検出遺構と遺物 (3) 溝



遺構埋土

1. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト質粗粒砂混じりの褐色 (7.5YR4/4) シルト質中粒砂
2. 黒褐色 (10YR2/3) シルト質中粒砂
3. 黒色 (10YR1.7/1) シルト質中粒砂
4. 黒褐色 (10YR2/2) 中粒砂質シルト
5. 黒褐色 (10YR2/2) 中粒砂質シルト混じりの黒色 (10YR1.7/1) 細粒砂質シルト

SD5バンク1



遺構埋土

1. 褐灰色 (10YR4/1) シルト質細粒砂混じりの暗褐色 (10YR3/4) シルト質細粒砂
2. 暗褐色 (10YR3/4) シルト質細粒砂混じりの黒褐色 (10YR2/3) シルト質細粒砂
3. にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質細粒砂

SD5バンク2

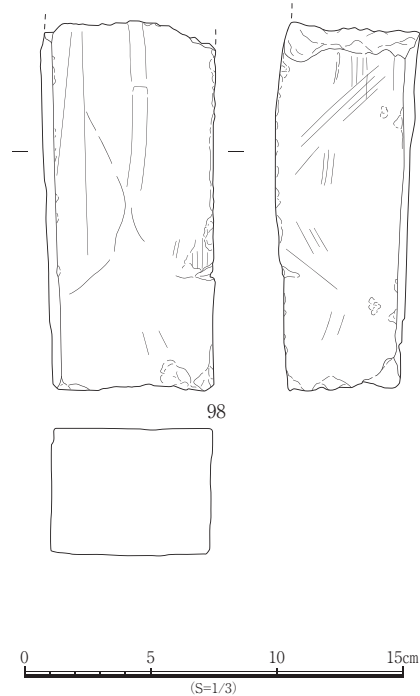
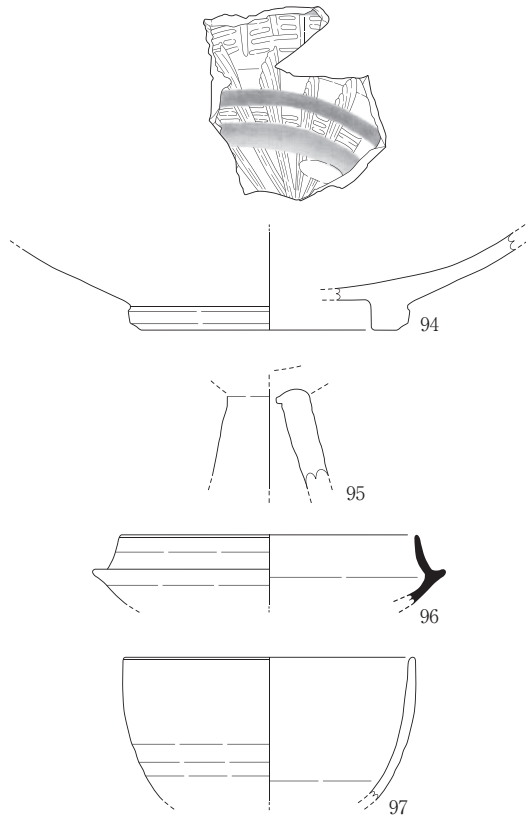
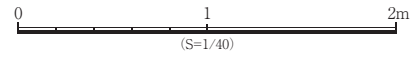


図3-23 SD5及び出土遺物実測図

深さ 20 ~ 30 cm である。埋土は中小礫を含む褐色シルト質中粒砂に明黄褐色シルト質砂の地山土をブロック状に含む。埋土中から近世陶磁器片が出土している。109 は焼締め陶器の火入, 110・111 は肥前産の陶胎染付中碗である。

SD16(図3-26)

調査区中央部(B2-6-12)を東西に走り東は調査区外に出ている。中程を現代攪乱に大きく切られている。確認延長20.0m, 幅0.5m, 深さ10cmである。埋土は小礫を含む褐灰色シルト質中粒砂である。埋土中から土師質小片が出土している。

SD17(図3-26)

SB4・5の南隣をSD4・8・9に直行するように東西方向に走る。SD4に接しSD8・9とは切り合っているが、先後関係は不明である。延長7m, 幅0.5m, 深さ30cmである。埋土は砂混じりの黒褐色シル

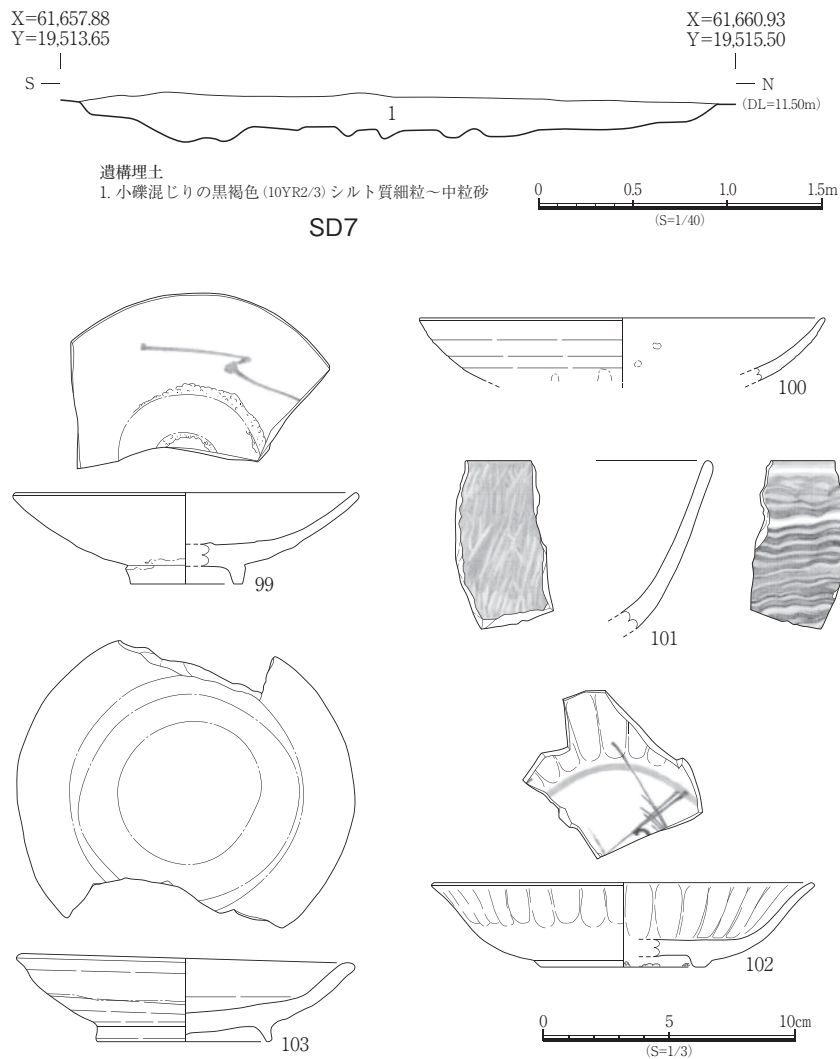


図3-24 SD7及びSD6・7出土遺物実測図

トである。

SD18(図3-26)

東端(B2-6-20)に位置する。確認延長1.5m, 幅0.4m, 深さ10cm前後である。埋土は砂混じりの黒褐色シルトである。

(4) 柱穴(図3-27)

図示できるものは3点である。114はP1出土の土師質土器小皿である。113はP2出土の陶器小皿で鉄釉を施し見込は蛇ノ目状に剥ぎ取っている。能茶山産で1820年代以降に量産されたものである。112はP3出土の陶器壺で外面は灰釉, 内面は無釉で轆轤目が顕著に見える。

(5) 遺物包含層等(図3-27)

115は須恵器杯身TK10型式である。116は瓦質土器の鍋で上胴部外面に指頭圧痕が顕著, 117は瓦質土器の羽釜で三角突帯が巡り口唇は面をなす。118は青磁香炉である。119は肥前産の磁器紅皿である。型による菊弁, 外面は無釉である。120は土師質土器小皿で灯明皿として使われている。121・123・124は肥前内野山窯の陶器小皿である。122は肥前産の陶器中碗である。125は肥前産陶器中皿

3. 小結

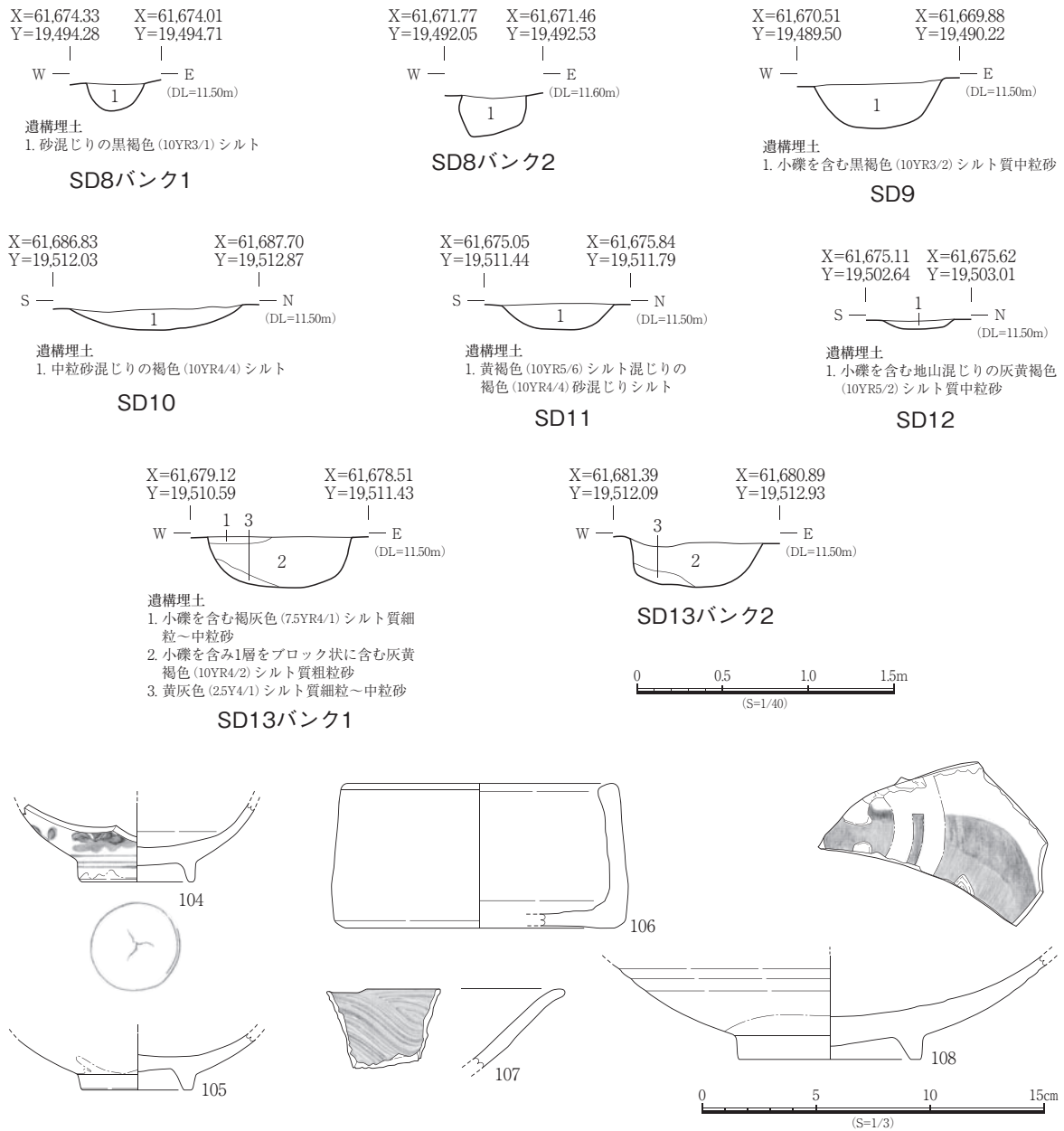


図3-25 SD8～13及びSD8・9出土遺物実測図

である。126～129は肥前産の陶器鉢である。口縁部は肥厚する。126は内外鉄釉施釉，他は白化粧土刷毛が施されている。130は肥前産の磁器瓶である。

3. 小結

I A区からは掘立柱建物5棟，土坑32基，溝21条などを検出したがSD3を除くとすべて近世遺構である。近現代攪乱が多くて規模や時期，性格を明らかにできないものが多いが，近世の居住域を構成する遺構群として捉えることができる。

各遺構間の先後関係を明確にできる資料が少ないが，溝の埋土や重複関係，出土遺物から大きく3時期に分けることができよう。

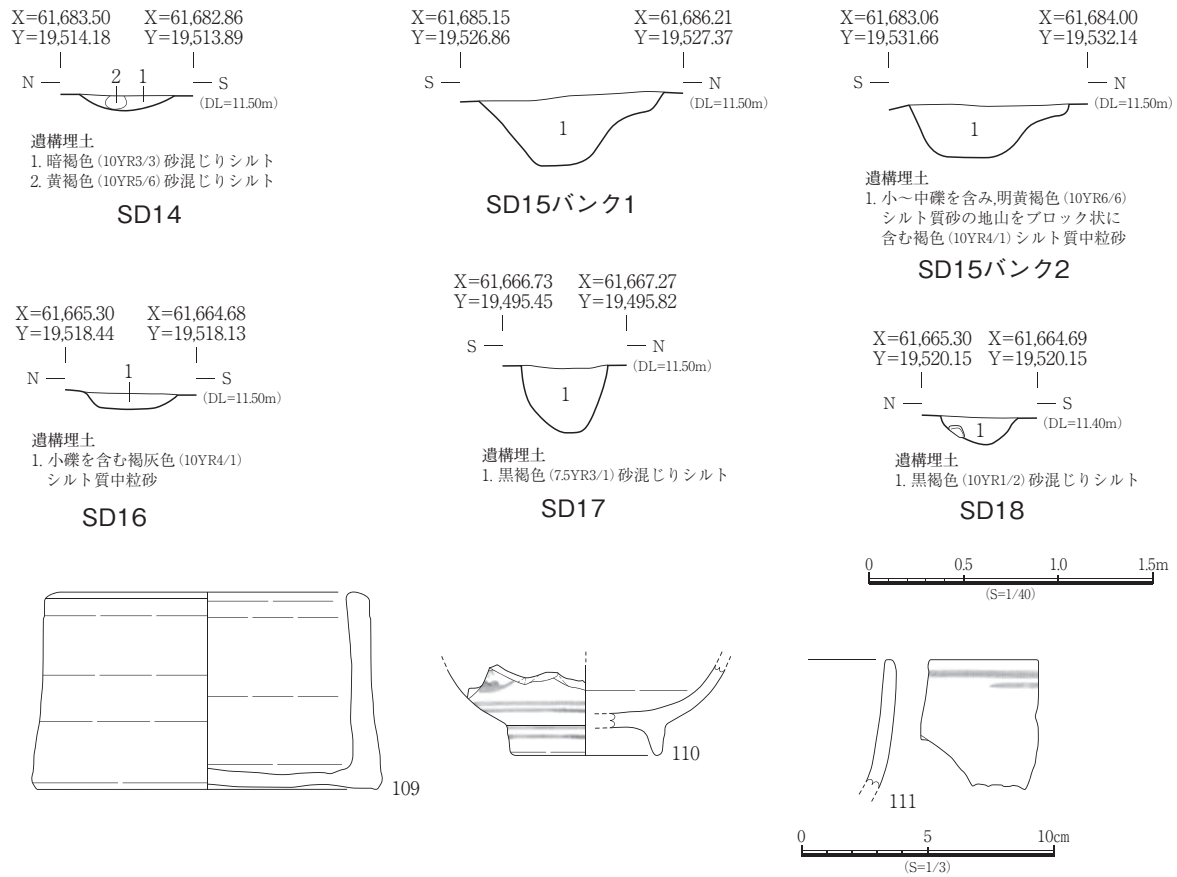


図3-26 SD14～18及びSD15出土遺物実測図

1期：調査区を斜めに切る溝SD3である。遺物が一点も出土していないために時期を比定できないが、重複関係にある遺構のすべてに切られていることや埋土から判断して近世以前に属する。SD3はI A区で最も先行する遺構である。

2期：SB1・SD5・SD7・SD8など

SD5とSD7は弥生後期や古墳時代の遺物を含んでいる。すでに述べたようにこれらの遺構が弥生後期や古墳時代の遺物包含層や遺構が残存している段階で掘削された遺構として捉えることが可能であれば、同じ近世遺構の中でも他に先行して営まれた遺構として位置付けることができる。SD8はSD5から派生する溝でSB4・5に切られている。SB1は区画溝SD5と共存することが考えられる。2期に属する土坑やピットもあるものと考えられるが抽出できない。

3期：SB2～SB5, SD4・SD9など

SB4とSB5は立て替えがあり2小期に分けられる。両者は総柱建物であり2期のSB1とは性格を異にする。従ってこれに東西棟のSB2とSB3がそれぞれ対応することが考えられる。3期に対応する土坑やピットは2期以上に多く存在するものと考えられるが、抽出することはできない。

I A区は、近世遺構が営まれる以前に弥生後期から古墳時代の遺物包含層が形成されていたことから当該期にまで遡って土地利用がはじまったものと考えられる。しかし残存遺構から見ると本格的な生活が始まるのは17世紀後半から18世紀前葉である。先ずSB1とSD5・7が登場し、次の

3. 小結

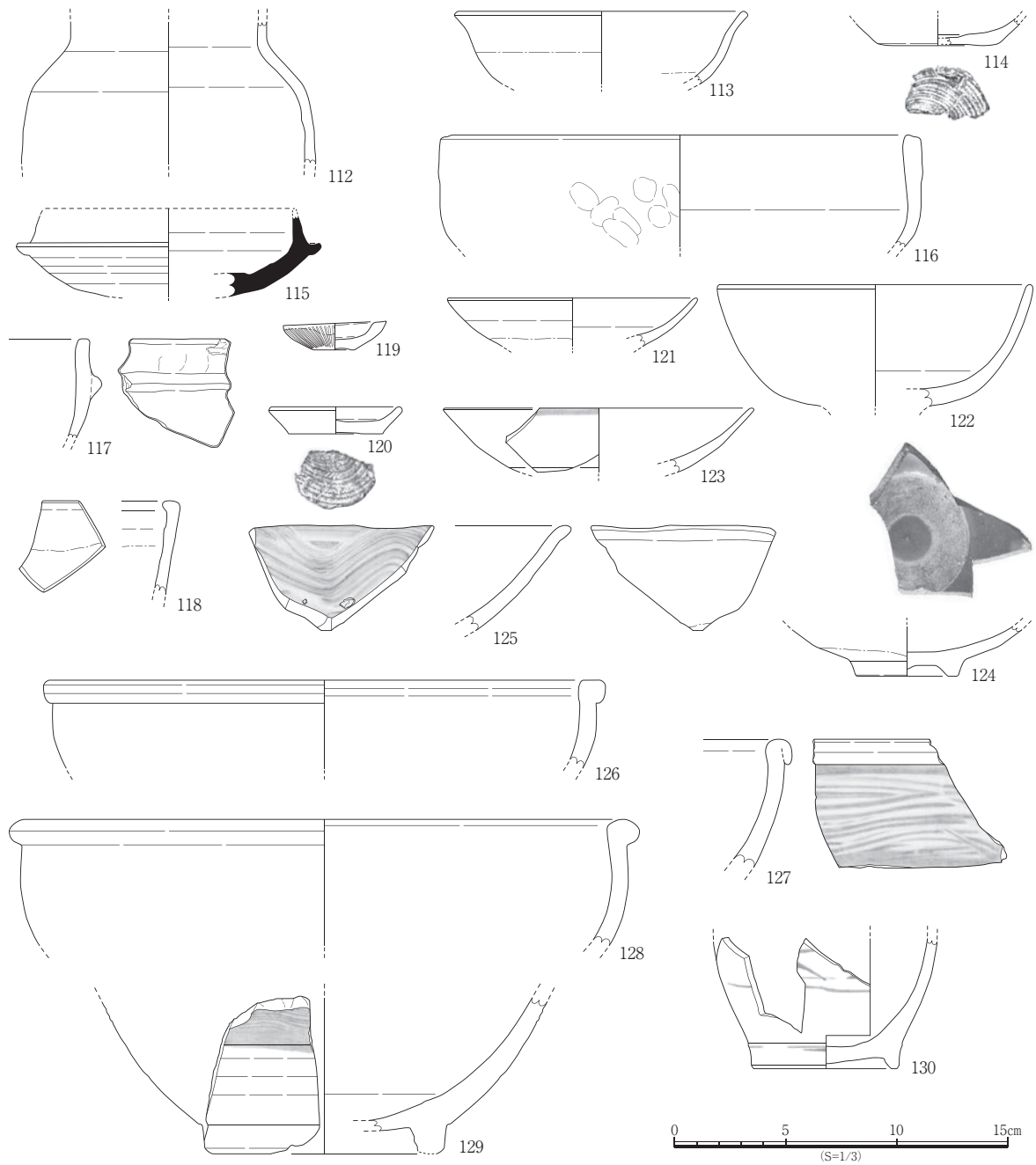


図3-27 柱穴及び遺物包含層出土遺物実測図

でSB2～SB5, SD4など継続して営まれる。3期の建物の棟方向や区画溝の方向は現在の地割りに一致している。すでに述べたようにI A区周辺は天正期の『長宗我部地検帳』に記載が見られず検地の対象外の原野であった。今次調査で検出した屋敷関連遺構は、その原野を本格的に開墾して今日に続く穀倉地帯へと導いた人々の営みの跡として捉えることができよう。

第IV章 I B区

1. 調査の概要と基本層序

(1) 調査の概要

調査区中央部南半の調査区で、面積は2,863㎡である。調査区南西部の遺構密度は希薄であり、遺構密集地域は計画的な配置を伺わせる。近世の屋敷地であり、掘立柱建物5棟、土坑95基、溝24条、柱穴が検出されている。遺物は陶磁器類が多く出土しており、概ね18世紀代のものが主体である。基準軸は磁北から東へ約40度振った方向を採用しているものが多い。また、遺構の平面形は均整のとれたものが多く規格性が認められる。耕作土及び床土を掘削すると遺構検出面である。

(2) 基本層序

調査区で認められた基本層序はI C区と同じである。

2. 検出遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

SB1(図4-2・3)

調査区の南東部(B2-19-8)に位置する。桁行4間(6.3m)、梁行3間(5.4m)の東西棟で棟方向はN-51°-Wである。北西隅部の2柱穴は検出できていない。各柱穴の直径、深さは様々である。側柱は相対的に大きい。一方、P7・13・17・18は小さく、浅い。遺物はP2から陶器碗(1)が出土している。外面に二重圏線、草花文を描く。呉須の発色は悪い。図示していないが、P1から須恵器片が出土している。

SB2(図4-4)

調査区南東部(B2-19-12)に位置する。桁行3間(6.1m)、梁行1間(2.0m)の東西棟で棟方向はN-52°-Wである。各柱穴の配置からハンダ土坑SK2からSK4の覆い屋と考えられる。図示していない

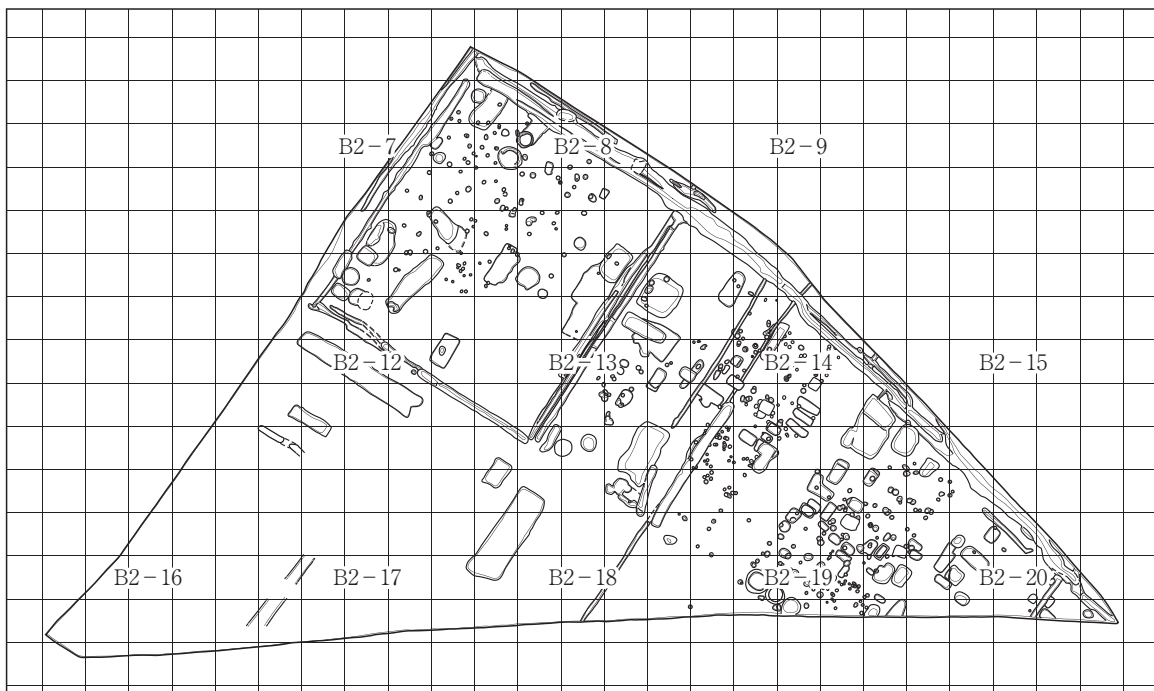


図4-1 調査区グリッド設定図

2. 検出遺構と遺物 (1) 掘立柱建物

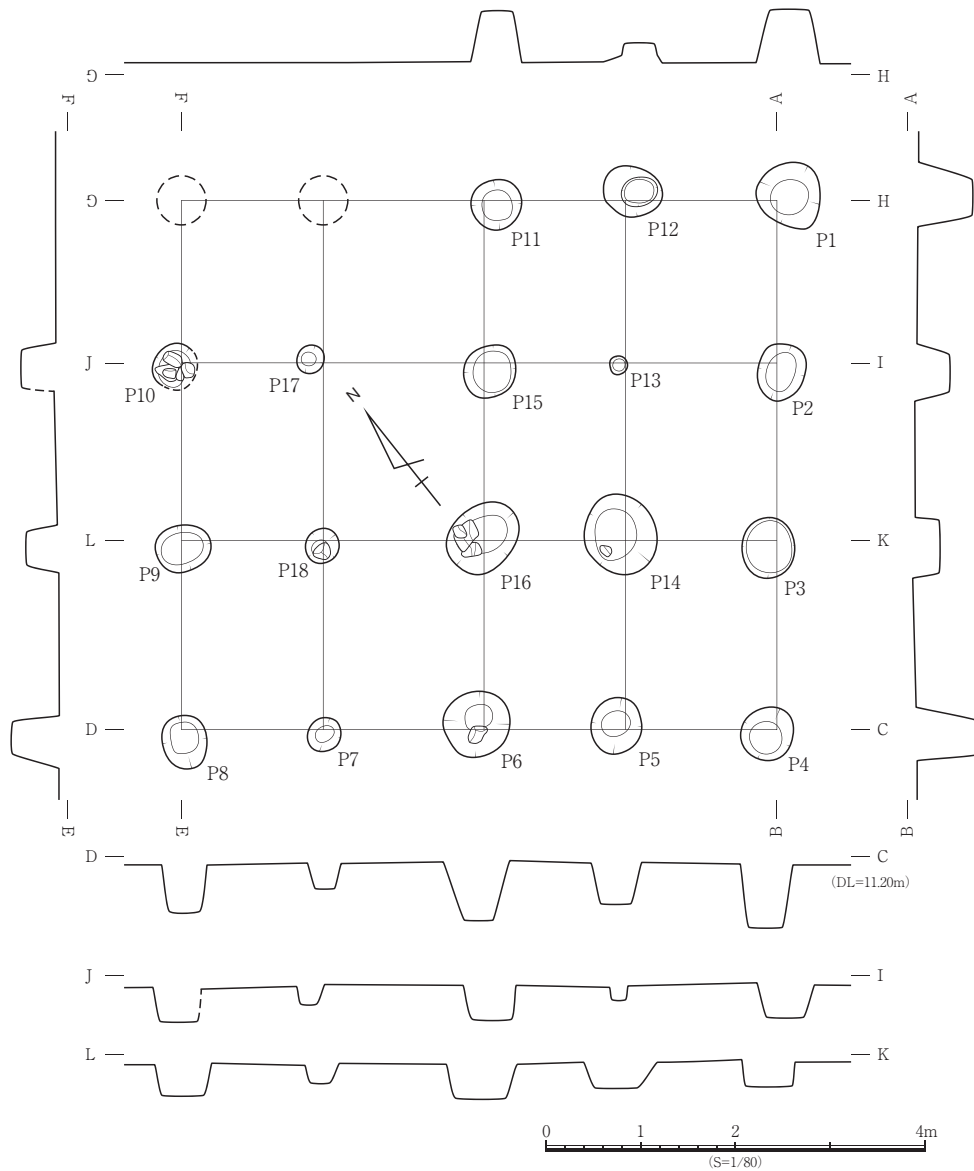


図4-2 SB1

いが、P2から須恵器片が出土している。

SB3(図4-4)

調査区中央部北寄り(B2-14-7)に位置する。桁行3間(5.8m)、梁行1間(2.2m)の東西棟で棟方向はN-58°-Wである。図示していないが、P1から磁器片、P2から土師質土器とみられる細片が出土している。

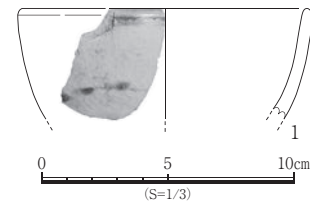


図4-3 SB1出土遺物実測図

SB4(図4-5・6)

調査区中央部北寄り(B2-14-12)に位置する。桁行4間(7.3m)、梁行1間(2.7m)の東西棟で棟方向はN-58°-Wである。SB3と同一棟方向を持ち、両建物の間隔は1mもない。また、周辺には両建物の棟方向と同一の方向の柱穴列が存在している。遺物はP2から土師質土器小皿(2)が出土している。外底面に回転糸切り痕跡が認められる。色調は浅黄橙色を呈し、内面口縁端部にタールが付着し灯明皿と考えられる。

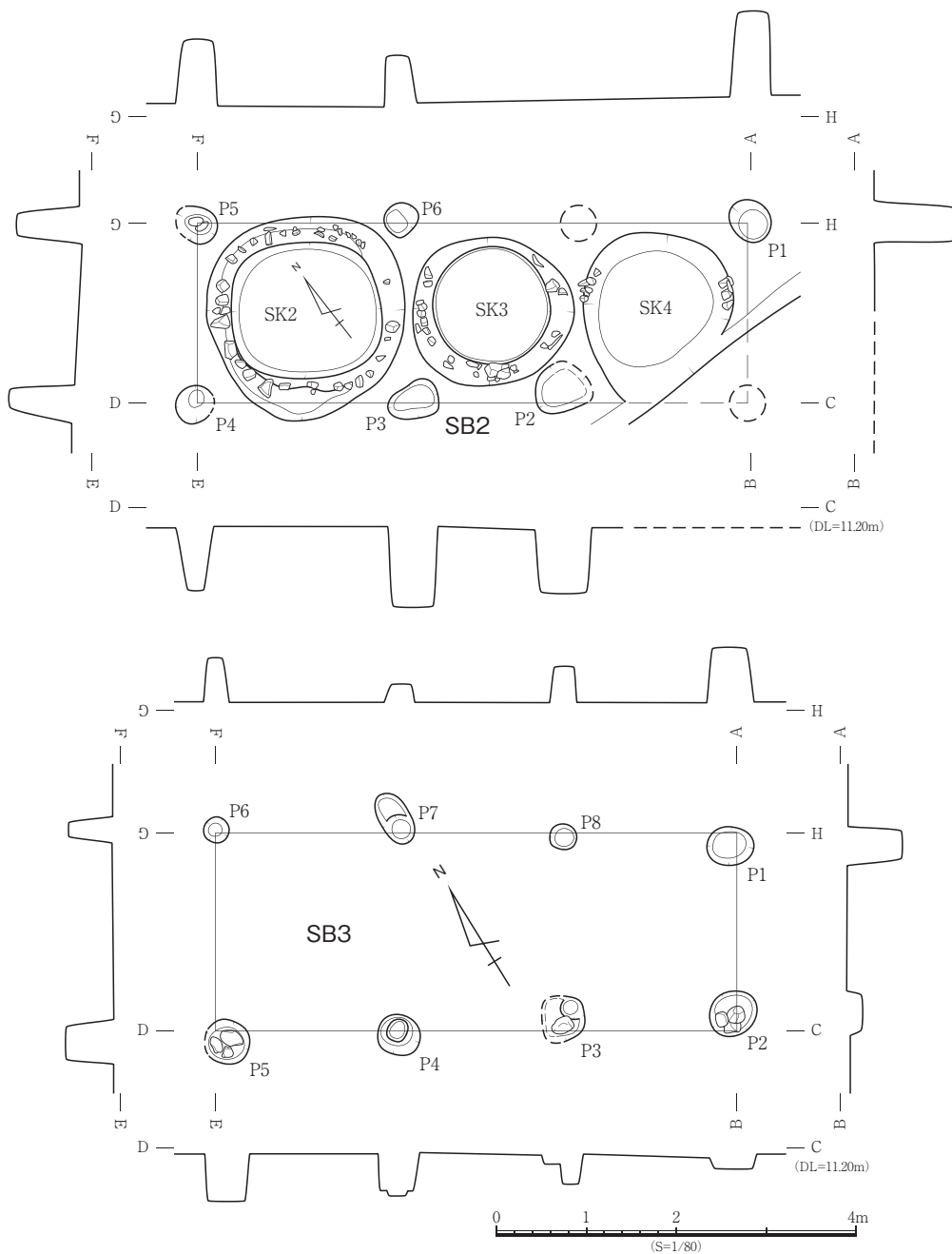


図4-4 SB2・3

SB5(図4-7・8)

調査区東部(B2-19-5)に位置する。桁行3間(5.8m)、梁行2間(3.8m)の南北棟で棟方向はN-29°-Eである。一部の柱穴は検出できていない。P2~5・P7・P8には根石がある。他のSB1~4とは棟方向が異なる。遺物はP4から磁器碗(3)が出土している。外面には風景文かを描き、釉調はにぶい黄橙色を呈する。図示していないが、陶器片も出土している。

(2) 土坑

SK1(図4-9)

調査区南部(B2-8-1・6・11)に位置する。平面形は不整長方形を呈し、長軸9.5m、短軸3.0m、深さ

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

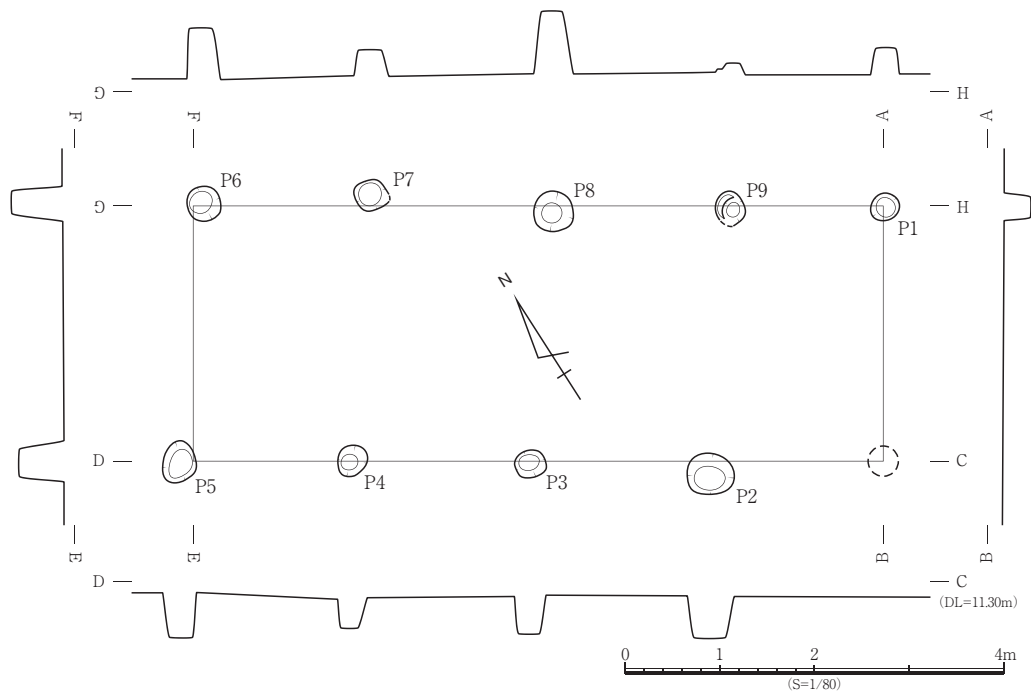


図4-5 SB4

19cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。図示した遺物は磁器皿(4)、陶器甕(5)、陶器播鉢(6)である。4は蛇ノ目高台で外底面は釉剥ぎを施す。内面に文様を描く。5は外底面に回転糸切り痕跡が認められる。外面は露胎, 内面には鉄釉を施す。6の内面には8~10条1単位のスリメを施し, 使用により平滑となる。図示していないが, 他に陶器片, 磁器片, 土師質土器片, 瓦片, 須恵器片が出土している。

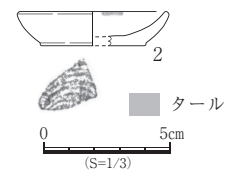


図4-6 SB4出土遺物実測図

SK2(図4-4)

調査区南東部(B2-19-12)に位置するハンダ土坑である。平面形は楕円形を呈し, 長軸 1.65m, 短軸 1.50m, 深さ 38cmである。周囲を黄色のハンダで固める。埋土の上層は褐灰色細粒砂混じりシルト, 下層はハンダ塊である。SK2からSK4の3基は一組のものである。遺物は出土していない。

SK3(図4-4・10)

調査区南東部(B2-19-12・13)に位置するハンダ土坑である。平面形は円形を呈し, 長軸 1.3m, 短軸 1.3m, 深さ 49cmである。周囲を黄色のハンダで固める。埋土は黒褐色粘質土, 明褐色粘質土, 灰黄褐色粘質土が混ざる。図示した遺物は磁器碗(7), 陶器碗(8・9), 磁器皿(10)である。7は畳付に釉剥ぎを施す。高台脇, 高台に圈線文を描く。8の釉調は黄色みがかかった灰白色である。高台脇以下は露胎である。9は腰の張った形態を呈する。畳付は釉剥ぎし鉄錆を施す。外面には風景文, 腰部および高台に圈線文を描く。唐津焼である。図示していないが, 他に陶器片, 土師質土器片, 瓦片, 須恵器片が出土している。

SK4(図4-4)

調査区南東部(B2-19-18)に位置するハンダ土坑である。平面形は円形を呈し, 長軸 1.7m, 短軸 1.7m, 深さ 36cmである。周囲を黄色のハンダで固める。埋土は黒褐色粘質土, 明褐色粘質土, 灰黄褐色粘質土が混ざる。図示していないが, 陶器片が出土している。

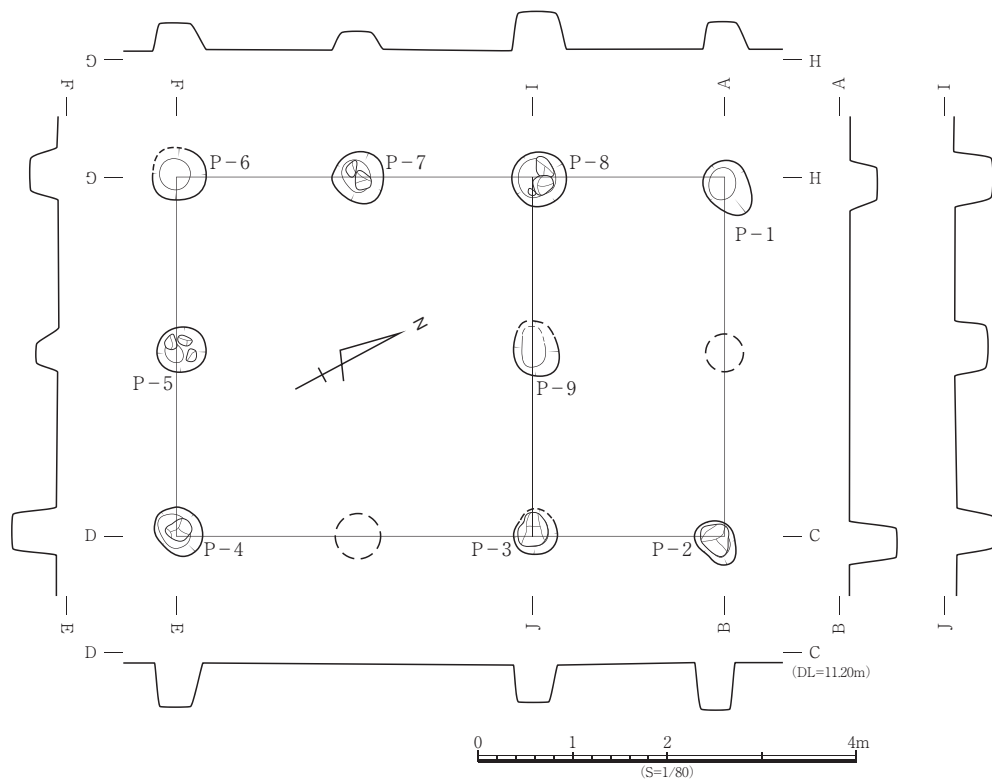


図4-7 SB5

SK5

調査区南東部(B2-20-11)に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.70m、短軸0.75m、深さ9cmである。埋土はハンダブロックを含む褐灰色粘質土である。図示していないが、磁器片、土師質土器片が出土している。

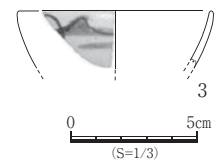


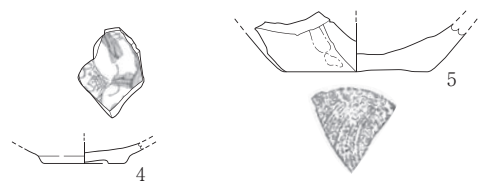
図4-8 SB5出土遺物実測図

SK6(図4-11)

調査区南東部(B2-19-20)に位置する。一部は調査区外である。平面形は楕円形を呈する。長軸は検出長で1.2m、短軸1.0m、深さ40cmである。埋土はハンダブロックを含む褐灰色粘質土である。図示した遺物は陶器碗(11)である。内外面に鉄釉を施す。図示していないが、他に弥生土器片が出土している。

SK7

調査区南東部(B2-20-12・17)に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.40m、短軸1.05m、深さ8cmである。埋土はハンダ粒を含む褐灰色細粒砂混じりシルトである。図示していないが、弥生土器片が出土している。



SK8

調査区南東部(B2-20-7・12・13)に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.50m、短軸1.35m、深さ23cmである。埋土はハンダブロックを多く含む褐色細粒砂混じりシルトである。図示していないが、土師質土器片が出土している。

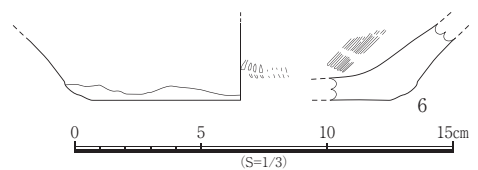


図4-9 SK1出土遺物実測図

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

SK9(図4-12)

調査区西部(B2-20-7)に位置する。平面形は不整長方形を呈し、長軸 12.6m、短軸 2.2m、深さ 7cmである。2条の溝跡あるいは土坑が重複している可能性がある。埋土は褐灰色細粒砂混じりシルト、黒褐色細粒砂混じりシルト、明黄褐色細粒砂混じりシルトが混ざる。図示した遺物は陶器皿(12)、土師質土器小皿(13)、須恵器皿(14)、叩石(15)

である。12は輪花形を呈する皿である。内面には銅緑釉、外面には黄色みがかかった灰白色の釉薬を施す。見込は蛇ノ目釉剥ぎ、砂目が認められる。畳付には釉剥ぎを施す。また、腰部の釉薬は融解しており被熱していると考えられる。13は外底面に回転糸切り痕跡があり、見込には明瞭なロクロ目が認められる。14は折り曲げ口縁であり、内外面とも回転ナデ調整である。混入品である。15は砂岩製である。側面の2カ所に明瞭な敲打痕跡があり、他にも弱い敲打痕跡が認められる。図示していないが、他に陶器片、土師質土器片が出土している。

SK10

調査区南東部(B2-20-7・12)に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸 2.90m、短軸 1.45m、深さ 23cmである。図示していないが、瓦片、弥生土器片が出土している。

SK11

調査区南部(B2-13-21・B2-18-1)に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸 2.55m、短軸 1.60m、深さ 6cmである。埋土は黄灰色細粒砂混じりシルトである。図示していないが、土師質土器片、瓦片が出土している。

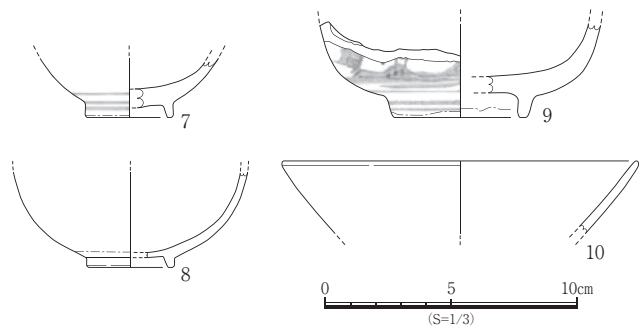


図4-10 SK3出土遺物実測図

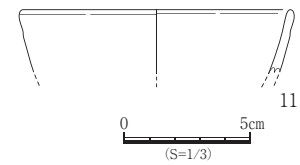


図4-11 SK6出土遺物実測図

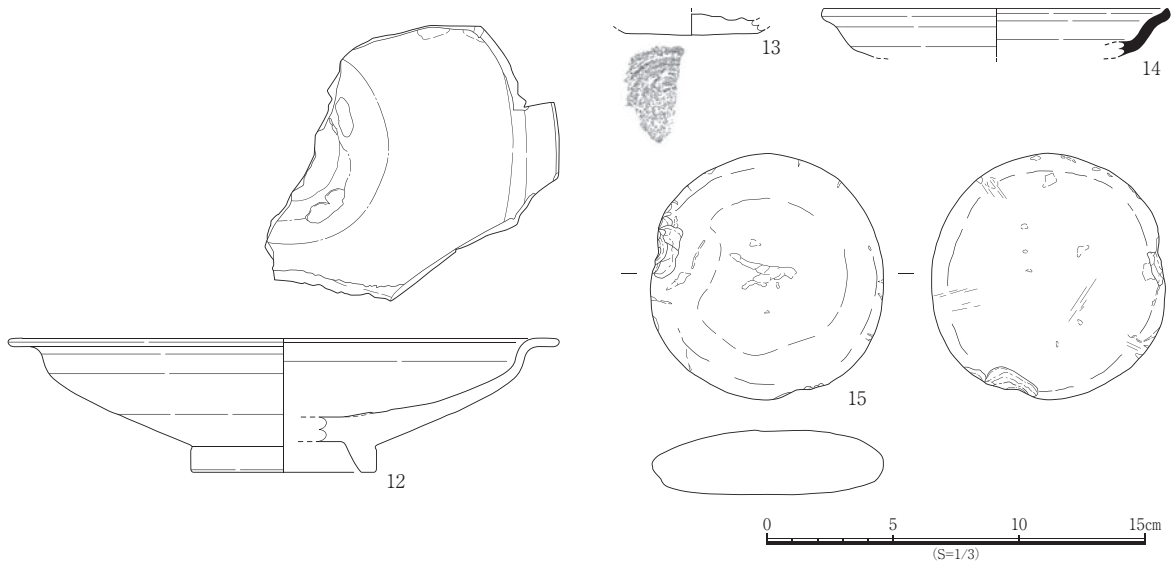


図4-12 SK9出土遺物実測図

SK12

調査区南東部(B2-20-7・8)に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.45m、短軸1.10m、深さ24cmである。遺物は出土していない。

SK13

調査区西部(B2-7-23・24)に位置する。SK14に切られる。平面形は不整楕円形を呈し、長軸4.3m、短軸2.5m、深さ13cmである。複数の遺構が重複している可能性がある。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトがブロック状に混じった黄褐色細粒砂混じりシルトである。遺物は出土していない。

SK14(図4-13・14)

調査区西部(B2-7-23・B2-12-3)に位置するハンダ土坑である。SK13を切る。平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.65m、短軸1.50m、深さ54cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。図示した遺物は鉄製品釘(16)である。断面は方形を呈する。図示していないが、他に瓦片が出土している。

SK15

調査区西部(B2-12-2)に位置する。SD9・17を切る。平面形は不整長方形を呈し、長軸2.50m、短軸1.05m、深さ23cmである。埋土はにぶい黄褐色細粒砂混じりシルトである。図示していないが、陶器片、土師質土器片が出土している。

SK16(図4-15)

調査区西部(B2-12-2)に位置するハンダ土坑である。SK58を切る。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.65m、短軸1.20m、深さ45cmである。埋土は黒褐色粘質土である。図示した遺物は土師質土器小皿(17)である。外底面には回転糸切り痕跡が認められ、内面にはタールが付着しており灯明皿である。図示していないが、他に陶器片、磁器片、瓦片が出土している。

SK17

調査区西部(B2-12-15)に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸3.1m、短軸1.6m、深さ4cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。図示していないが、陶器片、磁器片が出土している。

SK18(図4-16)

調査区西部(B2-12-4)に位置する。平面形は不整長方形を呈し、長軸6.6m、短軸1.9m、深さ15cmである。埋土は灰黄褐色細粒砂混じりシルトである。図示した遺物は磁器碗(18)、陶器瓶(19)である。18の釉調は灰白色を呈し、外面には染付けの一部が認められる。19の外面には草花文を描く。内面は露胎である。図示していないが、他に陶器片、磁器片、土師質土器片、瓦片、須恵器片、弥生土器片が出土している。

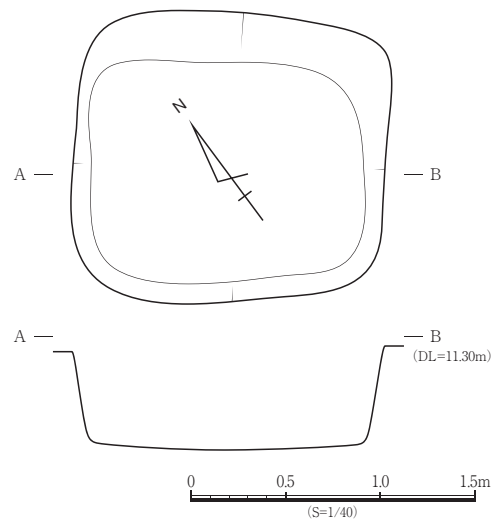


図4-13 SK14

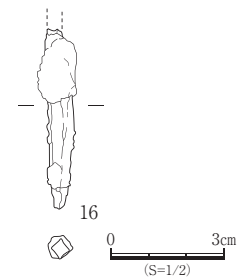


図4-14 SK14出土遺物実測図

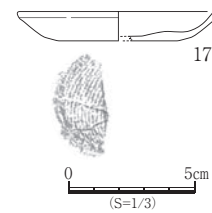


図4-15 SK16出土遺物実測図

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

SK19(図4-17)

調査区西部(B2-7-25)に位置する。平面形は不整長方形を呈し、長軸3.3m、短軸1.4m、深さ23cmである。遺構が重複している可能性がある。埋土はにぶい黄褐色細粒砂混じりシルトである。図示していないが、陶器片、土師質土器片、須恵器片、弥生土器片が出土している。

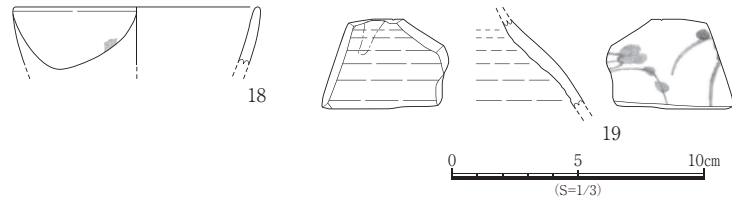


図4-16 SK18出土遺物実測図

SK20

調査区北部(B2-8-6)に位置する。SK21・SD13に切られる。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸の検出長4.0m、短軸2.1m、深さ11cmである。埋土は明灰黄色細粒砂混じりシルトである。底面は凹凸があり縁に沿って溝が巡る。遺物は出土していない。

SK21

調査区北部(B2-8-6)に位置する。SK20を切る。平面形は不整形を呈し、長軸1.35m、短軸1.30m、深さ6cmである。底面は凹凸が有る。埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトである。遺物は出土していない。

SK22(図4-18)

調査区北部(B2-8-14)に位置する。SD13と重複しており、先後関係、形態及び規模は不明瞭である。平面形は不整形を呈し、長軸2.4m、短軸1.3m、深さ51cmである。図示した遺物は陶器鉢(20)である。内面には刷毛目を施す。図示していないが、他に磁器片が出土している。

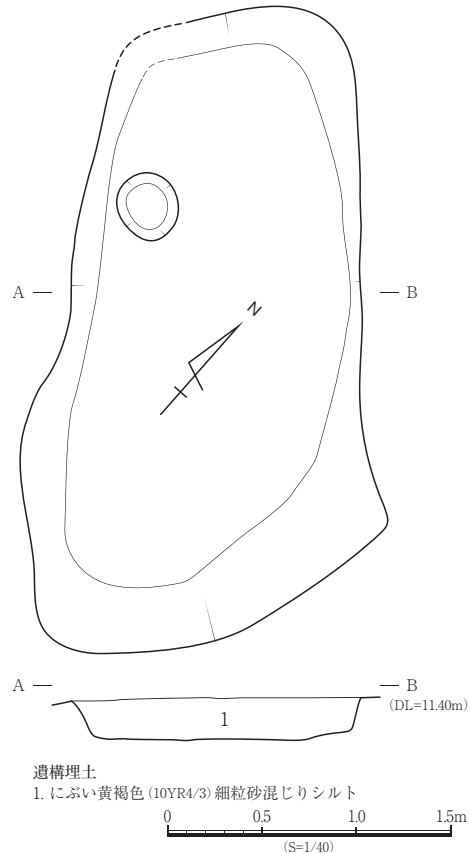


図4-17 SK19

SK23(図4-18)

調査区北部(B2-8-12)に位置するハンダ土坑である。SK50と重複するが先後関係は不明である。平面形は円形を呈し、直径1.45m、深さ13cmである。底面は縁に沿って溝が巡る。図示した遺物は磁器皿(21・22)である。22は角皿で型押成形である。畳付に釉剥ぎを施す。見込は陽刻花文である。

SK24(図4-18)

調査区中央部(B2-13-8)に位置する。SK25・SD20に切られる。平面形は不整形を呈し、長軸の検出長7.30m以上、短軸は検出長2.85m以上、深さ9cmである。隅丸長方形の土坑が重複していると考えられる。一つの土坑の形態・規模はSK25と類似していると推測される。埋土は灰黄褐色～褐灰色細粒砂混じりシルトである。図示した遺物は磁器碗(23)である。小型の丸形で、畳付には釉剥ぎを施す。外面にコンニャク印判による桐文を施す。図示していないが、他に陶器片、磁器片、土師質土器片、瓦片が出土している。これら以外にも鉄製のナットが出土しており、重複している土坑の少なくとも一つは攪乱と考えられる。

SK25(図4-18)

調査区中央部(B2-13-4)に位置する。SK24を切る。平面形は隅丸長方形を呈し、直軸3.3m、短軸2.1m、深さ18cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。図示した遺物は磁器瓶(24)である。外面は灰白色の釉葉であり、透明釉は透明感が強い。胴部に文様、腰部及び高台脇に圈線文を施す。畳付は釉剥ぎし、砂が付着する。内面は露胎である。図示していないが、他に陶器片、磁器片が出土している。

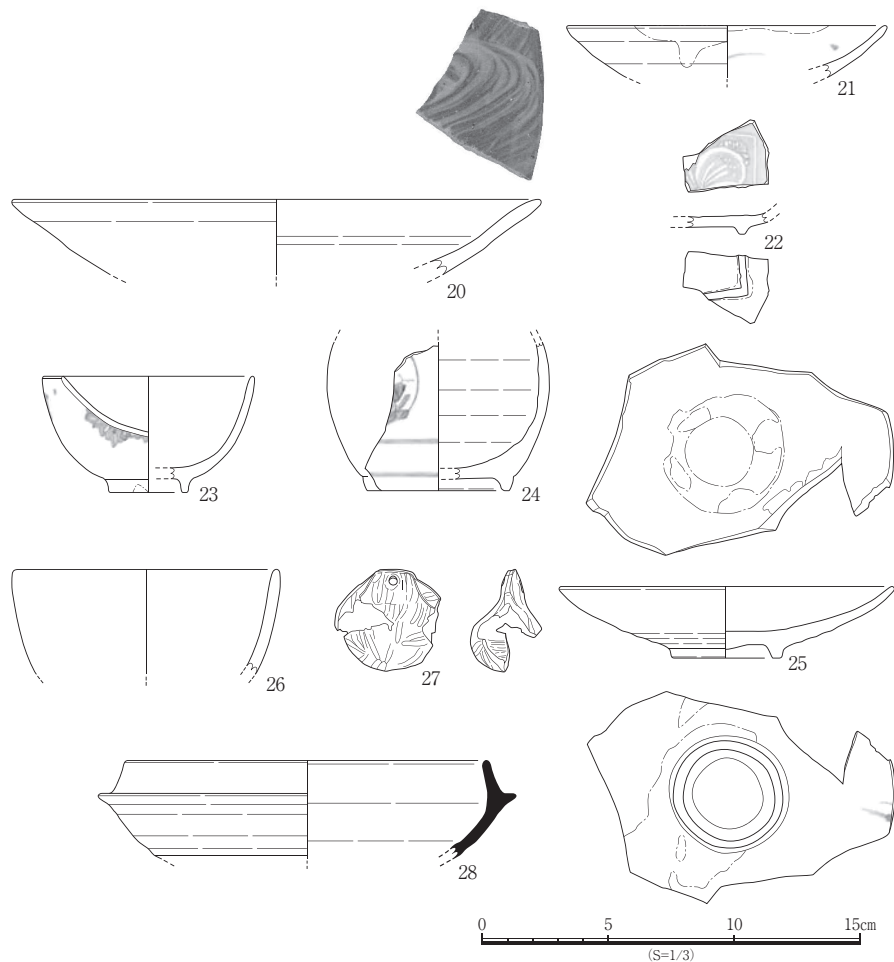


図4-18 SK22~27出土遺物実測図

SK26(図4-18)

調査区中央部(B2-13-5・10)に位置する。

平面形は隅丸方形を呈し、直軸3.7m、短軸3.5m、深さ22cmである。肩部は播鉢状である。埋土は灰黄褐色細粒砂混じりシルトである。図示した遺物は陶器皿(25)である。内面は銅緑釉であり、見込は蛇ノ目釉剥ぎである。外面は透明釉であり、腰部以下は露胎である。釉の塗りは雑である。見込の4カ所に砂目が認められる。図示していないが、他に陶器片、瓦片が出土している。

SK27(図4-18)

調査区中央部(B2-13-24・25)に位置する。平面形は不整長方形を呈し、直軸5.7m、短軸2.8m、深さ5.3cmである。図示した遺物は陶器碗(26)、土製品鈴(27)、須恵器杯身(28)である。26の釉調はにぶい黄色である。27は前後二つのパーツを型打成形で作り接合する。胴部内面にはハケメ状の痕跡が認められ、紐に穿孔する。28の立ち上がりはやや短く端部を丸くおさめる。受け部は水平で短い。内外面とも回転ナゲ調整である。混入品である。図示していないが、他に陶器片、磁器片、瓦片、須恵器片が出土している。

SK28

調査区中央部(B2-13-15)に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.5m、短軸1.1m、深さ24cmである。図示していないが、弥生土器片が出土している。

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

SK29(図4-19)

調査区中央部(B2-13-10)に位置する。SK63を切る。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸4.25m、短軸1.30m、深さ35～48cmである。埋土の上層はにぶい黄褐色細粒砂混じりシルト、下層は褐色細粒砂混じりシルトである。図示していないが、陶器片、磁器片が出土している。

SK30

調査区中央部(B2-8-23)に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.10m、短軸1.05m、深さ48cmである。埋土は灰黄褐色細粒砂混じりシルト、黒色細粒砂混じりシルト、明黄褐色粘質土が混ざる。側面に籬(たが)の痕跡が見られた。遺物は出土していない。

SK31

調査区中央部(B2-14-11・16)に位置する。SD25、ピットを切る。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.60m、短軸0.95m、深さ20cmである。埋土は灰黄褐色細粒砂混じりシルト、黒色細粒砂混じりシルト、明黄褐色粘質土が混ざる。図示していないが、瓦片が出土している。

SK32(図4-20)

調査区中央部(B2-13-15・20)に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸2.15m、短軸1.05m、深さ26cmである。南側はテラス状を呈しており、他の土坑と重複している可能性がある。図示した遺物は石錘(29)である。棒状の砂岩製で、側面の対応する位置に敲打により凹ませ、紐掛けを作出していると推測される。故意に打ち欠き、大きさ、重量を調整した可能性がある。図示していないが、他に陶器片、土師質土器片、瓦片が出土している。

SK33(図4-20)

調査区中央部やや東寄り(B2-14-22)に位置する。ピットを切る。平面形は不整形を呈しており、複数の遺構が重複している可能性がある。長軸2.9m、短軸2.3m、深さ29cmである。図示した遺物は陶器碗(30)である。呉須の発色はやや悪い。図示していないが、他に磁器片、土師質土器片が出土している。

SK34

調査区北部(B2-8-12・17)に位置する。平面形は不整長方形を呈し、長軸1.15m、短軸0.70m、深さ4cmである。他の遺構と重複している可能性が

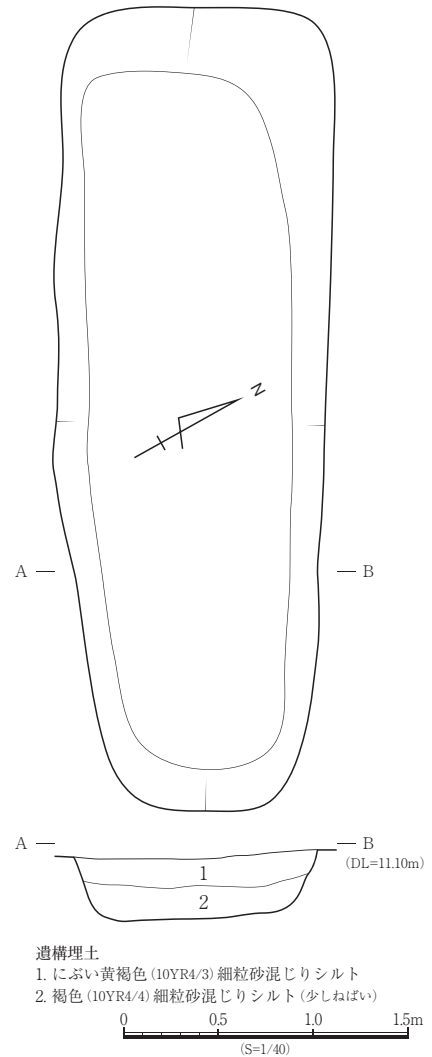


図4-19 SK29

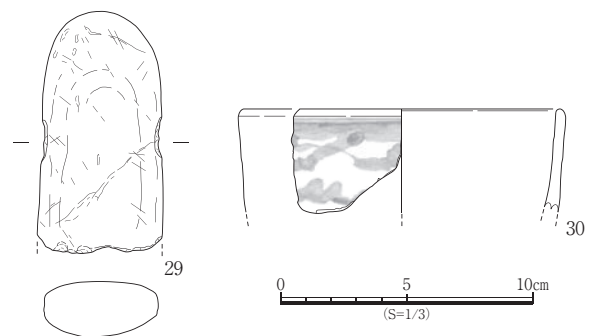


図4-20 SK32・33出土遺物実測図

ある。図示していないが、瓦片が出土している。

SK35(図4-21・22)

調査区東部(B2-19-8)に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸 1.35m、短軸 1.10m、深さ 15 cmである。SB1 を構成するピットと重複するが先後関係は不明である。図示した遺物は陶器碗(31)である。釉調はオリブ黄色であり、腰部以下、露胎である。見込に目跡が認められる。

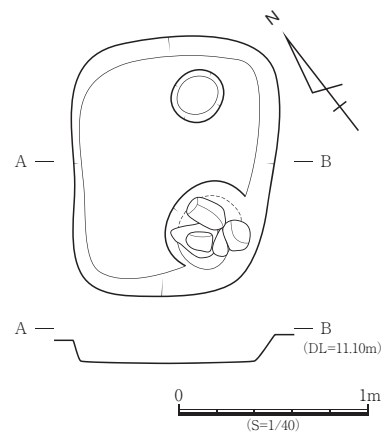


図4-21 SK35

SK36

調査区東部(B2-19-4)に位置する。平面形は不整長方形を呈し、長軸 1.65m、短軸 1.10m、深さ 23cmである。西部はテラス状を呈しており、他の遺構と重複している可能性がある。図示していないが、陶器片が出土している。

SK37(図4-22)

調査区中央部やや東寄り(B2-14-22)に位置する。他の遺構を切る。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸 1.20m、短軸 0.85m、深さ 21cmである。図示した遺物は陶器碗(32)、土師質土器小皿(33)である。32は黄色みがかかった灰白色の釉葉が薄くかかる。外面にはロクロ目が明瞭に残る。33の外底面には回転糸切り痕跡が認められる。図示していないが、他に土師質土器片、瓦片が出土している。

SK38(図4-22)

調査区中央部南寄り(B2-18-4)に位置する。平面形は不整形を呈し、一辺 0.8m、深さ 12cmである。図示した遺物は陶器甕(34)である。内面には格子目の叩き痕跡が認められる。

SK39(図4-23)

調査区中央部北寄り(B2-14-11・12)に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸 1.00m、短軸 0.95m、深さ 38cmである。図示した遺物は磁器碗(35)、陶器甕(36)である。35の畳付は釉剥ぎし、砂が付着する。腰部に文様、高台脇及び高台に圏線文を施す。見込には圏線文、コンニャク印判による五弁花を施す。36はロクロ成形で、外底面は凹凸が有る。内底面には黄白色の付着物が認められる。図示していないが、他に陶器片と弥生土器とみられる細片が出土している。

SK40

調査区東部(B2-14-24・25)に位置する。平面形は不整長方形を呈し、長軸 5.20m、短軸 3.25m、深

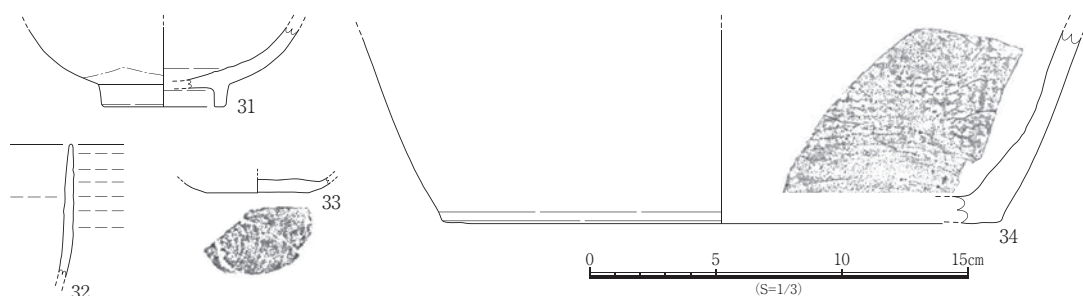


図4-22 SK35・37・38出土遺物実測図

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

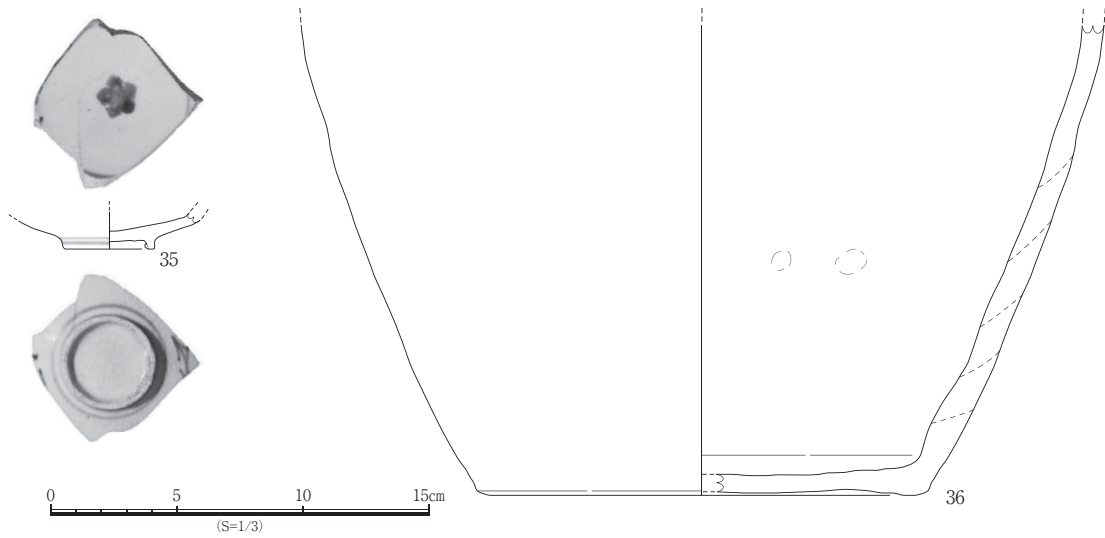


図4-23 SK39出土遺物実測図

さ 19 cmである。複数の遺構が重複している。図示していないが、陶器片、土師質土器片、瓦片と弥生土器とみられる細片が出土している。

SK41 (図4-24)

調査区東部(B2-14-24・B2-15-21)に位置する。平面形は不整長方形を呈し、長軸 2.80m、短軸 2.15m、深さ 27cmである。図示していないが、磁器片、瓦片、須恵器片が出土している。

SK42

調査区東部(B2-19-5)に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、直軸 1.7m、短軸 1.0m、深さ 22cmである。図示していないが、磁器片が出土している。

SK43 (図4-25)

調査区東部(B2-19-3・4)に位置する。平面形は不整形を呈し、長軸 2.5m、短軸 1.9m、深さ 7cmである。図示した遺物は磁器小杯(37)である。畳付には釉剥ぎを施す。図示していないが、他に瓦片、須恵器片が出土している。

SK44 (図4-25)

調査区中央部北寄り(B2-14-12)に位置する。平面形は溝状を呈し、長軸 3.95m、短軸 0.90m、深さ 54 cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトがブロック状に混じった明褐色細粒砂混じりシルトである。図示した遺物は青磁碗(38)である。外面に鎬蓮弁文を施す。

SK45

調査区南東部(B2-20-19)に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸の検出長 1.3m、短軸 0.9m、深さ 36cmである。図示していないが、陶器

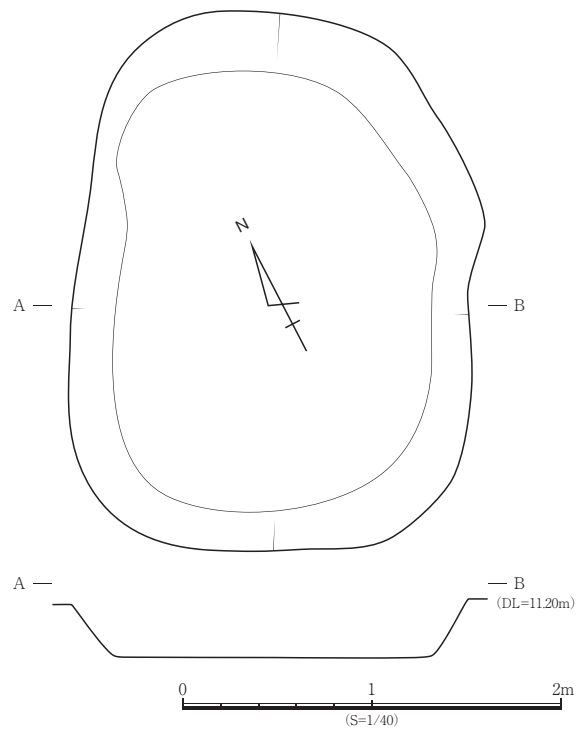


図4-24 SK41

片, 磁器片, 瓦片が出土している。

SK46

調査区南東部(B2-20-11・12)に位置する。平面形は不整形を呈し, 長軸2.75m, 短軸1.05m, 深さ12cmである。遺物は出土していない。

SK47

調査区南東部(B2-19-20)に位置する。平面形は溝状を呈し, 長軸の検出長2.15m, 短軸1.20m, 深さ7cmである。図示していないが, 瓦片が出土している。

SK48(図4-26)

調査区中央部北寄り(B2-14-1・2)に位置する。平面形は不整長方形を呈し, 長軸3.36m, 短軸1.52m, 深さ33cmである。図示した遺物は磁器碗(39)である。外面には風景文を描く。図示していないが, 他に瓦片, 須恵器片が出土している。

SK49(図4-26)

調査区中央部北寄り(B2-14-7)に位置する。平面形は溝状を呈し, 長軸1.46m, 短軸0.20m, 深さ6cmである。図示した遺物は磁器皿(40)である。高台内はちじれ状を呈する。釉調は灰白色であり, 腰部以下は露胎である。見込は蛇ノ目釉剥ぎし, アルミナ砂を塗布する。内面口縁部には流水文を描く。

SK50

調査区北部(B2-8-7・12)に位置する。SK23と重複する。底面にはSK23と同様に溝の一部が認められ, 形態及び規模が同じハンダ土坑が重複して作られていたと考えられる。平面形は不整形を呈し, 長軸2.30m, 短軸2.30m, 深さ13cmであるが, 上述のようにハンダ土坑と別の遺構が重複している可能性がある。遺物は出土していない。

SK57

調査区西部(B2-12-3)に位置する。ハンダ土坑の底面である。平面形は円形を呈し, 直径1.6m, 深さ3cmである。遺物は出土していない。

SK58

調査区西部(B2-12-3)に位置する。ハンダ土坑の底面である。長軸1.6m, 短軸0.9mの不整形に復元できる。深さは8cmである。遺物は出土していない。SK57と同規模のハンダ土坑が併設されていたと推測される。

SK61

調査区中央部(B2-13-23)に位置する。平面形は円形を呈し, 直径1.6mである。遺物は出土していない。

SK62

調査区中央部(B2-13-23)に位置する。平面形は円形を呈し, 直径1.6mである。SK61と併設され

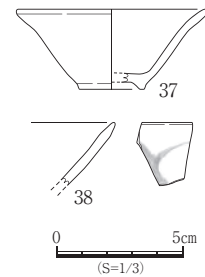


図4-25 SK43・44出土遺物実測図

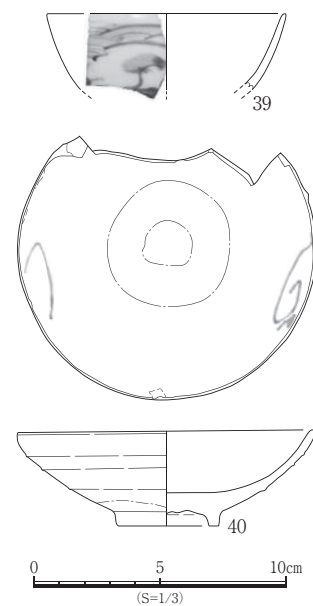


図4-26 SK48・49出土遺物実測図

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

ていたと推測される。遺物は出土していない。

SK66(図4-27)

調査区中央部やや東寄り(B2-14-18)に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、南西隅部が欠ける。長軸2.34m、短軸0.90m、深さ5cmである。遺物は出土していない。

SK67(図4-27)

調査区中央部やや東寄り(B2-14-18)に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、南西隅部が欠ける。長軸2.08m、短軸0.70m、深さ7cmである。遺物は出土していない。

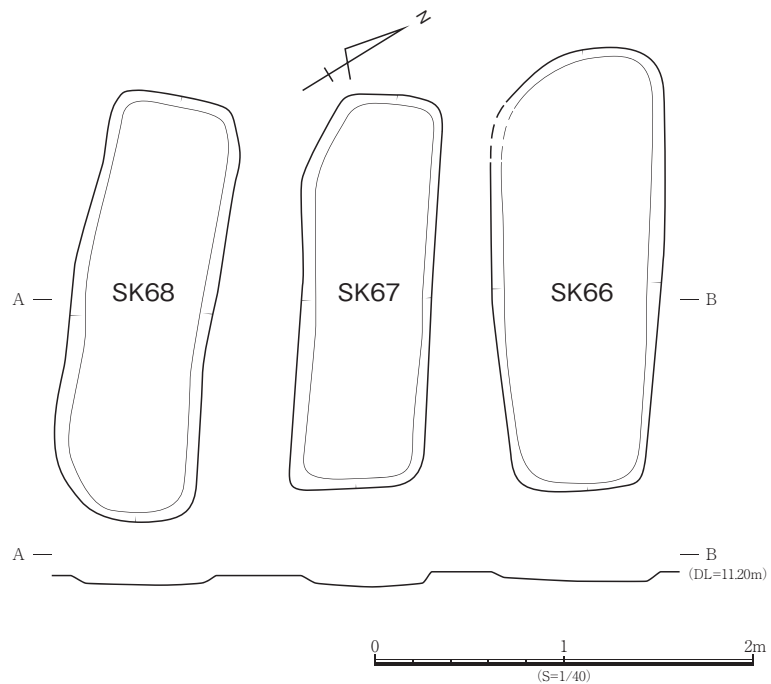


図4-27 SK66~68

SK68(図4-27)

調査区中央部やや東寄り(B2-14-18)に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸2.26m、短軸0.72m、深さ5cmである。遺物は出土していない。SK66～SK68は同規模であり、軸方向も一致している。

SK75

調査区東部(B2-19-3)に位置するハンダ土坑の底面である。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.4m、短軸1.1m、深さ12cmである。遺物は出土していない。

SK85

調査区東部(B2-19-10)に位置するハンダ土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.5m、短軸0.9m、深さ23cmである。遺物は出土していない。

SK86

調査区東部(B2-19-10)に位置するハンダ土坑の底面である。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.2m、短軸1.0mである。遺物は出土していない。

SK92(図4-28)

調査区東部(B2-20-7)に位置するハンダ土坑である。平面形は楕円形を呈し、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ39cmである。遺物は出土していない。

SK93

調査区南東部(B2-20-13)に位置するハンダ土坑の底面である。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸0.8m、短軸0.7mである。遺物は出土していない。

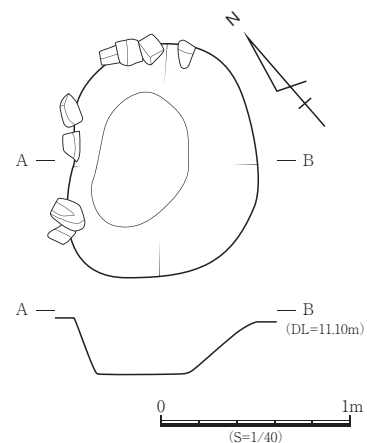
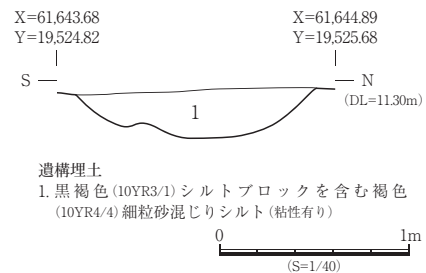


図4-28 SK92

(3) 溝

SD1(図4-29・30)

調査区南西部(B2-12-16)に位置する隅丸長方形を呈した土坑である。長軸4.0m, 短軸1.1m, 深さ13cmである。埋土は黒褐色シルトブロックを含む褐色細粒砂混じりシルトである。図示した遺物は土師質土器(41)である。器形は不明である。口縁部は緩やかに屈曲し, 口唇部は丸くおさめる。図示していないが, 他に陶器片や弥生土器とみられる細片が出土している。



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR3/1)シルトブロックを含む褐色(10YR4/4)細粒砂混じりシルト(粘性有り)

図4-29 SD1

SD2

調査区南西部(B2-12-21)に位置する。確認延長は4.5m, 幅0.6m, 深さは2cmである。埋土は黒褐色シルトである。図示していないが, 弥生土器片が出土している。

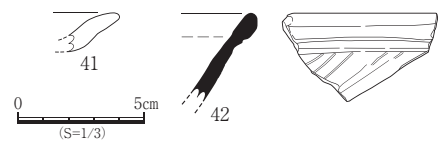


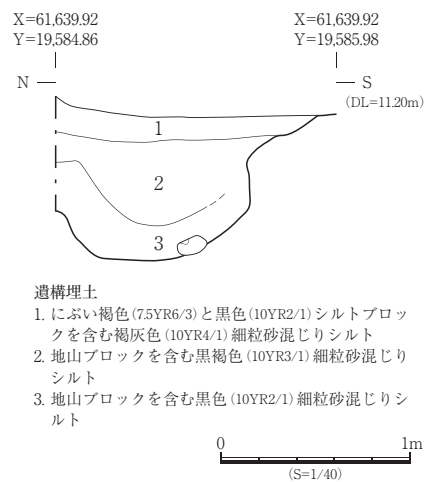
図4-30 SD1・3出土遺物実測図

SD3(図4-30)

調査区南西部(B2-17-6)に位置する。確認延長は15.7m, 幅2.8mである。深さは非常に浅かった。図示した遺物は須恵器壺(42)である。口縁部を肥厚させ, 口縁直下に強いヨコナデを施す。頸部に刻み目を施す。図示していないが, 他に陶器片, 土師質土器片, 瓦片や弥生土器とみられる細片が出土している。

SD5・10・13(図4-31~37)

調査区北辺(B2-15-11他)に沿う。I C区との堺を流れる現在の素掘りの小溝と同じ軌跡を描き, この小溝に先行する溝と考えられる。複数の溝跡が複雑に重複している。東部から掘削を始めたが, 掘り進めると様相が異なってきたため, 新たに遺構番号を付した。遺構番号では区切っているが, 両端が調査区外へと伸びる溝跡が複数重複しているものと考えられ, 現況の水路はこの溝跡を踏襲しているものと推測される。SD5の埋土は1から3層に分層できる。1層はにぶい褐色と黒色シルトブロックを含む褐灰色細粒砂混じりシルト, 2層は地山ブロックを含む黒褐色細粒砂混じりシルト, 3層は地山ブロックを含む黒色細粒砂混じりシルトである。SD10の埋土は灰黄褐色細粒砂混じりシルトである。SD13の埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。



遺構埋土
1. にぶい褐色(7.5YR6/3)と黒色(10YR2/1)シルトブロックを含む褐灰色(10YR4/1)細粒砂混じりシルト
2. 地山ブロックを含む黒褐色(10YR3/1)細粒砂混じりシルト
3. 地山ブロックを含む黒色(10YR2/1)細粒砂混じりシルト

図4-31 SD5

図示した遺物は磁器碗, 陶器碗, 磁器皿, 陶器皿, 土師質土器小皿, 土師質土器杯, 磁器鉢, 陶器鉢, 陶器匣鉢, 陶器挿鉢, 磁器瓶, 磁器香炉, 陶器蓋, 陶器甕, 土師質土器焙烙, 磁器紅皿, 磁器手塩皿, 陶器仏飯具, 瓦, 砥石, 叩石, 鉄釘である。43は磁器碗である。畳付には釉剥ぎを施す。外面には文様, 高台脇及び高台に圏線文を施す。44は磁器碗である。畳付には釉剥ぎを施す。外面には雨降り文, 腰部, 高台脇及び高台に圏線文を施す。具須の発色は悪い。45は陶器碗である。釉調は灰白色で, 腰部以下は露胎である。外面には文様の一部が認められる。46・47は色絵の陶器碗である。同一個体と考

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

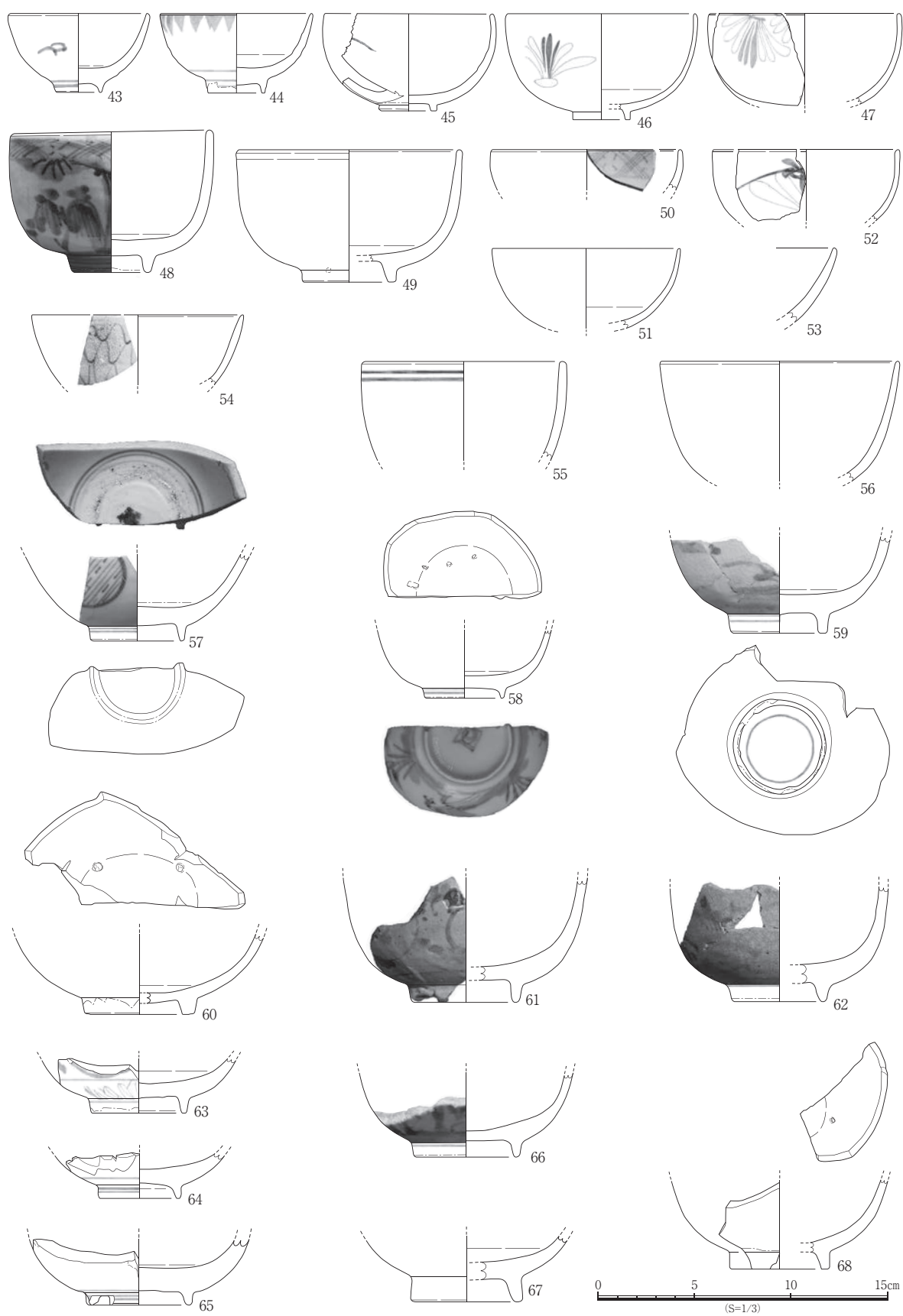


図4-32 SD5・10・13出土遺物実測図1

えられる。釉調は浅黄色である。腰部以下は露胎である。46の外面には赤褐色で花卉が描かれている。また、色素は抜けているが47にも同じく花卉が描かれている。48は磁器碗である。畳付には釉剥ぎを施す。外面には四方禳文、風景文、植物、圏線文が描かれている。49は陶器碗である。釉調はオリーブ色を呈し、畳付には釉剥ぎを施す。見込には目跡が認められる。50は磁器碗である。口縁部内面には四方禳文が描かれる。51は磁器碗であり、口鏤装飾を施す。52は色絵の陶器碗である。口縁部直下に強めのヨコナデが入る。外面には花卉を描くが一部の色素は抜けている。54は磁器碗である。外面に圏線文、網目文を描く。55は陶器碗である。外面口縁部に二重圏線文を施す。二次被熱により釉薬はピンホール状を呈し、破断面も被熱によるものか、やや赤みを帯びている。57は磁器碗である。見込は蛇ノ目釉剥ぎし、アルミナ砂を塗布する。畳付には釉剥ぎを施す。外面に丸文、腰部及び高台に圏線文を描く。見込には二重圏線文、コンニャク印判による五弁花文を施す。58は磁器碗である。畳付に釉剥ぎを施す。外面に草花文を描き、高台内に二重角枠内渦「福」を書く。59は磁器碗である。畳付には釉剥ぎを施し、砂が付着している。釉薬に若干ムラがある。外面に文様を描く。60は陶器碗である。釉調は透明感の有るオリーブ黄色である。高台、高台内は露胎である。見込には目跡が認められる。61は陶器碗である。畳付には釉剥ぎを施す。外面には唐草文、圏線文を描く。釉薬は被熱により溶解する。62は陶器碗である。畳付には釉剥ぎを施す。外面に文様を描くが、滲んで不明瞭である。貫入が認められる。63は陶器碗である。畳付には釉剥ぎを施す。外面に文様を描く。被熱により釉薬は溶解する。64は陶器碗である。畳付には釉剥ぎを施し、砂が付着する。外面腰部、高台及び高台内に圏線文を施す。65は陶器碗である。畳付には釉剥ぎを施し、高台に砂が付着する。高台脇、高台に圏線文を施す。67は陶器碗である。高台はやや高く、畳付には釉剥ぎを施す。釉調は浅黄色であり、貫入が認められる。煤が付着している。68は陶器碗である。釉調は浅黄色であり、高台以下は露胎である。見込には目跡が認められる。69は磁器筒形碗である。畳付には釉剥ぎを施し、高台に砂が付着する。外面には菊花文、腰部及び高台には圏線文を描く。内面口縁部には多重圏線文、見込には二重圏線文と中央に文様を描く。70は磁器筒形碗である。畳付には釉剥ぎを施す。外面は三分割し、区画内に草花文を描く。腰部に文様、圏線文を描き、高台には二重圏線文を描く。内面口縁部には四方禳文、見込には圏線文、コンニャク印判による五弁花文を施す。71は磁器皿である。釉調は灰白色であり、腰部以下は露胎である。見込には蛇ノ目釉剥ぎを施し、アルミナ砂を塗布する。内面には鉄絵により流水文を描く。72は陶器皿である。内面に文様が有る。摩滅が激しい。74は磁器皿である。畳付には釉剥ぎを施し、高台に砂が付着する。内面に文様を描く。外面、高台内に圏線文を描く。77は陶器皿である。高台の一部をアーチ状に抉る。外面は露胎であり、内面は刷毛塗りである。見込に砂目が認められる。78は陶器皿である。高台は細く高い。外面の一部に釉薬が認められることから腰部以下は露胎と考えられる。内面は刷毛塗りで、見込には蛇ノ目釉剥ぎを施し、砂を塗布する。79は磁器皿である。高台は細く高く、畳付には釉剥ぎを施す。内外面に文様を描く。外面腰部、高台、高台内に圏線文を施す。80は陶器小皿である。備前焼と考えられ、93の匣鉢とセットでもたらされたと考えられる。口縁端部内面にタールが付着しており灯明皿である。81～84は土師質土器小皿である。外底面には回転糸切り痕跡が認められる。84は底部が欠損している。色調は81～83が橙色を呈し、84はにぶい黄橙色を呈する。81～83の口唇部は面取り気味につまみ上げ、83の口唇部は丸くおさめる。86は磁器鉢である。口縁部は弱く屈曲してひろがる。畳付には釉剥ぎを施し、高台に砂が付着する。見込には蛇ノ目釉剥ぎを施し、砂が付着している。内面口縁部に草花文を描く。87は陶器鉢

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

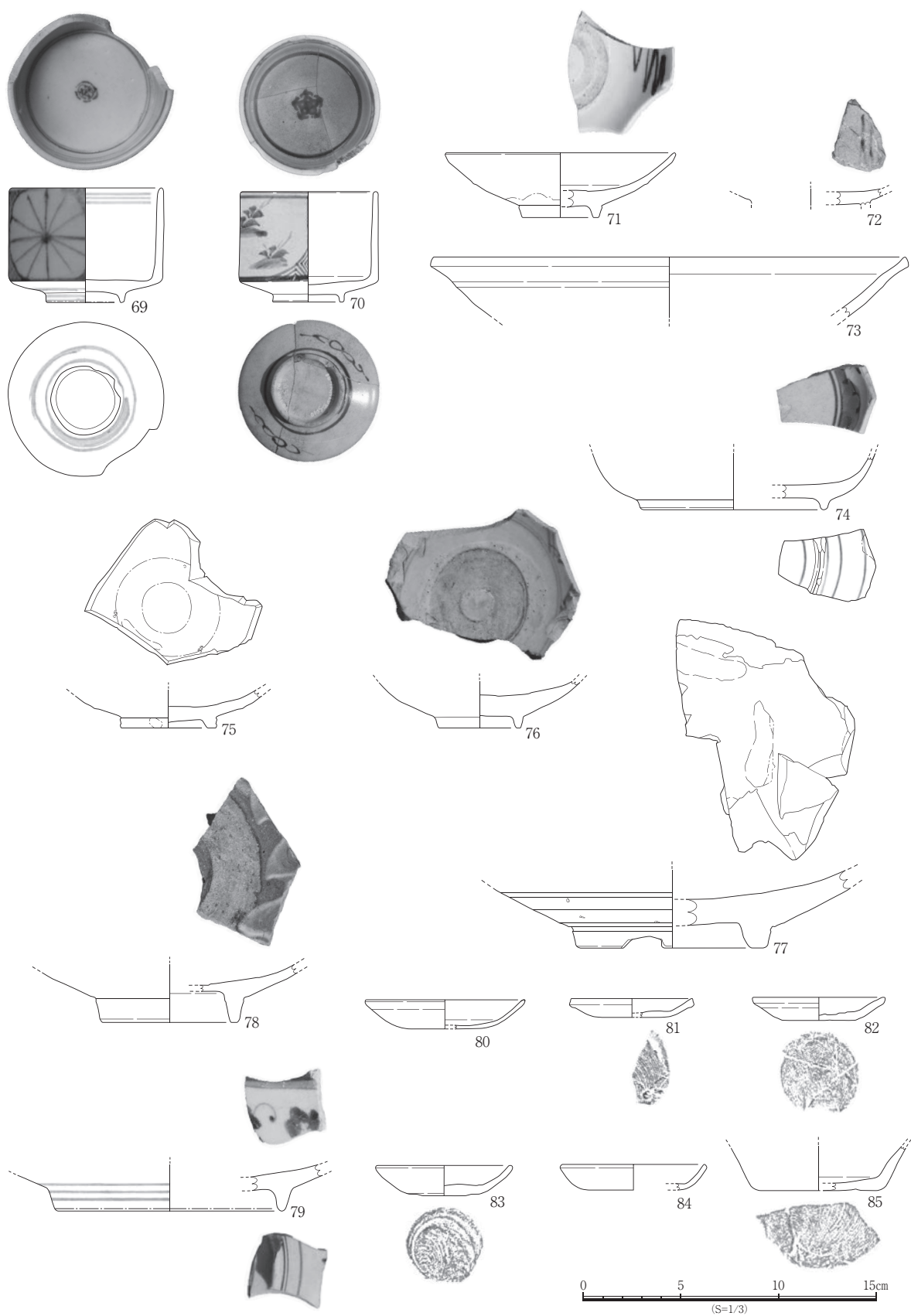


図4-33 SD5·10·13出土遺物実測図2

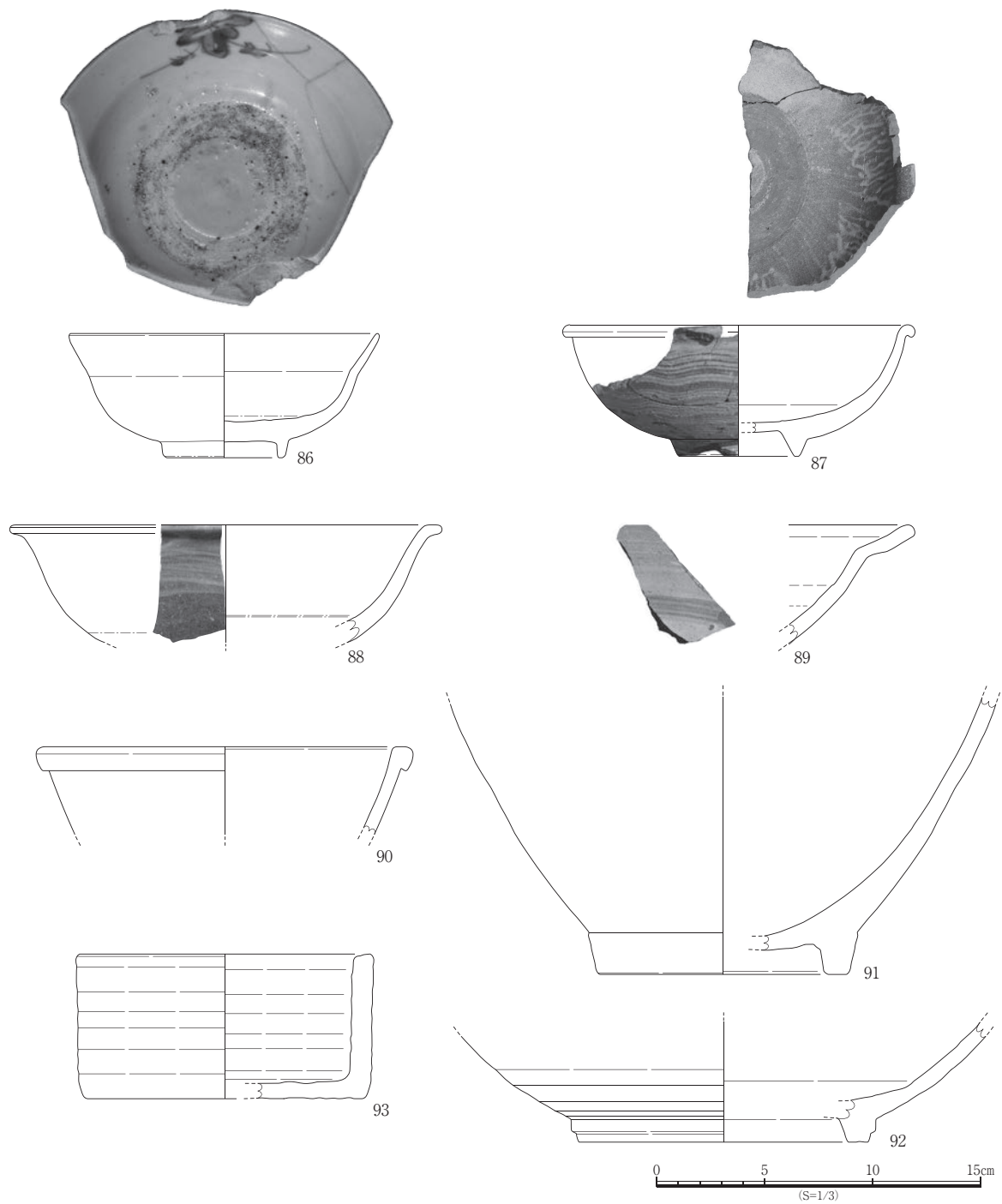


図4-34 SD5・10・13出土遺物実測図3

である。口縁端部を短く水平に外反させ、丸くおさめる。畳付には釉剥ぎ、見込には蛇ノ目釉剥ぎを施す。内外面に刷毛塗りを施す。被熱により釉薬は溶解している。88は陶器鉢である。口縁端部を水平に外反させ、口唇部は丸くおさめる。内外面は刷毛塗りである。外面腰部以下は露胎である。89は陶器鉢である。口縁部を外反させ、口唇部は丸くおさめる。内外面は刷毛塗りである。外面腰部以下は露胎である。90は陶器鉢である。口縁部の断面形は方形を呈する。内外面は刷毛塗りである。91は陶器鉢である。高台は露胎である。内外面は刷毛塗りである。外面下半は鉄釉である。92は陶器鉢で

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

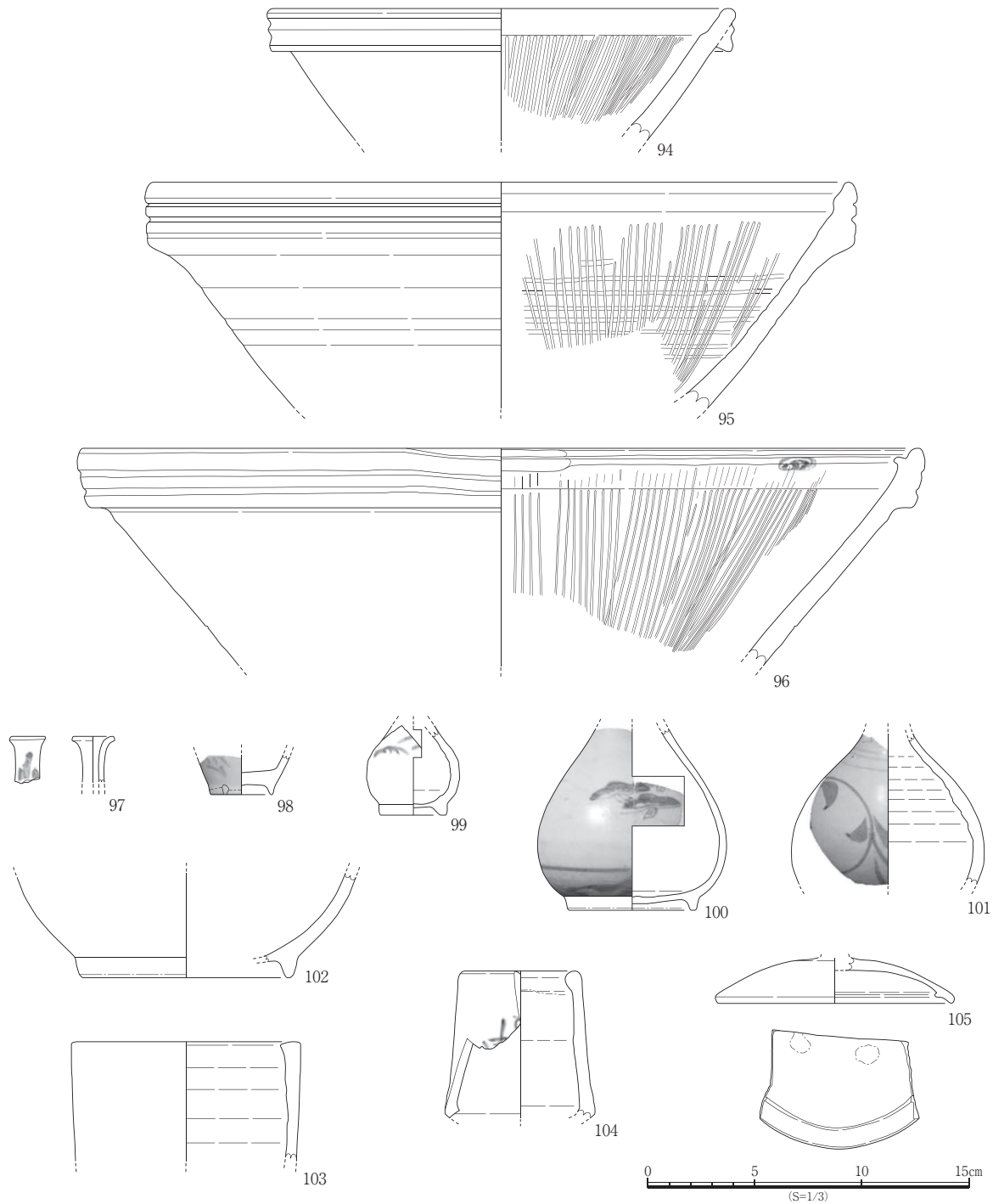


図4-35 SD5・10・13出土遺物実測図4

ある。外面残存部は露胎である。内面は刷毛塗りである。93は陶器匣鉢である。体部は直立し口唇部は平坦面を成す。内外面にはロクロ目が残存している。備前焼であり、80のような小皿の焼成時に匣鉢として使用されたものである。94は陶器播鉢である。口縁帯外面の凹線はシャープであり、口縁帯内面の凹線は弱い。内面には7条1単位のスリメを深く密に施す。スリメの上端はヨコナデにより切られる。堺産である。95は陶器播鉢である。口縁帯外面の凹線はシャープであり、口縁帯内面の凹線は弱い。口唇部は尖らせる。内面には7条1単位のスリメを密に施す。上端部のスリメは重複しない。

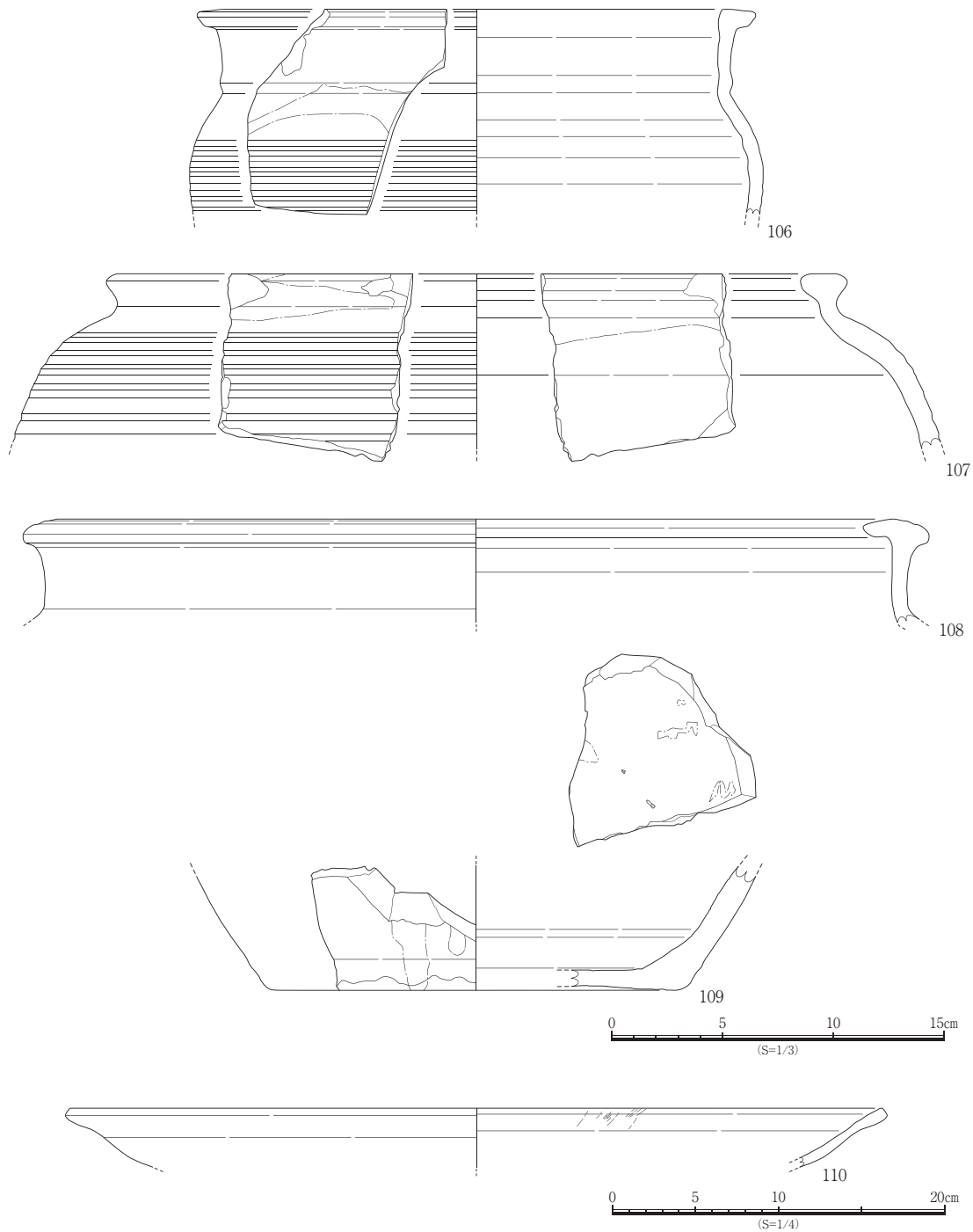


図4-36 SD5・10・13出土遺物実測図5

内面には横方向の凹線が数段巡る。96は陶器挿鉢である。口縁帯外面の凹線はシャープである。突出の弱い注口が付く。内面には突帯が一条巡り、体部には9条1単位のスリメを密に施す。上端部のスリメはわずかに重複しない程度である。口縁部内面に窯印が認められる。堺産である。97は磁器瓶である。外面には文様が描かれる。内面は口縁部には釉薬が認められるが頸部以下は露胎である。98は磁器瓶である。畳付には釉剥ぎを施す。外面に文様を描く。99は磁器瓶である。畳付には釉剥ぎを施す。内面は露胎である。外面に笹文を描く。100は磁器瓶である。畳付には釉剥ぎを施す。内面は露胎

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

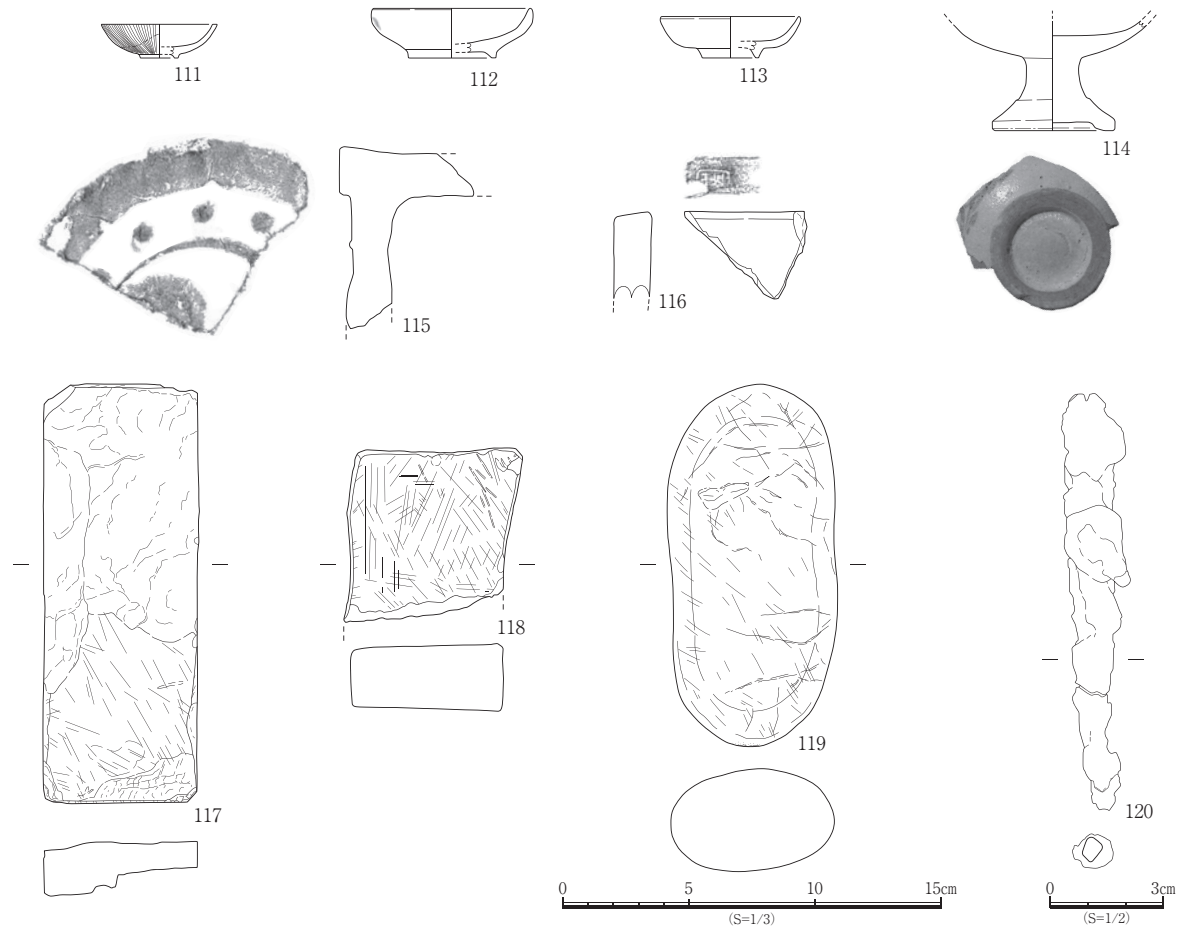


図4-37 SD5・10・13出土遺物実測図6

である。外面に松、腰部及び高台に圏線文を描く。101は磁器瓶である。内面は露胎でロクロ目が顕著に残る。外面に圏線文、草花文を描く。102は磁器瓶である。畳付には釉剥ぎを施す。内面は露胎である。103は磁器香炉である。青磁釉が施され、内面口縁部以下の釉薬は薄い。104は陶器香炉である。体部から口縁部にむかいですぼまり、口縁部はやや肥厚させる。釉調はにぶい黄色である。外面には文字の一部と思われるものが認められる。105は陶器蓋である。内面に短いかえりが付く。外面は鉄釉を施し、内面は露胎である。106は陶器甕である。口縁部は外方へ拡張させる。肩部に多条沈線文を巡らせる。内外面に鉄釉を施す。107は陶器甕である。口縁部を内外に拡張する。肩部に多条凹線文を巡らせる。釉調は灰オリーブ色を呈する。口縁部は露胎である。108は陶器甕である。口縁部を内外に拡張する。鉄釉を施し、口縁部は露胎である。109は陶器甕である。内面には灰オリーブ色の釉薬を施す。外面には鉄釉を施す。110は土師質土器焙烙である。口縁部はわずかに屈曲させ大きくひらき、口唇部は平坦面と成す。外面は激しく煤ける。讃岐岡本系である。111は磁器紅皿である。型打成形であり、口縁端部は平坦面となり、高台はややつぶれている部分がある。112は磁器手塩皿である。畳付には釉剥ぎを施す。外面に文様を描く。見込の器面は少し荒れる。113は磁器手塩皿である。畳付には釉剥ぎを施す。114は陶器仏飯具である。畳付には釉剥ぎを施す。釉調は灰黄色を呈し、杯部に文様を描く。115は軒丸瓦である。瓦当文様は右巻きの連珠三ツ巴文である。凸面はミガキ調整である。表面にはキラ粉がみられる。116は平瓦である。小口面に隅丸長方形の枠内に「山佐」の刻印

が認められる。117は砥石である。上下2面を使用している。側面の4面には鋸引跡が見られ、厚さ以外は流通時の大きさを反映している。使用状況から破損による分割後もそれぞれ別個で使用していると考えられる。118は砂岩製の砥石である。4面を使用している。小口面は未使用であり、全長以外は未使用状態で大きさを反映している。119は砂岩製の叩石である。棒状の自然石の先端部に敲打痕跡がわずかに認められる。図示していないが、他に陶器片、磁器片、土師質土器片、瓦片、須恵器片、砥石、弥生土器片が出土している。

SD6

調査区東部(B2-20-8)に位置する。確認延長は6.2m、幅0.4m、深さは14cmである。埋土は褐灰色細粒砂混じりシルト、明黄褐色粘土、にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトが混ざる。図示していないが、土師質土器片が出土している。

SD7

調査区東部(B2-20-14)に位置する。SK94を切る。確認延長は4.4m、幅0.5m、深さは29cmである。断面形は逆台形である。図示していないが、土師質土器片、須恵器片が出土している。

SD8(図4-38)

調査区西部(B2-8-13)に位置する。方形区画の南辺の溝跡である。東半12mの幅は0.7mで一定であるが、西半は幅も狭くやや蛇行する。別の溝跡の可能性もある。確認延長は23.8m、幅0.7m、深さは22cmである。図示した遺物は陶器碗(121)、磁器碗(122)、陶器甕(123)である。122は畳付に釉剥ぎを施す。高台脇に圈線文の一部がみられる。123は内外面に鉄釉を施す。図示していないが、他に陶器片、磁器片、土師質土器片が出土している。

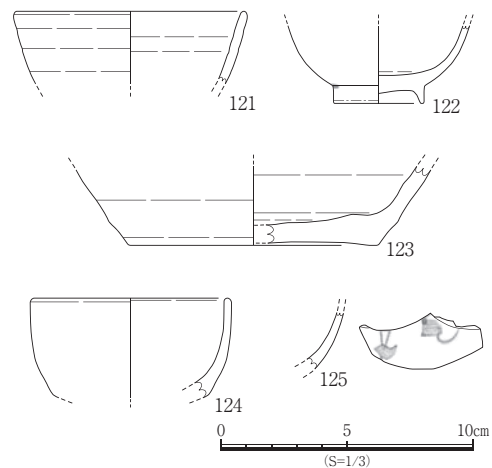


図4-38 SD8・9出土遺物実測図

SD9(図4-38)

調査区西部(B2-7-19)に位置する。I A区との堺の現況の道路と平行する。SD17と切り合うが先後関係は不明である。確認延長は18.0m、幅0.4m、深さは20cmである。

図示した遺物は陶器碗(124)、磁器碗(125)である。124は内外面に鉄釉を施す。125は外面に文様を描く。図示していないが、他に陶器片、磁器片、土師質土器片、瓦片が出土している。

SD11(図4-39)

調査区北部(B2-14-20)に位置する。SD10と接続する。確認延長は13.3m、幅0.4m、深さは9cmである。埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトである。図示した遺物は磁器碗(126)、陶器蓋(127)である。126は外面に圈線文、網目文を描く。127は内面にかえりが付き、かえり部は露胎である。外面に草花文を描く。図示していないが、他に土師質土器片、瓦片が出土している。

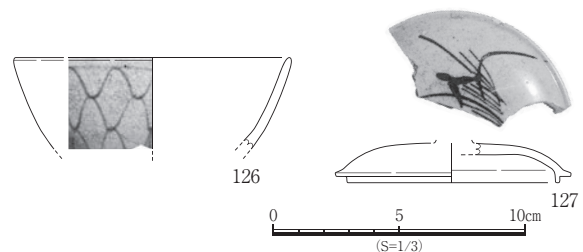


図4-39 SD11出土遺物実測図

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

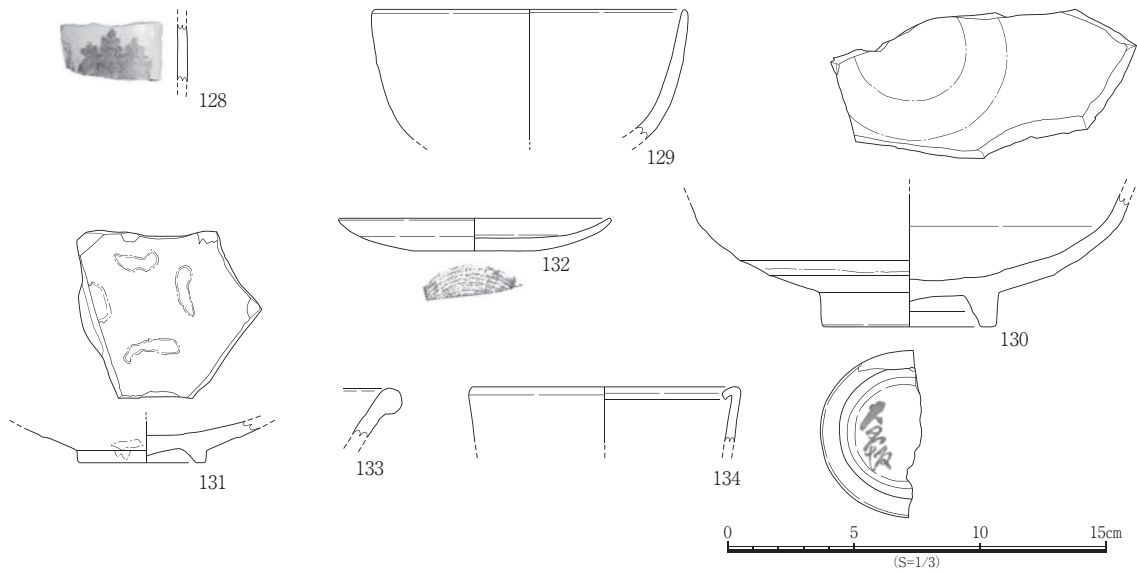


図4-40 SD12出土遺物実測図

SD12(図4-40)

調査区中央部(B2-13-13)に位置する。SD13に接続する。切合い関係があるかは不明である。確認延長は23.5m, 幅0.5m, 深さは33cmである。図示した遺物は磁器碗(128), 陶器碗(129), 陶器皿(130~132), 陶器鉢(133), 陶器香炉(134)である。128の外面にはコンニャク印判による桐文が認められる。130の外面には白泥を塗布し, 下半は露胎である。内面は鉄釉で, 見込には蛇ノ目釉剥ぎを施す。高台内に墨書が認められる。131の内面には灰釉を施し, 見込に砂目が4カ所認められる。外面は露胎である。132の外底面には回転糸切り痕跡が認められる。口縁端部にタールが付着しており灯明皿である。133は口縁端部を肥厚させ玉縁状を呈する。134は口縁部を内傾気味に折り曲げる。外面にはオリーブ黄色の釉薬を施す。内面は露胎である。図示していないが, 他に陶器片, 土師質土器片, 瓦片や弥生土器とみられる細片が出土している。

SD14

調査区北西部(B2-14-15)に位置する。SD10・11と重複するが先後関係は不明である。確認延長は0.5m, 幅0.4m, 深さは10cmである。埋土は黄灰色細粒砂混じりシルトである。図示していないが, 瓦片が出土している。

SD15(図4-41・42)

調査区中央部(B2-14-21)に位置する。SD25と重複するが先後関係は不明である。確認延長は13.6m, 幅1.0m, 深さは34cmである。埋土は2層に分層できる。1層は暗灰褐色粘性土, 2層は黒褐色粘性土ブロックを含む黄茶色粘性土である。図示した遺物は磁器皿(135)である。口縁部は屈曲し, 大きくひらく。釉調はやや緑色がかかった灰白色を呈し, やや厚めに施釉する。底部は露胎である。図示していないが, 他に陶器片, 土師質土器片, 弥生土器片が出土している。

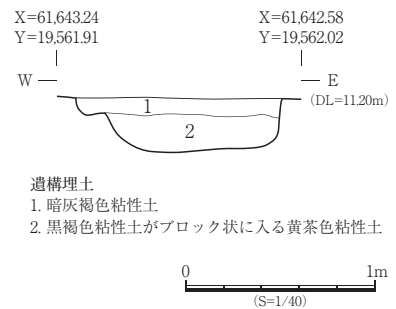
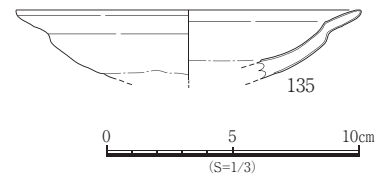


図4-41 SD15

SD16

調査区中央部(B2-13-22)に位置する。平面形は不整長方形を呈した土坑であり、長軸2.6m、短軸0.8m、深さは18cmである。図示していないが、瓦片が出土している。



SD17

調査区西部(B2-7-10)に位置する。SK15に切られる。SD19・24と重複するが先後関係は不明である。確認延長は7.5m、幅0.6m、深さは3cmである。図示していないが、磁器片、土師質土器片が出土している。

図4-42 SD15出土遺物実測図

SD18(図4-43)

調査区北部(B2-8-20)に位置する。確認延長は5.2m、幅0.8m、深さは31cmである。図示した遺物は磁器碗(136)、陶器碗(137)、磁器小杯(138)、陶器鉢(139)である。136は端反形で、内面に圈線文、文様を描く。137の釉調は灰釉であり、外面下半は露胎である。139の内面は刷毛塗りで、外面は露胎である。見込に砂目が認められる。図示していないが、他に陶器片、磁器片、土師質土器片、瓦片や弥生土器とみられる細片が出土している。

SD19(図4-43)

調査区中央部(B2-13-13)に位置する。SD20と重複する。さらに遺構番号は付していないが別の溝跡とも重複していることをセクションバンクの観察で確認している。確認延長は24.6m、幅0.4m、深さは19cmである。図示した遺物は陶器碗(140)、磁器碗(141)、陶器鉢(142)、瓦質土器鍋(143)である。140の畳付には釉剥ぎを施す。外面に圈線文、草花文を描く。被熱により釉薬が溶解している部分がある。141は外面に草花文を描く。142の残存部は露胎である。内面は使用により平滑となる。143は口縁部を緩やかに外反させ、口唇部は丸くおさめる。混入品である。図示していないが、他に陶器片、磁器片が出土している。

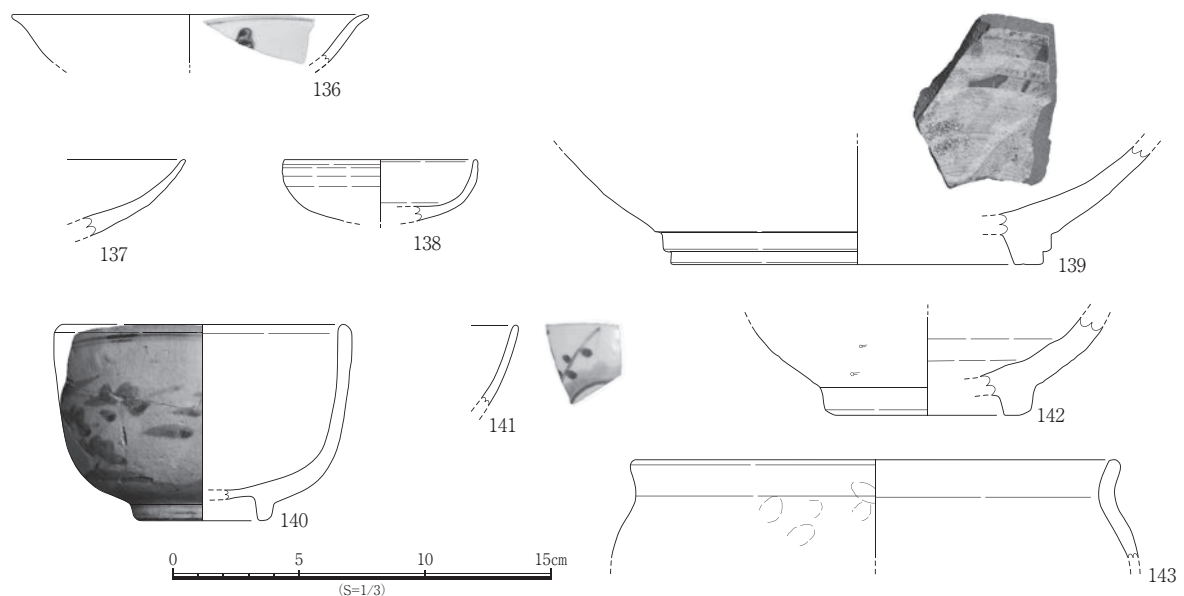


図4-43 SD18・19出土遺物実測図

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

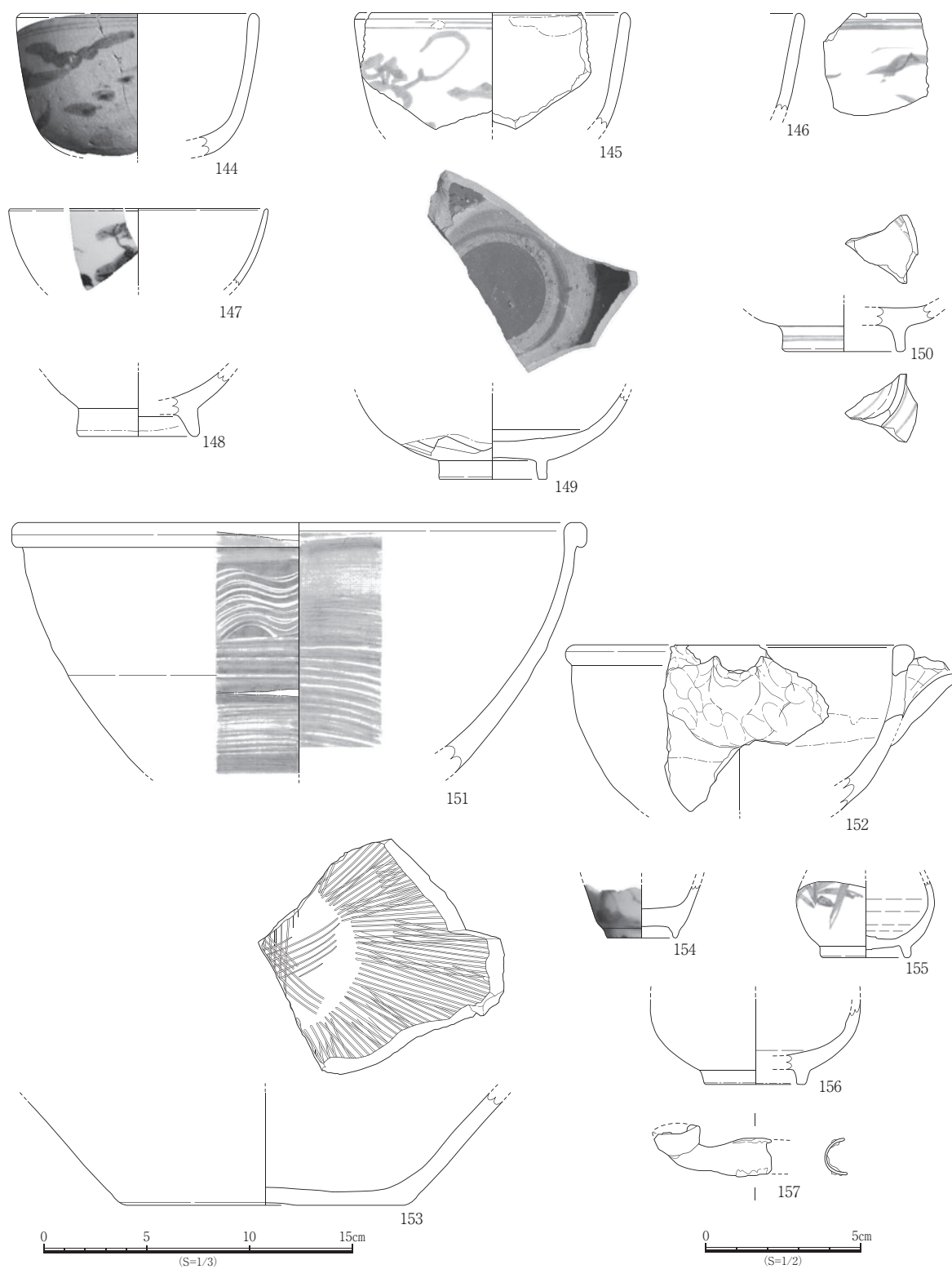


図4-44 SD20出土遺物実測図

SD20(図4-44)

調査区中央部(B2-13-13)に位置する。SD19と重複する。確認延長は12.5m、幅0.8m、深さは48cmである。図示した遺物は磁器碗(147)、陶器碗(144~146・148・149)、磁器皿(150)、陶器鉢(151)、陶器片

口鉢(152), 陶器搗鉢(153), 磁器瓶(154・156), 陶器瓶(155), 煙管の雁首(157)である。144は陶器碗である。外面に圈線文, 風景文を描く。被熱により釉薬が溶解している部分がある。145・146は絵唐津の碗である。外面に圈線文, 草花文を描く。釉薬は被熱により溶解している。147は磁器碗である。外面に松を描く。148は灰釉陶器碗である。畳付には釉剥ぎを施す。149は陶器碗である。内外面に鉄釉を施す。外面下半は露胎である。見込には蛇ノ目釉剥ぎを施す。150は磁器皿である。細く高い高台であり, 畳付には釉剥ぎを施す。見込, 腰部, 高台脇, 高台に圈線文を施す。器面に砂が付着している。151は陶器鉢である。口縁部を肥厚させ, 断面形は方形を呈する。内外面は刷毛塗りである。外面下半には鉄泥を塗る。口唇部は露胎である。152は陶器片口鉢である。口縁部を肥厚させ, 断面形は方形を呈する。器壁に穿孔し, 注口を手捏ねでつける。外面上半, 内面に鉄泥を塗布する。153は陶器搗鉢である。内面には6条1単位のスリメを密に施す。底部付近ではスリメが重複する。見込に米印状にスリメをいれる。154は磁器瓶である。畳付には釉剥ぎを施し, 高台には砂が付着する。外面には草花文を描く。155は陶器瓶である。内面は露胎である。畳付には釉剥ぎを施す。外面には草花文を描く。被熱により釉薬はやや溶解する。156は磁器瓶である。畳付には釉剥ぎを施す。外面に灰白色の釉薬を施す。内面は露胎である。157は煙管の雁首である。火皿にタバコが炭化して残存している。図示していないが, 他に陶器片, 磁器片, 土師質土器片, 瓦片, 弥生土器片が出土している。

SD21(図4-45・46)

調査区西部(B2-7-14)に位置する。北は調査区外へと伸びる。確認延長は18.1m, 幅0.4m, 深さは16cmである。埋土は1から3に分層できる。1層は淡茶色シルト, 2層はハンダを含む灰褐色粘性土, 3層は灰褐色粘性土である。図示した遺物は磁器皿(158・159), 陶器碗(160), 陶器皿(161), 土師質土器小皿(162~169), 瓦質土器火入(170), 砥石(171), 瓦(173), 古銭(174), 不明品(172)である。158は磁器皿である。見込には蛇ノ目釉剥ぎを施し, アルミナ砂を塗布する。高台は露胎である。内面に流水文を描く。ほぼ完形である。159は磁器皿である。青磁釉を施す。畳付には釉剥ぎを施し, 高台に砂が付着する。内面には片彫りで文様を描く。160は陶器碗である。釉調は透明感のあるオリブ灰色を呈する。内外面にはロクロ目が顕著に残る。161は陶器溝縁皿である。内面に刷毛塗りである。162~169は土師質土器小皿である。ロクロ成形で外底面には回転糸切り痕跡が認められる。169にはぶい黄橙色を呈する以外は橙色である。170は瓦質土器火入である。外底面の3カ所に短い脚が付く。内面にはナデ調整の痕跡が明瞭に残っている。ほぼ完形である。171は砂岩製の砥石である。薄く剥離し, 煤けている。172は軽石を加工したものである。扁平に加工し, 穿孔する。側面は尖らせている。173は右角瓦である。瓦当文様は均整唐草文である。刻印が認められるが, 行人偏が残っているのみである。枠はない。文字はやや大きい。174は寛永通宝である。図示していないが, 他に陶器片, 磁器片, 土師質土器片, 瓦片が出土している。

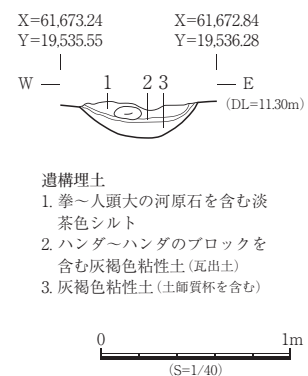


図4-45 SD21

SD22(図4-47)

調査区中央部(B2-14-11)に位置する。SK64を切る。SD13と重複するが先後関係は不明である。確認延長は16.4m, 幅0.3m, 深さは21cmである。図示した遺物は磁器皿(175)である。内面に流水文を描く。図示していないが, 他に弥生土器片が出土している。

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

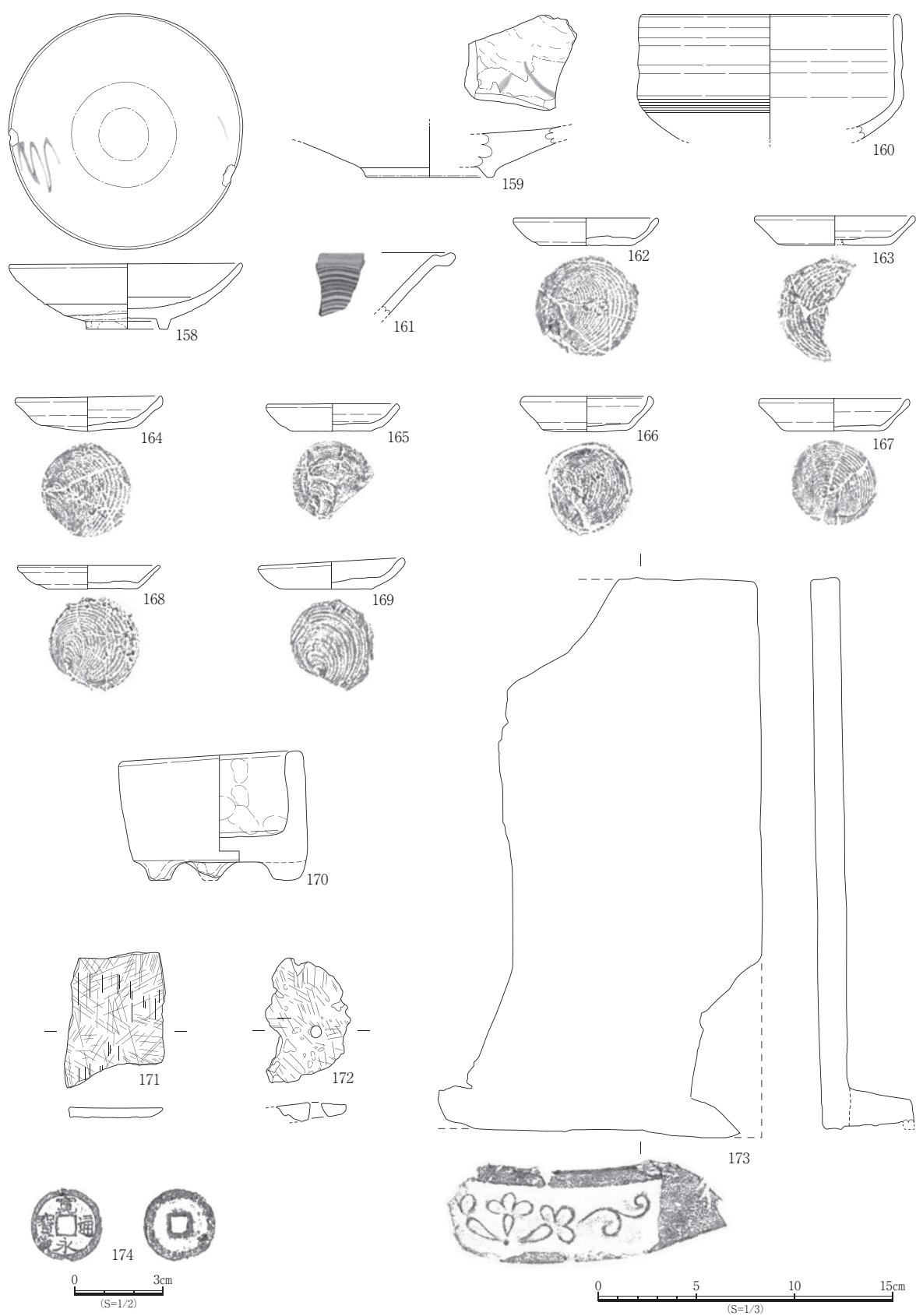
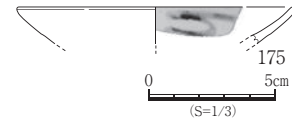


図4-46 SD21出土遺物実測図

SD23

調査区北西部(B2-8-7)に位置する。確認延長は9.8m，幅0.3m，深さは8cmである。遺物は出土していない。



SD24

調査区西部(B2-12-7)に位置する。SD17と重複するが先後関係は不明である。SD8に影響を受けている可能性がある。確認延長は10.1m，幅0.3m，深さは11cmである。遺物は出土していない。

図4-47 SD22出土遺物実測図

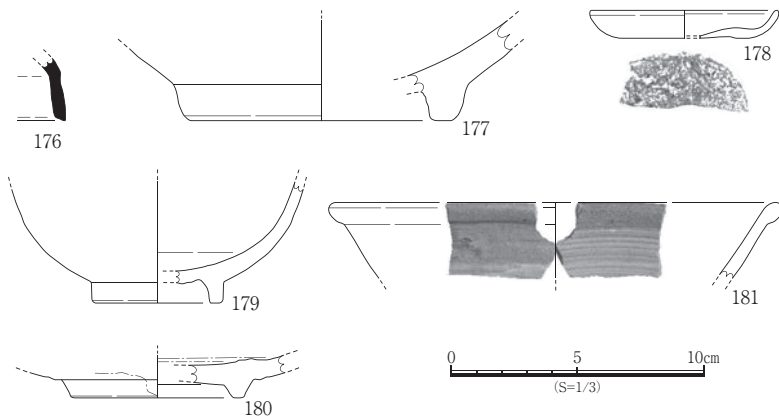
SD25

調査区中央部(B2-14-12)に位置する。SK31に切られる。SK44・49を切る。SD15と重複するが先後関係は不明である。確認延長は24.0m，幅0.3m，深さは11cmである。遺物は出土していない。

(4) 柱穴

P1

平面形は楕円形を呈する。長軸0.30m，短軸0.25m，深さは40cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトに褐色細粒砂混じりシルトが混ざる。図示していないが，陶器片，瓦片が出土している。



P2(図4-48)

平面形は円形を呈する。直径0.4m，深さは46cmである。図示した遺物は須恵器杯蓋(176)である。回転ナデ調整であり，口唇部は弱い凹状を呈する。稜は弱く丸みを帯びる。

図4-48 柱穴出土遺物実測図

P3(図4-48)

平面形は円形を呈する。直径0.65m，深さは7cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトに褐色細粒砂混じりシルトが混ざる。図示した遺物は陶器鉢(177)である。内面にはやや黄色みがかかった灰白色の釉薬を施し，外面には鉄釉を施す。高台は露胎である。

P4

平面形は溝状を呈する。長軸0.65m，短軸0.30m，深さは7cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトに褐色細粒砂混じりシルトが混ざる。図示していないが，陶器片が出土している。

P5

平面形は不整形円形を呈する。長軸0.35m，短軸0.30m，深さは28cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトに褐色細粒砂混じりシルトが混ざる。図示していないが，土師質土器片が出土している。

P6

平面形は楕円形を呈する。長軸0.35m，短軸0.20m，深さは35cmである。埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトに褐色細粒砂混じりシルトが混ざる。図示していないが，陶器片が出土している。

2. 検出遺構と遺物 (4) 柱穴

P7

平面形は楕円形を呈する。長軸0.35m, 短軸0.30m, 深さは17cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトに褐色細粒砂混じりシルトが混ざる。図示していないが, 土師質土器とみられる細片が出土している。

P8

平面形は円形を呈する。直径0.6m, 深さは33cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトに褐色細粒砂混じりシルトが混ざる。図示していないが, 須恵器とみられる細片が出土している。

P9(図4-48)

平面形は円形を呈する。直径0.25m, 深さは4cmである。図示した遺物は土師質土器小皿(178)である。ロクロ成形である。外面はやや摩滅する。

P10

平面形は円形を呈する。直径0.4m, 深さは40cmである。図示していないが, 須恵器片, 土師質土器片が出土している。

P11

平面形は楕円形を呈する。長軸0.5m, 短軸0.4m, 深さは53cmである。図示していないが, 陶器片が出土している。

P12

平面形は円形を呈する。直径0.35m, 深さは35cmである。図示していないが, 土師質土器片が出土している。

P13

平面形は楕円形を呈する。直軸約0.5m, 短軸約0.4m, 深さは49cmである。図示していないが, 陶器片と土師質土器片が出土している。

P14

平面形は円形を呈する。直径0.35m, 深さは41cmである。図示していないが, 土師質土器とみられる細片が出土している。

P15(図4-48)

平面形は楕円形を呈する。長軸0.6m, 短軸0.4m, 深さは15cmである。図示した遺物は灰釉陶器碗(179)である。高台以下は露胎である。見込に目跡が認められる。他に図示していないが, 弥生土器片, 土師質土器片が出土している。

P16

平面形は楕円形を呈する。長軸0.6m, 短軸0.4m, 深さは12cmである。図示していないが, 土師質土器とみられる細片が出土している。

P17(図4-48)

平面形は円形を呈する。直径0.25m, 深さは10cmである。埋土にはハンダ粒を多く含む。図示した遺物は陶器皿(180)で, 灰釉を施釉する。高台以下は露胎である。見込には蛇ノ目釉剥ぎを施す。

P18

平面形は円形を呈する。直径0.2m, 深さは39cmである。図示していないが, 須恵器片が出土している。

P19(図4-48)

平面形は不整形を呈する。長軸1.2m，短軸0.8m，深さは28cmである。図示した遺物は陶器鉢(181)である。口唇部は玉縁状を呈する。内外面，刷毛塗りである。

P20

平面形は楕円形を呈する。長軸1.15m，短軸0.85m，深さは14cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトに褐色細粒砂混じりシルトが混ざる。図示していないが，弥生土器片が出土している。

P21

平面形は楕円形を呈する。長軸0.85m，短軸0.50m，深さは64cmである。埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトに褐色細粒砂混じりシルトが混ざる。図示していないが，須恵器片が出土している。

P22

平面形は楕円形を呈する。長軸0.4m，短軸0.3m，深さは37cmである。図示していないが，陶器片が出土している。

(5) 遺物包含層等(図4-49)

図示した遺物は陶器碗(182・183)，磁器碗(184)，磁器皿(185)，陶器皿(186)，磁器瓶(187)，土師質土器小皿(188)，陶器瓶(189)，陶器播鉢(190)である。183は陶器碗であり，被熱により釉薬は溶解する。184は磁器碗である。畳付には釉剥ぎを施し，高台に砂が付着する。腰部，高台には紅色の圈線文が巡る。185は磁器皿である。高台内は露胎である。見込には蛇ノ目釉剥ぎを施し，アルミナ砂を塗布

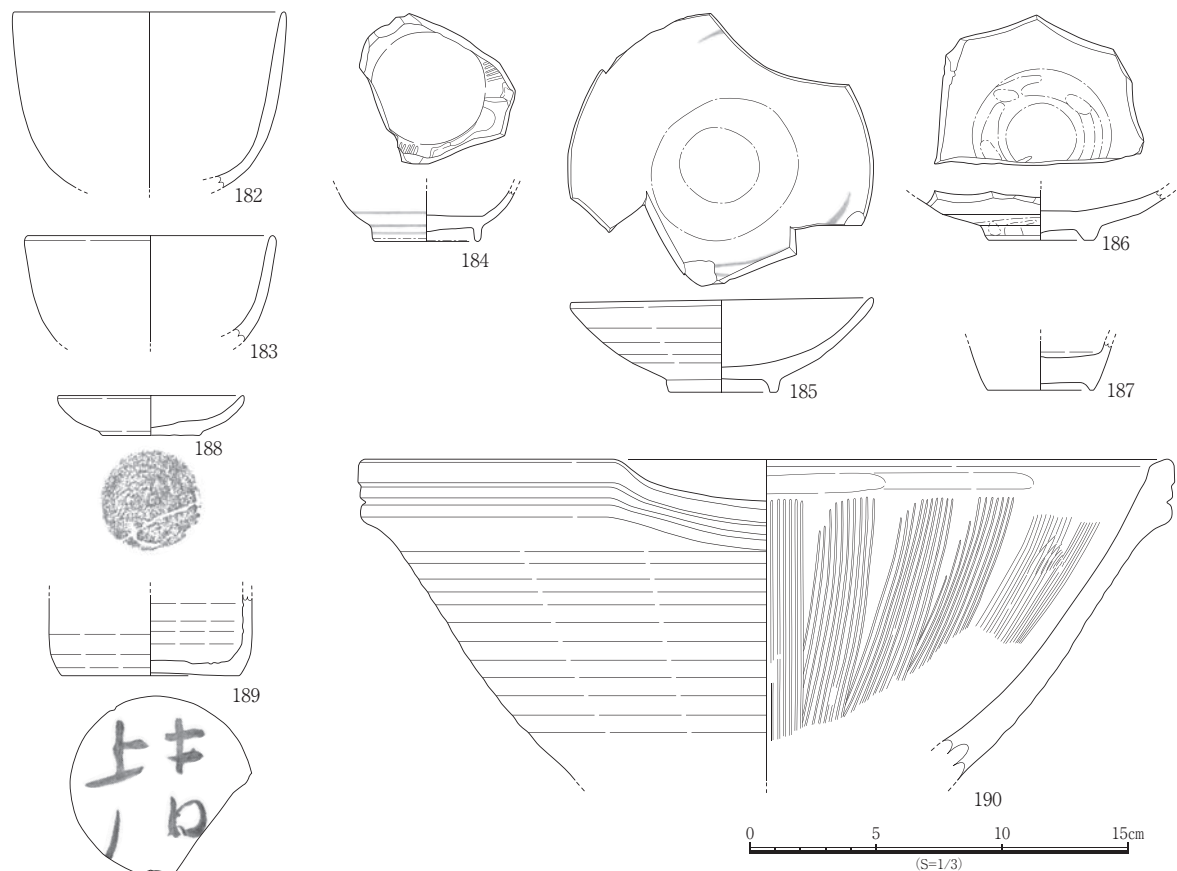


図4-49 遺物包含層等出土遺物実測図

3. 小結

する。畳付にもアルミナ砂が付着する。186は陶器皿である。高台は低く削り出される。内面には銅緑釉を施し、見込は蛇ノ目釉剥ぎである。外面の腰部以下は露胎である。187は磁器瓶である。畳付には釉剥ぎを施す。被熱により釉薬は溶解している。188は土師質土器小皿である。外底面には回転糸切り痕跡が認められる。189は陶器瓶である。外面には鉄釉を施し、内面及び外底面は露胎である。外底面には墨書が認められる。190は陶器播鉢である。口縁端部の一部を強くナデ、注口が作り出される。口縁帯外面には2条の凹線が巡る。内面には10条1単位のスリメを密に施す。また、スリメを施す工具を同心円に回転させ扇形に沈線をひく。備前焼である。

3. 小結

調査区内は遺構のほとんど認められないエリアと遺構の集中するエリアにわけることができ、遺構集中エリアはさらに3区分することができる。各遺構は出土遺物から概ね18世紀代のものと考えられるが、遺構の重複関係から2～3時期に細分できる。各遺構の基準軸は磁北から東へ約40度振った方向を採用しているものが多く、規格性が認められる。

西部は溝で囲まれた一辺約28mの屋敷地に復元でき、この屋敷地の南辺には溝(SD8・24)がある。この溝の延長ラインより南は遺構が極端に少なくなり、耕作地がひろがっていたものと推測される。北側の溝(SD5・10・13)は現況の素掘りの溝と平行し、両端とも調査区外へと延び、区画溝(SD9・21)の西側には現況の道路が走っている。これらの状況から現在の地割りは近世以降の地割りを踏襲しているものと推測される。溝で囲まれた屋敷地内には明確な掘立柱建物は確認できていないが、礎石建の建物が存在していた可能性がある。中央部と東部の間には数メートルの帯状に遺構密度の薄い部分が認められ、土塀や生け垣等の何らかの区画施設の存在を推測させる。

東部は掘立柱建物3棟、ハンダ土坑等が認められる。ハンダ土坑は3基が東西方向に並列し、掘立柱構造の上屋を伴う。この北側には掘立柱建物(SB1)があり、同一の棟方向を持ち、両建物の配置から有機的な関係を有する。

第V章 IC区

1. 調査の概要と基本層序

(1) 調査の概要

IC区の住所は野市町東野 1141 で、調査前は水田として利用されており、面積は2,265㎡である。近世の屋敷跡で、調査区を画する現畦畔の東・西・南の畦に沿うように区画溝が検出された。調査区の中央部は遺構密度が希薄で、掘立柱建物や土坑などの諸遺構は東部と西部に

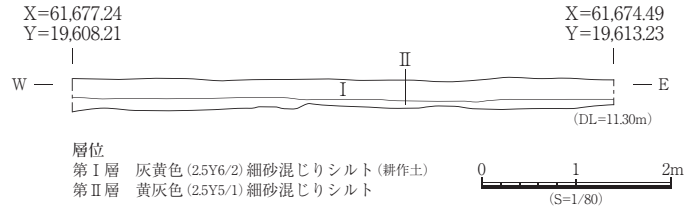


図5-1 調査区北壁セクション図

濃密に分布する。遺物包含層はほとんど形成されておらず現地表の耕作土を除くと近世遺構の検出面となっている。近世の屋敷地で掘立柱建物8棟、土坑75基、溝13条、ピット多数が検出されている。全体的に検出面が浅いことから現代攪乱が多く残り具合は余りよくない。

(2) 基本層序(図5-1)

第I層 耕作土である。灰黄色(2.5Y6/2)細砂混じりシルトで層厚40cm前後を測る。

第II層 黄灰色(2.5Y5/1)細砂混じりのシルトで層厚は5~10cmである

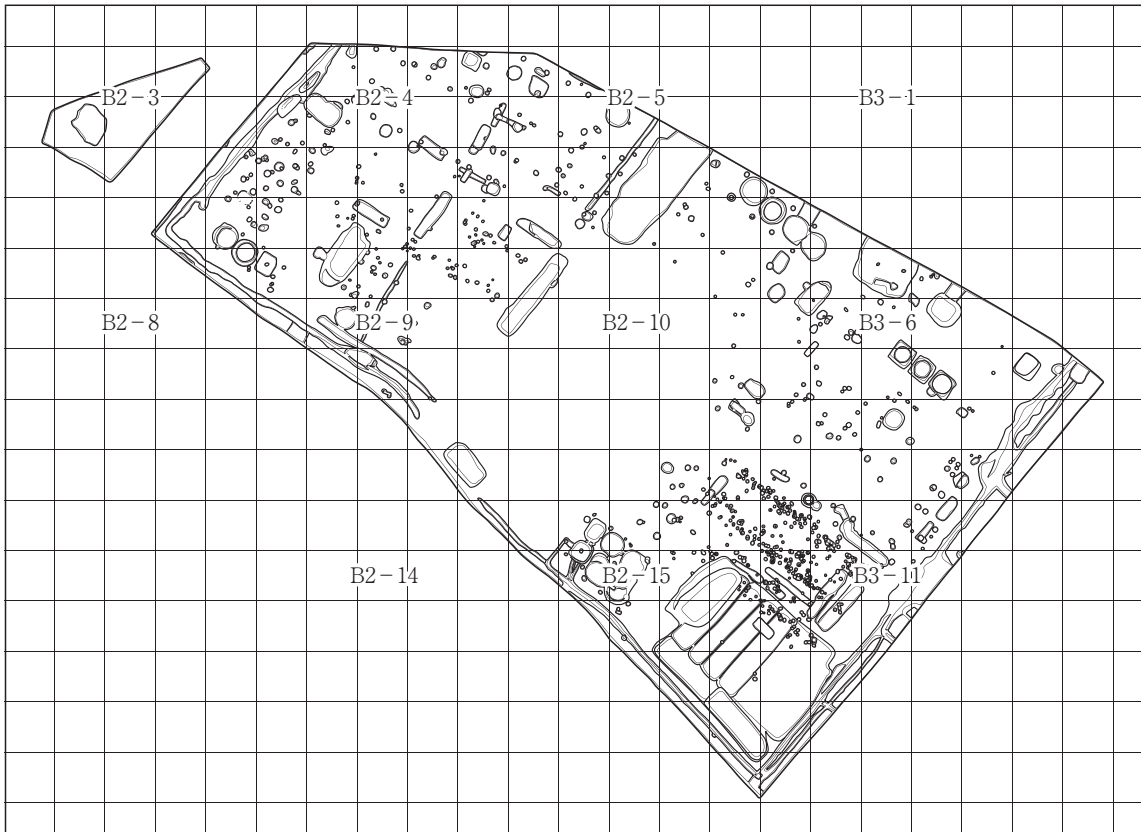


図5-2 調査区グリッド設定図

2. 検出遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

SB1(図5-3)

調査区の西南隅に位置する。桁行4間(7.84m)梁行1間(3.60m)の南北棟で軸方向はN-40°-EでSB2と重複するが先後関係は不明である。柱穴間は平側で2.0m, 妻側では3.6m前後である。柱穴掘方は概ね円形を呈し径40~60cmであるがP1とP5は楕円形を呈し長軸80~90cm, 深さ20~60cmを測る。遺物は認められない。

SB2(図5-4・5)

桁行4間(7.36m)梁行1間(3.00m)の南北棟で軸方向はN-40°-Eである。SB1より小振りでありその内側に入って完全に重複している。柱穴間は平側で1.8~3.0m, 妻側では3.0m前後である。柱穴掘方は径30cm程の円形, 長軸50cm前後の楕円形である。深さは20~50cmである。P5からは図示したような礫(1)が床面に置かれていた。35.0×26.9×12.6cmの砂岩礫で礎盤と考えられるが上面が煤けている。

SB3(図5-6・7)

調査区西部に位置する。桁行4間(8.6m)梁行1間(4.8m)の東西棟で軸方向はN-28°-Eである。柱穴間は平側で2.0~2.4m, 妻側では後である。柱穴掘方は径30cm程の円形, 長軸60cm前後の楕円形である。深さは20~40cmである。遺物はP8の埋土から磁器染付小碗(2)が出土している。

SB4(図5-8)

調査区北部に位置する。桁行3間(5.6m)梁行2間(3.7m)の南北棟で軸方向はN-35°-Eである。柱穴間は平側, 妻側ともに1.9mである。柱穴掘方は径30cm程の円形, 深さは20cm前後である。

SB5(図5-9)

SB4と大部分重複している。桁行3間(5.6m)梁行1間(3.6m)の南北棟で軸方向はN-35°-Eである。柱穴間は平側で1.8~1.9m, 妻側では3.6m前後である。柱穴掘方は径30cm程の円形から長軸

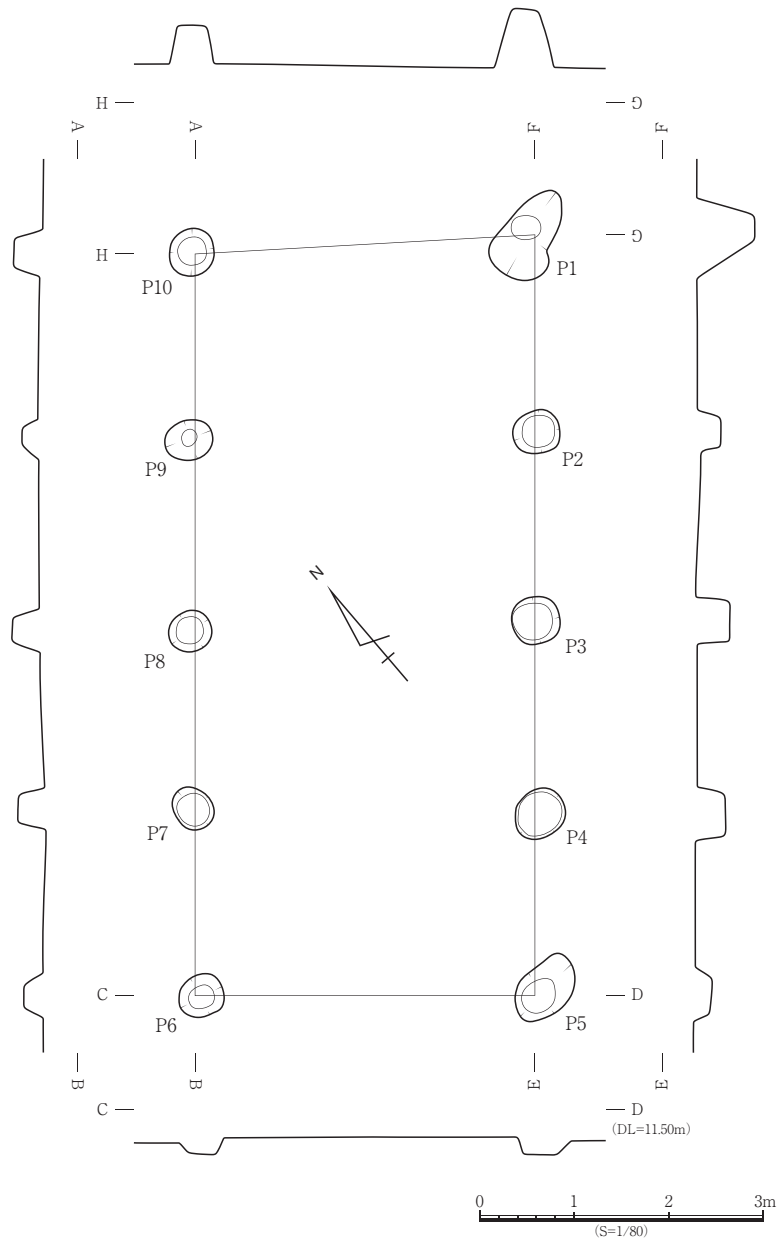


図5-3 SB1

60 cm前後の楕円形である。深さは20～40cmである。

SB6(図5-10・11)

調査区の東端に位置する。桁行2間(3.8m)梁行1間(3.8m)の南北棟で軸方向はN-37°-Eである。柱穴間は平側で1.8～2.0m, 妻側では3.8m前後である。柱穴掘方は径40～60cm程の円形, 深さは40cm前後である。遺物はP1埋土中から磁器染付碗の口縁部細片(3)が出土している。

SB7(図5-10・11)

調査区東部の南よりに位置する。桁行2間(3.8m)梁行1間(3.0m)の南北棟で軸方向はN-40°-Eである。柱穴間は平側で2.0m, 妻側では3.0m前後である。柱穴掘方は径30～50cm程の円形である。深さは40cm前後である。遺物はP3の埋土中より小型砥石(4)が, P6の埋土中から肥前内野山窯産の銅緑釉を施した陶器小皿底部(5)が出土している。

SB8(図5-12)

調査区の西よりにある。桁行2間(3.6m)梁行1間(3.0m)の南北棟で軸方向はN-34°-Eである。柱穴間は平側で1.8m, 妻側では3.6m前後である。西側の側柱はSD2と重複している。柱穴掘方は径30～50cm程の円形, 深さは30cm前後である。

(2) 柵列

SA1(図5-12)

SB7の西側に位置する。4穴, 3間分の柵列である。N-42°-Eの方向を有す。柱穴間は1.9mで掘方は径40cm前後の円形, 深さは40～50cmである。掘立柱建物の掘方と同様である。

(3) 土坑

SK1(図5-13)

調査区の西(B2-9-7)に位置する。楕円形状を呈し長軸5.48m, 短軸2.48m, 深さ20cmである。埋土は小礫を含む灰黄褐色細粒砂混じりシルトである。埋土中から近世陶磁器(6～9), 瓦の細片, 弥生後期土器細片, 須恵器細片, 近世瓦片が出土している。6は肥前産磁器染付け小皿である。口縁部は輪花形を呈する。7は肥前産磁器の蓋である。型押成形で外面には陰刻による縦線が施されている。8は肥前産磁器染付中碗である。外面は折れ松葉と圏線, 内面は雲と二重圏線を描き, 見込は蛇ノ目状

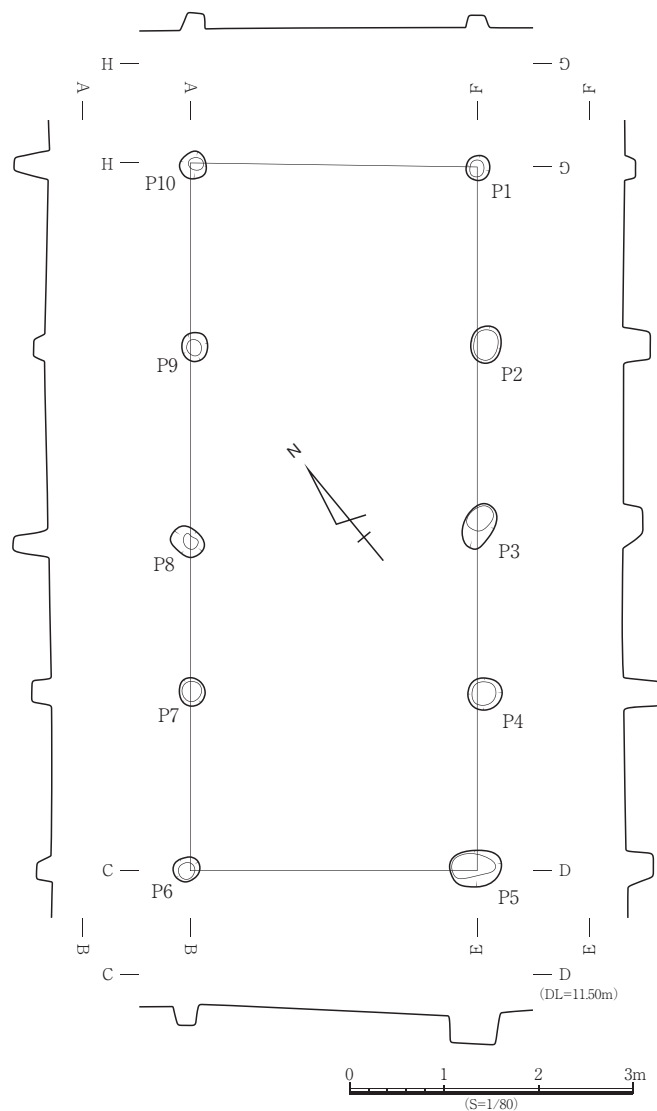


図5-4 SB2

2. 検出遺構と遺物 (3) 土坑

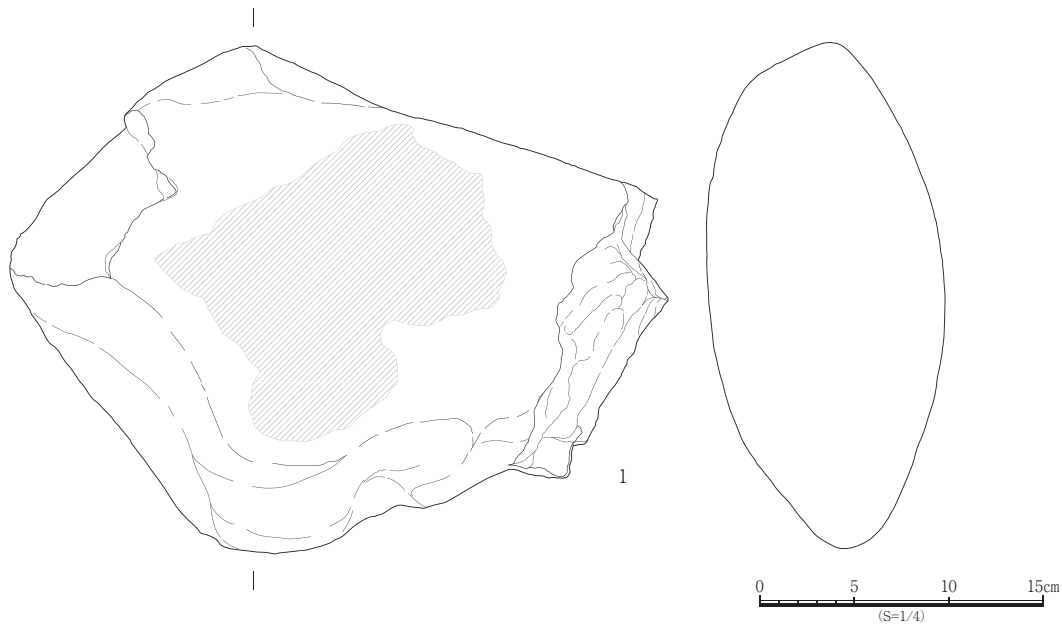


図5-5 SB2出土遺物実測図

の釉剥を施す。9は陶器播鉢の底部である。内面は使用による摩耗が顕著である。

SK2(図5-13)

SK1の北隣(B2-9-3)に位置する。長方形を呈し長軸3.1m, 短軸0.9m, 深さ10cmである。埋土は褐灰色細砂混じりシルトに黄褐色粘土の地山がブロック状に入っている。西方の壁際にはピット状の落ち込みがある。遺物は見られない。

SK3(図5-14)

SK2の東隣(B2-9-4)にSK2と直行するように位置する。長方形を呈し長軸4.3m, 短軸1.0m, 深さ18cmである。埋土は褐灰色細砂混じりシルトである。遺物は土師器・須恵器の細片が少量出土しているが、図示できるものはない。

SK4(図5-14)

SK3の9.0m東(B2-10-6)に長軸を平行して位置する。長方形を呈し長軸7.8m, 短軸1.5m, 深さ40cmである。中央部と南部に1.9mを隔てて河原石の石積みが見られる。どのような目的で石積みが行われたのかは不明である。土坑埋土は明黄褐色粘土の地山ブロックを含んだ灰黄褐色細砂シルトと黒色細砂混ざりシルトである。遺物は肥前産陶器鉢(10)他, 土師器細片が出土している。10は内面上半に白化粧土刷毛目を施す。

SK5(図5-14)

SK4の北端(B2-10-1)に直行するように位置する。長楕円形状を呈し長軸4.00m, 短軸0.88m, 深さ50cmである。埋土は褐灰色シルトと黒褐色シルトに黄褐色粘土の地山がブロック状に入っている。近代攪乱と考えられるが, 肥前系磁器染付小皿(11)が出土している。内面に丸文を施し高台には粗砂粒が付着する。

SK7(図5-15)

SK3の北(B2-4-20)に位置する。長方形を呈し長軸2.60m, 短軸0.84m, 深さ14cmである。埋土は灰黄褐色細砂混じりシルトである。遺物は見られない。

SK8(図5-15)

SB3と切り合っている(B2-4-19)が先後関係は不明である。長方形を呈し長軸2.34m, 短軸0.90m, 深さ28cmである。埋土は灰黄褐色細砂シルトに橙色シルトのブロックが入っている。遺物は見られない。

SK10(図5-15)

調査区北部(B2-4-15)に位置する。楕円形を呈し長軸1.18m, 短軸1.00m, 深さ5cmである。埋土は褐灰色細砂混じりシルトに黄褐色粘土の地山がブロック状に入っている。近代攪乱の可能性がある。遺物は見られない。

SK11(図5-15)

調査区西部(B2-4-19)に位置する。円形を呈し径0.9m, 深さ6cmである。埋土は褐灰色細砂混じりシルトである。埋土から肥前産陶器中碗(12)が出土している。

SK12(図5-15)

調査区西部(B2-4-17)に位置する。SB3と重複するが先後関係は不明である。隅丸方形を呈し長軸0.90m, 短軸0.84m, 深さ15cmである。埋土は褐灰色細砂混じりシルトである。埋土から砥石が2点(13・14)出土している。13は頁岩製で, 14は砂岩製である。

SK13(図5-16)

調査区西部の南寄り(B2-9-12)に位置する。円形を呈し径1.8m, 深さ30cmである。埋土は1層が灰黄褐色細砂混じりシルトに黄褐色のハンダブロックが入る。2層がにぶい黄褐色細砂混じり粘土である。近世陶磁器細片が出土している。

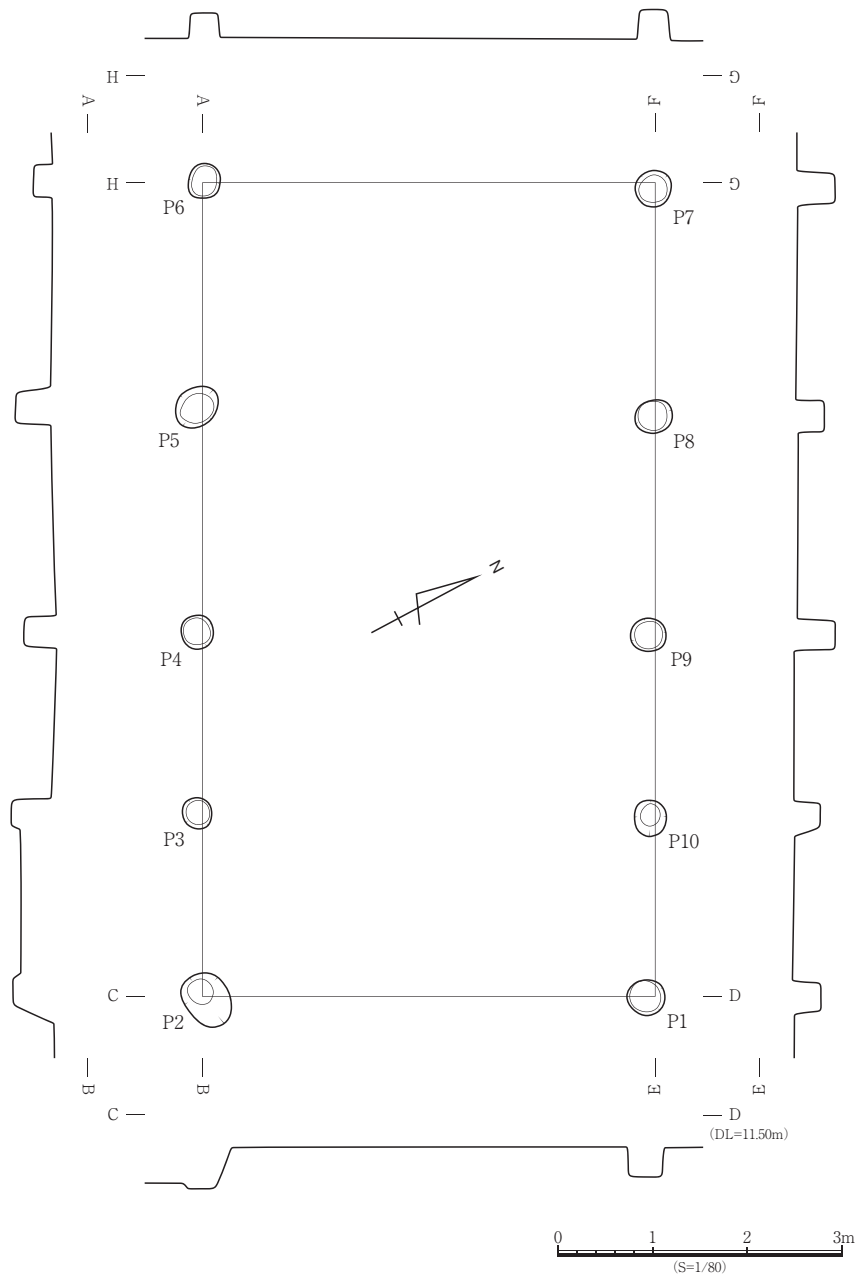


図5-6 SB3

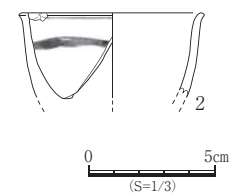


図5-7 SB3出土遺物実測図

2. 検出遺構と遺物 (3) 土坑

SK14(図5-16)

調査区北部(B2-5-11)に位置する。円形を呈し径1.1m, 深さ20cmである。埋土は褐灰色細砂混じりシルトである。埋土中から砥石(15)が出土している。泥岩質の石材で大きく欠損しているが未使用と考えられる。一つの面に針先のような細い工具で「大坂○上」と刻まれている。

SK16(図5-16)

調査区西北部(B2-4-17)に位置する。隅丸長形状を呈し長軸3.12m, 短軸2.20m, 深さ34cmである。埋土は1層が暗褐色粘性土に黄褐色の風化礫を含む。2層は暗褐色粘性土に明赤褐色の粘性土グロックを含む。3層はにぶい黄褐色粘性土である。各層序はブロック状に堆積している。遺物は埋土中から平瓦や近世陶磁器片が出土している。

SK18(図5-16)

調査区西北部(B2-4-13)に位置し、SB3と重複しているが先後関係は不明である。不整形を呈しいくつかの小土坑やピットが切り合っていることも考えられる。長軸1.53m, 短軸1.50m, 深さ50cmである。埋土は褐灰色細砂層混じりシルトである。遺物は陶器鉢の口縁部細片(16)の他、近世磁器細片が出土している。

SK19(図5-17)

調査区西隅(B2-8-5)に位置する。SK20・21とは位置関係から見て、共存して機能していたものと考えられる。円形を呈し、径1.94m, 深さ24cmで、西側が段状に掘られている。埋土は1層が褐色粘性土, 2層が黄褐色粘性土, 3層が暗褐色粘性土で、各層とも拳～人頭大の礫が見られる。埋め戻しの際に入ったものと思われる。遺物は見られない。

SK20(図5-17)

SK19の東隣(B2-8-10)にある。円形を呈し径2.0m, 深さ26cmである。壁に沿って10～20cm幅のテラスがドーナツ状に巡っている。埋土は1層が褐色粘性土とSK19で見た2層・3層が堆積している。各層ともに拳～人頭大の河原石を含んでいる。遺物は見られない。

SK21(図5-17)

SK20の東隣(B2-9-6)にある。長方形を呈し長軸1.83m, 短軸1.48m, 深さ17cmである。暗灰褐色シルトの埋土を除くとハンダが張られた床面が現れ、床面中央部に径25cm, 深さ10cmの穴が設けられている。床面にトレンチを入れて断面観察を行った。1層がハンダで厚さ2～3cm, 2層が黒褐色粘

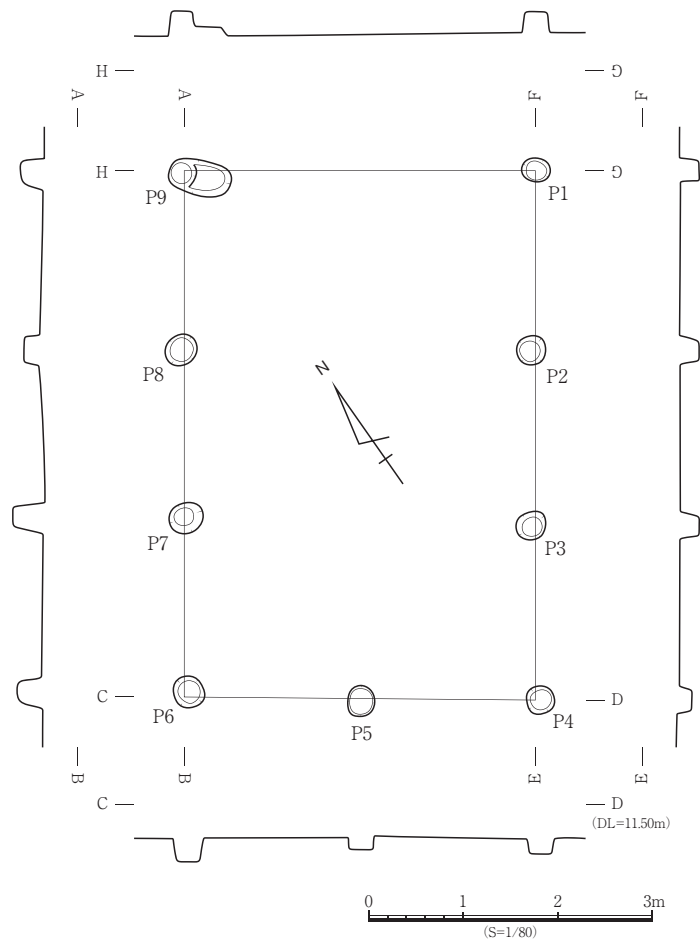


図5-8 SB4

性土でレンズ状に堆積している。3層が黄褐色粘性土で地山である。遺物は土師質土器小皿の完形(17)が床面中央付近から出土している。

SK22(図5-17)

調査区西部(B2-3-25)にある。SB1及びSB2の内側に位置する。楕円形を呈し長軸1.2m, 短軸0.9m, 深さ8cmである。埋土は黒褐色粘性土で遺物は見られない。肩部に拳大の河原石を並べている。SB1あるいはSB2の付属施設である可能性も考えられる。

SK24(図5-18)

調査区南西隅(B2-8-9)で黒褐色の埋土を持つ遺構の一部を検出したのみである。形状などは不明であるが、埋土中から陶器甕細片(18)と陶器中碗(19)が出土している。

SK27・36・39・42(図5-19・21)

調査区東部に位置し4基が並列している。SK19～21と同様に同時に機能したものと考えられる。4基の土坑を挟むように径30～60cmのピットが3間分並んでいるが覆い屋根の柱穴であろう。柱間距離は2.2～2.5mである。

SK27は円形を呈し径2.2m, 深さ60cmである。埋土は1層が褐灰色粘性土, 2層が褐色粘性土で拳から人頭大の河原石を多く含んでいる。埋め戻しに際して入れられたものであろう。遺物は埋土中から出土した染付磁器皿または鉢(20)を図示し得た。この他、土師器・須恵器の細片, 平瓦片, 陶磁器片, ガラス片が出土している。近代に属する可能性がある。

SK42はSK27の東隣に位置する。円形を呈し径2.12m, 深さ50cmを測る。埋土は1層が黒褐色シルト, 2層が黒褐色シルトに1～10cm大の河原石を含み, 3層は黄褐色粘性土で河原石を多く含む。床面は壁際が幅20cm, 深さ5cm程深く掘られている。遺物は磁器染付小皿(21), 砥石(25)が出土している。

SK39はSK42の東隣にありSK36と接している。円形を呈し径2.08m, 深さ80cmである。埋土は1層が黒褐色粘性土, 2層がオレンジ色の粘性土がブロック状に入る灰黄褐色粘性土, 3層が砂岩・風化礫を含むいぶい黄橙色粘性土, a層は垂直に立上がり明黄褐色粘性土でSK36との壁となっている。埋土中から砥石(24)の他, 近世陶磁器や瓦細片が出土している。

SK36は円形で径2.08m, 深さ70cmである。埋土は1層が灰黄褐色粘性土, 3層が明黄褐色粘性土, 6層が橙色粗砂層である。2層の灰黄褐色粘性土, 4層の黄橙色シルト～粘性土, 5層の風化礫を含む明黄褐色粘性土は壁土として貼られている。遺物は埋土中から青磁染付碗(22), 陶器甕(23)の他に平

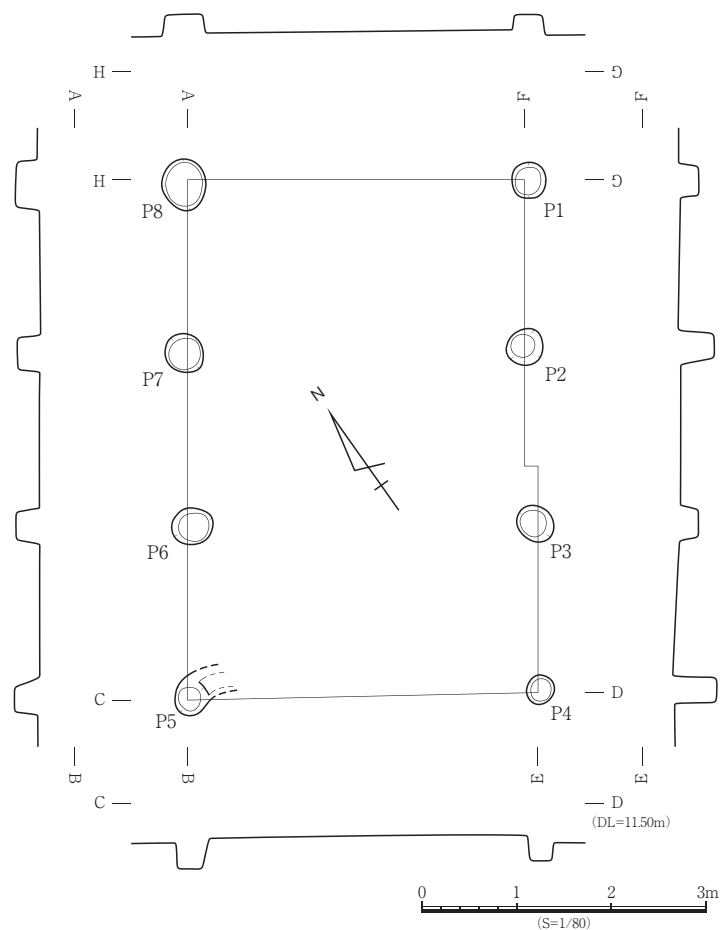


図5-9 SB5

2. 検出遺構と遺物 (3) 土坑

瓦片が出土している。本例を含め4基の土坑は肥溜めと考えられる。

SK30(図5-20)

調査区北の東寄り(B2-5-18)に位置する。円形を呈し径1.96m, 深さ40cmである。埋土は1層が明黄褐色粘性土がブロック状に入る灰黄褐色粘性土, 2層が明黄褐色粘性土, 3層が黄褐色粘性土の地山層である。遺物は認められない。

SK31(図5-20)

調査区中央部の北寄り(B2-4-25)に位置する。隅丸方形を呈し長軸1.08m, 短軸0.94m, 深さ30cmである。埋土は褐色粘性土に明黄褐色粘性土がブロック状に入る。遺物は認められない。

SK33(図5-22)

調査区南部(B2-14-5)に位置する。隅丸長方形で長軸3.73m, 短軸1.90m, 深さ60cmである。ハンダと河原石を使った手のこんだ造りの土坑である。断面船底状の素掘りの土坑を掘った後, 床面と壁に厚さ20cmの暗褐色粘土を置き, その上に拳~人頭大の河原石を床と壁に貼付けている。その後, 拳大の河原石を混ぜたハンダで厚さ25cm程埋め, 更にもその上面に河原石を密集させてハンダ上面を埋め尽くしている。区画溝と長軸が平行することから屋敷に伴う遺構と考えられるが, その機能や目的については不明である。

SK34(図5-22)

調査区の南東部(B3-11-16)に位置する。長方形を呈し長軸1.86m, 短軸0.86m, 深さ20cmである。埋土は灰黄褐色粘性土に黄橙色粘性土

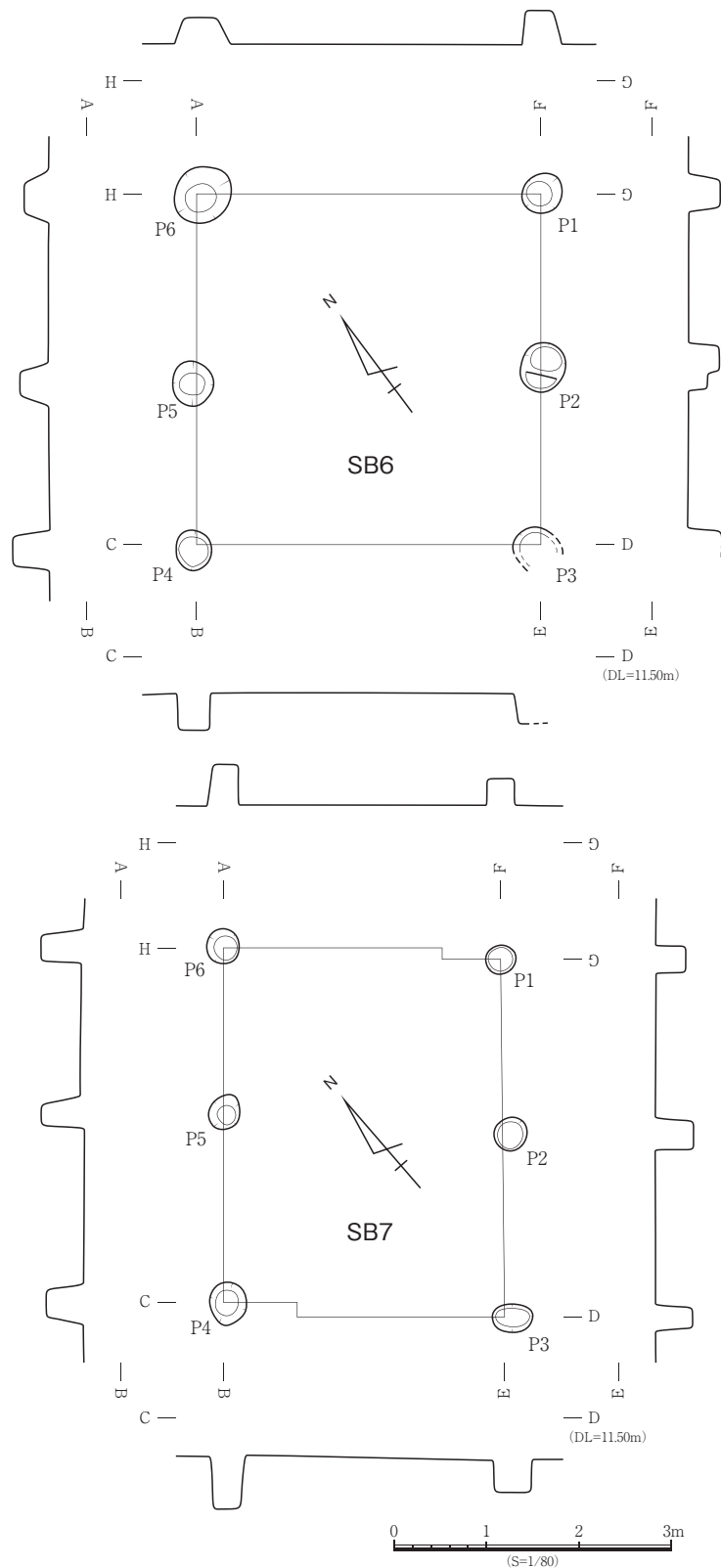


図5-10 SB6・7

がブロック状に入る。遺物は、土師質土器細片と炭化物を含む。

SK37(図5-22)

調査区の東部(B3-6-6)に位置する。隅丸方形を呈し長軸1.45m, 短軸1.2m, 深さ18cmを測る。埋土は黒褐色粘性土に褐色粘性土がブロック状に入る。遺物は土師質土器細片が少数出土している。

SK38(図5-23)

調査区の東部(B3-6-7)に位置する。不整形を呈し長軸3.18m, 短軸1.80m, 深さ44cmである。埋土は黒褐色粘性土に黄褐色シルトがブロック状に入る。長軸40cm余の大きな河原石が埋土中に見られる。埋土中から近世陶磁器細片の他に弥生後期末の土器や須恵器細片が出ているが図示できるものはない。

SK40(図5-23)

調査区の東部(B3-6-6)に位置する。隅丸長方形を呈し南西隅をピットに切られている。長軸1.60m, 短軸1.15m, 深さ23cmである。埋土は黒褐色粘性土に褐色粘性土がブロック状に入る。磁器小碗(26)が出土している。

SK41(図5-24)

調査区東部(B3-6-8)にある大きな土坑で北部は調査区外に出ている。確認プランは方形を呈し長軸4.8m, 短軸3.4m以上を測り深さは50cmである。床面に小ピットがある。埋土は1層が褐色シルト, 2層が黄褐色シルトをベースにオレンジ~黄色の粘性土がブロック状に入る。遺物は磁器染付碗(27~29)の他, 瓦片が多く出土している。27・28は中碗で, 28は外面に笹文, 見込にコンニャク印判を施す。29は広東碗である。

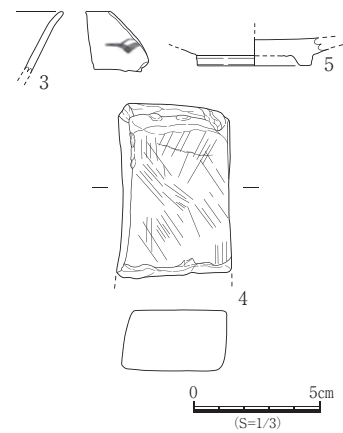


図5-11 SB6・7出土遺物実測図

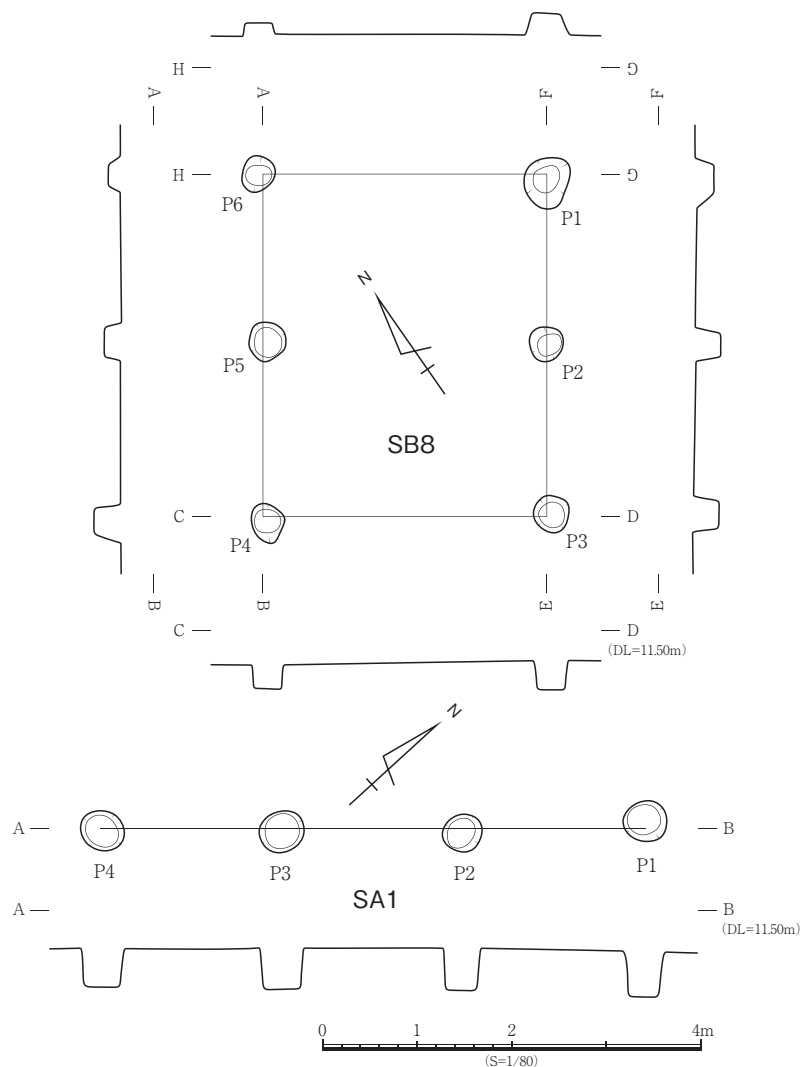


図5-12 SB8, SA1

2. 検出遺構と遺物 (3) 土坑

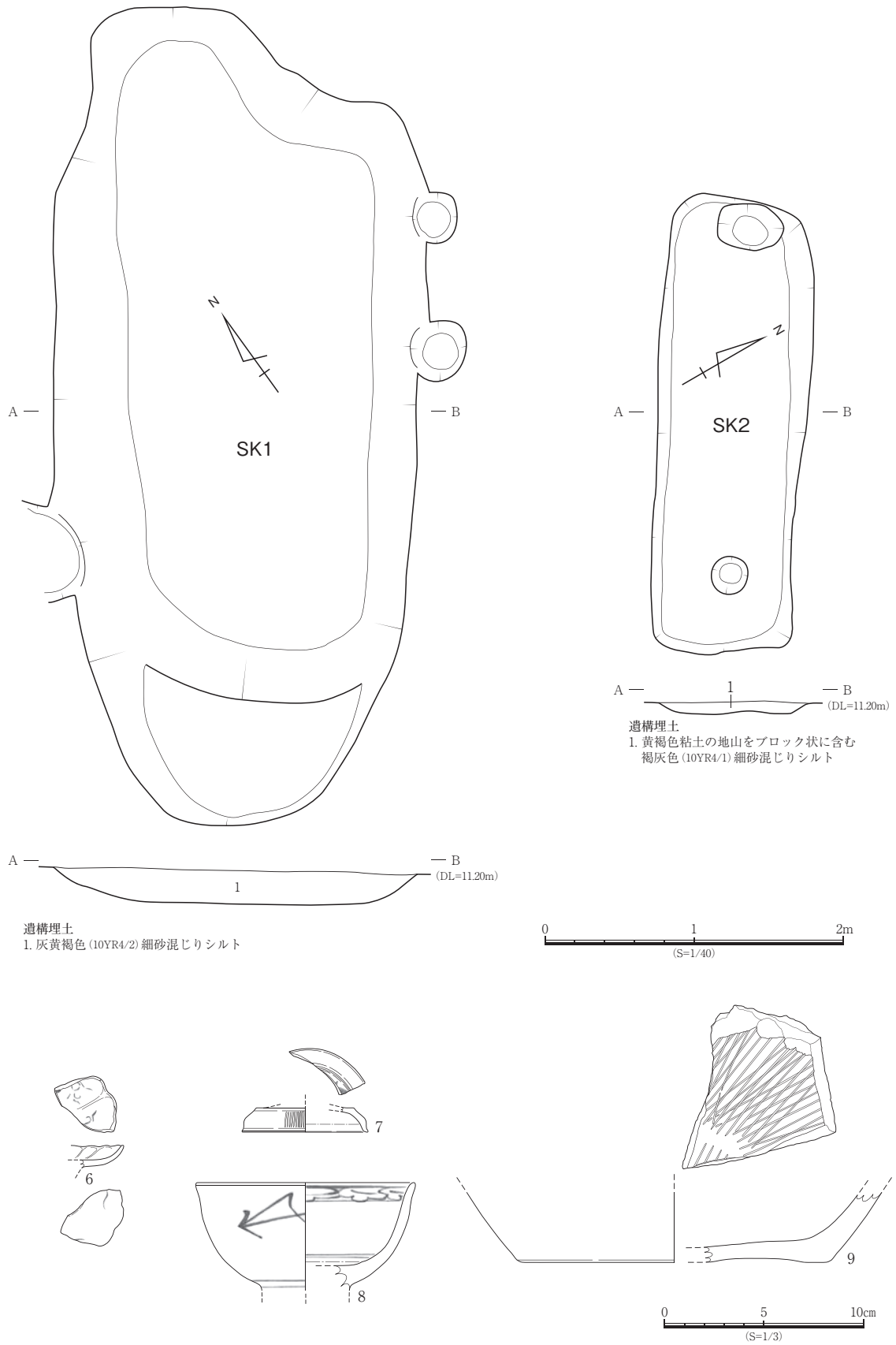


図5-13 SK1・2及び出土遺物実測図

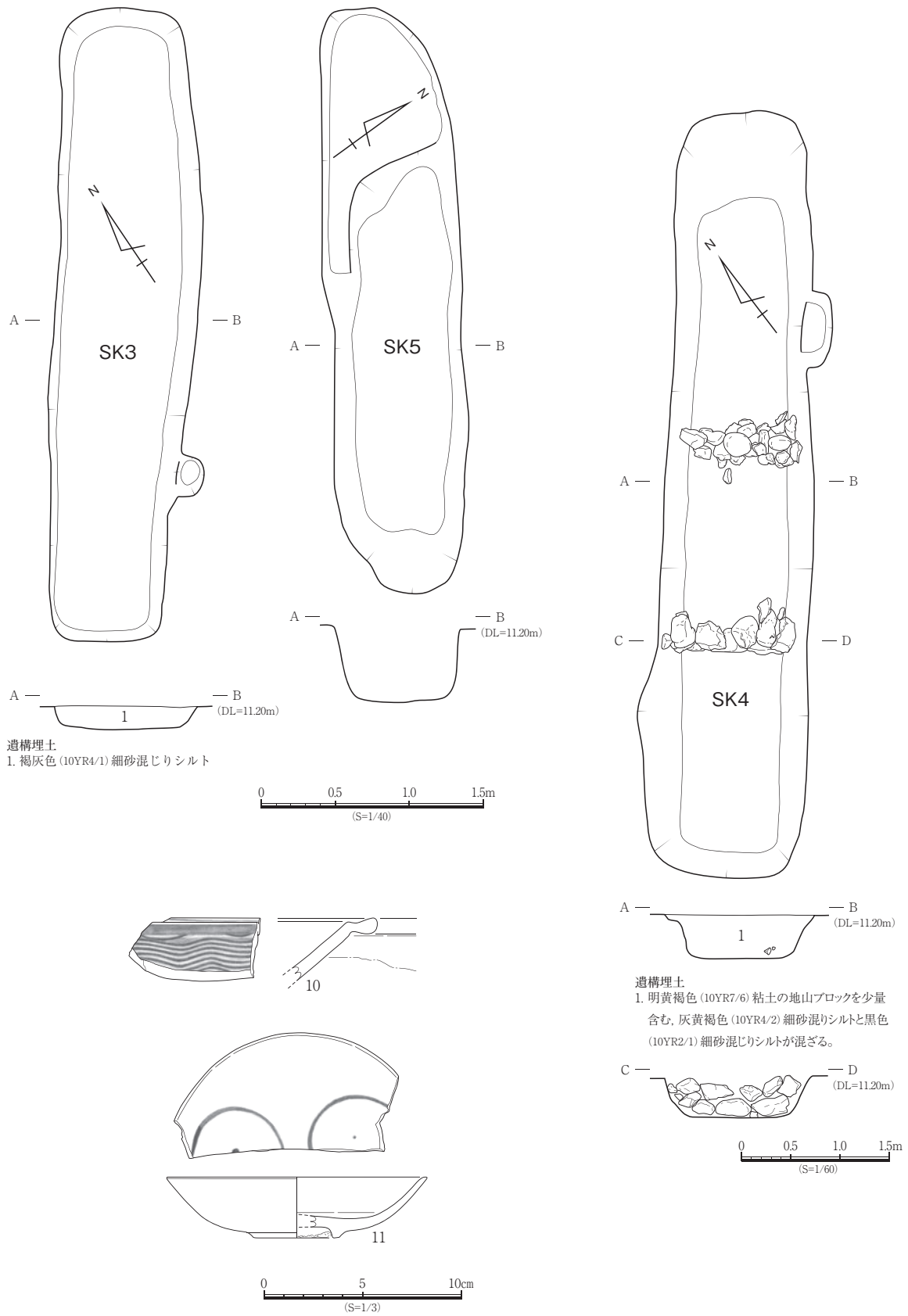


図5-14 SK3~5及び出土遺物実測図

2. 検出遺構と遺物 (3) 土坑

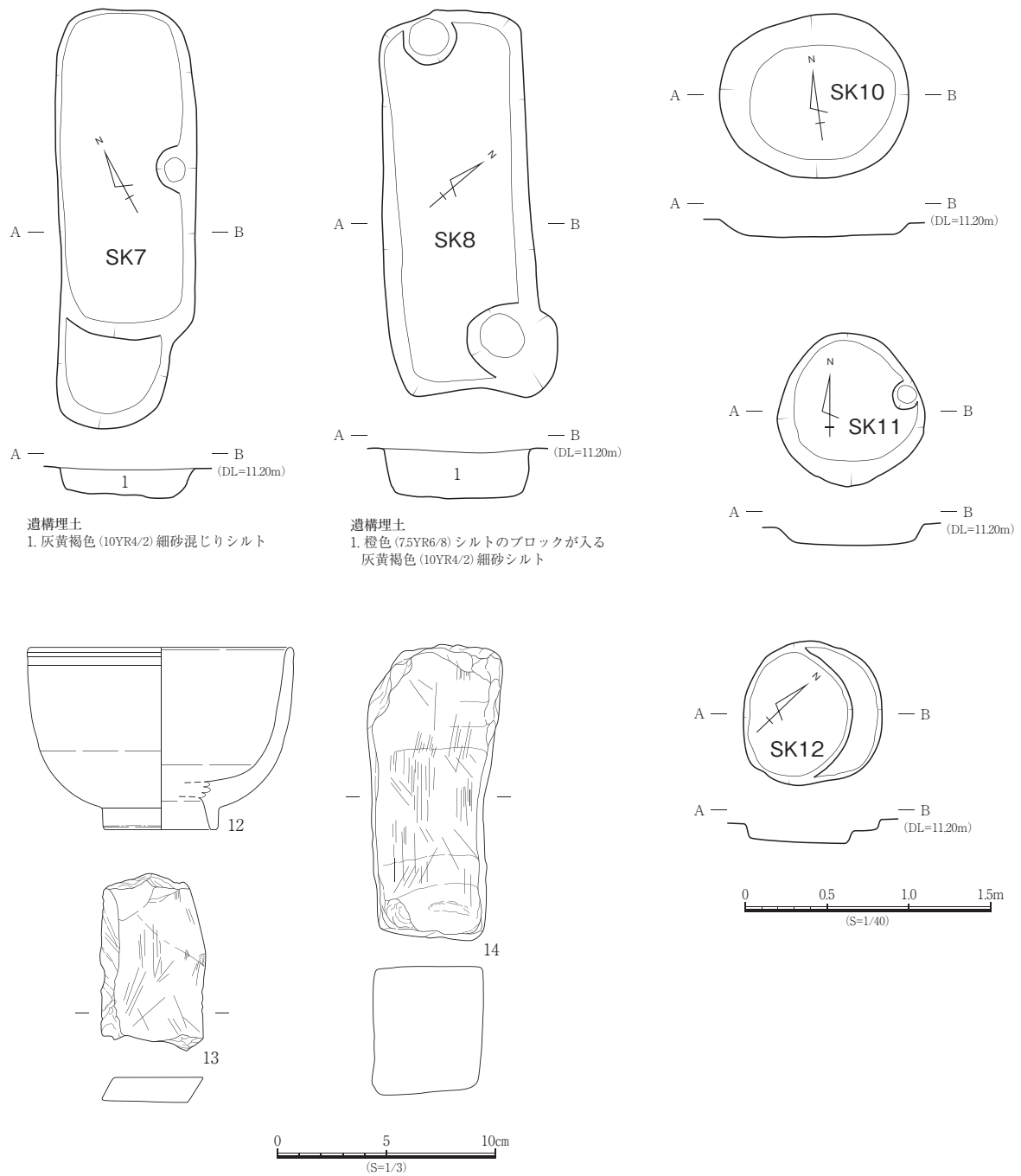


図5-15 SK7・8・10~12及び出土遺物実測図

SK43~45(図5-25)

同時に機能した土坑である。各々方形プランの床面に円形の床が10~20cm程深く掘られている。埋土はすべて黒褐色粘性土である。

SK43は長軸1.80m, 短軸1.70m, 深さ60cmである。床に径1.25m, 深さ10cmの円形孔が設けられている。埋土中から近世陶磁器, 瓦片, 土師質土器片が多く出土している。磁器染付小皿(30・31)を図示し得た。SK44は長軸1.84m, 短軸1.78m, 深さ70cmである。床に径1.40m, 深さ10cmの円形孔が設けられている。埋土から瓦片とともに土師質土器・須恵器片が出土している。

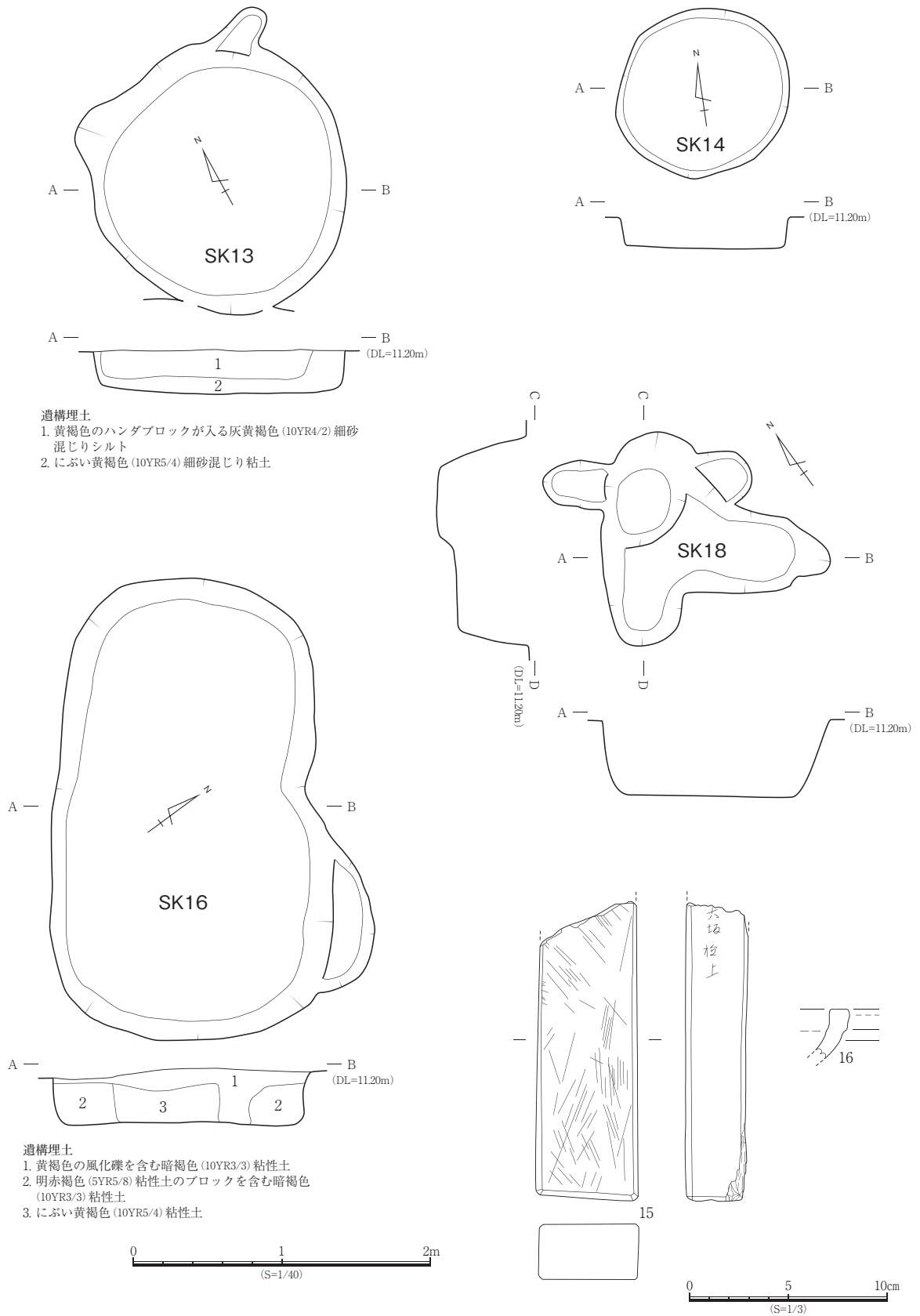


図5-16 SK13・14・16・18及び出土遺物実測図

2. 検出遺構と遺物 (3) 土坑

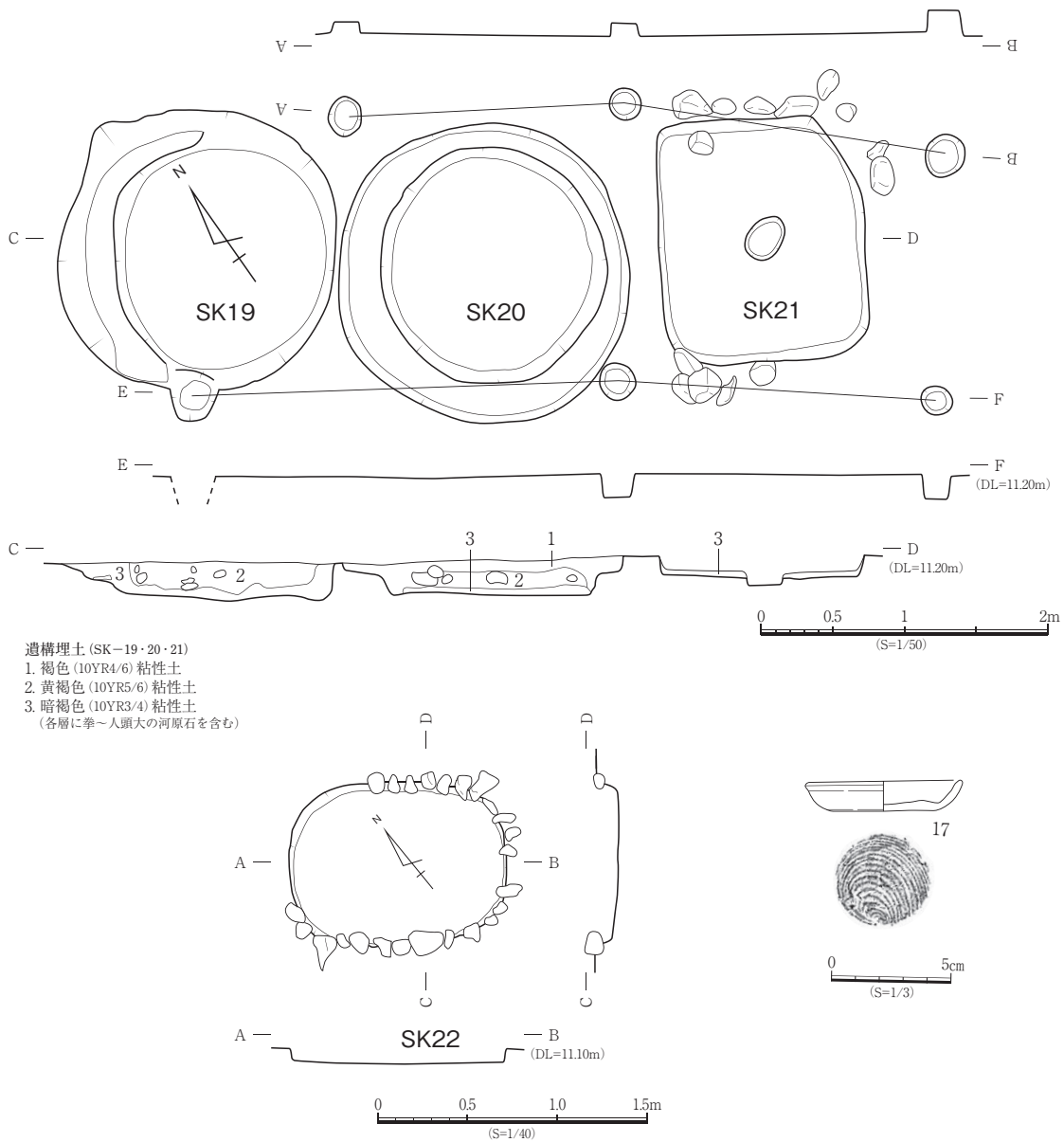


図5-17 SK19~22及び出土遺物実測図

SK45は一回り大きく長軸1.90m, 短軸1.76m, 深さ70cmである。床面の円形落ち込みの径は1.5m, 深さ20cmを測る。遺物は瓦片が多く出土しており近世磁器染付碗または猪口(32), 同瓶(33), 石臼(34)を図示し得た。

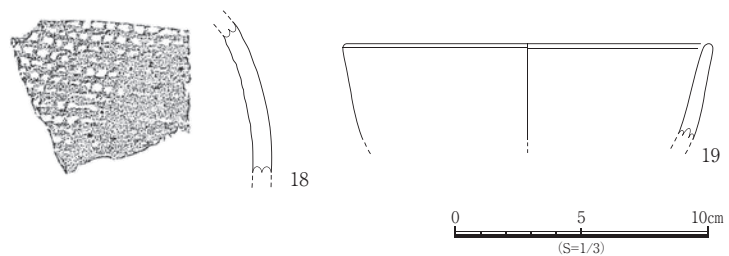


図5-18 SK24出土遺物実測図

SK46 (図5-26)

調査区の東部(B3-6-14)に位置する。隅丸方形を呈し長軸2.58m, 短軸2.20m, 深さ66cmである。埋土は1層が褐色シルト, 2層が褐灰色シルトである。遺物は埋土中から近世陶磁器片とともに須恵

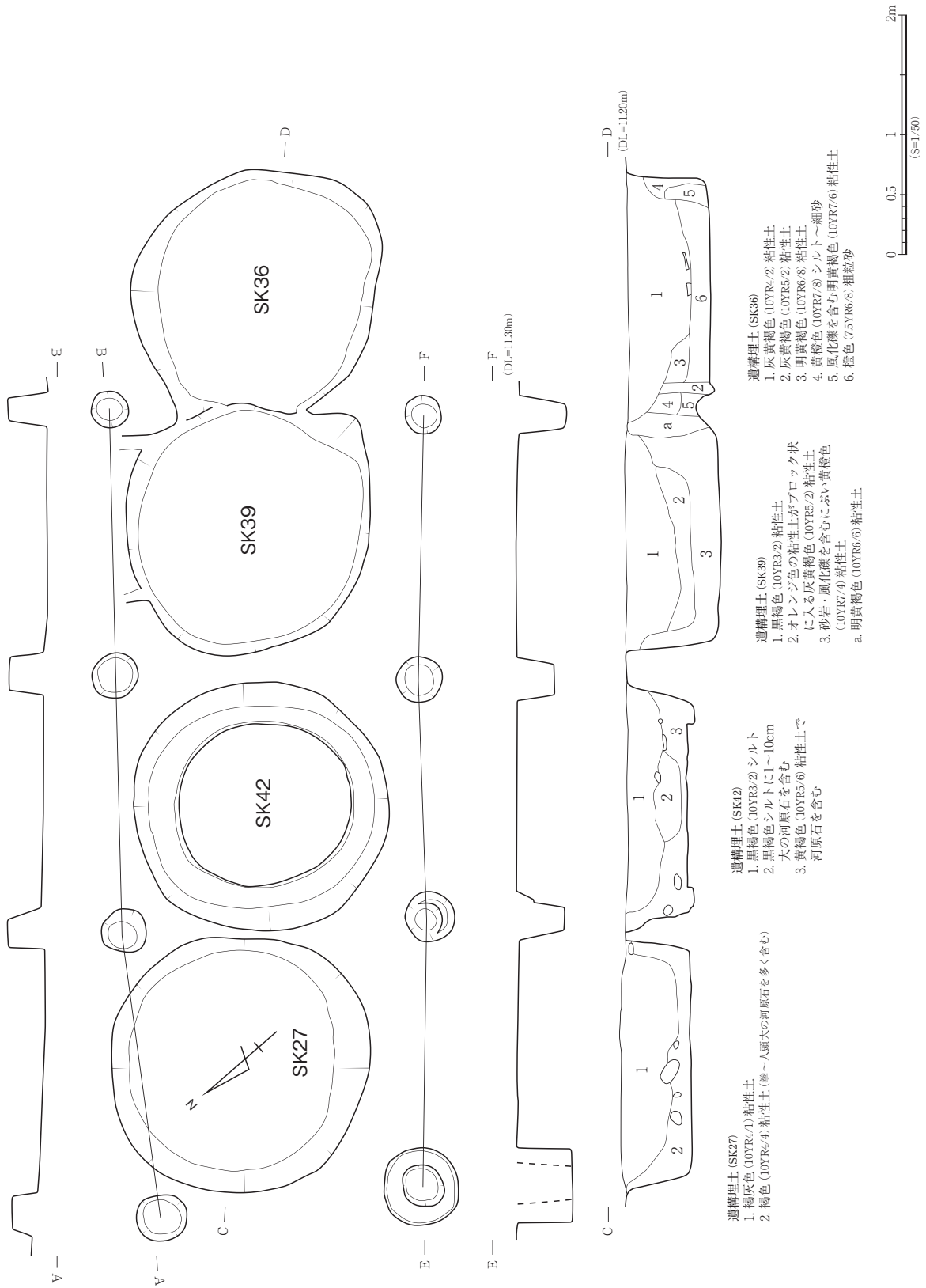


図5-19 SK27・36・39・42

2. 検出遺構と遺物 (3) 土坑

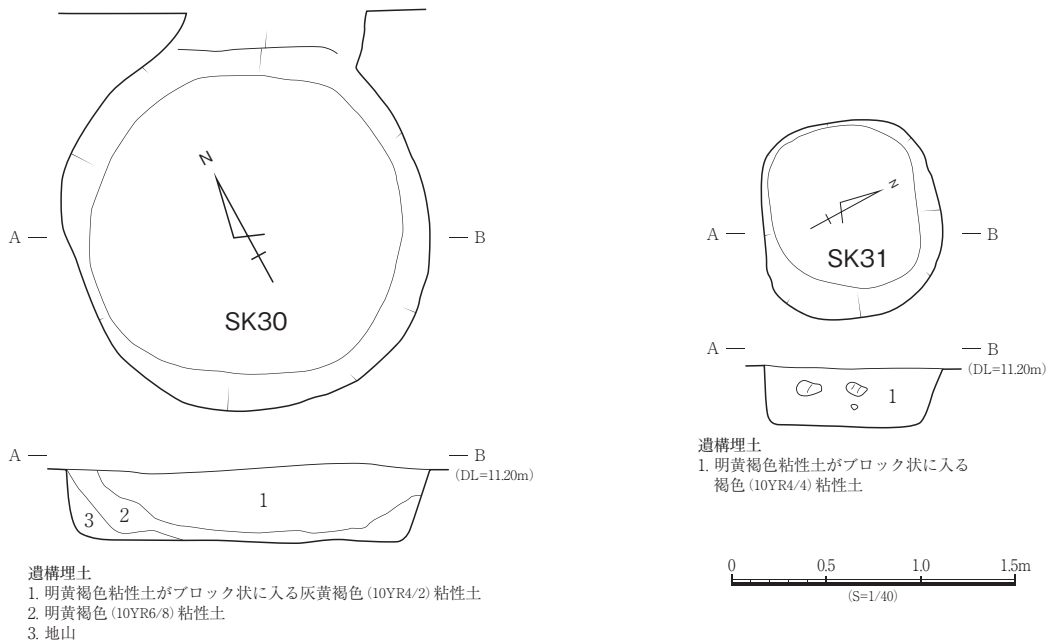


図5-20 SK30・31

器や土師質土器片が出土している。磁器碗(35・36), 備前焼灯明皿(37)を図示した。

SK47(図5-26)

調査区の東部(B3-7-17)に位置する。SD7・8を切っている。一部調査区外に出ているが隅丸長方形形状を呈するものと考えられる。確認長軸1.4m以上, 短軸1.3m, 深さ10cmである。埋土は黄橙色砂質土である。遺物は磁器染付中碗(38)の他, 瓦片が出土している。

SK48(図3-26)

調査区西部(B2-9-18)に位置する。SD3と重複している。長楕円形状を呈し長軸2.7m, 短軸1.1m, 深さ26cmである。埋土は暗灰褐色である。南壁に人頭大の礫を積み上げている。SK48はSD3に伴う水溜状の遺構で, 石積みは水溜を利用する足場となる可能性もある。埋土中から肥前産の磁器染付中碗(39)が出土している。

SK53(図5-27~30)

調査区南東部(B3-11-14)に位置するSD7の南部で検出した。SD7を切っている。大部分が調査区外に出ているために平面形や大きさをもとめることはできないが, 延長7.0m前後, 幅2.4m以上, 深さ30cm前後である。埋土は灰褐色シルトをブロック状に含む褐灰色シルトである。当調査区の遺構出土遺物の大半はSK53からのものである。一括廃棄されたような出土状況を呈している。

40~42は肥前内野山窯の陶器小皿である。43・45・46・48・49は肥前産の陶器中碗である。47は同じく鉢である。44・50~55は肥前産の陶胎染付の中碗である。56は京都産または京都系の碗または鉢である。57・58・64・65は肥前産の磁器染付中碗, 60・61は同小碗, 59は同小杯, 63・68・70は同鉢, 67は同小皿, 69は同中皿である。62は肥前産の色絵中碗, 66は色絵染付皿である。71は瀬戸・美濃系の香炉又は火入である。72は白磁瓶である。73~75は陶器の片口又は鉢で白化粧土刷毛目を有する。76は片口鉢である。77は把手付の瓦質土器焙烙である。78~82は焼締陶器の挿鉢である。79・80・82が備前で他は堺産である。83は備前壺で肩に櫛描文が施される。84は瓦質土器甕の口縁部, 85は陶

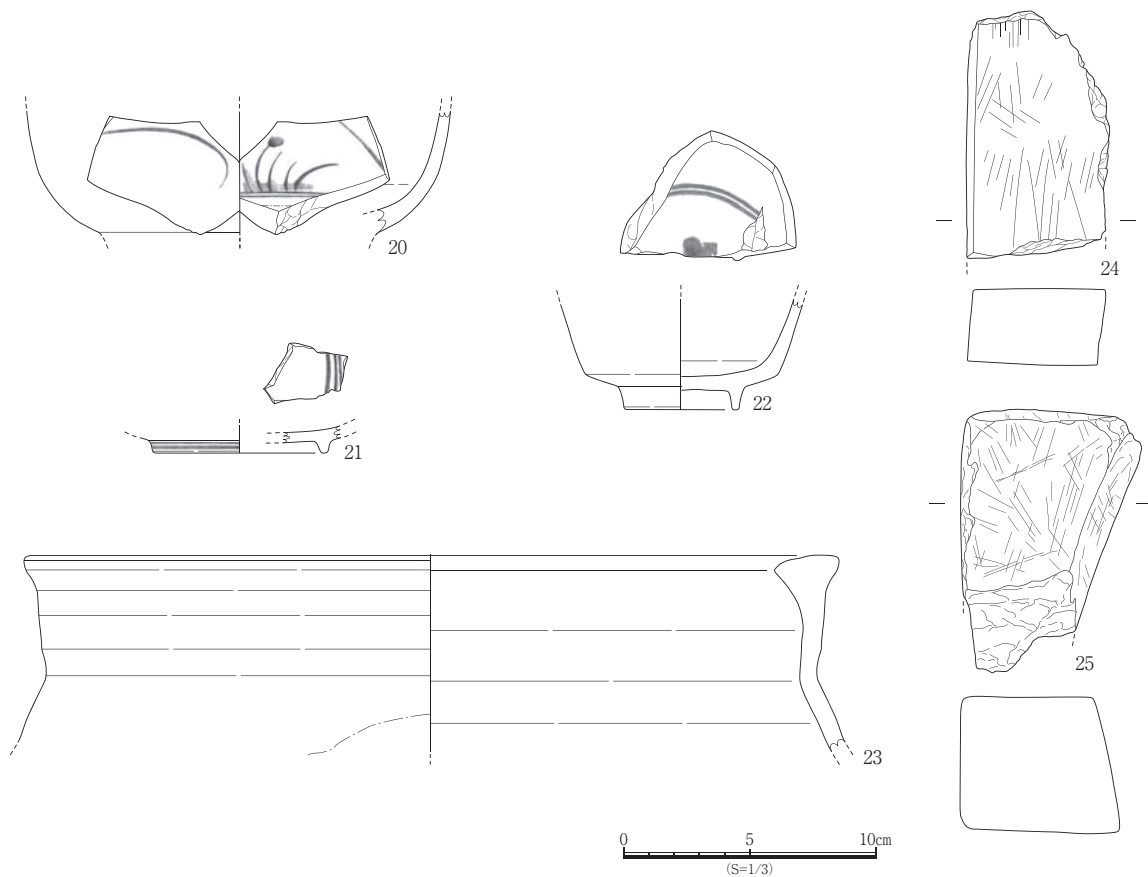


図5-21 SK27・36・39・42出土遺物実測図

器甕の胴部片で外面に刻み目を施した断面三角突帯が巡り内面には格子の圧痕が見られる。86は須恵器高杯である。87は砂岩製の砥石で4面使用している。

SK54(図5-31)

調査区東部(B3-6-9)に位置する。不整形を呈し長軸0.9m, 短軸0.6m, 深さ10cmである。埋土は黒褐色粘性土に褐色粘性土がブロック状に入る。遺物は外面に鉄釉を施した火入れか香炉と考えられる陶器香炉または火入(89), 肥前産の紅皿(90), 同じく肥前産の白磁または染付小杯(91)が出土している。

SK55(図5-31)

調査区の東部(B3-11-4)に位置する。楕円形状を呈し長軸1.2m, 短軸0.7m, 深さ20cmである。埋土は黒褐色粘性土に褐色粘性土がブロック状に入る。遺物は肥前産の磁器染付瓶の胴部片(88)が出土している。

SK56(図5-31)

調査区の東部(B3-6-23)に位置する。隅丸方形を呈し長軸1.65m, 短軸1.50m, 深さ35cmである。埋土は黒褐色粘性土である。遺物は肥前産の磁器染付皿(92)が出土している。口縁部輪花形で外面には連続唐草文, 内面は唐草文を描いている。

SK59(図5-32)

調査区の東より中央部(B2-10-25)に位置する。長形状を呈し長軸1.4m, 短軸0.7m, 深さ30cm

2. 検出遺構と遺物 (3) 土坑

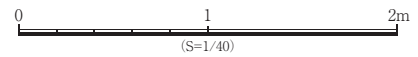
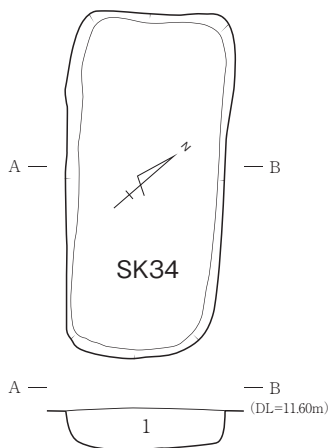
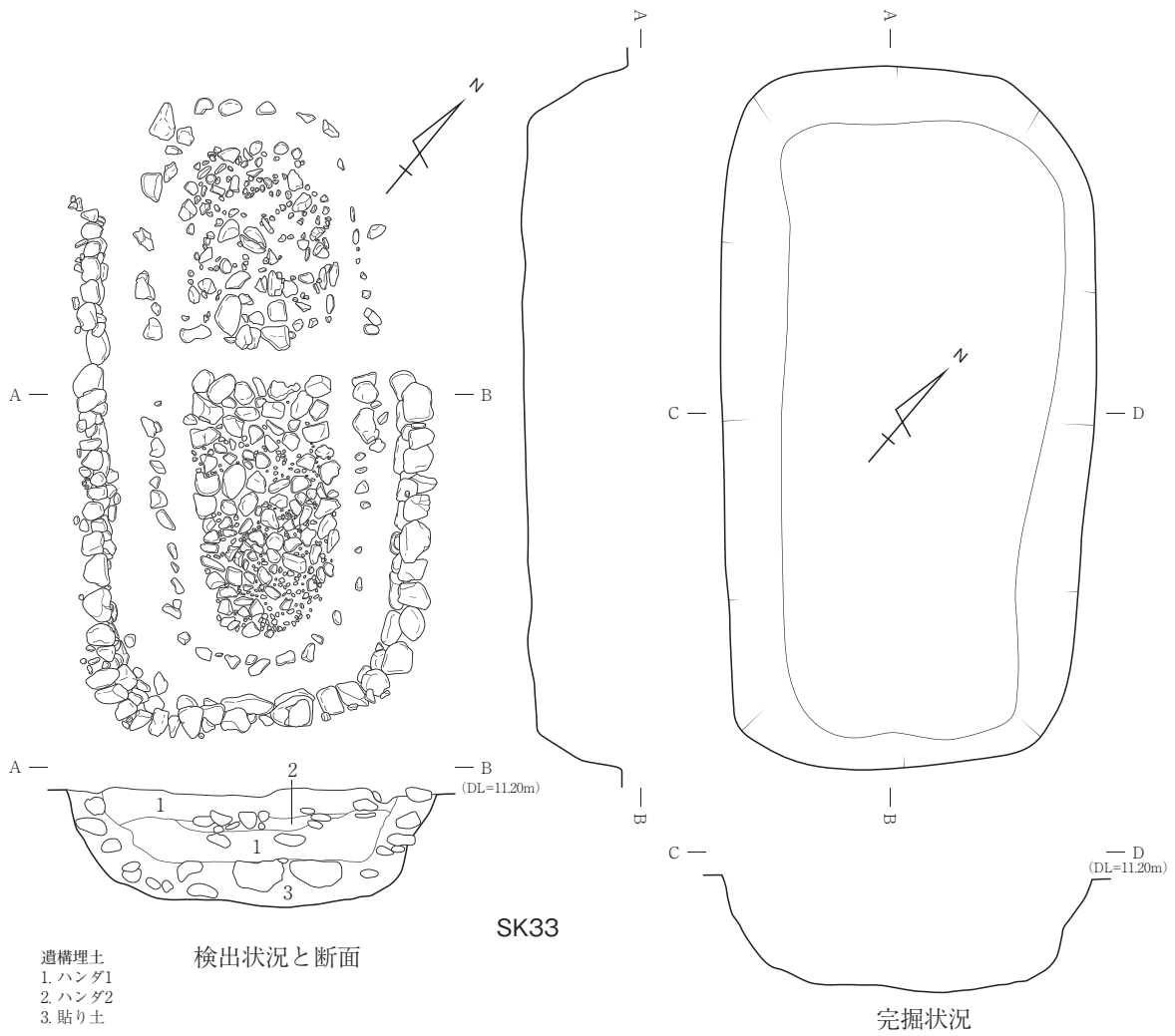


図5-22 SK33・34・37

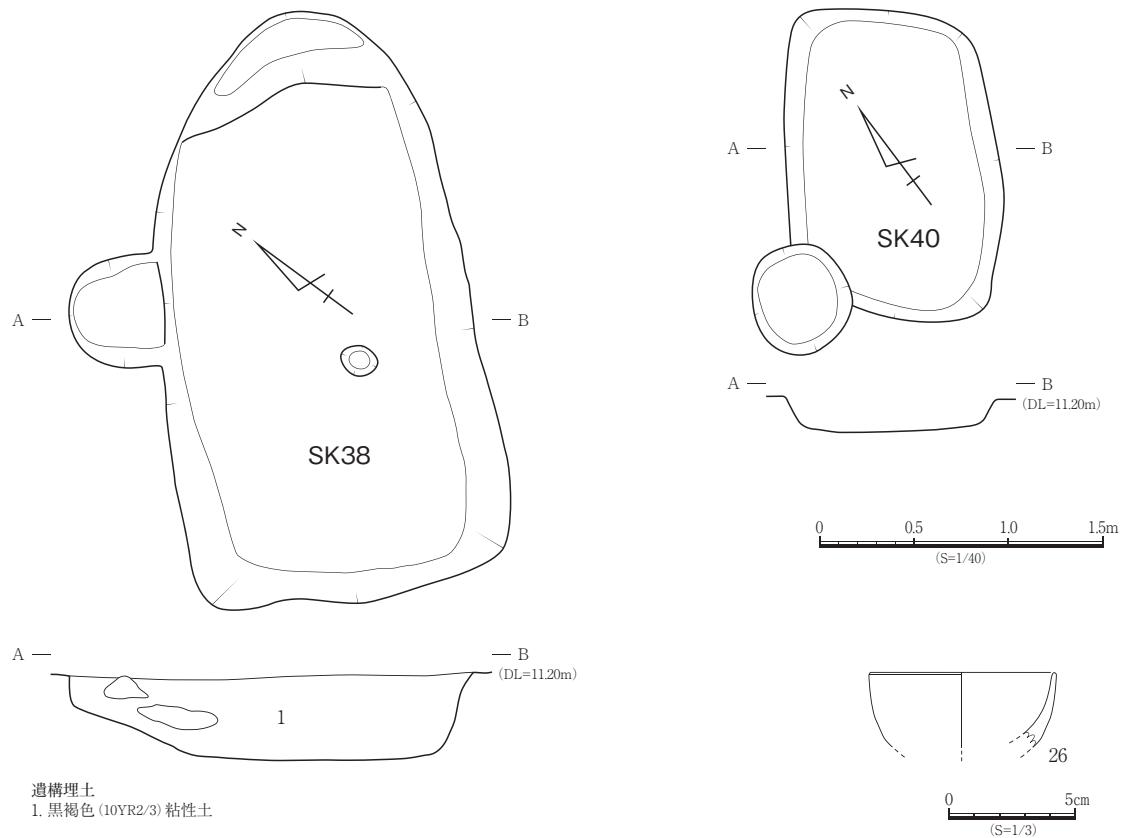


図5-23 SK38・40及び出土遺物実測図

である。埋土には明黄褐色のハンダが詰まっている。近世陶磁器の細片に加えて弥生後期土器、土師器細片が出土しているが図示できるものはない。

SK60(図5-32)

調査区の東より南部(B2-15-5)に位置しSK69と切り合っているが先後関係は不明である。隅丸長方形を呈し長軸1.7m、短軸0.8m、深さ15cmである。弥生後期土器片と近世陶磁器片が出土している。陶器皿(93)のみ図示し得た。

SK61(図5-32)

調査区の南部(B3-11-12)に位置する。溝状を呈し長軸4.65m、短軸1.00m、深さ20cmである。埋土は黒褐色粘性土に褐色粘性土がブロック状に入る。遺物は瓦器や近世陶磁器細片が出土しているが、図示し得たのは陶器小皿(94)である。肥前内野山窯産である。

SK62(図5-32)

SK61に平行している。溝状を呈し長軸4.8m、短軸1.1m、深さ20cmである。埋土は黒褐色粘性土に褐色粘性土がブロック状に入る。遺物は磁器あるいは白磁の細片(95)、備前焼の灯明皿(96)、肥前産の京焼風陶器中碗(97)が出土している。

SK64(図5-33)

調査区東より(B3-11-1)に位置しSK66と切り合っている。円形を呈し径1.1m、深さ35cmである。床面縁部に幅10cm、深さ10cm前後の溝が巡る。桶状のものを置いていた痕跡と考えられる。埋土はにぶい黄褐色細砂が混じるシルトである。遺物は肥前産の白磁または染付中碗(98)の他に近世陶磁

2. 検出遺構と遺物 (3) 土坑

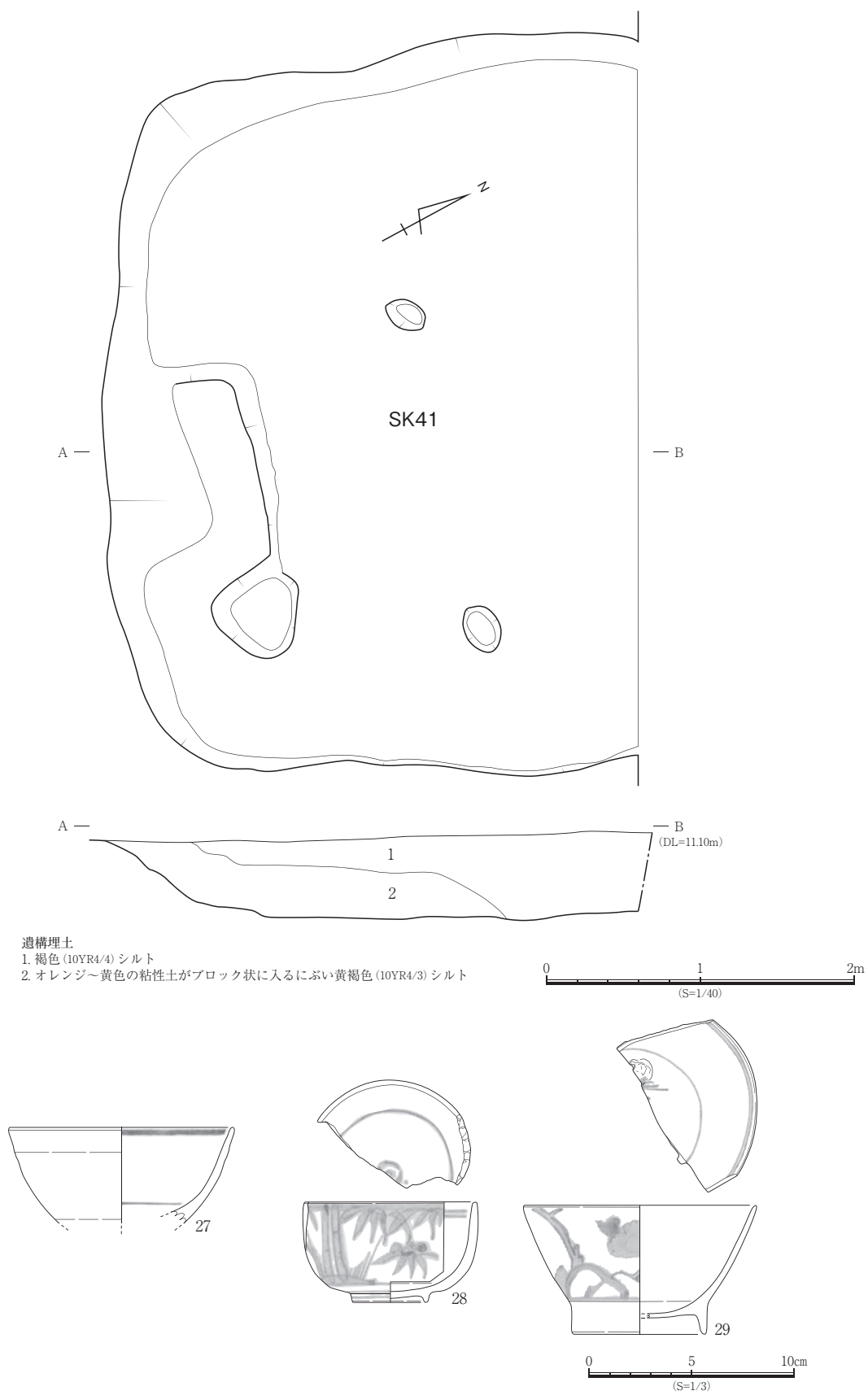


図5-24 SK41及び出土遺物実測図

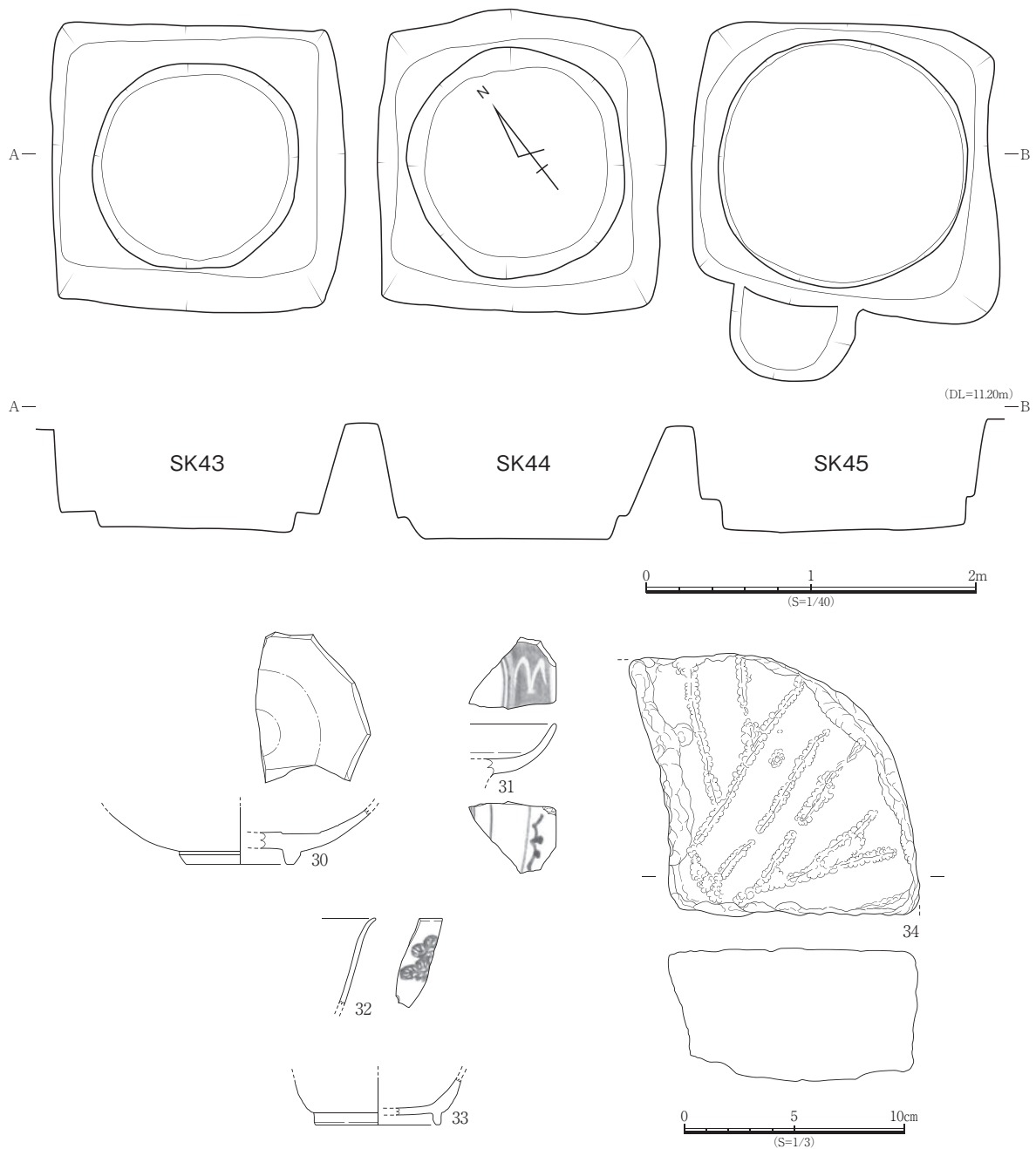


図5-25 SK43~45及び出土遺物実測図

器細片が出土している。

SK65(図5-33)

調査区の南部(B3-11-7)に位置する。溝状を呈し長軸4.9m，短軸1.0m，深さ20cmである。埋土は黒褐色細砂混じりのシルトで埋土中に拳から人頭大の河原石を含んでいる。近世磁器細片を含むが図示できるものはない。

SK66(図5-33)

SK64と切り合っているが先後関係は不明である。円形を呈し径0.7m，深さ25cmである。埋土はSK64と同様ののぶい黄褐色細砂が混じるシルトである。遺物は見られない。

2. 検出遺構と遺物 (3) 土坑

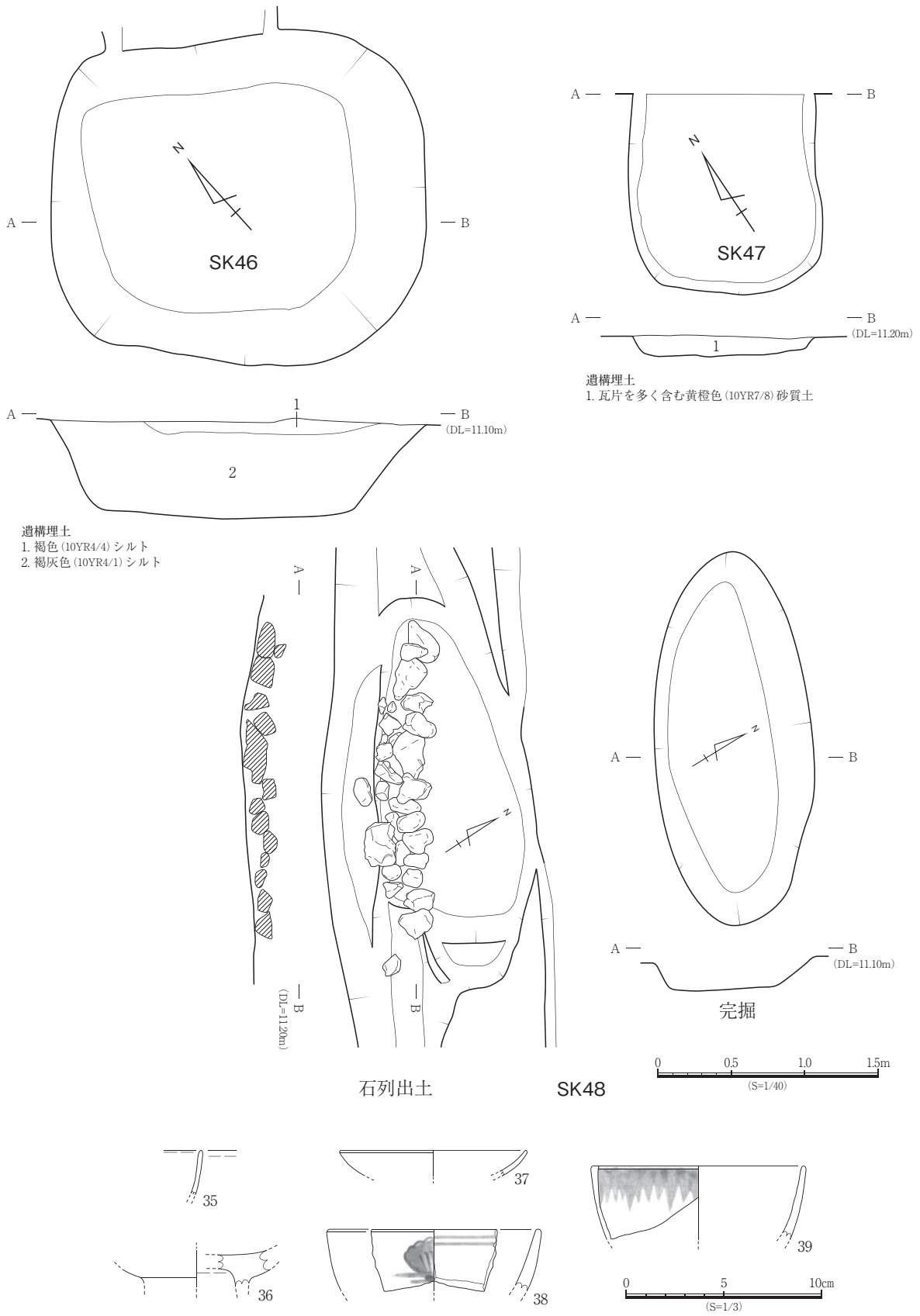


図5-26 SK46~48及び出土遺物実測図

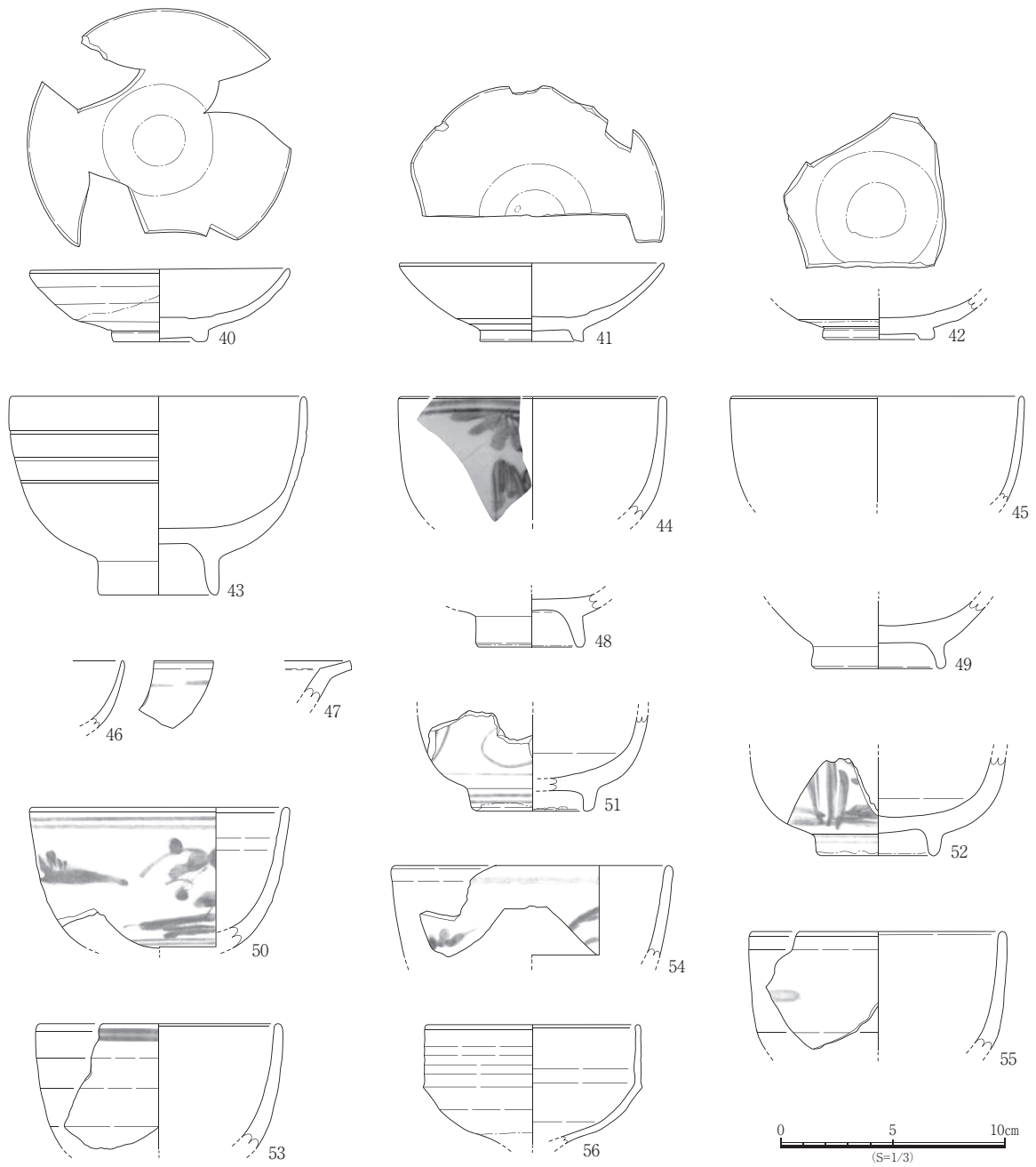
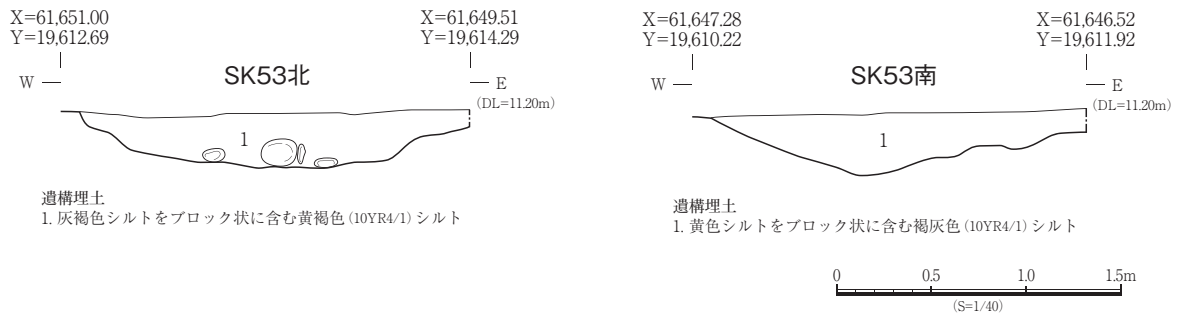


図5-27 SK53及び出土遺物実測図1

2. 検出遺構と遺物 (3) 土坑

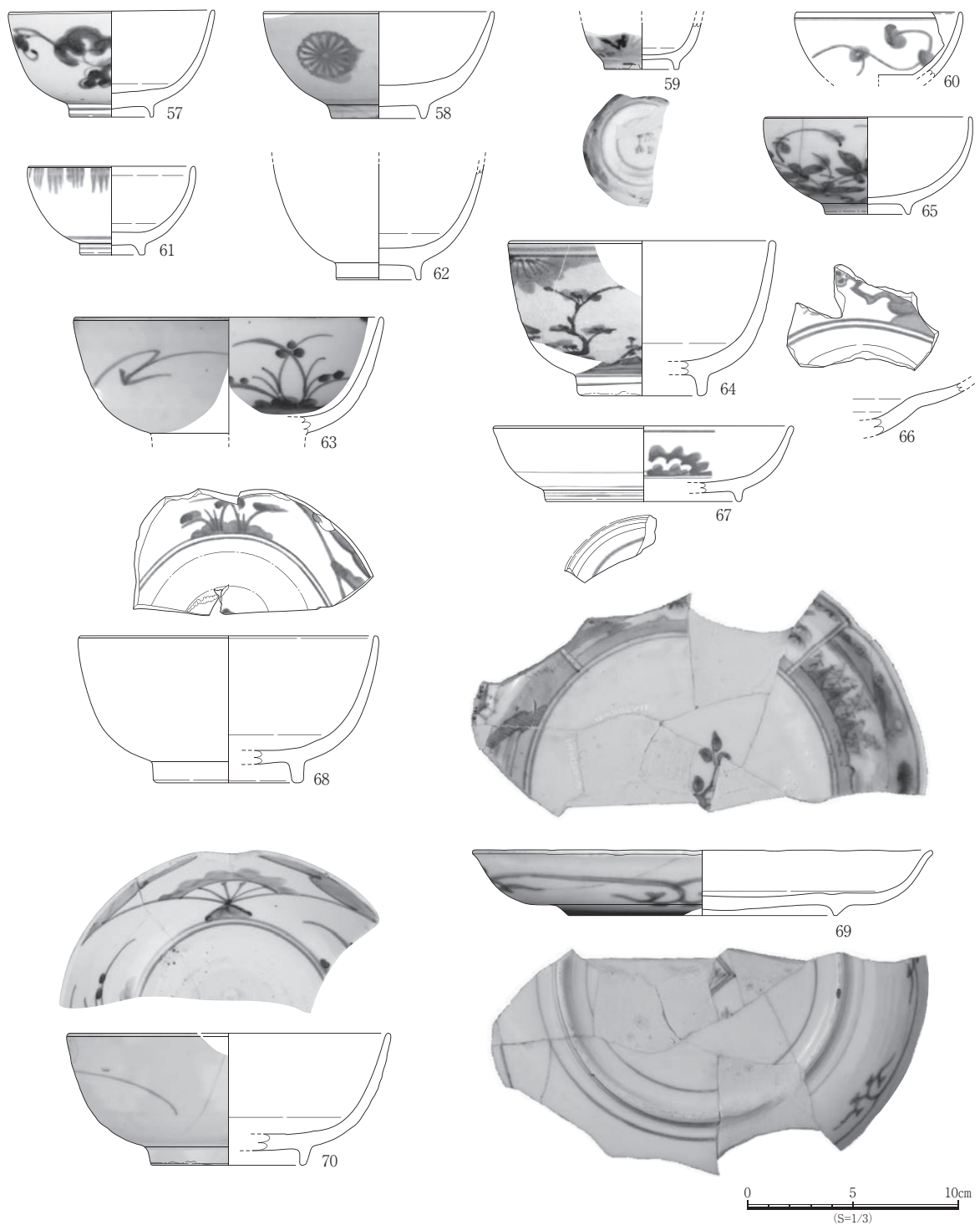


図5-28 SK53出土遺物実測図2

SK70~76・79(図5-34・35)

調査区の東南に密集して存在する。先後関係を明らかにできないが同時存在は3基程で同じ場所に重複して設けられたものと考えられる。重複が激しく平面形や大きさを明確にし得ないものもある。外周にはピットが見られることから本例も土坑を覆う屋根が設けられていたものと考えられる。埋土は概ね暗灰褐色系細砂混じりのシルトで中には橙色のハンダブロックを含んでいるものも

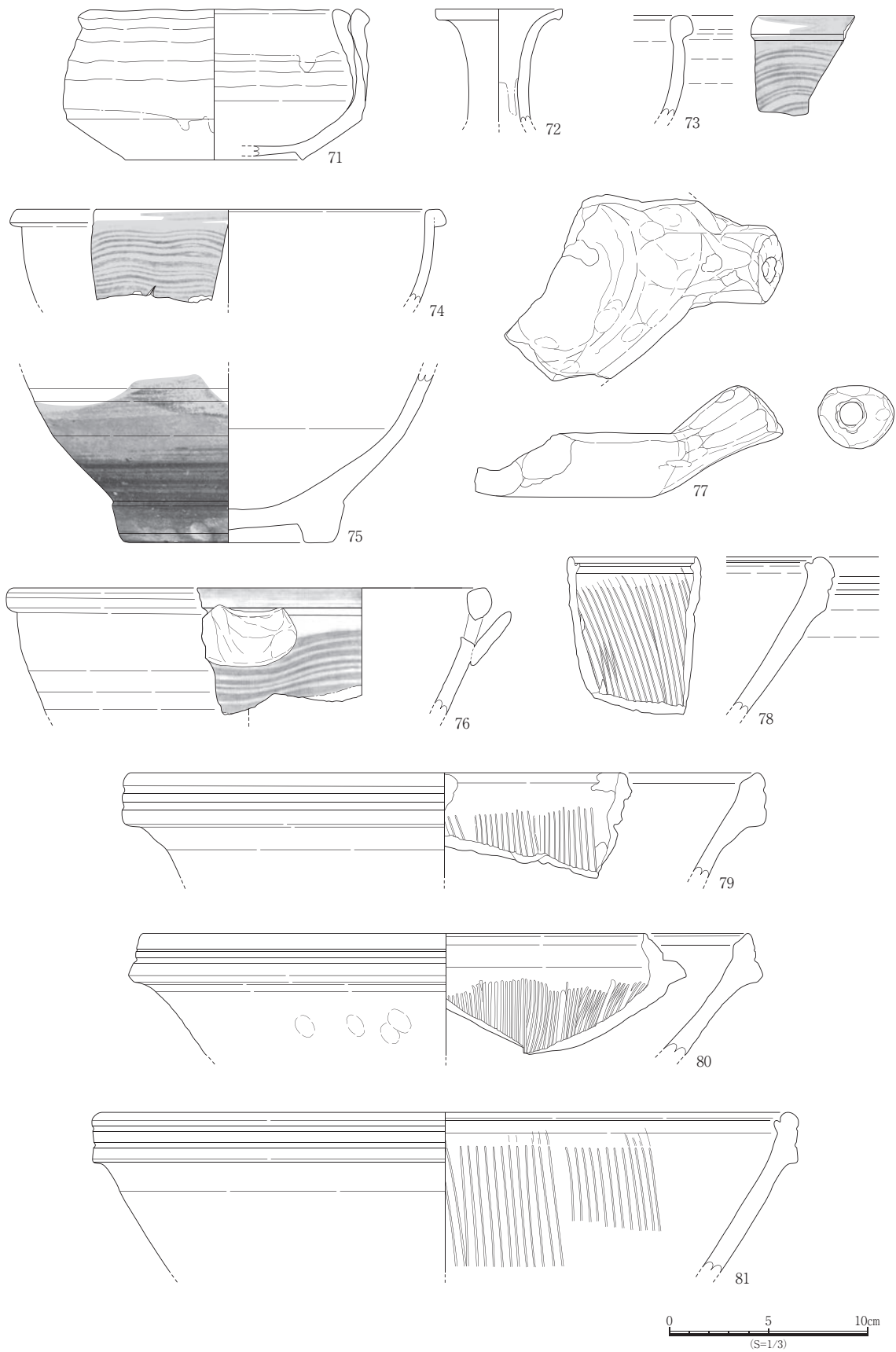


图5-29 SK53出土遗物实测图3

2. 検出遺構と遺物 (4) 溝

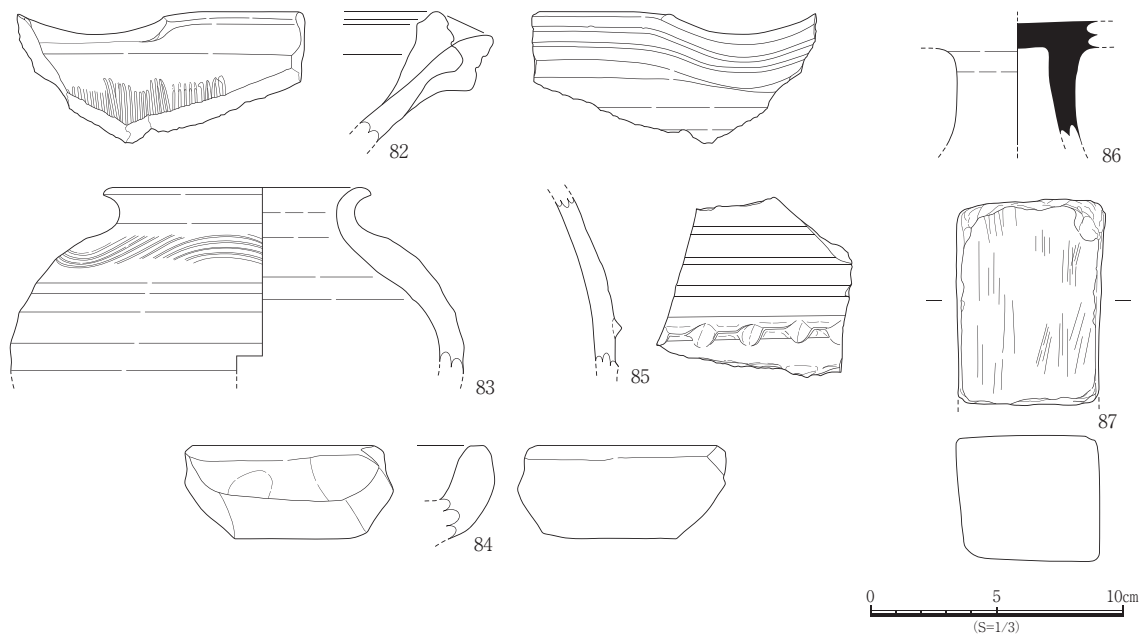


図5-30 SK53出土遺物実測図4

ある。

SK70は一辺1.7mの隅丸方形を呈し深さは40cmである。瓦片や近世陶磁器細片、砂岩製砥石(100)が出土している。SK71は長方形を呈し長軸1.8m、短軸1.4m、深さ55cmである。床面中央に径20cm前後、深さ5cmのピットが見られる。瓦片と共に土師質土器小皿底部(99)が出土している。SK73は楕円形を呈し長軸2.2m、短軸1.3m、深さは53cmである。SK74は楕円形を呈し長軸2.1m、短軸1.9m、深さ50cmである。SK75は隅丸方形を呈し長軸1.9m、短軸1.7m深さ50cmである。埋土中から瓦片が出土している。SK79は不整形を呈し長軸2.0m、短軸1.7m、深さ54cmである。

SK80(図5-36~38)

調査区の東隅(B3-7-16)に位置する。方形を呈し長軸2.0m、短軸1.5m、深さ20cm前後である。埋土は黒褐色シルトで、多数の瓦が入っていた。101・103~105は軒平瓦である。103~105の主文様は三巴で103にはキラ粉が見られる。103の尻には径0.8cmのつり穴が見られる。104と105は同範品と考えられる。102は軒丸瓦で三巴+珠文で飾られる。106は左棧の軒平瓦で主文は三花文、キラ粉が認められる。

なお、製造元を示す刻印を拓本で示した。53点に刻印がみられ、「○源」が42点と最も多く、ついで「山下寅」7点などがみられる。

(4) 溝

SD1(図5-39)

調査区中央部(B2-5-23)に位置する。確認延長10.0m、幅3.9m、深さ20cm前後で調査区外に延びている。大型土坑の可能性もあるが溝とした。埋土は褐灰色、黄褐色、黒褐色の細砂混じりのシルトがブロック状に堆積している。遺物は埋土中から近世陶磁器や瓦片が出土している。107は肥前産の陶胎染付中碗である。108は磁器染付中碗の広東形である。109は肥前産の磁器染付仏飯具、110は陶器の捏鉢または片口である。111は陶器の瓶、112は土師質土器の小皿である。113は肥前産の陶器中碗で高台内面にも施釉している。114は肥前産の陶器の捏鉢または片口である。115・117は陶器の大

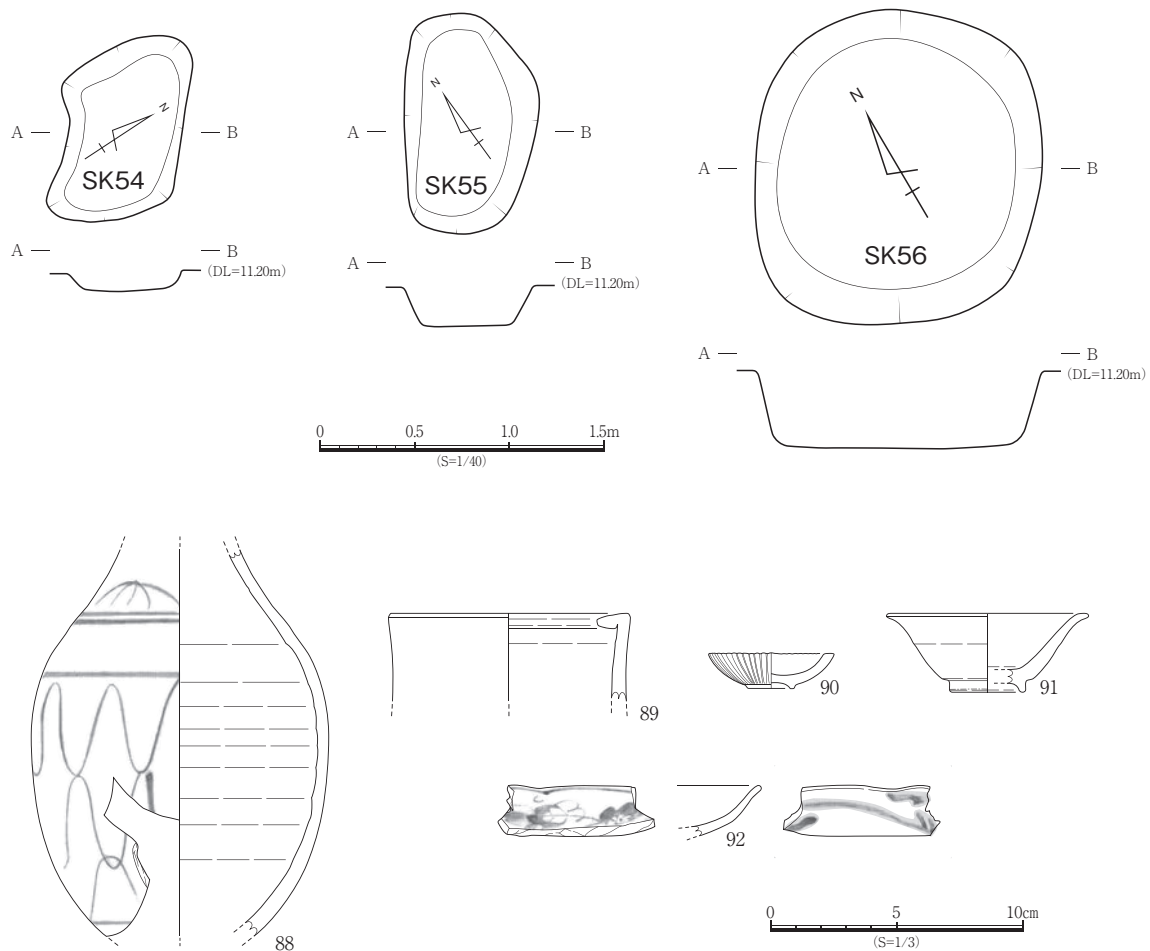


図5-31 SK54~56及び出土遺物実測図

甕である。115の外面上胴に沈線が多く施され、内面には格子目状の圧痕が残っている。116は平瓦片である。

SD2(図5-40)

調査区の東部(B2-9-12)に位置しSB8と切り合っているが先後関係は不明である。延長7.4m, 幅0.3m, 深さ10cmである。埋土は褐灰色細砂混じりのシルトで遺物は認められない。

SD3(図5-40)

調査区の西縁と南縁の西半部を巡る溝で、南縁の溝をSD3とした。屋敷の区画溝と考えられる。延長25.0m, 幅0.4m前後, 深さ10cm前後を測る。埋土は褐灰色細砂混じりのシルトである。遺物は陶器中碗(118)と肥前産の陶胎染付中碗(119)が出土している。118は尾戸焼の可能性もある。

SD4(図5-40)

SD3に近接して延びる溝である。延長11.4m, 幅0.8m, 深さ10cm前後である。埋土は灰黄褐色シルトである。遺物は土師質土器小皿(122)が出土してゐる。

SD5(図5-40)

調査区西縁を巡る溝でSD3と繋がっている。確認延長は20.0mでさらに北に延びている。幅は0.5~1.5m, 深さは20cm前後を測る。埋土は褐灰色細砂混じりのシルトである。遺物は陶器小碗(120), 磁器染付中碗(121), 磁器染付小杯(123), 陶器瓶(124), 陶器片口または鉢(125), 砥石(126・128), 焼け

2. 検出遺構と遺物 (4) 溝

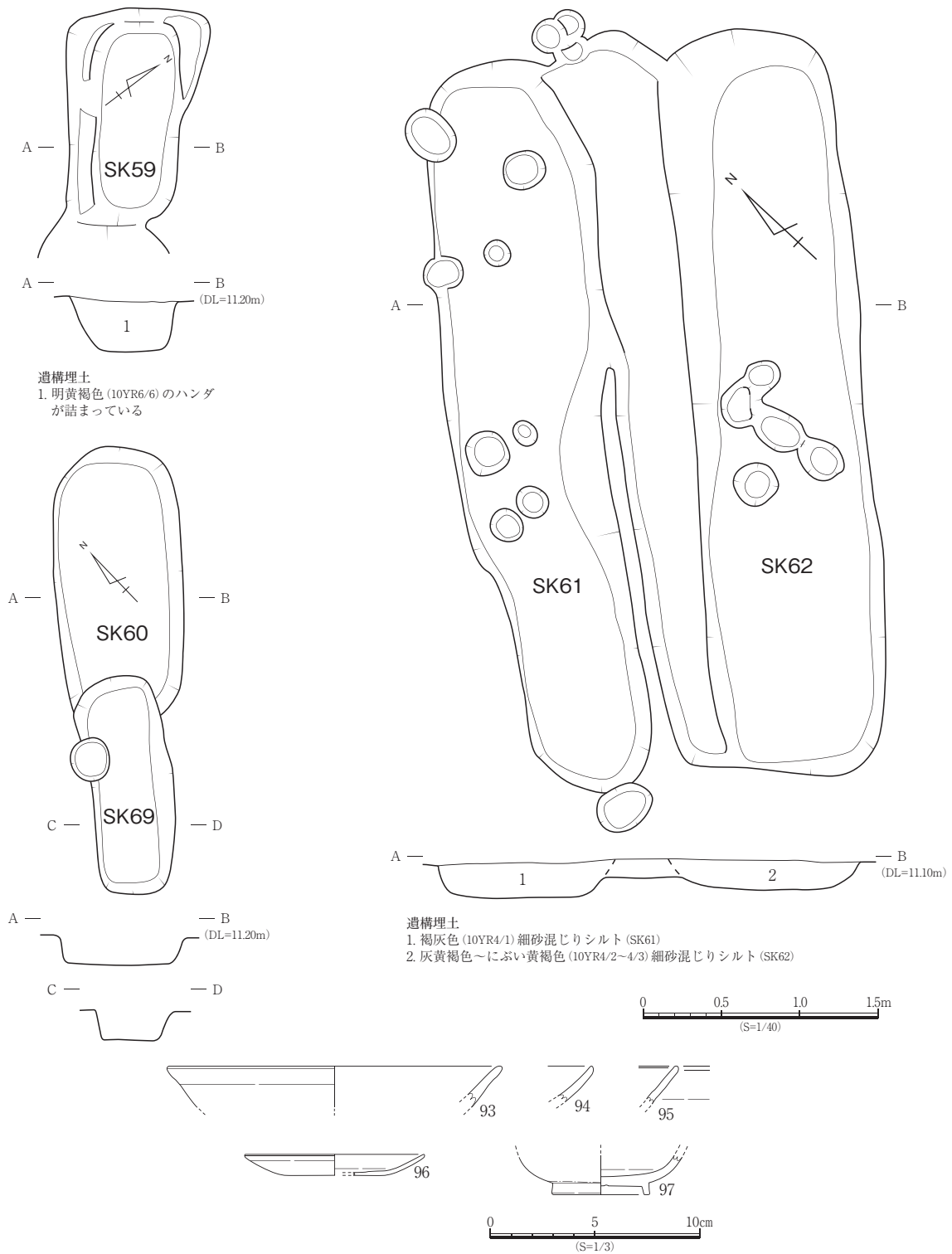


図5-32 SK59~62・69及び出土遺物実測図

石(127)が出土している。120は半球形で外面に鉄絵が施されている。京信楽系である。121は外面に網目文が施されている。肥前産である。123も肥前産で外面に草花文が描かれている。125は鉢の可能性もある。外面中に白化粧土刷毛目, 下位は鉄釉, 内面は白化粧土刷毛目である。126は粘板岩製, 127・128は砂岩製である。

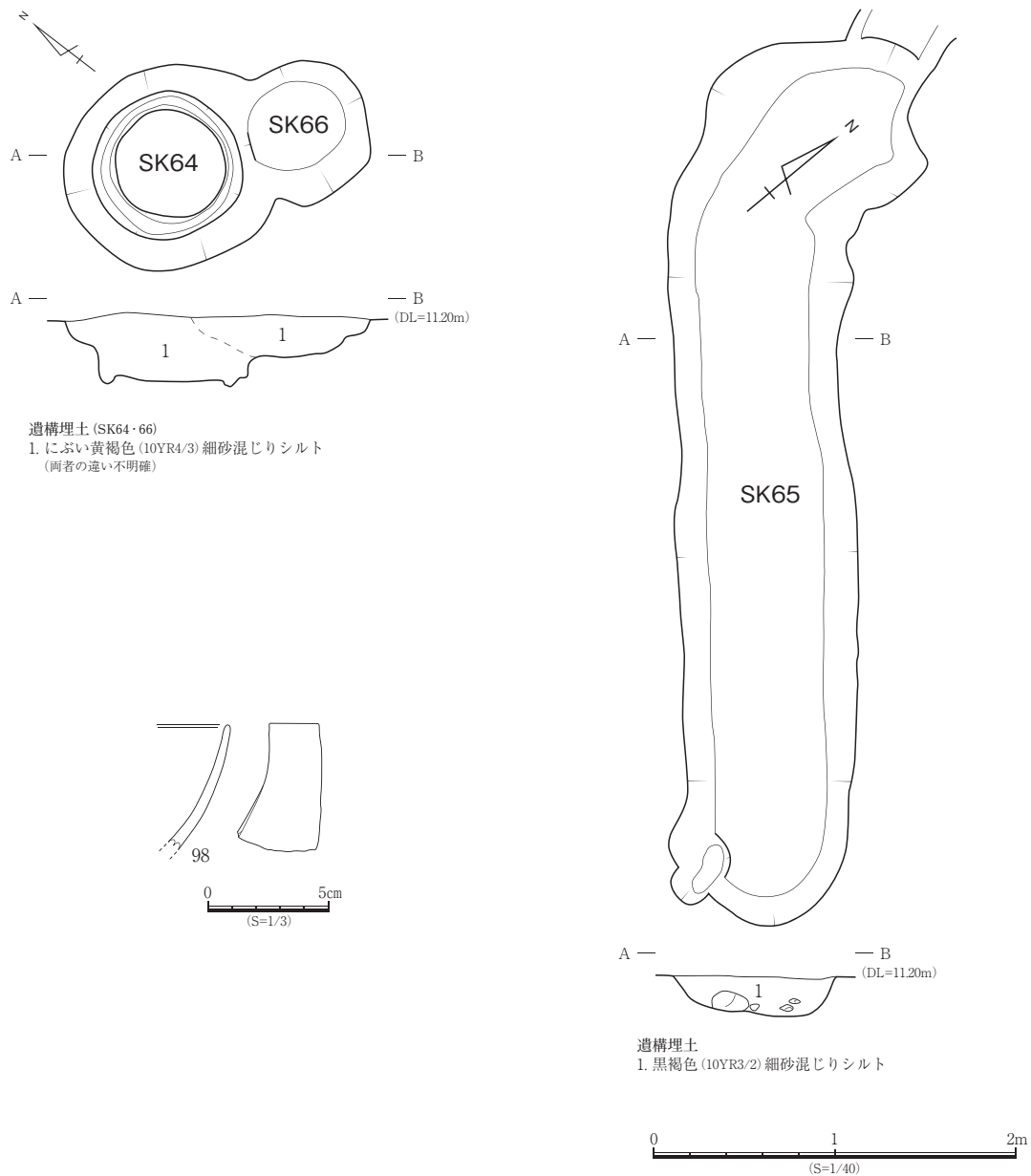


図5-33 SK64~66及び出土遺物実測図

SD6

調査区中央の北部(B2-5-23)に位置する。SB4・5と重複しているが先後関係は不明である。確認延長は9.1mで更に北に延びている。幅は0.8~0.9m, 深さは南端で3cm, 北端で10cmを測る。埋土は黒褐色シルトに灰色シルトが混ざる。陶器細片が出土している。

SD7(図5-41)

調査区の東縁に沿って延びる溝で, SK53より北をSD7とした。一部SD8と平行し東部からSD13と合流している。北半分の幅が広く南半分は狭くなっている。屋敷境の区画溝と考えられる。埋土は1層が褐灰色細砂混じりのシルトにハンダの小ブロックが入る。多くの遺物を含んでいる。2層が褐灰色細砂混じりのシルトに地山のブロックが混入する。3層は黒褐色細砂混じりシルトで遺物を含まない。

2. 検出遺構と遺物 (4) 溝

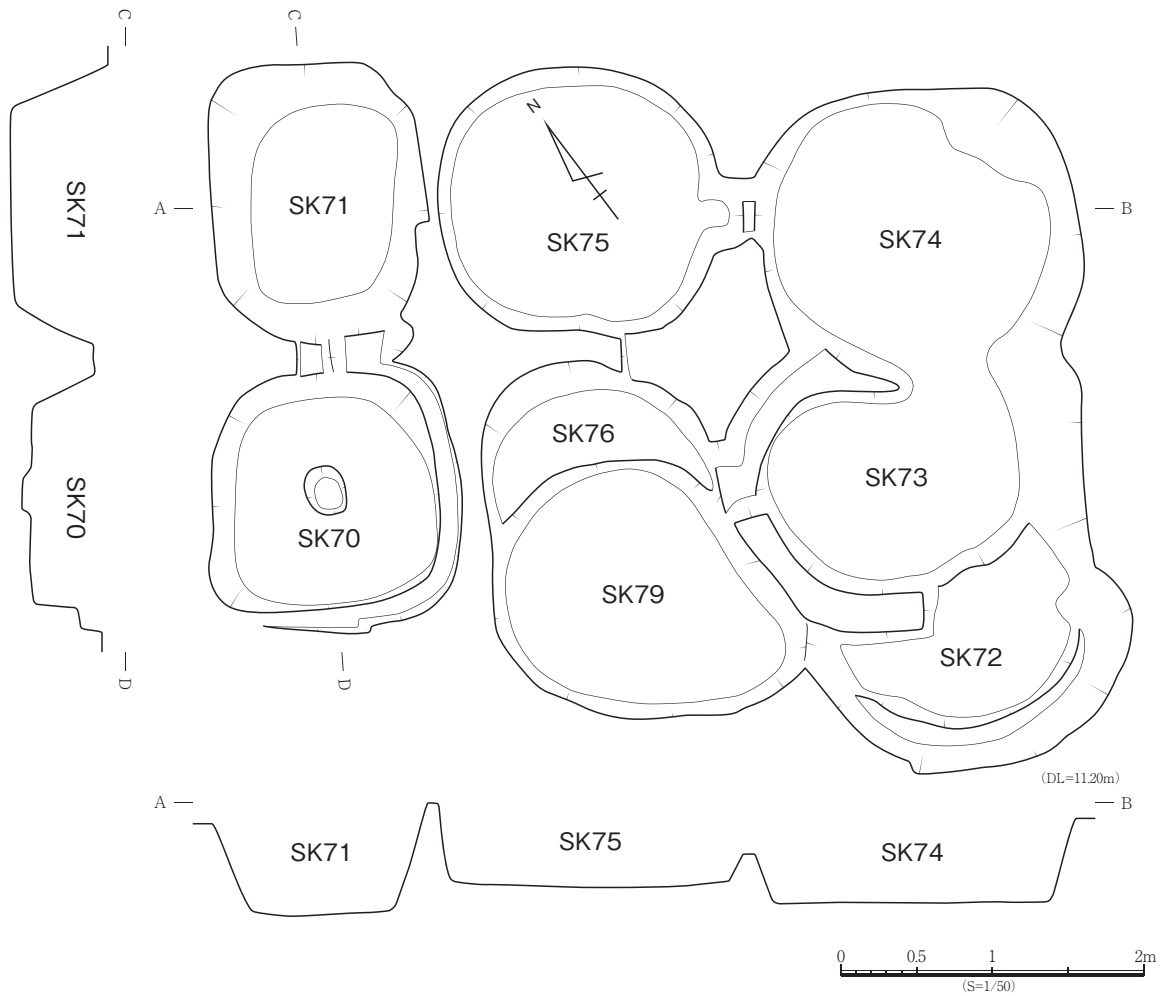


図5-34 SK70~76・79

遺物は北半部に設けたセクションベルト付近に集中して出土している。遺物は1層出土のものを人工層位で上層・中層・下層に分けて取り上げた。上層が最も多く出土している。

上層の遺物(図5-41~43)

129~132は土師質土器小皿である。129と132は糸切り痕を丁寧にナデ消している。前者は口縁部の一部に煤が付着している。灯明皿と考えられる。133~135は肥前産の陶器中碗である。黄濁色の透明釉を高台内面まで施釉している。136・137・139は肥前産の陶胎染付中碗である。136は白化粧土の焼成不良である。138・140は磁器染付で外面に草花文を描く。蓋物と考えられる。141は青磁染付小碗である。外面に青磁釉を帯び見込にはコンニャク印判による五弁花が施される。143は青磁香炉で内面に粗砂が付着する。142は陶器の瓶または壺と考えられる。外面は全面鉄釉が施され内面に

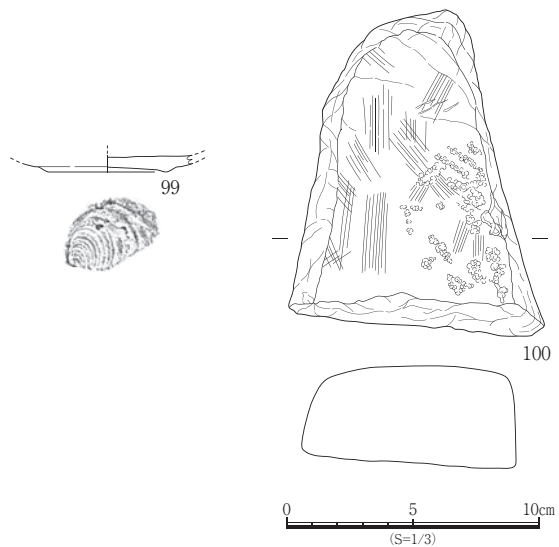


図5-35 SK70・71出土遺物実測図

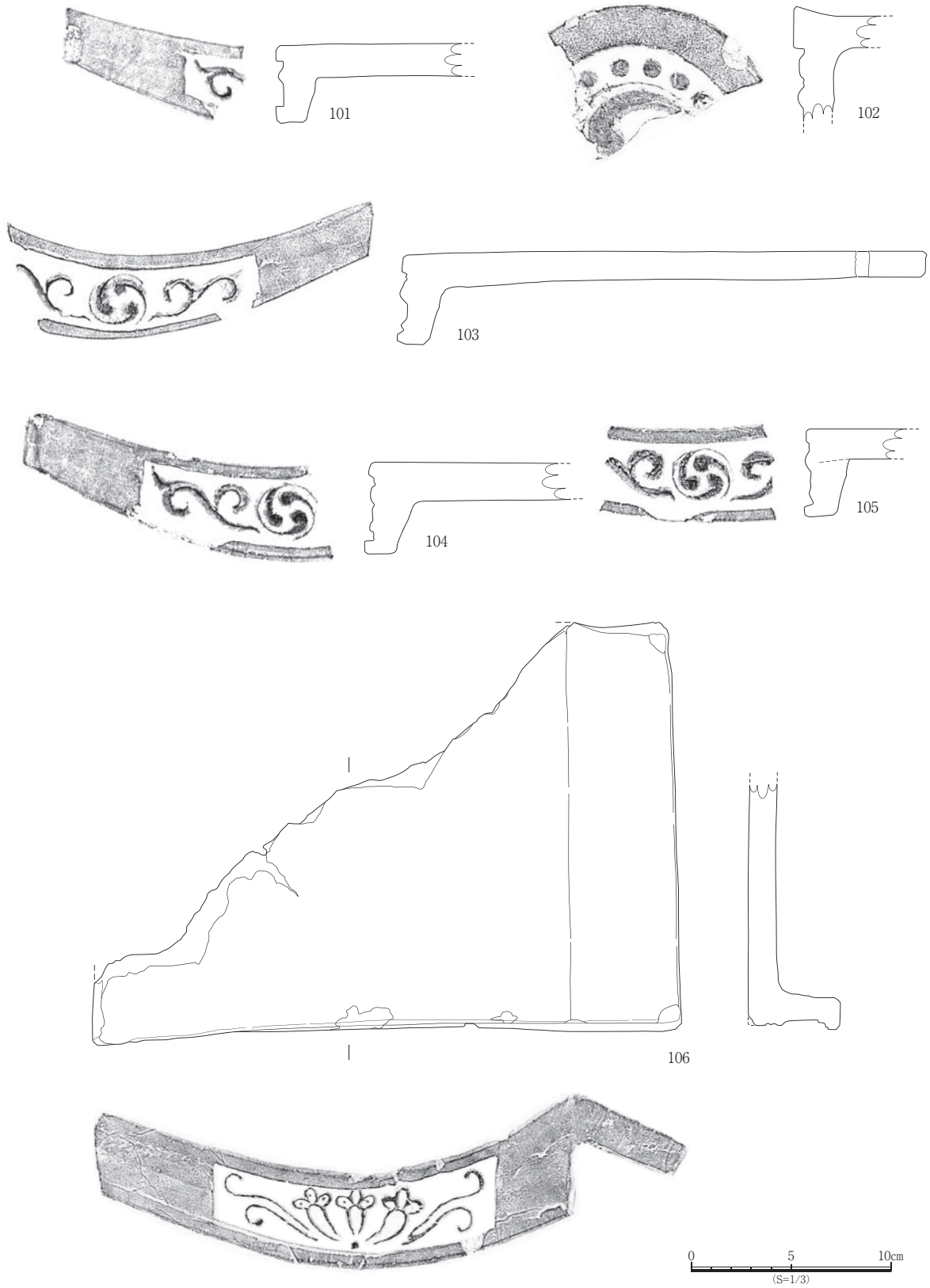


图5-36 SK80出土遺物实测图

2. 検出遺構と遺物 (4) 溝



図5-37 SK80出土瓦刻印1



図5-38 SK80出土瓦刻印2

も垂れている。144は陶器の中皿でしっかりした高台を有す。見込は蛇ノ目状に釉剥、内面は灰釉の上に白化粧土を打込んでいる。145は磁器染付中皿で内面に草花文が描かれている。

146～149は播鉢である。口縁部外面に2条の沈線を施し体部外面には強い擦痕が見られる。内面は櫛目施文の後に横ナデを施している。手法から見て堺産である。150は陶器焜炉と考えられる。内面に粘土帯を貼付している。151は土師質土器の丸形焜炉である。高い脚が付いている。152は陶器の火消壺である。器壁が2cm以上と厚い作りで内面には指頭圧痕が顕著に残る。153は比熱した砂岩礫でスクリントーンのところが著しく磨耗している。

中層の遺物(図5-43)

154は土師質土器小皿である。口縁部の一部にタール状の付着物が見られる。155は陶器の香炉または火入れである。外面に灰釉、内面無釉である。156は磁器染付小碗である。外面は菊文と格子、口縁部内面には四方襷を施文している。157は肥前産の磁器染付中鉢である。口縁部内面に草花文が見られる。

下層の遺物(図5-43)

158～170は土師質土器小皿である。全体的に丁寧な作りで底部や底部の立ち上がりをナデ調整して丸く成形している例もある。165は円盤底部が明瞭に認められる好例である。158・159・161・164・

2. 検出遺構と遺物 (4) 溝

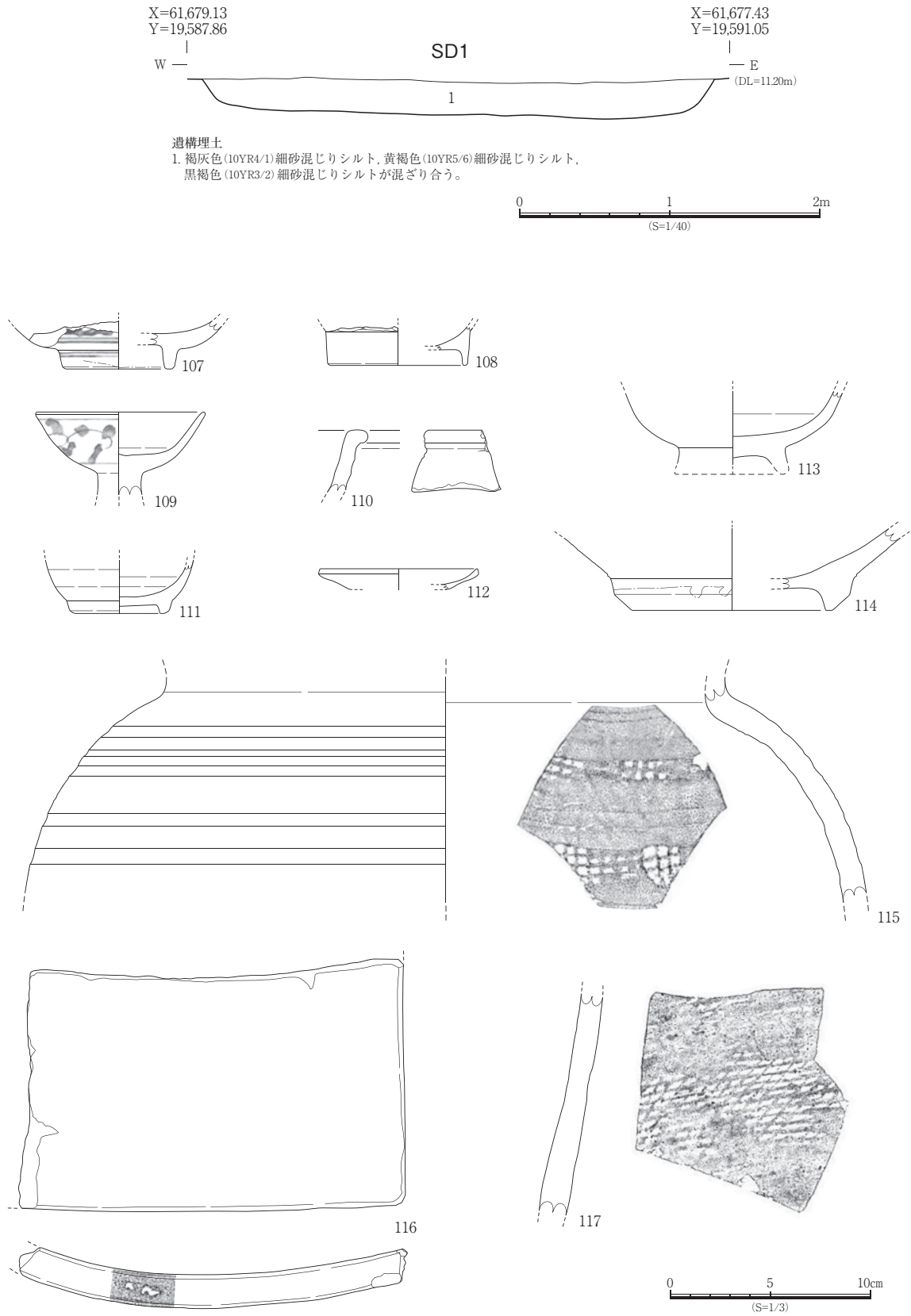


図5-39 SD1及び出土遺物実測図

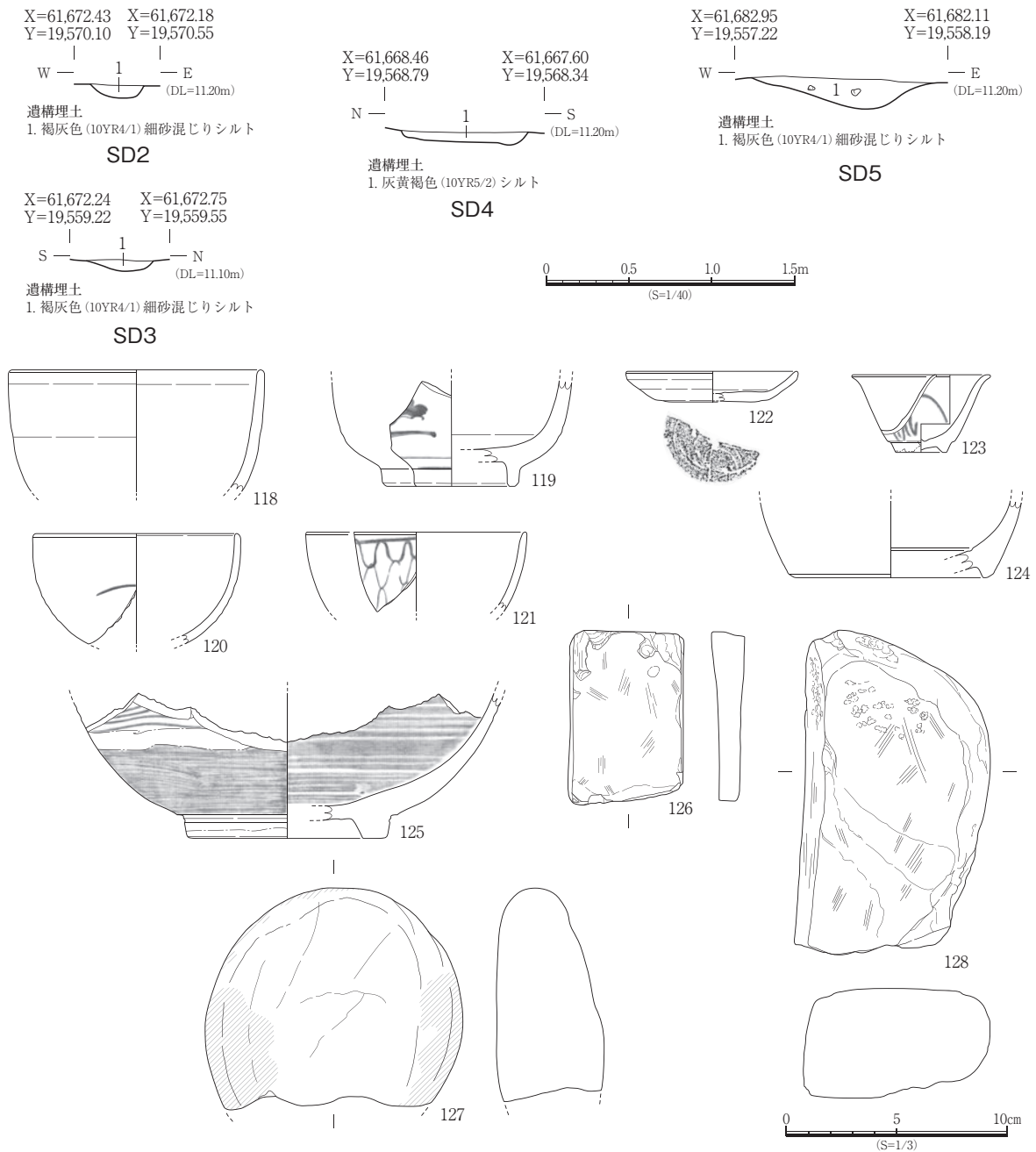


図5-40 SD2~5及び出土遺物実測図

166・167は口縁部の一部にタール状の付着物が見られる。168～170は口縁部に煤が付着している。灯明皿としての使用が考えられる。171は肥前産の磁器染付小皿である。見込を蛇ノ目状に釉剥しコンニャク印判による五弁花が見られる。172は同じく小碗である。外面にコンニャク印判による草花文が見られる。173は陶器の火入れまたは香炉である。内面無釉, 外面は鉄釉を施している。

層位的に取り上げられなかった遺物(図5-44)

174は土師質土器小皿で口縁部にタール状の付着物が見られる。糸切り後に底部外縁を丁寧にナデ調整している。175は備前焼の灯明皿である。176は肥前産の磁器染付中碗, 180は同じく小碗で外面に雨降り文が施されている。177は京焼風陶器碗底部, 178・179・182・183は陶器中碗である。181

2. 検出遺構と遺物 (4) 溝

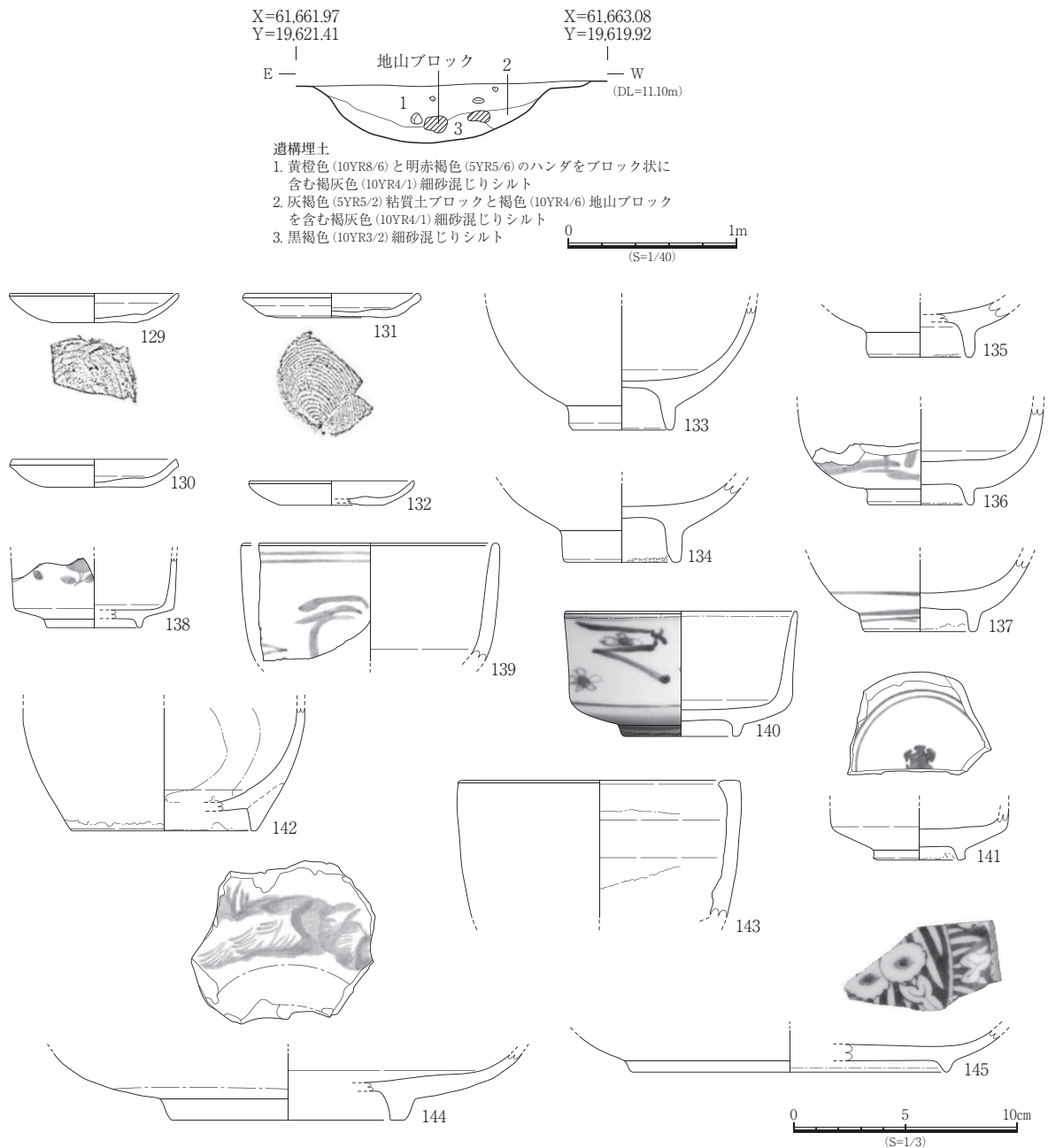


図5-41 SD7及び上層出土遺物実測図1

は京都系の磁器小碗，体部で強く内側に屈曲する。内底に目痕が残る。184は京信楽系陶器の小碗である。外面に鉄絵が施される。185は肥前産の陶胎染付中碗，186は肥前産の陶器中碗で白化粧土打刷毛目が施される。187は肥前産の磁器中碗である。188は肥前内野山窯産の陶器小皿である。189は磁器染付小碗で外面に草花文を描き，畳付に砂目が付着している。190は磁器染付の瓶で，191は白磁の瓶である。192は播鉢で内面は使用による磨耗が顕著である。193は肥前産の陶器片口または鉢である。外面は白化粧土刷毛目である。194は砂岩製の砥石で4面使用されている。195は弥生時代の太形蛤刃石斧の刃部である。全面研磨されている。現存長は11.5cmであるが本来は20cm前後，1,500g程の重量を有していたと考えられる。石材は当該石斧として最も一般的な御荷鉢緑色岩類である。近隣

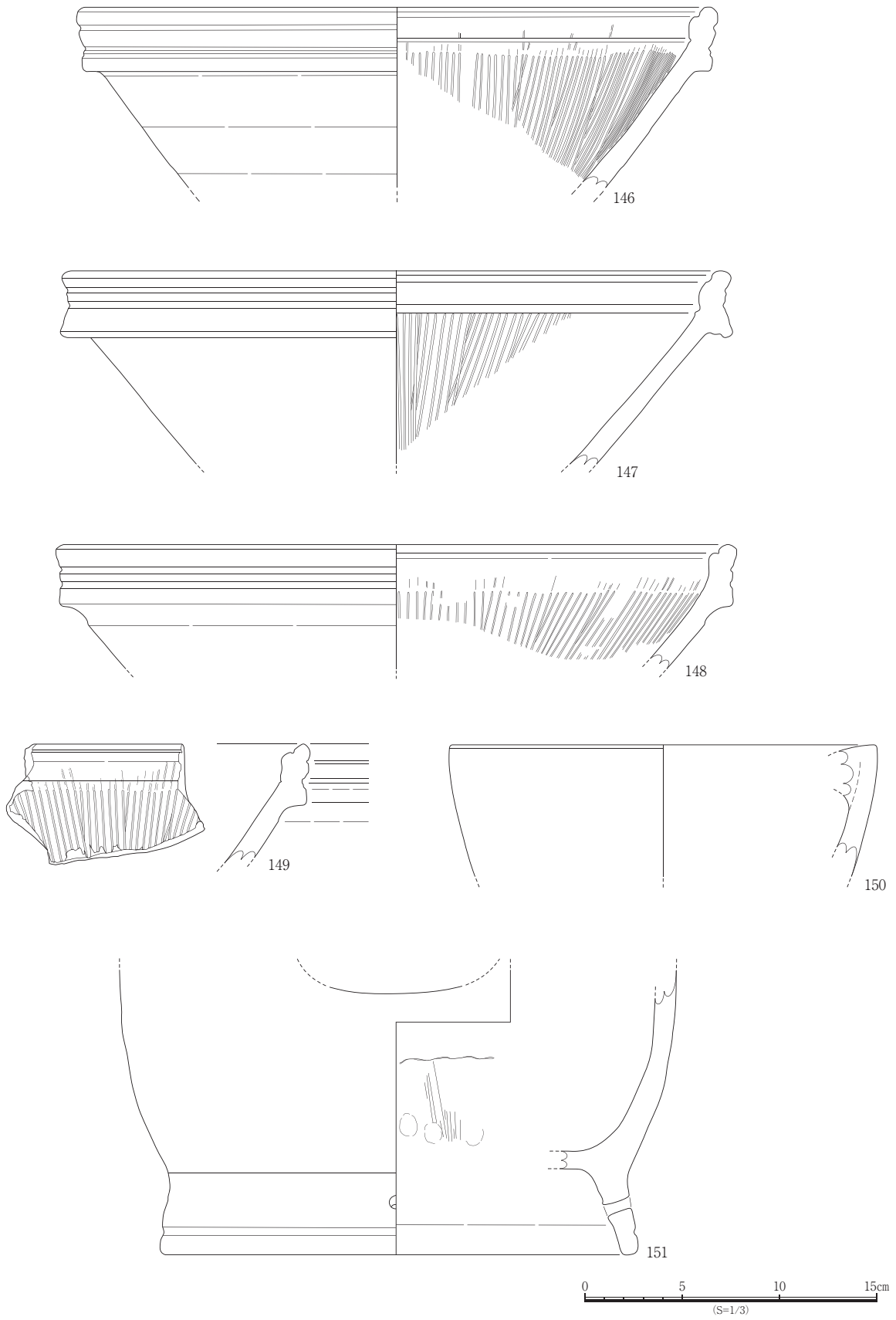


图5-42 SD7上層出土遺物実測图2

2. 検出遺構と遺物 (4) 溝

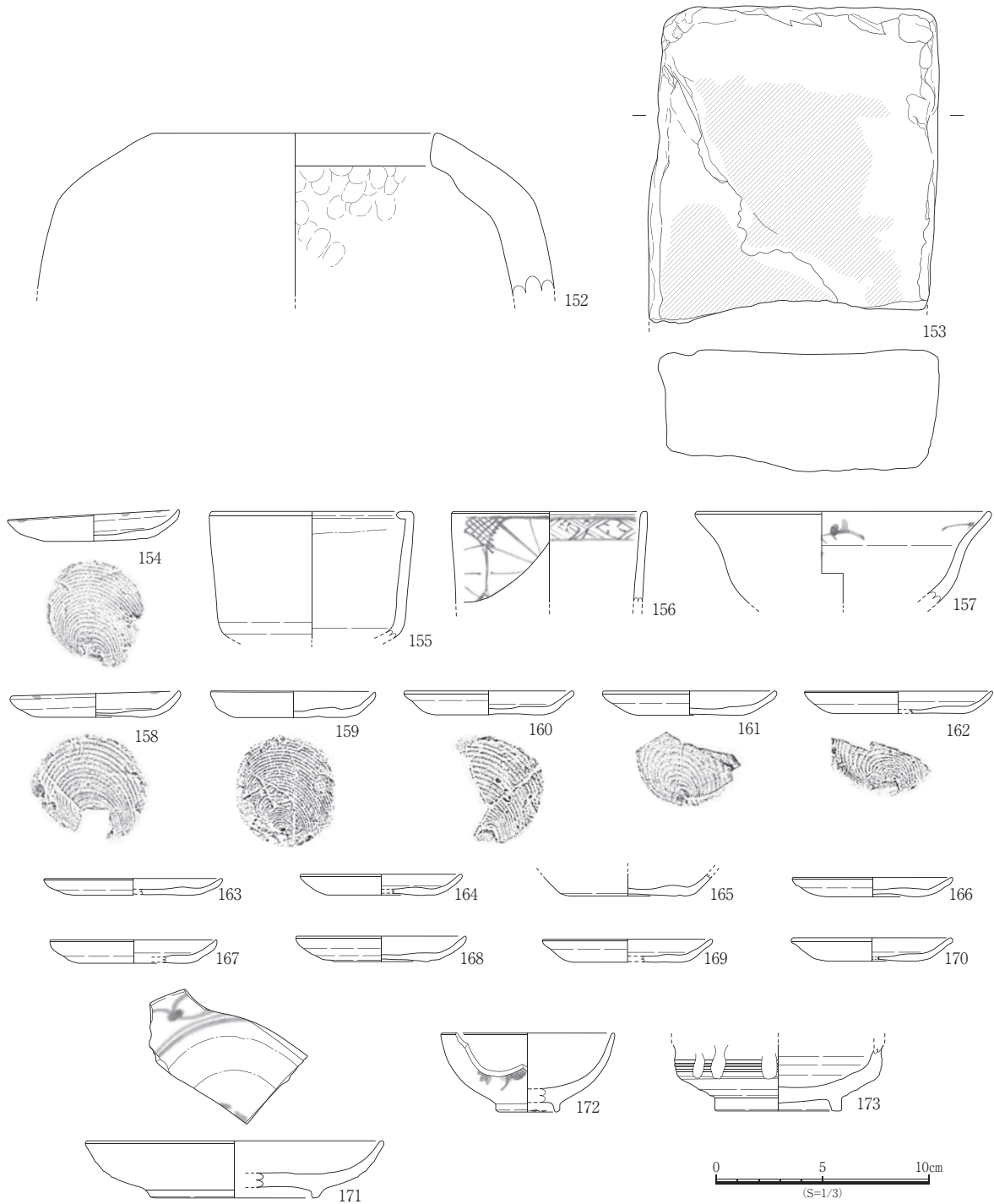


図5-43 SD7上層～下層出土遺物実測図

に弥生時代の遺跡が存在しているものと考えられる。196は平瓦片である。

SD8(図5-45)

調査区の東北隅(B3-7-21)に位置しSD7と平行して走りやがてSD7に合流する。確認延長は7.0m, 幅0.5m前後, 深さ17cmである。埋土は黒褐色シルトに褐色シルトが混入している。遺物は焼締め陶器の播鉢片(197)が出土している。SD7と同時期に機能した区画溝と考えられる。

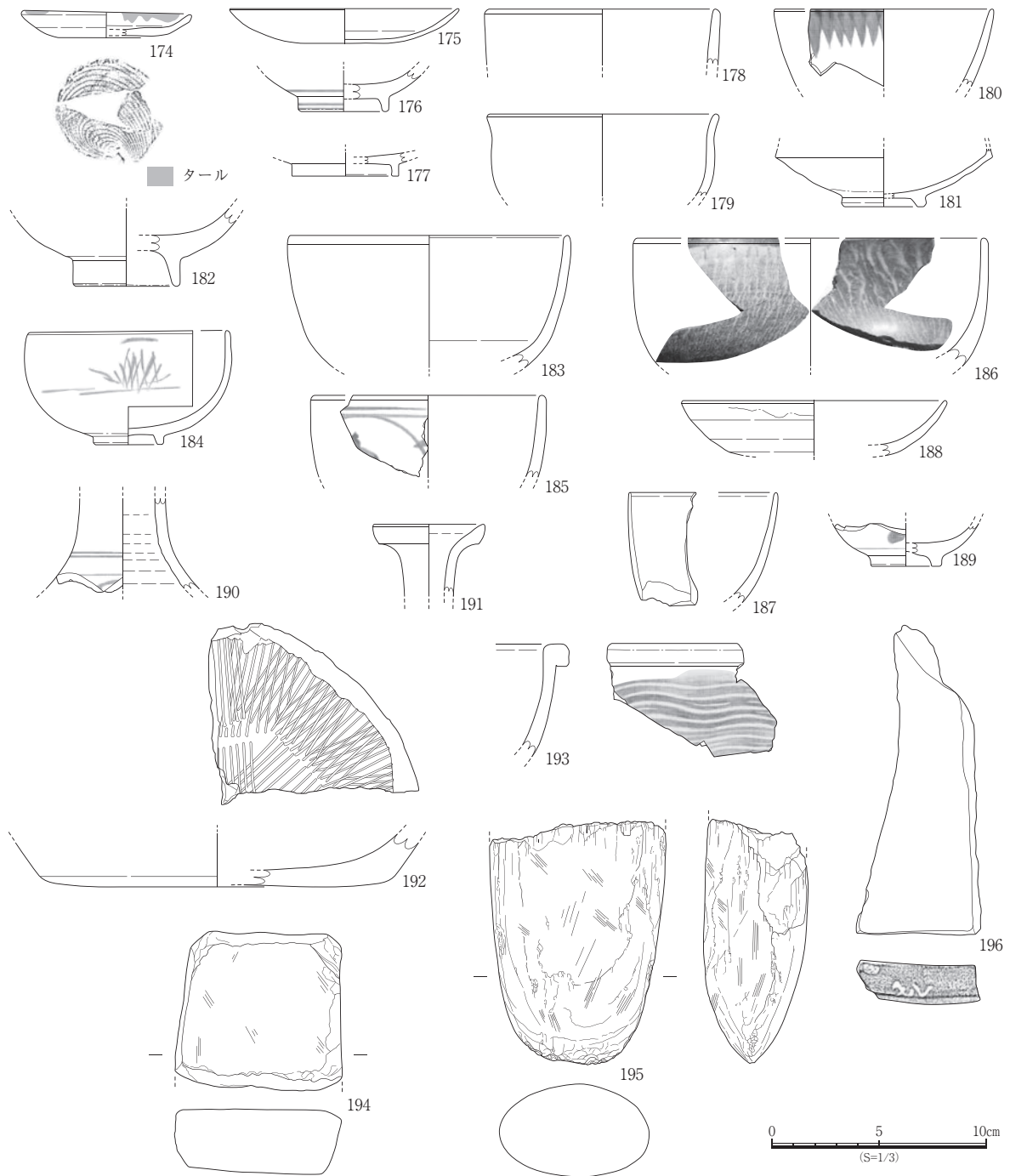


図5-44 SD7出土遺物実測図

SD9(図5-45)

SK53 から南へSD10 と併行して延びる溝で南端でSD10 と合流しSD11 とも繋がる。確認延長は16.0m, 幅は40~90cmで深さは30cm前後である。一部二段に掘られている。埋土は黒褐色シルトに褐色シルトが混入している。遺物は磁器小皿(198), 肥前産の磁器染付中碗(200), 堺産の播鉢(199)が出土している。200は外面に山水文が描かれている。SD9は屋敷区画溝の一部をなす溝である。

SD10(図5-45)

延長14.0m, 幅25~40cm, 深さ10cm前後である。埋土は黒褐色シルトに褐色シルトが混入してい

2. 検出遺構と遺物 (5) 柱穴

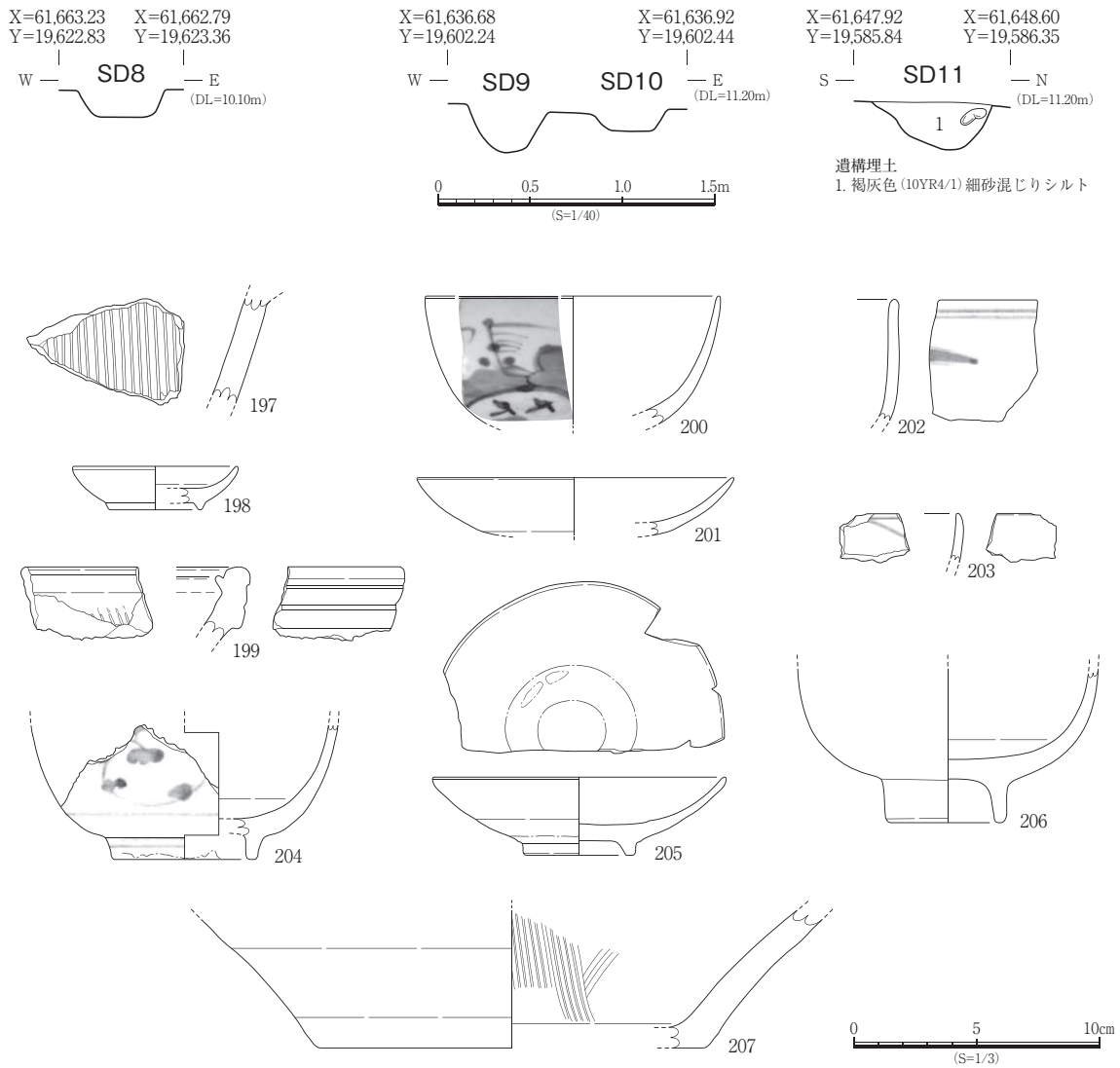


図5-45 SD8~11及び出土遺物実測図

る。遺物は陶器小皿(201), 陶胎染付中碗(202), 焼締陶器の挿鉢(207)が出土している。201は内面に銅緑釉をかけた肥前内野山窯の産である。202は肥前産の陶胎染付中碗, 外面に二重の圈線が見られる。

SD11(図5-45)

調査区の南縁の東半分を走る溝である。延長31.5m, 幅30~50cm, 深さは東部では10cm前後であるが西端では5cm未満となる。埋土は黒褐色シルトに褐色シルトが混入している。遺物は陶胎染付中碗(203・204), 陶器中碗(206), 陶器小皿(205)が出土している。204は肥前産の中碗で外面に草花文, 圈線が見られる。206も肥前産の中碗, 205は内面に銅緑釉をかけた肥前内野山窯産で見込の蛇ノ目状釉剥に砂目が付着している。

(5) 柱穴(図5-46)

多くのピットを検出したが, 遺物が出土した例は少ない。その中で図示できたものは更に僅少である。P3からは磁器染付鉢(208), P4からは須恵器口縁部の細片(211), P5からは磁器染付皿(209), P6からは陶胎染付碗細片(212), P7からは陶器小碗(210)が出土している。P1・2・8からは砥石(213~215)が出土している。

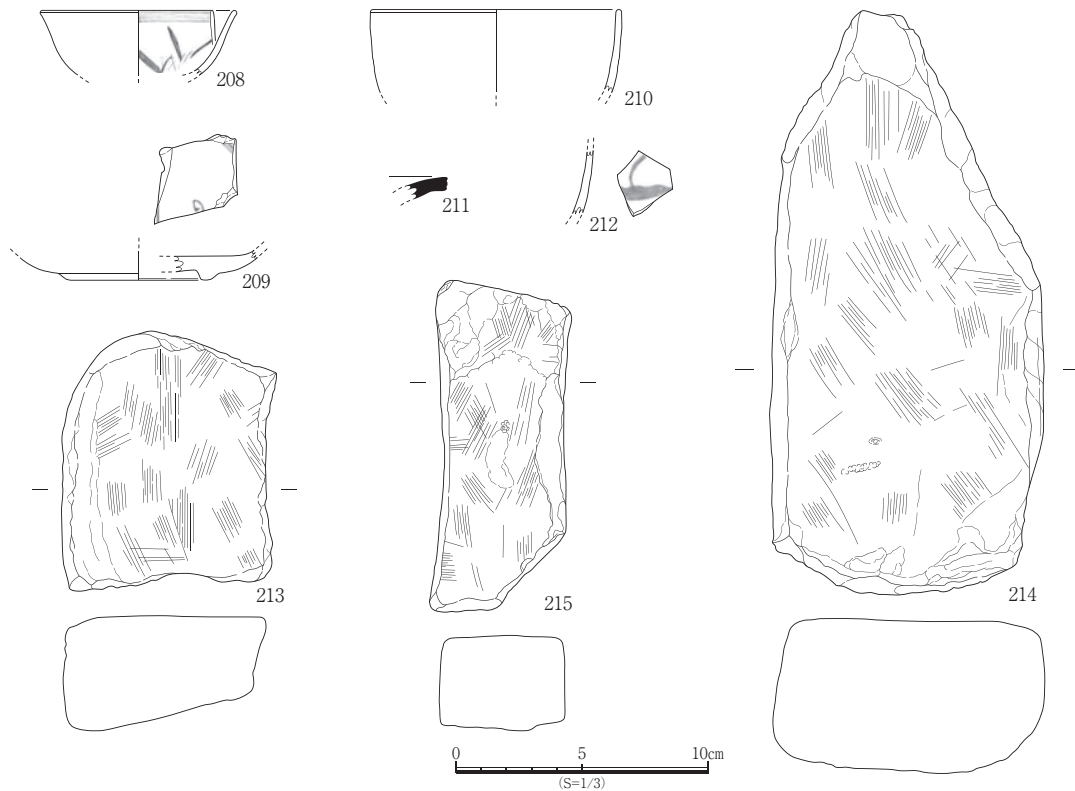


図5-46 柱穴出土遺物実測図

(6) 性格不明遺構

SX1 (図5-47)

調査区東南部にある方形の大きな落ち込みで長軸 28.0m, 短軸 20.0m, 深さ 20～30 cmを測る。床面は平坦ではなく畝状の高まりも見られる。埋土は黒褐色のシルトで締まりのない堆積を示している。遺物は土師質土器小皿や近世陶磁器が出土している。216～220は土師質土器小皿で口縁部の一部にタール状の付着物が見られる。灯明皿として使用したものと考えられる。221・223は肥前産の陶器中碗で、221は外面に鉄錆による山水文を描いている。222は磁器染付小碗である。224・225は磁器染付中碗である。226・227は内面に銅緑釉を施した肥前内野山窯の陶器小皿、228は肥前産の磁器色絵染付中皿で赤・青緑・黄緑・黒の上絵付けによる花唐草文が描かれている。

(7) 遺物包含層等(図5-48)

遺物包含層の堆積は薄く遺物も僅少である。主に近世陶磁器が出土している。白磁または染付猪口(229), 磁器染付猪口(230・237), 備前灯明皿(231), 磁器染付中碗(233), 京信楽系の陶器小碗(234・240), 肥前産又は肥前系の磁器染付小皿(235), 肥前波佐見産の磁器染付小皿(242), 肥前産の磁器染付鉢(241), 青磁香炉(239), 陶器の香炉又は火入(243), 磁器瓶(238), 陶器鉢(236), 陶器鍋(245), 丹波甕底部(244), 同口縁部(246・247), 白磁碗(232)を図示した。

3. 小結

(1) 遺構

C区は現在の水田畦畔とほぼ重なって東・西・南をSD3・5・7・9・11などの区画溝によって囲まれ

3. 小結 (1) 遺構

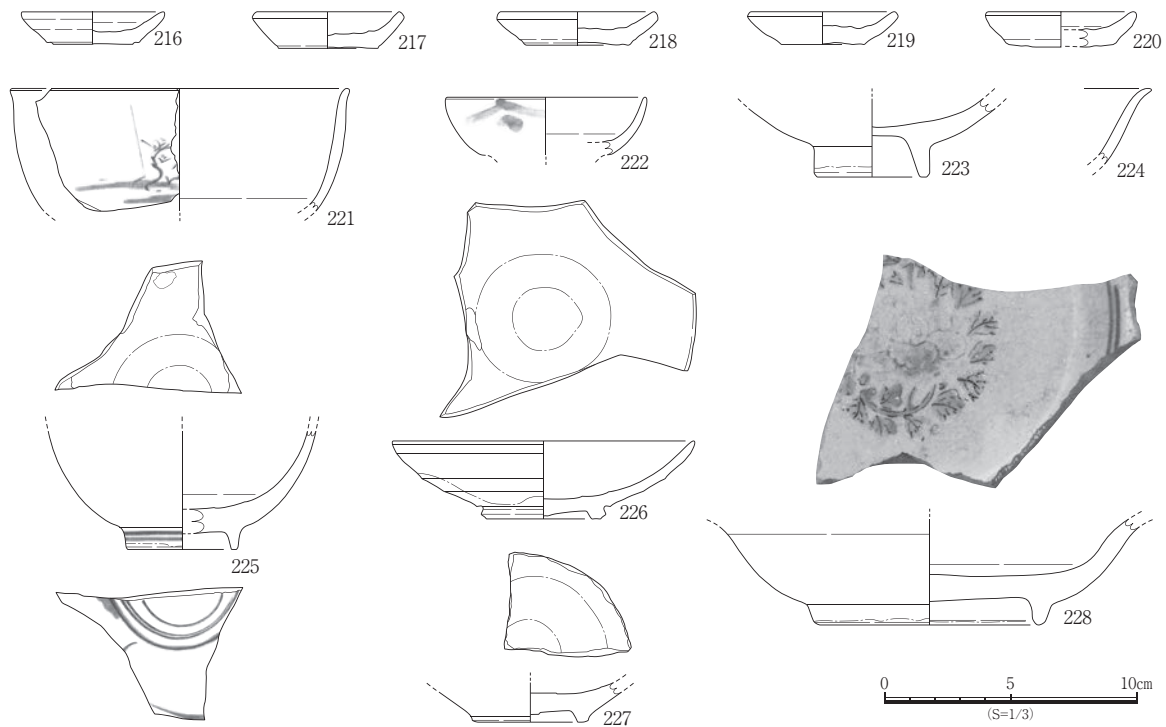


図5-47 SX1出土遺物実測図

た近世の屋敷跡である。北部を隔する溝が見られないことから北にはさらに広がるものと考えられる。南辺の中央部で7.0m程溝が切れているのは、そこに入り口が設けられていたものと考えられる。中央部分には遺構のない350㎡ほどの空白地が広がり、東と西に各種の遺構が集中的に分布している。この空白地は本来構造物がなかったのか、それとも礎石建物などがあって後世に削平されて消失した可能性も考えられるが、入り口の位置や東西の遺構のあり方などから見てここでは後者の立場に立ちたい。

西部は6棟の掘立柱建物(SB1~5・8)が見られ、SB1~5は桁行3間から4間ほどの比較的大きな建物で軸線が区画溝に沿っておりSB3は東西棟で、SB1・2・4・5は南北棟である。SB1とSB2、SB4とSB5は同じところで立て替えられている。これらは規模や形態から見て牛小屋あるいは馬小屋として考えることができよう。先後関係や同時に東・西が存在していたのかなどは明らかにすることは難しい。SB1とSB2の床面南にあるSK22は民俗例から見て建物に付属する土坑と考えられる。

東部は桁行2間で梁行の広い建物が2棟(SB6・7)見られるが小型であり居住用とは考えられない。東部には肥溜め土坑群が多く分布している。北方のSK27・36・39・42(1群)、SK43~45(2群)と南のSK70~76・79(3群)をあげることができる。本文でも触れたように北のSK27の群には上屋が想定される。南の群は多くが密集重複関係にあるが3~4基が同時に存在していたものと考えられる。南の群にも柱穴が並ぶことから上屋があったものと考えられる。西部で確認したSK19~21も同様の土坑群(4群)であろう。これらのうち3群と4群にはハンダを用いた例が見られる。ハンダの有無にかかわらずこのような土坑群は、高知平野の近世から近代にかけての農村地帯で多く見られる遺構である。

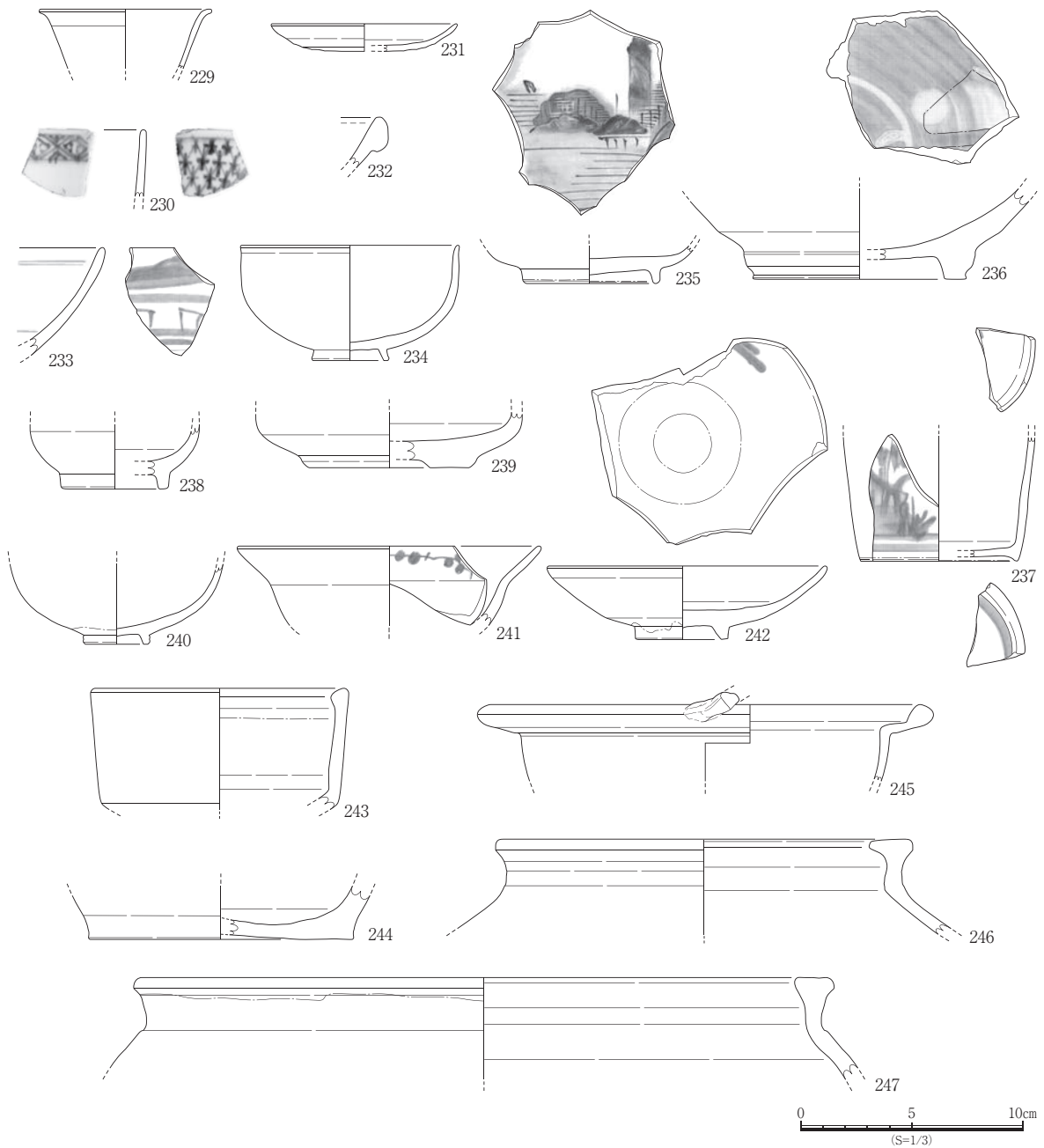


図5-48 遺物包含層等出土遺物実測図

(2) 遺物

遺物は大半がSK53とSD7から出土している。18世紀代を中心に19世紀、一部近代に属する例が見られる。この他、太形蛤刃石斧の優品や細片ながら弥生後期土器や須恵器も認められることは、当該期の集落址などが存在していたと考えられよう。またハンダは文献によれば寛政11年(1799年)に伝えられており時期判断の目安となっている⁽¹⁾。C区の遺構は、18世紀に成立し一部近代まで変遷が辿れる屋敷跡として捉えることができる。敷地の中央部に母屋が建ちその周辺に牛小屋、肥溜めとしての便所、納屋などの施設を有する典型的な農村の屋敷景観を復元することができよう。このような屋敷景観は戦後も長らく見られた農村景観でありその原型として位置付け

3. 小結 (2) 遺物

ることができよう。

註

- (1) ハンダ技術の起源に関して、『皆山集』には「はんだ井戸輪その外はんだの諸器寛政十一年巳未江州より来りて採貫井戸師より浦戸町角屋六平に傳法して作り始め今に至る」とある。

第Ⅵ章 I D区

1. 調査の概要と基本層序

(1) 調査の概要

調査第Ⅰ区の中央部に位置する調査区で、調査面積は2,847㎡である。遺構は調査区南西部に集中しており、近世の屋敷跡が確認されている。検出された遺構は掘立柱建物3棟、土坑77基、溝45条などで、遺物は土坑や溝から多く出土している。

(2) 基本層序(図6-1)

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

- 第Ⅰ層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト層
- 第Ⅱ層 灰黄褐色(10YR4/2)シルト層
- 第Ⅲ層 黒褐色(10YR2/2)シルト層
- 第Ⅳ層 黒色(10YR2/1)シルト層
- 第Ⅴ層 暗褐色(7.5YR3/3)シルト層

2. 検出遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

SB1(図6-3)

桁行3間(5.9m)、梁行2間(5.3m)の南北棟で、棟方向はN-41°-Eである。柱穴間は平側で1.6~2.2m、妻側で2.5~2.8mで、柱筋通りは良い。柱穴の掘方は円形及び楕円形を呈し、径30~50cm、深さ20~50cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

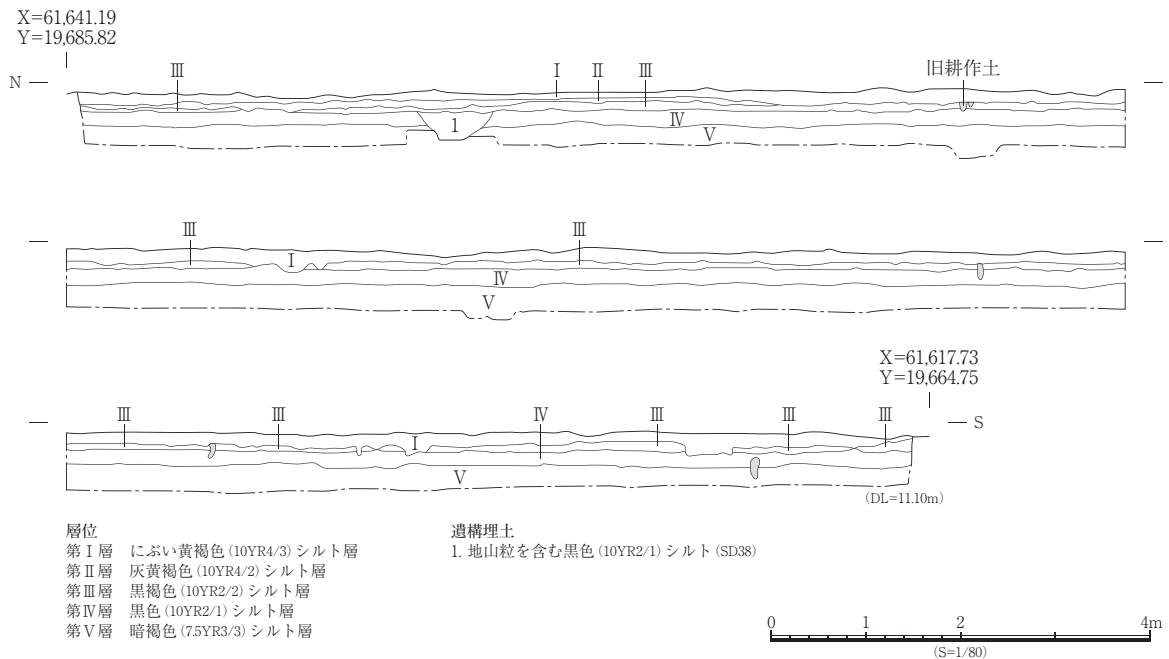


図6-1 調査区東壁セクション図

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

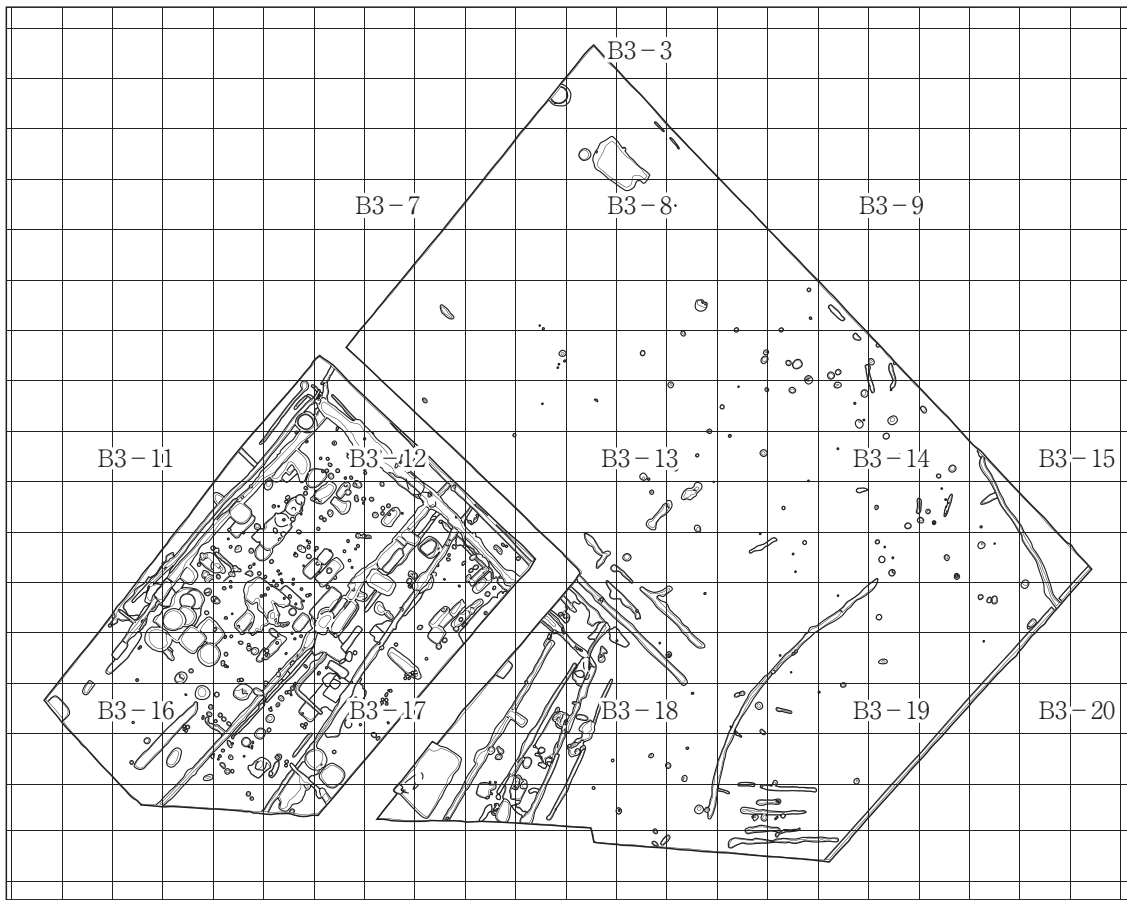


図6-2 調査区グリッド設定図

SB2(図6-4)

桁行3間(5.1m), 梁行1間(1.5m)の東西棟で, 棟方向はN-50°-Wである。柱穴間は平側で1.6~1.8m, 妻側で1.5mで, 柱筋通りは良い。柱穴の掘方は円形及び楕円形を呈し, 径20~40cm, 深さ20~30cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は土師器が出土している。

SB3(図6-5)

桁行3間(5.6m), 梁行2間(4.2m)の南北棟で, 棟方向はN-44°-Eである。柱穴間は平側で1.8m, 妻側で1.8~2.0mで, 柱筋通りは良い。柱穴の掘方は円形及び楕円形を呈し, 径30~60cm, 深さ10~50cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は弥生土器, 土師器, 陶器が出土している。

(2) 土坑

SK1(図6-6・8)

調査区南部に位置する土坑(B3-17-18)で, 平面形は楕円形を呈し, 長軸1.4m, 深さ12~14cmを測る。短軸は不明で, 埋土は黒褐色(10YR3/1)粘土質シルトである。SX3を切り, 南側はSK2に切られており, 遺物は土師器, 須恵器, 陶器, 瓦, 金属製品が出土している。

1は金属製品の銭貨である。

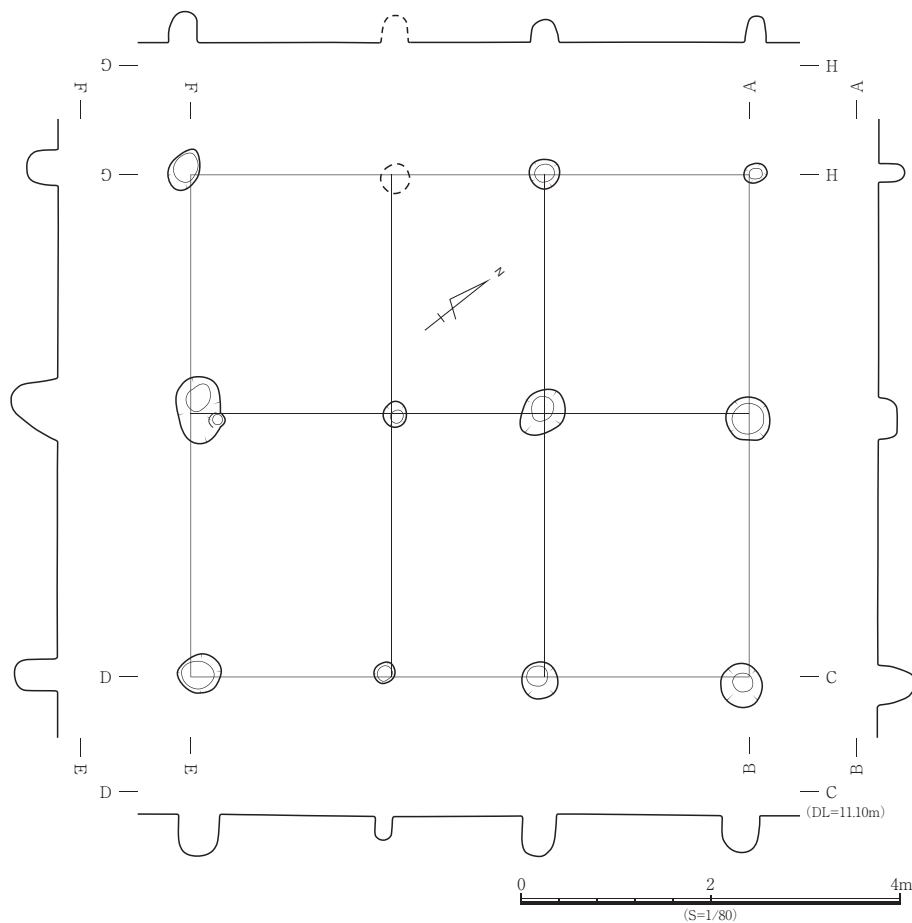


図6-3 SB1

SK2(図6-6)

調査区南部に位置する土坑(B3-17-18)で、平面形は楕円形を呈し、長軸1.2m、深さ11～16cmを測る。短軸は不明で、埋土は1層が暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト、2層が黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトである。SK1、SX3を切っており、遺物は土師器、須恵器、陶器が出土している。

SK3

調査区南部に位置する土坑(B3-17-25)で、平面形は不整形を呈し、長軸0.5m、短軸0.4m、深さ15～32cmを測る。埋土は1層が中礫と明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックが混じる灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂質シルト、2層が明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで、遺物は磁器、陶器、土師質土器、瓦質土器、瓦が出土している。

SK4

調査区中央部に位置する土坑(B3-17-4)で、平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.4m、短軸1.2m、深さ23cmを測る。北側をSK11・12に切られており、埋土は1層が明黄褐色(10YR6/6)中粒砂と黒色(10YR2/1)シルトのブロック混じりの黒褐色(10YR2/2)シルト、2層が明黄褐色(10YR6/6)中粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、3層が黒褐色(10YR3/2)シルトと暗褐色(7.5YR3/4)シルトのブロック土、4層が灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトで、遺物は皆無であった。

SK5(図6-7・8)

調査区西部の南側に位置するハンダ土坑(B3-17-17)で、平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.8m、短

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

軸1.8m, 深さ62cmを測る。埋土は1層が暗褐色(7.5YR3/4)シルト, 明黄褐色(10YR6/6)中粒砂, 黒色(10YR2/1)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト, 2層が黒色(10YR2/1)シルト, 明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックと中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト, 3層が明黄褐色(10YR6/6)中粒砂, にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土のブロックと中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は須恵器, 磁器, 陶器, 瓦が出土している。

2は磁器の碗である。

SK6

調査区南部に位置する土坑(B3-17-15)で, 平面形は隅丸長方形を呈し, 長軸1.8m, 短軸0.7m, 深さ14~20cmを測る。北西側はSD2を切り, 埋土は1層が黒褐色(10YR3/2)シルト, 2層が中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト, 3層が黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は皆無であった。

SK7

調査区西部に位置する土坑(B3-17-2)で, 平面形は隅丸長方形を呈し, 長軸2.3m, 短軸0.6m, 深さ13~16cmを測る。南西側はSX32を切り, 埋土は黒色(10YR2/1)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は弥生土器が出土している。

SK8

調査区中央部に位置する土坑(B3-12-25)で, 平面形は隅丸長方形を呈し, 長軸1.9m, 短軸0.5m, 深さ15~20cmを測る。北東側はSD16に切られ, 埋土は明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は磁器, 陶器が出土している。

SK9

調査区中央部に位置する土坑(B3-12-25)で, 平面形は隅丸長方

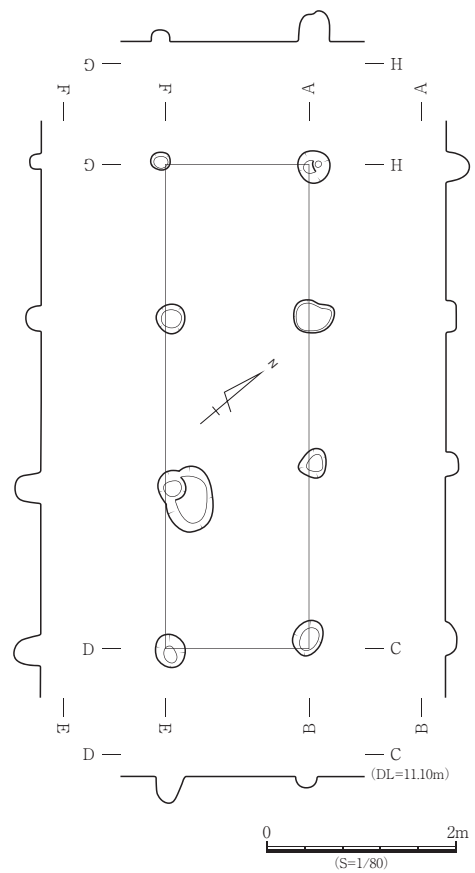


図6-4 SB2

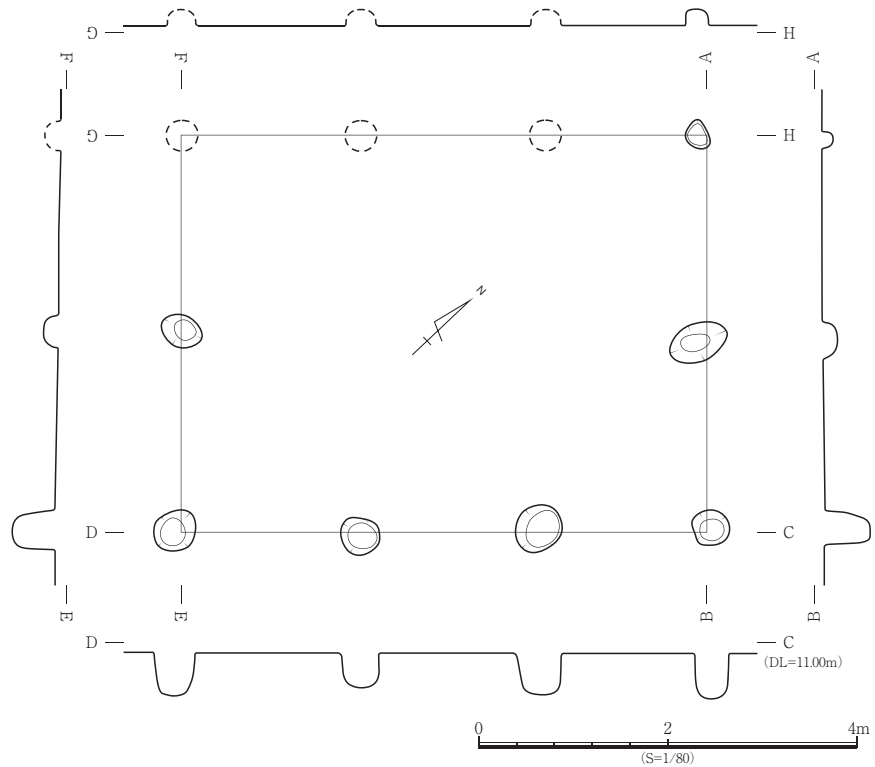


図6-5 SB3

形を呈し、長軸1.3m、短軸0.7m、深さ24cmを測る。北東側はSK10に切れ、埋土は明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は須恵器、磁器の細片が出土している。

SK10

調査区中央部に位置する土坑(B3-12-25)で、平面形は不整形を呈し、長軸0.7m、短軸0.7m、深さ17cmを測る。南西側はSK9を切り、埋土は明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックが混じる灰黄褐色(10YR4/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK11

調査区中央部に位置する土坑(B3-17-4)で、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸2.1m、短軸0.6m、深さ13cmを測る。南側はSK4を切り、埋土は1層が明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックが混じる暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト、2層が黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトで、遺物は磁器、瓦が出土している。

3は磁器の碗である。

SK12(図6-9)

調査区中央部に位置する土坑(B3-17-4)で、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸3.1m、短軸0.6m、深さ12~24cmを測る。南側はSK4を切り、埋土は明黄褐色(10YR6/6)中粒砂と暗褐色(7.5YR3/4)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が黒褐色(10YR3/2)シルトと小礫混じりの暗褐色(7.5YR3/4)シルト、3層が暗褐色(7.5YR3/4)シルト混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、陶器、土師質土器、瓦質土器が出土している。

SK13(図6-10~17)

調査区西部に位置する土坑(B3-17-16)で、平面形は円形を呈し、長軸1.7m、短軸1.6m、深さ66cmを測る。南西側はSX34を切り、北西側はSD6に切られる。埋土は1層が小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が暗褐色(10YR3/3)シルト、3層が黒褐色(10YR3/2)シルト、4層が中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、5層が中礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)シルトで、遺物は弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器、磁器、陶器、瓦が出土している。

4~19は磁器で、4~12は碗、13は杯、14~16は蓋、17は皿、18は水滴、19は火入である。20~22

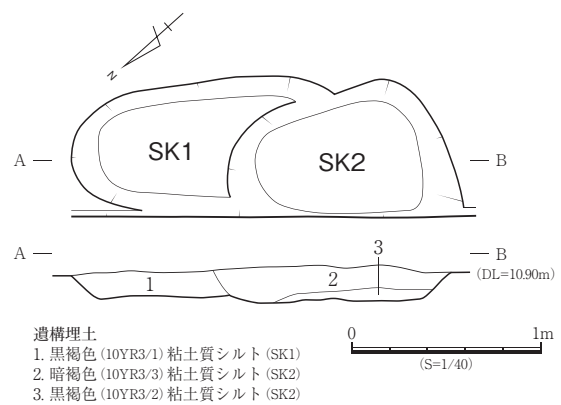


図6-6 SK1・2

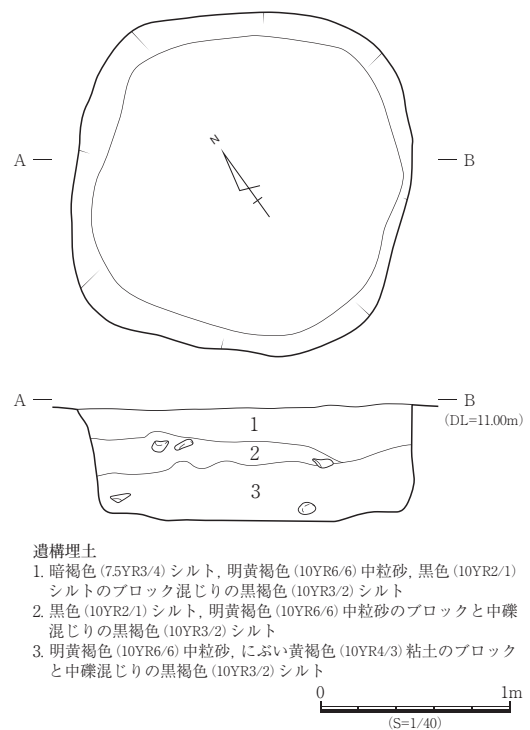


図6-7 SK5

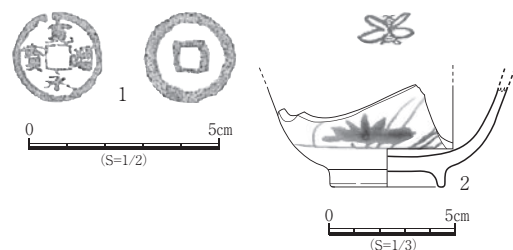


図6-8 SK1・5出土遺物実測図

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

は白磁で, 20は皿, 21は鉢, 22は瓶である。23~43は陶器で, 23・24は碗, 25・26は皿, 27は瓶掛, 28は土瓶, 29~31は蓋, 32は段重, 33は灯明台, 34は鉢, 35~39は播鉢, 40~43は甕である。44は瓦質土器の焜炉, 45はガラス製品の瓶である。

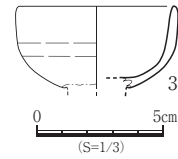


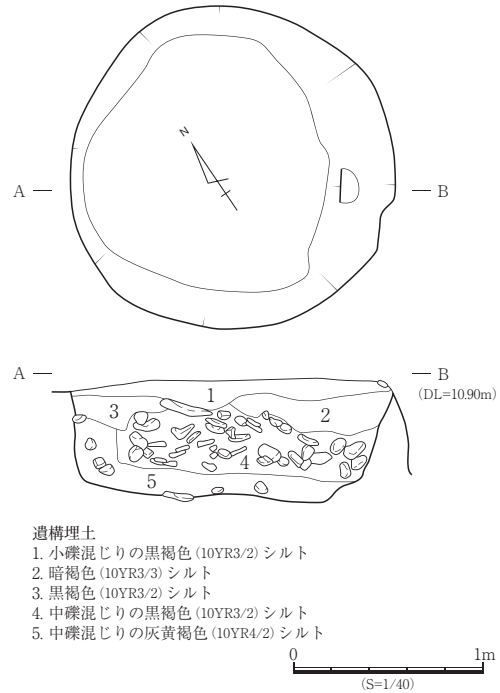
図6-9 SK11出土遺物実測図

SK14

調査区中央部に位置する土坑(B3-17-10)で, 平面形は隅丸長方形を呈し, 長軸 1.5m, 深さ 19 cmを測る。北西側は調査区外へ続き, 短軸は不明で, 埋土は1層が中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト, 2層が黒褐色(10YR3/2)シルト, 3層が小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト, 4層が黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は陶器, 土師質土器が出土している。

SK15

調査区中央部に位置する土坑(B3-17-4)で, 平面形は不整楕円形を呈し, 長軸 3.2m, 短軸 0.6m, 深さ 10~14 cmを測る。埋土は明黄褐色(10YR6/6)中粒砂混じりの黒褐色(10YR3/2)中粒~粗粒砂質シルトで, 遺物は皆無であった。



- 遺構埋土
1. 小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト
 2. 暗褐色(10YR3/3)シルト
 3. 黒褐色(10YR3/2)シルト
 4. 中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト
 5. 中礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)シルト

図6-10 SK13

SK16

調査区西部の南側に位置する土坑(B3-16-20)で, 平面形は不整形を呈し, 長軸 1.7m, 短軸 1.2m, 深さ 3~19 cmを測る。埋土は1層が明黄褐色(10YR6/6)中粒砂と小・中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト, 2層が暗褐色(7.5YR3/4)シルトと黒色(10YR2/1)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は須恵器が出土している。

SK17

調査区西部の南側に位置する土坑(B3-17-16)で, 平面形は不整形を呈し, 長軸 1.4m, 短軸 0.4m, 深さ 5 cmを測る。埋土は明黄褐色(10YR6/6)中粒砂と小・中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は皆無であった。

SK18

調査区南部に位置する土坑(B3-17-20)で, 平面形は楕円形を呈し, 長軸 0.6m, 短軸 0.5m, 深さ 10 cmを測る。北西側はSD2を切り, 埋土は暗褐色(7.5YR3/4)シルト混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は磁器, 陶器, 土師質土器が出土している。

SK19

調査区中央部に位置する土坑(B3-17-4)で, 平面形は不整隅丸長方形を呈し, 長軸 1.8m, 短軸 0.5m, 深さ 5~20 cmを測る。埋土は明黄褐色(10YR6/6)中粒砂と小礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルトで, 遺物は皆無であった。

SK20

調査区中央部に位置する土坑(B3-12-18)で, 平面形は不整隅丸長方形を呈し, 長軸 1.8m, 短軸



图6-11 SK13出土遺物実測図1

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

0.9m, 深さ 12～16 cmを測る。埋土は明黄褐色(10YR6/6)中粒砂混じりの黒褐色(10YR3/1)シルトで, 遺物は土師質土器, 磁器, 陶器, 土製品が出土している。

SK21 (図6-18～20)

調査区中央部に位置するハンダ土坑(B3-12-24)で, 平面形は隅丸方形を呈し, 長軸 1.5m, 短軸 1.4m, 深さ 52 cmを測る。埋土は 1層が明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックが混じる黒褐色(10YR3/1)シルト, 2層が明黄褐色(10YR6/6)中粒～粗粒砂のブロックが混じる黒褐色(10YR3/1)シルトで, 明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックが混じる黒褐色(10YR3/1)シルトで, 遺物は土師器, 須恵器, 磁器, 陶器, 石製品が出土している。

46・47は磁器で, 46は碗, 47は瓶である。48～52は陶器で, 48は碗, 49は皿, 50は鉢, 51・52は播鉢である。53は石製品の砥石である。

SK22

調査区西部に位置する土坑(B3-17-7)で, 平面形は隅丸長方形を呈し, 長軸 1.8m, 短軸 0.7m, 深さ 13 cmを測る。南側はSX42を切り, 埋土は明黄褐色(10YR6/6)中粒砂と小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は皆無であった。

SK23

調査区中央部に位置する土坑(B3-17-8)で, 平面形は長楕円形を呈し, 長軸 3.3m, 短軸 0.9m, 深さ 4～6 cmを測る。埋土は明黄褐色(10YR6/6)中粒砂と小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は皆無であった。

SK24

調査区西部に位置する土坑(B3-17-2)で, 平面形は隅丸長方形を呈し, 長軸 3.0m, 短軸 1.2m, 深さ 9～21 cmを測る。南東側はSX48・49を切る。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は陶器が出土している。

SK25

調査区西部に位置する土坑(B3-17-2)で, 平面形は隅丸長方形を呈し, 長軸 3.2m, 短軸 1.1m, 深さ 8～29 cmを測る。南西側はSX32, 北西側はSD11, SX47～49を切り, 埋土は 1層が黒褐色(10YR3/2)シルト, 2層が小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト, 3層が黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は皆無であった。

SK26

調査区中央部に位置する土坑(B3-23-23)で, 平面形は隅丸長方形を呈し, 長軸 2.4m, 短軸 1.3m,

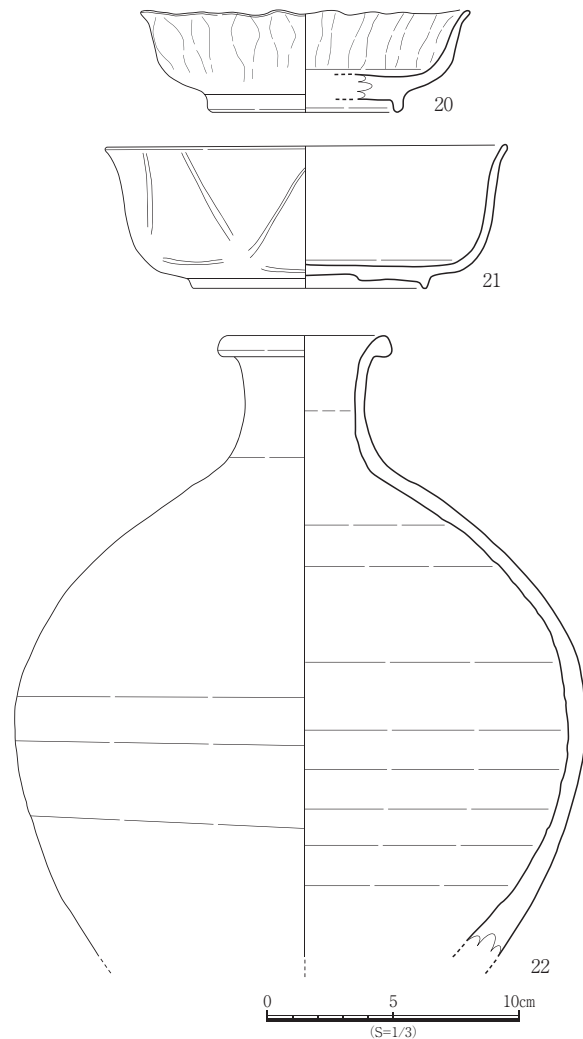


図6-12 SK13出土遺物実測図2

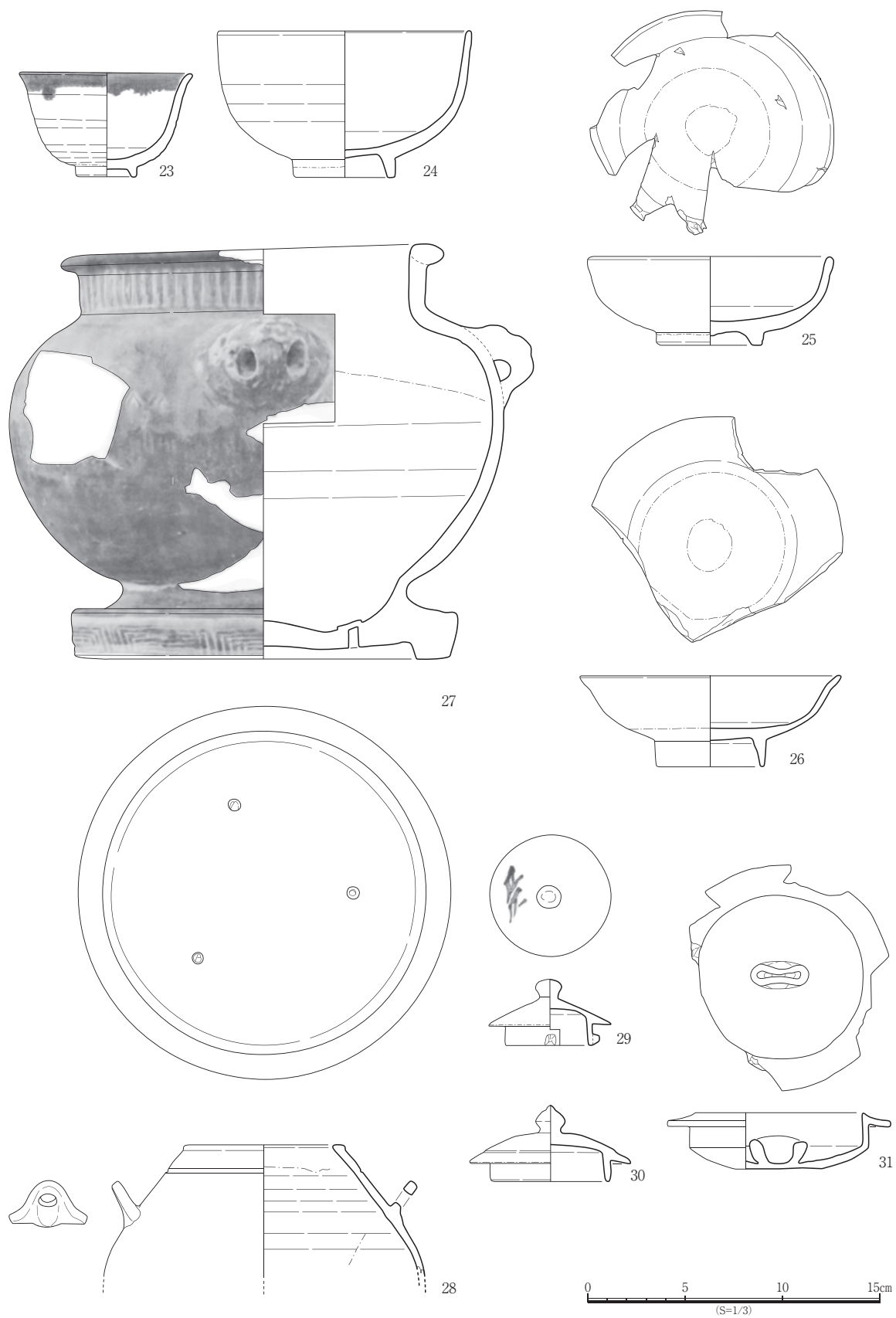


图6-13 SK13出土遺物実測図3

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

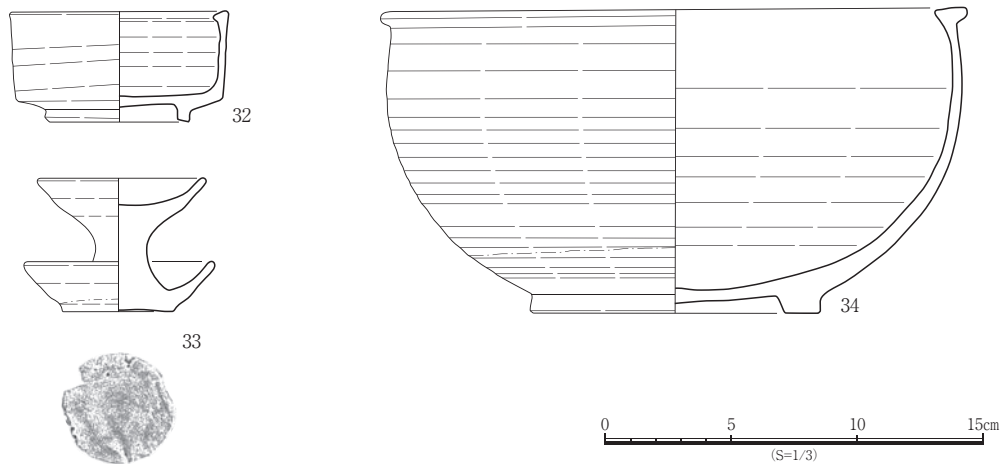


図6-14 SK13出土遺物実測図4

深さ 29～32 cmを測る。北西側はSD11 を切り、埋土は1層が明黄褐色(10YR6/6)中粒砂混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト、2層が明黄褐色(10YR6/6)中粒砂と小礫混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト、3層が明黄褐色(10YR6/6)中粒砂と黒褐色(10YR3/1)シルトのブロックが混在、4層が明黄褐色(10YR6/6)中粒砂と暗褐色(7.5YR3/4)シルト混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は弥生土器、陶器、金属製品が出土している。

SK27

調査区西部に位置する土坑(B3-16-15)で、平面形は不整隅丸方形を呈し、長軸1.5m、短軸1.3m、深さ14cmを測る。埋土は1層が暗褐色(7.5YR3/4)シルト混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が暗褐色(7.5YR3/4)シルト、3層が暗褐色(7.5YR3/4)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は陶器が出土している。

SK28(図6-21～28)

調査区西部に位置するハンダ土坑(B3-16-9)で、平面形は円形を呈し、長軸1.8m、短軸1.7m、深さ51～54cmを測る。北側はSK66 を切り、埋土は1層が明黄褐色(10YR6/6)中粒砂、2層が明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、3層が黒褐色(10YR3/2)シルトのブロックと小～中礫混じりの明黄褐色(10YR6/6)中粒砂、4層が明黄褐色(10YR6/6)中粒砂と黒色(10YR2/1)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、5層が明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、6層が黒褐色(10YR3/2)シルトのブロックと中礫混じりの明黄褐色(10YR6/6)中粒砂、7層が暗褐色(7.5YR3/4)シルトと明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、8層が黒褐色(10YR3/2)シルト、9層が暗褐色(7.5YR3/4)シルト、黒褐色(10YR3/2)シルト、黒色(10YR2/1)シルトのブロックが混在、10層が中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は弥生土器、須恵器、磁器、白磁、陶器、土師質土器、瓦質土器、瓦、石製品、ガラス製品が出土している。

54～93は磁器で、54～77は碗、78～80は杯、81は湯呑、82～85は皿、86は鉢、87は瓶、88は徳利、89・90は段重、91は蓋、92・93は仏飯器である。94～96は白磁で、94は紅皿、95は杯、96は鉢である。97～118は陶器で、97～100は碗、101～106は皿、107は鉢、108は播鉢、109・110は徳利、111・112は蓋、113は茶釜、114は灯明皿、115は火入、116・117は餌猪口、118は甕である。119・120は土師質土器で、

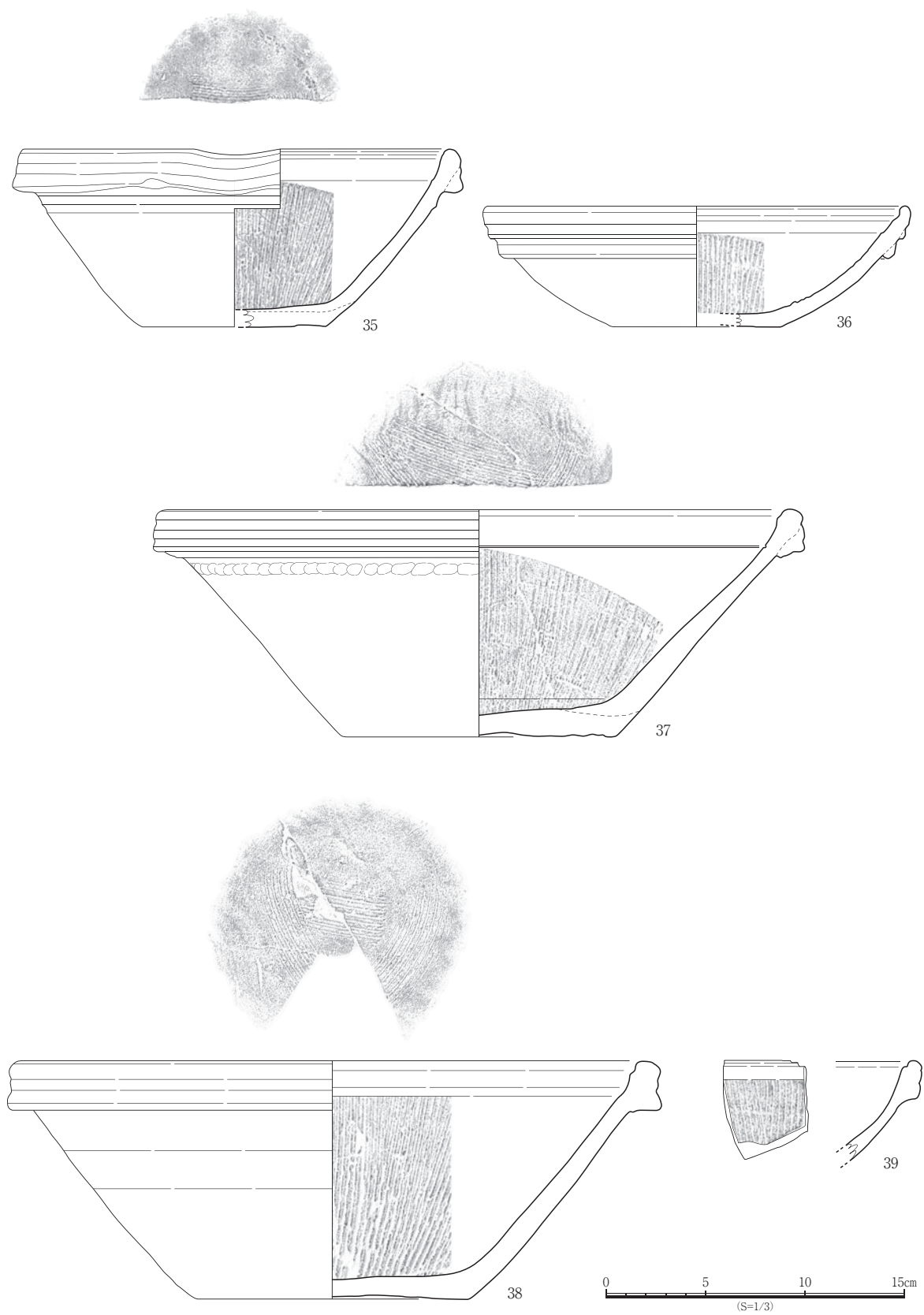


图6-15 SK13出土遗物实测图5

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

119 は小皿, 120 は焙烙である。121 ~ 123 は瓦質土器で, 121 は火鉢, 122・123 は焜炉である。124 は土製品の竈, 125 は石製品の砥石である。

SK29

調査区西部に位置する土坑(B3-16-14)で, 平面形は不整円形を呈し, 長軸 1.2m, 短軸 1.1m, 深さ 21 cm を測る。埋土は 1 層が暗褐色(7.5YR3/4)シルトのブロックが多く, 明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックが少し混じる黒褐色(10YR3/2)シルト, 2 層が明黄褐色(10YR6/6)中粒砂が多く, 暗褐色(7.5YR3/4)シルトのブロックが少し混じる黒褐色(10YR3/2)シルト, 3 層が暗褐色(7.5YR3/4)シルトのブロックが多く, 明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックが少し混じる黒褐色(10YR3/2)シルト, 4 層が黒褐色(10YR3/2)シルトのブロックが混じる暗褐色(7.5YR3/4)シルトで, 遺物は土師器, 須恵器, 土師質土器, 陶器が出土している。

SK30(図6-29)

調査区西部に位置する土坑(B3-12-22)で, 平面形は隅丸長方形を呈し, 長軸 2.5m, 短軸 1.1m, 深さ 17 ~ 21 cm を測る。埋土は明黄褐色(10YR6/6)シルト, 暗褐色(7.5YR3/4)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/1)シルトで, 遺物は皆無であった。

SK31

調査区西部に位置する土坑(B3-12-22)で, 平面形は隅丸長方形を呈し, 長軸 1.2m, 短軸 0.9m, 深さ 19 cm を測る。埋土は明黄褐色

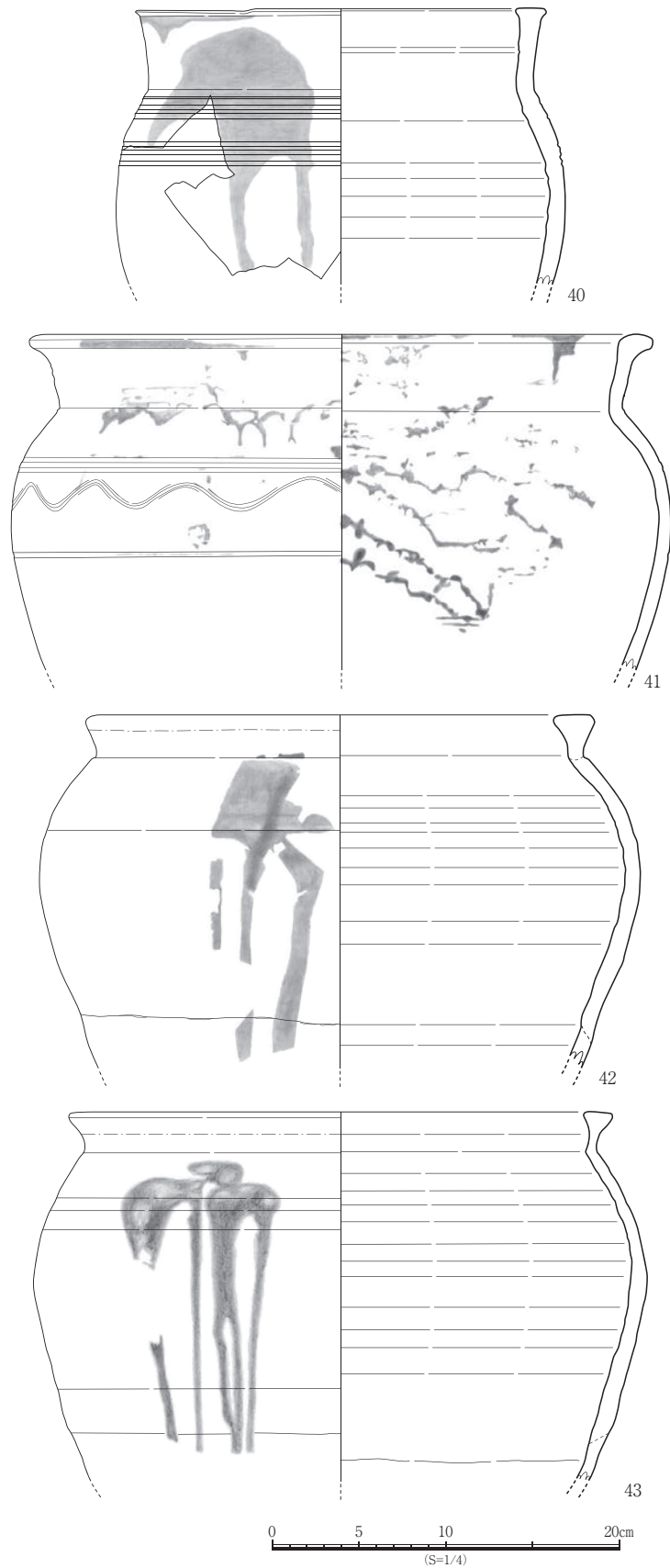


図6-16 SK13出土遺物実測図6

(10YR6/6)中粒砂が多く、暗褐色(7.5YR3/4)シルトのブロックが少し混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK32

調査区西部に位置する土坑(B3-12-22)で、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.6m、短軸1.0m、深さ16cmを測る。埋土は明黄褐色(10YR6/6)中粒砂が多く、暗褐色(7.5YR3/4)シルトの

ブロックが少し混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK33(図6-30)

調査区西部に位置する土坑(B3-12-17)で、平面形は楕円形を呈し、長軸0.7m、短軸0.5m、深さ17cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は石製品、金属製品が出土している。

126は石製品の筭、127は金属製品の煙管である。

SK34

調査区西部に位置する土坑(B3-17-7)で、平面形は隅丸方形を呈し、長軸0.7m、短軸0.6m、深さ6cmを測る。SX42を切り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)シルトと明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK35(図6-30)

調査区西部に位置する土坑(B3-12-16)で、平面形は円形を呈し、長軸1.2m、短軸1.1m、深さ14~17cmを測る。SX13を切り、埋土は1層が暗褐色(7.5YR3/4)シルト、明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックと中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が明黄褐色(10YR6/6)シルト、3層が明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は石製品、金属製品が出土している。

128は石製品の砥石である。

SK36

調査区西部に位置する土坑(B3-12-17)で、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸2.1m、短軸1.1m、深さ9~11cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)シルトと明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックが混じる

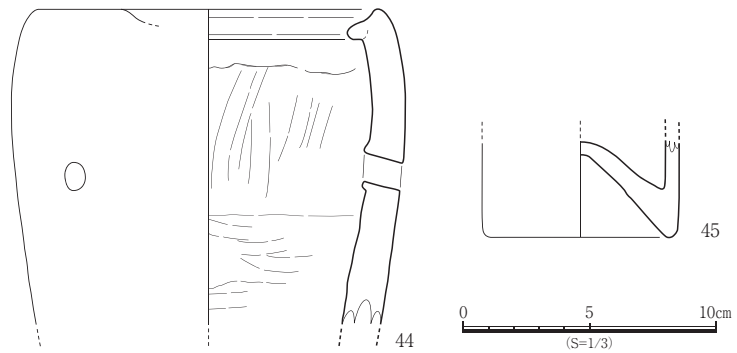
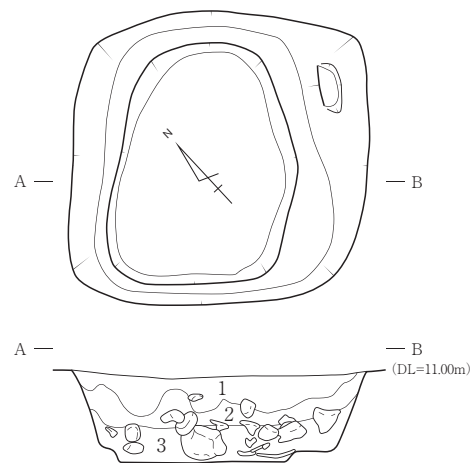


図6-17 SK13出土遺物実測図7



- 遺構埋土
1. 明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロック混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト
 2. 明黄褐色(10YR6/6)中粒~粗粒砂のブロック混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト
 3. 明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロック混じりの黒褐色(10YR3/1)シルト

図6-18 SK21

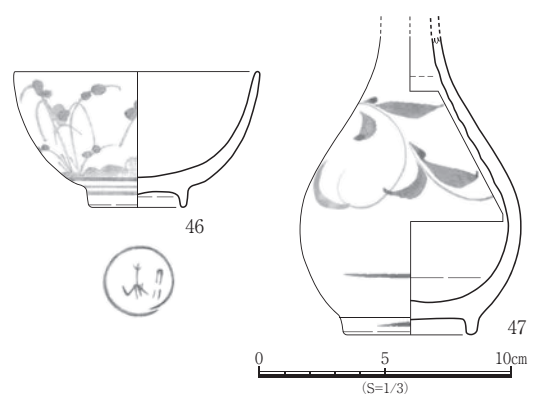


図6-19 SK21出土遺物実測図1

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

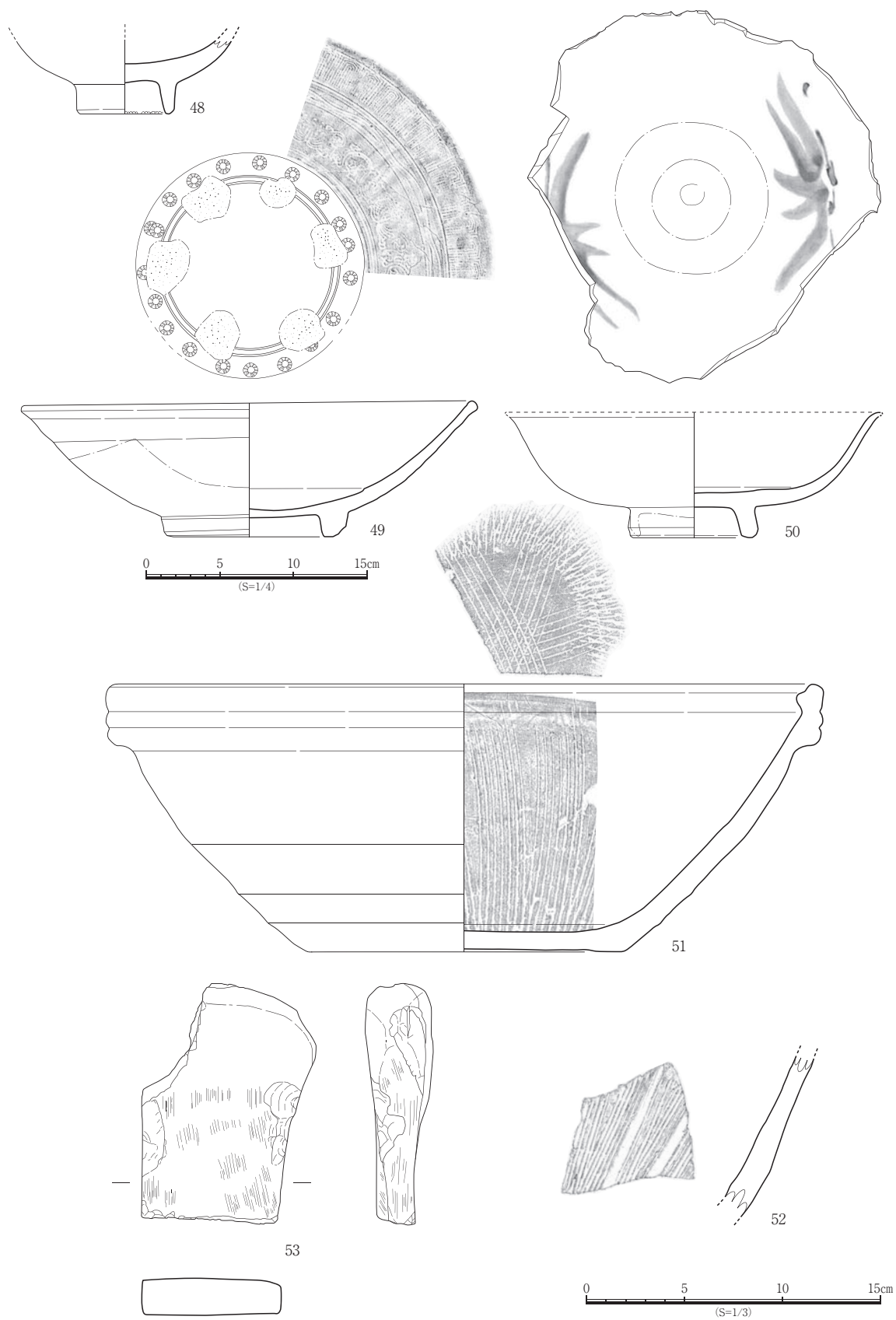


図6-20 SK21出土遺物実測図2

黒褐色(10YR2/3)シルトで、出土遺物は皆無であった。

SK37

調査区西部に位置する土坑(B3-12-17)で、平面形は不整隅丸方形を呈し、長軸1.6m、短軸0.8m、深さ8～10cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)シルトと明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK38

調査区西部に位置する土坑(B3-12-16)で、平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.4m、短軸1.2m、深さ19～29cmを測り、SK68、SX13を切る。埋土は明黄褐色(10YR6/6)中粒砂のブロックが混じる黒褐色(10YR2/3)シルトで、遺物は土師器が出土している。

SK39

調査区西部に位置する土坑(B3-16-9)で、平面形は楕円形を呈し、長軸1.0m、短軸0.9m、深さ18～29cmを測り、SK68を切る。埋土は明黄褐色(10YR6/6)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK40(図6-31～33)

調査区中央部に位置する土坑(B3-12-19)で、平面形は不整楕円形を呈する。長軸1.6m、短軸0.8m、深さ7～13cmを測り、SD9を切り、SK41に切られる。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、陶器、土師質土器、瓦質土器、瓦、土製品が出土している。

129～138は磁器で、129～132は碗、133は杯、134・135は蓋、136・137は鉢、138は土瓶である。139～145は陶器で、139は碗、140・141は蓋、142は鍋、143は播鉢、144は壺、145は鉢である。146は瓦質土器の火鉢、147は石製品の砥石、148・149はガラス製品の簪である。

SK41(図6-31・34～36)

調査区中央部に位置する土坑(B3-12-18)で、平面形は不整形を呈する。長軸1.9m、短軸0.7～1.3m、深さ6～11cmを測り、SK40、SD9を切る。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、陶器、土師質土器、瓦質土器、土製品、瓦が出土している。

150～158は磁器で、150～153は碗、154は蓋、155は皿、156は鉢、157は瓶、158は徳利である。159～170は陶器で、159～161は皿、162は蓋、163は土瓶、164は片口鉢、165は播鉢、166は灯明皿、167は火入、168は壺、169・170は甕である。171～173は瓦質土器で、171は焙烙、172・173は火鉢である。174は土製品の竈、175は瓦の丸瓦である。

SK42(図6-37・38)

調査区西部に位置する土坑(B3-11-20)で、平面形は隅丸方形を呈する。長軸1.7m、短軸1.5m、深さ26～35cmを測り、SD13とSX12を切る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)シルトと明黄褐色(10YR6/6)シ

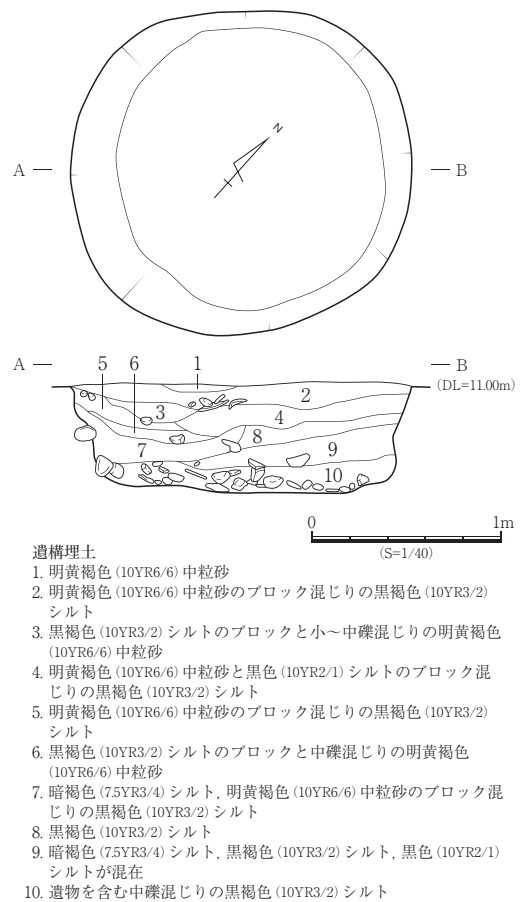


図6-21 SK28

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

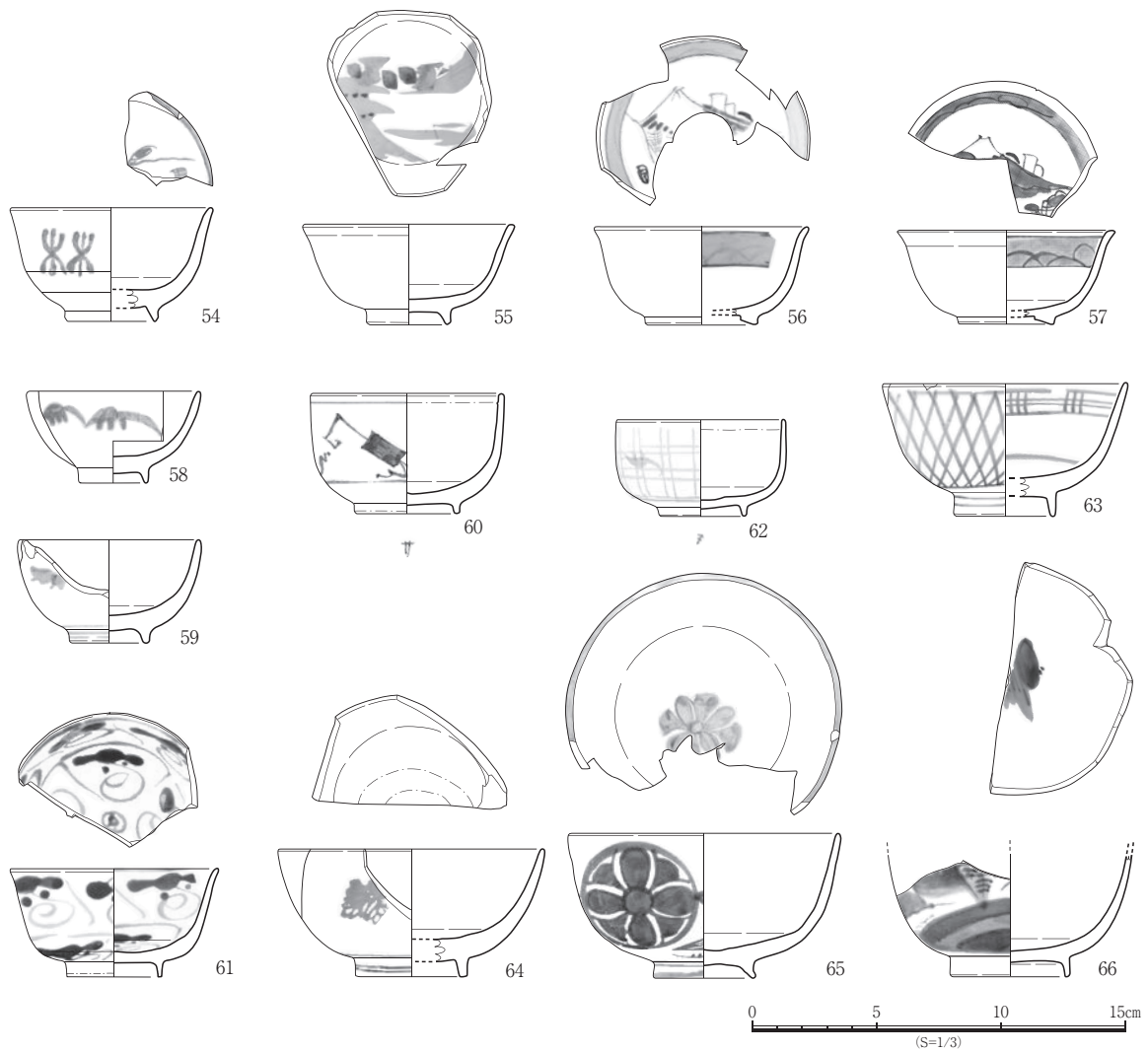


図6-22 SK28出土遺物実測図1

ルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、陶器、石製品が出土している。

176は石製品の砥石である。

SK43(図6-38)

調査区西部に位置する土坑(B3-16-8)で、平面形は隅丸長方形を呈する。長軸1.6m、短軸0.7m、深さ6~12cmを測り、SD13・17を切る。埋土は小~中礫混じりの黄褐色(10YR5/6)粘土質シルトで、遺物は磁器、白磁が出土している。

177は白磁の碗である。

SK44

調査区西部の南西部に位置する土坑(B3-16-11)で、平面形は隅丸長方形と考えられる。南西側は調査区外へ続き、短軸は不明で、長軸2.0m、深さ28cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は弥生土器、磁器、陶器が出土している。

SK45

調査区西部の南西部に位置する土坑(B3-16-7)で、平面形は不整隅丸長方形を呈し、長軸1.2m、

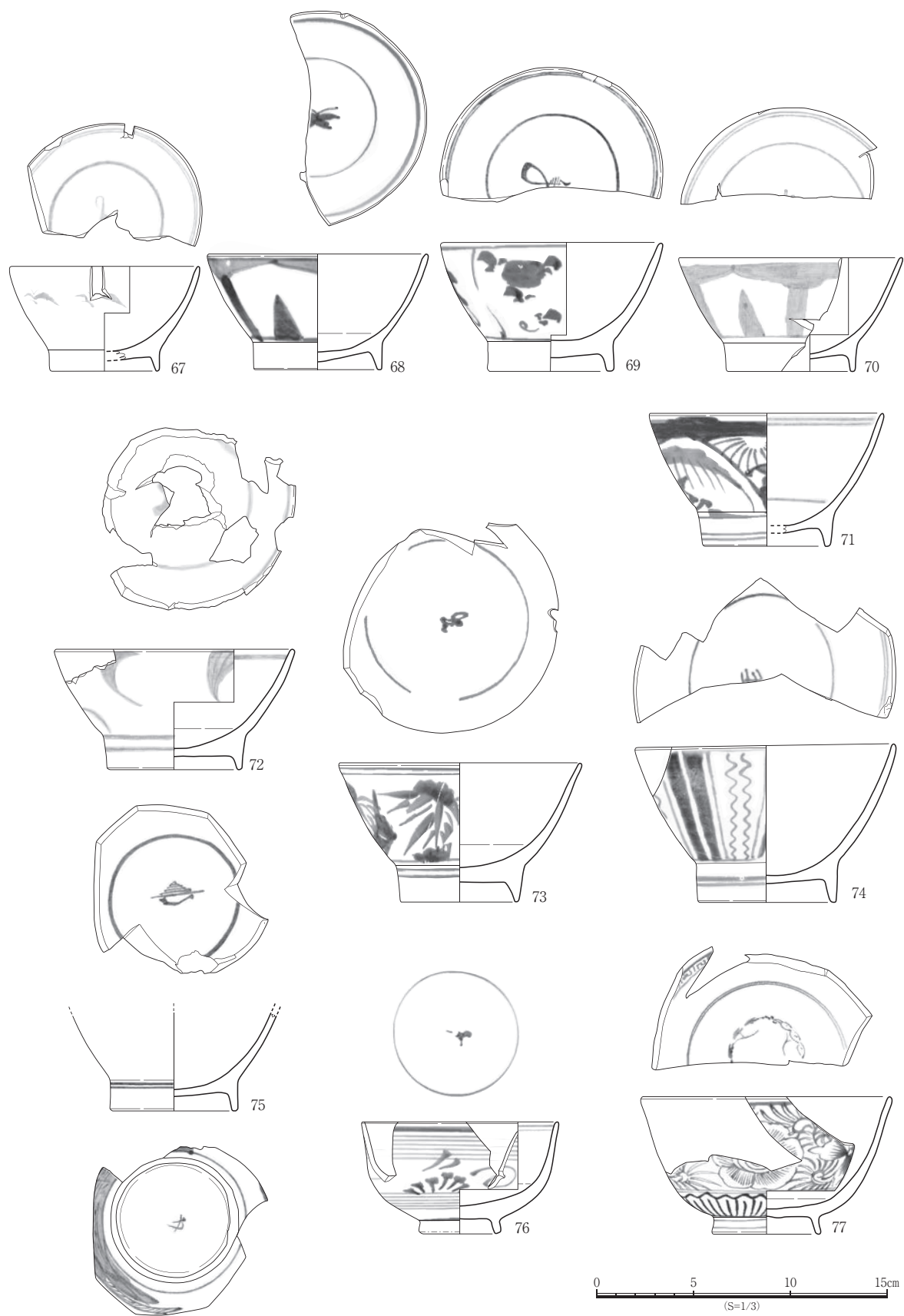


图6-23 SK28出土遺物実測図2

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

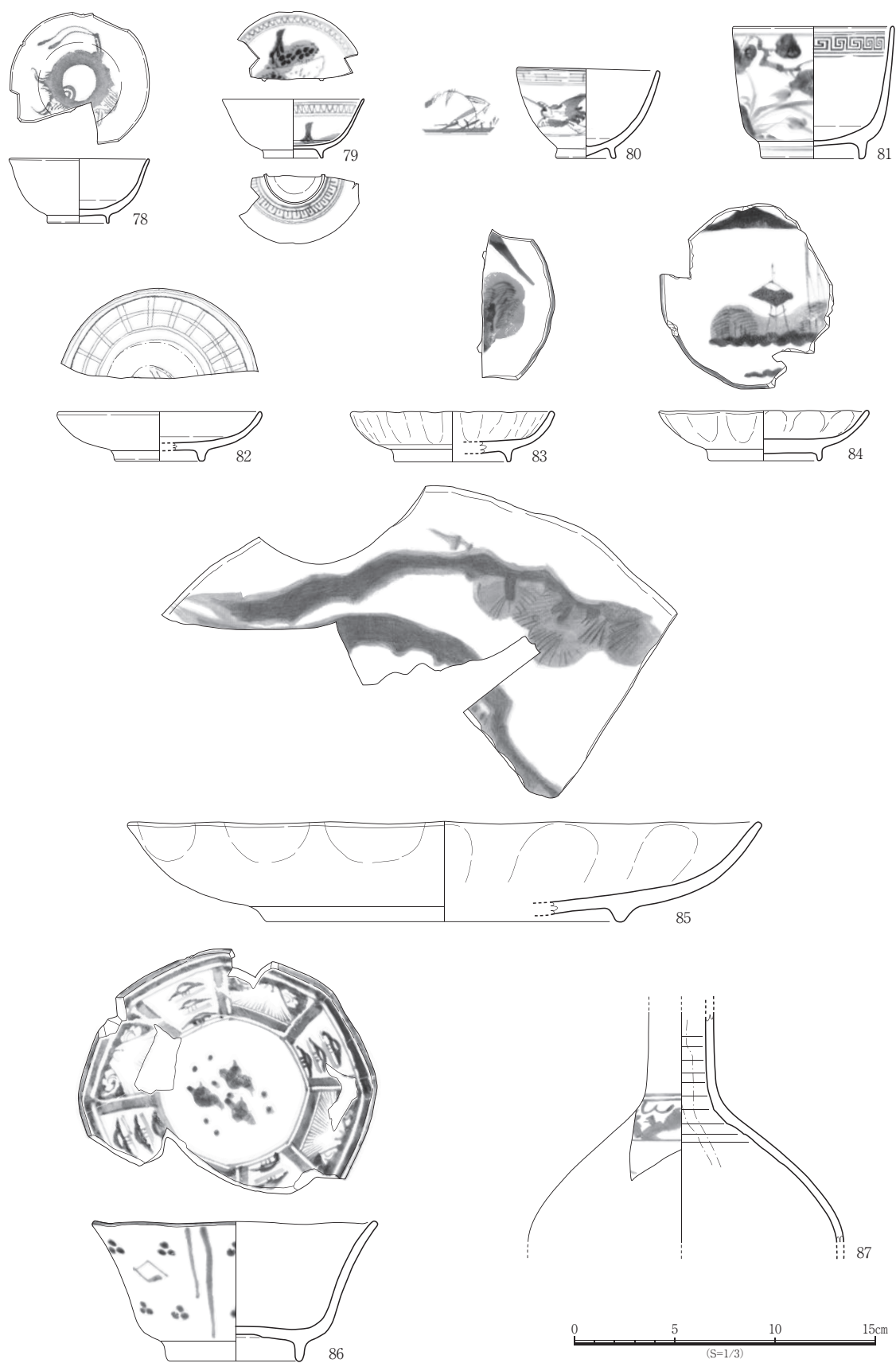


図6-24 SK28出土遺物実測図3

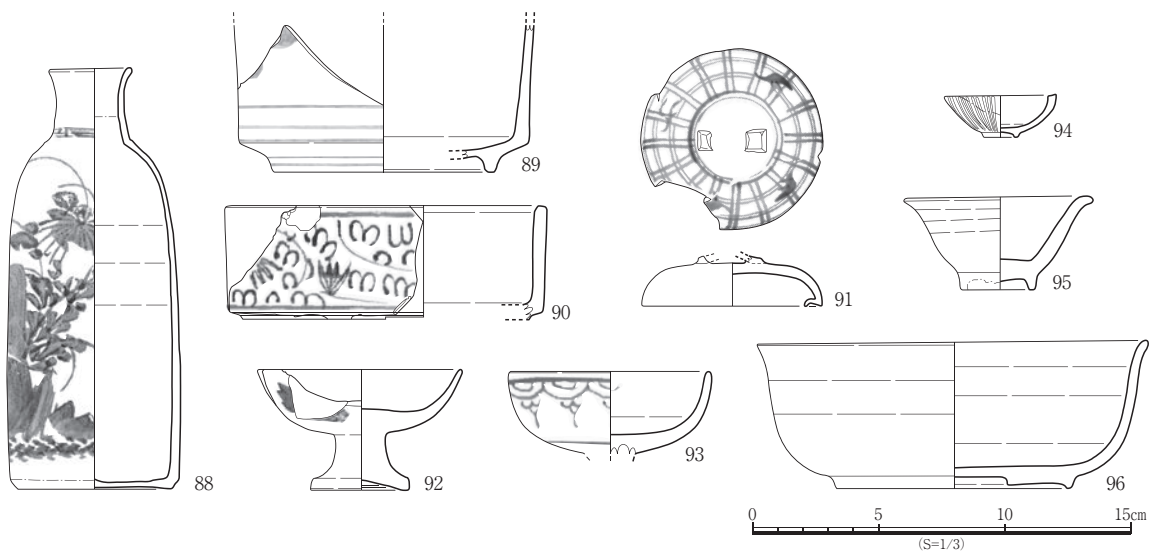


図6-25 SK28出土遺物実測図4

短軸0.6m, 深さ12~14cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は皆無であった。

SK46(図6-38)

調査区西部に位置する土坑(B3-16-5)で, 平面形は不整隅丸長方形を呈する。長軸1.8m, 短軸1.2m, 深さ13~15cmを測り, SX19に切られる。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)シルト, 明黄褐色(10YR6/6)シルトのブロックと小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は土師器, 磁器, 陶器, 土製品が出土している。

178は陶器の灯明皿, 179は土製品の箱庭道具である。

SK47

調査区西部に位置する土坑(B3-17-1)で, 平面形は隅丸長方形を呈し, 長軸1.6m, 短軸0.8m, 深さ19~22cmを測る。埋土は1層が黒褐色(10YR3/2)シルト, 2層が黒褐色(10YR3/2)砂質シルト, 3層が小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は磁器, 陶器が出土している。

SK48

調査区西部の南側に位置する土坑(B3-16-15)で, 平面形は隅丸方形を呈し, 長軸0.9m, 短軸0.8m, 深さ20cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は皆無であった。

SK49(図6-38)

調査区西部に位置するハンダ土坑(B3-11-24)で, 平面形は隅丸長方形と考えられる。北西側はSD13に切られ, 長軸は不明で, 短軸1.3m, 深さ49cmを測る。埋土は1層が小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト, 2層が小~中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト, 3層が小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は土師質土器, 磁器, 陶器が出土している。

180~182は陶器で, 180は碗, 181・182は皿である。

SK50(図6-39)

調査区西部に位置する土坑(B3-16-3)で, 平面形は隅丸長方形と考えられる。SD13を切り, 長軸1.8m, 短軸0.9m, 深さ11~20cmを測る。埋土は黄褐色(10YR5/6)粘土質シルトで, 遺物は陶器が出

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

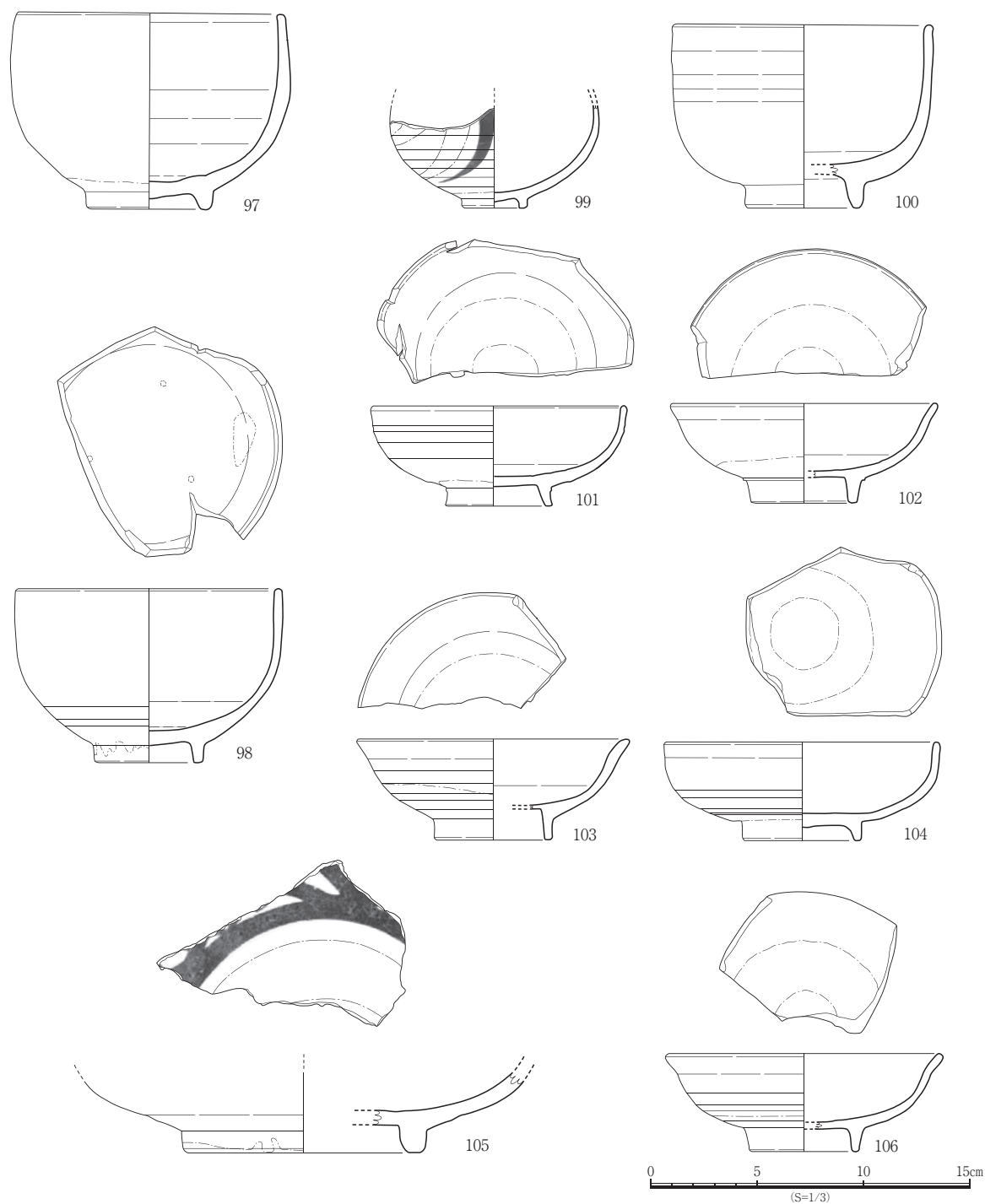


図6-26 SK28出土遺物実測図5

土している。

183は陶器の碗である。

SK51 (図6-39)

調査区西部に位置するハンダ土坑(B3-16-4)で、平面形は円形を呈する。長軸 1.4m, 短軸 1.3m, 深さ 47cmを測り, SK74・75を切る。埋土は1層が極暗褐色(7.5YR2/3)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト, 2層が中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は金属製品が出土している。

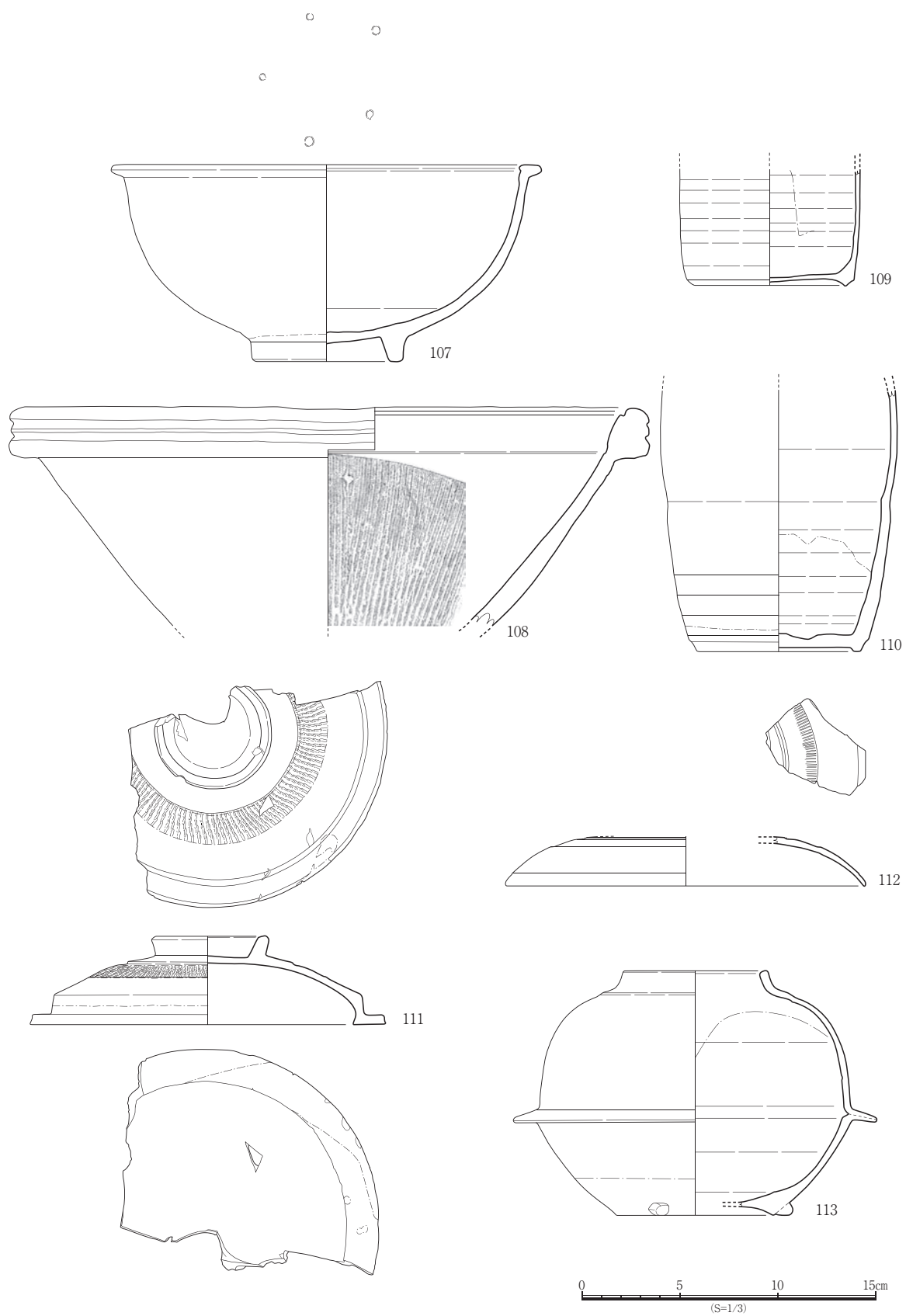


图6-27 SK28出土遺物実測図6

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

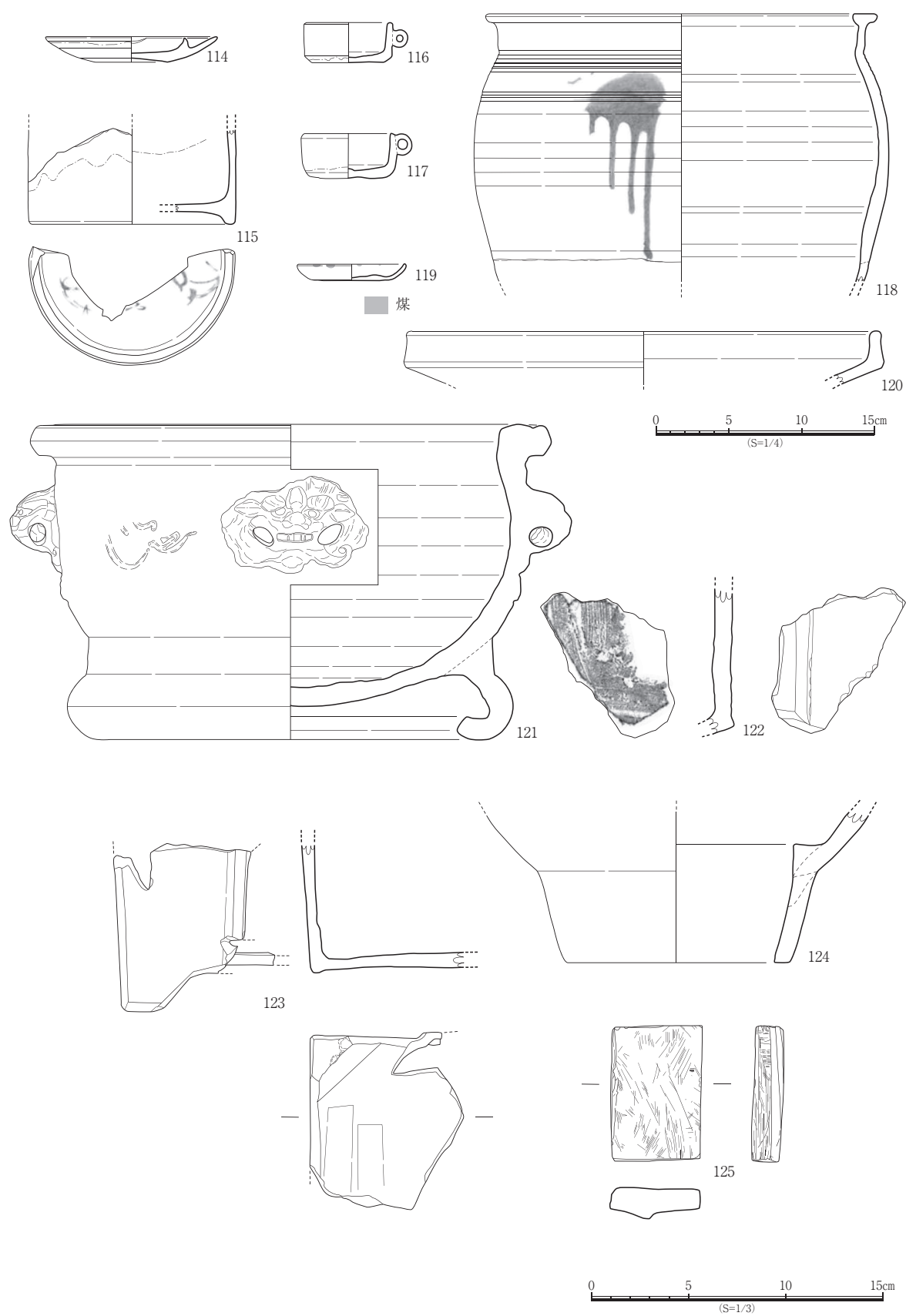


図6-28 SK28出土遺物実測図7

184は金属製品の煙管である。

SK52

調査区西部に位置する土坑(B3-17-6)で、平面形は不整隅丸長方形を呈し、長軸1.8m、短軸0.8m、深さ15cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は陶器が出土している。

SK53(図6-40)

調査区西部に位置するハンダ土坑(B3-16-9)で、平面形は隅丸方形を呈する。長軸1.9m、短軸1.8m、深さ50cmを測り、SK66を切る。埋土は1層が黄褐色(10YR5/6)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が極暗褐色(7.5YR2/3)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、3層が黒褐色(10YR3/2)シルト、4層が中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、5層が極暗褐色(7.5YR2/3)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、6層が中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、陶器、瓦が出土している。

SK54(図6-39)

調査区南部に位置する土坑(B3-18-12)で、平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ13cmを測る。埋土は小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、陶器、金属製品が出土している。

185は磁器の碗で、186・187は陶器の鉢である。

SK55(図6-40・41)

調査区西部に位置するハンダ土坑(B3-16-4)で、平面形は円形を呈する。長軸1.8m、短軸1.7m、深さ52cmを測り、SK74を切る。埋土は1層が黄褐色(10YR5/6)砂質シルト、2層が極暗褐色(7.5YR2/3)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、3層が黄褐色(10YR5/6)砂質シルト、4層がにぶい黄褐色(10YR4/3)粘土、5層が褐色(10YR4/4)粘土質シルトで、遺物は磁器、陶器、土師質土器、土製品が出土している。

188～192は磁器で、188～190は碗、191は皿、192は瓶である。193～197は陶器で、193は碗、194は皿、195は鉢、196は播鉢、197は甕である。198は土師質土器の羽釜、199は土製品の竈である。

SK56

調査区中央部に位置する土坑(B3-13-19)で、平面形は不整形を呈し、長軸1.9m、短軸0.6～0.9m、深さ9～15cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は土師器が出土している。

SK57

調査区中央部に位置する土坑(B3-12-23)で、平面形は隅丸長方形と考えられる。SK61、SD11を切り、南西側はSK59、南東側はSX31に切られ、短軸は不明である。長軸1.0m、深さ19cmを測り、

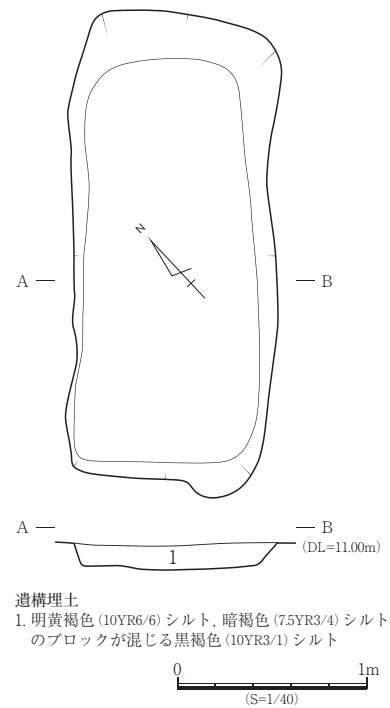


図6-29 SK30

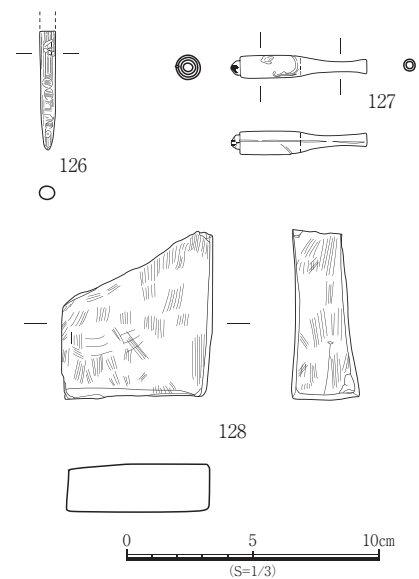


図6-30 SK33・35出土遺物実測図

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK58

調査区中央部に位置する土坑(B3-12-23)で、平面形は隅丸長方形を呈し、北西側はSK59、東側はSX31を切る。長軸2.3m、短軸0.7m、深さ10～15を測り、埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は陶器、土師質土器が出土している。

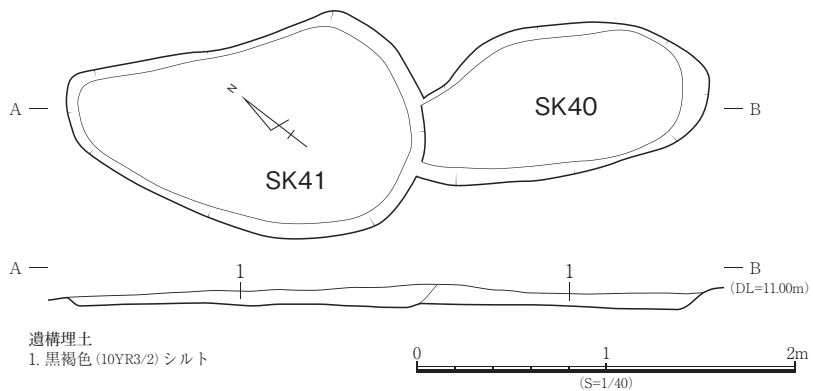


図6-31 SK40・41

SK59

調査区中央部に位置する土坑(B3-12-23)で、平面形は隅丸長方形を呈する。SK57、SD11、SX31を切り、SK58に切られ、短軸は不明である。長軸2.6m、深さ9～22cmを測り、埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、出土遺物は土師器、磁器、陶器、金属製品が出土している。

SK60

調査区西部に位置する土坑(B3-16-20)で、平面形は円形を呈し、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ10cmを測る。埋土は小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK61

調査区中央部に位置する土坑(B3-12-23)で、平面形は隅丸長方形を呈し、SD11を切り、SK57、SX31に切られる。長軸1.6m、短軸0.9m、深さ11～28cmを測り、埋土は小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、陶器、土師質土器が出土している。

SK62

調査区西部に位置する土坑(B3-16-3)で、平面形は楕円形を呈し、SX17を切り、SD30に切られる。長軸2.1m、短軸1.8m、深さ82cmを測り、埋土は1層が黄褐色(10YR5/6)シルト、2層が黄褐色(10YR5/6)シルトのブロックと小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、3層が黄褐色(10YR5/6)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、4層が極暗褐色(7.5YR2/3)シルト、黄褐色(10YR5/6)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、5層が黄褐色(10YR5/6)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、6層が極暗褐色(7.5YR2/3)シルト、黄褐色(10YR5/6)シルトのブロックが混じる暗褐色(10YR3/4)シルト、7層が黄褐色(10YR5/6)シルト、極暗褐色(7.5YR2/3)シルトのブロックが混じる暗褐色(10YR3/4)シルト、8層が黄褐色(10YR5/6)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK63

調査区西部に位置する土坑(B3-11-24)で、平面形は不整楕円形を呈し、長軸2.0m、短軸1.2m、深さ20～37cmを測る。埋土は1層が地山のブロック、2層が小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は弥生土器、陶器が出土している。

SK64

調査区北側に位置する土坑(B3-8-1)で、平面形は円形と考えられる。北西側は調査区外へ続き、

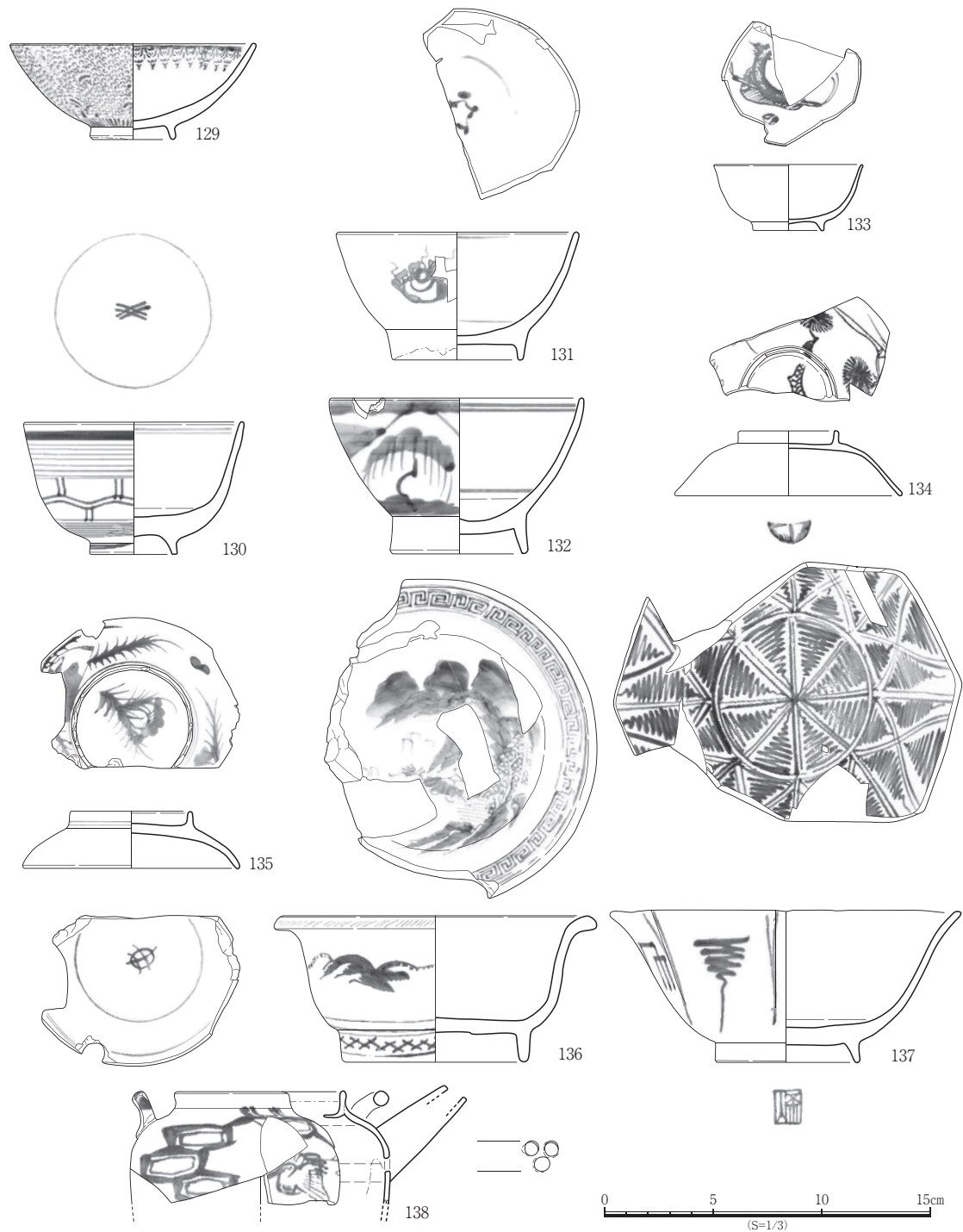


図6-32 SK40出土遺物実測図1

長軸1.5m，短軸1.4m，深さ29～33cmを測る。埋土は黒色(10YR2/1)粘土質シルトのブロックと小礫混じりの暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトで，遺物は金属製品が出土している。

SK65

調査区北側に位置する土坑(B3-8-7)で，平面形は円形を呈し，長軸1.0m，短軸0.9m，深さ12cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックと小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

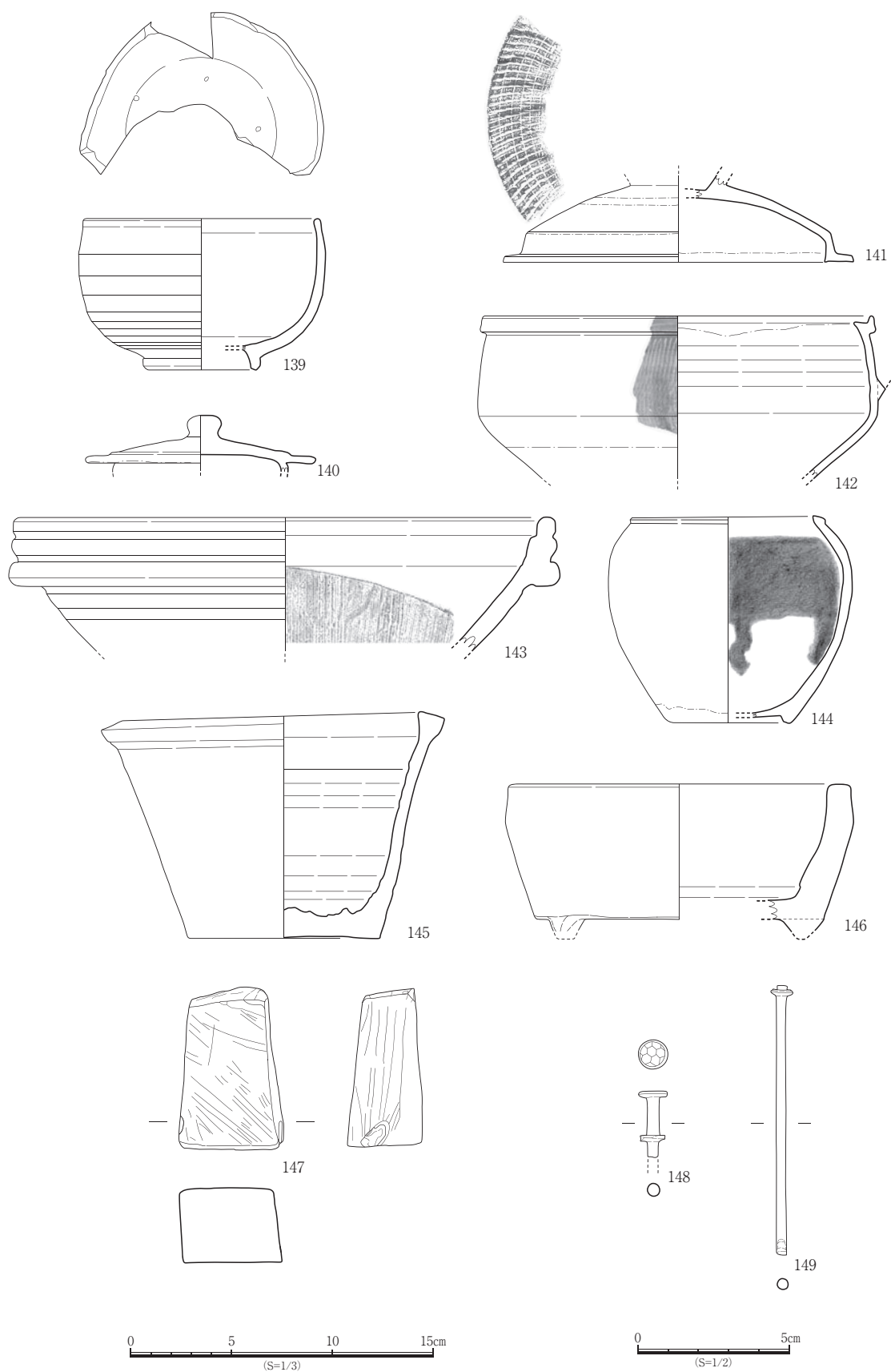


図6-33 SK40出土遺物実測図2



図6-34 SK41出土遺物実測図1

で、遺物は皆無であった。

SK66

調査区西部に位置する土坑(B3-16-4)で、平面形は隅丸長方形を呈する。南西側をSK28・53に切られ、長軸2.1m、短軸1.6m、深さ2cmを測る。埋土は小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

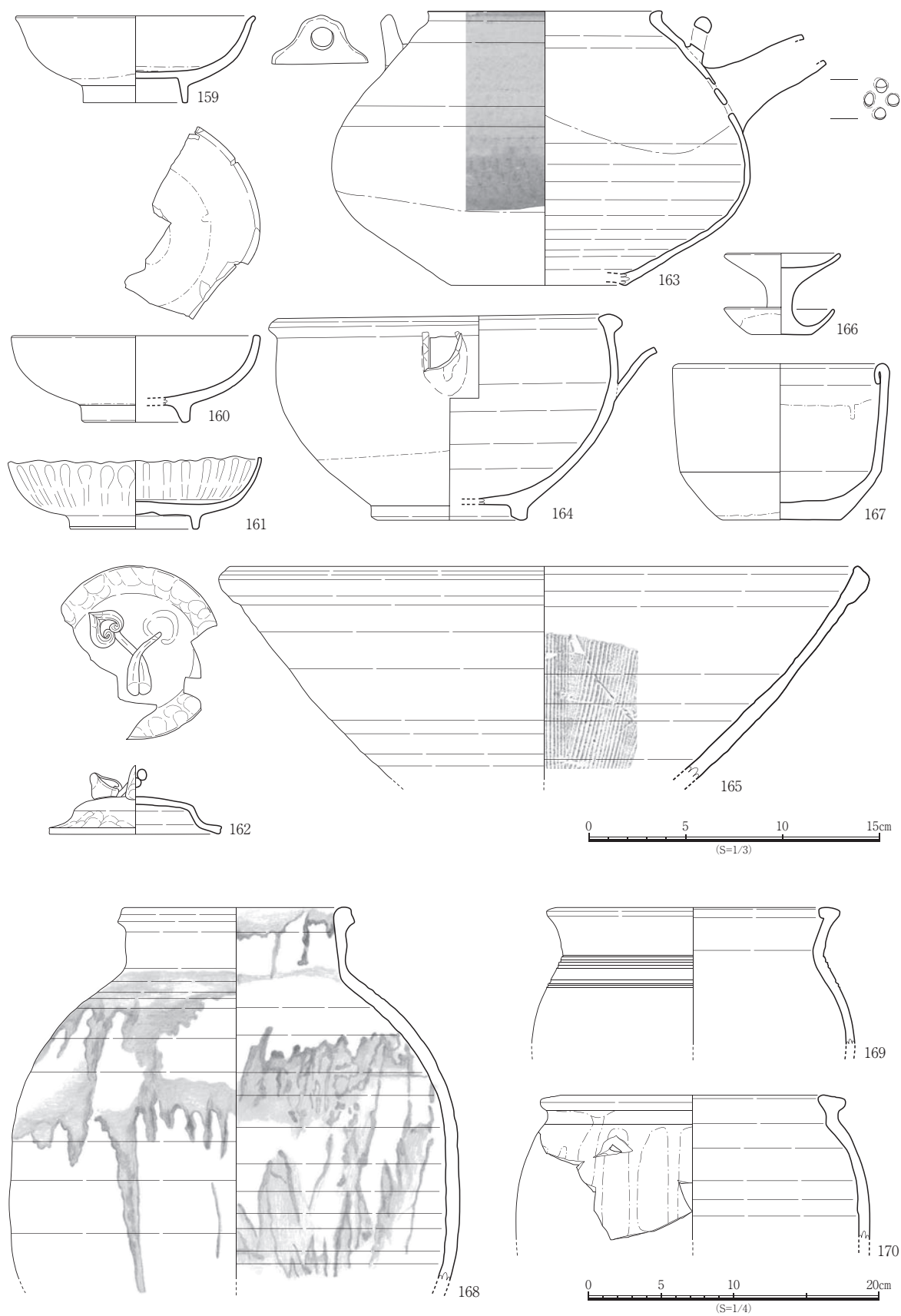


図6-35 SK41出土遺物実測図2

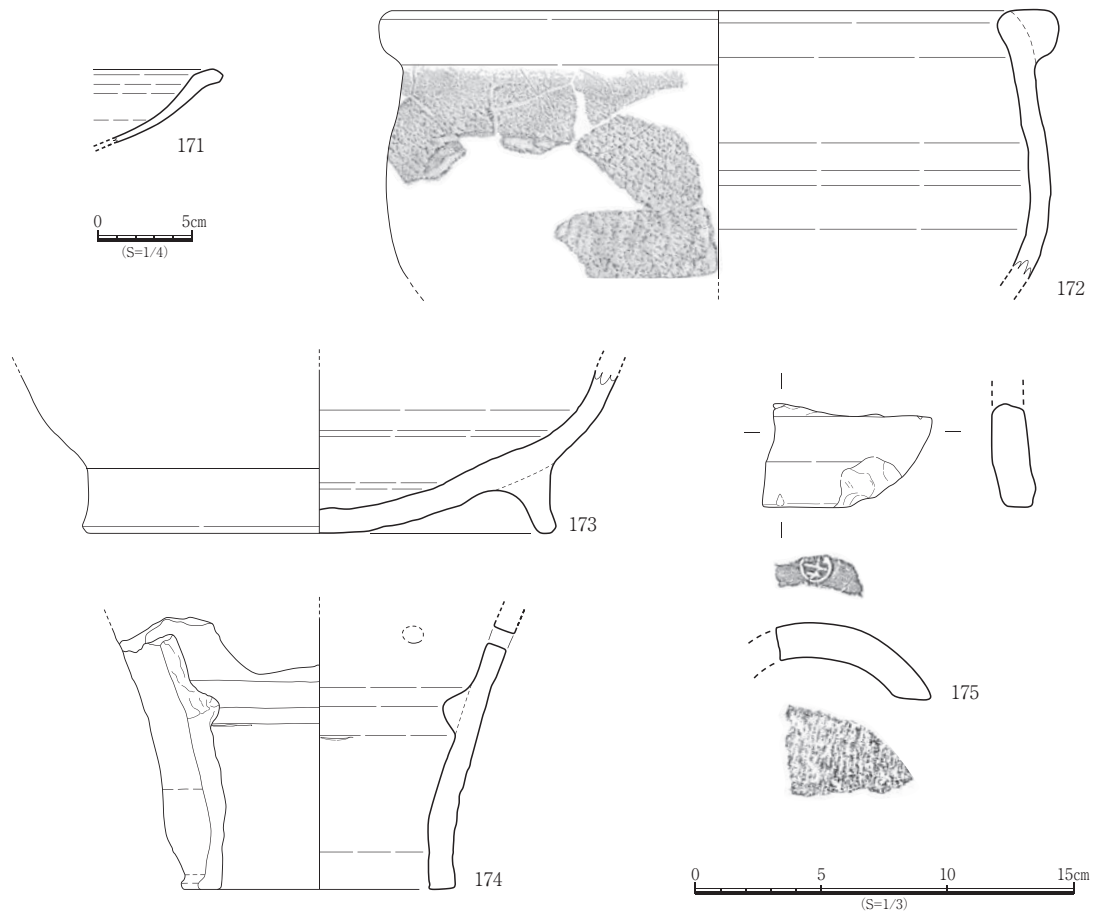


図6-36 SK41出土遺物実測図3

SK67

調査区西部に位置する土坑(B3-11-25)で、平面形は不整楕円形を呈する。SX13を切り、長軸1.5m、短軸1.2m、深さ8～16cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックと小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK68(図6-42)

調査区西部に位置する土坑(B3-12-16)で、平面形は不整楕円形を呈する。SK38, SX13に切られ、長軸0.9m、短軸0.5m、深さ27cmを測る。埋土は1層が小～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が黒褐色(7.5YR3/2)シルト、3層が黒褐色(7.5YR3/2)シルトと地山のブロック、4層が黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、陶器、土師質土器、石製品が出土している。

200は磁器の瓶、201は陶器の播鉢、202は土師質土器の小皿、203は石製品の砥石である。

SK69

調査区西部に位置する土坑(B3-16-3)で、平面形は隅丸長方形を呈する。SD14を切り、SK50・73, SD13, SX33に切られ、長軸・短軸とも不明である。深さ21～51を測り、埋土は1層が小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が暗褐色(7.5YR3/4)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、3層が黒褐色(10YR3/2)シルト、4層が礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、5層が黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルト、6層が暗褐色(7.5YR3/4)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

SK70

調査区中央部に位置する土坑(B3-18-7)で、平面形は不整形を呈し、長軸2.4m、短軸1.0m、深さ5~10cmを測る。埋土は1層が黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト、2層が黒色(7.5YR2/1)シルト、3層が黒色(10YR1.7/1)シルトで、遺物は土師器、陶器が出土している。

SK71(図6-43)

調査区南部に位置する土坑(B3-17-25)で、平面形は隅丸長方形を呈する。SX5に切られ、長軸は不明である。短軸0.9m、深さ23~63cmを測り、埋土は1層が黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト、2層が黒褐色(10YR3/2)シルト、3層が黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト、4層が小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器が出土している。

204・205は磁器で、204は碗、205は杯である。

SK72(図6-43)

調査区西部の北側に位置する土坑(B3-12-6)で、平面形は円形を呈し、径1.6m、深さ75~90cmを測る。SD13・14に切られ、埋土は1層が小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、3層が極暗褐色(7.5YR2/3)シルトのブロック混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、4層が中~大礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、5層が黒褐色(10YR3/2)シルト、6層が中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は土師質土器、金属製品が出土している。

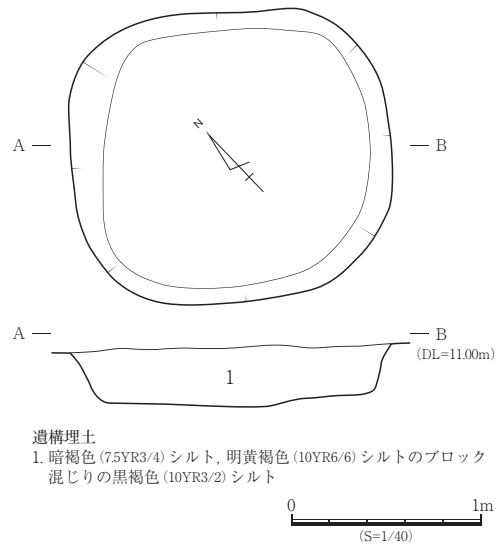


図6-37 SK42

遺構埋土
1. 暗褐色(7.5YR3/4)シルト、明黄褐色(10YR6/6)シルトのブロック混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト

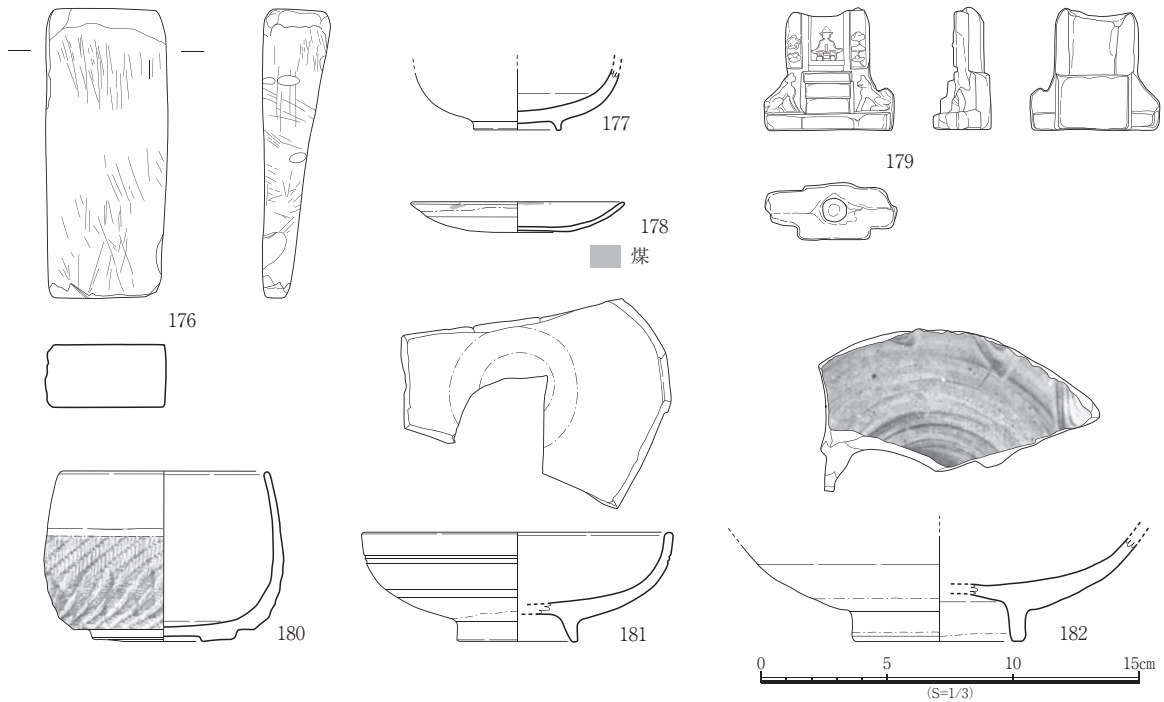


図6-38 SK42・43・46・49出土遺物実測図

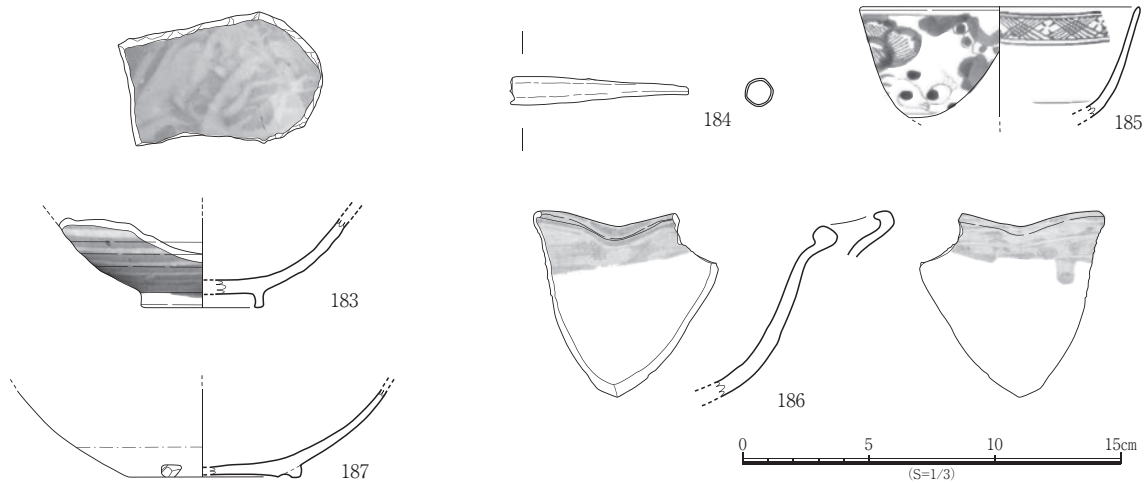


図6-39 SK50・51・54出土遺物実測図

206は金属製品の銭貨である。

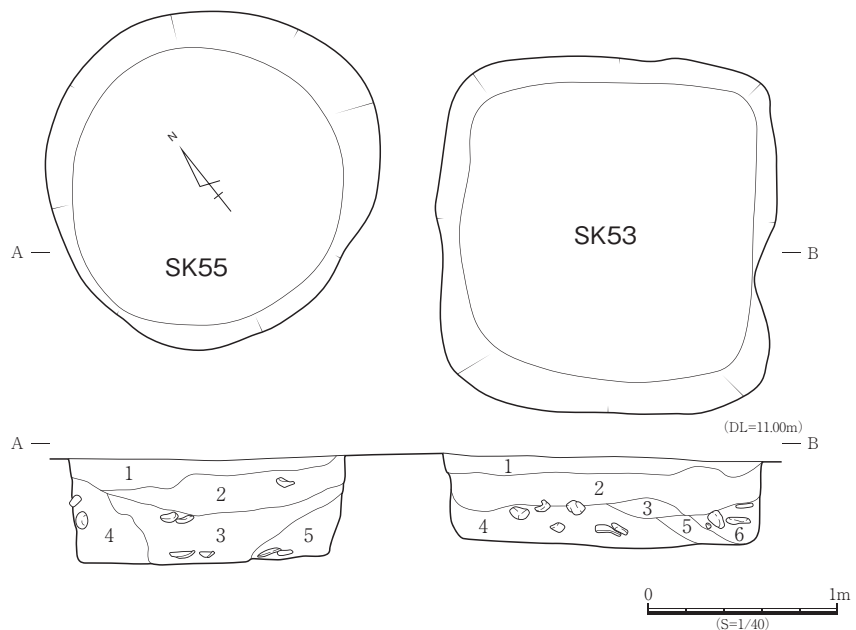
SK73(図6-43)

調査区西部に位置する土坑(B3-16-4)で、平面形は円形を呈する。SK69を切り、SD13に切られ、長軸1.6m、短軸1.5m、深さ43cmを測る。埋土は1層が小～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト、3層が明黄褐色(10YR6/6)粘土質シルト、4層が黒褐色(10YR3/2)シルト、5層が小～中礫混じりの褐色(7.5YR4/6)粘土質シルト、6層が黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルト、7層が中礫混じりの黄褐色粘土質シルト、8層が明黄褐色(10YR5/6)粘土質シルトで、遺物は磁器、陶器、瓦が出土している。

207は陶器の播鉢である。

SK74(図6-43)

調査区西部に位置する土坑(B3-16-4)で、平面形は円形を呈する。SK51・55に切られ、長軸1.7m、短軸1.6m、深さ8～11cmを測る。埋土は1層が黄褐色(10YR5/6)粘土質シルトと褐色(7.5YR4/6)粗粒砂質粘土のブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、2



遺構埋土 (SK55)

1. 黄褐色(10YR5/6)砂質シルト
2. 極暗褐色(7.5YR2/3)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト
3. 黄褐色(10YR5/6)砂質シルト
4. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土
5. 褐色(10YR4/4)粘土質シルト

遺構埋土 (SK53)

1. 黄褐色(10YR5/6)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト
2. 極暗褐色(7.5YR2/3)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト
3. 黒褐色(10YR3/2)シルト
4. 中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト
5. 極暗褐色(7.5YR2/3)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト
6. 中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト

図6-40 SK53・55

2. 検出遺構と遺物 (2) 土坑

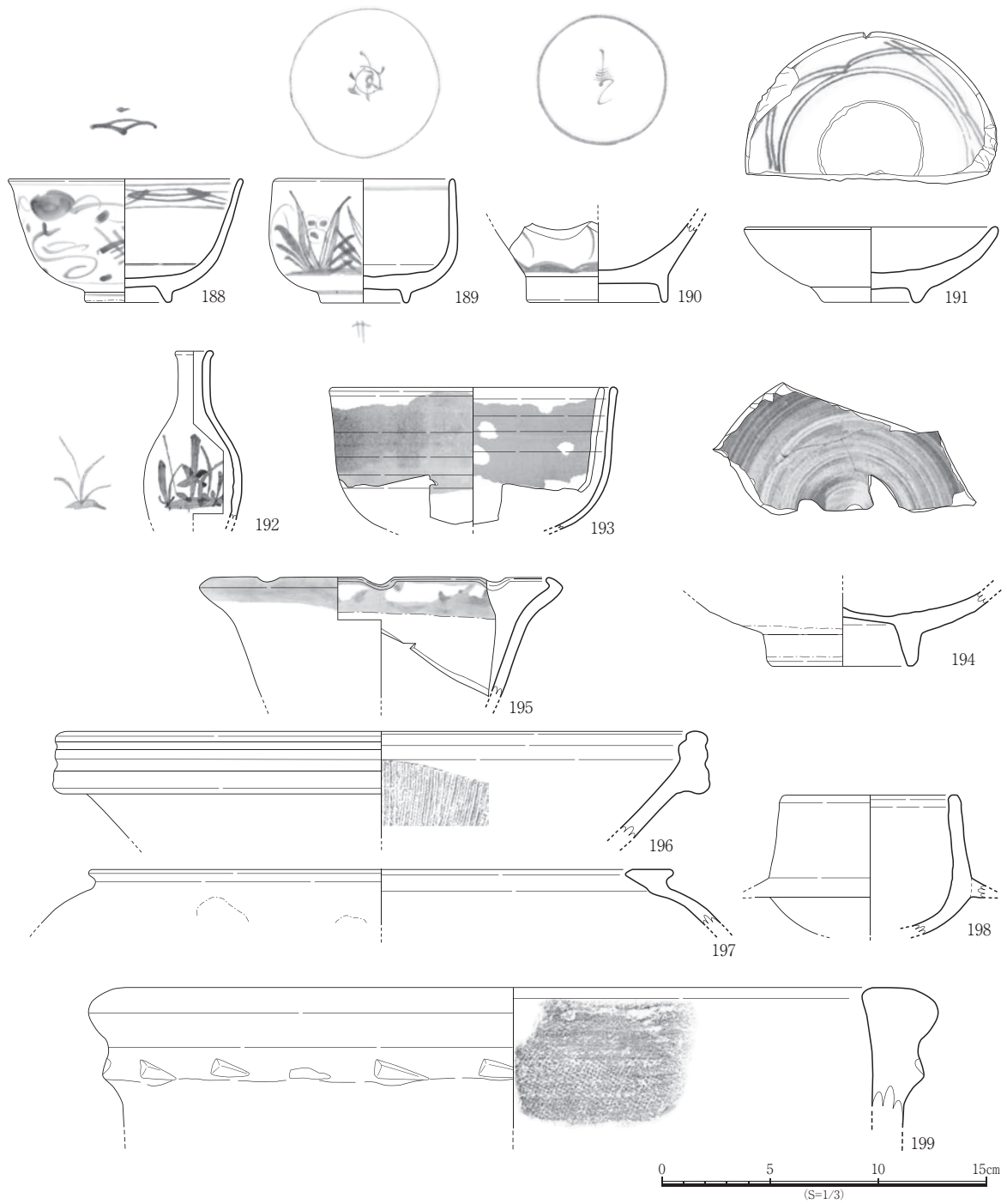


図6-41 SK55出土遺物実測図

層が褐色(7.5YR4/6)粗粒砂質粘土, 3層が褐色(7.5YR4/6)粗粒砂質粘土のブロックと小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は陶器, 石製品が出土している。

208は石製品の砥石である。

SK75

調査区西部に位置する土坑(B3-16-4)で, 平面形は円形を呈する。SK51に切られ, 長軸, 短軸とも不明である。深さは32cmを測り, 埋土は中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は皆無で

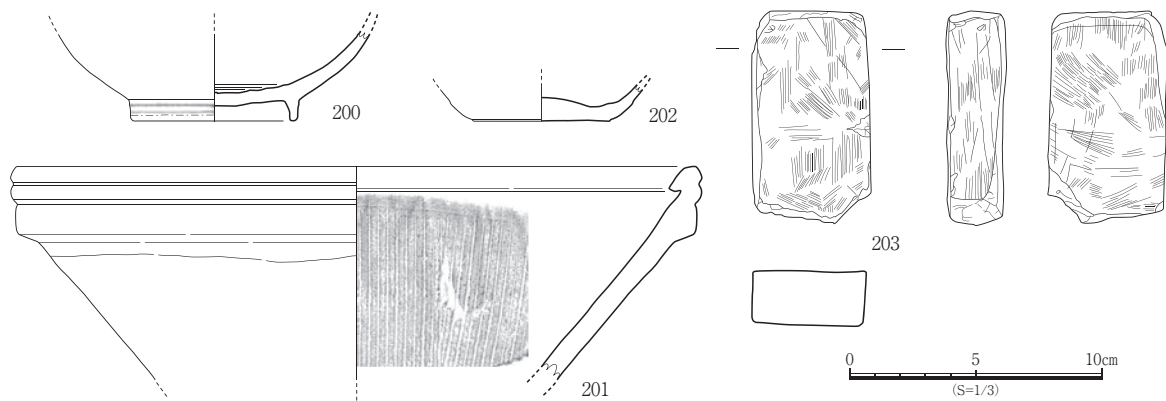


図6-42 SK68出土遺物実測図

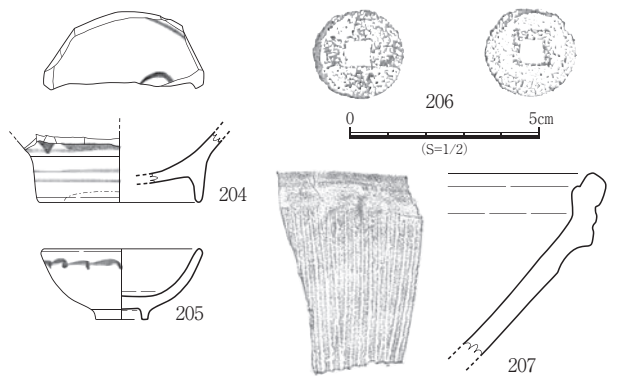
あった。

SK76

調査区西部に位置する土坑(B3-12-17)で、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.4m、短軸0.7m、深さ11cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK77

調査区西部に位置する土坑(B3-11-25)で、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ17cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。



(3) 溝

SD1(図6-44)

調査区南部から中央部に位置する溝(B3-17-25)で、確認延長13.6m、幅0.3~0.6m、深さ2~7cmを測り、SX5に切られる。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトで、遺物は土師器、須恵器、磁器が出土している。

209は白磁の碗である。

SD2(図6-44.45)

調査区南部から中央部に位置する溝(B3-17-20)で、確認延長16.7m、幅0.4~0.9m、深さ12~18cmを測り、SK6-18に切られる。埋土は1層が黒色(10YR2/1)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が極暗褐色(7.5YR2/3)シルトのブロックが混

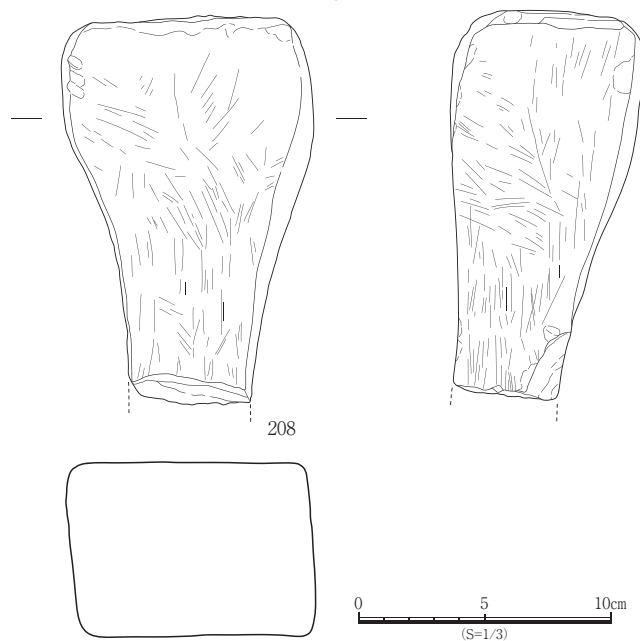


図6-43 SK71~74出土遺物実測図

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

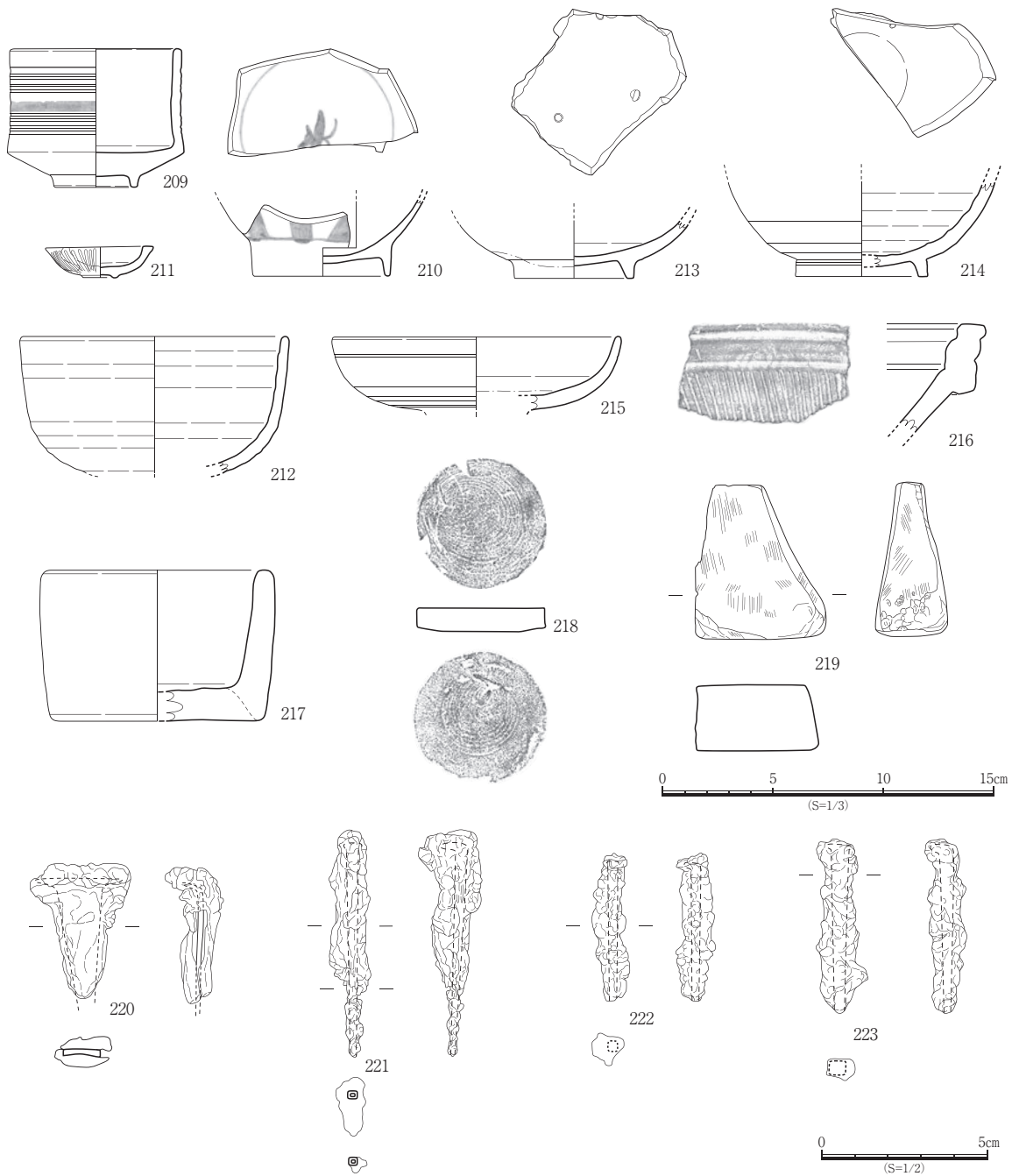


図6-44 SD1・2出土遺物実測図

じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は弥生土器、土師器、須恵器、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、金属製品が出土している。

210は磁器の碗, 211は白磁の紅皿, 212~216は陶器で, 212~214は碗, 215は皿, 216は播鉢である。217は瓦質土器の火入, 218は土製品のハマ, 219は石製品の砥石, 220~223は金属製品で, 220は楔, 221~223は釘である。

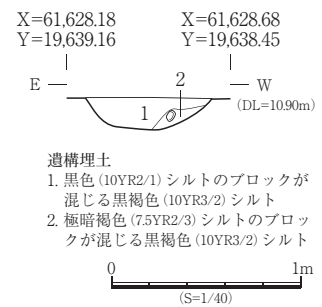


図6-45 SD2

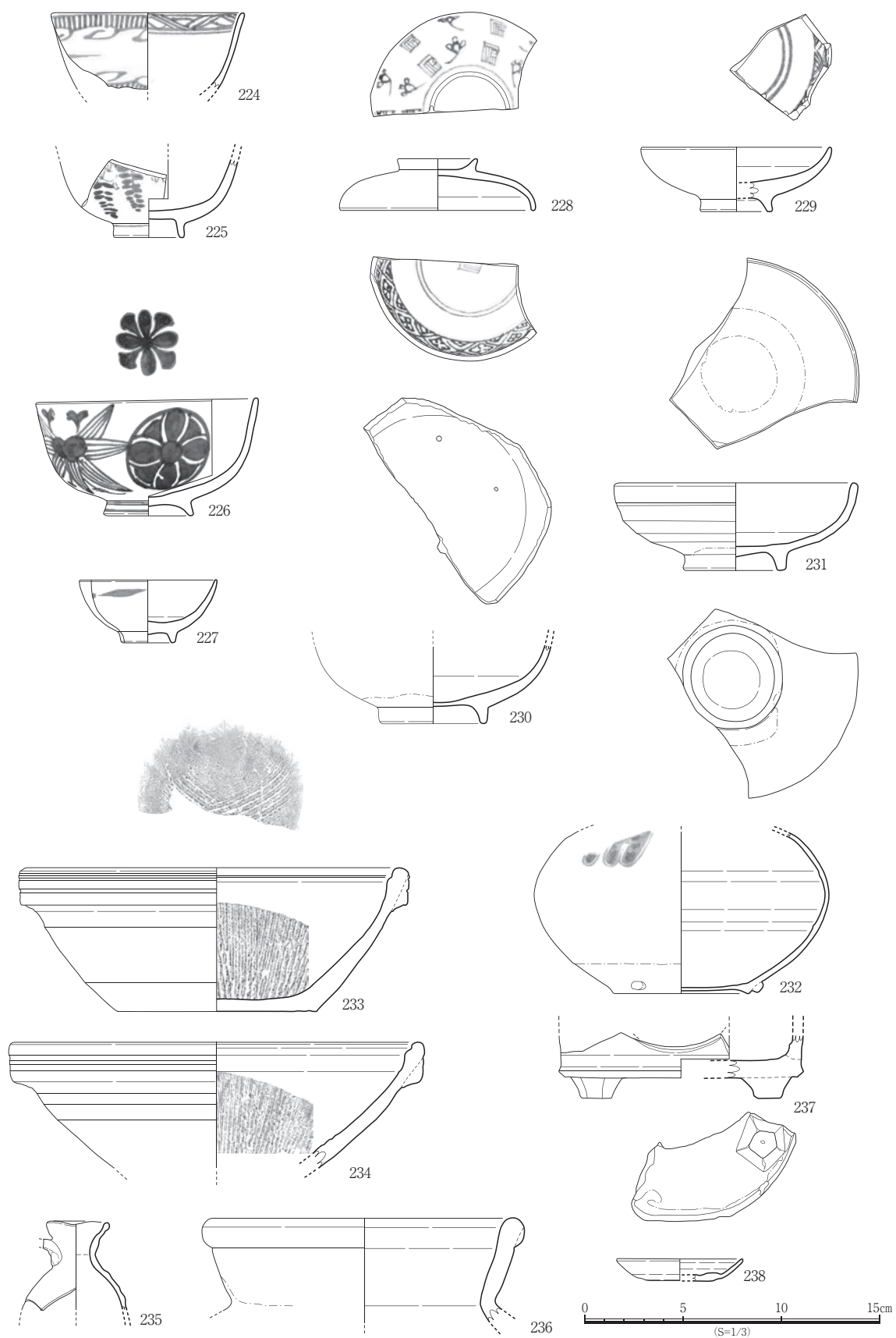


图6-46 SD3·4出土遺物実測図

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

SD3(図6-46)

調査区南部に位置する溝(B3-18-21)で、確認延長1.7m、幅0.3m、深さ15cmを測り、SD4を切り、SX5に切られる。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は土師器、須恵器、磁器、陶器、土師質土器、瓦が出土している。

224は磁器の碗である。

SD4(図6-46・47)

調査区南部から中央部に位置する溝(B3-18-20)で、確認延長13.5m、幅0.3~0.5m、深さ8~23cmを測り、SX4・28を切り、SD3・19に切られる。

埋土は1層が黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が黒褐色(10YR3/2)砂質シルト、3層が灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトで、遺物は土師器、磁器、陶器、土師質土器、瓦、石製品が出土している。

225~229は磁器で、225・226は碗、227は杯、228は蓋、229は皿である。230~237は陶器で、230は碗、231は皿、232は土瓶、233・234は播鉢、235は徳利、236は壺、237は焜炉である。238は土師質土器の小皿である。

SD5(図6-48)

調査区西部の南側に位置する溝(B3-17-16)で、確認延長3.7m、幅0.3~0.5m、深さ8~18cmを測り、

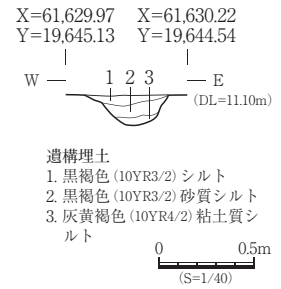


図6-47 SD4

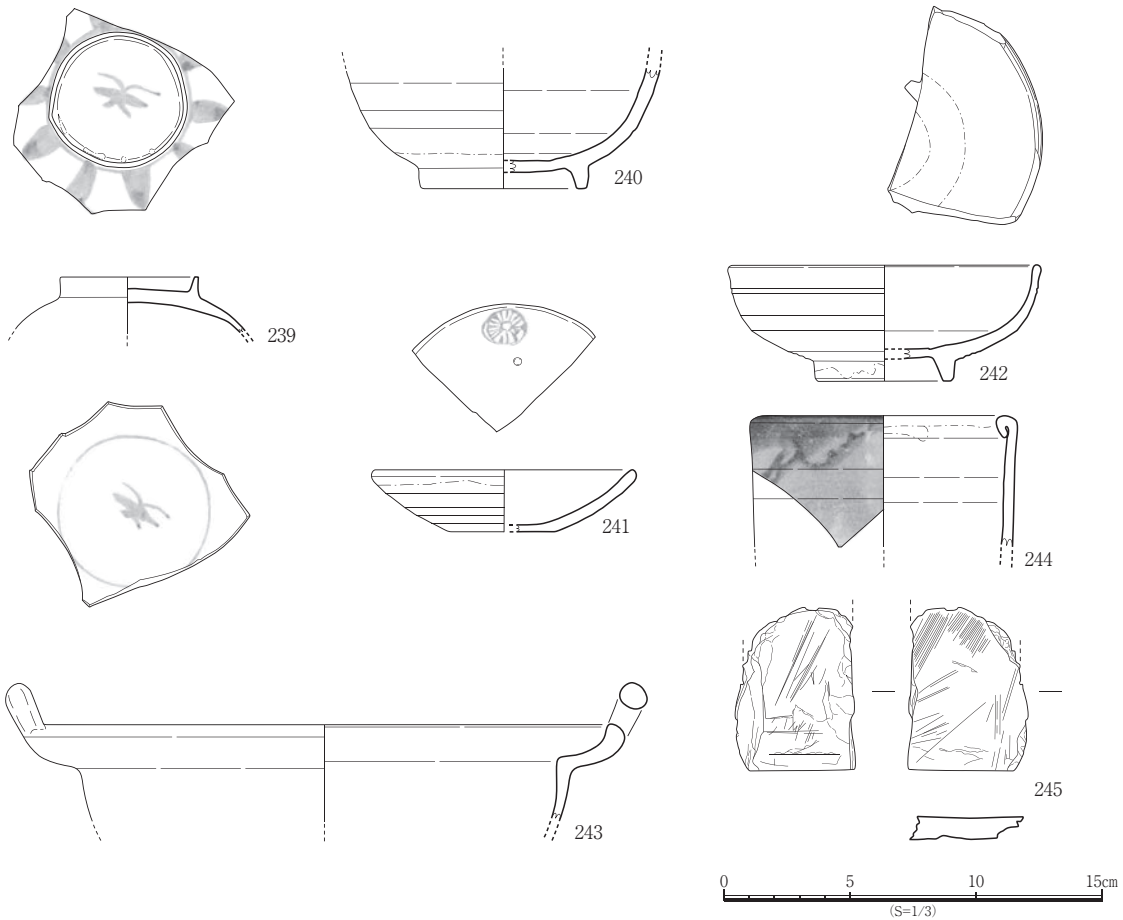


図6-48 SD5出土遺物実測図

SX34を切り、SD6、SX2に切られる。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は弥生土器、土師器、磁器、陶器、石製品が出土している。

239は磁器の蓋である。240～244は陶器で、240は碗、241・242は皿、243は鍋、244は火入である。245は石製品の砥石である。

SD6(図6-49～51)

調査区西部から中央部に位置する溝(B3-12-20)で、確認延長29.6m、幅0.2～0.7m、深さ4～10cmを測り、SK13、SD5・7・9・16、SX8・26・27・34・36・37を切る。埋土は小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は弥生土器、土師器、須恵器、磁器、陶器、瓦、石製品が出土している。

246～252は磁器で、246・247は碗、248は杯、249は蕎麦猪口、250は蓋、251は皿、252は鉢である。253は白磁の紅皿である。254～260は陶器で、254～256は皿、257は播鉢、258は灯明皿、259は壺、260は甕である。261は瓦質土器の火鉢である。262～267は石製品で、262は有舌先頭器、263は剥片、264～267は砥石で、268は金属製品の銭貨である。

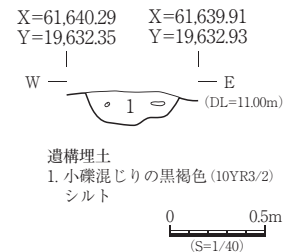


図6-49 SD6

SD7(図6-52)

調査区中央部から西部に位置する溝跡(B3-12-8)で、北西側は調査区外へ続く。確認延長15.8m、幅0.3～0.5m、深さ12～27cmを測り、SX27を切り、SD6・11に切られる。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は弥生土器、土師器、磁器、陶器、土製品、石製品が出土している。

269・270は磁器で、269は碗、270は皿である。271～278は陶器で、271・272は碗、273は杯、274は皿、275は瓶、276・277は鉢、278は灯明皿である。279・280は土師質土器の羽釜である。

SD8(図6-52)

調査区西部に位置する溝跡(B3-17-6)で、L字形を呈する。確認延長6.4m、幅0.3～0.6m、深さ2～21cmを測り、SX38を切り、SX32に切られる。埋土は黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルトで、遺物は弥生土器、磁器、陶器が出土している。

281は磁器の壺、282は陶器の碗である。

SD9(図6-53～58)

調査区中央部から西部に位置する溝跡(B3-12-7)で、確認延長29.7m、幅0.5～2.1m、深さ12～38cmを測り、SD11・13・14、SX27を切り、SK40・41、SD6・33・35に切られる。埋土は1層が小～中礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト、2層が小礫混じりの暗褐色(10YR3/3)シルト、3層が小～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、4層が小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、5層が中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は弥生土器、土師器、須恵器、磁器、白磁、陶器、土師質土器、瓦質土器、瓦、土製品、石製品、金属製品が出土している。

283～298は磁器で、283～289は碗、290は杯、291は蕎麦猪口、292は蓋、293は茶台、294～297は皿、298は鉢である。299・300は白磁で、299は皿、230は紅皿である。301～317は陶器で、301は碗、302～306は蓋、307～309は播鉢、310は灯明皿、311・312は台付灯明皿、313は餌猪口、314～316は甕、317は火入である。318～322は土師質土器で、318・319は小皿、320は皿、321・322は焙烙である。323は瓦質土器の火鉢、324は瓦の丸瓦、325～327は土製品で、325は焜炉、326・327は竈である。328～332は石製品で、328は石筆、329は硯、330～332は砥石、333～335は金属製品の銭貨である。

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

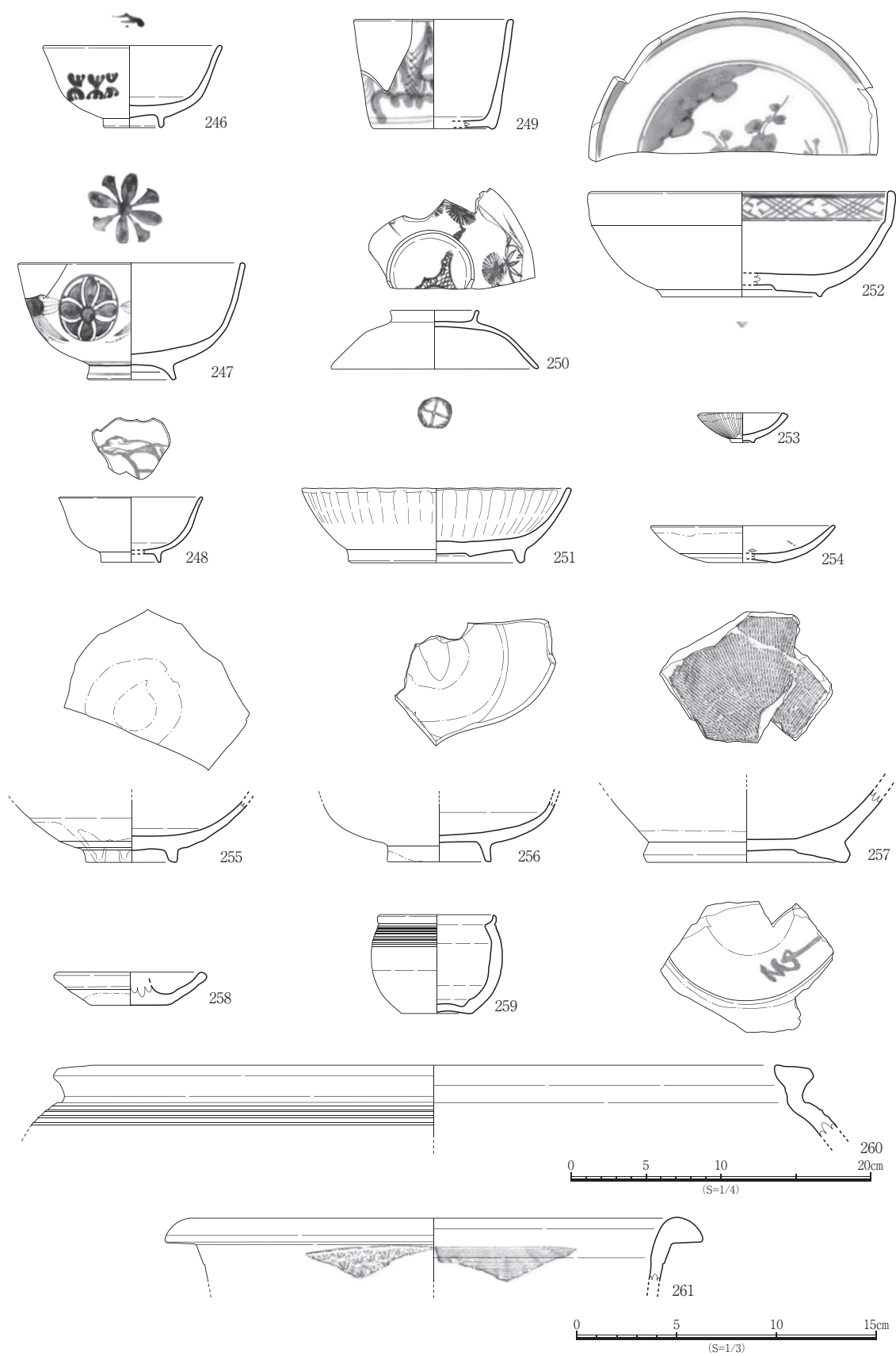


図6-50 SD6出土遺物実測図1

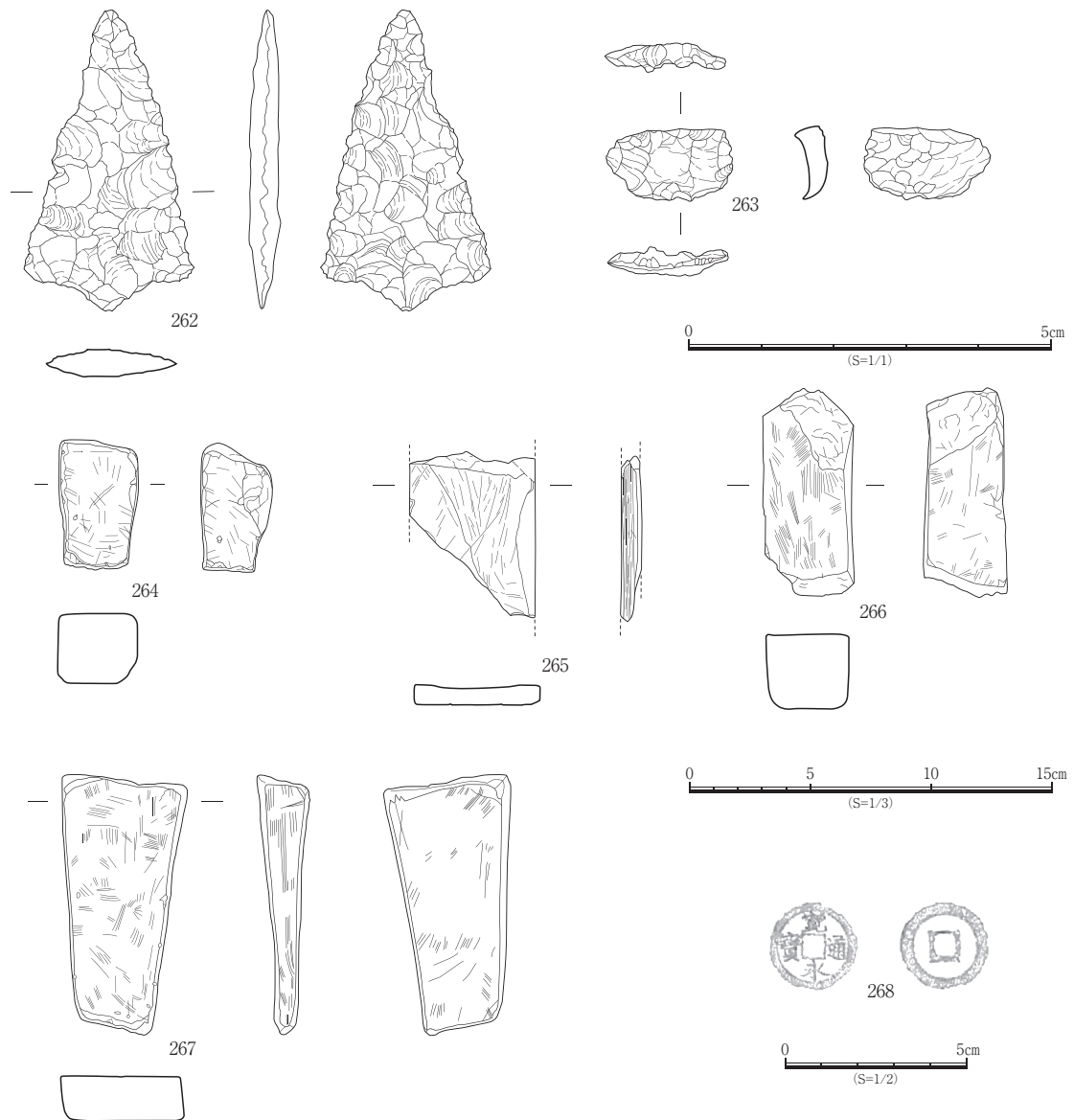


図6-51 SD6出土遺物実測図2

SD10(図6-59)

調査区西部に位置する溝(B3-16-14)で、確認延長7.1m、幅0.7～0.9m、深さ7～11cmを測る。埋土は小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は土師質土器が出土している。

336は土師質土器の小皿である。

SD11(図6-59)

調査区西部から中央部に位置する溝(B3-12-22)で、確認延長27.3m、幅0.4～1.0m、深さ13～29cmを測り、SK25・26・57～59・61、SD9・12、SX32・40・47～49に切られる。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は土師器、須恵器、磁器、陶器、土師質土器、金属製品が出土している。

337は磁器の碗、338・339は陶器で、338は碗、339は甕である。340は土師質土器の小皿である。

SD12(図6-59)

調査区西部に位置する溝(B3-16-14)で、確認延長2.1m、幅0.3～0.4m、深さ6～10cmを測り、

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

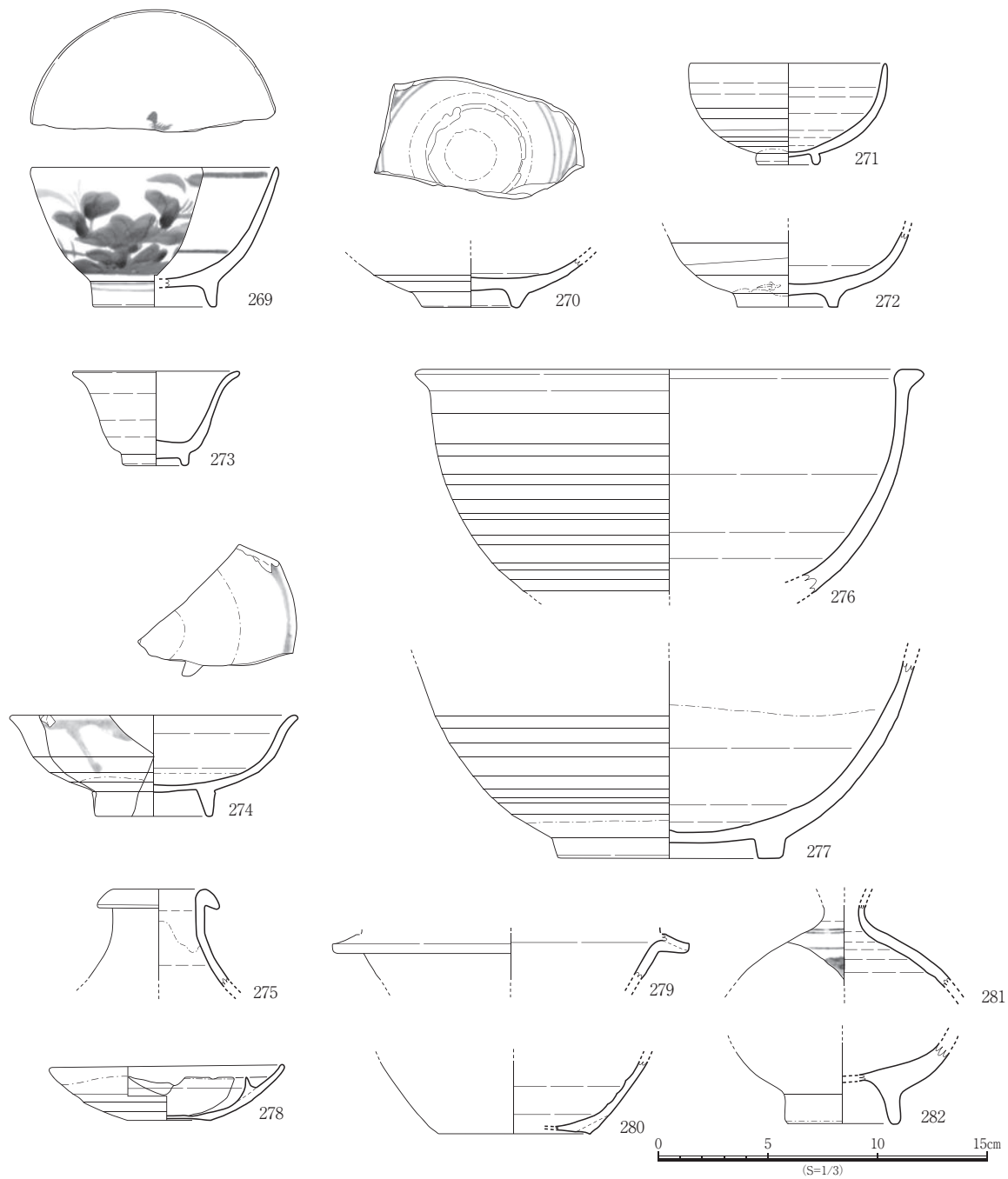


図6-52 SD7・8出土遺物実測図

SD11を切る。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は瓦が出土している。

341は瓦の軒棧瓦である。

SD13(図6-59・60)

調査区西部に位置する溝(B3-11-15)で、確認延長23.8m、幅0.4~0.9m、深さ13~42cmを測り、SK49・50・69・72・73、SD17、SX22・23・33を切り、SK42・43に切られる。埋土は1層が黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が極暗褐色(7.5YR2/3)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、3層が黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は土師器、須恵器、磁器、陶器、土師質土器、瓦質土器、瓦、金属製品が出土

している。

342～344は磁器の碗である。345～347は陶器で、345は碗, 346は皿, 347は鉢である。

SD14(図6-59・60)

調査区西部に位置する溝(B3-11-15)で, 確認延長21.5m, 幅0.4～0.6m, 深さ8～24cmを測り, SK72を切り, SK69, SX33・39に切られる。埋土は極暗褐色(7.5YR2/3)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は弥生土器, 土師器, 陶器, 石製品が出土している。

348は磁器の碗, 349は石製品の砥石である。

SD15

調査区西部の北西側に位置する溝(B3-11-15)で, 確認延長5.6m, 幅0.2m, 深さ5～12cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は皆無であった。

SD16

調査区中央部に位置する溝(B3-12-24)で, 確認延長3.1m, 幅0.2～0.4m, 深さ2～9cmを測り, SK8を切り, SD6, SX11に切られる。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は土師器, 陶器, 土師質土器, 瓦質土器が出土している。

SD17

調査区西部に位置する溝(B3-16-8)で, 確認延長4.2m, 幅0.6m, 深さ3～4cmを測り, SK43, SD13に切られる。埋土は小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は皆無であった。

SD18(図6-59)

調査区南部から中央部に位置する溝(B3-18-17)で, 確認延長10.2m, 幅0.2～0.4m, 深さ3～9cmを測り, SX14に切られる。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は土師器, 磁器, 白磁, 陶器, 土師質土器, 瓦が出土している。

350は白磁の紅皿, 351は陶器の播鉢である。

SD19

調査区中央部に位置する溝(B3-18-7)で, 確認延長1.6m, 幅0.3～0.5m, 深さ7～14cmを測り, SD4を切る。埋土は明黄褐色(10YR6/6)粘土質シルトのブロック混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は陶器, 土製品, 瓦が出土している。

SD20

調査区南東部に位置する溝(B3-23-5)で, 確認延長8.7m, 幅0.2～0.6m, 深さ2～8cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトで, 遺物は皆無であった。

SD21

調査区南東部に位置する溝(B3-19-21)で, 確認延長2.1m, 幅0.1～0.2m, 深さ2～5cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトで, 遺物は皆無であった。

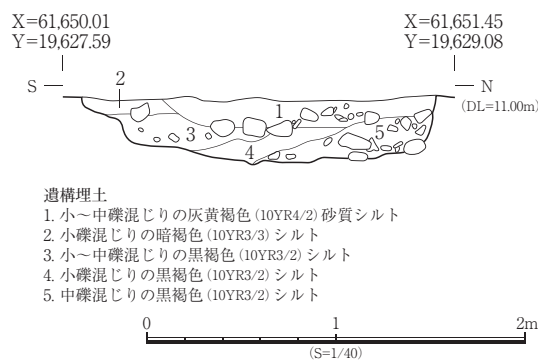


図6-53 SD9

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝



図6-54 SD9出土遺物実測図1

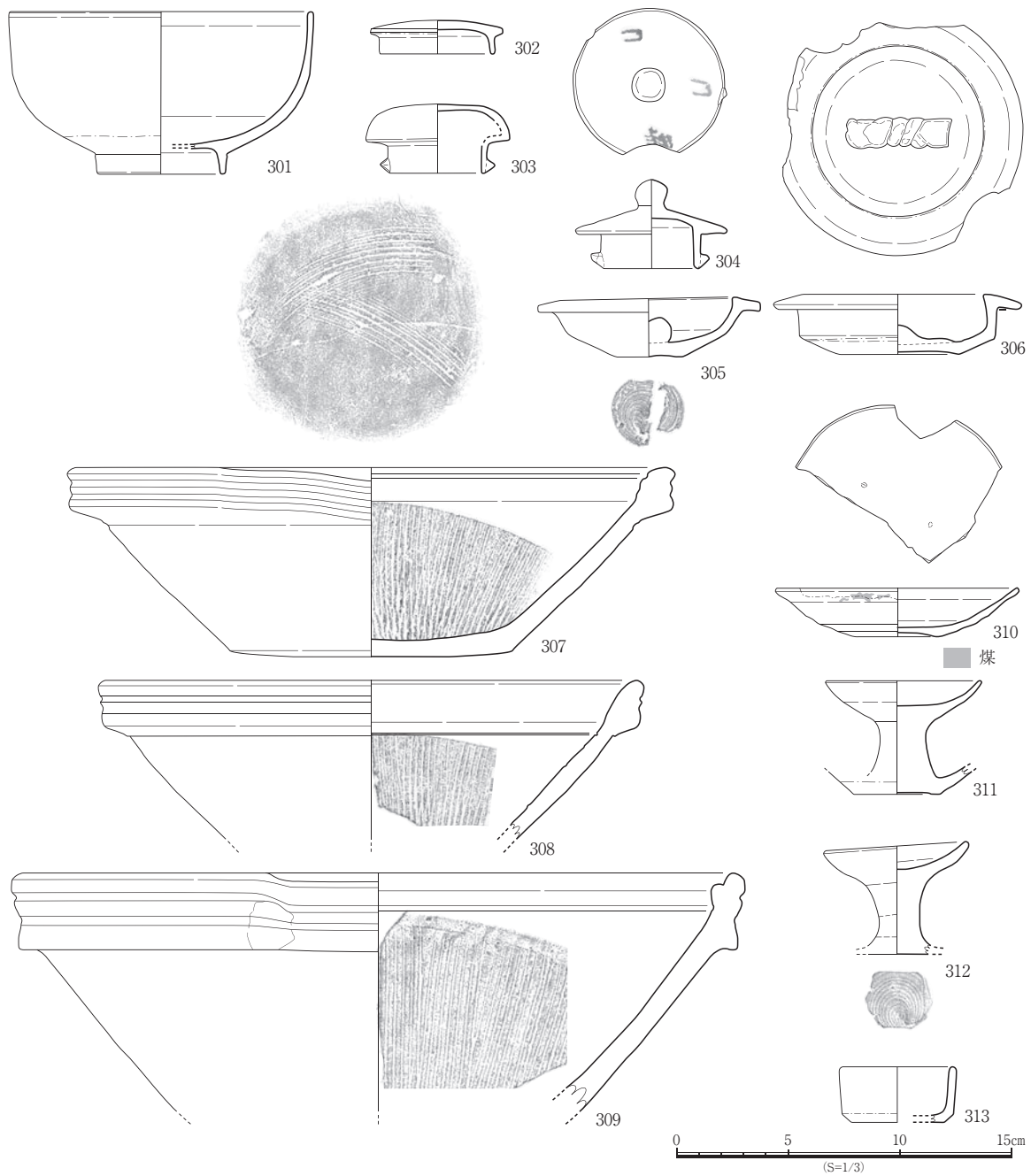


図6-55 SD9出土遺物実測図2

SD22

調査区南東部に位置する溝(B3-18-25)で、確認延長2.8m、幅0.3~0.5m、深さ4~6cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトで、遺物は皆無であった。

SD23

調査区南東部に位置する溝(B3-18-25)で、確認延長5.2m、幅0.2~0.5m、深さ2~6cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトで、遺物は皆無であった。

SD24

調査区南東部に位置する溝(B3-19-21)で、確認延長2.1m、幅0.1~0.2m、深さ2~5cmを測る。

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

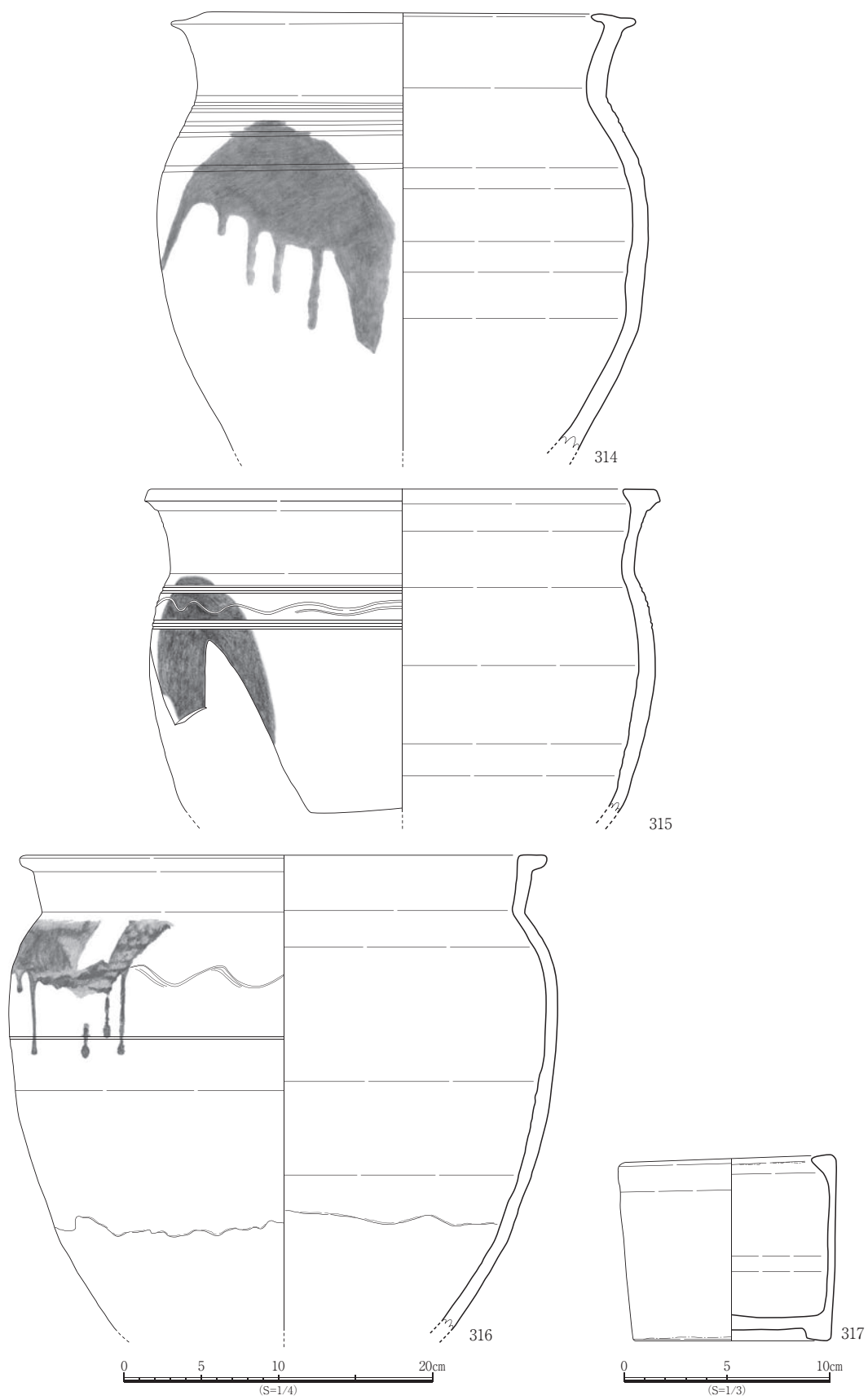


図6-56 SD9出土遺物実測図3

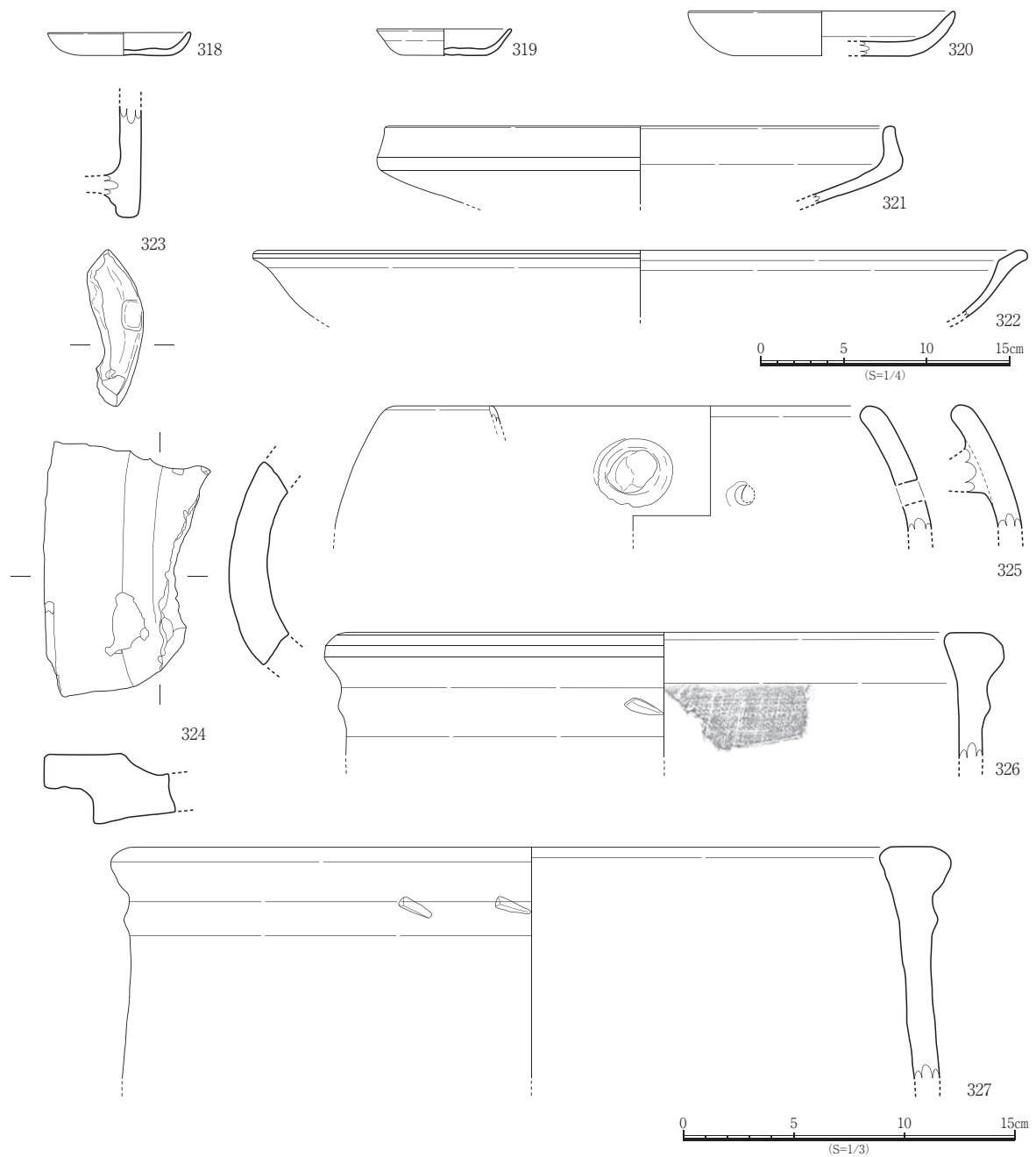


図6-57 SD9出土遺物実測図4

埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトで、遺物は皆無であった。

SD25

調査区南東部に位置する溝(B3-18-25)で、確認延長5.9m、幅0.3~0.4m、深さ3~4cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトで、遺物は皆無であった。

SD26

調査区南東部に位置する溝(B3-18-25)で、確認延長1.1m、幅0.2m、深さ7cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトで、遺物は皆無であった。

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

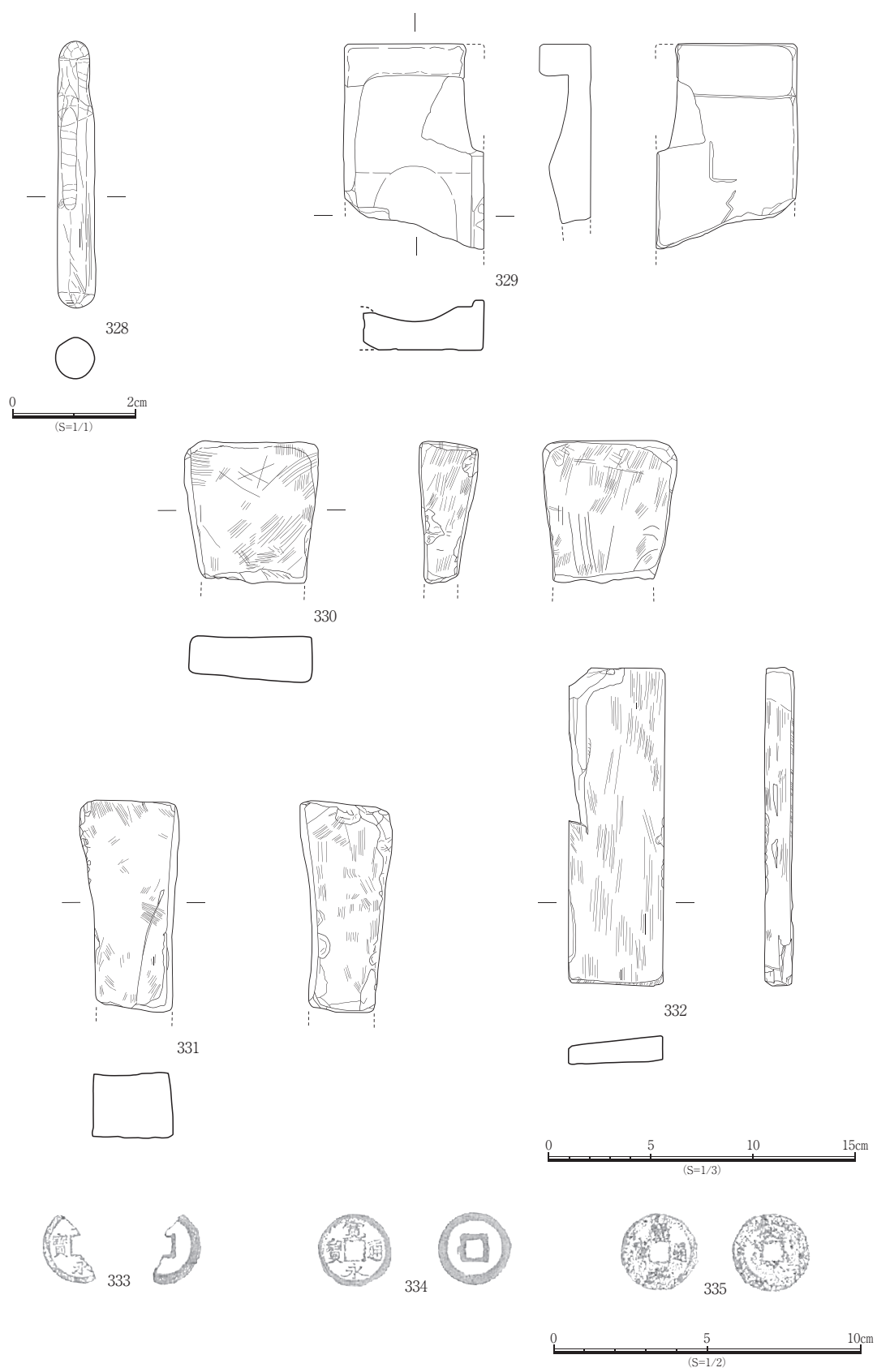


図6-58 SD9出土遺物実測図5



图6-59 SD10~14·18出土遗物实测图

2. 検出遺構と遺物 (3) 溝

SD27

調査区南東部に位置する溝(B3-18-15)で、確認延長1.2m、幅0.1～0.2m、深さ4～5cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトで、遺物は皆無であった。

SD28

調査区南部から東部に位置する溝(B3-19-2)で、確認延長24.2m、幅0.4～0.5m、深さ3～10cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトで、遺物は土師器、磁器、陶器、土師質土器、瓦が出土している。

SD29

調査区中央部に位置する溝(B3-18-2)で、北西側は調査区外へ続く。確認延長3.7m、幅0.3～0.4m、深さ2～5cmを測り、SX18を切り、SX16に切られる。埋土は黒色(10YR2/1)シルトで、遺物は須恵器、磁器、陶器、土師質土器、瓦が出土している。

SD30

調査区西部に位置する溝(B3-16-9)で、確認延長1.1m、幅0.5m、深さ8cmを測り、SK62、SX17を切る。埋土は黒色(10YR2/1)シルトで、遺物は皆無であった。

SD31

調査区西部に位置する溝(B3-17-16)で、確認延長2.4m、幅0.3m、深さ9～11cmを測る。埋土は黒色(10YR2/1)シルトで、遺物は皆無であった。

SD32

調査区中央部に位置する溝(B3-18-2)で、北西側は調査区外へ続く。確認延長12.1m、幅0.5～0.6m、深さ1～11cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じるにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトで、遺物は磁器が出土している。

SD33

調査区西部の北側に位置する溝(B3-12-7)で、確認延長2.8m、幅0.2～0.3m、深さ5～9cmを測り、SD9を切る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SD34

調査区西部の北側に位置する溝(B3-12-2)で、北東側は調査区外へ続く。確認延長1.6m、幅0.4m、深さ7～14cmを測り、SD35に切られる。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SD35

調査区西部の北側に位置する溝(B3-12-7)で、確認延長1.2m、幅0.4m、深さ5～7cmを測り、SD9・34を切る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

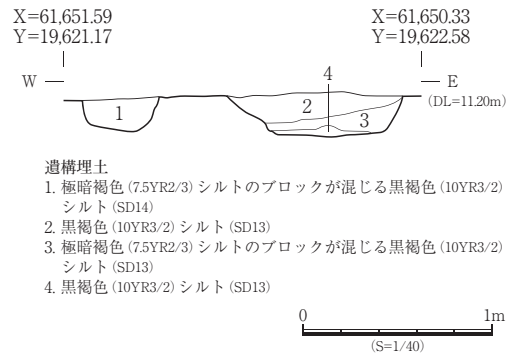


図6-60 SD13・14

SD36

調査区西部に位置する溝(B3-17-6)で、確認延長9.2m、幅0.2～0.3m、深さ6～9cmを測り、SX32を切る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと黒色(10YR2/1)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SD37

調査区東部の南側に位置する溝(B3-19-11)で、確認延長1.3m、幅0.2～0.3m、深さ2～5cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと黒色(10YR2/1)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SD38

調査区東部に位置する溝(B3-14-15)で、南東側は調査区外へ続く。確認延長13.3m、幅0.3～0.6m、深さ4～19cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトで、遺物は皆無であった。

SD39

調査区東部に位置する溝(B3-14-19)で、確認延長1.9m、幅0.2～0.3m、深さ8cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトで、遺物は皆無であった。

SD40

調査区東部に位置する溝(B3-14-18)で、確認延長1.2m、幅0.3m、深さ12～14cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトで、遺物は皆無であった。

SD41

調査区中央部の東側に位置する溝(B3-13-25)で、確認延長2.9m、幅0.3～0.4m、深さ1～2cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトで、遺物は皆無であった。

SD42

調査区北部に位置する溝(B3-14-2)で、確認延長2.3m、幅0.3～0.4m、深さ5～7cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトで、遺物は皆無であった。

SD43

調査区北部に位置する溝(B3-14-3)で、確認延長2.1m、幅0.3m、深さ7～9cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトで、遺物は皆無であった。

SD44

調査区西部に位置する溝(B3-11-25)で、確認延長2.1m、幅0.2～0.3m、深さ10cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SD45

調査区北部に位置する溝(B3-9-22)で、確認延長1.7m、幅0.4m、深さ4～6cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと黒色(10YR1.7/1)シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトで、遺物は皆無であった。

(4) 井戸**SE1(図6-61・62)**

調査区中央部に位置する井戸(B3-12-13)で、東西1.2m、南北1.1m、深さ1m以上を測る。素掘り

2. 検出遺構と遺物 (6) 性格不明遺構

の井戸で、ほぼ垂直に掘り込んでいた。埋土は1層が灰黄褐色(10YR4/2)シルト、2層が暗褐色(7.5YR3/4)シルトのブロックが混じる暗褐色(10YR3/3)シルト、3層が暗褐色(10YR3/3)シルト、4層が黒褐色(10YR3/2)シルト質粘土で、遺物は磁器、陶器、土師質土器、瓦質土器、瓦が出土している。

352は瓦質土器の火鉢である。

(5) 柱穴

P1(図6-63)

調査区東部に位置する柱穴(B3-14-24)で、平面形は楕円形を呈し、長軸96cm、短軸81cm、深さ57cmを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルトで、遺物は土師器、須恵器が出土している。

353~355は土師器の杯で、356は須恵器の甕である。

P2(図6-63)

調査区西部に位置する柱穴(B3-12-11)で、平面形は楕円形を呈し、長軸20cm、短軸15cm、深さ22cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は土師質土器が出土している。

357は土師質土器の焙烙である。

P3(図6-63)

調査区西部に位置する柱穴(B3-17-1)で、平面形は隅丸方形を呈し、長軸61cm、短軸57cm、深さ25cmを測る。埋土は1層が褐色(7.5YR4/6)粗粒砂質シルト、2層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器が出土している。

358は磁器の皿である。

P4(図6-63)

調査区西部に位置する柱穴(B3-16-10)で、平面形は円形を呈し、径20cm、深さ2cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる暗褐色(10YR3/4)シルトで、遺物は陶器、石製品が出土している。

359は陶器の皿である。

P5(図6-63)

調査区西部に位置する柱穴(B3-16-18)で、平面形は楕円形を呈し、長軸49cm、短軸45cm、深さ8cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、土師質土器、金属製品が出土している。

360は土師質土器の小皿、361は金属製品の銭貨である。

(6) 性格不明遺構

SX1

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-17-5)で、平面形は不整隅丸長方形と考えられる。南東側は調査区外へ続き、短軸は不明で、長軸5.4m、深さ3~9cmを測る。埋土は黒色(10YR2/1)シルト

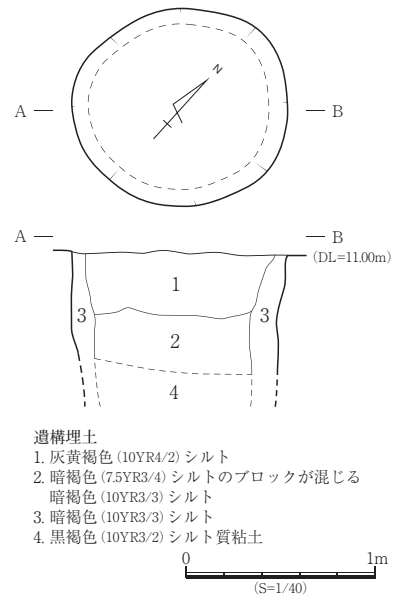


図6-61 SE1

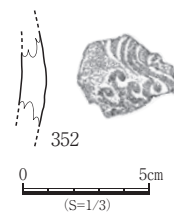


図6-62 SE1出土遺物実測図

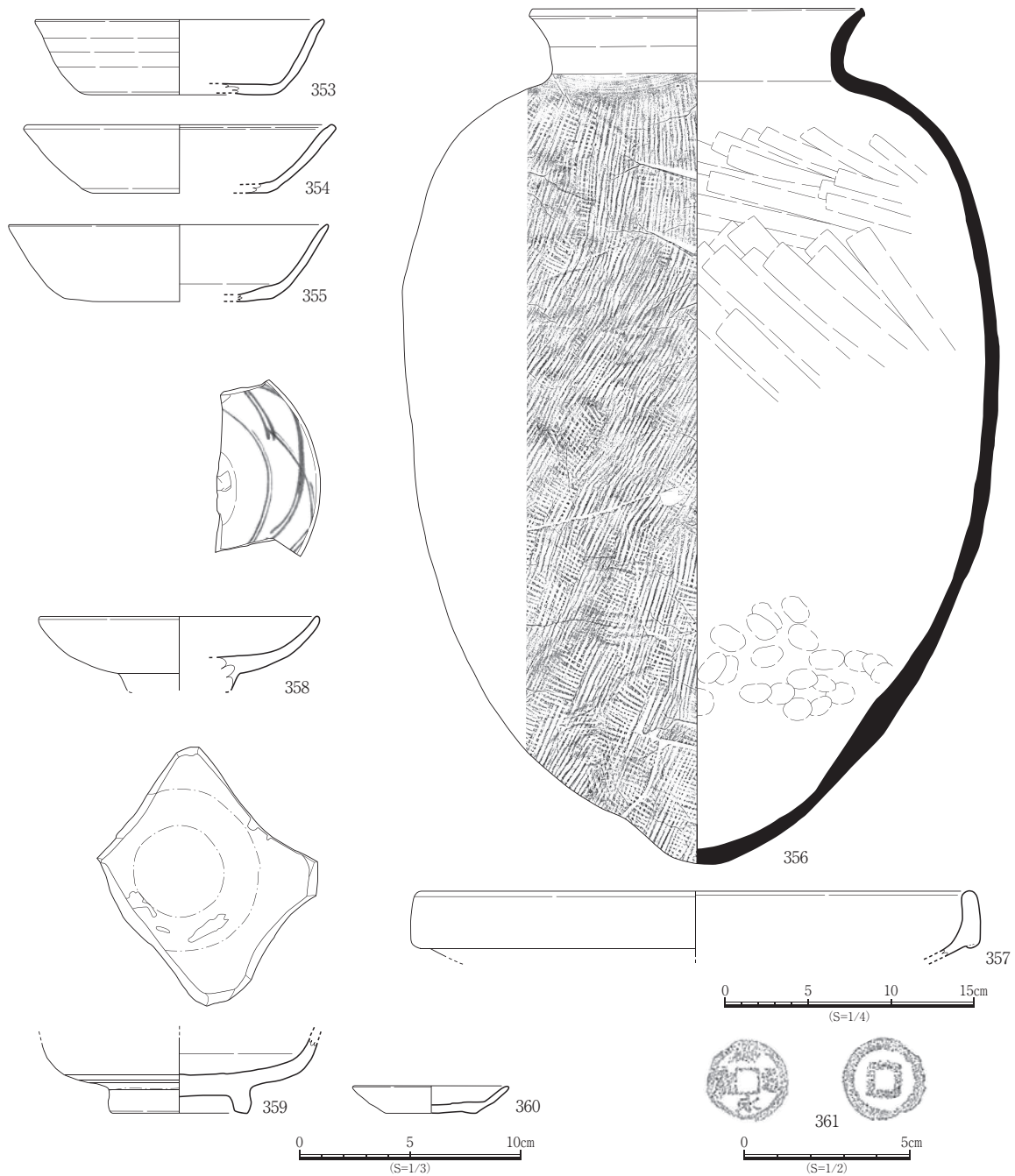


図6-63 柱穴出土遺物実測図

のブロック混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦が出土している。

SX2

調査区西部の南側に位置する性格不明遺構(B3-17-22)で、平面形は楕円形と考えられ、SD5を切る。南東側は調査区外へ続き、長軸は不明で、短軸0.6m、深さ57cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、陶器、土師質土器、瓦質土器、瓦が出土している。

2. 検出遺構と遺物 (6) 性格不明遺構

SX3(図6-64・65)

調査区南部に位置する性格不明遺構(B3-17-23)で、平面形は隅丸方形と考えられ、SK1・2に切られる。北西側は調査区外へ続き、短軸は不明で、長軸5.4m、深さ30～37cmを測る。埋土は1層が小礫混じりの黒褐色(7.5YR2/2)粘土質シルト、2層が褐色(7.5YR4/3)粘土質シルトで、遺物は弥生土器、土師器、須恵器、備前焼、磁器、陶器、瓦が出土している。

362は常滑焼の甕である。

SX4

調査区南部に位置する性格不明遺構(B3-18-12)で、SD4、SX51に切られるため平面形は不明である。残存幅1.3m、深さ7cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと黒色(10YR2/1)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX5(図6-66)

調査区南部に位置する性格不明遺構(B3-17-20)で、平面形は不整形を呈し、SK71、SD1・3、SX46を切る。深さ1～5cmを測り、埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は弥生土器、土師器、磁器、白磁、陶器、土師質土器、瓦、土製品、石製品、金属製品が出土している。

363～365は磁器で、363は碗、364は杯、365は蓮華、366は白磁の皿である。367～369は陶器で、367は碗、368は蓋、369は急須、370は土師質土器の火鉢、371は土製品の獣面、372は石製品の砥石、373は金属製品の銭貨である。

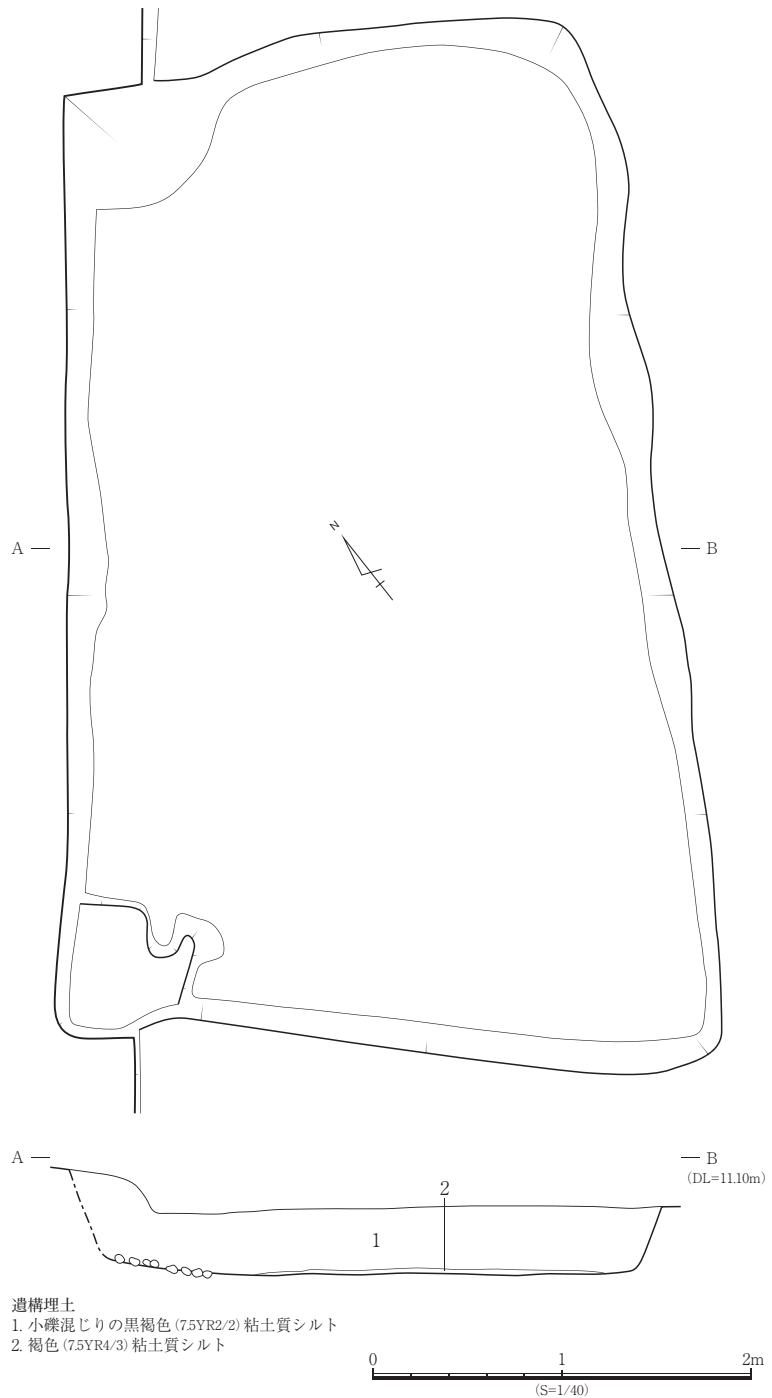


図6-64 SX3

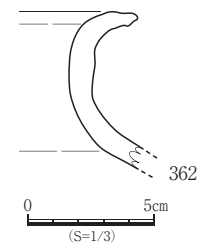


図6-65 SX3出土遺物実測図

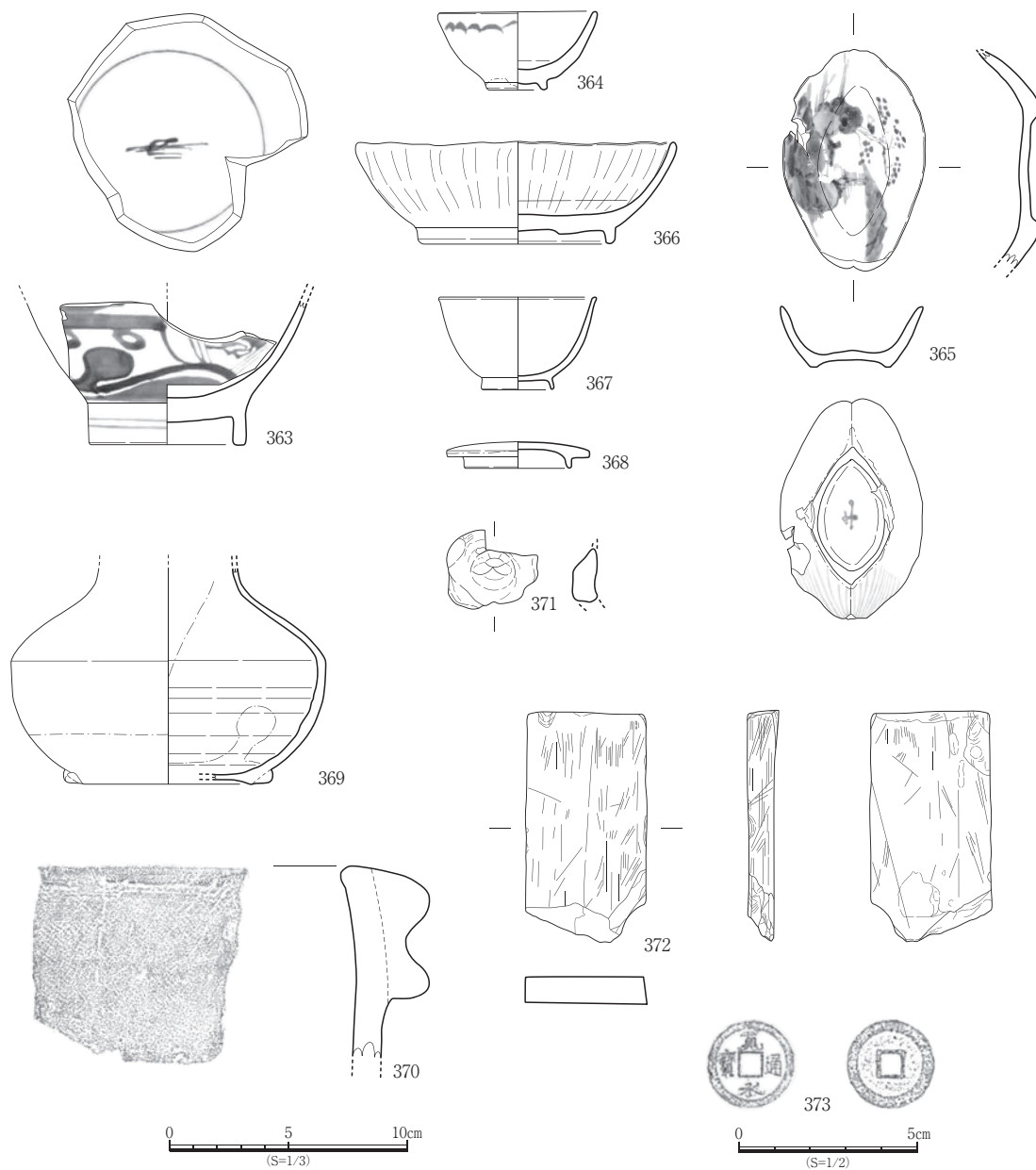


図6-66 SX5出土遺物実測図

SX6

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-17-3)で、平面形は不整形を呈し、SX36を切る。深さ4cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと褐色(7.5YR4/6)粗粒砂質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX7

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-12-12)で、平面形は楕円形を呈し、長軸1.7m、短軸1.4m、深さ4cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと褐色(7.5YR4/6)粗粒砂質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX8

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-17-12)で、平面形は不整形を呈し、SD6に切られる。深

2. 検出遺構と遺物 (6) 性格不明遺構

さ3～4cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと黒色(10YR2/1)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は陶器が出土している。

SX9

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-17-12)で、平面形は楕円形を呈し、長軸0.7m、短軸0.6m、深さ2～6cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと黒色(10YR2/1)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は弥生土器、土師器、磁器、陶器が出土している。

SX10

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-16-19)で、平面形は楕円形を呈し、長軸1.6m、短軸0.9m、深さ11cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと黒色(10YR2/1)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX11

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-12-25)で、平面形は楕円形を呈し、長軸0.6m、短軸0.4m、深さ10cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと黒色(10YR2/1)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器が出土している。

SX12

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-11-20)で、平面形は隅丸長方形を呈する。長軸2.2m、短軸1.1m、深さ2～6cmを測り、SK42に切られる。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は弥生土器、磁器が出土している。

SX13

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-12-16)で、平面形は不整形を呈し、SK68を切り、SK35・38・67・77に切られる。深さは8～26cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX14

調査区南部に位置する性格不明遺構(B3-18-12)で、平面形は不整形を呈し、SD18を切る。深さは13～16cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は土師器、磁器、陶器、瓦が出土している。

SX15

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-18-2)で、平面形は不整形を呈する。深さは1～2cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルトで、遺物は土師器、磁器が出土している。

SX16

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-18-1)で、平面形は不整形を呈し、SD29を切り、北西部は調査区外へ続く。深さは1～2cmを測り、埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、陶器、土師質土器、瓦が出土している。

SX17

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-16-9)で、SK62、SD30に切れ、平面形と規模は不明である。深さは1～2cmを測り、埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

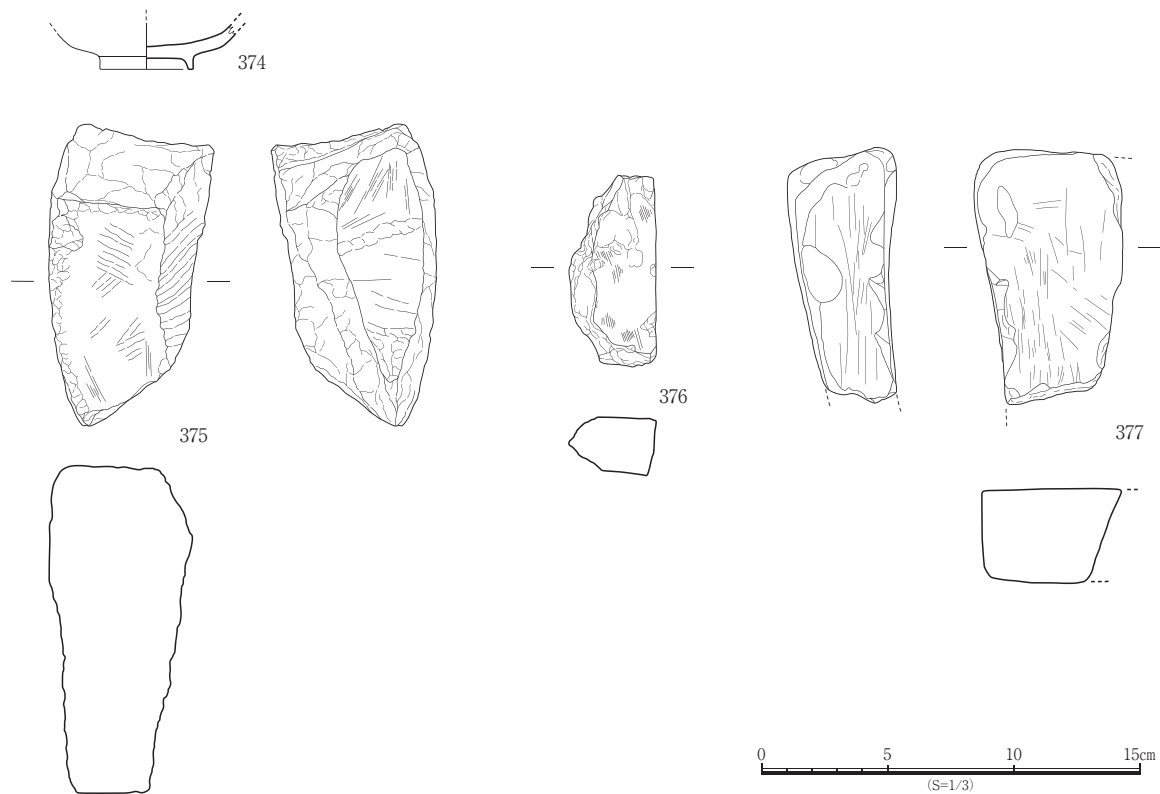


図6-67 SX19出土遺物実測図

SX18

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-18-2)で、平面形は不整形を呈し、SD29に切られる。深さは5~6cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、陶器、瓦が出土している。

SX19(図6-67)

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-16-5)で、平面形は不整形を呈し、SK46, SX35を切る。深さは6~12cmを測り、埋土は小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、白磁、陶器、石製品が出土している。

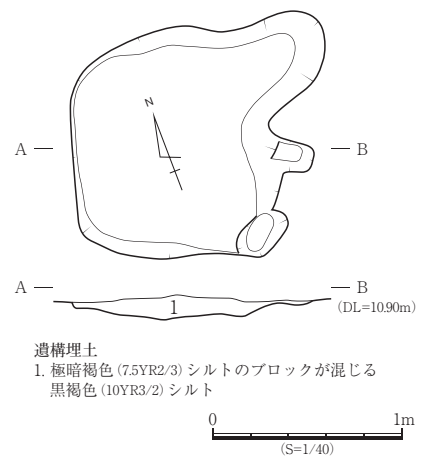
374は白磁の皿, 375~377は石製品で、375は石臼, 376・377は砥石である。

SX20(図6-68)

調査区南部に位置する性格不明遺構(B3-17-25)で、平面形は不整形を呈する。深さは6~11cmを測り、埋土は極暗褐色(7.5YR2/3)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は土師器が出土している。

SX21

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-12-25)で、平面形は不整楕円形を呈し、長軸0.9m, 短軸0.4m, 深さ12cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる



遺構埋土
1. 極暗褐色(7.5YR2/3)シルトのブロックが混じる
黒褐色(10YR3/2)シルト

図6-68 SX20

2. 検出遺構と遺物 (6) 性格不明遺構

黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX22

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-12-11)で、平面形は不整形を呈し、SX23・24を切り、SD13に切られる。深さは12～18cmを測り、埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX23

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-12-11)で、平面形は不整形を呈し、SX24を切り、SD15、SX22に切られる。深さは12cmを測り、埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX24

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-12-11)で、平面形は方形と考えられるが、SX22・23に切られるため、規模は不明である。深さは2cmを測り、埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX25

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-12-16)で、平面形を楕円形を呈し、長軸0.8m、短軸0.6m、深さ9cmを測る。埋土は埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX26

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-12-24)で、平面形は不整形を呈し、SD6に切られる。深さは9cmを測り、埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX27(図6-69)

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-12-20)で、平面形は不整形を呈し、SD6・7・9に切られる。深さは4～7cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、陶器、瓦が出土している。

378は磁器の杯である。

SX28(図6-69)

調査区南部に位置する性格不明遺構(B3-18-11)で、平面形は不整形を呈し、SD4、SX51に切られる。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は土師器、磁器、陶器、瓦が出土している。

379は磁器の碗である。

SX29

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-13-18)で、平面形は不整形を呈する。深さは3～8cmを測り、埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は弥生土器、土師器が出土している。

SX30(図6-69)

調査区北部に位置する性格不明遺構(B3-8-7)で、平面形は不整形を呈する。深さは18～21cmを測り、埋土は黒色(10YR2/1)シルトのブロックと小礫混じりの暗褐色(10YR3/3)シルトで、遺物は磁器、陶器が出土している。

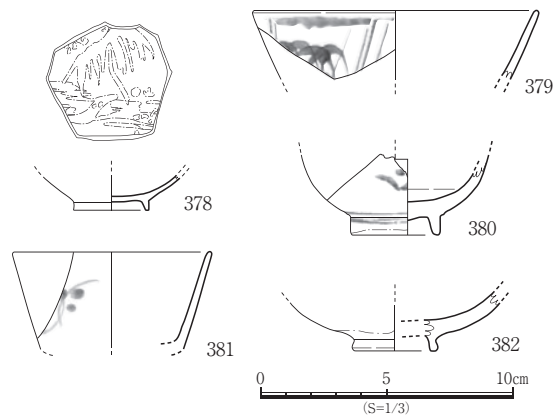


図6-69 SX27・28・30・32・33出土遺物実測図

380は磁器の碗である。

SX31

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-12-23)で、SK61を切り、SK57～59に切られるため、平面形と規模は不明である。深さは6～13cmを測り、埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX32(図6-69)

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-17-7)で、平面形は不整形を呈し、SD8・11を切り、SK7・25、SD36、SX40に切られる。深さは2～16cmを測り、埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は弥生土器、土師器、磁器、陶器が出土している。

381は磁器の猪口である。

SX33(図6-69)

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-11-23)で、平面形は不整形を呈し、SK69、SD14を切り、SD13に切られる。深さは6～10cmを測り、埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は陶器が出土している。

382は陶器の碗である。

SX34

調査区西部の南側に位置する性格不明遺構(B3-17-16)で、平面形は不整形を呈し、SK13、SD5・6に切られる。深さは7～16cmを測り、埋土は小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は金属製品が出土している。

SX35

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-17-1)で、平面形は不整隅丸方形を呈し、SX19に切られる。長軸2.3m、短軸1.0m、深さ10～13cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX36

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-17-3)で、平面形は不整形を呈し、SD6、SX6に切られる。深さは2cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX37

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-17-12)で、平面形は不整形を呈し、SD6、SX42に切られる。深さは1～5cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX38

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-17-11)で、平面形は隅丸方形と考えられ、SD8に切られるため、短軸は不明である。長軸1.4m、深さ4～6cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX39

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-11-20)で、平面形は楕円形を呈する。SD14を切り、長軸1.1m、短軸0.8m、深さ7cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

2. 検出遺構と遺物 (6) 性格不明遺構

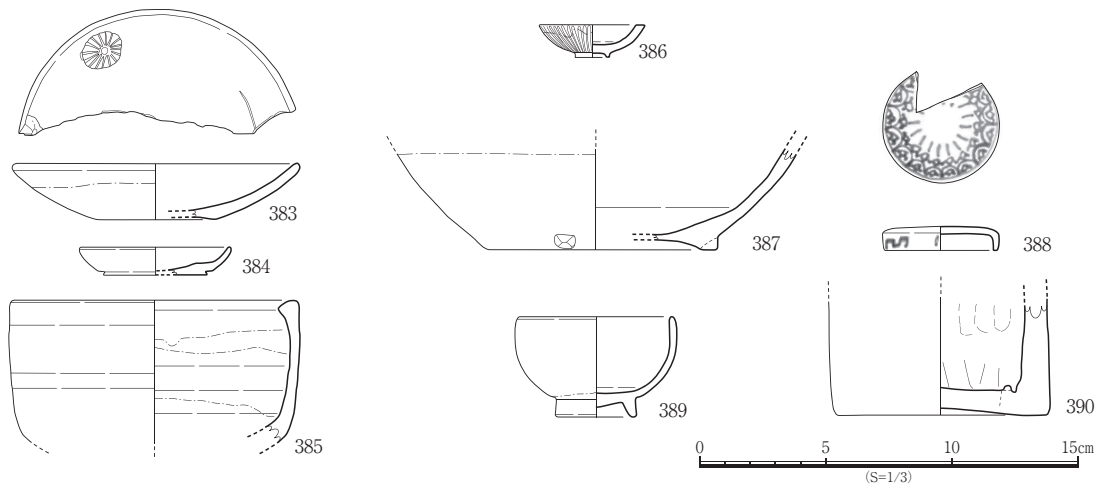


図6-70 SX40・42・46・49出土遺物実測図

SX40(図6-70)

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-17-6)で、平面形は不整楕円形を呈する。SD11, SX32を切り、長軸3.1m, 短軸0.9m, 深さ16~26cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は陶器が出土している。

383は陶器の皿である。

SX41

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-17-11)で、平面形は円形を呈し、長軸0.7m, 短軸0.6m, 深さ8cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX42(図6-70)

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-17-12)で、平面形は隅丸長方形を呈する。SX37を切り、SK22・34, SD6に切られ、長軸2.0m, 短軸1.3m, 深さ7cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は土師質土器が出土している。

384は土師質土器の小皿である。

SX43

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-18-7)で、平面形は不整形を呈する。深さは3~8cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックと小礫混じりの明赤褐色(2.5YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX44

調査区南部に位置する性格不明遺構(B3-18-12)で、平面形は楕円形を呈し、長軸0.9m, 短軸0.4m, 深さ8cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックと小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX45

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B13-18-3)で、平面形は溝状を呈し、長軸6.7m, 短軸0.5m, 深さ3~5cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じるにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトで、遺物は皆無であった。

SX46(図6-70)

調査区南部に位置する性格不明遺構(B3-18-16)で、平面形は不整形を呈し、SX5に切られる。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックと中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、青磁、白磁、陶器、土師質土器、瓦が出土している。

385は青磁の香炉、386は白磁の紅皿、387は陶器の土瓶である。

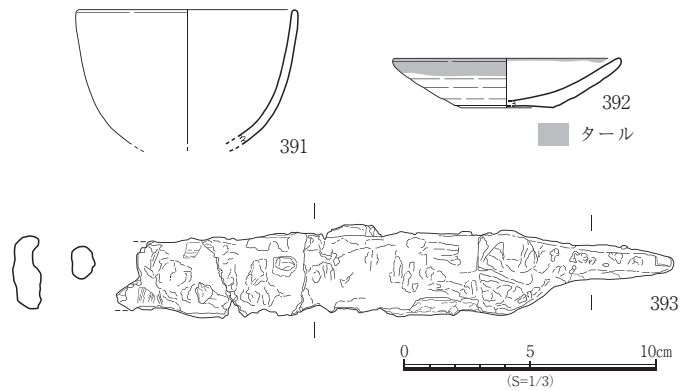


図6-71 SX50・51出土遺物実測図

SX47

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-17-2)で、SD11、SX48・49を切り、SK25に切られるため、平面形と規模は不明である。深さは11～25cmを測り、埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は土師器が出土している。

SX48

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-17-2)で、SD11、SX49を切り、SK24・25、SX47に切られるため、平面形と規模は不明である。深さは16～18cmを測り、埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、陶器が出土している。

SX49(図6-70)

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-17-2)で、平面形は楕円形を呈する。SD11を切り、SK24・25、SX47・48に切られるため、長軸は不明で、短軸1.4m、深さ18～50cmを測る。埋土は1層が暗褐色(7.5YR3/4)シルト、2層が黒色(10YR2/1)シルトと黒褐色(10YR3/2)シルトのブロックが混じる暗褐色(7.5YR3/4)シルト、3層が黒色(10YR2/1)シルトのブロックが混じる暗褐色(7.5YR3/4)シルトで、遺物は土師器、磁器、陶器、土師質土器、瓦質土器が出土している。

388は磁器の蓋、389は陶器の碗、390は土師質土器の火入である。

SX50(図6-71)

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-17-2)で、平面形は不整形を呈し、長軸0.6m、短軸0.5m、深さ33cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は陶器、土師質土器、瓦が出土している。

391は陶器の碗である。

SX51(図6-71)

調査区南部に位置する性格不明遺構(B3-18-16)で、平面形は不整形を呈し、SX4・28を切る。深さは14cmを測り、埋土は小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は陶器、瓦、金属製品が出土している。

392は陶器の灯明皿、393は金属製品の刀子である。

3. 小結

本調査区では近世の掘立柱建物や土坑、溝など多くの遺構が検出され、廃棄されたとみられる当

3. 小結

該期の遺物が出土している。検出された遺構は調査区南西部にある区画に集中しており、近世段階から現在まで、土地利用があまり変化していないと考えられる。

本調査区で確認された掘立柱建物は3棟あり、ほぼ同時期に存在していたとみられる。総柱建物であるSB1が主屋と考えられ、その周囲に付属の建物が展開している。また、これらの建物群の周りを区画溝が囲み、近世における屋敷の一様相を示しているとみられる。出土遺物から本調査区で確認された遺構の時期は19世紀代が中心とみられ、本調査区で確認された屋敷は幕末から明治にかけて存在していたと考えられる。

第Ⅶ章 I E 区

1. 調査の概要と基本層序

(1) 調査の概要

調査第Ⅰ区の中央部北側に位置する調査区で、調査面積は484㎡である。遺構は調査区全体で検出されており、近世の屋敷跡が確認されている。検出された遺構は土坑26基、溝9条などで、遺物は土坑や溝から多く出土している。

(2) 基本層序(図7-1)

調査区で認められた基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層 暗褐色(10YR3/3)細粒砂質シルト層

第Ⅱ層 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト層

第Ⅲ層 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫が少し混じる黒褐色(10YR3/2)シルト層

第Ⅳ層 黒色(10YR2/1)シルト層

第Ⅴ層 暗褐色(7.5YR3/4)シルト層

2. 検出遺構と遺物

(1) 土坑

SK1

調査区西部に位置する土坑(B2-5-14)で、平面形は溝状を呈する。SK2と切り合うが前後関係

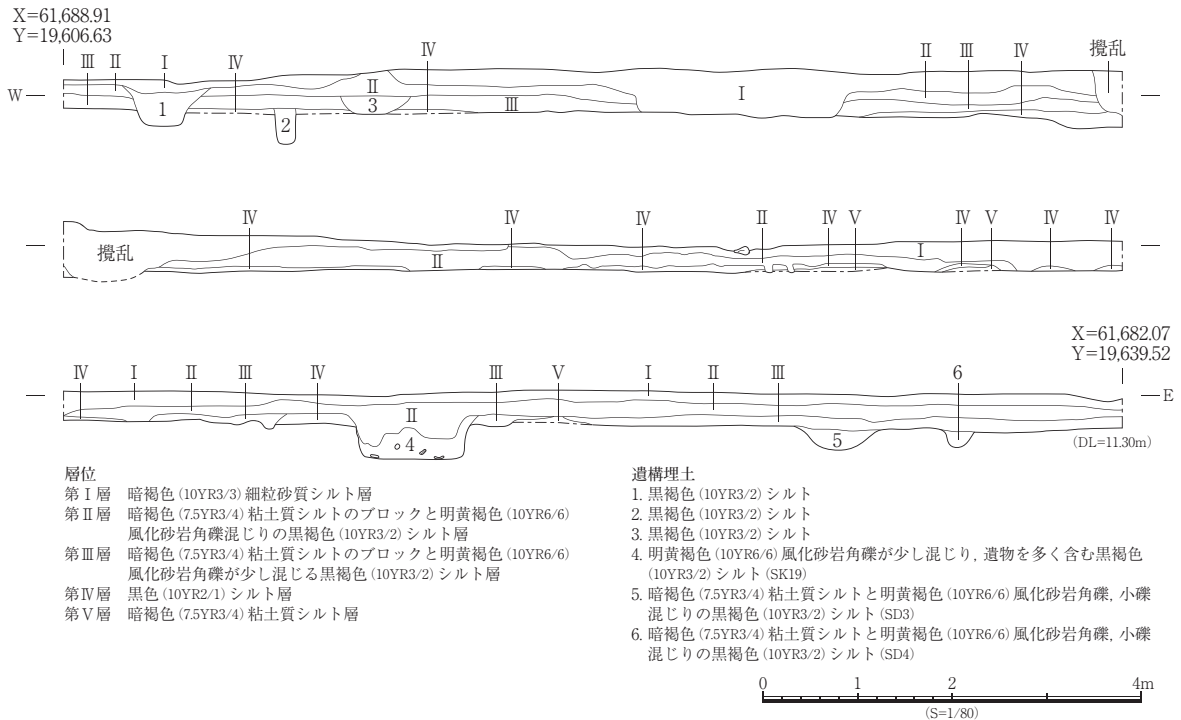


図7-1 調査区北壁セクション図

2. 検出遺構と遺物 (1) 土坑

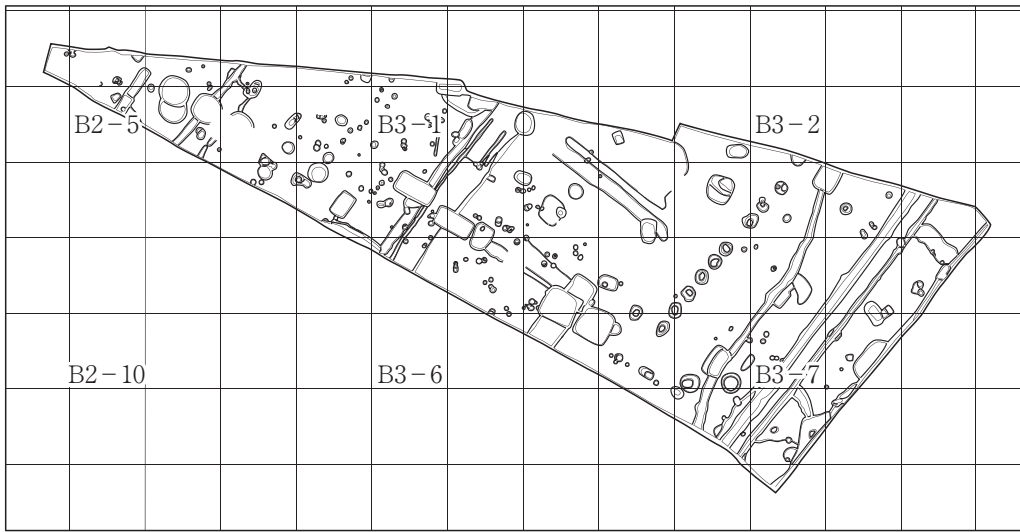


図7-2 調査区グリッド設定図

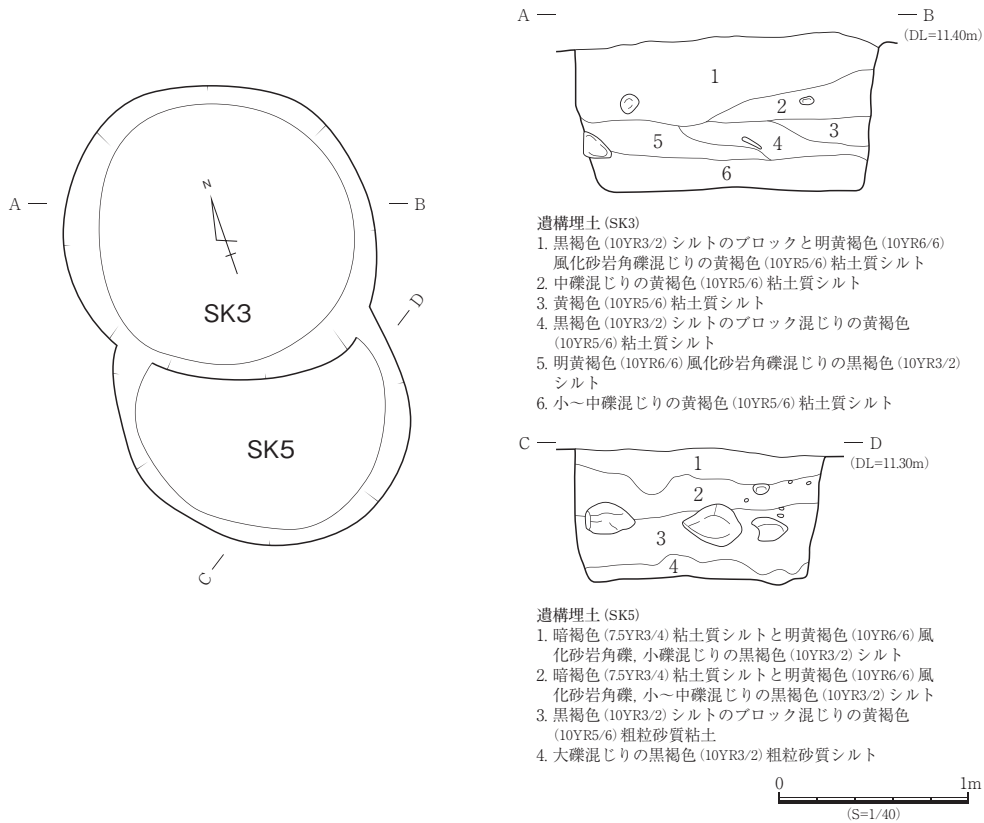


図7-3 SK3・5

は不明である。南側は調査区外へ続き、長軸は不明で、短軸0.6m、深さ8～17cmを測る。埋土は褐色 (7.5YR4/4) 粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色 (10YR3/2) シルトで、遺物は弥生土器が出土している。

SK2

調査区西部に位置する土坑(B2-5-19)で、SK1と切り合うが、前後関係は不明である。南側は調査区外へ続き、平面形、長軸、短軸は不明で、深さは3～8cmを測る。埋土は明黄褐色(10YR6/6)風化

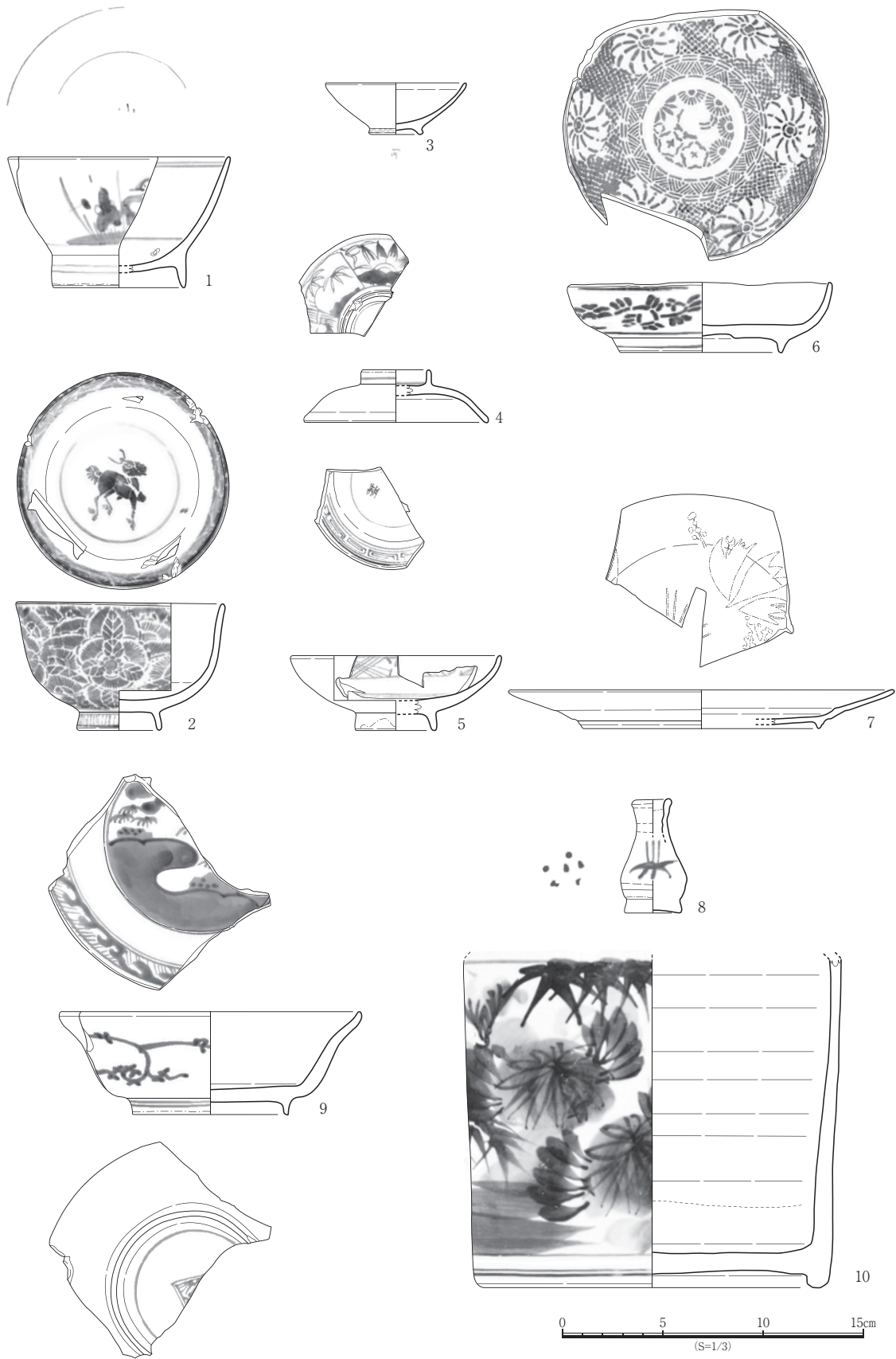


图7-4 SK3出土遗物实测图1

2. 検出遺構と遺物 (1) 土坑

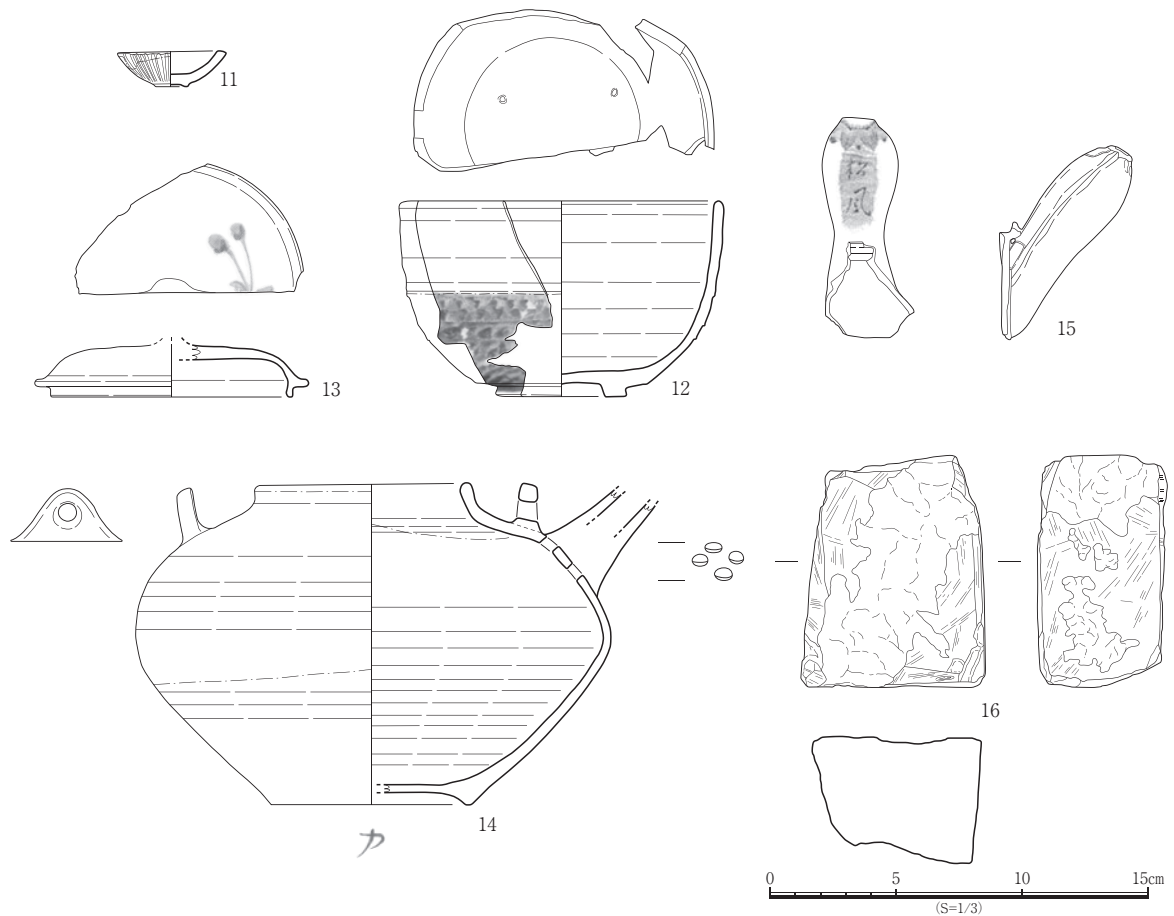


図7-5 SK3出土遺物実測図2

砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK3(図7-3~5)

調査区西部に位置するハンダ土坑(B2-5-20)で、平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.7m、短軸1.6m、深さ76~77cmを測る。SK5を切り、埋土は1層が黒褐色(10YR3/2)シルトのブロックと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト、2層が中礫混じりの黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト、3層が黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト、4層が黒褐色(10YR3/2)シルトのブロック混じりの黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト、5層が明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、6層が小~中礫混じりの黄褐色(10YR5/6)粘土質シルトで、遺物は弥生土器、須恵器、磁器、白磁、陶器、土師質土器、瓦質土器、石製品が出土している。

1~10は磁器で、1・2は碗、3は杯、4は蓋、5~7は皿、8は瓶、9は鉢、10は火入である。11は白磁の紅皿、12~15は陶器で、12は碗、13は蓋、14は土瓶、15は把手で、16は石製品の砥石である。

SK4(図7-6)

調査区西部に位置するハンダ土坑(B2-5-20)で、平面形は隅丸方形を呈する。SD1を切り、攪乱に切られるため、長軸は不明で、短軸1.5m、深さ64~68cmを測る。埋土は1層が小礫混じりの黄褐色(10YR5/6)中粒~粗粒砂、2層が黄褐色(10YR5/6)粗粒砂質シルト、3層が黄褐色(10YR5/6)シルト、4層が中礫混じりの黄褐色(10YR5/6)粗粒砂質シルト、5層が中礫混じりの黄褐色(10YR5/6)粘土質シルトで、遺物は皆無であった。

SK5(図7-3)

調査区西部に位置するハンダ土坑(B2-5-20)で、平面形は円形を呈し、径1.4m、深さ67～70cmを測る。SK3に切られ、埋土は1層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、3層が黒褐色(10YR3/2)シルトのブロック混じりの黄褐色(10YR5/6)粗粒砂質粘土、4層が大礫混じりの黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルトで、遺物は磁器が出土している。

SK6

調査区西部に位置する土坑(B3-1-16)で、平面形は不整形楕円形を呈し、長軸1.1m、短軸0.7m、深さ37～43cmを測る。SD5・6を切り、埋土は1層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK7

調査区西部に位置する土坑(B3-1-22)で、平面形は円形を呈し、長軸1.1m、短軸1.0m、深さ13～18cmを測る。埋土は1層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)シルト、3層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロック混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK8(図7-7)

調査区西部に位置する土坑(B3-1-22)で、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.4m、短軸1.0m、深さ29～32cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK9(図7-8)

調査区中央部に位置する土坑(B3-1-23)で、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸2.2m、短軸1.2m、深さ9～13cmを測る。SD7・8、SX11を切り、埋土は1層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫と瓦片が多量に混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、陶器が出土している。

17は磁器の皿である。

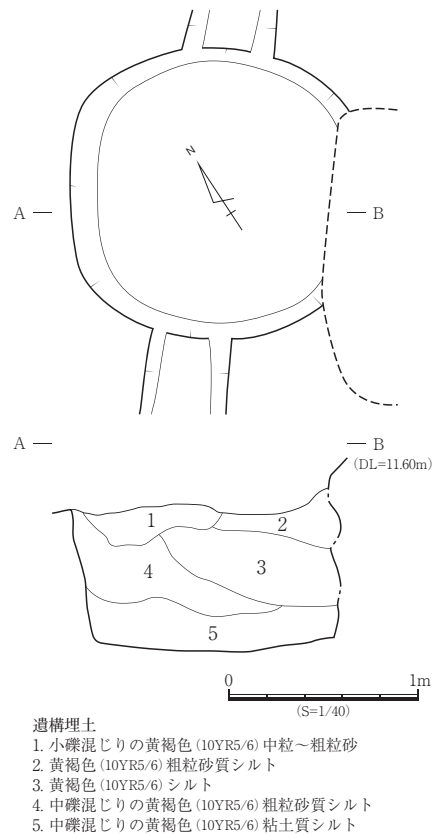


図7-6 SK4

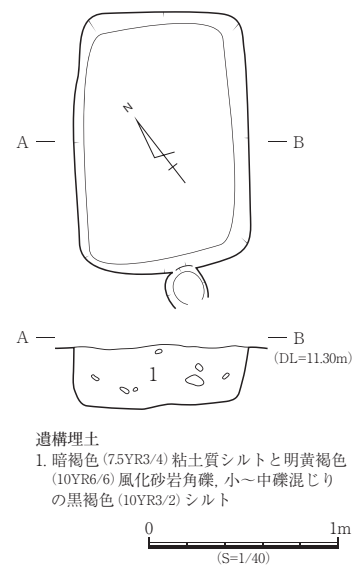


図7-7 SK8

2. 検出遺構と遺物 (1) 土坑

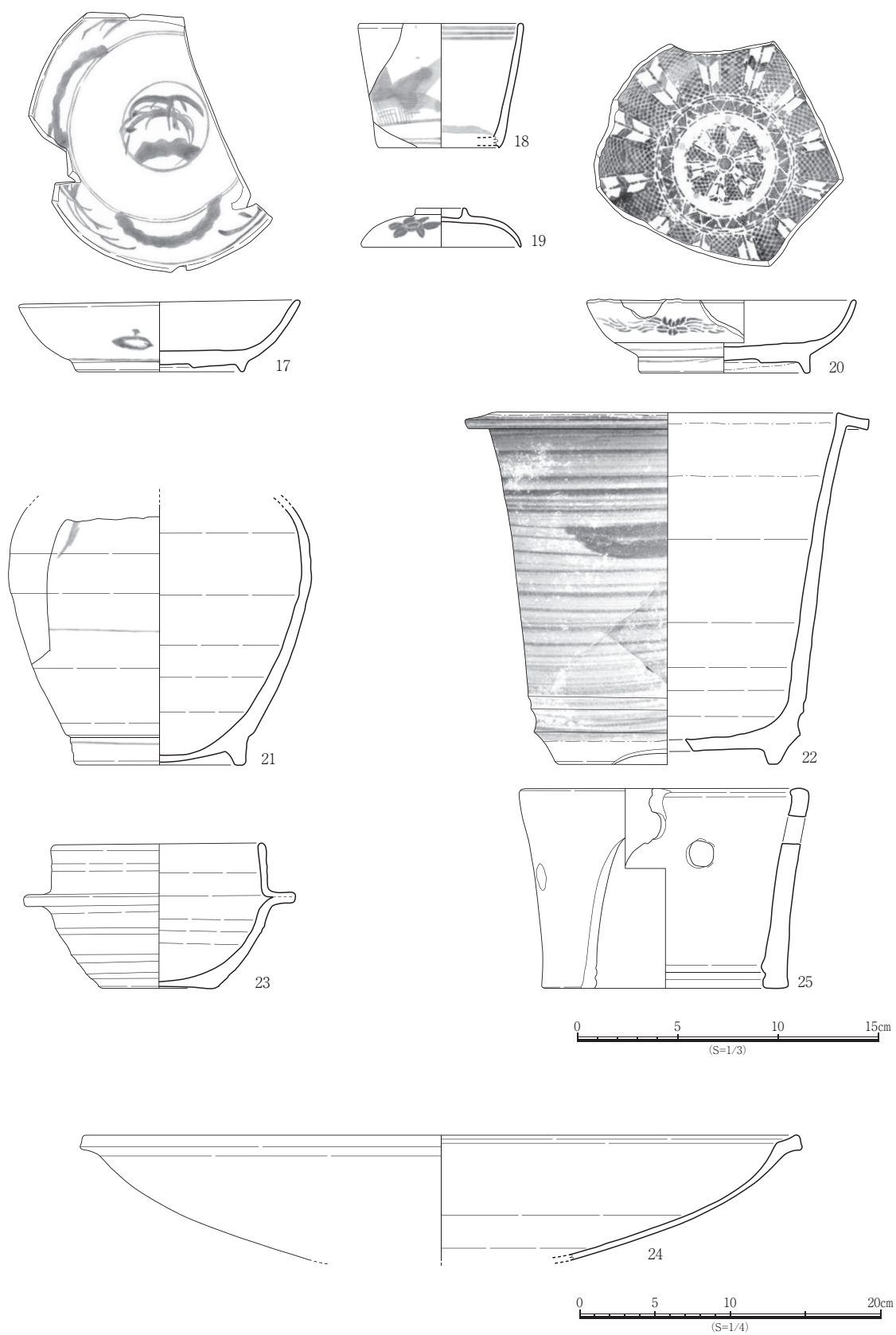


図7-8 SK9・13出土遺物実測図

SK10

調査区中央部に位置する土坑(B3-1-24)で、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸2.0m、短軸1.1m、深さ14～17cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は須恵器、磁器が出土している。

SK11

調査区中央部に位置する土坑(B3-1-19)で、平面形は長楕円形を呈し、長軸1.3m、短軸1.1m、深さ12～16cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK12

調査区中央部に位置する土坑(B3-2-21)で、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.3m、短軸0.8m、深さ20～23cmを測る。SX7を切り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、瓦が出土している。

SK13(図7-8)

調査区東部に位置する土坑(B3-2-22)で、平面形は隅丸方形を呈し、一辺1.4m、深さ22～43cmを測る。埋土は1層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が黒褐色(10YR3/2)シルト、3層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、遺物混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、4層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、陶器、土師質土器、瓦質土器が出土している。

18～21は磁器で、18は猪口、19は蓋、20は皿、21は瓶で、22は陶器の鉢である。23・24は土師質土器で、23は羽釜、24は焙烙で、25は土製品の竈である。

SK14(図7-9)

調査区中央部に位置する土坑(B3-1-24)で、平面形は長楕円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.7m、深さ10～17cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK15

調査区中央部に位置する土坑(B3-1-19)で、平面形は長楕円形を呈し、SD7を切り、長軸1.2m、短軸0.5m、深さ6～9cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルト混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は土師質土器が出土している。

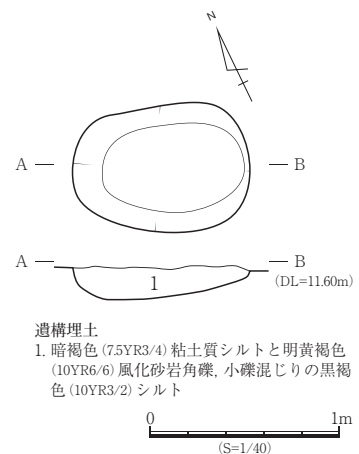


図7-9 SK14

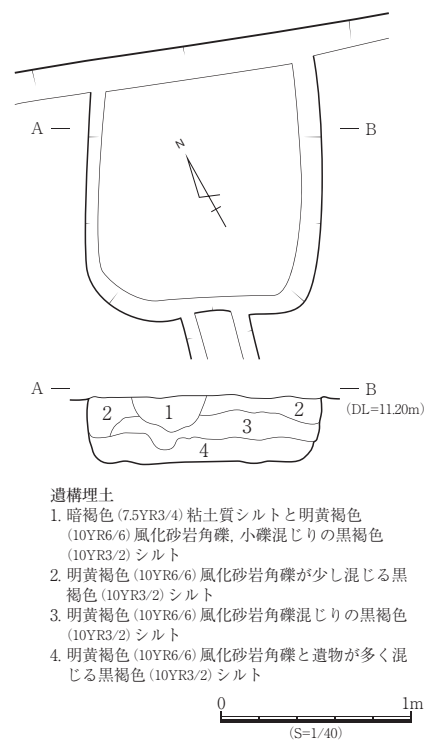


図7-10 SK13

2. 検出遺構と遺物 (1) 土坑

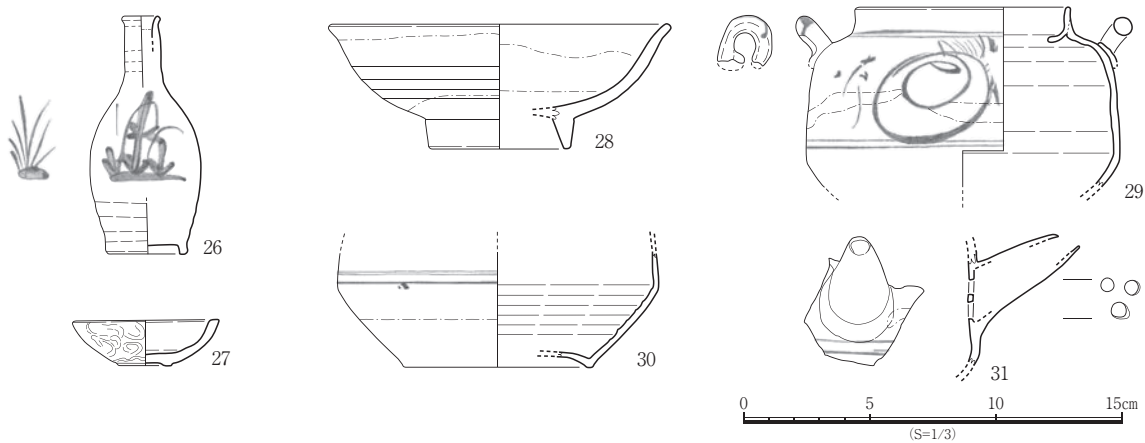


図7-11 SK19出土遺物実測図

SK16

調査区中央部に位置する土坑(B3-1-25)で、平面形は円形を呈し、径0.8m、深さ9～11cmを測る。埋土は1層が黒色(10YR2/1)シルト、2層が黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト、3層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルト混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK17

調査区中央部に位置する土坑(B3-2-16)で、平面形は方形を呈し、長軸0.7m、短軸0.5m、深さ8cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は須恵器が出土している。

SK18

調査区西部に位置する土坑(B3-1-11)で、SD1に切られるため、平面形、長軸、短軸は不明である。深さは5cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK19(図7-10・11)

調査区東部に位置する土坑(B3-2-23)で、北側は調査区外へ続き、長軸は不明である。平面形は隅丸長方形とみられ、短軸1.3m、深さ34～36cmを測り、SD2に切られる。埋土は1層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫が少し混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、3層が明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、4層が明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫と遺物が多く混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は磁器、白磁、陶器、土師質土器が出土している。

26は磁器の瓶、27は白磁の紅皿である。28～31は陶器で、28は皿、29～31は土瓶である。

SK20

調査区東部に位置する土坑(B3-7-4)で、平面形は隅丸方形を呈し、長軸0.6m、短軸0.5m、深さ9～36cmを測る。SK23を切り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK21

調査区中央部に位置する土坑(B3-7-6)で、平面形は円形を呈し、径0.7m、深さ50～52cmを測る。SX15を切り、埋土は1層が明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が

暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK22

調査区東部に位置する土坑(B3-7-7)で、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.6m、短軸1.1m、深さ6～27cmを測る。SD2に切られ、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は土師器、須恵器、磁器、陶器が出土している。

SK23(図7-12)

調査区東部に位置する土坑(B3-7-9)で、平面形は楕円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.5m、深さ68～71cmを測る。SK20に切られ、埋土は1層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、3層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK24

調査区東部に位置する土坑(B3-7-6)で、平面形は楕円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.5m、深さ16cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK25

調査区東部に位置する土坑(B3-2-17)で、平面形は楕円形を呈し、長軸1.2m、短軸0.7m、深さ10～12cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SK26

調査区西部に位置するハンダ土坑(B3-1-16)で、SD6を切り、攪乱に切られるため平面形、長軸、短軸は不明である。深さ71～75cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

(2) 溝

SD1

調査区西部に位置する溝(B2-5-20)で、確認延長3.7m、幅0.3～0.5m、深さ10～16cmを測り、SK18、SD5を切り、SK4に切られる。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は土師器、須恵器、磁器が出土している。

SD2(図7-13)

調査区東部に位置する溝(B3-7-3)で、確認延長14.3m、幅0.4～0.7m、深さ11～23cmを測り、SK19・22、SX14を切り、SX8に切られる。南北

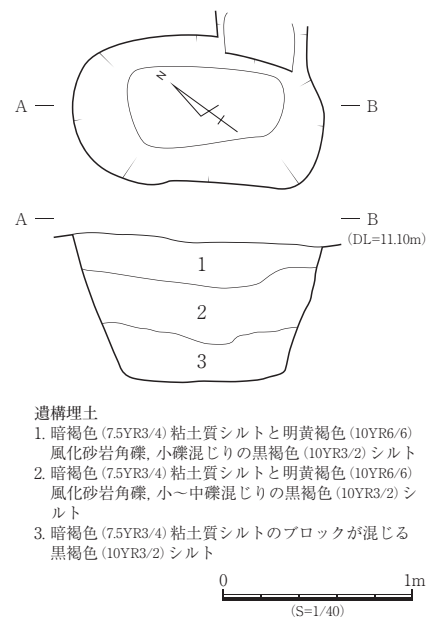


図7-12 SK23

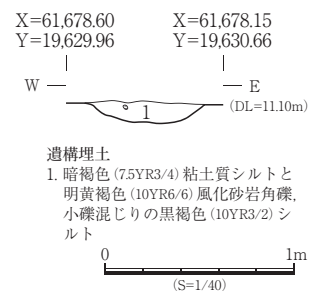


図7-13 SD2

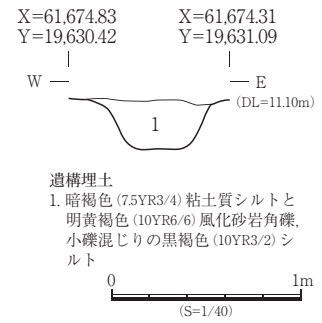
2. 検出遺構と遺物 (2) 溝

とも調査区外へ続き、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は弥生土器、土師器、磁器、陶器、瓦質土器が出土している。

SD3(図7-14・15)

調査区東部に位置する溝(B3-7-4)で、確認延長16.5m、幅0.6~1.1m、深さ7~23cmを測り、SX17を切り、SX16に切られる。南北とも調査区外へ続き、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は土師器、磁器、陶器、土師質土器、土製品、金属製品、瓦が出土している。

32~34は磁器で、32・33は皿、34は仏飯器である。35~40は陶器で、35は碗、36は皿、37は鉢、38・39は播鉢、40は灯明皿で、41は土製品の人形、42は金属製品の銭貨である。



遺構埋土
1. 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト

図7-14 SD3

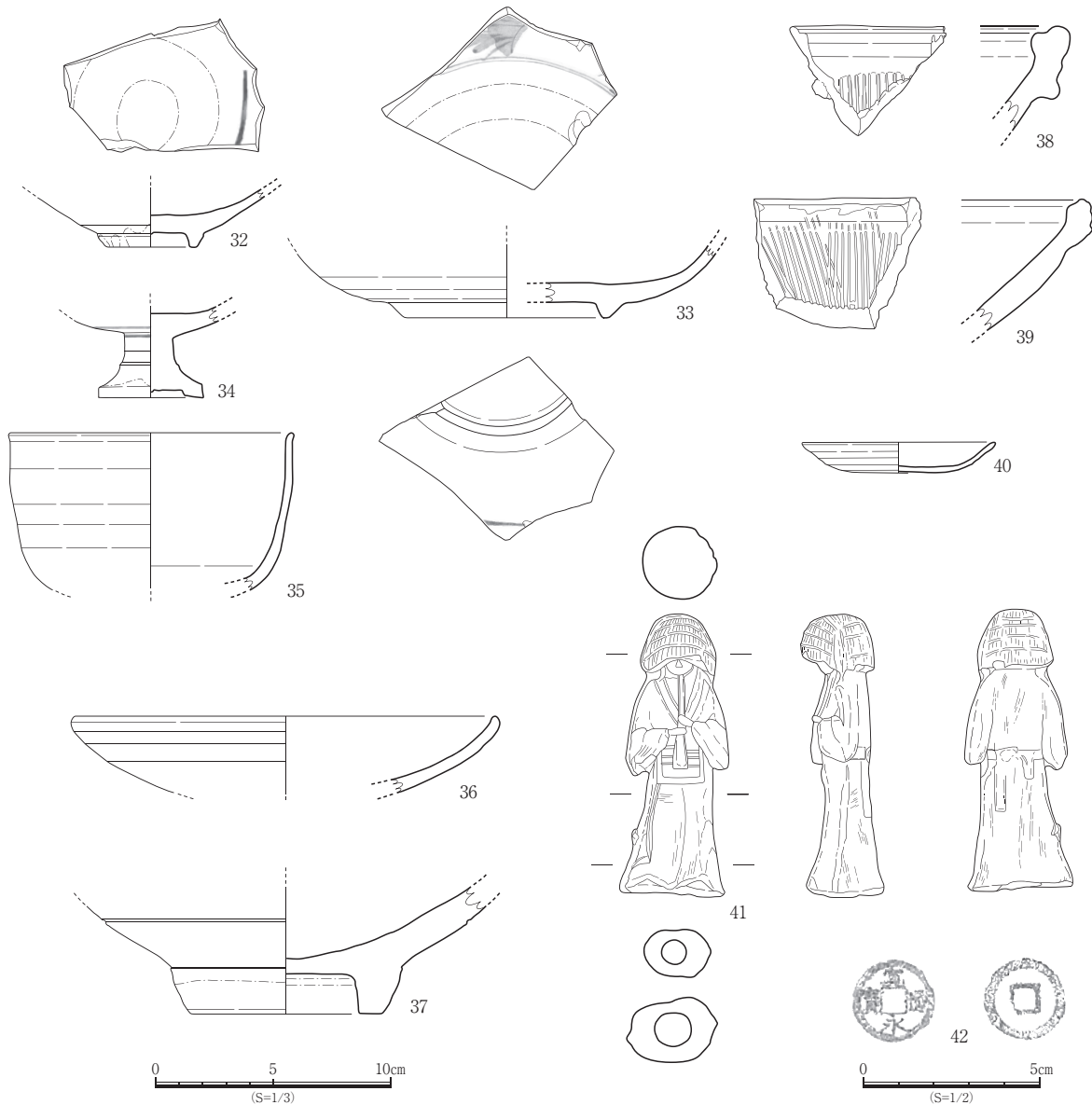


図7-15 SD3出土遺物実測図

SD4

調査区東部に位置する溝(B3-7-4)で、確認延長17.6m、幅0.2～0.4m、深さ11～17cmを測り、SX10を切り、SX12に切られ、南北とも調査区外へ続く。埋土は1層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトで、遺物は陶器、鉄製品が出土している。

SD5

調査区西部に位置する溝(B3-1-11)で、確認延長0.7m、幅0.2m、深さ7cmを測り、SK6、SD1に切られる。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SD6

調査区西部に位置する溝(B3-1-16)で、確認延長2.1m、幅0.3m、深さ6～7cmを測り、SK6・26、攪乱に切られる。南側は調査区外へ続き、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SD7

調査区中央部に位置する溝(B3-1-23)で、確認延長9.4m、幅0.4～0.6m、深さ4～12cmを測り、SK9・15、SX11、攪乱に切られる。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SD8

調査区中央部に位置する溝(B3-1-23)で、確認延長8.3m、幅0.1～0.2m、深さ1～3cmを測り、SK9に切られる。南側は調査区外へ続き、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

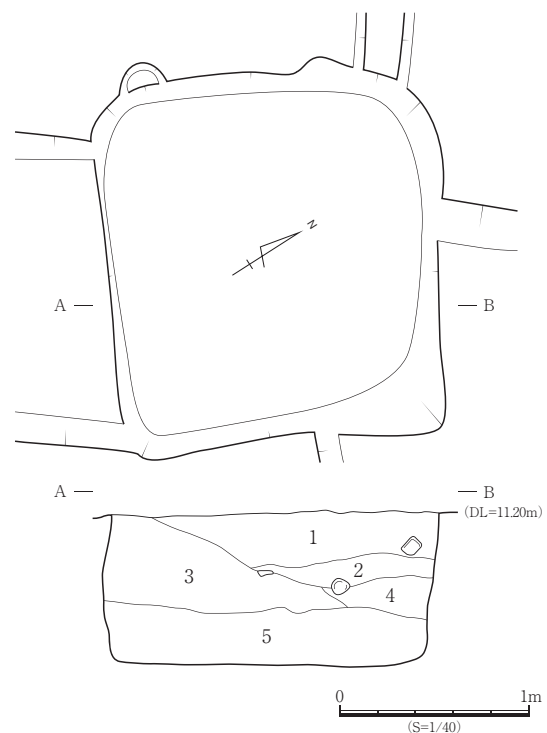
SD9

調査区中央部に位置する溝(B3-6-4)で、確認延長1.1m、幅0.8m、深さ7～10cmを測り、SX1、攪乱に切られる。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

(3) 性格不明遺構

SX1

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-1-24)で、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.5m、短軸0.9m、深さ7～14cmを測る。SD9を切り、埋土は1層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫が多く混じる黒褐色



- 遺構埋土
1. 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト
 2. 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、中礫混じりの暗褐色(10YR3/3)シルト
 3. 明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの暗褐色(10YR3/3)シルト
 4. 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小～中礫混じりの暗褐色(10YR3/3)シルト
 5. 明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫と瓦片が混じる暗褐色(10YR3/3)シルト

図7-16 SX2

2. 検出遺構と遺物 (3) 性格不明遺構

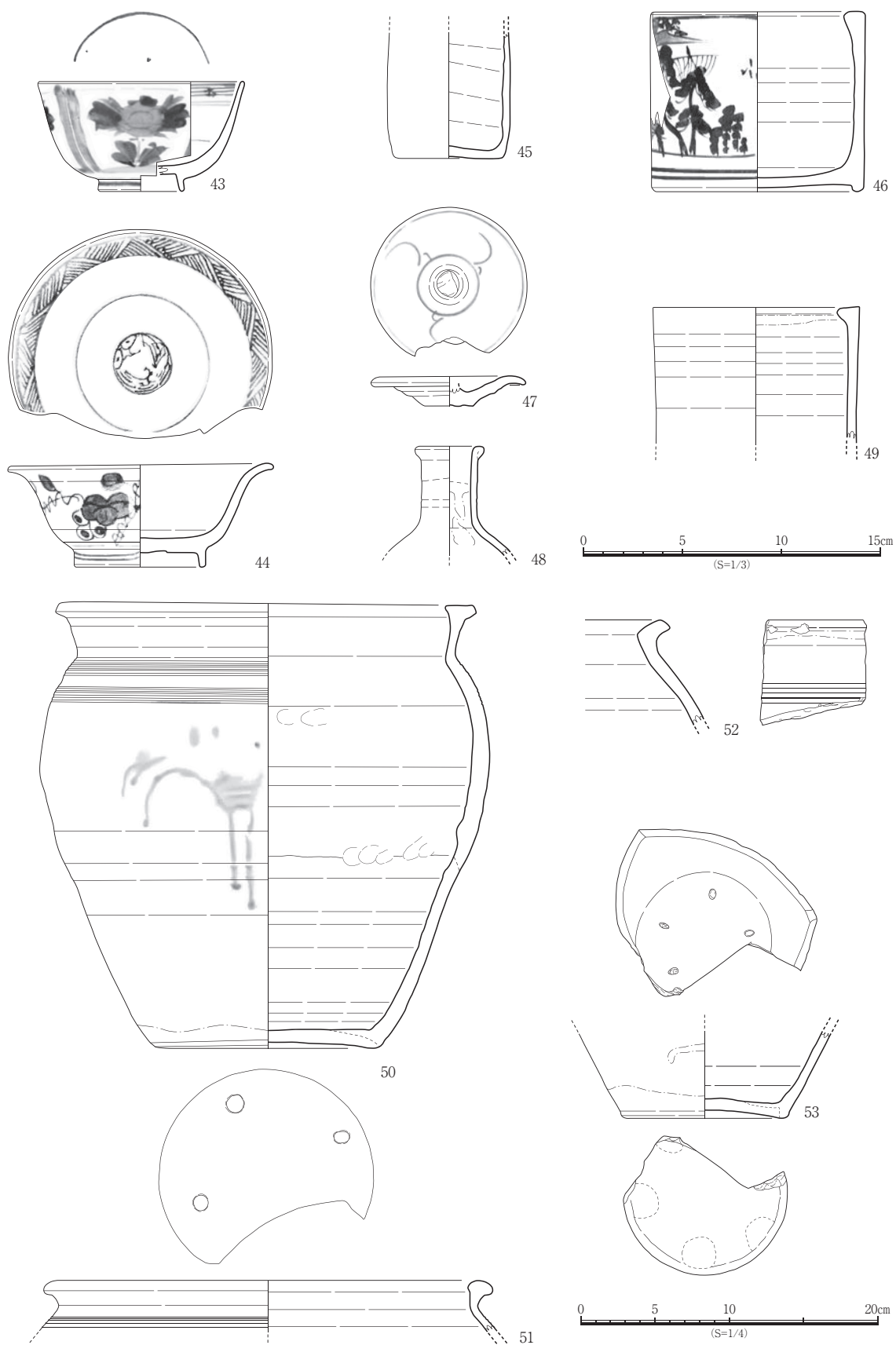


图7-17 SX2出土遺物実測図1

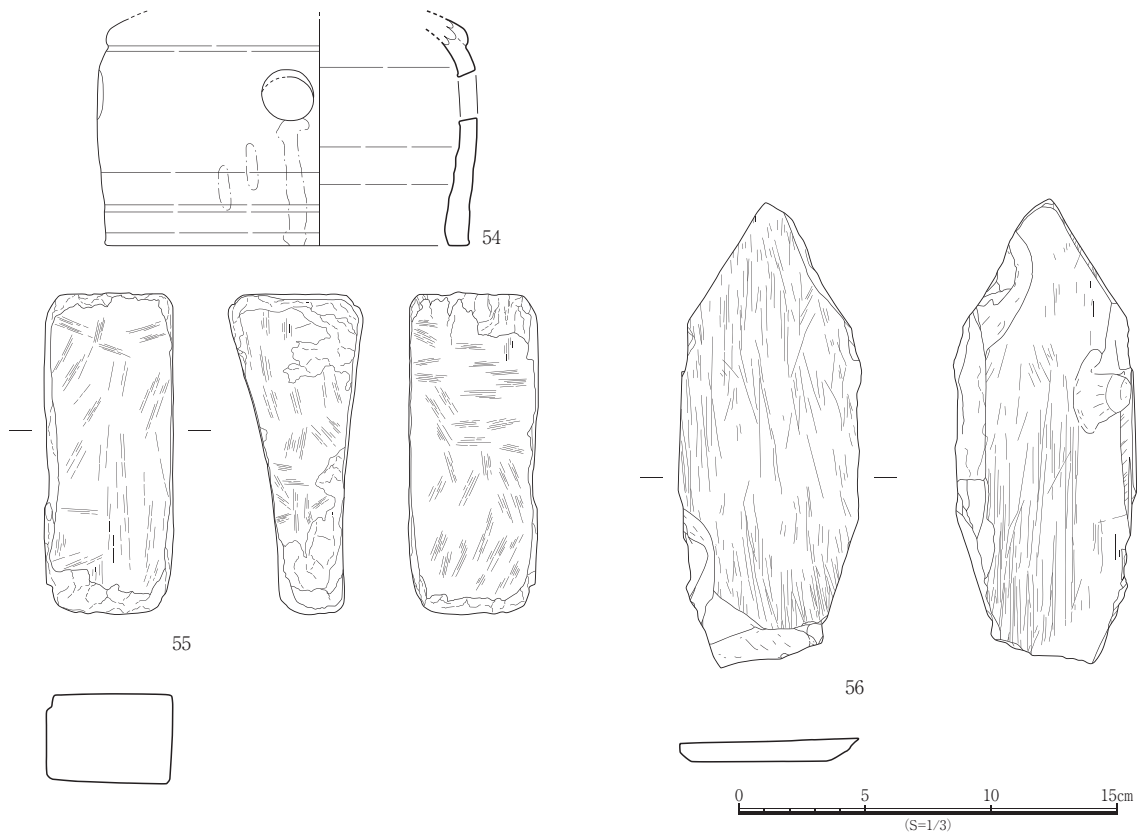


図7-18 SX2出土遺物実測図2

(10YR3/2)シルト, 2層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は皆無であった。

SX2(図7-16~18)

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-6-5)で, 平面形は隅丸方形を呈し, 長軸 1.9m, 短軸 1.8m, 深さ 75~82cmを測る。SX3・18を切り, 埋土は1層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫, 小~中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト, 2層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫, 中礫混じりの暗褐色(10YR3/3)シルト, 3層が明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの暗褐色(10YR3/3)シルト, 4層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫, 小~中礫混じりの暗褐色(10YR3/3)シルト, 5層が明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫と瓦片が混じる暗褐色(10YR3/3)シルトで, 遺物は磁器, 陶器, 土師質土器, 瓦質土器が出土している。

43~46は磁器で, 43は碗, 44は鉢, 45は徳利, 46は火入である。47~53は陶器で, 47は蓋, 48は瓶, 49は火入, 50~53は甕で, 54は土製品の竈, 55・56は石製品の砥石である。

SX3

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-6-10)で, SX2に切られ, 南側は調査区外へ続くため, 平面形, 長軸は不明である。短軸 1.6m, 深さ 24~32cmを測り, 埋土は明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は弥生土器, 陶器が出土している。

2. 検出遺構と遺物 (3) 性格不明遺構

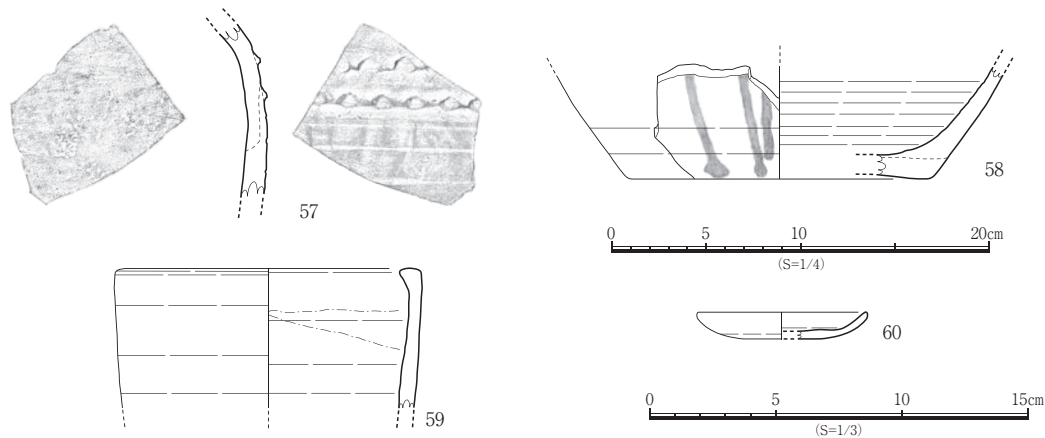


図7-19 SX6・9出土遺物実測図

SX4

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-7-1)で、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.1m、短軸0.7m、深さ3～6cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX5

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-1-25)で、平面形は隅丸方形を呈し、長軸1.4m、短軸1.2m、深さ1～6cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX6(図7-19)

調査区西部に位置する性格不明遺構(B3-1-22)で、大部分は調査区外へ続くため、平面形、長軸、短軸は不明である。深さは58～60cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は陶器が出土している。

57・58は陶器の甕である。

SX7

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-2-21)で、平面形は不整形を呈し、深さは1～6cmを測る。SK12に切られ、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は弥生土器、土師器、磁器、陶器、土師質土器が出土している。

SX8

調査区東部に位置する性格不明遺構(B3-7-3)で、平面形は不整形を呈し、深さは4～14cmを測る。SD2を切り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX9(図7-19)

調査区東部に位置する性格不明遺構(B3-7-13)で、平面形は不整形を呈し、深さは6～27cmを測る。東側は調査区外へ続き、埋土は黒色(10YR2/1)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR2/3)シルトで、遺物は弥生土器、磁器、陶器が出土している。

59は青磁の火入、60は土師質土器の小皿である。

SX10

調査区東部に位置する性格不明遺構(B3-7-5)で、平面形は不整形を呈し、深さは5～8cmを測る。SD4に切られ、東側は調査区外へ続く。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX11

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-1-23)で、SD7を切り、SK9に切られる。平面形、長軸、短軸は不明で、深さは10～12cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は土師器が出土している。

SX12

調査区東部に位置する性格不明遺構(B3-7-4)で、平面形は円形を呈し、長軸0.5m、短軸0.4m、深さ4cmを測る。SD4を切り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX13

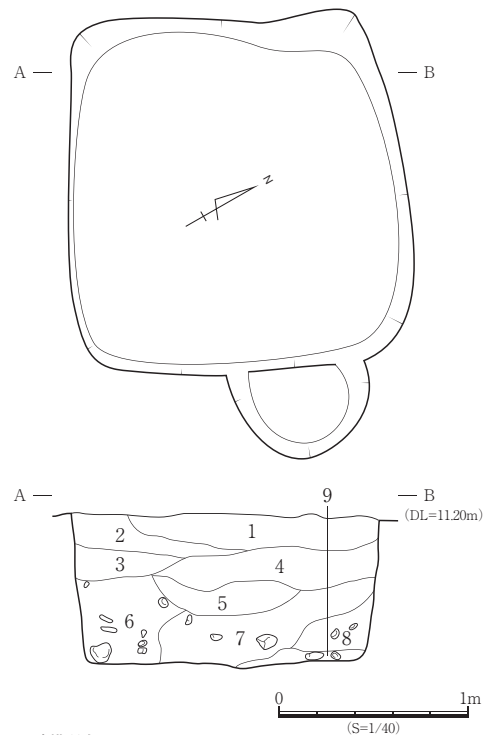
調査区東部に位置する性格不明遺構(B3-7-5)で、平面形は楕円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.4m、深さ4cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX14

調査区東部に位置する性格不明遺構(B3-7-3)で、SD2に切られるため、平面形、長軸、短軸は不明である。深さは6～10cmを測り、埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと黒色(10YR2/1)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR3/2)シルトで、遺物は皆無であった。

SX15(図7-20)

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-6-10)で、平面形は隅丸方形を呈し、長軸2.0m、短軸1.8m、深さ78～83cmを測る。SX18を切り、SK21に切られ、埋土は1層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫が少し混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、2層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫が多く混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、3層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫が多く混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、4層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、ハンダ片が多量に混じる黒褐色(10YR3/2)シルト、5層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、6層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、7層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト、8層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫が少し混じる黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルト、9層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト



- 遺構埋土
1. 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫が少し混じる黒褐色(10YR3/2)シルト
 2. 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫が多く混じる黒褐色(10YR3/2)シルト
 3. 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、ハンダ片が多く混じる黒褐色(10YR3/2)シルト
 4. 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、ハンダ片が多量に混じる黒褐色(10YR3/2)シルト
 5. 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト
 6. 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト
 7. 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト
 8. 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫が少し混じる黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルト
 9. 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫、小～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト

図7-20 SX15

2. 検出遺構と遺物 (3) 性格不明遺構

混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト, 6層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫, 小～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト, 7層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫, 小礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルト, 8層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫が少し混じる黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルト, 9層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫, 小～中礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は皆無であった。

SX16

調査区東部に位置する性格不明遺構(B3-7-12)で, 平面形は隅丸長方形を呈し, 長軸 0.5m, 短軸 0.3m, 深さ 6 cm を測る。SD3 を切り, 埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は皆無であった。

SX17

調査区東部に位置する性格不明遺構(B3-7-12)で, SD3 に切られるため, 平面形, 長軸, 短軸は不明である。深さは 3 cm を測り, 埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと明黄褐色(10YR6/6)風化砂岩角礫混じりの黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は皆無であった。

SX18

調査区中央部に位置する性格不明遺構(B3-6-5)で, 平面形は隅丸方形と考えられる。SX2・15 に切られ, 短軸 1.4m, 深さ 18～23cm を測り, 埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトで, 遺物は皆無であった。

第Ⅷ章 I F区

1. 調査の概要と基本層序

(1) 調査の概要

I F区はI D区の北東に所在し、調査面積は1,009㎡である。道路と現用水路の保全のため、2つの小調査区に区分して調査を行い、仮設道路により北西部のF-1区、南東部のF-2区に分かれる。標高は両区ともに10.5m前後である。

F-1区西半分は台地上に位置し、F-1区東半分とF-2区は台地を開析する谷に形成された谷底沖積地と自然流路により構成される。F-1区西半分からは排水溝と畝溝が検出され、古代の畑地が想定される。F-1区東半分とF-2区は近世水田と水路跡、そして下層より古代に埋積した自然流路、取水口遺構が検出された。遺構検出面はF-1区西半分では表土直下のローム上面、F-1区東半分とF-2区では近世整地層下で設定した。遺構はF-1区西半分では褐色ロームを掘り込んでおり、F-1区東半分とF-2区では、灰色シルト層、褐色ロームを掘り込んでいる。

(2) 基本層序(図8-1)

基本層序はI G区と共通している。

- 第I層 小礫混じりの暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト層
- 第II層 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト層
- 第III層 暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルト層
- 第IV層 黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂質シルト層
- 第V層 黒色(2.5Y2/1)細粒砂質シルト層
- 第VI層 黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質小礫層
- 第VII層 黒褐色(10YR2/3)細粒砂質シルト層
- 第VIII層 黒褐色(2.5Y3/1)極細粒～粗粒砂層
- 第IX層 黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質小礫層
- 第X層 黒褐色(10YR3/2)細粒～粗粒砂層

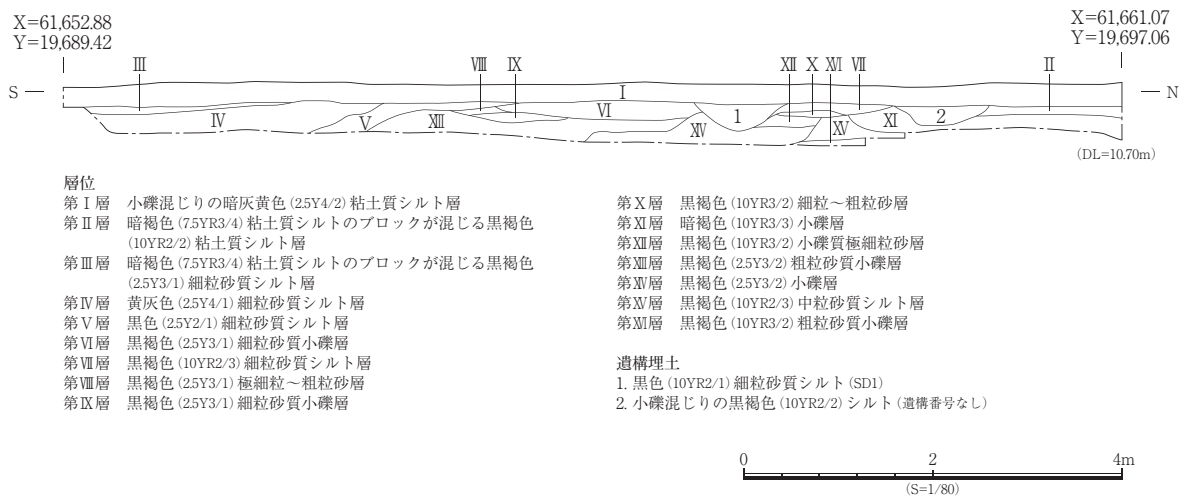


図8-1 F-2区西壁セクション図

2. 検出遺構と遺物 (1) F-1区

- 第Ⅺ層 暗褐色(10YR3/3)小礫層
- 第Ⅻ層 黒褐色(10YR3/2)小礫質極細粒砂層
- 第Ⅼ層 黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂質小礫層
- 第Ⅽ層 黒褐色(2.5Y3/2)小礫層
- 第Ⅾ層 黒褐色(10YR2/3)中粒砂質シルト層
- 第Ⅿ層 黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質小礫層

2. 検出遺構と遺物

(1) F-1区

本調査区は西から東に、段丘、谷底沖積層へと変化する。調査区北側は自然流路SR1の右岸にあたる。段丘上にあるL字形をなす排水路SD1と谷底沖積層との間の空間には畑とみられる畝溝がみられる。SR1(埋没後)とその谷底沖積層上は近世には水田化されており、2面の水田跡が検出されている。

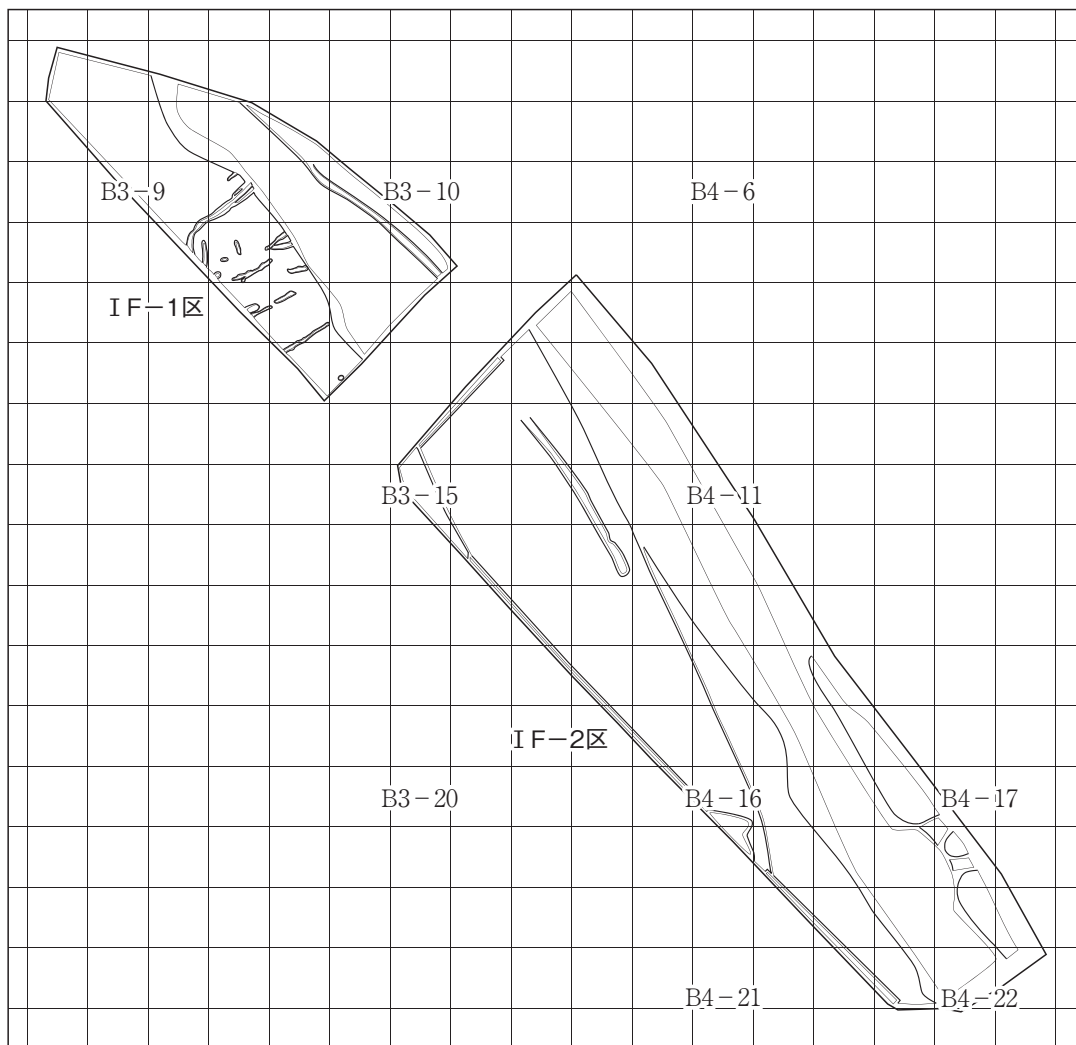


図8-2 調査区グリッド設定図

① 溝

SD1(図8-3・6)

調査区東部の段丘上(B3-9-15)にみられ, 真北方向から東に50度方向へ湾曲する。確認延長5.80m, 幅0.20~0.90m, 深さ8~16cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトである。遺物は非常に少なく, 古代とみられる須恵器(1)が出土している。遺物からみて, I D区の土器埋納遺構と同時期の可能性が高い。

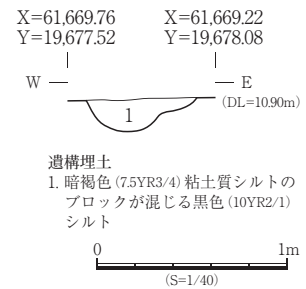


図8-3 F-1区SD1

SD2

調査区西部の谷底沖積地上(B3-10-12)にみられ確認延長8.60m, 幅0.40~0.56m, 深さ40cmを測る。埋土は黒褐色粘土である。2面の水田の境界部にみられ, 北から伸長する。水田への導水路とみられる。出土遺物はみられない。

② 畝状遺構

SU1

真北方向から東に75度と多様な方向性を持つ畝溝群である。基本的にSD1と同調的な方向性を持つ遺構が多い。確認延長1.00~3.60m, 幅0.22~0.30m, 深さ6~20cmを測る。埋土はローム小粒を含む黒色土である。出土遺物はみられない。

③ 水田遺構

2面の水田跡が検出されている。水田境界に小水路を検出し, その東縁に断面で畦畔を検出した。境界には段差があり, 段差は26cmである。水田耕作土は黒褐色土であり, 耕作土層下層に斑鉄がみられた。また, 水田耕作土層より梅種核を1点得ている。18世紀以降の近世整地層に覆われる事から近世水田であるとみられる。

(2) F-2区

本調査区は北西から南東に, 段丘, 谷底沖積層, 自然流路, 段丘と変化する。谷底沖積層, 自然流路は台地に刻まれた侵食谷内に形成されたものである。自然流路の南西側には取水口とみられる遺構があり, I G区へと導水路が続くとみられる。谷底沖積層, 自然流路は近世には水田となっていたとみられ, 18世紀以降に整地され, 現行の水田区画へと変化したとみられる。

① 自然流路

SR1(図8-4・6)

調査区東側を北西から南東方向に伸びる自然流路(B4-16-4)である。弱く蛇行しており, 西岸

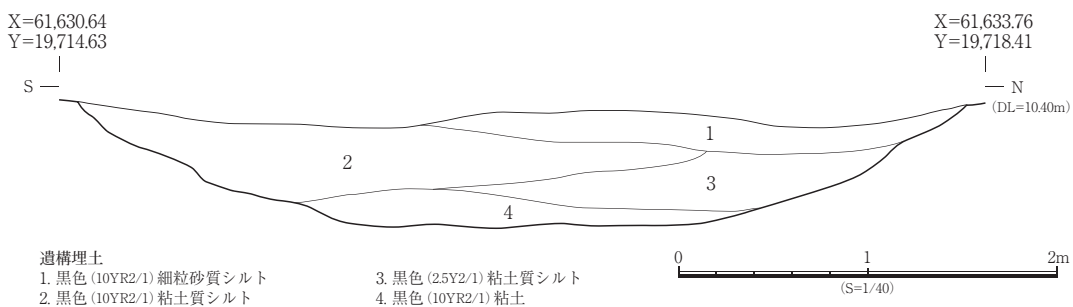


図8-4 F-2区SR1

2. 検出遺構と遺物 (2) F-2区

に微弱なポイントバーの発達をみる。小規模な谷底沖積層を伴う。沖積層中からは弥生土器のみが出土することから弥生時代以降に沖積層が形成され、流路が固定されたとみられる。確認延長52.80m、幅5.00～8.20m、深さ84cmを測る。流路底は拳大の円礫層よりなるが、流路埋土は1層が黒色(10YR2/1)細粒砂質シルト、2層が黒色(10YR2/1)粘土質シルト、3層が黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト、4層が黒色(10YR2/1)粘土である。これらの埋土は流路変更に伴う河道放棄後、周辺台地からの土壌流入によってもたらされたとみられる。河道放棄後は窪地として近世まで残存し、水田として使用されていたとみられる。18世紀以降の整地層により完全に平坦化され、埋没したとみられる。遺物は少なく、6点出土している。土師器片が主であるが、流路底の礫層より古代のものとみられる土錘(2・4)が出土している。従って、河道放棄時期は古代以降とみられる。南西部に取水遺構とみられるSD2・3、SX1がみられるが、井堰等の遺構はみられなかった。

② 溝

SD1(図8-5)

調査区北側(B4-11-11)のSR1に平行にみられる溝である。谷底沖積平野上にみられ、確認延長12.40m、幅0.50～0.90m、深さ8～10cmを測る。埋土は黒色(10YR2/1)細粒砂質シルトである。周辺の水田遺構への導水路とみられる。遺物は出土しなかった。

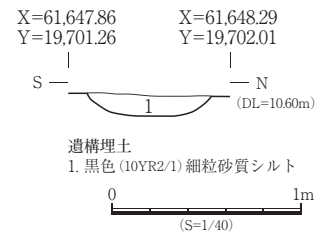


図8-5 F-2区SD1

SD2

SR1より北側(B4-17-17)に伸びる溝でありSX1を切る。SR1より取水を行うための溝とみられる。G-2区のSD1に連続するとみられる。

確認延長1.80m、幅1.70m、深さ40cmを測る。埋土は黒褐色シルト質粘土である。遺物は土師器片が21点出土しているが時期を特定する遺物はみられなかった。

SD3

SR1より北側(B4-17-17)に伸びる溝でありSX1を切る。SR1より取水を行うための溝とみられる。確認延長1.50m、幅3.20m、深さ40cmを測る。埋土は黒褐色シルト質粘土である。遺物は出土しなかった。

③ 性格不明遺構

SX1

SD2・3の間にみられる遺構(B4-17-17)である。確認延長1.50m、幅1.40m、深さ46cmを測る。埋土は黒褐色シルト質粘土である。取水口とみられるSD2・3に切られる平坦な遺構であるが、取水に関係する可能性が高い。時期を特定する遺物はみられなかった。

④ 土坑

SK1

調査区南西側(B4-16-13)で確認された不整形土坑であり、南西半分は調査区外にあたる。長軸4.60m、短軸1.70m、深さ60cmを測る。埋土は黒褐色土であり、灰色土ブロックと石灰石角礫が多くみられた。少量ではあるが、近世の陶器片が1点、瓦片が2点出土した。19世紀頃とみられる。

⑤ 水田遺構

3面の水田を確認しており、SR1沿いの谷底沖積平野とSR1内にみられ、段をなしており、段差は6cm程度である。水田耕作土は、黒褐色土であり、耕作土下の砂質シルト層中に斑鉄が多く見られる。

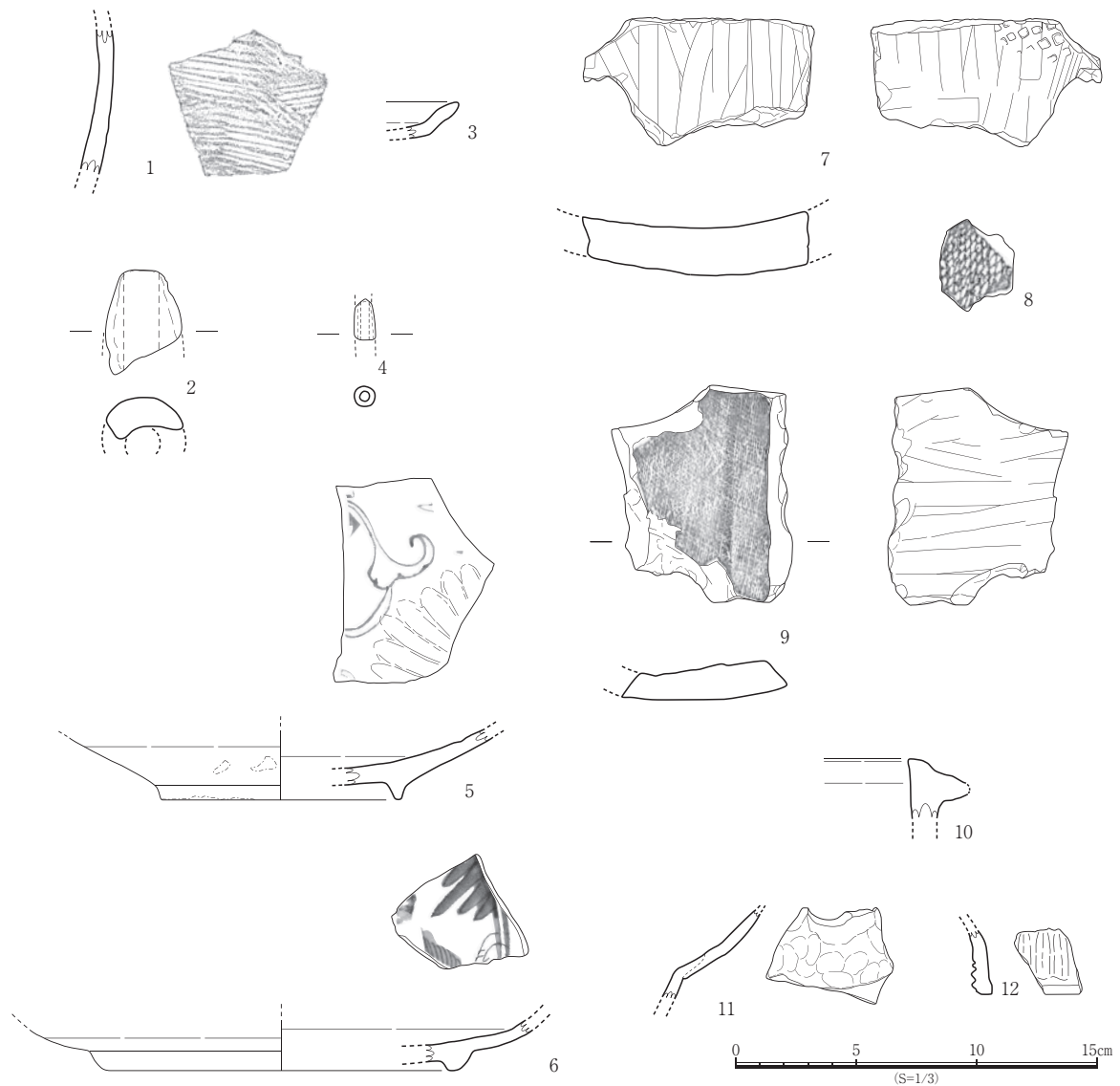


図8-6 I F区出土遺物実測図

水田耕作土中のイネのプラントオパールは水田要件に十分とは言えないが、少量検出されている(自然科学分析参照)。最上位の北西部の水田は畦畔により2つに仕切られるとみられるが、畦畔が微弱であり、南壁断面から検出されたに留まるため平面形状の詳細は不明である。水田遺構からは時期を特定しうる遺物は出土しておらず、18世紀以降とみられる近世整地層に覆われることから近世の水田とみられる。

⑥ 遺物包含層等(図8-6)

i 近世整地層

I F区からI G区、II区へと現水田直下に広くみられる。I F区では全域に見られるが、窪地として近世まで残存していたSR1を平坦化するために盛土されており、特に厚い。黒褐色土を主体として風化砂岩礫を多く含む。弥生時代～近世の遺物に富んでおり、弥生土器、土師器、須恵器、古代瓦、土師質土器の破片が出土する。出土遺物として図示できるものとしては、陶胎磁器の葉皿(5)、染付皿(6)、古代の平瓦(7～9)、土師質の羽釜(10)などがある。最も新しい遺物は18世紀後半のものである

2. 検出遺構と遺物 (2) F-2区

ので、18世紀以降の整地層であると思われる。

ii 表土(図8-6)

表土から遺物が2点出土している。陶器の片口鉢(11)と磁器の罫子(12)である。

第IX章 I G区

1. 調査の概要と基本層序

(1) 調査の概要

I G区はI F区の北東にあり，調査面積は1,046㎡である。現用水路の保全のため，3つの小調査区に区分して調査を行った。調査区は北西部(G-1区)，南東部(G-2区)，北東部(G-3区)に分かれる。標高は共に10.7m前後であり野市台地上に位置する。

I G区からは畑の畝溝が調査区全体から検出された。G-2区においては数度の畑地区画の変更が畝溝の方向の変化から読み取れる。また，G-1区には2本の溝がみられ，台地上からI F区のSR1へ排水を行うための溝とみられる。また，G-2区にはF-2区にみられた取水口(SD2, SX1)から連続するとみられる溝がみられ，さらにII A区方向に延長している。これらの遺構は表土直下もしくは黒ボク土直下の褐色ローム上で検出した。遺構埋土は黒ボク土起源の黒色～黒褐色土であり，遺構は褐色ロームを掘り込んでいる。遺物は非常に少なく，古墳時代～近世にわたるが，遺構の帰属年代を決めるには十分ではなかった。

(2) 基本層序(図9-1)

基本層序は表土下に近世整地層，黒ボク土層，基盤層となる褐色ローム層となる。

第I層 小礫混じりの灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト層

第II層 小礫混じりの極暗褐色(7.5YR2/3)シルト層

第III層 黒色(10YR2/1)シルト層

2. 検出遺構と遺物

(1) G-1区

I G区北西部に位置する小調査区であり，全体に畝溝がみられ，5群に区分できる。畝溝の一部はG-2区の畝溝群の一部をなす。また，2条の溝がみられた。基本層序はG区他区と同様である。本区のSD1・2はG-2区のSD1・3と方向が同調的である。

① 溝

SD1

北東から南西方向(B4-6-19)に伸長する溝であり，SD2にはほぼ平行する。溝底部標高は北東から南西に減ずるため，SR1へ排水を行うための溝であるとみられる。SU2・3に切られる。確認延長は10.70mであり，北より東に47度の角度をとる。幅0.40～0.60m，深さ20～30cmを測る。埋土は黒ボ

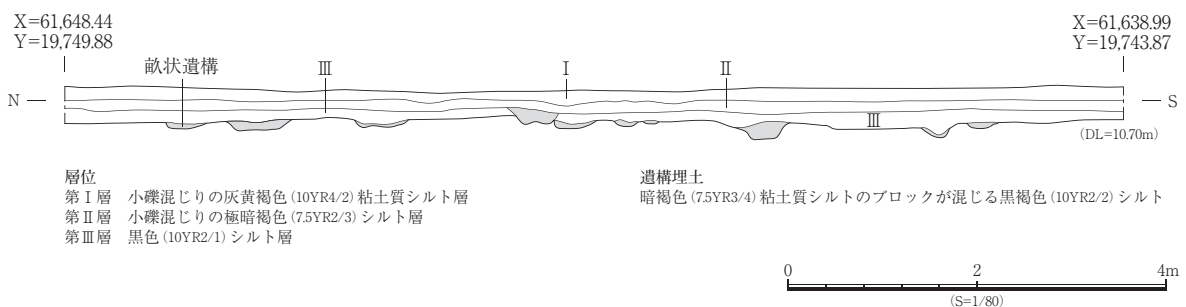


図9-1 G-2区東壁セクション図

2. 検出遺構と遺物 (1) G-1区

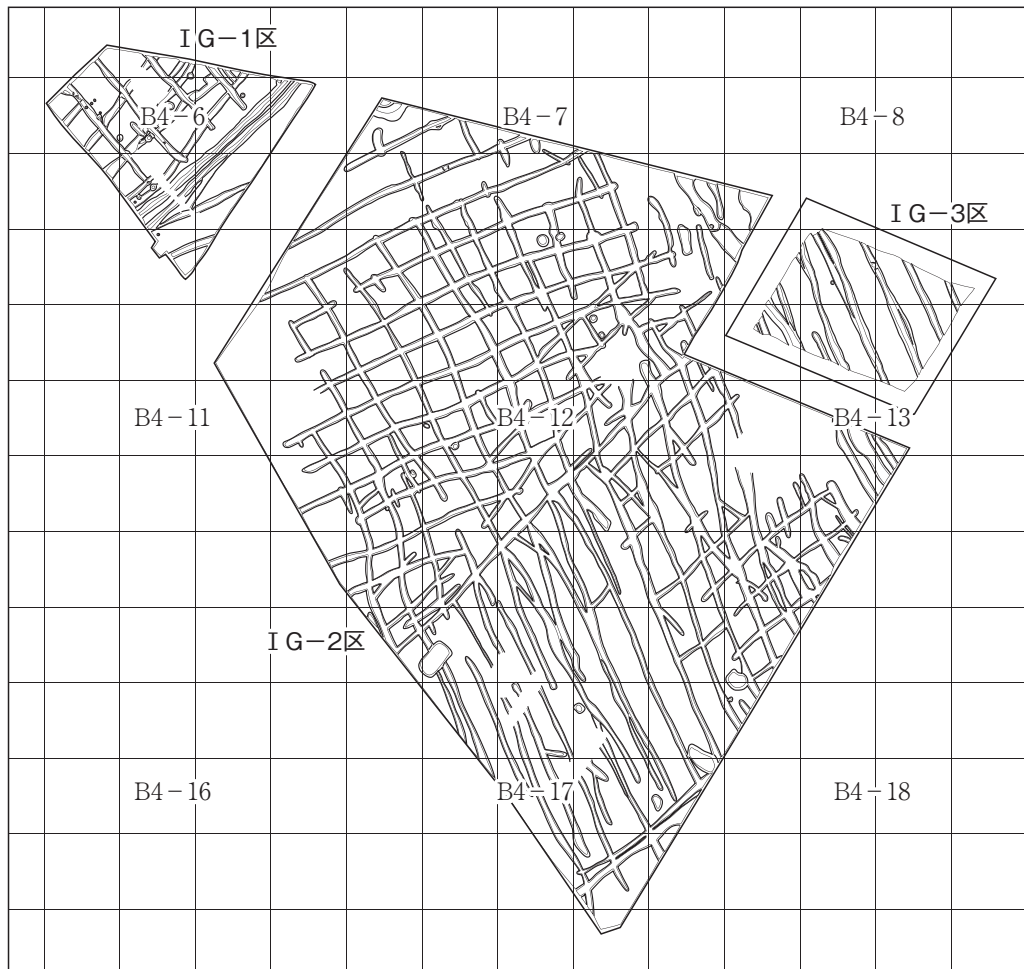


図9-2 調査区グリッド設定図

ク土起源の黒色土であり、基盤のローム小粒と細礫を含む。遺物はみられない。

SD2

北東から南西方向(B4-6-19)に伸長する溝であり、SD1同様にSR1へ排水を行うための溝であるとみられる。SU2・3に切られる。確認延長は11.00mであり、北より東に47度の角度をとる。幅0.30～0.50m、深さ20～36cmを測る。埋土は黒ボク土起源の黒色土であり、基盤のロームブロックを少量含む。遺物はみられない。溝底部標高は北東から南西に減ずるため、SR1へ排水を行うための溝であるとみられる。SR1への合流部については現用水路の保全のため、確認することができなかった。SD1とともにG-2区のSD1・3と伸長方向が一致する。

② 畝状遺構

SU1(図9-3)

調査区東側を中心にSD1より東側にみられ、北東から南西方向に伸長する畝溝群である。5条みられ、SD1・2を切る。畝溝方向は北より東に35度の角度をとる。確認延長は1.20～7.70mであり、幅0.28～0.50m、深さ8～14cm、畝間は100～130cmである。畝溝内には鋤痕もしくは鍬痕とみられる掘削痕が2列交互にみられる。埋土は黒ボク土起源の黒褐色土であり、基盤のローム小粒を多く含む。出土遺物としては、古代の土師器甕片と6世紀代のものとみられる須恵器杯蓋片(1)が出土しているが、

埋土に混入した可能性が強く遺構の帰属年代を決めることは難しい。

SU2

北東から南西方向に伸長し、SU1・4、SD1・2に切られる。畝溝は2条認められる。畝溝方向は北より東に35～40度の角度

をとる。確認延長は6.60～9.15m、幅0.25～0.45m、深さ8～16cm、畝間は130cmである。畝溝内には鋤痕もしくは鍬痕とみられる掘削痕が2列交互にみられる。埋土は黒ボク土起源の黒褐色土であり、基盤のローム小粒を含む。遺物はみられない。

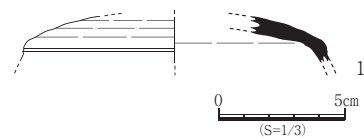


図9-3 G-1区SU1出土遺物実測図

SU3

SD1よりも東側にみられる2条の畝溝群である。北東から南西方向に伸長し、G-2区SU3と方向が一致することから、G-2区のSU3の一部をなしているとみられる。G-2区のSU3を切るSU1と同時期とみられるSD2に切られる。畝溝方向は北より東に65度の角度をとる。確認延長は2.10～5.20m、幅0.15～0.50m、深さ8～14cm、畝間は135cmである。畝溝内には鋤痕もしくは鍬痕とみられる掘削痕が2列交互にみられる。埋土は黒ボク土起源の黒色土であり、基盤のローム小粒は少ない。遺物はみられない。

SU4

SU1・2の畝溝群を切る。東側をSD1により区画される。SD1と同時期に掘削され機能した畝溝であるとみられる。畝溝方向は北より西に40度の角度をとる。確認延長は1.05～3.15m、幅0.25～0.40m、深さ8～14cm、畝間は160～210cmである。畝溝内には鋤痕もしくは鍬痕とみられる掘削痕が2列交互にみられる。埋土は黒ボク土であり、黒褐色を呈する。基盤のローム小粒を少量含む。遺物はみられない。一見、方向的にはG-2区のSU1に同調的にみえるが、角度がやや違い、埋土も異なり、SD1・2と同調的であるため、両者の共通点はないとみられる。

SU5

SU4の掘り換え畝溝の可能性はあるが規模が小さく詳細は不明である。2条みられ、SU4分布域内にみられる。畝溝方向は北より西に40度の角度をとる。確認延長は0.80～1.05m、幅0.30m、深さ4cmである。畝溝内には鋤痕もしくは鍬痕とみられる掘削痕が2列交互にみられる。埋土は黒ボク土起源の黒褐色土であり、基盤のローム小粒を含む。遺物はみられない。

③ 柱穴

ピットからの出土遺物はない。埋土は黒色土である。腐食土坑の可能性はある。

(2) G-2区

G区中央部に位置する最も大きな調査区である。調査区全体に畝溝群がみられる。畝溝群は方向、規模等から5群の畝溝群に分けられる。G-1、G-2区の畝溝群の一部は本区の畝溝群の一部をなしている。その他に溝、土坑等が少数みられた。また、本区のSD1・3とG-1区のSD1・2は方向が同調的である。

① 土坑

SK1

不整形長方形を呈する浅い土坑(B4-12-5)であり、北東端部に深いピットがみられる。長軸方向北より西に10度の角度をとる。長軸1.63m、短軸0.65m、深さ70cmを測る。埋土は上層が細礫混じりの

2. 検出遺構と遺物 (2) G-2区

灰色土であり、下層が細礫混じりの黒褐色土である。下層は基本層序の近世整地層と類似している。出土遺物は材のみで、方形テラス部分に弓状の材が置かれて出土した。帰属年代については不明であるが、近世以降であるとみられ、おそらく柱穴として機能したと考えられる。

SK2(図9-4)

不整楕円形をなす浅い土坑(B4-17-10)である。遺構の北東部は調査区外に延長する。長軸方向北より西に60度の角度をとる。確認長1.04m、短軸0.98m、深さ24cmを測る。SU1、SD1に切られる。埋土は1層が黒色(10YR2/1)シルト、2層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトと黒褐色(7.5YR3/2)シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトである。

SK3

不整楕円形をなす土坑(B4-17-15)である。長軸方向北より西に20度の角度をとる。長軸0.85m、短軸0.50m、深さ15cmを測る。埋土は黒ボク土起源の均質な黒色土である。

SK4

不整楕円形をなす土坑(B4-7-16)である。長軸方向北より西に10度の角度をとる。長軸1.56m、短軸0.52m、深さ10cmを測る。埋土は黒ボク土起源の均質な黒色土である。

SK5

不整楕円形をなす土坑(B4-7-18)である。長軸方向北より西に10度の角度をとる。長軸0.91m、短軸0.52m、深さ9cmを測る。埋土は黒ボク土起源の均質な黒色土である。

② 溝

SD1(図9-5)

調査区南東端部(B4-17-19)にみられる北東から南西方向に伸長する溝である。北より東に53度の角度をとる。確認延長は8.60mであり、幅0.33~0.59m、深さ30~34cmを測る。断面形は葉研形をなす。埋土は1層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルト、2層が黒色(10YR2/1)シルト、3層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルト、4層が黒色(10YR2/1)シルト、5層が暗褐色(7.5YR3/4)粘土質シルトのブロックが混じる黒色(10YR2/1)シルトである。埋土観察から数度の溝内浚渫が認められる。出土遺物はなかった。SD1はI F-2区の取水遺構であるSX2、SD2に連続する遺構であり、II A区に連続する。I F-2区のSR1の取水部に関連すること、溝底の標高が北側に向かって減ることからII A区に存在したとみられる耕地へ導水を行う導水路であったとみられる。G-1区のSD1・2、G-2区のSD3と方向が同調的である。

SD2

調査区北東部(B4-13-12)にみられる浅い溝であり、やや蛇行する。G-3区に延長部分である

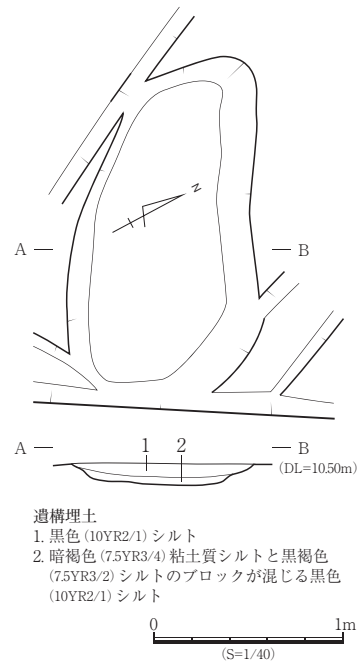


図9-4 G-2区SK2

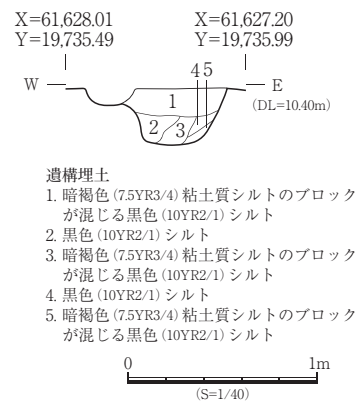


図9-5 G-2区SD1

SD1がみられる。SU1を切り、SU1よりも形成年代は下るとみられるが、伸長方向は同調的である。北より西に30度の角度をとる。確認延長は20.00m、幅0.46～0.91m、深さ28～30cm、埋土は黒ボク土起源の黒褐色土である。出土遺物はなかった。

SD3(図9-6)

SU1を切り、北より西に44度の角度をとる(B4-12-18)。確認延長は21.90m、幅0.22～0.49m、深さ12～14cmを測る。埋土は暗褐色(7.5YR4/3)シルトのブロックが混じる黒褐色(10YR2/2)シルトである。出土遺物はなかった。G-1区のSD1・2、G-2区のSD1と方向が同調的である。SU2・4の分布を区画するようにみえるが、SU2・4を切っているSU1を切るため、形成年代は錯誤する。SU2・4掘削時の土地区画がSU1掘削時に失われ、SD3掘削時に再度復活したとみられる。

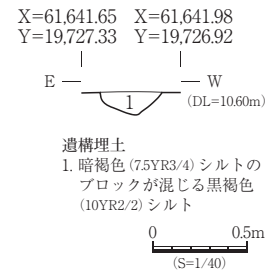


図9-6 G-2区SD3

③ 畝状遺構

SU1

北西から南東方向に伸びる畝溝群であり、調査区全体に及ぶ。15条の畝溝からなり、延長部分、掘り換え畝溝を含めると63条となる。SU2・3を切る。畝溝方向は北より西に20～30度の角度をとる。確認延長8.00～28.50m、幅0.20～0.52m、深さ4～20cm、畝間は140～200cmである。畝溝内には鋤痕もしくは鋤痕とみられる掘削痕が2列交互にみられる。埋土はローム小粒を多く含む黒褐色土である。G-3区のスU1は本畝溝群の一部をなす。遺物は土師器片が出土しているが、時期を決定する遺物は出土していない。また、中央東側ではSU1の掘り換え畝溝群が分岐するようにみられる。11条よりなり、これらはSU1の先行溝を切る。畝溝方向は北より西に20～30度の角度をとる。確認延長8.00～16.90m、幅0.20～0.52m、深さ4～20cmを測る。畝間は180cmである。埋土はローム小粒を多く含む黒褐色土である。畝溝内には鋤痕もしくは鋤痕とみられる掘削痕が2列交互にみられる。

SU2

調査区北東端部にみられる小畝溝からなる畝溝群であり、14条の畝溝がみられる。畝溝方向は北より西に20～30度の角度をとる。確認延長は2.50～8.20m、幅0.18～0.23m、深さ2～4cmである。

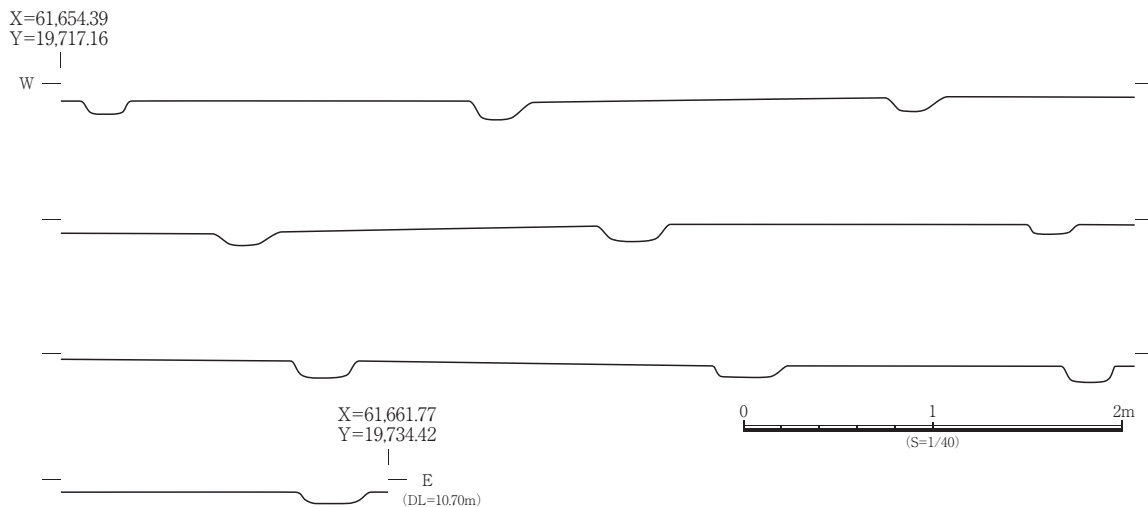


図9-7 G-2区SUエレベーション図(東西)

2. 検出遺構と遺物 (3) G-3区

埋土はローム小粒を多く含む黒褐色土である。切り合い関係は不明瞭であることが多く、形成時期の異なる畝溝を含んでいるとみられる。

SU3

調査区中央のSD3より西側にみられる畝溝群であり、12条の畝溝がみられ、延長部分を含めると15条となる。畝溝方向は北より東に65度の角度をとる。確認延長は11.20～22.40m、幅0.27～0.52m、深さ8～16cm、畝間は135cmである。埋土は黒ボク土起源の黒色土である。出土遺物としてはSU3-8より土師器片が出土しているが、時期を決定しうる遺物は出土していない。G-1区のSU3と方向と規模が一致しており、同じ畝溝群に属する。

SU4

調査区中央から西側にみられ、SD3と方向性を同じくする畝溝群であり、24条の畝溝がみられる。SU1・2畝溝群に切られる。SD1・3と方向性を同じくするものの、形成年代はSD3よりも古く、SU1・2に先行する。畝溝方向は北より東に40～45度の角度をとる。確認延長は3.15～7.20m、幅0.25～0.40m、深さ4～14cm、畝間は160～210cmである。埋土は黒ボク土であり、黒褐色を呈する。基盤のローム小粒を少量含む。出土遺物はみられない。

SU5

調査区北東端部にみられる小畝溝からなる畝溝群であり、8条の畝溝がみられる。畝溝方向は北より西に20～30度の角度をとる。確認延長は0.80～1.00m、幅0.30m、深さ4cm、畝間は不明である。切り合い関係は不明瞭であることが多く、形成時期の異なる畝溝を含んでいるとみられる。埋土は黒褐色土であり、基盤のローム小粒を多く含む。出土遺物はみられない。

④ 柱穴

いくつかの柱穴がみられるが、出土遺物はみられない。埋土は黒褐色～黒色土であり、基盤のローム小粒を少量含む。腐食土坑とみられる。

(3) G-3区

G-2調査区の北東部に位置する小調査区である。検出面より土師器片を出土するが、これは黒ボク土層上位にある近世整地層由来の遺物であるとみられる。

① 溝

SD1

G-2区のSD2の延長部分(B4-13-6)にあたる溝であり、やや蛇行する。確認延長は3.50mであり、北から西に40度の角度をとる。幅0.60m、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色～黒色土であり、基盤のローム小粒を含む。出土遺物はない。

② 畝状遺構

SU1

畝溝は7条みられ、掘り換え溝を含めると、13条になる。畝溝方向は北から西に20度の角度をとる。確認延長は1.90～9.00m、幅0.30～0.50m、深さ4～14cm、畝間は110～140cmである。畝溝内には鋤痕もしくは鋤痕とみられる掘削痕が2列交互にみられる。埋土は明褐色土粒を多く含む黒ボク土起源の黒褐色土である。出土遺物は無かった。G-2区のSU1畝溝群と同様の方向性と規模を持つ事から、この畝溝群の一部であるとみられる。

第X章 II区

1. 調査の概要と基本層序

(1) 調査の概要

II区は先の報告にあったI区の東側に位置する調査区で、東西幅約200mの範囲に位置している。調査時には、II区を西から、II A区、II B区、II C区に区分して調査を実施した。本報告では発掘調査時のII A区からII B区に該当する範囲を報告する。II C区は、次年度刊行予定の報告書にて報告予定のため刊行を待たれたい。

II区は、I区に比べて遺構密度が希薄であり、建物跡などの集落に関係するような遺構は確認されていない。II A区では、西半で耕作に関係したと考えられる畝状遺構や溝が確認された。東半では、西半で確認された畝状遺構は殆どなく、水路に使用されたと思われる溝跡を数条確認した。今回確認された、畝状遺構および溝は近世以前の遺構と考えられる。その他には、自然の腐食痕跡と考えられる腐食土坑や風倒木痕、現代のビニールハウスなどに関係した攪乱土坑を確認した。II B区では西半で中世と考えられる東西方向および南北方向の溝を、II B区東半では、中世の土坑2基と近世以前と考えられる掘立柱建物、土坑などを確認した。その他には、II A区と同様に自然の腐食土坑や風倒木痕、現代攪乱などを確認している。出土遺物に関しては、II A区およびII B区ともコンテナ1箱に満たない。加えてそのほとんどが細片であり、図化できる資料は極めて限定的な状況であった。

(2) 基本層序

II区の基本層序は、II A区北壁およびII B区西壁を基準とする。II区の旧地形は西から東に向かって緩やかに下がる地形で、北から南にかけても若干傾斜する。II A区西端とII B区東端では地表面の標高差は約1.3～1.5mを測る。層順はII A区およびII B区ともに、上から耕作土(第I層)、床土(第II層)、その下が黒ボク土(第III層)、次いで地山(第IV層)となる。第I・II層は古代から現代にかけての遺物をわずかに含む。第III層は基本的に殆ど遺物を含まず堆積時期が判然としない。第III層は部分的には遺物を含むが、調査区全体に占める遺物量の観点から見ても上層からの混入の可能性が捨てきれず明確な年代根拠とはなり難い。II A・B区とも遺構が明瞭に判別できるのは第IV層(基盤層)上であるが、畝状遺構など大半の遺構が第III層の上面から掘り込まれている可能性が示される。第III層の黒ボク土がベース土として脆弱であることや、遺構掘形の判別が難しい黒色土であること、後世の土壤浸食や上部からの削平の影響、加えて出土遺物の希薄な点などが、遺構の掘込み面の認定および遺構掘形の判別と遺構時期の認識を著しく難しくさせている。

II A区北壁セクション(図10-1)

第I層 黄灰色(2.5Y5/1)シルト層(現代耕作土)

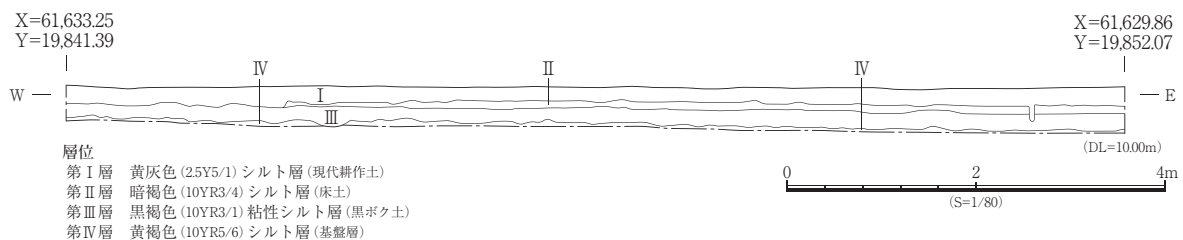


図10-1 II A区北壁セクション図

2. 検出遺構と遺物 (1) II A 区

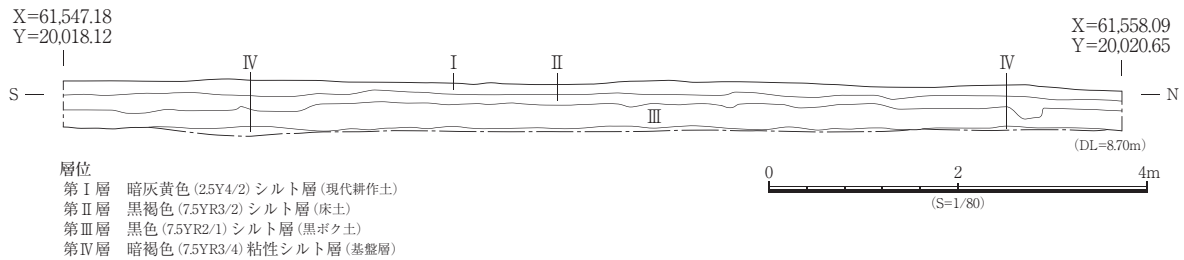


図10-2 II B区西壁セクション図

- 第II層 暗褐色(10YR3/4)シルト層(床土)
- 第III層 黒褐色(10YR3/1)粘性シルト層(黒ボク土)
- 第IV層 黄褐色(10YR5/6)シルト層(基盤層)

II B 区西壁セクション(図10-2)

- 第I層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト層(現代耕作土)
- 第II層 黒褐色(7.5YR3/2)シルト層(床土)
- 第III層 黒色(7.5YR2/1)シルト層(黒ボク土)
- 第IV層 暗褐色(7.5YR3/4)粘性シルト層(基盤層)

2. 検出遺構と遺物

(1) II A 区

① 畝状遺構(図10-3・4)

調査区西半で確認された畝状遺構(SU1~10など)である。数が多いため、全てを個別には触れず、主要な点のみをまとめて報告する。

畝溝は、幅0.20~0.40m、深さ4~10cm程度を測る。埋土は概ね黒褐色シルトを基本とする。溝上部は大幅に削平され全体的に残りは悪い。全長は確認された範囲で5~30mと疎らである。隣接する溝の間隔は、幅の狭いもので20cm前後、幅の広いもので30~40cmをあけて開削されており、溝は一定の間隔を保って南北方向に連続して並ぶ。溝の方向は概ね、北西から南東方向(N-50~60°-W)であり、調査区西半の北東隅に北東から南東方向(N-70°-E)の溝が数条確認されている。溝底の標高は概ね水平であり、目立った傾斜は認められない。溝底には部分的に鋤跡と思われる縞状の痕跡が認められることから、連続する溝は畑などの耕作に関係した畝の痕跡(畝状遺構)と考えられる。埋土からは遺構の時期が明確に確定できるような遺物の出土はなかった。

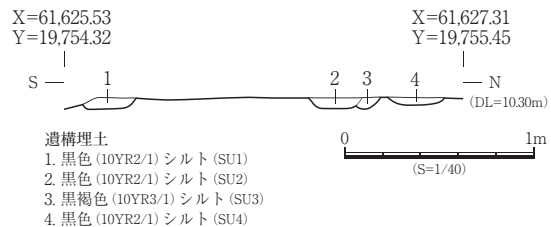


図10-3 II A区SU1~4

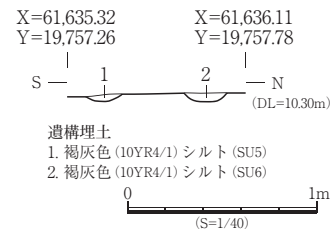


図10-4 II A区SU5・6

② 土坑

SK1(図10-5)

調査区東半(B5-24-3)に位置する土坑で、平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、直径0.90m、深

さ17cmを測る。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトである。周辺に他の土坑は見られない。遺物の出土はなく時期は不明である。

③ 溝

SD1(図10-6)

調査区北西隅(B4-14-12)に位置する北東から南西方向(N-48°-E)の溝で、確認された範囲で全長約12.50m、幅0.60m、深さ24cmを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は黒褐色(10YR3/1)シルトである。溝底の標高は、北から南に向かって低くなり、部分的にSD2と重複する。切り合い関係から、SD2の埋没後にSD1が掘削されたと考えられる。先に示した畝状遺構の切れる西端に位置することから、耕作に使用された水路ないしは排水溝などの可能性が考えられる。

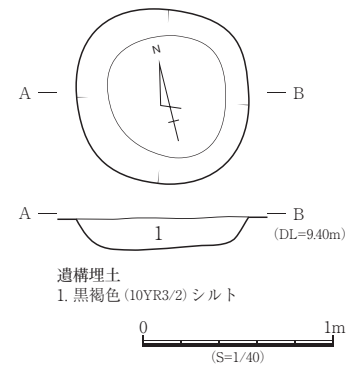


図10-5 II A区SK1

SD2(図10-6)

調査区北西隅(B4-14-13)に位置する北東から南西方向(N-62°-E)の溝で、確認された範囲で全長約10.00m、幅0.42m、深さ16cmを測る。断面形はU字形を呈し、埋土は黒褐色(10YR3/1)シルトである。溝底の標高は、北から南に向かって低くなり、溝は一部がSD1と重複する。時期差は不明だが切り合い関係からSD1より古い溝で、SD1と同様に水路などの可能性が考えられる。

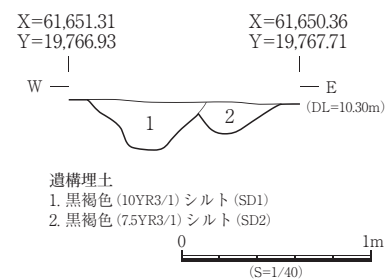


図10-6 II A区SD1・2

SD3

調査区東半(B5-18-23)に位置する北西から南東方向(N-65°-W)の溝で、確認された範囲で全長約62.50m、幅0.30m前後、深さ10cm前後を測る。断面形はU字形を呈し、埋土は黒褐色シルトである。溝底の標高は、西から東に向かって低くなる。調査区の西端で、SD5とほぼ直交し、水路ないしは排水溝と考えられる。

SD4(図10-7)

調査区東半北東部(B5-24-4)に位置する北西から南東方向(N-55°-W)の溝で、確認された範囲で全長約23.50m、幅0.40m前後、深さ8cm前後を測る。断面形はU字形を呈し、埋土は黒褐色(10YR3/1)シルトである。溝底の標高は、西から東に向かって低くなり、東端でSD5とY字形に交わる。埋土の状況からSD5とほぼ同時に埋没していると思われる、機能時期も同じであった可能性が高い。水路ないしは排水溝と考えられる。

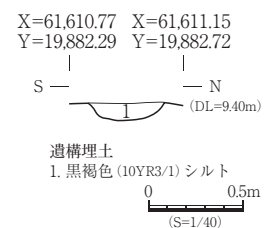


図10-7 II A区SD4

SD5

調査区東端(B5-25-11)に位置する北東から南西方向(N-45°-E)の溝で、確認された範囲で全長約22.50m、幅0.40m前後、深さ15cm前後を測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は黒褐色シルトである。溝底の標高は、北から南に向かって低くなり、SD3・4と直交し、方形状の区画を形成する。

⑤ 遺物包含層等(図10-8)

第Ⅲ層からは土師器椀(1)が出土している。1は椀の底部分および高台のみ残存する。

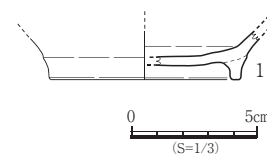


図10-8 II A区第Ⅲ層出土遺物実測図

(2) II B区

① 掘立柱建物

SB1(図10-9)

調査区東半東端部で検出した、桁行2間(5.8m)、梁行2間(4m)の東西棟建物で、棟方向はN-80°-Wを示す。柱穴は東面および南面のみを報告する。P1は径0.32m、深さ34cm、P2は径0.24m、深さ18cm、P3が径0.28m、深さ40cm、P4が0.28m、深さ20cm、P5が径0.24m、深さ16cmである。各柱穴ともに深さは疎らで今ひとつ揃わない。柱穴の埋土は概ね黒褐色シルトである。P2の埋土からは手のひらサイズの石が出

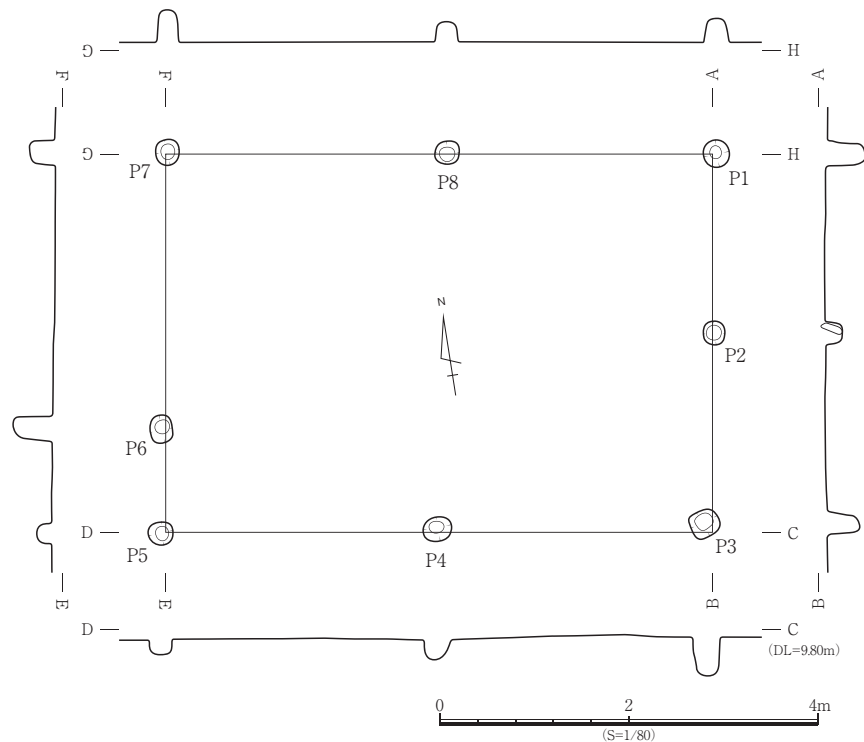


図10-9 II B区SB1

土している。西面のP6とP7の間は間隔が広く取られており入口などの可能性が示される。柱穴埋土からは明確な時期を示す遺物の出土はなかったが、埋土から近世以前の遺構と考えられる。SB1の周辺に他の掘立柱建物は確認されておらず建物の性格は現状では今ひとつ解らない。

② 土坑

SK1(図10-10)

調査区東半(C7-7-17), SB1の南面で確認された隅丸長形状の土坑で、長軸3.46m、短軸1.14m、深さ24cmを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は地山ブロックが混じる黒色(7.5YR2/1)シルトである。遺物は1層から土師質土器小皿(2)が出土している。2は底部から斜め上方に緩やかに立ち上がり、端部は丸くおさめる。

SK2(図10-11)

調査区東半(C7-7-13), SB1の南面で確認された長形状の土坑で、長軸2.40m、短軸0.87m、深さ5cmを測る。埋土は地山ブロックが混じる黒色(7.5YR2/1)シルトで、上部の大半が削平されて残りが悪く断面形状は不明である。遺物の出土はなかった。

SK3

調査区東半南面(C7-12-7)で確認された土坑で、平面形は円形を呈する。径0.55m、深さ20cmを測る。断面形はU字形で、埋土は黒色シルトである。遺物の出土はなかった。

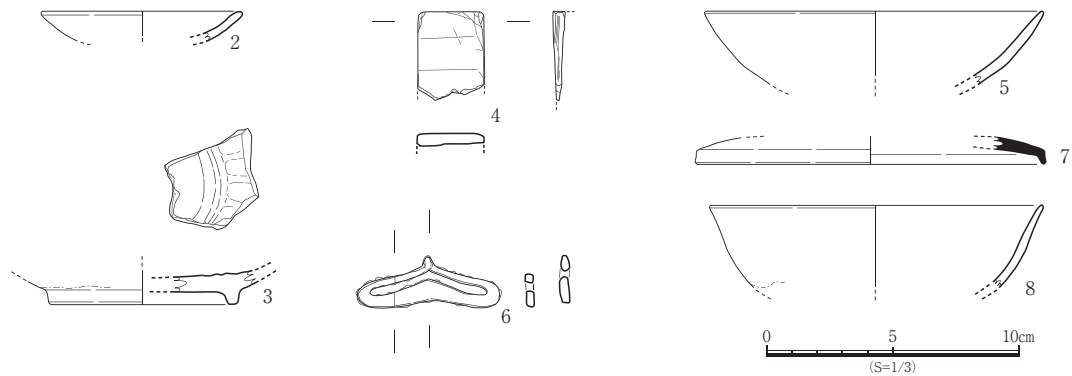


図10-10 II B区SK1,SD1・2, 遺物包含層出土遺物実測図

SK4

調査区東半南面(C7-12-8)で確認された土坑で、平面形は楕円形を呈する。長軸0.60m、短軸0.56m、深さ14cmを測り、断面形はU字形である。埋土は黒褐色粘性シルトで、遺物は土器細片1点が出土している。

③ 溝

SD1(図10-10)

調査区西半(C6-3-21)で確認された東西方向(N-60°-W)の溝で、確認された範囲で全長61.00m、幅2.25m、深さ20cmを測る。埋土は黒色シルトで、幅の広い溝で断面形は皿状となる。溝は調査区内でおさまり、周辺に遺構が無く溝の性格は不明である。出土遺物は陶器皿(3)、石製品砥石(4)などである。3は菊皿で、底部および高台部分のみ残存し、見込には二重の沈線、その外縁部には菊花を挟る。内外面に釉が見られ、古瀬戸皿と考えられる。4は片面および一方の先端を剥離欠損している。非常にきめ細やかな石材で仕上げ用の砥石と考えられ、表面には部分的に使用痕が確認できる。

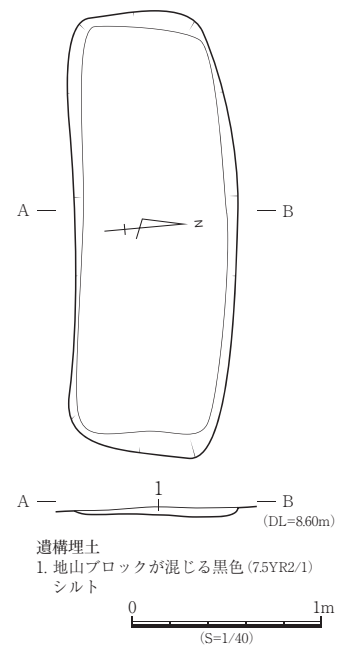


図10-11 II B区SK2

SD2(図10-10)

調査区西半(C6-9-3)で確認された南北方向(N-20°-E)の溝で、確認された範囲で全長34.00m、幅0.65m、深さ12cmを測る。埋土は1層が黒色シルト、2層が黒褐色シルトである。溝の断面形は逆台形を呈し、調査区外の南北に伸びる。何らかの排水溝とみられる。5は瓦器椀で、口縁部のみ残存する。内外面ともに摩滅がひどく、磨きは確認できない。口縁端部の形状から和泉型瓦器椀と考えられる。6は不明鉄製品である。上部は山形に作り出し、上端は突起状に象る。体部には逆Y字形の透かしが入る。一見すると火打金の可能性が考えられるが、形状が華奢な点、両即縁を丁寧丸くおさめている点などから、何かの飾り金具の可能性も考えられる。

⑤ 遺物包含層等(図10-10)

その他には、遺物包含層等から須恵器杯蓋(7)、緑釉陶器(8)などが出土した。7は第I層から出土している。杯蓋の縁部は下方につまみ出し、先端部は丸くおさめる。8は遺構検出面から出土している。口縁部分のみ残存し、下方から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。端部は丸く

3. 小結

おさめ、内外面には緑釉を施す。京産系の緑釉陶器碗とみられる。その他には、表土・耕作土および包含層からの遺物を含めて、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、青磁、近世陶磁器や瓦類などの小片が出土している。

3. 小結

Ⅱ A 区においては、西半で畝状遺構および北西隅の溝(SD1・2)を確認した。いずれの遺構も、時期を確定できるような遺物に恵まれず、中世遺構と積極的に示す根拠もないことから近世以前の畝状遺構および溝と今回は報告しておく。畝状遺構に関しては、部分的ではあるが溝底で縞状に確認された鋤跡などから、畑に関連した畝跡と理解できる。調査区の北西隅で確認された溝は畝状遺構の終わる位置に相当することから、畑に関連した排水溝のような性格が示される。溝は北東-南西方向に掘削されており、周辺を調査していないので確定はできないが、溝の方向が当時の地割りの一面を反映している可能性は十分に考えられる。

調査区の東半では、方形の区画を形成する溝(SD3~5)を確認した。東半では畝状遺構はほとんどなく、畑跡とは考え難い。また、土層や土壌等の観察から、水田跡と評価するのも現状からは困難である。上記の各溝は、排水溝かなにかの溝であろうが、先のSD1・2と同様に溝の示す区画が当時の地割りを示す可能性が指摘される。

Ⅱ A 区ではその他には、遺物を含まない時期不明のピットや自然の腐食土坑・風倒木痕を疎らに確認した。ここで、Ⅱ 区で行われた自然科学分析の結果を参考にすれば、植物珪酸体分析からは、タケ科のクマザサ属やメダケ属が多く確認され、次いでヨシ属がわずかに認められた。その一方で、イネ科イネ属は殆ど確認されていない。そうした分析内容からは、やはり周囲は水田跡とは認め難く、畑地ないしは雑木の繁る雑木林などの当時の状況が想定される。Ⅱ A 区周辺は、現在の水田風景を形成するより前の近世以前のある段階からは、畑地と雑木林の併存する景観、それより前の古い段階では雑木林のような景観であったことが推察される。

Ⅱ B 区西半では、東西方向の幅広の溝(SD1)および南北方向の溝(SD2)を確認した。各溝とも出土土器から中世の溝と考えられる。いずれも埋土の観察からは、水が流れたような明瞭な痕跡は確認されず、豊かな水の流れた溝とは考え難い。溝の具体的な性格は不明であるが、地割りなどを反映した溝の可能性は示される。

東半では、掘立柱建物(SB1)や土坑などを確認した。今回報告したⅡ B 区では掘立柱建物は1棟のみであり、出土遺物にも恵まれず建物の時期および性格については今ひとつよく解らない。次年度報告予定の東のⅡ C 区では、柱穴が複数確認されており、それらと関係する建物の可能性も示される。建物の性格については、周辺の調査成果と合わせて将来的な判断を待ちたい。他には、自然の腐食土坑やピット、風倒木痕、近現代の攪乱土坑などを確認した。

以上、Ⅱ 区全体としての遺構は少なく、掘立柱建物に代表されるような集落活動はⅡ 区周辺では認め難い。また、Ⅰ 区で確認されたような近世屋敷跡のような遺構も認められず、各時代を通じてⅡ 区周辺での生活痕跡は希薄な状況が示される。Ⅱ 区の主要な遺構としては、西の耕作に関係すると考えられる畝状遺構および溝、東半の溝および掘立柱建物が示される。その他にはまとまった遺構は認められず、耕作地などに土地利用される以前は、雑木林が茂る景観をなしていたことが今回の調査成果からは示される。

第Ⅺ章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
辻 康男・矢作健二・馬場健司

1. はじめに

本報告では、遺跡発掘調査に伴い実施した自然科学分析結果について述べる。実施した自然科学分析は、テフラ分析(重鉍物組成+火山ガラス比分析・屈折率測定)、植物珪酸体分析である。

2. 試料

テフラ分析は、ⅡA-1区で実施する。分析層準は、調査区壁面沿いに設定したの深掘トレンチにおいて、段丘礫層の上位に累重するローム状堆積層および包含層をなす黒ボク土である。分析試料は、試料番号1・3・4・6・8・10・11である。試料の詳細については、重鉍物組成+火山ガラス比分析の結果記載で示す図11-1の柱状図を参照頂きたい。

植物珪酸体分は、表11-1に示した遺構埋土について行う。

3. 分析方法

(1) テフラ分析

① 重鉍物・火山ガラス比分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離、重鉍物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉍物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉍物」とする。「不透明鉍物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

火山ガラス比は、重液分離した軽鉍物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。また、火山ガラス比における「その他」は、主に石英および長石などの鉍物粒と変質等で同定の不可能な粒子を含む。

表11-1 植物珪酸体分析試料一覧

試料番号	調査区	遺構/位置	層位	時代	備考		
1	Ⅰ区	D区 SX49	-	下層	18世紀	-	
2		F-1区 東壁	-	2層	9世紀?	黒ボク土	
3		F-2区 北壁	-	4層	18世紀頃	-	
4		F-2区 東壁	-	8層	18世紀頃	-	
5		G-1区	西壁	-	SU4埋土	9世紀?	畝溝
6			西壁	-	SU4埋土	9世紀?	畝溝
7	Ⅱ区	A区	SD1	-	古代?~中近世	畝溝	
8			SD5	-	古代?~中近世	畝溝	

3. 分析方法 (2) 植物珪酸体分析

② 屈折率測定

屈折率の測定は検出された火山ガラスを対象とし、火山ガラス比分析を行った試料全点を対象とする。測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

(2) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示すとともに、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

表11-2 重鉱物・火山ガラス比分析結果

調査区位置	試料番号	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	ザクロ石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
II A-1区 深掘 トレンチ	1	128	37	13	0	0	72	0	250	54	0	6	190	250
	3	109	26	42	0	0	71	2	250	54	0	2	194	250
	4	62	25	57	0	0	106	0	250	15	0	2	233	250
	6	48	5	90	0	0	105	2	250	14	0	2	234	250
	8	43	2	120	0	1	84	0	250	14	0	1	235	250
	10	29	0	114	0	0	107	0	250	7	0	2	241	250
	11	2	1	168	0	0	79	0	250	0	0	0	250	250

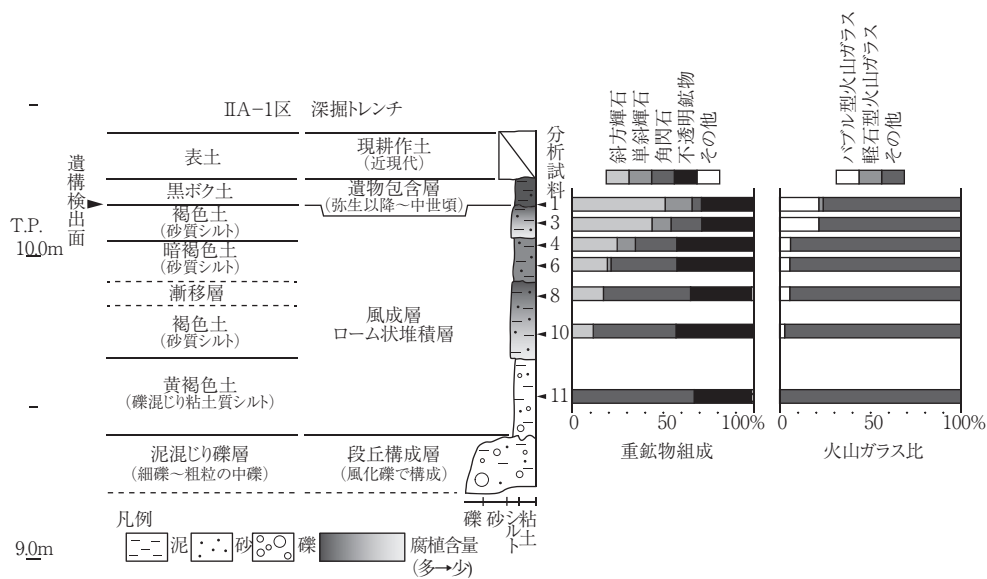


図11-1 II A-1区重鉱物および火山ガラス比分析結果

4. 結果

(1) テフラ分析

重鉱物・火山ガラス比分析の結果を表11-2, 図11-1に示す。重鉱物組成は、層位によって異なる特徴を示す。風化帯を構成する黄褐色土の試料番号11では、角閃石を主体とし、中量の不透明鉱物を伴う組成であり、極めて微量の両輝石が含まれている。ローム状堆積層の下部の褐色土から中部の暗褐色土にかけては、試料番号10から試料番号4に向かって両輝石は増加し、角閃石は減少する。一方、不透明鉱物には変化傾向は認められない。ローム状堆積層上部の褐色土の試料番号3では、下位よりさらに斜方輝石の量比が高くなり、特に試料番号4から試料番号3への斜方輝石の増加傾向は急激である。試料番号3では斜方輝石に比べて角閃石はかなり少量となり、不透明鉱物も下位に比べて量比は低く、斜方輝石よりも少ない。黒ボク土の試料番号1では、試料番号3よりも両輝石がさらに若干増加し、角閃石が減少する。不透明鉱物の量比は試料番号3と変わらない。

火山ガラス比では、風化帯を構成する黄褐色土の試料番号11には火山ガラスは検出されず、ローム状堆積層下部の褐色土から中部の暗褐色土にかけて少量のバブル型火山ガラスが含まれる。その中で、褐色土の試料番号10から直上の漸移層の試料番号8にかけて若干の増加傾向が認められ、試料番号8から暗褐色土上部の試料番号4までは、ほぼ同量で含まれている。ローム状堆積層上部の褐色土の試料番号3では、比較的多量のバブル型火山ガラスが含まれ、上位の黒ボク土の試料番号1にも同量程度のバブル型火山ガラスが含まれる。試料番号3と試料番号1のバブル型火山ガラスには褐色を帯びたものも少量混在する。

火山ガラスの屈折率測定結果を表11-3, 図11-2に示す。試料番号3と試料番号8では、測定に十分な火山ガラスの粒数が得られ、そのレンジが特定できた。試料番号3はn1.506 - 1.510であり、n1.508付近にモードがある。試料番号8はn1.499 - 1.503であるが、n1.499 - 1.500に高い集中を示す。また、極めて微量であるが、n1.511という高屈折率の火山ガラスも認められた。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表11-4, 図11-3に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。植物珪酸体含量は、概して少ない。特

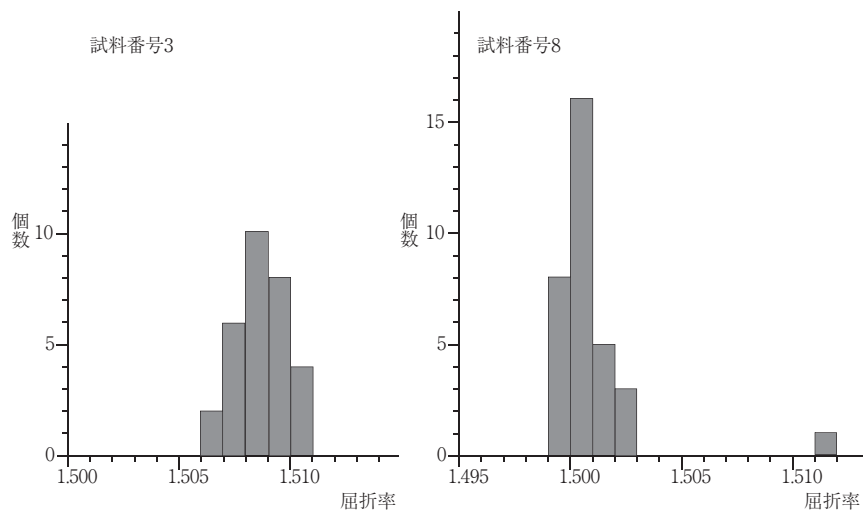


図11-2 II A-1区の火山ガラスの屈折率

表11-3 火山ガラスの屈折率

位置	試料番号	形態	屈折率				対比されるテフラ
			平均値	最小値	最大値	合計	
II A-1区 深掘トレンチ	3	bw	1.508	1.506	1.510	30	K-Ah
	8	bw	1.500	1.499	1.511	33	AT

4. 結果 (2) 植物珪酸体分析

表11-4 植物珪酸体含量

(個/g)

分類群	I 区						II A 区	
	1	2	3	4	5	6	7	8
イネ科葉部短細胞珪酸体								
イネ族イネ属	<100	-	-	-	-	-	-	-
クマザサ属	-	-	-	-	<100	<100	-	-
メダケ属	<100	300	-	-	200	200	800	500
タケ亜科	200	1,500	100	200	700	600	1,500	1,500
ヨシ属	-	-	-	-	-	-	-	-
イチゴツナギ亜科オオムギ族	-	-	-	-	-	-	-	-
イチゴツナギ亜科	-	<100	-	-	-	-	-	-
不明	<100	700	100	<100	900	500	300	500
イネ科葉身機動細胞珪酸体								
イネ族イネ属	100	-	-	-	-	-	-	-
メダケ属ネザサ節	-	-	-	-	-	-	-	-
メダケ属	<100	300	-	-	300	200	900	600
クマザサ属	-	-	-	-	100	<100	-	-
タケ亜科	<100	600	-	-	700	200	1,800	500
ヨシ属	-	-	-	-	-	-	-	-
ウシクサ族	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	300	1,000	600	<100	500	400	1,700	800
合計								
イネ科葉部短細胞珪酸体	300	2,500	200	200	1,900	1,400	2,600	2,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体	500	1,900	600	<100	1,500	900	4,400	1,900
合計	800	4,400	800	300	3,400	2,300	7,000	4,400
珪化組織片								
イネ属類珪酸体	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ属短細胞列	*	-	-	-	-	-	-	-

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)

合計は各分類群の丸めない数字を合計した後丸めている

<100: 100個/g未満

-: 未検出, *: 検出

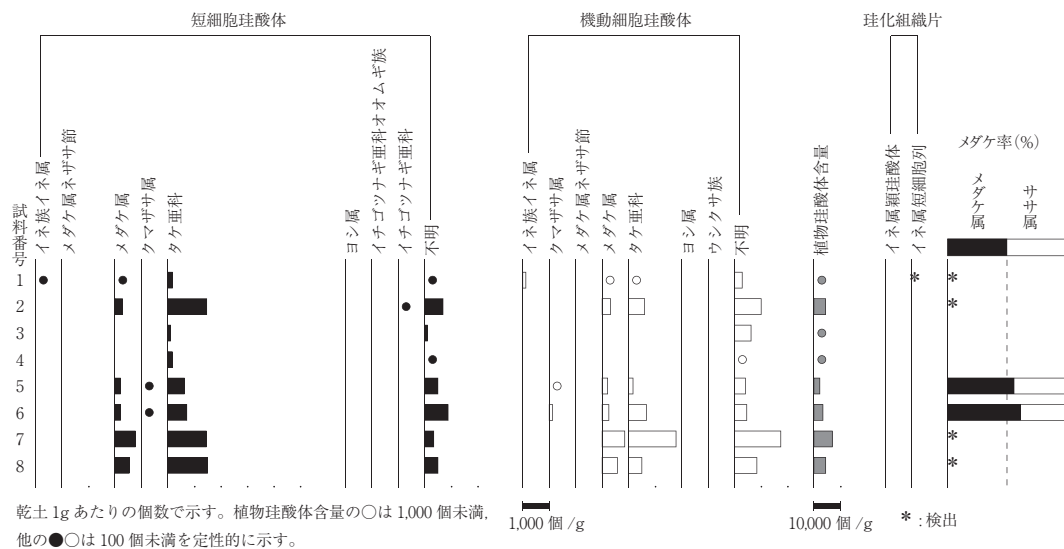


図11-3 植物珪酸体分析結果

に試料番号1・3・4で少なく、300~800個/g程度である。試料番号5と6で2,000~3,000個/g程度、試料番号2と8が約4,400個/g、試料番号7が7,000個/g程度である。

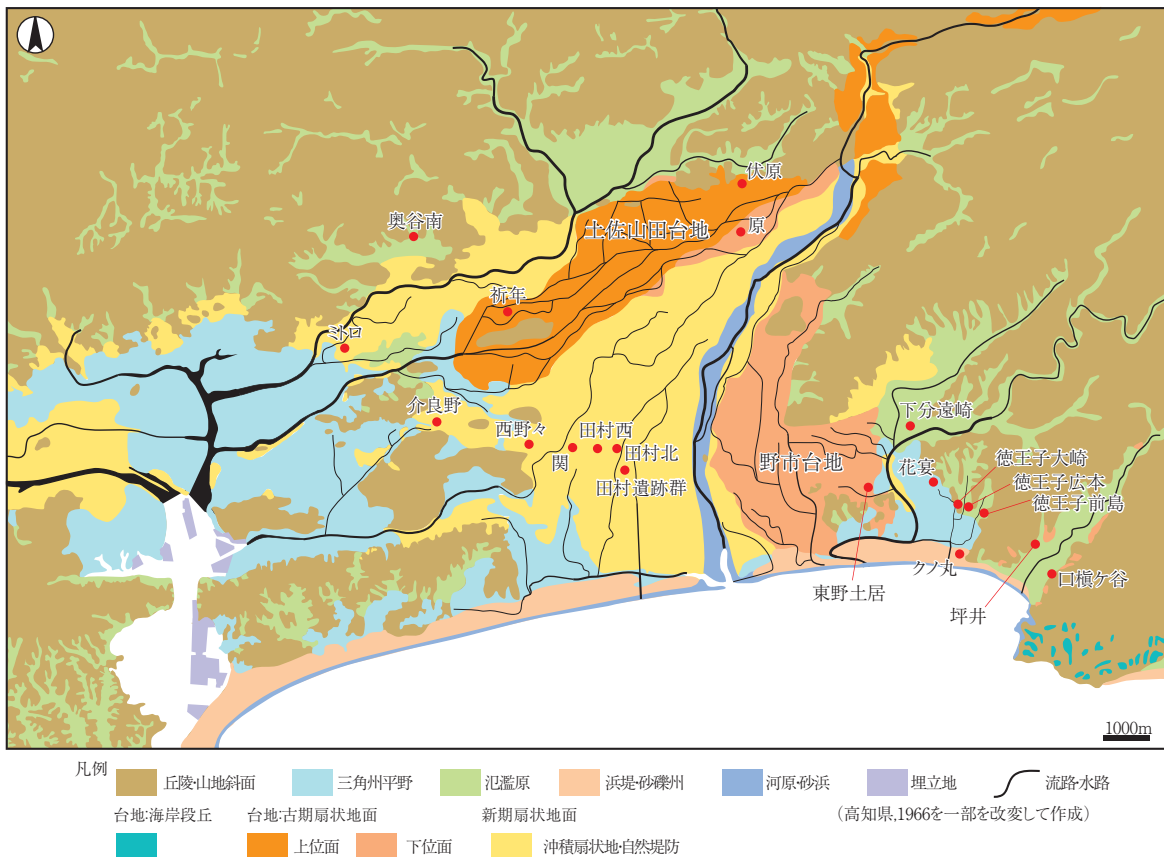


図11-4 遺跡の位置図と自然科学分析を実施した周辺遺跡

各試料では、概してタケ亜科の産出が目立つ。この中にクマザサ属(ササ属)やメダケ属が見られる。また、試料番号2ではイチゴツナギ亜科あるいはヨシ属がわずかに認められる。なお、試料番号1では栽培植物であるイネ属も産出し、葉部の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られる。その含量は少なく、短細胞珪酸体が100個/g前後、機動細胞珪酸体が100～600個/g程度である。

5. 考察

(1) 立地環境と層序

① 立地環境

東野土居遺跡は、物部川左岸の野市台地の東端部に位置する(図11-4)。物部川流域の平野部は、標高約30mの土佐山田町の山田堰を扇頂とする開析扇状地(古期扇状地面)と、沖積扇状地面(新期扇状地面)で構成される(平井, 2004)。このうち開析扇状地は、沖積面との比高にもとづき上下2面に区分される。上位の開析扇状地(上位面)は、土佐山田台地に相当し、標高50～15mでその南端が後免付近で沖積扇状地面下に埋没する。下位の開析扇状地(下位面)は、本遺跡が載る野市台地に相当し、標高30～5mでその南端が現海岸線付近に達しており、砂丘もしくは浜堤堆積物に覆われる。なお、開析扇状地面の上位および下位面と、沖積扇状地面では、ともに形成や離水時期に関する年代値がほとんど得られていない。

野市台地は、現在の烏川を境に傾斜方向が西半部と東半部で異なることが、等高線の分布から認

5. 考察 (1) 立地環境と層序

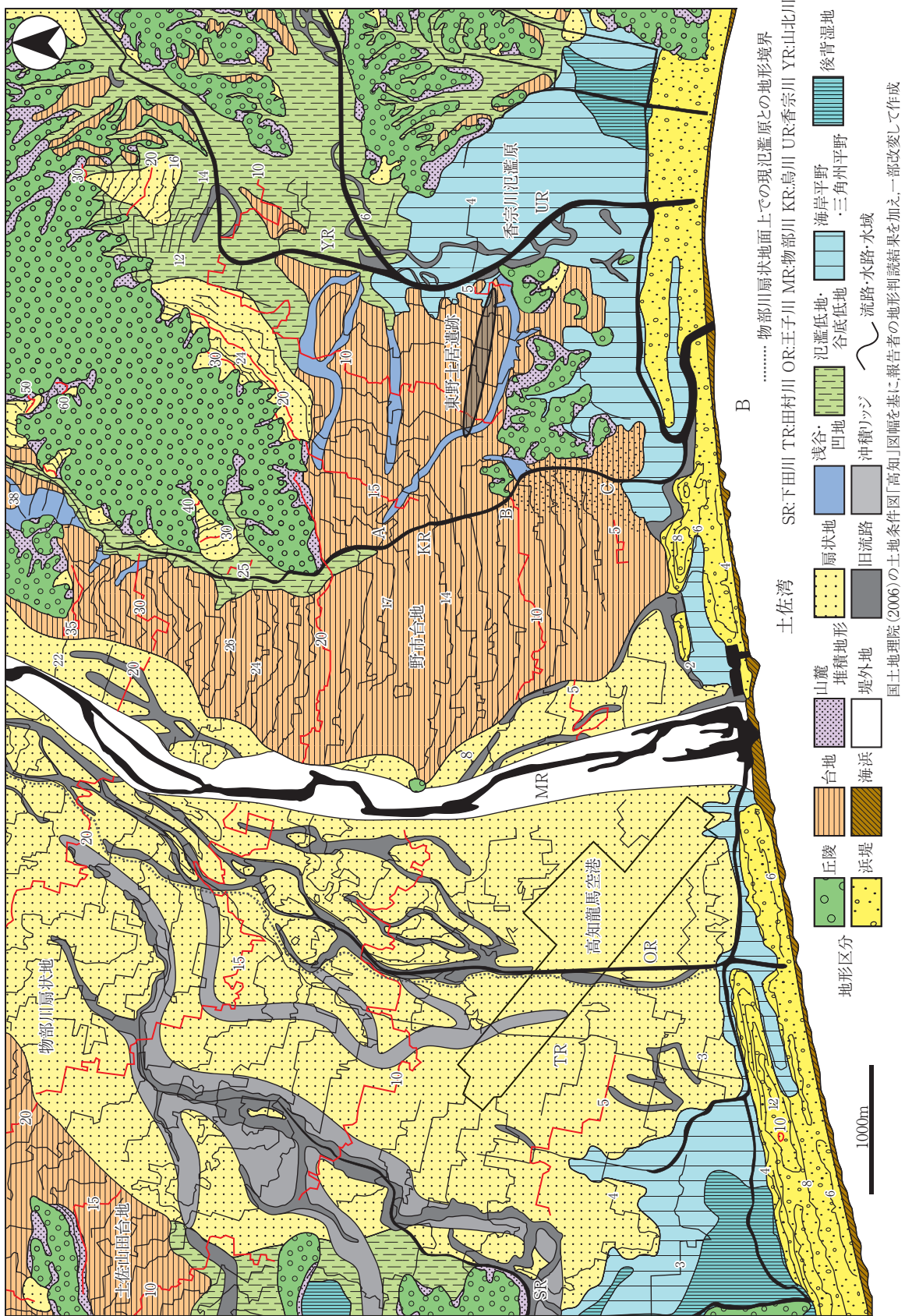


図11-5 遺跡周辺の地形分類図

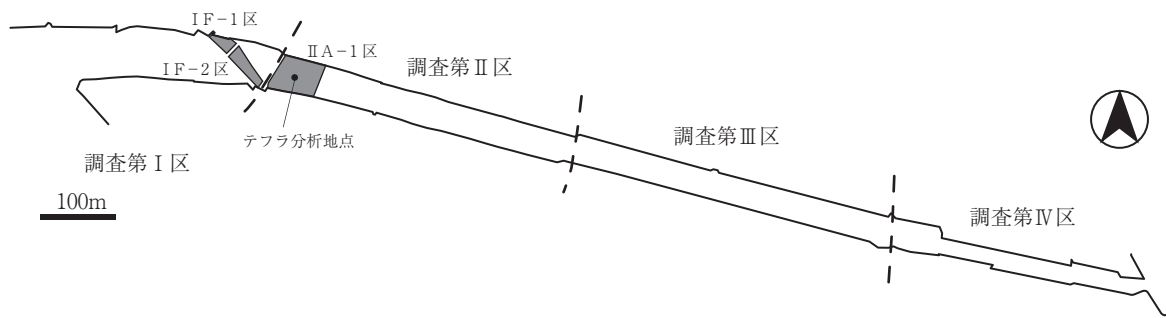


図11-6 東野土居遺跡調査区配置図と分析地点位置図

識される(図11-5)。台地西半部は、北から南へ傾斜する緩斜面が形成される。また、ここでは物部川に接する西端部で、明瞭な段丘崖が形成されている。これに対し、台地東半部では、西から東へ傾斜する緩斜面が形成される。調査区では、標高 12.0m 前後の I 区西端から標高 4.3m 前後の IV 区東端へと、西から東へ約 0.3° の傾斜を示す(図11-6・7)。IV 区東半部は、台地の縁辺に相当するが、西端部のような段丘崖が認められない。

また、台地東半部では、浅谷の存在が確認される。浅谷は3条判読され、台地の北縁、中央、南縁にそれぞれ形成される。このうち、北縁と南縁の浅谷については、国土地理院(2006)でも記載されている。ただし、空中写真判読の結果、台地南縁の浅谷は、国土地理院(2006)で示された谷頭部よりもさらに北西側へ大きく延び、現烏川に近い領域の A 地点まで存在する可能性が示唆される。この浅谷については、IF-2区で検出された流路に対応するものと判断される。

なお、現在の烏川は、図11-5に示したB地点で天井川傾向となり、その下流の網掛けしたC地点の領域で氾濫堆積物が扇状に分布する様子が判読される。烏川の現流路は、更新統である野市台地をほとんど侵食しておらず、地形的に特異なことが指摘される。

今回の発掘調査での IF-2区での流路検出および空中写真判読結果から、烏川の旧流路は、野市台地南縁に形成された浅谷内を一時期流下していた可能性も示唆される。この谷は、東野土居遺跡の南縁部に位置しており、遺跡での人間活動とも大きく関係していると判断される。上記の烏川の流路変遷については、現段階において、谷の形成時期などの地質学的証拠に乏しく、今後検証していくべき課題である。

② 遺跡の基本層序

野市台地では、これまでにその構成層について地質学的検討がほとんど行われていなかった。そのため、今回の自然科学分析では、遺構検出面をなすローム状堆積物のテフラ分析を行い、テフラ層序から台地の離水時期の検討を試みた。分析は、台地の中心部に近い IIA-1区で実施した。

IIA-1区では、下位から礫～砂礫層、泥混じり礫～砂礫層、ローム状堆積層の礫混じり砂質粘土質シルトの黄褐色土、砂質シルトの褐色土、砂質シルトの暗褐色土、砂質シルトの褐色土、黒ボク土の弥生時代以降の包含層、表土(現在の耕作土)の順に累重する堆積パターンが認められる。

礫～砂礫層では、トラフ型斜行層理・葉理ないし平行層理・葉理をなす中礫～大礫の礫層と粗粒～極粗粒砂の砂層が層状に広く累重する。礫層については、トラフ型斜行層理・葉理をなし下位の砂層を流路状に侵食する累重部分が存在する。これらの特徴から、礫～砂礫層は網状流路の堆積システムで累重した河川堆積物と判断される。野市台地の地形をふまえると、この礫～砂礫層は、扇状地

5. 考察 (1) 立地環境と層序

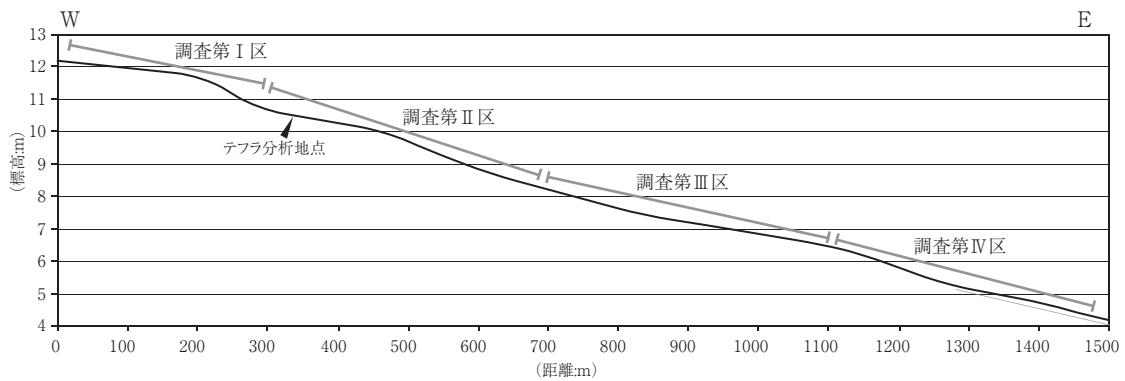


図11-7 東野土居遺跡東西方向地形断面図

の流路および洪水堆積物と解釈される。泥混じり礫～砂礫層では、細礫～粗粒の中礫を多く含む。本層頂部から下位へ20cm前後の層準では、含まれる礫の風化が進行している。

泥混じり礫～砂礫層の上位には、礫混じり粘土質シルト～砂質シルトで構成されるローム状堆積層が比較的厚く累重する。このローム状堆積層では、下位から黄褐色土、褐色土、暗褐色土、褐色土の順に積層する。これらの土層層界については、明瞭な層理面が認められず、漸移的である。そのため、場所によっては、II A-1区のように褐色土、暗褐色土の間に漸移層として認識できる層準が存在する。上記の特徴をふまえると、ローム状堆積層は、土壤化層準を挟在する風成堆積物である可能性が示唆される。

ローム状の堆積層の上位には、黒ボク土が累重する。本遺跡では、黒ボク土が人為的に擾乱されており、明瞭な削剥面を持って接している。発掘調査では、ローム状堆積層の上面を遺構検出面として、黒ボク土を遺物包含層としている。

③ テフラ層序

テフラ分析結果では、屈折率のレンジが層位的に明瞭に異なる、2つの分析層準が確認される。また、重鉍物分析では、ローム状堆積物において最下部の黄褐色土を除き、下部の褐色土(試料番号10)から上部の褐色土(試料番号3)までの層位において、上位に向かって増加する両輝石が捉えられる。さらに、ローム状堆積層上部の褐色土(試料番号3)において急激な斜方輝石の増加も重要な変化である。

野市台地の地質学的背景については、物部川流域に分布する物部川層群や秩父帯および四万十帯などほとんど堆積岩類からなる地質である(日本の地質「四国地方」編集委員会1991など)ことから、ローム状堆積物から検出された輝石類や角閃石などの重鉍物は、台地の基盤や周辺の河川砂に由来するものではないと考えられる。基盤以外の由来としては、遠隔地から飛来して降下堆積したテフラを考えることができる。

また、これら両輝石の組成の変化は、同層位の火山ガラス比におけるバブル型火山ガラスの量比の層位変化とほぼ一致する。上記した台地を構成する堆積層の記載と、地形的特徴も考慮すれば、積物中における層位的な重鉍物組成の変化は、野市台地におけるテフラの降灰に影響されたものと判断される。よって、両輝石とバブル型火山ガラスは同一のテフラに由来すると考えられる。

火山ガラスについては、漸移層(試料番号8)と褐色土(試料番号3)とで、上述したように屈折率のレンジが明瞭に異なる。また、褐色土(試料番号3)には、褐色のバブル型火山ガラスが混在する。これらことから、褐色土(試料番号3)以上のバブル型火山ガラスと、暗褐色土(試料番号4)以下のバブル型

火山ガラスは、それぞれ異なるテフラに由来する可能性が高い。暗褐色土(試料番号4)以下の火山ガラスは、その特徴のある屈折率から始良 Tn 火山灰(AT:町田・新井,1978)と判断される。褐色土(試料番号3)以上の火山ガラスについては、屈折率と褐色のものの混在とから、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah:町田・新井,1978)に由来すると判断される。

ATもK-Ahも、その主要な斑晶鉱物は斜方輝石とされていることから、今回の重鉱物組成における両輝石の産状は、ATとK-Ahの産状を示唆していると考えられる。土壤中に特定テフラが混交して産出する場合は、テフラ最濃集部の下限がそのテフラの降灰層準にほぼ一致すると言われている(早津,1988)。これにもとづくと、ATの降灰層準は、ローム状堆積層下部の褐色土(試料番号10)から中部の暗褐色土(試料番号6)への漸移層(試料番号8)付近と捉えられる。K-Ahの降灰層準については、ローム状堆積層上部の褐色土中(試料番号3)と考えられる。

これらのテフラの噴出年代については、ATが80年代後半から90年代にかけて行われた放射性炭素年代測定(例えば宮入ほか2001など)から、放射性炭素年代ではおよそ2.5万年前頃にまとまる傾向にある。いっぽう、最近の海底コアにおけるATの発見から、その酸素同位体ステージ上における層準は、酸素同位体ステージ2と3との境界付近またはその直前にあるとされ、その年代観は2.5~3.2万年前におよぶとされている(町田・新井,2003)。町田・新井(2003)は、ATの放射性炭素年代を暦年に換算することがまだ困難であると述べているが、上述の海底コアの年代観も考慮すれば、暦年ではおそらく2.6~2.9万年前頃になるであろうとしている。近年の海底コアにおける噴出年代の検討では、約2.8万年の暦年代値が示されている(青木ほか,2008)。K-Ahについては、町田・新井(1978)以来、放射性炭素年代である6,300年前という年代が広く知られている。ただし最近では、第四紀学および考古学において放射性炭素年代をそのまま使用するのではなく、それを「換算」した暦年代が使用されることが多い。また、湖底堆積物における年縞によるK-Ahの年代も推定されている(福沢,1995)。これらのことから、K-Ahの噴出年代については暦年代である7,300年前という年代が表示されるようになってきている(例えば町田・新井2003など)。

今回のテフラ分析により、野市台地の離水年代は、AT降灰以前であることはほぼ確実であるといえる。さらに、K-Ahの降灰層準がローム状堆積層上部にあることもわかった。このことは、例えば土壤生成環境において、いわゆる黒ボク土の形成が、必ずしも完新世初頭を示すものではないことを示唆している。野市台地における土壤生成環境を考える上でも重要な成果であると言える。

なお、土佐山田台地(図11-4)では、祈年遺跡において、段丘礫層上のローム状堆積物の分析を行っているが、そこでは屈折率測定によって、ATとK-Ahの火山ガラスとが混在している状況が確認される(松本編,2011)。調査区の立地についてさらに検討を行うため、報告書刊行後に空中写真判読を試みたところ、本分析地点は、台地上の浅谷内に位置していることが推測された。このことから、祈年遺跡のテフラ分析結果が、谷の形成に伴う堆積物の再堆積の可能性があることが指摘される。また、土佐山田台地下位面の原遺跡では、段丘礫層上位に層厚12cmのK-Ahの降灰層準が確認されるが、ATの挟在が認められない(松本編,2010)。このように野市台地・土佐山田台地において、近年の発掘調査により、テフラ層序に関するデータが得られるようになった点の意義は、本地域の地史を考える上において大きいと認識される。今後も両台地では、テフラ層序に関する資料の蓄積をはかっていくことが重要と考えられる。

5. 考察 (2) 植物珪酸体群集

(2) 植物珪酸体群集

各試料では、タケ亜科の産出が目立つ。タケ亜科は、乾燥した土地条件を好むことから、台地上に立地する本遺跡において調和的な産状と判断される。

栽培種であるイネ属は、I D区 SX49, I F-2区 IV層, I G-1区 SU4埋土で珪酸体産出している。含量密度については、いずれも極めて低く、現段階において由来を特定することが難しい。

引用文献

- 青木かおり・入野智久・大場忠道,2008,鹿島沖海底コア MD01 - 2421 の後期更新世テフラ層序. 第四紀研究,47 - 6,391 - 407.
- 早津賢治,1988,テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロロジー - ATにまつわる議論に関係して - . 考古学研究,34,18 - 32.
- 平井幸弘,2004,外帯河川をつくる沖積低地. 日本の地形 6 近畿・中国・四国,東京大学出版会,318 - 325.
- 古澤 明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌,101,123 - 133.
- 福沢仁之,1995,天然の「時計」・「環境変動検出計」としての湖沼の年縞堆積物. 第四紀研究,34,135 - 149.
- 国土地理院,2006,1:25000 土地条件図 高知. 国土地理院地理調査部防災地理課.
- 近藤錬三,2010,プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会,387p.
- 高知県,1966,土地分類基本調査 高知 5万分の1 国土調査,経済企画庁.
- 町田 洋・新井房夫,1976,広域に分布する火山灰 - 始良 Tn火山灰の発見とその意義 -. 科学,46,339 - 347.
- 町田 洋・新井房夫,1978,南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ - アカホヤ火山灰. 第四紀研究,17,143 - 163.
- 町田 洋・新井房夫,2003,新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会,336p.
- 松本安紀彦編,2010,原遺跡. 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,110p.
- 松本安紀彦編,2011,祈年遺跡 I . (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,112p.
- 宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎,2001,始良 T n 火山灰の C - 14年代のクロスチェック (演旨). 地球惑星科学関連学会合同大会予稿集 (CD - ROM),2001,Qm - 010.
- 日本の地質「四国地方」編集委員会,1991,日本の地質 8 四国地方. 共立出版,266p.
- 杉山真二,2001,テフラと植物珪酸体分析. 月刊地球,23,海洋出版株式会社,645 - 650.
- 杉山真二,2002,鬼界アカホヤ噴火が南九州の植生に与えた影響 - 植物珪酸体分析による検討 -. 第四紀研究,41,311 - 316.

遺物觀察表

凡例

法量は土器を基準にcmで示しているが、土製品・石製品・金属製品の場合は口径が全長(cm)、器高が全幅(cm)、底径が全厚(cm)、銭貨の場合は口径が銭径(cm)、器高が内径(cm)、底径が銭厚(cm)と読み替えている。それ以外の値については、特徴または本文中に記している。かっこ付きの数値は残存値を示している。

I A ☒

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
1	SB2 P6	土師質土器 小皿	7.4	1.4	4.4	精土。ロクロ成形, 糸切り痕をナデ消し底部が丸味を帯びる。	
2	〃 P11	磁器染付 〃	12.4	3.5	4.2	内面略化した唐草文, 見込は蛇ノ目釉剥, 呉須は暗緑灰色	肥前波佐見産
3	〃 P9	金属製品 錢貨	2.3	2.0	0.1	寛永通宝	量目 2.1g
4	SB5 P11	焼締め 播鉢	-	(18.1)	17.2	櫛目は9条単位, 内面は使用による摩耗が見られる。	備前
5	〃 P3	陶器 中碗丸形	12.7	8.5	4.5	黄褐色を帯びる透明の灰釉, 体部外面6条の沈線	肥前産
6	SK2	〃 壺	-	(2.7)	-	にぶい黄橙色に発色する胎土に黒褐色の鉄釉施釉, 内面無釉	
7	SK3	〃 小皿	-	(2.0)	-	外面灰釉, 内面には銅緑釉を流し掛け, 高台無釉	肥前内野山窯
8	SK4	〃 〃	-	(2.3)	6.6	内面銅緑釉, 外面灰釉, 見込を蛇ノ目釉剥, 高台無釉	肥前内野山窯
9	SK5	〃 中碗丸形	11.8	(5.1)	-	浅黄色を帯びる透明の灰釉施釉	肥前産
10	SK6	〃 皿	-	(2.8)	7.6	灰釉施釉, 見込蛇ノ目釉剥, 目跡が環状に残る。高台無釉, 高台端部に白土を施す。	肥前系
11	〃	磁器染付 蓋	6.7	1.4	-	内外面透明釉を施釉, かえり無釉, 外面コンニャク印判による桐文	肥前産
12	SK7	陶器 鉢	24.0	(6.4)	-	外面は白化粧土刷毛目, 鉄錆, 灰釉, 内面は灰釉	肥前産
13	〃	〃 〃	-	(5.1)	10.2	高台無釉, 焼成不良で釉は白濁	肥前産 12と同一個体
14	SK13	焼締め 播鉢	27.0	(4.0)	-	内外横ナデ調整。口縁部外面2条の沈線, 内面櫛目は9条単位, 鋭利な原体による細い条線	備前
15	SK23	陶器 中碗丸形	11.6	(4.3)	-	灰白色を帯びる透明の灰釉	肥前産
16	〃	〃 〃	-	(3.3)	-	胎土は灰褐色に発色, 外面は白化粧土刷毛目, 内面は白化粧土打刷毛目	肥前産
17	SD4 上層	〃 鉢	21.9	10.8	9.2	胎土は灰褐色に発色, 外面は白化粧土刷毛目, 灰釉, 口縁部無釉	肥前産
18	〃 〃	磁器染付 小皿	11.8	3.4	4.0	内面に流水文または略化した折松文を描く, 見込は蛇ノ目釉剥, 釉剥部分に細砂塗布, 呉須は暗緑色	肥前波佐見産
19	〃 〃	陶器 〃	13.0	3.1	4.5	外面は灰釉, 内面は銅緑釉, 見込は蛇ノ目に釉剥, 釉剥に砂目跡有り	肥前内野山窯
20	〃 〃	〃 〃	-	(1.4)	4.1	胎土は内面灰黄色, 外面は橙に発色, 見込に目跡, 高台及び外面下半無釉	唐津系灰釉陶器
21	〃 〃	磁器染付 小皿	11.9	3.4	4.1	見込蛇ノ目釉剥, 釉剥に細砂塗布, 呉須は緑灰色に発色, 外面にロクロ目	肥前波佐見産
22	〃 〃	陶器 中碗	9.8	(2.9)	-	灰釉, 外面にロクロ目	肥前産または肥前系
23	〃 〃	磁器染付 小碗丸形	8.4	(2.7)	-	外面草花文	肥前産または肥前系
24	〃 〃	陶器 色絵付小碗丸形	-	(3.6)	-	灰白色を帯びる透明の灰釉, 絵付は赤, 緑による笹文?	京信楽系
25	〃 〃	〃 小碗丸形	9.1	4.8	3.9	にぶい黄色を帯びる透明の灰釉, 高台無釉	

遺物観察表2

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
26	SD4 上層	陶器 中碗丸形	-	(4.1)	-	灰釉, 呉須による楼閣山水文	肥前産
27	〃 〃	磁器染付 小碗	-	(4.1)	4.2	外面に花唐草文, 圏線を配す。畳付に灰白色粗粒砂が付着	肥前産
28	〃 〃	陶器 中碗丸形	-	(5.6)	-	黄褐色を帯びる透明の灰釉	肥前産
29	〃 〃	〃 〃	-	(2.9)	5.0	黄褐色を帯びる透明の灰釉, 貫入, 高台施釉	肥前産
30	〃 〃	陶胎染付 中碗腰張形	10.7	(7.0)	-	呉須による山水文, 圏線, 白化粧土の後に透明釉を施す。貫入	肥前産
31	〃 〃	〃 中碗	10.4	(4.6)	-	呉須による山水文, 圏線, 白化粧土の後に透明釉を施す。貫入	肥前産
32	〃 〃	磁器染付 中碗丸形	13.5	(4.8)	-	二重圏線, 雲竜文	肥前産
33	〃 〃	陶器 鉢	-	(5.6)	11.4	外面鉄釉, 内面白化粧土刷毛目	肥前産
34	〃 〃	〃 〃	22.4	(5.9)	-	内外面白化粧土, 灰釉, 唇部無釉	肥前産
35	〃 〃	石製品 砥石	10.1	8.5	1.9	泥岩, 仕上げ用砥石	重量 168.7g
36	SD4 中層	磁器染付 小皿	11.7	3.4	4.0	内面は略化した流水文, 見込は蛇ノ目釉剥, 高台露呈	肥前波佐見産
37	〃 〃	〃 〃	-	(2.4)	6.2	型打による菊弁, 内面に水・柳・圏線	肥前産
38	〃 〃	白磁又は磁器染付 仏飯具	-	(3.6)	3.8	透明釉	肥前産
39	〃 〃	白磁 紅皿	5.4	1.8	3.4	型打による菊弁, 高台無釉	肥前産
40	〃 〃	土師質土器 小皿	7.8	1.7	4.0	横ナデ調整, 糸切り	器高指数21.8
41	〃 〃	陶器 〃	11.4	3.4	4.0	灰釉, 見込は蛇ノ目釉剥, 外面下位と高台は無釉	肥前内野山窯
42	〃 〃	〃 中碗丸形	12.5	(6.0)	-	黄褐色を帯びる透明の灰釉	肥前産
43	〃 〃	〃 〃	12.7	9.6	5.2	黄褐色を帯びる透明の灰釉	肥前産
44	〃 〃	〃 皿	-	(2.7)	7.4	灰釉, 呉須による山水文, 部分的に緑, 赤の上絵付が施される。高台内に「柴」銘印有り。京焼風陶器	肥前産
45	〃 〃	磁器染付 中碗	10.7	(3.8)	-	宝文を描く。	肥前産
46	〃 〃	陶器 小碗半球形	-	(4.1)	3.0	灰釉, 高台無釉	京信楽系
47	〃 〃	〃 小碗腰張形	8.8	5.4	4.7	灰釉陶器, 呉須による山水文, 高台無釉, 高台内に銘印, 京焼風	肥前産
48	〃 〃	〃 皿または鉢	20.5	(4.0)	-	灰黄色を帯びる半透明の灰釉, 口縁部端反り	
49	〃 〃	陶器 色絵付小碗丸形	9.2	(4.0)	-	上絵付は赤と薄緑色と考えられる笹文, 灰白色を帯びる透明の灰釉	京信楽系
50	〃 〃	磁器染付 中碗丸形	-	(2.7)	4.2	くらわんか手, 外面に圏線・草花文, 見込蛇ノ目釉剥	肥前産

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
51	SD4 中層	焼締め 火入	13.0	(6.0)	—	内面褐色, 外面暗赤褐色に発色	
52	〃 〃	磁器染付 瓶	—	(4.6)	—	草花文, 内面ロクロ目有り	肥前産
53	〃 〃	〃 〃	—	(8.7)	—	外面は草花文, 呉須は暗緑灰色	肥前産
54	〃 〃	陶器 播鉢	30.2	(8.0)	—	口縁部外面2条の凹線, 櫛目11条単位(3.1cm)	備前
55	SD4 下層	磁器染付 碗蓋	—	(1.4)	—	外面は雲, つまみ内には施文。内面は二重圏線, コンニャク印判による五弁花	つまみ径4.0cm 肥前産
56	〃 〃	陶器 小皿	—	(2.9)	5.0	外面は灰釉, 内面は銅緑釉, 見込は蛇ノ目釉剥, 目跡有り	肥前内野山窯
57	〃 〃	〃 小皿変形形	—	(1.2)	—	貼付高台, 呉須による文様	
58	〃 〃	磁器染付 小碗	7.0	(4.4)	—	外面は山水文, 呉須は暗緑灰色	肥前産
59	〃 〃	〃 中碗	—	(3.6)	4.0	体部外面草花文, 高台外面に二重圏線	肥前産
60	〃 〃	陶器 〃	—	(3.1)	4.8	灰黄色の透明の灰釉	肥前産
61	〃 〃	磁器染付 小碗	8.1	(3.9)	—	体部外面は雨降り文	肥前産
62	〃 〃	陶器 中碗	11.1	7.3	4.6	灰釉, 高台無釉	
63	〃 〃	磁器染付 〃	—	(4.5)	4.1	体部外面草花文, 高台外面に二重圏線, 高台内面略化した文字文	肥前産
64	〃 〃	〃 〃	—	(3.7)	4.0	体部外面草花文, 高台外面に二重圏線, 高台内に略化した「明」・圏線	肥前産
65	〃 〃	陶胎染付 〃	—	(4.6)	5.2	体部外面草花文, 高台外面に二重圏線	肥前産
66	〃 〃	〃 火入	9.9	7.6	5.4	外面白化粧土, 呉須による唐草文・圏線, 内面と高台無釉	肥前産
67	〃 〃	〃 中碗	11.6	7.5	5.4	白化粧土透明釉, 文様は山水か, 呉須は暗緑灰色	肥前産
68	〃 〃	陶器 色絵付小碗	—	(3.6)	—	灰釉(灰白色の透明釉), 上絵付は赤色の花びら文が見られる。	京信楽系
69	〃 〃	〃 〃	9.6	(4.4)	—	灰釉(灰白色の透明釉), 上絵付は菊文, 色はとんでいる。	京信楽系
70	〃 〃	〃 〃	9.1	5.2	2.8	灰釉(灰白色の透明釉), 上絵付は笹文か, 色はとんでいる。	京信楽系
71	〃 〃	〃 中碗	12.2	7.6	4.6	灰釉(黄褐色の透明釉), 高台無釉	
72	〃 〃	〃 小皿	13.8	3.3	4.8	灰釉, 見込に蛇ノ目釉剥, 高台無釉	肥前産
73	〃 〃	〃 鉢	—	(6.9)	7.7	鉄錆, 高台と外面下位無釉	肥前産
74	〃 〃	〃 播鉢	—	(6.1)	—	口縁部外面に2条の凹線, 内面は強い横ナデ調整の後櫛目を入れる。櫛は9本単位	備前
75	〃 〃	〃 〃	28.7	(6.5)	—	口縁部外面に2条の凹線, 内面は強い横ナデ調整の後櫛目を入れる。櫛は7本単位	備前

遺物観察表4

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
76	SD4 下層	陶器 播鉢	36.5	(7.8)	—	口縁部外面に2条の凹線, 体部外面回転削りとナデ調整	備前
77	〃 〃	焼締め 甕	21.6	(20.7)	—	胴部最大径24.2cm, 口縁部上面3条の凹線, 体部内外面ロクロ目, 外面に自然釉	丹波産
78	〃 〃	石製品 砥石	13.7	5.1	1.8	裏面には0.5cm幅のノミ痕跡有り。粘板岩製	重量274.0g
79	〃 〃	陶器 鉢	28.2	14.3	10.6	口縁部は玉縁状に肥厚, 鉄錆, 中位白化粧土刷毛, 台形状のしっかりした高台	肥前産
80	SD4	磁器染付 小皿	12.4	3.5	4.0	内面唐草文, 見込は蛇ノ目に釉剥	肥前産
81	〃	土師質土器 小皿	8.2	1.8	3.7	精土, ロクロ水挽き	
82	〃	陶器 中碗	—	(4.3)	4.8	灰釉(浅黄色を帯びる透明釉), 高台施釉	肥前産
83	〃	〃 〃	11.4	7.9	4.8	灰釉(浅黄色を帯びる透明釉), 高台施釉	肥前産
84	〃	〃 天目	12.0	(5.7)	—	内外鉄釉, 外面下半は無釉, 大窯期	瀬戸
85	〃	磁器染付 小碗	—	(3.0)	3.2	体部外面に草花文, 圏線, 高台外面に二重圏線, 見込には二重圏線と昆虫文	肥前産
86	〃	陶器 中碗	—	(3.7)	4.4	外面は白化粧土刷毛目, 内面は白化粧土打刷毛目, 灰釉を全面施釉	肥前産
87	〃 下層	〃 鉢	—	(8.1)	10.4	外面下位は鉄錆, 中位白化粧土刷毛目, 灰釉施釉, 内面白化粧土	肥前産
88	SD4	〃 播鉢	—	(7.0)	—	内面はかなり摩耗	備前
89	〃	石製品 砥石	10.6	8.0	3.4	砂岩製で, 3面使用	重量482.6g
90	〃	〃 〃	11.3	9.8	8.3	砂岩製で, 敲打痕が随所に見られる。	重量1544.9g
91	〃	〃 〃	15.0	5.7	3.9	頁岩製で, 2面使用	重量389.5g
92	〃	〃 不明	(25.1)	12.5	6.7	砂岩製で, 稜線付近が激しく煤ける。	重量(2840) g
93	〃	金属製品 銭貨	2.5	2.0	0.1	寛永通宝	量目2.9g
94	SD5	陶器 中皿	—	(3.9)	10.2	外面は灰釉, 内面は白化粧土刷毛目の後放射状の櫛目, 緑釉・鉄釉・灰釉, 二彩手	肥前産
95	〃	土師器 高杯	—	(4.0)	—	柱状部で, チャートの中粒砂～小礫を含む。	
96	〃	須恵器 杯身	11.7	(2.8)	—	精土, 器壁が薄, 内外面丁寧な横ナデ調整	
97	〃	陶器 中碗	11.4	(5.7)	—	灰釉, 外面にロクロ目	肥前産
98	〃	瓦	(14.7)	7.0	5.1	直方体を呈す。	
99	SD6	磁器染付 小皿	11.6	3.1	3.8	内面は流水文は略化した折松文, 見込は蛇ノ目釉剥, 釉剥部分に細粒砂を塗布, 高台無釉	肥前波佐見産
100	〃	陶器 小皿	16.0	(2.5)	—	内面緑釉, 外面灰釉, 外面にロクロ目が顕著	肥前内野山窯

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
101	SD6	陶器 中碗	-	(5.0)	-	外面は白化粧土刷毛目, 内面は白化粧土打刷毛目, 灰釉を全面施釉	肥前産
102	SD7	磁器染付 小皿	12.8	2.9	6.0	内側が型打による菊弁, 内面に圏線, 柳, 水	肥前産
103	〃	陶器 〃	13.1	3.5	6.8	灰釉は焼成不良で白濁, 見込は蛇ノ目釉剥後, 白化粧土刷毛塗り, 外面下半無釉	
104	SD8	磁器染付 中碗	-	(3.0)	4.2	外面草花文	肥前産
105	〃	陶器 小皿	-	(2.5)	4.8	灰釉, 見込蛇ノ目釉剥	肥前産
106	SD9	焼締め 火入	11.6	6.4	11.8	内外面にロクロ目	
107	SD10	陶器 中皿	-	(3.0)	-	灰釉, 白化粧土刷毛目	肥前産
108	SD9	〃 〃	-	(3.9)	6.9	内面の釉は緑釉と鉄釉の掛け分け, 外面は灰釉, 見込は蛇ノ目状釉剥	肥前内野山窯
109	SD15	焼締め 火入	11.4	7.8	13.6	窯道具の可能性も有り, 内外面ロクロ目	
110	〃	陶胎染付 中碗	-	(3.1)	5.2	白化粧土, 透明釉, 呉須は暗緑灰色	肥前産
111	〃	〃 〃	-	(4.4)	-	白化粧土, 透明釉, 呉須は暗緑灰色	肥前産
112	P3	陶器 壺	-	(6.4)	-	暗灰黄色の釉, 内面無釉。内面ロクロ目顕著	
113	P2	〃 小皿	12.8	(3.3)	-	鉄釉, 見込は蛇ノ目釉, 外面下半無釉, 露胎部赤褐色	能茶山産
114	P1	土師質土器 〃	-	(1.2)	5.4	精土, ロクロ成形糸切り	
115	包含層	須恵器 杯身	-	(3.7)	-	外面ヘラ削り, 横ナデ調整	
116	〃	瓦質土器 鍋	20.6	(5.0)	-	口唇部は凹状, 外面は指頭圧痕顕著	
117	〃	〃 羽釜	-	(4.5)	-	チャート他の中粒~小礫を含む。鏝は断面三角を呈する。	
118	〃	青磁 香炉	-	(4.3)	-	口縁部は内側に肥厚, 内面無釉	
119	〃	磁器 紅皿	4.6	1.3	1.8	押型成形, 菊弁, 外面無釉	肥前産
120	〃	土師質土器 小皿	5.8	1.2	4.2	チャート他の中粒・粗粒砂を含む。ロクロ成形糸切り, 灯明皿として使用している。	
121	〃	陶器 小皿	11.2	(2.2)	-	外面灰釉, 内面銅緑釉	肥前内野山窯
122	〃	〃 中碗	13.8	(5.5)	-	灰釉(黄褐色を帯びた透明の釉)	肥前産
123	〃	〃 小皿	13.8	(2.9)	-	外面灰釉, 内面銅緑釉	肥前内野山窯
124	〃	〃 〃	-	(2.2)	4.6	外面灰釉, 内面銅緑釉	肥前内野山窯
125	〃	〃 中皿	-	(4.7)	-	白化粧土刷毛目, 灰釉	肥前産

遺物観察表6

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
126	包含層	陶器 鉢または片口	24.8	(4.0)	—	口縁部肥厚, 内外面鉄釉	肥前産
127	〃	〃 〃	—	(5.8)	—	口縁部肥厚, 外面白化粧土刷毛目	肥前産
128	〃	〃 〃	27.0	(5.7)	27.0	口縁部肥厚, 外面白化粧土刷毛目	肥前産
129	〃	〃 〃	—	(7.1)	10.1	白化粧土刷毛目, 灰釉, 外面下半に鉄錆	肥前産
130	〃	磁器染付 瓶	—	(5.9)	6.4	外面に圈線, 内面無釉	肥前産

I B ☒

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
1	SB1 P2	陶器 碗	11.3	(4.4)	—	ロクロ成形。外面、二重圏線文・草花文。くらわんか	
2	SB4 P2	土師質土器 小皿	5.8	1.4	4.1	ロクロ成形。回転糸切り痕跡有り。口縁部、タールがわずかに付着。灯明皿	
3	SB5 P4	磁器 碗	7.6	(2.3)	—	ロクロ成形。釉調はにぶい黄橙色を呈する。外面、風景文	
4	SK1	〃 皿	—	(0.8)	3.1	蛇ノ目高台。畳付、外底面、釉剥ぎ。内面、文様を描く。	
5	〃	陶器 甕	—	(1.9)	5.8	ロクロ成形。外面、露胎。釉薬、垂れる。内面、施釉、光沢無し。回転糸切り痕跡有り	
6	〃	〃 播鉢	—	(3.0)	11.9	ロクロ成形。内面は8～10条1単位のスリメを施す、使用により摩耗する。	
7	SK3	磁器 碗	—	(2.3)	3.4	畳付、釉剥ぎ。高台脇、圏線。高台、二重圏線	
8	〃	陶器 碗	—	(3.8)	3.4	灰釉。底部、釉剥ぎ	
9	〃	〃 〃	—	(3.7)	5.3	くらわんか。ロクロ成形。畳付、釉剥ぎ。外面、風景を描く。圏線。高台、二重圏線。唐津焼	
10	〃	磁器 皿	14.0	(2.9)	—	ロクロ成形。内外面、施釉する。	
11	SK6	陶器 碗	10.6	(2.5)	—	ロクロ成形。内外面、鉄釉。唐津焼	
12	SK9	〃 皿	21.7	5.4	7.2	ロクロ成形。折り縁。輪花型。畳付、釉剥ぎ。見込、蛇ノ目釉剥ぎ。目跡有り。外面、灰釉一部ただれる。内面、銅緑釉	
13	〃	土師質土器 小皿	—	(0.8)	5.1	ロクロ成形。内底面、ロクロ目顕著。回転糸切り痕跡	
14	〃	須恵器 皿	13.6	(1.9)	—	回転ナデ。折り曲げ口縁	
15	〃	石製品 叩石	9.8	9.2	2.6	扁平な砂岩。縁辺部の2カ所に敲打により剥離する。両面の中央部に弱い敲打痕跡有り	重量346.8g
16	SK14	鉄製品 釘	(4.8)	0.4	0.3	欠損。断面、方形	重量(4.4)g
17	SK16	土師質土器 小皿	7.8	1.2	4.1	ロクロ成形。回転糸切り痕跡有り。内面、煤付着。灯明皿として使用	
18	SK18	磁器 碗	9.6	(2.3)	—	ロクロ成形。外面、染付の一部有り	
19	〃	陶器 瓶	—	(3.6)	—	ロクロ成形。辣蕪形。外面、草花文	
20	SK22	〃 鉢	20.7	(3.0)	—	ロクロ成形。外面、化粧土、透明釉。内面、刷毛塗り	
21	SK23	磁器 皿	12.6	(2.1)	—	ロクロ成形。内面、緑灰色の文様有り	
22	〃	〃 〃	—	(0.8)	—	型押成形。畳付、釉剥ぎ。内面、陽刻花文様	
23	SK24	〃 碗	8.3	4.6	3.1	ロクロ成形。丸形。畳付、釉剥ぎ。外面は、桐文	
24	SK25	〃 瓶	—	(5.9)	5.6	ロクロ成形。畳付、釉剥ぎで砂付着。外面、丸文・圏線。高台、圏線。内面、露胎	
25	SK26	陶器 皿	13.2	2.9	4.4	ロクロ成形。外面、透明釉。下半から高台、露胎。内面、銅緑釉。見込、蛇ノ目釉剥ぎ・目跡4カ所有り。外底面、トキン状	

遺物観察表8

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
26	SK27	陶器 碗	10.4	(4.1)	-	ロクロ成形。灰釉。貫入有り	
27	〃	土製品 鈴	4.0	4.2	2.8	型打成形	重量 14.5g
28	〃	須恵器 杯身	14.2	(3.9)	-	回転ナデ。立ち上がり、やや内傾。受部、水平	
29	SK32	石製品 石錘	(9.6)	5.0	2.2	棒状の砂岩製。欠損。両端、紐掛け用に抉りを入れる。	重量(180.2) g
30	SK33	陶器 碗	12.6	(4.1)	-	ロクロ成形。外面、筆による染付。にじみ、発色も悪い。	
31	SK35	〃 〃	-	(3.2)	4.7	ロクロ成形。灰釉。外面下半、高台、露胎。内面、目跡有り	
32	SK37	〃 〃	-	(5.3)	-	ロクロ成形。外面、ロクロ目、顕著。灰釉	
33	〃	土師質土器 小皿	-	(0.7)	4.0	ロクロ成形。回転糸切り痕跡	
34	SK38	陶器 甕	-	(7.7)	22.2	ロクロ成形。内面、叩き目有り	
35	SK39	磁器 碗	-	(1.4)	3.6	ロクロ成形。畳付、釉剥ぎ。砂付着。外面、圏線。高台、圏線。見込、圏線。コンニャク印判の五弁花	
36	〃	陶器 甕	-	(18.7)	17.0	ロクロ成形。断面に輪積みの痕跡が明瞭に残る。底部の器厚は薄く、凹凸が有る。内底面、黄白色のものが付着する。	
37	SK43	磁器 小杯	7.5	3.2	2.6	ロクロ成形。端反。畳付、釉剥ぎ	
38	SK44	青磁 碗	-	(2.5)	-	ロクロ成形。外面、鎬蓮弁文	
39	SK48	磁器 〃	9.4	(3.0)	-	ロクロ成形。外面、風景文	
40	SK49	〃 皿	11.6	3.8	4.0	ロクロ成形。外底面、ちぢれ状。高台、露胎。見込、蛇ノ目釉剥ぎ。砂、塗布か。内面口縁部、流水文	
41	SD1	土師質土器 不明	-	(2.0)	-	ナデ調整	
42	SD3	須恵器 壺	-	(3.5)	-	回転ナデ成形。口縁部をわずかに肥厚させる。口縁直下、沈線・凹線文。斜線文	
43	SD5	磁器 碗	7.1	4.1	2.3	ロクロ成形。畳付、釉剥ぎ。外面、文様有り。高台堺、高台に圏線文	
44	〃	〃 〃	7.8	4.2	2.9	丸型。ロクロ成形。畳付、釉剥ぎ。外面口縁部、雨降り文。腰部、圏線。高台、二重圏線	
45	SD10/ SD13	陶器 〃	8.7	5.0	2.8	丸型。ロクロ成形。灰釉。高台、露胎。外面、文様有り。呉須の発色悪い。	
46	SD10	〃 〃	9.7	5.5	3.0	丸型。ロクロ成形。灰釉。高台、露胎。色絵(赤)、花文。47と同一個体か	
47	〃	〃 〃	9.8	(4.7)	-	丸型。ロクロ成形。灰釉。高台、露胎。色絵(赤)、花文。46と同一個体か	
48	SD13	磁器 〃	10.1	7.4	4.1	丸形。ロクロ成形。畳付、釉剥ぎで砂付着。外面口縁部、四方禪文。植物を描く。底部、圏線。高台、二重圏線。くらわんか	
49	SD5	陶器 〃	11.5	6.9	4.6	ロクロ成形。灰釉。畳付、釉剥ぎ	
50	SD13	磁器 〃	9.8	(2.1)	-	丸形。ロクロ成形。内面口縁部、四方禪文。くらわんか	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
51	SD5	磁器 碗	9.6	(4.2)	—	ロクロ成形。口鏝	
52	SD13	陶器 〃	9.6	(3.7)	—	丸形。ロクロナデ。色絵(赤等)で花文	
53	SD5	〃 〃	—	(3.9)	—	ロクロ成形。灰釉	
54	SD10	磁器 〃	11.0	(3.6)	—	ロクロ成形。外面, 圏線・網目文。126と同一個体か	
55	SD13	陶器 〃	10.2	(5.2)	—	ロクロ成形。外面口縁部, 二重圏線文。釉薬, ピンホール状, 二次被熱か	
56	〃	〃 〃	12.2	(6.2)	—	丸形。ロクロナデ。灰釉	
57	SD5	磁器 〃	—	(4.5)	4.9	丸型。畳付, 釉剥ぎ。見込, 蛇ノ目釉剥ぎで砂付着。外面, 丸文。底部付近, 圏線。高台, 二重圏線。内面見込, 二重圏線。五弁花のコンニャク印判	
58	〃	〃 〃	—	(3.6)	4.1	丸型。ロクロ成形。畳付, 釉剥ぎ。外面, 草花文。高台, 二重圏線。高台内, 渦福。内面, 目跡か	
59	SD13	〃 〃	—	(5.0)	4.8	丸形。ロクロ成形。畳付, 釉剥ぎ不十分で砂付着。外面, 文様有り。外底面, ヒビ有り。器壁, 厚い。くらわんか	
60	SD5	陶器 〃	—	(4.2)	5.7	ロクロ成形。灰釉。高台, 露胎。内面, 目跡有り	
61	SD13	〃 〃	—	(6.5)	5.4	ロクロ成形。畳付, 釉剥ぎ。外面, 唐草文・圏線。高台, 二重圏線。二次被熱。くらわんか	
62	〃	〃 〃	—	(6.0)	4.7	ロクロ成形。丸形。畳付, 釉剥ぎで砂付着。外面, 風景文か。高台堺, 圏線文。貫入有り	
63	〃	〃 〃	—	(2.8)	4.9	ロクロ成形。畳付, 釉剥ぎ。外面, ヒダ状の凹凸有り。文様有り。圏線	
64	〃	〃 〃	—	(2.3)	4.1	ロクロ成形。畳付, 釉剥ぎ。外面腰部, 圏線文。高台, 二重圏線文。内面高台, 圏線文	
65	SD5	〃 〃	—	(3.4)	5.2	ロクロ成形。器壁は厚い。畳付, 釉剥ぎ。砂付着。外面底部付近, 圏線。高台, 二重圏線	
66	SD13	〃 〃	—	(4.4)	5.3	ロクロ成形。丸形。畳付, 釉剥ぎ。外面, 風景文か。釉薬, ピンホール状, 二次被熱か	
67	〃	〃 〃	—	(3.4)	5.2	ロクロ成形。丸形。灰釉。畳付, 釉剥ぎ。砂付着	
68	SD10	〃 〃	—	(4.7)	5.0	ロクロ成形。灰釉。高台, 露胎。内面, 目跡有り	
69	SD5	磁器 〃	7.6	5.9	3.9	筒型。ロクロ成形。畳付, 釉剥ぎ。外面, 菊花文。腰部, 圏線。高台, 二重圏線。内面口縁部, 多重圏線。見込, 二重圏線・文様	
70	SD10 SD13	〃 〃	6.8	5.7	3.6	筒型。ロクロ成形。畳付釉剥ぎ。外面3分割し, 草花文。圏線。高台, 二重圏線。内面口縁部, 四方襷文。見込, 圏線・五弁花のコンニャク印判	
71	SD10	〃 皿	11.8	3.3	3.9	ロクロ成形。高台, 露胎。見込, 蛇ノ目釉剥ぎで砂付着。内面, 流水文	
72	SD13	陶器 〃	—	(0.8)	—	ロクロ成形。低い高台。見込, 文様有り	
73	SD5	〃 〃	24.2	(3.1)	—	ロクロ成形。灰釉	
74	SD13	磁器 〃	—	(2.9)	9.2	ロクロ成形。畳付, 釉剥ぎ。外面, 圏線。内面, 文様有り。圏線。くらわんか	
75	〃	陶器 〃	—	(1.9)	4.9	ロクロ成形。銅緑釉。見込, 蛇ノ目釉剥ぎ。外面, 露胎。畳付, 糸切り痕跡有り	

遺物観察表10

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
76	SD13	磁器 皿	-	(2.4)	4.2	ロクロ成形。畳付、釉剥ぎ。見込、蛇ノ目釉剥ぎ、アルミナ砂塗布か。内面、二重斜格子文・二重圏線。外底面、ヒビ有り。二次被熱か	
77	SK15 SD13	陶器 〃	-	(4.0)	9.3	ロクロ成形。外面、露胎。高台に抉りを入れる。内面、刷毛塗り。見込、目跡有り	
78	SD13	〃 〃	-	(3.0)	6.9	ロクロ成形。見込、蛇ノ目釉剥ぎ。刷毛塗り。外面、露胎	
79	SD10	磁器 〃	-	(2.4)	11.5	ロクロ成形。畳付、釉剥ぎ。外面、圏線。高台、二重圏線。内面、草花文か	
80	SD5	陶器 小皿	8.2	1.5	3.4	ロクロ成形。備前焼か	
81	SD7	土師質土器 〃	6.1	1.0	3.9	ロクロ成形。回転糸切り痕跡。やや歪む。	
82	SD5 SD7	〃 〃	6.8	1.2	3.8	ロクロ成形。回転糸切り痕跡有り	
83	SD10	〃 〃	6.9	1.6	3.8	ロクロ成形。回転糸切り痕跡有り。やや摩耗	
84	SD13	〃 〃	7.3	1.3	4.6	ロクロ成形	
85	〃	〃 杯	-	(2.3)	6.8	ロクロ成形。回転糸切り痕跡有り	混入か
86	SD5	磁器 鉢	14.2	5.8	5.6	ロクロ成形。口縁部、屈曲させる。畳付、釉剥ぎで砂付着。見込、蛇ノ目釉剥ぎで砂付着。内面口縁部、草花文を描く。	
87	SD13	陶器 〃	15.6	6.1	5.5	ロクロ成形。口縁部、屈曲させる。刷毛塗り。畳付、釉剥ぎ。見込、蛇ノ目釉剥ぎ。二次被熱により釉薬が溶解する。	
88	SD5	〃 〃	19.8	(5.4)	-	ロクロ成形。口縁部を大きく外反させる。内外面、刷毛塗り。外面下半、露胎	
89	SD13	〃 〃	-	(5.5)	-	ロクロ成形。刷毛塗り。外面下半、露胎	
90	〃	〃 〃	16.8	(4.1)	-	ロクロ成形。口縁部、断面方形。内外面、刷毛塗り	
91	〃	〃 〃	-	(12.8)	11.6	ロクロ成形。刷毛塗り。高台、露胎	
92	SD5	〃 〃	-	(5.6)	13.4	ロクロ成形。内面、刷毛塗り。外面、露胎	
93	SD13	〃 匣鉢	13.5	6.7	12.6	ロクロ成形。底面、平坦。口唇部、平坦面	備前
94	SD10	〃 擂鉢	21.6	(6.2)	-	ロクロ成形。内面、7条1単位のスリメを密に深く施す。内面口縁部、スリメ上端をヨコナデ。口縁部は丸みを帯びた扁平。外面口縁部、2条の凹線	堺産
95	SD5	〃 〃	32.6	(10.6)	-	ロクロ成形。口縁部は尖らせ気味に丸くおさめる。口縁部外面、2条の凹線文。内面、7条1単位のスリメを密に施す。	
96	SD13	〃 〃	39.2	(10.2)	-	ロクロ成形。外面口縁部、2条の凹線。口縁部直下にヨコナデ。口縁部、内面刻印有り。内面に9条1単位のスリメ。スリメ上端に弱いヨコナデ	堺産
97	SD5	磁器 瓶	1.9	(2.2)	-	ロクロ成形。内面、露胎。釉薬が垂れる。外面、文様有り	
98	SD13	〃 〃	-	(1.9)	2.8	ロクロ成形。畳付、釉剥ぎ。外面、文様有り	
99	SD5	〃 〃	-	(4.2)	3.0	ロクロ成形。内面、露胎。畳付、釉剥ぎ。外面、笹文	
100	SD21 SD13	〃 〃	-	(8.5)	5.8	ロクロ成形。内面、露胎。畳付、釉剥ぎ。外面、松などを描く。圏線。高台、圏線	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
101	SD10	磁器 瓶	-	(7.1)	-	ロクロ成形。内面, 露胎。外面, 多重圏線。草花文	
102	SD13	〃 〃	-	(4.9)	9.7	ロクロ成形。畳付, 釉剥ぎ。内面, 露胎	
103	〃	〃 香炉	10.4	(5.6)	-	ロクロ成形。青磁釉。内面, 下半の釉は薄い。	
104	〃	陶器 〃	5.2	(6.8)	-	ロクロ成形。口縁部, 肥厚。内面, 露胎。外面, 文字か	
105	SD5	〃 蓋	10.9	(2.1)	-	ロクロ成形。外面, 鉄釉。内面, 露胎	
106	SD13	〃 甕	22.6	(9.3)	-	ロクロ成形。口縁端部を折り曲げ, 口唇部は断面台形を呈する。肩部, 多条沈線文を巡らせる。鉄釉	
107	〃	〃 〃	32.4	(7.9)	-	ロクロ成形。口唇部, 拡張。肩部, 多条凹線文を巡らせる。口縁部, 露胎	
108	〃	〃 〃	37.8	(4.7)	-	ロクロ成形。鉄釉	志田西山
109	SD5	〃 〃	-	(5.6)	18.2	ロクロ成形。外面, 鉄釉。黄緑色の釉葉, 垂れる。外底面, 釉葉附着。内面, 緑色釉。所々, 露胎有り	
110	SD13	土師質土器 焙烙	49.0	(3.6)	-	ロクロ成形。外面, 煤附着	讃岐岡本系
111	〃	磁器 紅皿	4.6	1.3	1.5	型打成形。菊花形。外面下半, 露胎	
112	SD5	磁器 手塩皿	6.2	2.0	3.4	ロクロ成形。畳付, 釉剥ぎ。外面, 文様有り	
113	SD13	〃 〃	5.4	1.6	2.3	ロクロ成形。畳付, 釉剥ぎ	
114	SD5	陶器 仏飯具	-	(4.4)	4.7	ロクロ成形。畳付, 釉剥ぎ。外面, 文様有り	
115	〃	瓦 軒丸瓦	(5.3)	-	1.7	三ツ巴文。連珠。キラ粉	
116	SD13	〃 平瓦	-	-	全厚 1.5	「山佐」銘有り	
117	SD5	石製品 砥石	16.7	6.2	2.2	4面とも流通時の大きさを反映。厚さは反映していない。欠損している。	重量(329.7) g
118	〃	〃 〃	(6.9)	7.1	2.7	砂岩製。4面使用。小口面は未使用	重量(260.9) g
119	SD13	〃 叩石	14.4	6.8	4.1	砂岩製。先端部, 叩き痕跡有り	重量607.7g
120	SD5 SD7	鉄製品 釘	11.0	0.5	0.4	断面, 方形	重量29.1g
121	SD8	陶器 碗	9.1	(2.9)	-	ロクロ成形。灰釉	
122	〃	磁器 碗	-	(3.1)	3.6	ロクロ成形。畳付, 釉剥ぎ。高台, 圏線か	
123	〃	陶器 甕	-	(3.1)	10.0	ロクロ成形。鉄釉。外底面の一部, 直線状に釉剥ぎ	
124	SD9	〃 碗	7.8	(4.0)	-	ロクロ成形。鉄釉	
125	〃	磁器 〃	-	(2.3)	-	ロクロ成形。外面, 文様有り。呉須の発色は悪い。	

遺物観察表12

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
126	SD11	磁器 碗	11.0	(3.6)	—	ロクロ成形。外面, 圏線・網目文。54と同一個体か	
127	〃	陶器 蓋	8.3	(1.6)	—	ロクロ成形。内面返り部, 露胎。外面, 草花文	
128	SD12	磁器 碗	—	(2.2)	—	ロクロ成形。外面, 桐文	
129	〃	陶器 〃	12.3	(5.2)	—	ロクロ成形。灰釉	
130	〃	〃 皿	—	(5.3)	6.8	ロクロ成形。見込, 蛇ノ目釉剥ぎ。外面下半, 露胎。外底面, 墨書有り	
131	〃	〃 〃	—	(1.7)	4.9	ロクロ成形。内面, 灰釉。外面, 露胎。見込, 4カ所に目跡有り	
132	〃	〃 〃	10.7	1.3	4.6	ロクロ成形。回転糸切り痕跡有り。口縁部, タールがわずかに付着	灯明皿
133	〃	〃 鉢	—	(1.9)	—	ロクロ成形。口縁端部, 肥厚	
134	〃	〃 香炉	10.5	(2.2)	—	ロクロ成形。口縁部, 折り曲げ。外面, 灰釉。内面, 露胎	
135	SD15	磁器 皿	13.6	(2.7)	—	折縁皿。ロクロ成形。外面下半, 露胎	
136	SD18	〃 碗	14.0	(1.9)	—	端反。ロクロ成形。内面, 圏線文・文様有り	
137	〃	陶器 〃	—	(3.1)	—	ロクロ成形。灰釉。外面下半, 露胎	
138	〃	磁器 小杯	7.6	(2.4)	—	ロクロ成形	
139	〃	陶器 鉢	—	(4.7)	14.8	ロクロ成形。内面, 刷毛塗り。外面, 露胎	
140	SD19/20	〃 碗	11.2	7.8	4.5	丸形。ロクロ成形。畳付, 釉剥ぎ。外面口, 二重圏線文・草花文・圏線文。高台, 二重圏線文。二次被熱, 釉薬溶解。くらわんか	
141	SD19	磁器 〃	—	(3.2)	—	ロクロ成形。外面, 草花文	
142	〃	陶器 鉢	—	(3.9)	7.3	ロクロ成形。内外面, 露胎。内面, 使用により平滑	
143	〃	瓦質土器 鍋	19.0	(3.9)	—	口縁部, 外反。口唇部, 丸くおさめる。ヨコナデ	
144	SD20	陶器 碗	11.4	(6.9)	—	ロクロ成形。外面, 二重圏線文・風景文・圏線文。二次被熱, 釉薬, ピンホール状・溶解。くらわんか	
145	〃	〃 〃	12.9	(5.6)	—	ロクロ成形。外面, 二重圏線文・草花文。二次被熱, 釉薬, ピンホール状・溶解。唐津。146と同一個体か	
146	SD20 SK24	〃 〃	—	(4.7)	—	ロクロ成形。外面, 二重圏線文・草花文。二次被熱, 釉薬, ピンホール状・溶解。唐津。145と同一個体か	
147	SD20	磁器 〃	12.4	(3.7)	—	ロクロ成形。外面, 植物文	
148	〃	陶器 〃	—	(3.1)	5.7	ロクロ成形。灰釉。畳付, 露胎	
149	〃	〃 〃	—	(4.2)	5.3	ロクロ成形。鉄釉。見込, 蛇ノ目釉剥ぎ。外面下半, 露胎。高台, 砂付着	
150	〃	磁器 皿	—	(2.3)	5.6	ロクロ成形。外面, 圏線文。高台, 二重圏線文。外底面, 圏線文。内面, 圏線文	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
151	SD20 SK24	陶器 鉢	27.4	(12.2)	—	ロクロ成形。口縁部、断面方形。刷毛塗り	
152	SD20	〃 片口鉢	16.0	(8.1)	—	ロクロ成形。口縁部、断面方形。注口付着時の指頭圧痕顕著。鉄泥。外面下半、露胎。内面、一部露胎	
153	〃	〃 播鉢	—	(5.5)	13.4	ロクロ成形。外底面、平滑。内面、6条1単位のスリメを密に施す。見込にもスリメ	
154	〃	磁器 瓶	—	(2.6)	3.3	ロクロ成形。疊付、露胎で砂付着。外面、草花文・圏線文。高台、二重圏線文	
155	〃	陶器 〃	—	(3.8)	4.2	ロクロ成形。疊付、釉剥ぎ。内面、露胎。二次被熱、釉薬、ピンホール状・溶解。外面、草花文	
156	〃	磁器 〃	—	(4.1)	4.8	ロクロ成形。疊付、釉剥ぎ。内面、露胎	
157	〃	金属製品 煙管	(3.8)	1.4	—	雁首。火皿にタバコが炭化して残存	重量(4.0)g
158	SD21	磁器 皿	11.8	3.3	4.1	ロクロ成形。見込、蛇ノ目釉剥ぎでアルミナ砂塗布。高台、露胎。内面、流水文。ほぼ完形	
159	〃	〃 〃	—	(2.6)	6.4	ロクロ成形。青磁釉。疊付、釉剥ぎで砂付着。見込、片彫りの陰刻花文有り	
160	〃	陶器 碗	13.0	(6.4)	—	ロクロ成形。外面、ロクロ目、顕著。灰釉	
161	〃	〃 皿	—	(3.2)	—	溝縁皿。ロクロ成形。内面、刷毛塗り	
162	〃	土師質土器 小皿	7.4	1.4	4.6	ロクロ成形。回転糸切り痕跡有り	
163	〃	〃 〃	8.0	1.5	5.7	ロクロ成形。回転糸切り痕跡有り	
164	〃	〃 〃	7.4	1.8	4.6	ロクロ成形。回転糸切り痕跡有り	
165	〃	〃 〃	6.6	1.4	4.0	ロクロ成形。回転糸切り痕跡有り	
166	〃	〃 〃	6.4	1.8	4.3	ロクロ成形。回転糸切り痕跡有り	
167	〃	〃 〃	7.5	1.6	4.8	ロクロ成形。回転糸切り痕跡有り	
168	〃	〃 〃	7.2	1.2	4.5	ロクロ成形。回転糸切り痕跡有り	
169	〃	〃 〃	7.3	1.6	4.6	ロクロ成形。回転糸切り痕跡有り	
170	〃	瓦質土器 火入	9.0	6.6	8.3	手つくね成形。外底面の3カ所に足が付く。雑な作り。ほぼ完形	
171	〃	石製品 砥石	6.9	5.1	0.5	砂岩製。剥離したもの。被熱変色・煤ける。	重量30.8g
172	〃	〃 不明	6.3	4.3	0.9	軽石。直径約1cmの穿孔あり。厚さは使用時の厚さを保持	重量(4.4)g
173	〃	瓦 角瓦	28.6	(16.5)	1.8	右角瓦。均整唐草文。刻印有り、行人偏がみられる。	
174	〃	金属製品 銭貨	2.4	2.0	0.1	寛永通宝	孔一辺0.6cm 量目2.9g
175	SD22	磁器 皿	10.9	(1.5)	—	ロクロ成形。内面、流水文	

遺物観察表14

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
176	P2	須恵器 杯蓋	-	(2.5)	-	回転ナデ調整。口唇部は弱い凹状を呈する。稜は弱い。	
177	P3	陶器 鉢	-	(4.0)	10.4	ロクロ成形。外面、鉄釉。高台、露胎。内面、刷毛塗り	
178	P9	土師質土器 小皿	7.4	1.1	5.0	ロクロ成形。摩耗	
179	P15	陶器 碗	-	(4.8)	5.0	ロクロ成形。灰釉。高台・外底面、露胎。見込、目痕有り	
180	P17	〃 皿	-	(1.7)	6.4	ロクロ成形。灰釉。外面、高台・外底面、露胎。見込、蛇ノ目釉剥ぎ	
181	P19	〃 鉢	17.6	(3.0)	-	ロクロ成形。口縁部、肥厚。刷毛塗り	
182	検出面	〃 碗	10.7	(7.0)	-	丸形。ロクロ成形	
183	〃	〃 〃	9.7	(4.2)	-	丸形。ロクロ成形。釉葉、ピンホール状・ただれる。二次被熱	
184	〃	磁器 〃	-	(2.0)	4.1	ロクロ成形。畳付、釉剥ぎで砂付着。外面、紅色の圏線文有り	
185	〃	〃 皿	11.9	3.7	4.2	ロクロ成形。畳付、釉剥ぎ。見込、蛇ノ目釉剥ぎでアルミナ砂塗布。内面、文様有り	
186	〃	陶器 〃	-	(2.0)	4.2	ロクロ成形。内面、銅緑釉。見込、蛇ノ目釉剥ぎ。外面下半、露胎	
187	表採	磁器 瓶	-	(1.9)	4.2	ロクロ成形。畳付、釉剥ぎ。釉葉、ピンホール状・ただれる。二次被熱	
188	検出面	土師質土器 小皿	7.3	1.6	3.9	ロクロ成形。回転糸切り痕跡有り	
189	〃	陶器 瓶	-	(3.2)	7.0	ロクロ成形。外面、鉄釉。外底面・内面、露胎。外底面、墨書有り	
190	〃	〃 播鉢	31.8	(12.8)	-	ロクロ成形。口縁部の肥厚は弱い。外面、2条の凹線。注口。10条1単位のスリメを施す。口縁部側は隙間有り。同心円状スリメ	備前

I C ☒

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
1	SB1 P5	礎盤	35.0	26.9	12.6	砂岩, 一方の主面中央部が煤ける。	重量 1360g
2	SB3 P8	磁器染付 小碗	7.1	(3.4)	—	口縁部外反。外面は山水文と圏線を描く。	
3	SB6 P1	〃 碗	—	(2.5)	—	外面千鳥か	
4	SB7 P3	石製品 砥石	(6.9)	4.5	2.4	砂岩, 4面使用	重量 (141.3) g
5	〃 P6	陶器 小皿	—	(1.1)	4.5	内面に銅緑釉, 見込は蛇ノ目状に釉剥	肥前内野山窯産
6	SK1	磁器染付 小皿変形形	—	(1.1)	—	口縁部輪花形, 内面は唐草文か	肥前産
7	〃	磁器 蓋	6.4	(1.3)	—	型押成形。外面は陰刻による縦線	肥前産
8	〃	磁器染付 中碗	10.9	(5.4)	—	外面は折れ松葉と圏線, 内面は雲と二重圏線。見込は蛇ノ目釉剥	肥前産
9	〃	陶器 播鉢	—	(3.4)	15.8	内面は使用により磨耗が激しい。	
10	SK4	〃 鉢	—	(3.2)	—	内面は白化粧土刷毛目, 外面は白化粧土で中位以下は露胎	肥前産
11	SK5	磁器染付 小皿	13.2	3.1	4.4	内面丸文か。高台に粗粒砂付着	肥前系初期伊万里
12	SK11	陶器 中碗	11.8	8.4	5.1	畳付以外は全面施釉, 灰釉(黄褐色透明), 貫入有り	肥前産
13	SK12	石製品 砥石	(8.2)	4.9	1.1	頁岩, 1面使用	重量 (90.0) g
14	〃	〃 〃	13.6	6.2	5.9	砂岩, 1面使用	重量 892.3g
15	SK14	〃 〃	(15.2)	5.2	2.8	泥岩, ほとんど使用していない。	重量 (462.5) g
16	SK18	陶器 鉢	—	(2.5)	—	口縁部外面が段状に肥厚, 透明釉	
17	SK21	土師質土器 小皿	6.4	1.3	4.1	精土, 内外面横ナデ調整, 糸切り, 内面にタール状の付着物有り。灯明皿として使用	
18	SK24	陶器 甕	—	(6.0)	—	外面鉄釉, 内面には格子目状の当て道具圧痕が残る。	
19	〃	〃 中碗	14.4	(3.8)	—	内外面灰釉	
20	SK27	磁器染付 皿または鉢	—	(4.9)	—	内面草花文, 見込は蛇ノ目状に釉剥	肥前産
21	SK42	〃 小皿	—	(1.1)	7.0	体部内外, 高台内外にも圏線	肥前産
22	SK36	青磁染付 碗朝顔形	—	(4.4)	4.6	外面青磁釉, 見込はコンニャク印判による五弁花, 二重圏線, 蓋付碗	肥前産
23	〃	陶器 甕	32.3	(7.8)	—	鉄釉, 強い横ナデ調整	
24	SK39	石製品 砥石	(9.9)	5.7	3.1	花崗岩, 4面使用	重量 (303.0) g
25	SK42	〃 〃	(10.5)	7.2	5.5	花崗岩, 3面使用	重量 (513.4) g

遺物観察表 16

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
26	SK40	磁器 小碗	7.4	(3.0)	—	内外面透明釉	
27	SK41	磁器染付 中碗	10.8	(4.7)	—	口縁部内面と見込に圈線	瀬戸・美濃
28	〃	〃 〃	8.4	4.9	3.6	外面は笹文, 見込はコンニャク印判による五弁花	
29	〃	〃 広東碗	11.3	6.3	6.4	外面ボタン・岩文, 見込の文様は不明	肥前産または肥前系
30	SK43	〃 小皿	—	(2.6)	4.8	見込は蛇ノ目状に釉剥	肥前波佐見産
31	〃	〃 〃	—	(2.5)	—	外面に唐草文, 圈線, 内面は墨弾きによる文様	肥前産
32	SK45	〃 碗または猪口	—	(4.0)	—	コンニャク印判による松文	肥前産
33	〃	〃 瓶	—	(2.2)	5.6	内面無釉, 外面は畳付を除き施釉	
34	〃	石製品 石臼	(11.9)	(13.3)	6.1	全体の5分の1程度の破片, 砂岩, 使用による磨耗が激しく溝がほとんど消えている。	重量(1643.3) g
35	SK46	磁器 碗	—	(2.3)	—	透明釉	
36	〃	〃 〃	—	(1.9)	—	内外面白化粧土, 灰釉	
37	〃	陶器 灯明皿	9.5	(1.3)	—	薄い仕上げ, 内外横ナデ調整	備前
38	SK47	磁器染付 中碗	10.6	(3.2)	—	外面に松文, 内面に二重圈線, 呉須は暗緑灰色に発色	肥前産
39	SK48	〃 〃	11.0	(3.8)	—	外面雨降り文	〃
40	SK53	陶器 小皿	11.5	3.3	4.2	内面銅緑釉, 外面灰釉, 見込は蛇ノ目に釉剥, 高台周辺無釉	肥前内野山窯
41	〃	〃 〃	11.7	3.5	4.5	内面銅緑釉, 外面灰釉, 見込は蛇ノ目に釉剥, 高台周辺無釉	〃
42	〃	〃 〃	—	(1.8)	4.7	内面銅緑釉, 外面灰釉, 見込は蛇ノ目に釉剥, 高台周辺無釉	〃
43	〃	〃 中碗	13.1	8.9	5.2	内外面灰釉, 体部外面に3条の沈線	肥前産 17世紀後半 ～18世紀前半
44	〃	陶胎染付 中碗	11.6	(5.5)	—	外面の主文様は山水か。口縁部外面二重圈線, 呉須は暗緑灰色に発色	肥前産 17世紀末～ 18世紀前半
45	〃	陶器 中碗	13.0	(4.7)	—	灰釉(黄褐色透明)	肥前産 17世紀末～ 18世紀前半
46	〃	〃 〃	—	(3.0)	—	灰釉	
47	〃	〃 鉢	—	(1.8)	—	口縁部が「く」字に屈曲, 灰釉	肥前産
48	〃	〃 中碗	—	(2.4)	4.6	灰釉(黄褐色透明), 高台内も施釉	肥前産 17世紀後半 ～18世紀前半
49	〃	〃 〃	—	(3.0)	5.6	灰釉(黄褐色透明), 高台内も施釉	肥前産 17世紀後半 ～18世紀前半
50	〃	陶胎染付 〃	11.3	(6.3)	—	外面は山水と圈線, 呉須は灰青色に発色	肥前産 17世紀後半 ～18世紀前半

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
51	SK53	陶胎染付 中碗	-	(4.3)	5.0	外面は唐草文, 圏線, 高台には二重圏線, 内外に白化粧後に透明釉	肥前産17世紀末~ 18世紀前半
52	〃	〃 〃	-	(4.4)	5.0	外面の正文様は山水か。畳付のみ無釉, 白化粧土	肥前産
53	〃	〃 〃	10.6	(5.6)	-	口縁部外面二重圏線, 灰釉	肥前産17世紀末~ 18世紀前半
54	〃	〃 〃	12.2	(4.1)	-	白化粧土, 灰釉, 呉須は暗灰緑色	肥前産
55	〃	〃 〃	11.1	(5.1)	-	外面は山水か。内外面白化粧, 透明釉	肥前産17世紀末~ 18世紀前半
56	〃	陶器 碗または鉢	9.4	(5.3)	-	高台以外は全面灰釉	京都産または京都系
57	〃	磁器染付 中碗	9.6	5.1	3.8	草花文, 高台外面は二重圏線	肥前産17世紀末~ 18世紀前半
58	〃	〃 〃	10.9	5.1	4.4	外面コンニャク判による菊花文, 圏線	肥前産
59	〃	〃 小杯	-	(2.2)	3.6	外面は草花文, 二重圏線, 高台内「大明年製」	肥前産17世紀末~ 18世紀前半
60	〃	〃 小碗	7.8	(3.1)	-	外面唐草文, 圏線	肥前産
61	〃	〃 〃	7.8	4.2	2.9	外面雨降り文, 二重圏線	肥前産17世紀末~ 18世紀前半
62	〃	色絵 中碗	-	(5.5)	4.0	外面は緑・黒・青色の上絵付による草花文	肥前産
63	〃	磁器染付 鉢	14.5	(5.6)	-	内面は草花文, 外面は折れ松葉, 見込は蛇ノ目状釉剥	肥前産
64	〃	〃 中碗	12.4	7.4	5.6	外面に山水, 東屋, 松, 海, 梅, 二重圏線, 呉須は暗緑灰色に発色	肥前産
65	〃	〃 〃	9.6	4.6	4.0	外面は草花文, 雪輪	肥前産
66	〃	磁器色絵染付 皿	-	(2.5)	-	呉須と赤の上絵付による梅文, 二重圏線, 透明釉には貫入が入る。	
67	〃	磁器染付 小皿	14.0	3.6	9.2	内面の文様は不明。高台内外に圏線, 透明釉は焼成不良で白濁	肥前産
68	〃	〃 鉢	14.0	7.0	6.8	内面は草花文と圏線, 見込は蛇ノ目状に釉剥, 砂が付着	肥前産
69	〃	〃 中皿	22.0	3.0	12.8	外面は連続唐草文と圏線, 内面は山水, 草花文。高台内の二重角 枠内に渦「福」, 高台内にはり支え痕	肥前産17世紀末~ 18世紀
70	〃	〃 鉢	15.2	6.3	7.4	内面は扇, 草花, 二重圏線, 見込は蛇ノ目状釉剥	肥前産18世紀
71	〃	陶器 香炉または火入	12.4	7.6	9.0	削り底, ロクロ成形後, 口縁部を変形させる。内外面下位無釉, 灰釉	瀬戸・美濃
72	〃	白磁 瓶	6.4	(5.7)	-	口縁部肥厚	
73	〃	陶器 片口または鉢	-	(5.1)	-	外面は白化粧土刷毛目, 内面は灰釉, 口唇無釉	肥前産
74	〃	〃 〃	21.2	(4.7)	-	外面は白化粧土刷毛目, 内面は灰釉, 口唇無釉	肥前産
75	〃	〃 〃	-	(8.5)	10.6	内外面中位まで白化粧土刷毛目, 外面下位は鉄釉塗布, 高台外 面まで及ぶ。焼成不良	肥前産

遺物観察表 18

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
76	SK53	陶器 片口鉢	23.8	(6.4)	-	外面は白化粧土刷毛目, 内面は灰釉, 口唇無釉	肥前産
77	〃	瓦質土器 焙烙	-	5.7	-	把手部に径1cmの穿孔, 長さ3.2cm。内外面煤ける。全体にナデ調整であるが把手は面取り	
78	〃	焼締め 播鉢	-	(7.9)	-	櫛目施文の後横ナデを施す。口唇に1条, 口縁部に2条の沈線を施す。外面横方向の削り	堺産
79	〃	〃 〃	31.6	(5.3)	-	内面は横ナデの後櫛目を施す。口縁部外面2条の沈線	備前
80	〃	〃 〃	30.5	(6.2)	-	口唇は内傾し僅かに凹状, 外面2条の凹線。内面は横ナデの後櫛目を入れる。	備前
81	〃	〃 〃	34.4	(8.1)	-	口縁部外面2条, 内面1条の沈線有り, 櫛目施文の後に横ナデ調整, 体部外面削り	堺産
82	〃	〃 〃	-	(5.2)	-	口縁片口をなし2条の凹線を施す。内面は横ナデの後櫛目を入れる。	備前
83	〃	陶器 壺	9.6	(7.4)	-	口縁部は短く外反し端部は尖る。肩部に櫛描文有り, 内外面横ナデ調整	備前
84	〃	瓦質土器 甕	-	(3.7)	-	精土, 内面に指圧痕	
85	〃	陶器 甕	-	(6.8)	-	外面に刻み目を施した断面三角突帯を施す。内面に格子目の圧痕有り。外面は鉄釉	
86	〃	須恵器 高杯	-	(4.9)	-	精土, 内外面横ナデ調整	
87	〃	石製品 砥石	(8.2)	5.9	5.0	砂岩, 4面を使用	重量(467.0)g
88	SK55	磁器染付 瓶	-	(15.3)	-	網目文を主文様に配し圏線も施す。	肥前産
89	SK54	陶器 香炉または火入	9.4	(3.5)	-	外面鉄釉, 内面無釉	
90	〃	磁器 紅皿	5.0	1.4	1.8	押型成形, 型による菊弁, 内面透明釉を施釉, 外面はほとんど無釉	肥前産
91	〃	白磁または染付 小杯	7.8	3.1	2.8	焼成不良で釉は白濁	肥前産
92	SK56	磁器染付 皿	-	(2.0)	-	外面連続唐草文, 内面唐草文, 口縁部輪花形	肥前産
93	SK60	陶器 皿	15.7	(2.0)	-	焼成不良で釉は白濁	
94	SK61	〃 小皿	-	(1.7)	-	内面銅緑釉, 外面灰釉	肥前内野山窯
95	SK62	磁器または白磁 不明	-	(1.8)	-	口縁部細片	
96	〃	陶器 灯明皿	8.6	1.0	4.7	内外横ナデ調整, 薄手	備前
97	〃	〃 中碗	-	(1.9)	4.7	高台無釉, 京焼風陶器	肥前産
98	SK64	白磁または染付 中碗	-	(5.2)	-	口鏝	肥前産
99	SK71	土師質土器 小皿	-	(0.8)	4.6	精土, ロクロ成形, 糸切り	
100	SK70	石製品 砥石	13.0	10.1	4.1	砂岩, 4面使用	重量 706.0g

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
107	SD1	陶胎染付 中碗	-	(2.4)	5.4	外面山水、二重圏線、内外面白化粧土後に透明釉	肥前産
108	〃	磁器染付 〃	-	(1.9)	6.7	広東形	肥前産または肥前系
109	〃	〃 仏飯具	8.3	(4.1)	-	外面に唐草文、圏線	肥前産
110	〃	陶器 捏鉢または片口	-	(3.1)	-	外面にロクロ目、灰白色の釉	
111	〃	〃 瓶	-	(2.7)	4.6	外面は高台まで灰釉を施釉、内面無釉	
112	〃	土師質土器 小皿	7.8	1.0	-	精土、ロクロ成形、糸切り	
113	〃	陶器 中碗	-	(3.7)	(5.6)	灰釉(浅黄色を帯びる透明の釉)、高台内施釉	肥前産
114	〃	〃 捏鉢または片口	-	(3.6)	10.0	鉄釉を施釉、高台無釉	肥前産
115	〃	〃 甕	-	(11.3)	-	内外面鉄釉、外面に沈線が多く見られる。内面は格子目状の当て道具圧痕	
117	〃	〃 〃	-	(11.1)	-	外面格子目状の叩き目、外面鉄釉、内面指ナデ調整	
118	SD3	〃 中碗	11.2	(5.5)	-	外面に緩やかなロクロ目、灰釉	肥前か尾戸か
119	〃	陶胎染付 〃	-	(4.8)	5.8	外面山水、白化粧土	肥前産
120	SD5	陶器 小碗	9.0	(5.0)	-	外面鉄絵、高台以外全面灰釉、貫入有り	京信楽系
121	〃	磁器染付 中碗	9.8	(3.6)	-	外面網目文、呉須は暗灰色	肥前産
122	SD4	土師質土器 小皿	7.6	1.4	3.6	精土、ロクロ成形、糸切り	
123	SD5	磁器染付 小杯	6.2	3.5	2.3	外面草花文、高台無釉	肥前産
124	〃	陶器 瓶	-	(3.5)	8.4	外面白化粧土	
125	〃	〃 片口または鉢	-	(6.6)	9.0	外面中位白化粧土刷毛目、下位は鉄釉、内面白化粧土刷毛目	
126	〃	石製品 砥石	7.9	5.2	1.5	粘板岩、3面使用	重量94.8g
127	〃	焼石	(10.1)	11.6	4.9	砂岩、比熱赤変、煤け	重量(816.4) g
128	〃	石製品 砥石	14.7	8.8	5.0	砂岩、3面使用	重量928.0g
129	SD7 上層	土師質土器 小皿	7.5	1.3	3.8	精土、ロクロ成形、糸切り、口縁部にタール状の付着物、灯明皿として使用	
130	〃	〃 〃	7.4	1.3	4.2	精土、ロクロ成形、内外横ナデ調整、糸切り、口唇部面取り	
131	〃	〃 〃	7.7	1.1	4.7	精土、ロクロ成形、内外横ナデ調整、糸切り	
132	〃	〃 〃	7.3	1.1	4.6	精土、ロクロ成形、内外横ナデ調整、糸切り。糸切り後も丁寧なナデ調整を施す。	

遺物観察表 20

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
133	SD7 上層	陶器 中碗	-	(5.6)	4.4	黄濁色の透明釉, 貫入有り。高台内施釉	肥前産
134	〃	〃 〃	-	(3.6)	5.1	黄濁色の透明釉, 貫入有り。高台内施釉	肥前産
135	〃	〃 〃	-	(2.5)	4.6	黄濁色の透明釉, 貫入有り。高台内施釉	肥前産
136	〃	陶胎染付 〃	-	(4.3)	4.6	白化粧土の焼成不良	肥前産
137	〃	〃 〃	-	(3.2)	4.8	外面に3条の圏線	肥前産
138	〃	磁器染付 蓋物	-	(3.1)	4.3	外面に草花文	肥前産
139	〃	陶胎染付 中碗	11.2	(5.3)	-	外面山水文と圏線	肥前産
140	〃	磁器染付 蓋物	10.2	5.6	5.0	外面草花文, 圏線, 口縁無釉	
141	〃	青磁染付 小碗	-	(2.3)	4.2	外面は青磁釉, 見込にコンニャク印判による五弁花	
142	〃	陶器 瓶または壺	-	(5.6)	8.2	外面は畳付以外鉄釉, 内面に鉄釉がたれる。	
143	〃	青磁 香炉	12.4	(6.2)	-	内面に粗砂付着	
144	〃	陶器 中皿	-	(3.0)	10.4	見込に蛇ノ目状に白化粧土塗布, 灰釉の上に白化粧土打込み, 畳付内底は無釉	
145	〃	磁器染付 〃	-	(1.9)	14.0	内面草花文, 高台内に2条の圏線	肥前産
146	〃	焼締め 播鉢	32.4	(9.3)	-	櫛目の後に横ナデ, 口縁部外面に2条, 内面に1条の沈線, 8条単 位の播目	堺産
147	〃	〃 〃	33.4	(10.0)	-	櫛目の後に横ナデ, 口縁部外面に2条, 内面に2条の沈線	堺産
148	〃	〃 〃	34.2	(6.4)	-	櫛目の後に横ナデ, 口縁部外面に2条, 内面に1条の沈線	堺産
149	〃	〃 〃	-	(6.1)	-	櫛目の後に横ナデ, 口縁部外面に2条, 内面に1条の沈線	堺産
150	〃	陶器 焜炉	21.8	(6.8)	-	口縁部内面に断面三角の大きな突帯を貼付, 内外面横ナデ調整	
151	〃	土師質土器 〃	-	(14.7)	23.5	精土, 丸形, 高さ4.3cmの脚を有し, 径4mmの円孔が穿たれ, 体部 に窓枠状の大きな孔が見られる。	
152	〃	陶器 火消壺	13.3	(7.7)	-	厚さ2cmの厚い器壁, 内面は指頭圧痕顕著, 外面ナデ調整	
153	〃	焼石	(14.9)	13.5	5.8	砂岩, 一方の主面と一方の長側縁の磨耗が顕著	重量(2265)g
154	SD7 中層	土師質土器 小皿	8.0	1.5	4.8	精土, ロクロ成形, 糸切り, 口縁部にタール状の付着物, 灯明皿	
155	〃	陶器 香炉または火入	9.4	(6.0)	-	口縁部が内側に屈曲, 外面灰釉, 内面無釉	
156	〃	磁器染付 小碗筒形	9.0	(4.2)	-	外面は菊文と格子, 口縁部内面は四方櫛	
157	〃	〃 中鉢	13.7	(4.3)	-	内面草花文を描く。	肥前産

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
158	SD7 下層	土師質土器 小皿	7.9	1.2	5.3	精土, ロクロ成形, 糸切り, タール状の付着物, 灯明皿	
159	〃	〃 〃	7.6	1.2	5.0	精土, ロクロ成形, 糸切り, 口縁部にタール状の付着物, 灯明皿	
160	〃	〃 〃	7.8	1.1	5.0	精土, ロクロ成形, 糸切り, 灯明皿	
161	〃	〃 〃	8.0	1.1	5.0	精土, ロクロ成形, 糸切り, 口縁部外面にタール状の付着物有り。灯明皿	
162	〃	〃 〃	8.8	1.1	6.2	精土, ロクロ成形, 糸切り後丁寧なナデ調整, 灯明皿	
163	〃	〃 〃	8.2	0.8	5.2	精土, ロクロ成形, 口縁部をつまみ上げるように横ナデ調整, 糸切り	
164	〃	〃 〃	7.6	1.0	5.0	精土, ロクロ成形, 糸切り後丁寧なナデ調整, 口縁部にタール状の付着物, 灯明皿	
165	〃	〃 〃	-	(1.1)	5.4	精土, 横ナデ調整, 底部の円盤が明瞭にみえる。	
166	〃	〃 〃	7.4	0.9	4.1	精土, ロクロ成形, 糸切り後丁寧なナデ調整, 口縁部にタール状の付着物, 灯明皿	
167	〃	〃 〃	7.8	1.1	5.2	精土, ロクロ成形, 口縁部をつまみ上げるように横ナデ調整, 糸切り, 口縁部の一部にタール状の付着物	
168	〃	〃 〃	7.8	1.2	4.6	精土, ロクロ成形, 底部の円盤が明瞭, 口縁部外面煤ける。	
169	〃	〃 〃	7.8	1.1	5.0	精土, 糸切り後, 立上がり外面を丁寧にナデ, 丸味を出す。口縁部は激しく煤ける。	
170	〃	〃 〃	7.4	1.1	4.0	精土, 糸切り後, 立上がり外面を丁寧にナデ, 丸味を出す。口縁部は煤ける。	
171	〃	磁器染付 小皿	13.8	2.7	8.0	見込を蛇ノ目状に釉剥, コンニャク印判による五弁花を施す。	肥前産
172	〃	〃 小碗	8.0	3.7	2.7	外面コンニャク印判による草花文	肥前産
173	〃	陶器 火入または香炉	-	(3.1)	6.0	外面はヘラ彫刻による立て筋, 外面鉄釉, 内面無釉	
174	SD7	土師質土器 小皿	7.8	1.3	5.0	精土, ロクロ成形, 糸切り後丁寧なナデ調整, 口縁部にタール状の付着物, 灯明皿	
175	〃	陶器 灯明皿	10.6	1.6	4.0	内外面ナデ調整, 薄い作り	備前
176	〃	磁器染付 中碗	-	(1.9)	3.9	高台外面圏線, 透明釉は焼成不良で白濁	肥前産
177	〃	陶器 碗	-	(1.2)	5.0	京焼風陶器碗, 灰釉	肥前または京都産
178	〃	〃 中碗	10.5	(3.1)	-	灰釉(黄褐色透明)	肥前産
179	〃	〃 〃	10.5	(3.8)	-	灰釉(黄褐色透明)	
180	〃	磁器染付 小碗	10.1	(3.6)	-	外面に雨降り文を施す。酸化焼成気味で胎土はにぶい黄橙色に発色	肥前産
181	〃	磁器 〃	-	(2.7)	3.6	胴部が「く」字に強く屈曲する。内底に目痕がある。外面灰釉, 高台無釉	京都系
182	〃	陶器 中碗	-	(3.6)	4.6	灰釉(黄褐色透明), 全面施釉	

遺物観察表 22

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
183	SD7	陶器 中碗	12.8	(6.2)	—	灰釉(黄褐色透明)	肥前産
184	〃	〃 小碗半球形	9.2	5.3	3.1	内外面灰釉, 外面には鉄釉を施す。	京信楽系
185	〃	陶胎染付 中碗	10.6	(3.8)	—	白化粧土	肥前産
186	〃	陶器 〃	16.2	(6.0)	—	白化粧土打刷毛	肥前産
187	〃	磁器 〃	—	(5.2)	—	白磁の可能性有り	肥前産
188	〃	陶器 小皿	12.2	(2.6)	—	外面灰釉, 内面銅緑釉	肥前内野山窯
189	〃	磁器染付 小碗	—	(2.0)	3.2	外面に草花文と圏線, 疊付けに砂目付着	
190	〃	〃 瓶	—	(4.2)	—	外面に二重圏線, 内面ロクロ目	肥前産
191	〃	白磁 〃	5.0	(3.4)	—	口縁部肥厚する。	肥前産
192	〃	焼締め 播鉢	—	(2.5)	16.2	内面は使用により磨耗が著しい。	
193	〃	陶器 片口または鉢	—	(5.3)	—	外面は白化粧土刷毛目, 内面は白化粧土刷毛塗り, 口縁部上面は無釉	肥前産
194	〃	石製品 砥石	(7.5)	7.8	3.0	砂岩, 4面使用	重量(312.0) g
195	〃	〃 太形蛤刃石斧	(11.5)	8.2	4.4	御荷鉾緑色岩類, 全面研磨, 約半分が欠損	重量(728.0) g
197	SD8	焼締め 播鉢	—	(4.3)	—	外面に横方向のナデ調整	
198	SD9	磁器 小皿	6.6	1.8	3.6	透明釉を全面施釉	
199	〃	焼締め 播鉢	—	(3.0)	—	櫛目施文の後, 横ナデ調整, 口縁部外面に2条の沈線	堺産
200	〃	磁器染付 中碗	12.0	(5.2)	—	外面は山水文	肥前産
201	SD10	陶器 小皿	13.0	(2.3)	—	内面銅緑釉, 外面灰釉	肥前内野山窯
202	〃	陶胎染付 中碗	—	(5.0)	—	口縁部外面二重圏線文, 体部外面は山水か	肥前産
203	SD11	〃 〃	—	(2.0)	—	白化粧土の上に透明釉	
204	〃	〃 〃	—	(5.5)	5.8	白化粧土の上に透明釉, 外面に草花文	肥前産
205	〃	陶器 小皿	11.8	3.2	4.4	内面銅緑釉, 外面灰釉, 見込に蛇ノ目状の釉剥, 砂目有り	肥前内野山窯
206	〃	〃 中碗	—	(6.3)	4.5	浅黄色透明の灰釉	肥前産
207	SD10	焼締め 播鉢	—	(5.7)	15.8	淡黄色の胎土	
208	P3	磁器染付 鉢	7.8	(2.6)	—	内面に草花文, 多重圏線, 透明釉には貫入が入る。	肥前系

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
209	P5	磁器染付 皿	-	(1.2)	5.8	畳付以外は全面施釉	
210	P7	陶器 小碗	9.8	(3.3)	-	黄色を帯びた透明釉	京都系
211	P4	須恵器	-	(0.9)	-	口縁部細片, 精土, 磨耗が激しい。	
212	P6	陶胎染付 碗	-	(2.5)	-	細片で, 灰釉が白濁	
213	P8	石製品 砥石	10.3	8.4	4.5	砂岩, 3面使用	重量574.0g
214	P2	〃 〃	22.7	10.9	6.2	砂岩, 2面使用	重量2111.9g
215	P1	〃 〃	13.2	5.6	3.8	砂岩, 2面使用, 激しく被熱赤変	重量312.0g
216	SX1	土師質土器 小皿	5.6	1.3	3.1	精土, 内外面横ナデ調整, 糸切り, 口縁部の一部にタール状の付着物有り。灯明皿として使用	
217	〃	〃 〃	5.6	1.4	4.0	精土, 内外面横ナデ調整, 糸切り	
218	〃	〃 〃	6.1	1.3	4.0	精土, 内外面横ナデ調整, 糸切り, 口縁部の一部にタール状の付着物有り。灯明皿として使用	
219	〃	〃 〃	5.7	1.3	3.2	精土, 内外面横ナデ調整, 糸切り, 口縁部の一部にタール状の付着物有り。灯明皿として使用	
220	〃	〃 〃	5.8	1.4	4.4	精土, 内外面横ナデ調整, 糸切り, 口縁部の一部にタール状の付着物有り。灯明皿として使用	
221	〃	陶器 中碗	13.2	(4.9)	-	外面は鉄錆による山水文	肥前産
222	〃	磁器染付 小碗	8.0	(2.3)	-	外面に略化した不明の文様	
223	〃	陶器 中碗	-	(3.1)	4.3	灰釉(黄褐色透明)	肥前産
224	〃	磁器染付 中碗	-	(3.0)	-	口縁部は端反り	
225	〃	〃 〃	-	(4.7)	4.3	見込は蛇ノ目状に釉剥, 外面は草花文と圏線, 高台内外にも圏線を施す。	
226	〃	陶器 小皿	12.0	3.1	4.6	見込は蛇ノ目状に釉剥, 外面灰釉, 内面銅緑釉	肥前内野山窯
227	〃	〃 〃	-	(1.6)	4.6	見込は蛇ノ目状に釉剥, 外面灰釉, 内面銅緑釉	肥前内野山窯
228	〃	磁器色絵染付 中皿	-	(4.2)	8.6	赤, 青緑, 黄緑, 黒の上絵付けによる花唐草文, 花の輪郭は赤, 唐草の輪郭は黒で描く。	肥前産
229	包含層	白磁または磁器染付 猪口	7.8	(2.6)	-	口縁部外反	肥前産
230	〃	磁器染付 〃	-	(3.0)	-	外面及び口縁内面は四方襷	
231	〃	陶器 灯明皿	8.3	1.3	2.2	横ナデ調整	備前
232	〃	白磁 碗	-	(2.3)	-	口縁部細片, 玉縁状を呈する。	太宰府編Ⅳ期
233	〃	磁器染付 中碗	-	(4.9)	-	外面に山水文, 口縁部内面・見込に圏線	肥前産または肥前系

遺物観察表24

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
234	包含層	陶器 小碗	9.7	5.2	3.4	内外面灰釉(灰白色の半透明の釉)	京信楽系
235	〃	磁器染付 小皿	-	(1.3)	5.8	内面に山水文	肥前産または肥前系
236	〃	陶器 鉢	-	(4.1)	9.4	内面は白化粧土刷毛塗り, 外面は鉄錆	
237	〃	磁器染付 猪口	-	(5.6)	7.0	外面に草花文を描く。高台内に圏線, 呉須が滲む。	肥前産
238	〃	磁器 瓶	-	(2.9)	4.8	内面無釉	
239	〃	青磁 香炉	-	(2.5)	7.2	蛇ノ目状高台, 疊付け釉剥, 内面無釉	
240	〃	陶器 小碗	-	(3.6)	2.8	内外面灰釉(灰白色の半透明の釉)	京信楽系
241	〃	磁器染付 鉢	13.4	(3.6)	-	内面に梅文を描く。	肥前産
242	〃	〃 小皿	12.4	3.3	4.2	見込を蛇ノ目状に釉剥, 釉剥部にアルミナを塗布	肥前波佐見産
243	〃	陶器 香炉または火入	11.2	(5.5)	-	外面灰釉, 内面無釉	肥前産または肥前系
244	〃	〃 甕	-	(2.4)	12.0	内外面ナデ調整	丹波焼
245	〃	〃 鍋	19.2	(4.0)	-	全面に鉄釉	
246	〃	〃 甕	18.4	(4.3)	-	外面鉄釉, 肩部は黒褐色釉を流し掛け	丹波焼
247	〃	〃 〃	30.8	(4.6)	-	外面鉄釉, 内面灰釉, 外面肩部に黒褐色の釉を流し掛け	丹波焼

瓦観察表

番号	遺構 層位	種類	法量					特徴	備考
			瓦長	瓦幅	瓦当高 瓦当径	文様区高 文様区径	平瓦厚		
101	SK80	軒平瓦	-	-	-	-	1.7		
102	〃	軒丸瓦	-	-	-	-	-	主文は三巴	
103	〃	軒平瓦	25.5	-	-	-	1.6	主文は三巴, キラ粉を認める。	尻につり穴を認める。
104	〃	〃	-	-	-	-	1.8	主文は三巴	
105	〃	〃	-	-	-	-	1.6	主文は三巴	104と同範品と考えられる。
106	〃	左棧軒平瓦	19.5	29.4	6.0	3.5	1.6	主文は三花文, キラ粉を認める。	凸面に赤土付着
116	SD1	軒平瓦	-	-	-	-	1.7	前縁部に圧痕有り	
196	SD7	〃	-	-	-	-	1.8	瓦頭に刻印有り	

I D ☒

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
1	SK1	金属製品 錢貨	2.4	2.0	0.2	寛永通宝	量目 2.4g
2	SK5	磁器 碗	-	(4.0)	4.4	染付で、高台畳付は露胎。外面には草文、内面見込に草花文を施す。	
3	SK11	〃 〃	6.2	(3.3)	-	内外面に透明釉を施し、貫入が入る。高台近くまで施釉	
4	SK13	〃 〃	7.7	6.6	3.1	上絵付の小碗で、口縁部に呉須、外面に色絵	
5	〃	〃 〃	8.4	3.7	3.6	上絵付の小碗で、蛇ノ目高台。高台を除き透明釉を施す。「寿」の陰刻と上絵がみられ、銘有り	
6	〃	〃 〃	10.0	4.9	4.1	染付の丸碗で、高台畳付を除き、透明釉を施し、貫入が入る。外面に草文とコンニャク印判の菊花文、高台外面に圏線文	
7	〃	〃 〃	10.1	6.2	3.8	染付の丸碗で、高台畳付を除き、全面に透明釉。外面には多重圏線文間に渦文、内面に圏線文と見込に文様	
8	〃	〃 〃	11.0	5.9	4.1	染付の丸碗で、口縁端部は口鏝で、削出し高台。高台外面に圏線文、体部外面には丸に花文・浮草文、内面見込は花卉文を施す。	
9	〃	〃 〃	12.1	7.1	6.0	肥前系磁器の染付広東碗で、高台畳付は釉剥ぎ。外面に虫籠文、内面に圏線文を施し、見込に文様有り	
10	〃	〃 〃	12.3	6.6	6.3	肥前系磁器の染付広東碗で、高台畳付には砂が付着。外面に草文と虫文、内面に圏線文を施し、見込に水文有り	
11	〃	〃 〃	12.4	6.5	5.6	染付広東碗で、底部内面は蛇ノ目釉剥ぎ、一部に砂が付着。高台畳付は露胎。外面に松と圏線文、内面に圏線文、見込にコンニャク印判五弁花	1780～1810年代
12	〃	〃 〃	10.8	6.1	4.2	染付端反碗で、底部内面には3箇所目痕。外面に帯線と圏線文間に牡丹と唐草、内面に多重圏線文を施す。見込に鳥文、高台見込に「茶」の銘有り	能茶山産 1820年以降
13	〃	〃 杯	6.7	3.1	2.8	染付で、全体に薄い透明釉がかかる。内面は口縁部に縄目、見込に山水	
14	〃	〃 蓋	9.4	2.7	-	染付で、つまみ端部は露胎。つまみに朝顔文、見込に花文	つまみ径 5.4cm
15	〃	〃 〃	10.2	2.7	-	染付で、外面3箇所に丸花文を配し、その間に草花文とみられる文様を施す。見込にカタバミ、つまみ端部には褐釉	つまみ径 4.2cm
16	〃	〃 〃	11.7	3.1	-	染付で、つまみ端部は釉剥ぎを行う。外面に丸文、内面に圏線文を施し、見込中央に丸文	つまみ径 6.0cm
17	〃	〃 皿	9.8	2.2	5.3	染付で、型押し成形。高台畳付を除き、透明釉を施し、口縁端部には口鏝。内面には山水文	
18	〃	〃 水滴	-	(6.1)	-	型押し成形で、菊と動物を配する。	
19	〃	〃 火入	-	(6.1)	9.3	染付で、削出し高台。外面には2条の圏線と山水文。底部外面見込には「茶」の銘有り	能茶山産 1820年代以降
20	〃	白磁 皿	12.8	4.05	7.5	菊皿で、型押し成形。底部は蛇ノ目凹形高台を呈し、高台内を除き、施釉	
21	〃	〃 鉢	15.9	6.7	9.4	端反の鉢で、底部は蛇ノ目凹形高台を呈し、砂が付着。焼き継ぎ痕有り	
22	〃	〃 瓶	6.2	(24.7)	-	外面に灰白釉を施し、一部に気孔による釉剥けがみられる。内面は露胎	
23	〃	陶器 碗	8.7	5.4	3.0	端反小碗で、高台を除き施釉。口縁部内外面には銅緑釉	信楽系
24	〃	〃 〃	12.8	7.5	5.2	一部を欠損。灰釉を施し、底部内面に目痕が5足	
25	〃	〃 皿	12.2	4.5	5.1	削り出し高台で、内外面に鉄釉を施し、高台近くまで施釉。見込は蛇ノ目釉剥ぎ	

遺物観察表 26

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
26	SK13	陶器 皿	13.2	4.7	5.6	削り出し高台で、内外面に鉄釉を施す。内面見込は蛇ノ目釉剥ぎ	
27	〃	〃 瓶掛	17.9	21.4	19.3	削り出し高台で、獸面耳を配し、頭部外面に櫛状文、胴部外面に菱形文と蓮弁文、底部外面に雷文。外面と内面上半部に銅緑釉、内面下半部に鉄釉	胴径 25.4 cm
28	〃	〃 土瓶	8.2	(6.8)	—	如意形を呈する把手取り付け部がみられ、外面には褐釉を施す。口縁端部は釉剥ぎを行う。	胴径 (16.5) cm
29	〃	〃 蓋	4.4	3.4	—	土瓶の蓋とみられ、つまみと外面には化粧土がみられ、鉄釉で文様を描く。	つまみ径 1.4 cm 笠径 6.2 cm
30	〃	〃 〃	6.0	3.9	—	ロクロ成形で、つまみは宝珠形を呈する。外面には鉄釉を施し、内面は露胎	つまみ径 1.5 cm 笠径 8.2 cm
31	〃	〃 〃	—	2.9	—	灰釉を施し、外面の一部には煤が付着する。	つまみ径 3.0 cm 笠径 11.5 cm
32	〃	〃 段重	8.5	4.4	5.5	削り出し高台で、内外面に黄緑色釉を施す。口縁端部と高台内は釉剥ぎを行う。	
33	〃	〃 灯明台	6.6	5.3	4.4	底部外面には回転糸切り痕がみられ、底部を除き褐釉を施す。	
34	〃	〃 鉢	22.9	12.2	11.3	片口鉢とみられ、削り出し高台である。口縁端部と底部外面を除き、黒鉄釉を施す。	胴径 22.8 cm
35	〃	〃 擂鉢	21.6	9.0	9.2	ロクロ輪積み成形で、体部内面には10条単位の条痕、底部内面には8条以上の条痕がみられ、底部外面には砂目	
36	〃	〃 〃	21.0	6.1	8.5	ロクロ輪積み成形で、体部内面には8条単位の条痕、底部内面には7条以上の条痕がみられる。	
37	〃	〃 〃	31.2	11.5	13.7	体部内面と底部内面には10条単位の条痕がみられ、底部外面には砂目	
38	〃	〃 〃	31.8	12.1	13.7	体部内面には10条単位の条痕、底部内面には8条の条痕がみられ、底部外面には砂目	
39	〃	〃 〃	—	(5.0)	—	口辺部破片で、内面には8条単位の条痕がみられる。	
40	〃	〃 甕	23.4	(16.0)	—	ロクロ輪積み成形で、内外面に鉄釉を施す。口辺部内面と外面には黒鉄釉掛け流しがみられる。	胴径 25.9 cm
41	〃	〃 〃	34.0	(19.4)	—	全体に鉄釉を施し、内外面とも釉垂れがみられる。	胴径 38.0 cm
42	〃	〃 〃	28.5	(20.4)	—	ロクロ輪積み成形で、外面には鉄釉を刷毛塗りし、薬灰釉の掛け流しがみられる。内面は薬灰釉を施す。	胴径 34.5 cm
43	〃	〃 〃	31.4	(21.3)	—	ロクロ成形で、外面には鉄釉を施し、黒鉄釉の掛け流しがみられる。内面には黒鉄釉を施す。	胴径 35.4 cm
44	〃	瓦質土器 焜炉	13.5	(12.5)	—	外面にミガキとナデ、内面にヘラナデとナデを施し、焼成前に穿孔する。	胴径 15.6 cm
45	〃	ガラス製品 瓶	—	(3.8)	7.1	ワインボトルと考えられるもので、若干の気泡がみられる。	胴径 7.8 cm
46	SK21	磁器 碗	9.5	5.4	3.8	染付の丸碗で、外面に草花文と圏線文、外底面に銘を描く。器面にはやや白濁した透明釉を施す。	
47	〃	〃 瓶	—	(11.9)	5.1	染付の小瓶で、外面には圏線文と草花文を描く。	胴径 8.8 cm 肥前系
48	〃	陶器 碗	—	(3.7)	4.6	高台豊付を除き施釉し、細かい貫入がみられる。	
49	〃	〃 皿	30.5	9.3	11.7	削り出し高台で、内外面にケズリ調整。見込には印花判。白色釉を刷毛塗り後、薬灰釉を釉掛け。外面上半部に白色釉、下半部に鉄釉を刷毛塗り	ロクロ成形
50	〃	〃 鉢	(19.3)	(6.4)	6.2	削り出し高台で、外面にケズリ調整がみられる。内面には緑灰色釉施後、緑色釉で笹文を施し、その後白灰色釉を刷毛塗す。蛇ノ目釉剥ぎ有り	ロクロ成形

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
51	SK21	陶器 播鉢	35.5	13.7	16.0	外面に回転ナデと回転ヘラ削りを施し、内面には7条単位の条痕がみられる。	
52	〃	〃 〃	—	(8.2)	—	外面に回転ナデを施し、内面には条痕がみられる。	
53	〃	石製品 砥石	12.3	8.9	3.4	両面と両側面とも使用痕がみられ、石材は砂岩である。	重量415.8g
54	SK28	磁器 碗	8.0	4.6	3.5	染付の上絵付小碗で、外面に文様、見込に上絵がみられる。畳付は露胎で、口縁端部には錆釉を施す。	
55	〃	〃 〃	8.3	4.1	3.1	上絵付の小碗で、内面に黄、朱などで文様を描く。畳付は露胎	
56	〃	〃 〃	8.5	3.9	4.5	上絵付の小碗で、内面に朱、黒等で文様を描く。畳付は露胎で、蛇ノ目高台である。	
57	〃	〃 〃	8.6	3.8	3.8	上絵付の小碗で、見込に富士を描く。削り出し高台	
58	〃	〃 〃	6.9	3.7	2.7	染付の小碗で、外面に笹文がみられる。やや白濁した透明釉を施し、畳付には砂が付着する。	
59	〃	〃 〃	7.2	4.2	3.0	染付の小碗で、外面に圏線文と不明文様がみられる。削り出し高台で、畳付は露胎である。	
60	〃	〃 〃	7.6	4.8	4.0	染付の小碗で、外面に呉須文を施す。削り出し高台で、畳付は露胎。口縁端部は釉剥ぎを行い、高台内には「サ」銘有り	
61	〃	〃 〃	8.4	4.4	3.8	染付の小碗で、外面に呉須文を施す。削り出し高台で、畳付は露胎	
62	〃	〃 〃	6.7	3.9	3.4	染付の腰張小碗で、外面に格子文と花文を施す。削り出し高台で、高台内には銘有り。畳付は露胎で、口縁端部は釉剥ぎ	
63	〃	〃 〃	9.7	5.3	3.9	染付の丸碗で、外面に格子文と圏線文、内面に柵状文がみられる。畳付は露胎で、砂が付着する。	
64	〃	〃 〃	10.6	5.2	4.0	染付の丸碗で、外面に桐文と圏線文がみられ、見込には蛇ノ目釉剥ぎを行う。削り出し高台で、畳付は露胎し、砂目が残る。	
65	〃	〃 〃	10.7	5.8	4.0	染付の丸碗で、外面に菖蒲文と柏文、見込に子葉文を施す。削り出し高台で、畳付は露胎	
66	〃	〃 〃		(4.9)	4.7	染付の丸碗で、外面に山水文、見込に呉須文を施す。削り出し高台で、畳付は露胎	
67	〃	〃 〃	9.7	5.4	5.4	染付の広東碗で、外面に蝶文、内面に圏線文を施し、見込には銘有り。削り出し高台で、畳付は露胎	
68	〃	〃 〃	11.2	5.9	6.6	染付の広東碗で、外面に蓮弁文、内面に圏線文、見込に蝶文を施す。削り出し高台で、畳付は露胎	
69	〃	〃 〃	11.3	6.6	6.3	染付の広東碗で、外面に草文と圏線文、内面に圏線文を施し、見込に銘有り。削り出し高台で、畳付は露胎し、砂目が残る。	
70	〃	〃 〃	11.4	5.9	6.4	染付の広東碗で、外面には子葉文、内面に圏線文を施し、見込に銘有り。削り出し高台で、畳付は露胎	
71	〃	〃 〃	12.0	6.9	6.2	染付の広東碗で、外面に柳文と圏線文、内面に圏線文を施す。削り出し高台で、畳付は露胎	
72	〃	〃 〃	12.2	6.2	6.8	染付の広東碗で、外面と見込に呉須文と圏線文を施す。削り出し高台で、畳付は露胎	
73	〃	〃 〃	12.4	7.2	6.0	染付の広東碗で、外面に花文と圏線文、内面に圏線文を施し、見込に銘有り。削り出し高台で、畳付は露胎	
74	〃	〃 〃	13.3	8.2	7.0	染付の広東碗で、外面に放射文と揺れ文、内面に圏線文を施し、見込に銘有り。畳付は露胎で、砂目が残る。	
75	〃	〃 〃	—	(5.1)	6.4	染付の広東碗で、外面に呉須文と圏線文、内面に圏線文、見込に銘有り。削り出し高台で、畳付は露胎し、高台内に「サ」銘有り	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
76	SK28	磁器 碗	10.2	5.8	3.7	染付の端反碗で、外面に草花文と多重圏線文、内面に圏線文を施し、見込に銘有り。削り出し高台で、畳付は露胎	
77	〃	〃 〃	12.7	7.1	5.5	染付の端反碗で、外面に花文と蓮弁文、内面に雷文と圏線文、見込に呉須文を施す。削り出し高台で、畳付は露胎	
78	〃	〃 杯	6.9	3.2	3.1	染付の上絵付杯で、内面に軍配の文様がみられる。焼成後に内底面を輪状に削り、口縁端部に銹釉を施す。	
79	〃	〃 〃	7.0	2.9	2.9	染付の杯で、外面に雷文と圏線文、内面に波文と圏線文、見込に扇と木を配する。畳付は露胎	
80	〃	〃 〃	7.9	4.5	2.8	染付の杯で、外面に圏線文、「工」字文、草文、鶴文を施す。削り出し高台で、畳付は露胎	
81	〃	〃 湯呑	7.9	6.6	5.0	染付の湯呑で、外面に岩と草花、圏線、内面に圏線と雷文を配する。削り出し高台で、畳付は露胎	
82	〃	〃 皿	10.0	2.5	4.2	染付の皿で、内面に格子文を施す。見込には蛇ノ目釉剥ぎを行い、畳付は露胎	
83	〃	〃 〃	9.9	2.5	5.8	染付の輪花皿で、型押し成形。内面に山水文を施し、削り出し高台。畳付は露胎	
84	〃	〃 〃	10.2	2.5	5.5	染付の皿で、型押し成形。口縁端部口鏤、内面には楼閣と山水文	能茶山産 19世紀代
85	〃	〃 〃	31.4	5.0	17.6	染付の輪花皿で、内面に松文を施し、削り出し高台	
86	〃	〃 鉢	14.0	7.0	6.5	染付の八角鉢で、外面の区画内に呉須文、見込に鳥文と山文を施し、底部は蛇ノ目凹状高台を呈する。	
87	〃	〃 瓶	-	(11.5)	-	頸部から胴部にかけての破片で、外面に植物文と圏線文を施す。内面は露胎で、釉垂れがみられる。	
88	〃	〃 徳利	3.1	16.8	6.0	染付の徳利で、外面に雷文と岩、花文を配し、内面は露胎。底部外面は釉剥ぎを行う。	胴径6.9cm
89	〃	〃 段重	-	(5.8)	8.8	染付の段重で、外面に呉須文と圏線文を施す。削り出し高台で、畳付は露胎	
90	〃	〃 〃	12.2	4.6	11.4	陶胎磁器の染付段重で、外面は白土を刷毛塗りし、呉須文と圏線文を施す。口縁端部は釉剥ぎを行い、削り出し高台	
91	〃	〃 蓋	6.0	(2.0)	-	染付の香合蓋で、つまみを欠損する。外面に格子文と鳥を配し、口縁端部は露胎	
92	〃	〃 仏飯器	8.0	4.8	3.8	染付の仏飯器で、外面に呉須文を配する。削り出し高台で、底部内外面は露胎	
93	〃	〃 〃	7.8	(3.3)	-	陶胎磁器の仏飯器で、外面には白土掛けを行い、蓮花文と圏線文を施す。	
94	〃	白磁 紅皿	4.5	1.7	1.5	型押し成形で、外面に型押し放射肋文を施す。	
95	〃	〃 杯	7.2	3.7	2.9	器面にムラのある透明釉を施し、底部は削り出し高台。畳付は露胎で、一部砂目が残る。	
96	〃	〃 鉢	15.4	5.8	9.3	内面にナデ、外面にナデとケズリを施し、底部は削り出し蛇ノ目高台	
97	〃	陶器 碗	12.2	9.3	5.5	丸碗で、器面に灰釉を施し、底部は削り出し高台。底部内面には胎土目が3箇所残る。	
98	〃	〃 〃	12.2	8.2	4.8	丸碗で、器面には黄褐色釉を施し、底部は露胎。底部は削り出し高台	
99	〃	〃 〃	-	(4.8)	2.8	丸碗で、外面に白緑色の上絵がみられ、器面には灰釉を施す。底部は削り出し高台で、体部内外面は露胎	
100	〃	〃 〃	11.8	8.6	5.3	腰張碗で、内外面に灰釉を施す。削り出し高台で、畳付は露胎	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
101	SK28	陶器 皿	11.8	4.7	4.9	内外面に鉄釉を施し、底部内面に蛇ノ目釉剥ぎを行う。削り出し高台で、底部内外面は露胎	
102	〃	〃 〃	12.5	4.7	4.9	内外面に鉄釉を施し、底部内面に蛇ノ目釉剥ぎを行う。削り出し高台で、体部外面と底部内外面は露胎	
103	〃	〃 〃	12.6	4.7	5.3	内外面に黒鉄釉を施し、底部内面に蛇ノ目釉剥ぎを行う。削り出し高台で、体部外面と底部内外面は露胎	
104	〃	〃 〃	12.8	4.6	5.4	削り出し高台。内面見込は蛇ノ目釉ハギ。内底面には重ね焼き痕。内面から高台近くまで灰釉	
105	〃	〃 〃	-	(3.8)	10.7	陶胎染付の皿で、鉄絵がみられる。底部内面に蛇ノ目釉剥ぎを行い、器面には灰釉を施す。高台畳付から底部外面は露胎	
106	〃	〃 〃	12.8	4.6	5.0	内外面に鉄釉を施し、底部内面に蛇ノ目釉剥ぎを行い、白土を塗る。削り出し高台で、体部外面と底部内外面は露胎	
107	〃	〃 鉢	22.0	10.0	7.5	ロクロ成形で、器面には回転ナデを施す。削り出し高台で、底部内面には目痕が5箇所残る。	
108	〃	〃 播鉢	31.0	(11.1)	-	底部を欠損し、外面にケズリを施す。内面には14条単位の播目がみられる。	
109	〃	〃 徳利	-	(6.0)	7.7	底部破片で、削り出し高台。外面に灰釉を施し、他の部位は露胎	
110	〃	〃 〃	-	(13.4)	8.4	削り出し高台。外面に灰オリーブ色釉、内面に黒錆釉を施す。底部外面は露胎	胴径12.0cm
111	〃	〃 蓋	18.1	4.5	-	行平鍋の蓋で、外面に飛鉋がみられる。外面に赤錆釉を刷毛塗りし、内面には黒鉄釉を施す。口縁端部は露胎	つまみ径5.7cm
112	〃	〃 〃	18.3	(2.5)	-	行平鍋の蓋で、口縁部のみ残存。外面には飛鉋がみられ、器面には透明釉を施す。	
113	〃	〃 茶釜	7.2	12.5	8.0	削り出し高台で、付足がみられる。外面に黒鉄釉、内面に鉄釉を施し、口縁部内面と底部外面は露胎で、底部外面には煤が付着	
114	〃	〃 灯明皿	8.8	1.3	3.6	削り出し高台で、口縁部には挟りがみられる。口縁部外面と内面に灰釉を施す。	
115	〃	〃 火入	-	(4.9)	10.4	底部破片で、外面に鉄釉と透明釉を施し、内面に白土掛けがみられる。底部内外面は露胎で、底部外面には墨書痕有り	
116	〃	〃 餌猪口	4.3	2.1	3.7	底部側面にはケズリがみられ、外面には糸切り痕が残る。器面には透明釉を施す。	
117	〃	〃 〃	4.5	2.3	4.1	底部外面には糸切り痕がみられ、器面には鉄釉を施す。底部外面は露胎	
118	〃	〃 甕	26.5	(18.4)	-	ロクロ輪積み成形で、内外面に鉄釉を施し、外面には黒鉄釉を掛け流す。	胴径28.5cm
119	〃	土師質土器 小皿	5.4	0.9	2.9	器面にはナデ調整がみられ、底部外面には糸切り痕が残る。口縁端部には煤が付着	
120	〃	〃 焙烙	31.4	(3.5)	-	口縁部破片で、型押し成形。器面にはナデ調整がみられ、一部に砂目が残る。	
121	〃	瓦質土器 火鉢	26.0	16.3	20.5	型押し成形で、内面に回転ナデ、外面にケズリの後ミガキを施す。外面には獅子頭などの陽刻がみられる。	
122	〃	〃 焜炉	-	(6.5)	-	焚き口部分とみられ、外面にミガキ、内面にハケとナデを施す。	
123	〃	〃 〃	-	(8.7)	-	脚部が残存し、成形は粘土版を組んだ後に型押しを施したとみられる。外面は粗いケズリとナデ、内面は粗いケズリを施す。	
124	〃	土製品 竈	-	(7.8)	11.5	輪積み型押し成形で、外面に指頭圧痕、内面に布目圧痕がみられる。	
125	〃	石製品 砥石	7.0	4.6	1.6	全面に使用痕がみられ、一部に破断部有り。仕上げ用とみられ、石材は凝灰岩	重量90.7g

遺物観察表30

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
126	SK33	石製品 弁	(4.7)	0.6	0.5	上部は欠損し、一部挟り状の浅い凹部分がみられる。	重量(2.7)g
127	〃	金属製品 煙管	5.4	0.9	1.0	ラウ部分が残存。一部印刻文様がみられる。	重量5.5g
128	SK35	石製品 砥石	6.7	6.0	2.0	両面と一側面に使用痕がみられ、片面の一部は剥離	重量135.4g
129	SK40	磁器 碗	11.2	4.4	3.7	高台畳付以外は透明釉を施す。型紙摺で、外面には松と波文を配す。	
130	〃	〃 〃	10.0	6.1	4.0	染付の腰張碗で、外面口縁下帯線と多重圏線文の間に亀甲文。内面には口縁下2条の圏線文、見込には格子状の文様	砥部か肥前系
131	〃	〃 〃	11.0	5.9	6.0	陶胎染付の広東碗で、外面と見込に呉須文。内外面とも薄い圏線文がみられ、畳付は露胎	
132	〃	〃 〃	11.5	7.2	6.0	染付の広東碗で、外面扇内に船と水文・柳文。内面口縁下と見込に圏線文	肥前系 1810～1840年代
133	〃	〃 杯	6.7	3.0	3.2	口縁端部は口鏝で、高台畳付は露胎。内底部には軍配を配する。	
134	〃	〃 蓋	10.4	3.0	-	端反の杯で、高台畳付を除き内外面透明釉。外面松文、高台内に松竹梅、見込に松葉を配する。	つまみ径4.4cm
135	〃	〃 〃	9.9	2.6	-	つまみ部は削り出して、つまみ外面に圏線文、内外面に呉須文	つまみ径5.6cm
136	〃	〃 鉢	14.0	6.7	8.4	端反の染付で、蛇ノ目凹状高台。外面に網目状文と山文、格子文、内面には雷文を施し、見込には山水文を配す。	
137	〃	〃 〃	15.9	7.0	6.5	染付の八角鉢で、内底部には目痕が残る。内面には水文、外面には図香。見込には「茶山」の銘有り	能茶山産 1820年以降
138	〃	〃 土瓶	7.6	(5.2)	-	呉須点文がみられる耳が2箇所と付注口がみられる。外面には亀甲文と鳥文を配し、器面には白土掛け透明釉を施す。	
139	〃	陶器 碗	11.4	7.5	5.4	削出し高台で、内底面には重ね焼き痕。内面から高台近くまで灰釉を施し、外面には調整痕が残る。	
140	〃	〃 蓋	-	(2.8)	-	土瓶の蓋とみられ、胎土は軟質。外面には透明釉が掛かり、内面は無釉	つまみ径1.7cm 笠径11.4cm
141	〃	〃 〃	17.4	(4.3)	-	外面に飛鉋を施し、蛇ノ目状に鉄泥をかき取る。内面は口縁部を除き、鉄泥を施す。	
142	〃	〃 鍋	19.1	(8.1)	-	行平鍋で把手は破損し、外面に飛鉋を施す。外面に鉄錆釉を刷毛塗りし、内面には鉄錆釉を施す。	胴径19.8cm
143	〃	〃 搦鉢	26.4	(6.6)	-	口縁部は上下に肥厚し、外面には2条の凹線がみられる。口縁内面下はナデ、口縁外面下はケズリを施す。	
144	〃	〃 壺	9.0	10.3	6.0	無頸壺で、削り出し高台。外面に鉄釉を施し、胴部外面下端は露胎。内面に鉄釉を刷毛塗りした後、黒鉄釉を掛け流す。	胴径12.2cm
145	〃	〃 鉢	14.7	11.2	9.5	植木鉢で、内外面にナデ調整がみられ、底部外面には砂目	
146	〃	瓦質土器 火鉢	16.4	(7.3)	14.2	外底部には脚部を貼付し、内外面ともナデを施す。	胴径17.2cm
147	〃	石製品 砥石	8.1	5.1	3.7	両面と両側面とも使用痕がみられ、石材は泥岩と考えられる。	重量229.7g
148	〃	ガラス製品 簪	2.2	1.0	0.4 ～ 1.0	簪と考えられるもので、下部を欠損する。上部に亀甲文がみられる。	
149	〃	〃 〃	8.9	0.7	0.3 ～ 0.7	簪と考えられるもので、両端を欠損する。	
150	SK41	磁器 碗	8.4	4.3	3.4	上絵付の小碗で、高台畳付は釉剥ぎ。口縁端部は口鏝で、内面には岩、水、花を配する。	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
151	SK41	磁器 碗	10.1	6.0	4.0	型紙刷で、外面に菊と草花、捻花、見込に松竹梅を配し、畳付は露胎	
152	〃	〃 〃	11.9	6.6	5.8	陶胎染付の広東碗で、内面に圏線文と松竹梅、外面に圏線文を配する。畳付は露胎	
153	〃	〃 〃	11.0	5.3	4.1	染付の端反碗で、内面に区画文、外面に圏線文と草文を配し、見込に文様有り。高台畳付は露胎	瀬戸系 19世紀以降
154	〃	〃 蓋	9.6	2.6	-	つまみ径3.6cm。染付の蓋で、外面に牡丹と「茶」銘、内面に四方禰を配し、見込に文様有り	能茶山産 19世紀代
155	〃	〃 皿	10.2	2.5	5.5	染付の菊皿で、型押し成形。口縁端部は口錆で、内面には楼閣と山水文	能茶山産 19世紀代
156	〃	〃 鉢	15.6	7.1	8.7	染付の鉢で、蛇ノ目凹状高台。型紙摺で内面に葡萄の文様、外面に草文、見込に圏線文を配する。	
157	〃	〃 瓶	-	(20.5)	-	染付の瓶で、頸部内面まで施釉する。外面に圏線文と草文を配し、内面に炭化箇所がみられる	胴径17.6cm
158	〃	〃 徳利	-	(15.7)	6.3	染付の徳利で、頸部外面に雷文、胴部に草花文を配する。	胴径7.0cm
159	〃	陶器 皿	12.4	4.5	5.4	端反皿で、内面から体部外面途中まで鉄釉を施し、見込には蛇ノ目釉ハギを行う。	
160	〃	〃 〃	12.6	4.5	5.3	削出し高台で、内面から体部にかけて施釉し、高台は露胎。見込には蛇ノ目釉ハギを行う。	
161	〃	〃 〃	12.8	3.7	6.6	菊皿で、型押し成形。高台内以外は施釉し、高台は蛇ノ目凹状高台	
162	〃	〃 蓋	8.7	3.6	-	土瓶の蓋で、型押し成形。内外面に布目痕がみられ、口縁部内外面に明瞭な指頭圧痕。外面天井部には取手状の装飾有り	
163	〃	〃 土瓶	12.0	14.2	9.0	外面には2箇所付耳と付注口がみられ、飛甕を施す。器面には灰釉を施すが、胴部内外面下半は露胎で、外面には煤が付着	胴径21.6cm
164	〃	〃 片口鉢	17.2	10.6	7.6	削り出し高台で、注口は一部欠損する。削り出し高台で、内外面には鉄釉を刷毛塗りし、胴部外面下半は露胎	
165	〃	〃 播鉢	32.4	(11.0)	-	内面にナデ、外面にナデとケズリを施す。内面には18条単位の播目がみられ、内外面に黒鉄釉を施す。	
166	〃	〃 灯明皿	5.8	4.2	3.2	台付き灯明皿で、底部外面は回転糸切り痕がみられ、内外面には鉄釉を施す。	台部径5.6cm
167	〃	〃 火入	10.6	8.1	6.1	口縁部は内側に折り曲げ肥厚し、内面口縁下から体部下端まで鉄釉を施す。	
168	〃	〃 壺	15.4	(25.7)	-	ロクロ輪積み成形とみられ、内外面とも鉄釉を刷毛塗り後、黒鉄釉を掛け流す。	胴径31.0cm
169	〃	〃 甕	19.0	(9.5)	-	口縁部は内側に折り曲げ、端部は平坦面をなす。内外面ともに褐釉。胴部外面上半に計5条の沈線	
170	〃	〃 〃	18.2	(10.0)	-	口縁部は左右に肥厚させ、端部は平坦面をなす。器面には灰釉を施し、頸部から胴部にかけて自然釉が掛かる。	
171	〃	瓦質土器 焙烙	-	(3.9)	-	口縁部破片で、口縁部は外反し大きく開く。口縁部外面下はヘラ削り、内面は回転ナデ調整	
172	〃	〃 火鉢	26.1	(10.7)	-	型押し成形とみられ、内面に回転ナデ、外面に型押し施文	
173	〃	〃 〃	-	(6.5)	18.4	底部破片で、胴部内外面に回転ナデ、底部外面に回転ヘラ削りを行う。	
174	〃	土製品 甕	-	(10.7)	10.9	粘土版成形で、上部を欠損する。付内頸と円孔を配し、内面にはナデ、外面にはヘラ削りを施す。	
175	〃	瓦 丸瓦	(4.1)	(6.7)	(1.7)	頭のみ残存し、刻印有り。外面にはナデを施し、外面には粗い布目が残る。	

遺物観察表 32

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
176	SK42	石製品 砥石	11.5	4.8	2.7	両面と両側面とも使用痕がみられる。	重量 201.6g
177	SK43	白磁 碗	-	(2.3)	3.5	小碗で、高台壘付以外に透明釉が掛かる。外面には細かい貫入が入る。	
178	SK46	陶器 灯明皿	8.5	1.2	3.8	備前焼とみられ、外面に回転ヘラ削りとナデを施す。口縁部内外面の一部には煤が付着	
179	〃	土製品 箱庭道具	-	(4.9)	-	底面には焼成前の穿孔あり。天神稻荷で両脇に狛犬、中央には天神、左側には梅、右側には松を配す。	
180	SK49	陶器 碗	8.2	6.8	5.6	腰張碗で、蛇ノ目高台を呈する。体部下半には飛鉋を施す。	
181	〃	〃 皿	12.0	4.4	4.6	内外面に鉄釉を施し、高台は露胎。見込は蛇ノ目釉ハギを行う。	
182	〃	〃 〃	-	(4.2)	6.6	底部は削り出し高台で、見込は蛇ノ目釉剥ぎを行う。内面は刷毛目文様で、高台外面は露胎。高台壘付には白色状の釉薬	
183	SK50	〃 碗	-	(3.5)	4.6	底部は削り出し高台で、内面と高台外面途中まで透明釉を施す。	
184	SK51	金属製品 煙管	7.0	1.1	1.1	吸い口のみ残存する。	重量 4.0g
185	SK54	磁器 碗	11.0	(4.4)	-	染付の丸碗で、口縁部内面には四方襷、外面には草花文を施す。	能茶山産
186	〃	陶器 鉢	-	(6.8)	-	口縁部は内側に折り曲げ、片口状を呈す。口縁部内外面には褐釉を施す。	
187	〃	〃 〃	-	(3.5)	6.0	底部破片で、外面に灰釉を施し、付足が1箇所残存する。	
188	SK55	磁器 碗	10.7	5.7	3.9	染付の丸碗で、外面には圏線による区画内に宝文、内面には縄目の区画文を施し、見込に文様有り。高台壘付は露胎	瀬戸系 19世紀以降
189	〃	〃 〃	8.1	5.8	4.0	染付の腰張碗で、内面に圏線文、外面に草花文を施し、高台内には「サ」銘有り。高台壘付は露胎	能茶山産 19世紀以降
190	〃	〃 〃	-	(3.7)	6.3	染付の広東碗で、外面に捻文、内面に圏線文、見込に寿文を配する。	肥前系 18世紀後半～19世紀
191	〃	〃 皿	11.6	3.5	4.4	陶胎染付の皿で、口縁部内面に圏線文と襷文を施し、見込には砂目痕がみられる。高台壘付は露胎	
192	〃	〃 瓶	1.7	(7.8)	-	染付小瓶で、外面には草文を配する。	胴径 4.5cm。瀬戸系 19世紀以降
193	〃	陶器 碗	13.0	(6.6)	-	腰張碗で、胴部外面下端は露胎で、他の部位には灰釉を施す。	
194	〃	〃 皿	-	(3.4)	6.6	削り出し高台で、高台を除き内外面施釉する。内面にはハケ目がみられる。	
195	〃	〃 鉢	15.5	(5.6)	-	折縁鉢で口縁部は内側に折曲げ、口縁内面から外面の一部には灰釉状の釉がかかる。	
196	〃	〃 播鉢	29.2	(4.9)	-	明石産とみられるもので、口縁部内外面に凹線がみられる。凹線と条線間には強いナデを施す。	
197	〃	〃 甕	26.6	(5.2)	-	口縁端部は肥厚、平坦面をなす。外面と口縁下まで褐釉を施す。	
198	〃	土師質土器 羽釜	8.0	(6.5)	-	小型の羽釜で、鏝が途中で欠損する。内面には炭化物が残存	
199	〃	土製品 竈	33.8	(6.5)	-	口縁端部は肥厚させ平坦面をなす。口縁下外面には強いナデとノミ状工具による文様が巡る。内面には布目痕	
200	SK68	磁器 瓶	-	(3.6)	6.5	染付瓶で、高台壘付には砂が付着。高台外面には圏線文を施し、内底部には回転ヘラ削り調整がみられる。	肥前系

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
201	SK68	陶器 播鉢	27.1	(8.5)	—	口縁部は折縁状を呈し、外面にはケズリとナデ、外面にはナデを施す。	
202	〃	土師質土器 小皿	—	(1.5)	5.4	摩耗のため調整は不明で、底部外面には糸切り痕が残る。	
203	〃	石製品 砥石	8.4	4.7	2.2	4面とも使用痕有り	重量 160.9 g
204	SK71	磁器 碗	—	(2.8)	6.4	磁器とみられる染付の広東碗で、高台外面2条の圏線文を施し、内面見込に文様有り	肥前系18世紀後半 ～19世紀前半
205	〃	〃 杯	6.2	2.8	2.1	口縁部外面には波状文を配し、高台壘付は露胎	
206	SK72	金属製品 銭貨	2.4	1.9	0.1		量目 2.3g
207	SK73	陶器 播鉢	—	(7.4)	—	口縁部は上下に肥厚し、外面には2条の凹線。口縁内面には段をもうけ条線との間をナデる。外面口縁部下は強い横ナデ	
208	SK74	石製品 砥石	(15.5)	10.0	7.0	半分を欠損し、全体的に被熱する。4面に使用痕がみられ、石材は砂岩	重量 1529.6g
209	SD1	白磁 碗	7.5	6.3	3.5	筒型碗で、外面にはケズリがみられる。全体に透明釉を施すが、体部中位に鉄釉を配す。壘付は露胎	
210	SD2	磁器 〃	—	(3.4)	6.0	染付の広東碗で、削り出し高台。外面に葉文と圏線文、内面に圏線文を施し、見込には蝶文を配す。壘付は露胎	
211	〃	白磁 紅皿	4.8	1.3	1.5	型押し成形で、外面に放射肋文を施す。器面には白濁釉を施し、体部下端と底部外面は露胎	
212	〃	陶器 碗	11.8	(6.2)	—	内外面には透明釉が掛かり、外面には白色化粧土状のものがみられる。	
213	〃	〃 〃	—	(2.6)	5.4	外面にケズリ調整がみられ、底部内面に胎土目が3箇所残る。削り出し高台で、体部外面下端と底部外面を除き灰釉を施す。	
214	〃	〃 〃	—	(4.3)	6.0	外面にケズリ調整がみられ、底部内面に胎土目が1箇所残る。削り出し高台で、器面には透明釉を施す。	
215	〃	〃 皿	12.9	(3.4)	—	内外面に鉄釉を施し、見込には釉剥ぎがみられる。体部外面下端は露胎	
216	〃	〃 播鉢	—	(4.9)	—	内面には9条単位の播目がみられ、内外面に鉄釉を施す。	
217	〃	瓦質土器 火入	10.1	6.8	9.0	粘土板組成形とみられ、内外面剥離のため調整は不明瞭	
218	〃	土製品 ハマ	—	1.1	5.8	ロクロ成形で、糸切り痕がみられる。	
219	〃	石製品 砥石	7.0	5.9	3.0	両面と1側面に使用痕がみられ、一部にタガ痕有り	重量 160.4g
220	〃	金属製品 楔	(4.1)	3.0	1.6	鉄製の楔と考えられるもので、先端部を欠損する。錆膨れのため、全体の形状は不明	重量 (17.9) g
221	〃	〃 釘	6.9	1.9	1.8	鉄製の皆折釘と考えられるもので、錆膨れのため、全体の形状は不明	重量 (8.3) g
222	〃	〃 〃	(4.5)	1.1	1.0	鉄製の皆折釘と考えられるもので、先端部を欠損。錆膨れのため、全体の形状は不明	重量 (4.0) g
223	〃	〃 〃	(5.3)	1.2	0.9	鉄製の皆折釘と考えられるもので、先端部を欠損。錆膨れのため、全体の形状は不明	重量 (7.1) g
224	SD3	磁器 碗	9.7	(3.9)	—	染付の端反碗で、外面に柵状文と雷文、内面に圏線文と格子文を配する。	
225	SD4	〃 〃	—	(4.0)	3.4	上絵付の小碗で、削り出し高台。外面に藤花文と圏線文を施し、壘付は露胎	

遺物観察表34

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
226	SD4	磁器 碗	11.0	5.9	4.4	染付の端反碗で、削り出し高台。外面に草花文と圏線文、見込に子葉文を配す。口縁端部に褐釉を施し、畳付は露胎	
227	〃	〃 杯	6.9	3.2	2.4	染付で、削り出し高台。外面に呉須葉文を配し、畳付は露胎	
228	〃	〃 蓋	9.8	2.6	-	つまみは削り出しで、外面に銘と花文、内面に格子文を配する。畳付は露胎	つまみ径4.0cm
229	〃	〃 皿	9.5	3.3	3.6	染付で、削り出し高台。内面に格子文と圏線文を配し、畳付は露胎	
230	〃	陶器 碗	-	(3.9)	5.2	削り出し高台で、見込に胎土目が2箇所残る。器面には灰釉を施し、白斑が多く、貫入が細かい。外面下端と高台は露胎	
231	〃	〃 皿	12.2	4.5	5.0	削り出し高台で、器面に黒鉄釉を施す。外面下端と高台は露胎。見込は蛇ノ目釉剥ぎを行う。	
232	〃	〃 土瓶	-	8.2	6.8	外面上部から中位にかけて白色釉と銅緑釉、内面下半に鉄釉を刷毛塗りし、外面下部には煤が付着	胴径15.0cm
233	〃	〃 播鉢	18.8	7.3	10.1	付け口縁で、体部内面に9条単位、底部内面に2~3条単位の播目がみられる。底部外面には砂目が残る。	
234	〃	〃 〃	20.4	(6.4)	-	付け口縁で、内面に10条単位の播目がみられる。	
235	〃	〃 徳利	3.1	(4.6)	-	把手は欠損し、器面には透明釉を施す。	
236	〃	〃 壺	14.8	(5.4)	-	折り返し口縁で、内外面にナデを施す。外面には自然釉	
237	〃	〃 焜炉	-	(3.5)	11.9	軟質で、五角足が1脚残存する。器面には透明釉を施し、内面と底部外面は露胎	
238	〃	土師質土器 小皿	6.4	1.1	3.4	内外面にナデを施し、底部切り離しは糸切り	
239	SD5	磁器 蓋	-	(2.2)	-	染付で、外面に放射呉須文と圏線文、内面とつまみ内側に圏線文と蝶文を配する。	つまみ径5.4cm
240	〃	陶器 碗	-	(4.8)	6.6	丸碗で、削り出し高台。器面には灰白色釉を施し、高台部は露胎。見込に輪砂目がみられる。	
241	〃	〃 皿	10.2	2.4	4.3	口縁部外面と内面に灰白色~透明釉を施し、細かい貫入がみられる。	
242	〃	〃 〃	12.2	4.6	5.4	削り出し高台で、器面に黒鉄釉を施し、底部は露胎。見込には蛇ノ目釉剥ぎを行う。	
243	〃	〃 鍋	17.6	(3.9)	-	付け把手がみられ、器面には鉄釉を施す。	
244	〃	〃 火入	9.7	(5.2)	-	折り込み口縁で、口縁部内面に鉄釉を下塗りする。外面と口縁部内面に灰緑釉を施し、濃緑釉を掛け流す。内面は露胎	胴径10.4cm
245	〃	石製品 砥石	6.5	4.7	0.9	3面に使用痕がみられる。	重量41.3g
246	SD6	磁器 碗	8.7	4.1	2.8	外面と見込に呉須文を配し、口縁端部は口錆で、高台畳付を除き透明釉が掛かる。	
247	〃	〃 〃	11.1	5.9	4.2	染付の端反碗で、削り出し高台。外面に菖蒲と柏、見込に子葉文を配し、畳付は露胎	
248	〃	〃 杯	7.2	3.3	3.0	上絵付の杯で、削り出し高台。器面には透明釉を施す。	
249	〃	〃 蕎麦猪口	7.8	5.5	6.0	染付で、口縁端部は口錆。底部外面と高台内は露胎で、外面には樹木を配する。	
250	〃	〃 蓋	10.3	2.9	-	陶胎染付の蓋で、つまみは削り出し。外面に草花文、見込に柏文を施す。	つまみ径4.3cm

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
251	SD6	磁器 皿	13.2	3.8	8.5	陶胎磁器の菊皿で、内外面型押し成形で、削り出し高台。器面には白色釉を施し、蛇ノ目高台を呈する。	
252	〃	〃 鉢	14.8	5.3	8.0	削り出し蛇ノ目高台で、内面に格子文と圏線文を配し、見込と体部外面に砂目が残る。外面には緑褐色釉を施す。	
253	〃	白磁 紅皿	3.9	1.5	1.2	型押し成形で、貝殻状に型押。内面から口縁部下まで施釉	
254	〃	陶器 皿	9.1	1.9	3.0	口縁部外面と内面に灰釉を施し、他は露胎。見込には胎土目が残る。	
255	〃	〃 〃	-	(3.1)	4.6	削り出し高台で、器面には灰釉を施し、見込には蛇ノ目釉剥ぎを行う。	
256	〃	〃 〃	-	(3.1)	5.2	削り出し高台で、器面には白土掛けを行い、灰釉を施す。底部は露胎で、見込は蛇ノ目釉剥ぎを行う。	
257	〃	〃 播鉢	-	(3.7)	9.8	底部は蛇ノ目高台で、内面には細かい播目がみられる。底部外面に墨書が残る。	
258	〃	〃 灯明皿	7.1	1.6	3.8	台付灯明皿の油受けとみられ、底部外面に糸切り痕がみられる。器面には鉄釉を施し、底部は露胎	
259	〃	〃 壺	5.8	4.9	3.4	胴部外面上端には7条の沈線がみられ、器面には鉄釉を施す。	胴径6.5cm
260	〃	〃 甕	46.0	(4.9)	-	胴部外面上端に多重沈線がみられ、器面には回転ナデを施す。	
261	〃	瓦質土器 火鉢	24.6	(3.2)	-	口縁端部にケズリ、口縁部内外面にナデ、胴部内面にハケを施し、胴部外面に型押文を配する。	
262	〃	石製品 有舌尖頭器	4.2	2.3	0.4	ほぼ完存するが、先端部に後世の破損部有り。丁寧な調整を行い、石材はチャートとみられる。	重量3.2g
263	〃	〃 剥片	1.0	1.8	0.5		重量0.6g
264	〃	〃 砥石	5.4	3.3	3.0	4面に使用痕がみられ、石材は流紋岩とみられる。	重量79.9g
265	〃	〃 〃	(6.9)	5.2	0.8	2面に使用痕がみられ、石材は凝灰岩とみられる。	重量(36.9)g
266	〃	〃 〃	8.6	3.8	3.1	2面に使用痕がみられ、石材は変質安山岩とみられる。	重量159.2g
267	〃	〃 〃	10.8	5.1	1.8	4面に使用痕がみられ、石材は変質安山岩とみられる。	重量122.6g
268	〃	金属製品 銭貨	2.4	1.9	0.1	寛永通宝	量目2.0g
269	SD7	磁器 碗	11.2	6.4	5.6	染付の広東碗で、削り出し高台。外面に草花文と圏線文、内面に圏線文、見込に銘を配し、畳付には砂目が残る。	
270	〃	〃 皿	-	(2.2)	4.2	染付で、削り出し高台。内面に具須文を施し、見込には蛇ノ目釉剥ぎを行い、砂目が残る。畳付は露胎で、砂が付着する。	
271	〃	陶器 碗	8.8	4.6	2.7	器面には灰釉を施し、体部外面下端と底部は露胎	
272	〃	〃 〃	-	(3.3)	4.6	削り出し高台で、器面には灰釉を施し、体部外面と底部は露胎	
273	〃	〃 杯	7.4	4.3	2.6	削り出し高台で、高台内に砂目が残る。器面には白濁釉を施し、小白斑が多い。畳付は露胎	
274	〃	〃 皿	13.0	4.6	5.4	削り出し高台で、器面に鉄釉を施し、外面には黒鉄釉掛け流し。体部外面下端と底部は露胎で、見込には蛇ノ目釉剥ぎを行う。	
275	〃	〃 瓶	4.4	(4.5)	-	外面と口縁部と頸部上端には鉄釉を施し、他は露胎	

遺物観察表 36

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
276	SD7	陶器 鉢	22.8	(10.2)	—	器面には鉄釉を施し、口縁端部は露胎	
277	〃	〃 〃	—	(9.0)	10.0	削り出し高台。外面と体部内面下半、底部内面に黒鉄釉を刷毛塗りし、体部中位には黒鉄釉。体部外面下端と底部は露胎	
278	〃	〃 灯明皿	10.5	2.5	3.8	口縁部外面と内面に透明釉を施し、他は露胎。細かい貫入がみられる。	
279	〃	土師質土器 羽釜	—	(2.1)	—	盆釜とみられ、内面にナデ、外面にナデとケズリを施す。外面には煤が付着する。	
280	〃	〃 〃	—	(3.3)	7.0	付け高台で、外面にケズリを施し、煤が付着する。	
281	SD8	磁器 壺	—	(3.8)	—	染付で、髪油壺とみられる。外面に圏線文を配し、内面は露胎	
282	〃	陶器 碗	—	(3.7)	5.0	削り出し高台で、器面には灰釉を施し、細かい貫入がみられる。畳付は露胎	
283	SD9	磁器 碗	8.0	4.1	3.4	上絵付の小碗で、外面に隸字体で文字を描き、内面に草花文を配する。	
284	〃	〃 〃	9.6	5.15	3.8	染付の小碗で、高台畳付を除き透明釉。外面には源氏香と花、内面見込にも文様有り	
285	〃	〃 〃	10.0	6.2	4.0	染付の丸碗で、外面には多重圏線文と草文、内面は口縁部と内底部に圏線文、見込に文様を配する。	19世紀以降
286	〃	〃 〃	12.4	6.8	7.0	染付広東碗で、高台畳付は釉剥ぎを行い、砂が付着。外面は圏線文間に菊文と宝文。内面は圏線文、見込には文様有り	肥前系 1780～1840年代
287	〃	〃 〃	11.3	6.3	4.0	染付の端反碗で、外面には2条の圏線文間に宝文と松葉文、内面に圏線文、見込には寿文有り	19世紀以降
288	〃	〃 〃	11.5	6.2	4.0	染付の端反碗で、外面は3分割し草花文、内面に圏線文を配し、見込に文様有り	
289	〃	〃 〃	11.8	5.9	4.8	染付の端反碗で、器壁薄く透明釉がかかる。外面には松の文様を施す。	
290	〃	〃 杯	6.4	2.9	2.7	内面には上絵付の梅樹がみられるが、剥離している。高台畳付以外は透明釉が掛かる。	
291	〃	〃 蕎麦猪口	7.4	5.9	5.5	蛇ノ目高台で、外面に東屋を含む山水文を配し、見込に文様有り。口縁端部に褐釉を施す。	
292	〃	〃 蓋	10.5	2.8	—	染付で、外面には竹、口縁部内面に2重圏線文、見込に竹	つまみ径5.4cm
293	〃	〃 茶台	—	(4.3)	—	磁器の染付で、口縁部外面には突起状の装飾がめぐる。内外面ともに2重圏線文を配する。	肥前系
294	〃	〃 皿	9.5	2.2	5.3	染付の端反皿で、型押し成形。高台畳付は釉剥ぎを行い、内底部には松(松陰囊)と竹、梅を配する。	
295	〃	〃 〃	13.0	3.9	7.5	染付で、型押し成形。底部は蛇ノ目凹状高台。外面には流水と草、内面には河骨か水葵を配する。	1780～1860年代
296	〃	〃 〃	9.8	2.5	5.6	染付の輪花皿で、型押し成形。口縁端部は口鏝。内面には楼閣と山水文を配する。	能茶山産 1820年以降
297	〃	〃 〃	10.1	2.6	5.6	染付輪花皿で、型押し成形。口縁端部は口鏝、内面には楼閣、山水文	能茶山産 1820年以降
298	〃	〃 鉢	15.5	5.9	8.1	染付の端反鉢。外底部は蛇ノ目凹形高台で、砂目有り。高台外面に2重圏線文、体部に梅、口縁部内面に雷文と環状の松竹梅	
299	〃	白磁 皿	9.5	2.2	5.0	寿皿で、型押し成形。高台畳付を除き透明釉が掛かる。	瀬戸・美濃系 1855～1860年
300	〃	〃 紅皿	6.8	1.9	2.6	型押し成形。外面には蛸唐草文を配する。	18世紀後半以降

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
301	SD9	陶器 碗	13.3	7.3	5.7	内面から底部近くまで灰釉を施す。底部外面は釉をかきとる。	
302	〃	〃 蓋	5.1	1.5	－	天井部外面には施釉し、内面及びかえり部分は無釉	天井部径6.0cm
303	〃	〃 〃	4.2	3.1	－	外面には緑釉を施し、かえり部分には突起状の粘土塊を貼付	天井部径6.5cm
304	〃	〃 〃	4.2	4.0	－	外面には白化粧土を施し、3箇所文様有り。かえり部分は無釉	天井部径6.8cm。つまみ 径1.4cm。かえり径4.2cm
305	〃	〃 〃	－	2.7	－	軟質で、外底面には回転糸切り痕がみられ、口縁からつまみにかけて施釉。中央には丸いつまみを貼付する。	笠径10.0cm
306	〃	〃 〃	－	2.7	－	口縁端部と底部外面には重ね焼痕有り。外面は露胎で、内面に鉄釉を施す。	つまみ径1.4cm。 笠径11.1cm
307	〃	〃 播鉢	26.4	8.5	12.6	内面に10条単位、底部内面に8条単位の播目がみられる。	
308	〃	〃 〃	23.8	(7.1)	－	器面にはナデとケズリを施し、内面に8条単位の播目	
309	〃	〃 〃	31.8	(10.8)	－	器面にはナデとケズリを施し、内面に8条単位の播目	
310	〃	〃 灯明皿	10.7	2.2	3.6	底部外面は回転ヘラ切り痕が残り、外面はロクロ目顕著で、内底部には目痕が残る。	
311	〃	〃 台付灯明皿	6.9	5.1	3.9	底部外面に回転糸切り痕が残り、内面から底部近くまで鉄釉を施す。	
312	〃	〃 〃	6.3	5.0	－	台部を欠損し、器面には鉄釉を施す。	
313	〃	〃 餌猪口	5.0	2.5	4.2	内面から高台近くまで灰釉を施し、底部見込部分の器壁は非常に薄い。	
314	〃	〃 甕	25.4	(28.4)	－	胴部に接合痕が残る。内外面に褐釉を施し、頸部から胴部にかけて鉄釉の掛け流しがみられる。	胴径31.9cm
315	〃	〃 〃	32.4	(21.0)	－	器面には鉄釉を施す。外面の黒化部分は被熱痕とみられる。	胴径32.8cm
316	〃	〃 〃	33.8	(30.9)	－	内外面に褐釉を施し、外面には鉄釉の掛け流しがみられる。	胴径35.8cm
317	〃	〃 火入	10.0	8.9	9.3	削り出し高台で、体部は垂直気味に立ち上がり、口縁部は内傾し端部は肥厚させ平坦面をなす。内面と底部は露胎	
318	〃	土師質土器 小皿	6.4	1.1	4.0	底部切り離しは回転糸切りで、内外面とも回転ナデを施す。	
319	〃	〃 〃	6.0	1.2	3.9	底部切り離しは回転糸切りで、内外面とも回転ナデを施す。	
320	〃	〃 皿	12.0	2.1	8.0	白焼き土器とみられるもので、底部内面に草花文の陽刻有り	
321	〃	〃 焙烙	30.2	(4.7)	－	内外面ともにナデ調整を施す。	19世紀前葉
322	〃	〃 〃	46.1	(4.1)	－	口縁部は外反し、内外面とも強いナデを施す。	
323	〃	瓦質土器 火鉢	－	(5.1)	－	底部外面には脚部を貼付し、内外面ともに摩耗する。	
324	〃	瓦 丸瓦	(11.5)	(7.6)	3.1	頭のみ残存し、全体にナデを施す。	
325	〃	土製品 焜炉	21.6	(5.7)	－	口縁内面に突起状の粘土塊を貼付し、口縁部下約4cmの箇所径約1cmの焼成前穿孔有り。内外面にはナデ調整を施す。	

遺物観察表 38

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
326	SD9	土製品 甕	28.6	(5.6)	—	口縁端部にヘラ削り、口縁部内外面にナデを施し、胴部内面に布目が残る。口縁部外面には刺突文を配し、口縁部には煤が付着	
327	〃	〃 〃	36.4	(10.5)	—	外面は強いナデ、口縁下には刺突文様が巡る。内面には布目痕が残り、煤が付着	
328	〃	石製品 石筆	4.4	0.6	0.7	使用により摩滅し、石材は滑石とみられる。	重量 3.3g
329	〃	〃 硯	10.1	6.8	2.4	墨が付着し、墨をすったと考えられる浅い凹みがみられ、裏面には線刻を施す。	重量 (197.2) g
330	〃	〃 砥石	(7.0)	6.5	2.3	4面に使用痕がみられ、石材は砂岩	重量 (168.4) g
331	〃	〃 〃	(10.4)	5.0	3.3	3面に使用痕がみられる。	重量 (326.0) g
332	〃	〃 〃	15.6	4.6	1.4	4面に使用痕がみられ、一部に線刻の文様有り	重量 172.9g
333	〃	金属製品 銭貨	—	—	0.1	寛永通宝で、約1/2欠損する。	量目 (1.4) g
334	〃	〃 〃	2.4	2.0	0.2	寛永通宝	量目 3.9g
335	〃	〃 〃	2.6	2.1	0.2	寛永通宝	量目 3.0g
336	SD10	土師質土器 小皿	6.7	0.8	4.7	底部切り離しは回転糸切りで、内外面にナデを施す。	
337	SD11	磁器 碗	7.6	4.4	3.1	染付の小碗で、外面に草花文、高台に圏線文を配し、畳付は露胎	
338	〃	陶器 〃	—	(5.7)	5.3	削り出し高台で、内底面には目痕が残る。高台を除き全面に灰釉を施す。	
339	〃	〃 甕	28.4	(6.4)	—	口縁部は大きく外反し、外面にはロクロ目が残る。内面はナデ調整で、内外面に褐釉を施す。	
340	〃	土師質土器 小皿	6.9	0.7	5.4	底部切り離しは回転糸切りで、口縁部の一部に煤が付着	
341	SD12	瓦 軒棧瓦	(4.3)	4.4	1.8	中心飾りは三ツ巴文で、両側に均等唐草文。全体に丁寧なナデを施し、キラ粉がみられる。	
342	SD13	磁器 碗	6.8	3.1	2.8	上絵付の小碗で、高台畳付を除き透明釉が掛かる。文様は不明	
343	〃	〃 〃	8.7	4.8	3.6	染付小碗で、内面に圏線文を配し、見込に文様有り。外面には菊文、口縁と高台には圏線文を施す。	肥前系 19世紀代
344	〃	〃 〃	—	(2.4)	5.2	陶胎染付の広東碗で、高台欠損部分有り。内底と高台内には目痕がみられ、見込には梅を配する。	
345	〃	陶器 〃	—	(4.8)	6.4	削り出し高台で、外面に白化粧土がみられる。見込には目痕が残る。	
346	〃	〃 皿	12.2	5.0	4.5	端反の皿で、高台を除き鉄釉を施す。見込には蛇ノ目釉剥ぎを行う。	
347	〃	〃 鉢	16.6	(5.4)	—	口縁部は外反し、端部は上方につまみ上げる。口縁部は黄褐色釉、体部は褐釉を施す。	
348	SD14	磁器 碗	—	(3.1)	6.6	碗で、内面に波文、見込に花文を配し、高台外面には「茶」の銘有り。高台畳付は釉剥ぎを行う。	能茶山産 1820年以降
349	〃	石製品 砥石	8.7	4.4	4.0	4面に使用痕がみられ、石材は砂岩である。	重量 223.5g
350	SD18	白磁 紅皿	4.2	2.2	2.3	型押し成形で、外面には貝殻状の型押しを行う。高台畳付は露胎	

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
351	SD18	陶器 播鉢	-	(3.9)	-	器面にはナデを施し、内面には10条単位の播目がみられる。	
352	SE1	瓦質土器 火鉢	-	(3.8)	-	胴部破片で、外面に文様有り	
353	P1	土師器 杯	13.0	3.4	8.5	摩耗が著しく調整は不明	
354	〃	〃 〃	13.7	3.1	7.8	摩耗が著しく調整は不明	
355	〃	〃 〃	13.4	3.5	6.2	摩耗が著しく調整は不明	
356	〃	須恵器 甕	19.8	51.9	-	口縁部内外面にヨコナデ、胴部外面にナデとタタキ、胴部内面にヘラ削りとナデを施し、口縁部内面に「ハ」字形のヘラ記号	胴径36.1cm
357	P2	土師質土器 焙烙	33.0	(4.1)	-	器面には強いナデを施し、内側には煤が付着する。	
358	P3	磁器 皿	12.4	(3.4)	-	染付の皿で、内面には格子文を配し、見込には蛇ノ目釉剥ぎを行う。	肥前系
359	P4	陶器 〃	-	(3.4)	6.2	皿で、高台を除き施釉する。内面は銅緑釉と鉄釉を掛け分けし、見込は蛇ノ目釉剥ぎを行う。	1690～1780年代
360	P5	土師質土器 小皿	7.0	1.3	4.1	底部切り離しは回転系切りで、器面にはナデを施す。	
361	〃	金属製品 銭貨	2.5	2.0	0.2	寛永通宝	量目2.4g
362	SX3	常滑焼 甕	-	(6.3)	-	口縁端部をつまみ上げ、内面には段がつく。内面には指オサエがみられる。	
363	SX5	磁器 碗	-	(6.1)	6.5	染付の広東碗で、高台畳付は釉剥ぎを行い、砂が付着。外面には圏線文と不明文様、内面には圏線文、見込には波文と水文	肥前系
364	〃	〃 杯	6.5	3.3	2.4	染付の小杯で、高台畳付は釉剥ぎを行い、砂目付着。口縁部外面には波文を配する。	肥前系
365	〃	〃 蓮華	-	2.6	-	染付蓮華で、型押し成形。内面は楼閣と山水文を配し、底部外面には銘有り	能茶山産
366	〃	白磁 皿	13.3	4.3	7.8	菊皿で、型押し成形。底部は蛇ノ目凹状高台で、口縁部は口鏤。	
367	〃	陶器 碗	6.6	3.9	3.0	小碗で、口縁端部と高台を除き、透明釉を施し、細かい貫入がみられる。	
368	〃	〃 蓋	4.4	1.1	-	段重の蓋とみられるもので、天井部は施釉し、内面は露胎。	天井部径6.0cm
369	〃	〃 急須	-	(9.1)	7.0	底部側面に径約1cmの粘土塊を添付し、胴部外面途中までと内面の一部に鉄釉を施す。	胴径13.2cm
370	〃	土師質土器 火鉢	-	(8.1)	-	外面にヨコナデを施し、内面に布目がみられる。外面の一部に被熱痕有り	
371	〃	土製品 獸面	-	-	-	型押し成形で、内面にナデ調整と指頭圧痕がみられる。	
372	〃	石製品 砥石	9.7	5.1	1.3	4面に使用痕がみられる。	重量117.7g
373	〃	金属製品 銭貨	2.5	2.0	0.2	寛永通宝	量目4.0g
374	SX19	白磁 皿	-	(1.8)	3.6	腰折の皿で、内外面に透明釉を施し、高台畳付は釉剥ぎを行う。	
375	〃	石製品 石臼	(12.0)	(6.6)	(13.0)	上臼の破片で、表面には明瞭な加工痕が残る。使用面には2条の播目がみられ、石材は砂岩	重量(1333.5)g

遺物観察表40

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
376	SX19	石製品 砥石	7.6	3.4	2.3	1面のみ使用痕がみられる。	重量55.9g
377	〃	〃 〃	(10.1)	(5.9)	3.8	3面に使用痕がみられ、石材は砂岩	重量(323.9)g
378	SX27	磁器 杯	-	(1.4)	3.0	上絵付の杯で、内面には木と水を配する。	
379	SX28	〃 碗	11.2	(2.8)	-	染付の碗で、外面には草文、内面には圏線文を配する。	
380	SX30	〃 〃	-	(3.2)	3.5	陶胎染付の小碗で、高台畳付は釉剥ぎを行い、砂が付着。外面には圏線文を配する。	
381	SX32	〃 猪口	7.8	(3.8)	-	染付の猪口で、外面に草花文を配する。	
382	SX33	陶器 碗	-	(1.8)	3.3	高台を除き青磁釉を施釉し、貫入が入る。	
383	SX40	〃 皿	11.2	2.3	4.7	内面から口縁部外面まで施釉し、貫入が入る。口縁部内面には菊の型押し浮文を貼付し、一部に櫛目	
384	SX42	土師質土器 小皿	5.9	1.1	4.1	底部切り離しは回転糸切りで、器面にはナデを施す。	
385	SX46	青磁 香炉	11.2	(5.8)	-	口縁端部はやや内傾し、内面は口縁下まで施釉する。	胴径11.6cm
386	〃	白磁 紅皿	4.2	1.3	1.4	型押し成形で、内面及び口縁部外面に白濁釉を施す。	
387	〃	陶器 土瓶	-	(4.0)	9.0	ロクロ成形で、内面に褐釉を施し、外面は無釉。底部側面には直径約1cmの粘土塊を貼付	
388	SX49	磁器 蓋	4.5	1.0	-	染付の合子蓋とみられるもので、口縁端部は釉剥ぎを行う。天井部と側面に文様有り	
389	〃	陶器 碗	6.0	4.0	3.2	小碗で、高台を除き全面に透明度の高い灰釉を施釉する。	瀬戸・美濃系
390	〃	土師質土器 火入	-	(4.6)	8.3	底部外面には縄目状痕有り。外面はケズリの後ナデ、内面は底部との接合部分はヘラケズリと指オサエを施す。	
391	SX50	陶器 碗	8.5	(5.3)	-	内外面に施釉し、口縁端部は口錆	
392	SX51	〃 灯明皿	9.0	2.0	3.6	ロクロ成形で、内面に白色土。口縁部内外面にタールが付着	
393	〃	金属製品 刀子	(22.1)	3.7	1.1	先端部を欠損し、錆膨れのため元の形状は不明	重量(92.9)g

I E ~ G · II ☒

I E区1

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
1	SK3	磁器 碗	11.0	6.6	6.5	削り出し高台で、外面に鷲と圏線、内面に圏線を配し、見込に銘有り	
2	〃	〃 〃	10.3	6.3	4.1	型紙摺絵の碗で、型押し成形、高台外面に柵状文、内面に圏線文、見込に麒麟文を配する。	
3	〃	〃 杯	7.0	2.6	2.4	染付の杯、型押し成形で、削り出し高台、外面に鋸歯圏線文を配し、底部内面に「山川」銘有り	
4	〃	〃 蓋	9.0	2.6	-	削り出しつまみで、外面に竹文と圏線文、内面に雷文を配し、つまみ内に圏線文を施す。	つまみ径3.2cm
5	〃	〃 皿	10.4	3.8	3.9	陶胎染付の皿で、削り出し高台、内面に呉須線文と格子文を配し、外面に緑灰色釉、内面に灰白色釉を施す。畳付は露胎	
6	〃	〃 〃	13.0	3.5	8.0	型紙摺絵の輪花皿で、削り出し高台、外面に草花文と圏線文、内面に草花文を配し、内外面に白色釉を施す。	
7	〃	〃 〃	19.2	1.9	11.8	上絵付の段皿で、内面に三又葉文を配し、器面には透明釉を施す。高台畳付は露胎	
8	〃	〃 瓶	1.7	5.7	2.8	染付の小瓶で、削り出し高台、外面に文様を配し、高台は露胎	
9	〃	〃 鉢	15.0	5.1	7.8	染付の鉢で、外面に圏線文と唐草文、内面に波文と山水文、高台内に圏線文と銘を施す。高台畳付は露胎	
10	〃	〃 火入	-	(16.4)	16.6	染付の火入で、削り出し高台、外面に竹と花、圏線を配する。外面には透明釉を施し、内面と底部外面は露胎	胴径18.9cm
11	〃	白磁 紅皿	4.3	1.4	1.3	型押し成形で、外面に放射肋文を型押し、内面と外面上半に白色釉を施す。	
12	〃	陶器 碗	12.5	7.8	5.2	鎧茶碗で、削り出し高台、外面下半に飛鉋を施し、内面と外面上半に灰黄色釉、外面下半に薄い褐色釉、見込には胎土目	
13	〃	〃 蓋	9.4	(2.1)	-	上絵付蓋で、天井部外面に桜桃を配する。器面には白色釉を施し、かえり部は露胎	笠径10.8cm
14	〃	〃 土瓶	8.4	(12.8)	7.9	付け耳と注口を貼付し、注口先端部は欠損する。外面上半に緑色釉を施し、口縁部内面には白土掛け。底部外面に墨書有り	胴径18.8cm
15	〃	〃 把手	8.8	3.0	2.8	行平鍋の把手で、表面には蓮弁と松を陽刻し、灰黄色釉を施す。	
16	〃	石製品 砥石	9.3	7.4	5.1	荒研ぎ用と考えられ、5面に使用痕がみられる。石材は安山岩	重量566.9g
17	SK9	磁器 皿	13.9	3.5	8.2	陶胎染付の皿で、蛇ノ目高台、外面に鳥様文と圏線文、内面と見込に笹文と圏線文を配し、器面に白色釉を施す。	
18	SK13	〃 猪口	7.9	6.2	5.8	削り出し高台で、外面に圏線と不明な呉須文、内面に圏線文を配し、高台畳付は露胎	
19	〃	〃 蓋	7.9	2.0	-	削り出しのつまみとみられ、外面にコンニャク印判花卉を3箇所配し、つまみ畳付は露胎	つまみ径2.4cm
20	〃	〃 皿	13.3	3.7	8.3	型紙摺絵の輪花皿で、蛇ノ目高台、外面に圏線と花卉、内面に矢文を配し、胎土目が5箇所残る。	
21	〃	〃 瓶	-	(12.9)	8.3	染付の瓶で、削り出し高台、外面に圏線文と不明な呉須文を配し、内面と高台畳付は露胎で、他の部位には白色釉を施す。	胴径15.1cm
22	〃	陶器 鉢	16.9	17.6	10.8	植木鉢で、削り出し高台、外面と口縁部内面に黒鉄釉を刷毛塗りし、他の部位は露胎	
23	〃	土師質土器 羽釜	10.3	7.3	5.5	ロクロ輪積み成形で、器面にはナデを施す。外面下半部には煤、口縁部外面には焦げが付着する。	鏝径13.6cm
24	〃	〃 焙烙	47.2	(8.4)	-	型押し成形で、内面にケズリとナデ、外面にナデを施し、外面下半部に煤、内面下半部に焦げが付着する。	
25	〃	土製品 竈	13.7	10.0	12.3	側面に空気孔を2個1対で3箇所、計6個穿孔し、底部内面下端には隆帯を巡らす。内外面にはナデを施し、内面には煤	

I E区2

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
26	SK19	磁器 瓶	1.4	9.5	3.1	染付の小瓶で、削り出し高台、外面の前後に岩と草、若松を配し、器面には白色釉を施す。壘付は露胎で、砂目が残る。	胴径4.4cm
27	〃	白磁 紅皿	5.8	1.8	2.0	型押し成形で、外面には渦文を型押しする。高台壘付には煤が付着	
28	〃	陶器 皿	13.4	5.0	5.4	削り出し高台で、内外面に鉄釉を二度掛けし、外面下端部と見込は露胎、見込には白土塗りがみられる。	
29	〃	〃 土瓶	8.4	(7.2)	-	鉄絵の土瓶で、付け耳を貼付する。外面に馬目文とみられるものと圏線文を配し、口縁部内面と外面には白色釉を施す。	胴径12.4cm
30	〃	〃 〃	-	(4.5)	7.4	鉄絵の土瓶で、外面中位に3重圏線文を配し、白色釉を施す。他の部位は露胎で、底部外面には煤が付着する。	胴径12.8cm
31	〃	〃 〃	-	(5.2)	-	鉄絵土瓶の注口部で、外面に圏線がみられ、白色釉を施す。内面は露胎	
32	SD3	磁器 皿	-	(2.5)	3.9	削り出し高台で、内面に呉須文を配す。器面には白濁釉を施し、底部外面は露胎で、見込は蛇ノ目釉剥ぎを行う。	
33	〃	〃 〃	-	(3.1)	8.6	削り出し高台で、内面に圏線文と不明呉須文、外面に不明呉須文を配し、器面には白濁釉を施す。見込は蛇ノ目釉剥ぎを行い、高台壘付は露胎	
34	〃	〃 仏飯器	-	(3.9)	4.5	削り出し高台で、砂目が残る。外面には2重圏線を配し、器面はやや白濁した釉を施す。高台外面は露胎	
35	〃	陶器 碗	12.0	(6.7)	-	丸碗で、器面には黄橙色の釉を施し、一部細かい貫入が入る。	
36	〃	〃 皿	18.0	(3.3)	-	内外面に鉄釉を施すが、釉ムラがみられる。	
37	〃	〃 鉢	-	(5.4)	8.2	削り出し高台で、外面に鉄釉、内面に薬灰釉を刷毛塗りし、高台部内側は露胎	
38	〃	〃 播鉢	-	(4.5)	-	内外面にヨコナデ、外面にはケズリを施し、内面には播目がみられる。	
39	〃	〃 〃	-	(5.6)	-	口縁部内外面にヨコナデ、外面にケズリとヨコナデを施し、内面には播目がみられる。	
40	〃	〃 灯明皿	8.0	1.3	3.6	内面にナデ、外面に回転ヘラ削りを施し、口縁部には煤が付着する。	
41	〃	土製品 土人形	8.0	3.0	2.1	型作りで、虚無僧を模している。	
42	〃	金属製品 銭貨	2.3	1.9	0.1	寛永通宝	量目2.5g
43	SX2	磁器 碗	10.3	5.6	4.2	染付の端反碗で、削り出し高台、外面に花文と圏線文、内面に雷文と圏線文を配す。	
44	〃	〃 鉢	13.0	5.2	6.6	染付の鉢で、蛇ノ目高台、外面に圏線とカラスウリとみられる文様、内面に圏線と格子を配し、見込にも文様有り。器面には白濁した釉を施す。	
45	〃	〃 徳利	-	(6.4)	5.4	器面には透明釉を施し、底部外面は露胎	胴径6.2cm
46	〃	〃 火入	10.6	9.1	10.3	染付の火入で、外面に松と舟などを配し、器面には透明釉を施す。底部外面は露胎で、底部内面には砂目が残る。	
47	〃	陶器 蓋	-	(1.5)	-	鉄絵の蓋、切り離しは糸切りで、外面に圏線と草を配す。外面には自然釉が掛り、内面は露胎	笠径7.9cm。瀬戸系 19世紀代
48	〃	〃 瓶	3.0	(5.5)	-	折り返し口縁を呈し、外面と口縁部から頸部内面に鉄錆釉	
49	〃	〃 火入	10.4	(7.0)	-	器面には白色釉を施し、口縁端部内面と体部内面は露胎	
50	〃	〃 甕	27.7	30.2	14.6	内外面に鉄釉を施し、外面には黒鉄釉の流し掛けがみられる。底部外面は露胎で、砂目が残る。	胴径29.2cm

I E区3

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
51	SX2	陶器 甕	28.6	(3.5)	—	口縁部破片で、ロクロ成形、内外面に鉄釉を施す。	
52	〃	〃 〃	—	(7.1)	—	口縁部破片で、ロクロ成形、内外面に鉄釉を施す。	
53	〃	〃 〃	—	(5.8)	10.4	底部破片で、内外面に鉄釉を施す。外面には黒鉄釉の掛け流し。底部外面は露胎で、砂目が残る、底部内面には胎土目が残る。	
54	〃	土製品 甕	—	(9.1)	14.4	胴部中位には空気孔を穿孔し、器面には白土掛けがみられる。底部には砂目が残る。	胴径15.1cm
55	〃	石製品 砥石	12.8	5.1	3.6	3面に使用痕がみられ、石材は片岩と考えられる。	重量502.1g
56	〃	〃 〃	18.5	7.3	0.9	2面に使用痕がみられ、石材は凝灰岩と考えられる。	重量178.8g
57	SX6	陶器 甕	—	(9.2)	—	胴部破片で、外面に粘土帯を貼付し、内面にナデとタタキ、外面にヨコナデを施す。	
58	〃	〃 〃	—	(5.9)	15.8	外面に鉄釉、内面に薬灰釉を施し、外面には黒鉄釉の掛け流しがみられる。底部外面は露胎で、砂目が残る。	
59	SX9	青磁 火入	11.7	(5.8)	—	ロクロ成形で、外面と口縁部内面に青磁釉、胴部中位に透明釉を施し、胴部下半は露胎	
60	〃	土師質土器 小皿	6.6	1.1	3.2	底部切り離しは糸切りで、内外面にナデを施す。	

I F区

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
1	SD1	須恵器 甕	—	(6.0)	—	胴部破片で、内面にナデ、外面にタタキを施す。	
2	SR1	土製品 土錘	(4.4)	(3.2)	(1.7)	一部が残存し、摩耗のため調整は不明	重量(13.1)g
3	〃	土師質土器 小皿	—	(1.5)	—	手づくね成形で、器面にはナデを施す。	
4	〃	土製品 土錘	(1.7)	0.9	0.9	一部が残存する。	重量(0.9)g
5	包含層	陶胎染付 皿	—	(2.9)	10.0	底部破片で、内面に不明文様と菊花の型押し有り。畳付は露胎	
6	〃	磁器 〃	—	(2.1)	14.4	染付の皿で、内面に山水文とみられる文様有り。外面には少し染付が残るが不明である。畳付には砂が付着	
7	〃	瓦 平瓦	(5.3)	(9.5)	(2.6)	一部が残存し、表面には丁寧なヘラ削りを施し、凸面に細かな格子状のタタキ目がみられる。	
8	〃	〃 〃	(3.8)	(3.1)	—	凸面の一部が剥離したもので、表面には縄目状のタタキ目がみられる。	
9	〃	〃 〃	(9.0)	(7.5)	(1.6)	凹面に布目圧痕、凸面にヘラ削り調整がみられ、側面は面取りを行う。	
10	〃	土師器 羽釜	—	(2.5)	—	口縁部破片で、摩耗が著しいが、外面の一部にヨコナデ調整が残る。	
11	I層	陶器 片口鉢	—	(3.8)	—	付注口破片、粘土板切り出しで、押圧接合、内外面には鉄釉	
12	〃	白磁 罌子	—	(2.7)	—	型押し成形で、外面には放射肋陽刻、内面にはネジ山	

遺物観察表44

I G区

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
1	SU1	須恵器 杯蓋	-	(1.8)	-	天井部が残存し、器面には回転ナデを施す。	

II区

番号	遺構 層位	器種 器形	法量			特徴	備考
			口径	器高	底径		
1	II A区 III層	土師器 椀	-	(1.9)	7.4	内外面ともにナデ調整	高台部分のみ残存
2	II B区 SK1	土師質土器 小皿	7.8	(1.3)	-	内外面ともにナデ調整	小片にて残存
3	〃 SD1	陶器 皿	-	(1.3)	7.4	内外面に釉を施す。見込に二重の沈線、皿部に菊花を抉る。	古瀬戸菊皿
4	〃 〃	石製品 砥石	(3.5)	2.6	(0.5)	長方形を呈する。表面に使用痕	重量(6.8)g 材質は頁岩か?
5	〃 SD2	瓦器 椀	13.4	(2.9)	-	内湾ぎみに立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。	和泉型
6	〃 〃	鉄製品 不明	2.1	5.6	0.2	形状は山形。体部に逆Y字形の透かし。頂端部に突起有り	重量4.4g。飾り金具か、 火打金の可能性有り
7	〃 I層	須恵器 杯蓋	13.8	(1.1)	-	内外面ともにナデ調整	口縁部小片にて残存
8	〃 〃	緑釉陶器 椀	13.2	(3.3)	-	内外面に緑釉を施す。内湾ぎみに立ち上がり口縁部はやや外反する。	京産系

土坑計測表

I A区

遺構番号	グリッド番号	平面形態	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
SK 1	B1-14-7	不整形	2.90	1.65	73	
SK 2	B1-10-17	長方形	5.00	2.80	30	
SK 3	B1-10-19	楕円形	3.00	2.15	30~55	現代攪乱に東側を大きく切られる。
SK 4	B1-10-5	長方形	3.20以上	1.30	30	床に径50cm, 深さ30cmのピットがある。
SK 5	B1-14-5	〃	4.00	0.90	10	
SK 6	B2-6-2	楕円形	1.78	1.20	30	
SK 7	B2-1-1	不整形	-	-	-	SD4に切られ, SD5を切っている。
SK 8	B2-6-2	方形	1.90	1.80	50	
SK 9	B1-10-18	楕円形	1.50	1.40	27	
SK10	B2-6-1	方形	1.85	1.65	40~55	SD3を切る。
SK11	B1-10-21	隅丸方形	1.14	0.90	20	
SK12	B2-6-1	〃	1.70	1.45	30	
SK13	B1-10-18	不整形	1.70	1.70	37	SK9と切合い
SK14	B1-10-14	溝状	2.10	0.90	27	SB5と切り合い
SK15	B2-6-8	隅丸方形	0.80	0.50	50	SK17と切合い
SK16	B2-1-24	溝状	2.00	0.70	6	SD13, SD14と切り合う。
SK17	B2-6-7	長方形	3.50以上	1.30	10	
SK18	B2-6-2	隅丸長方形	-	0.90	10	
SK19	B2-1-19	〃	2.38	0.95	48	
SK20	B2-1-25	長楕円形	1.68	0.70	30	
SK21	B2-1-24	〃	2.78	0.70	12	現代攪乱に切られる。
SK22	B2-1-25	不明	4.00	0.45	16~13	
SK23	B1-10-8	〃	-	-	50	SD4に切られる。
SK24	B2-2-22	楕円形	1.38	1.10	20	
SK25	B2-6-4	長方形	3.80	1.30	22	
SK26	B2-6-13	不整形	1.15	1.05	16	
SK27	B2-6-14	円形	1.90	1.90	40	
SK28	B2-6-10	〃	1.80	1.80	72	
SK29	B2-6-15	方形	1.20	1.16	30	
SK30	B2-6-20	円形	2.00	2.00	50	SD16・19に切られる。
SK31	B2-7-1	隅丸長方形	3.70	2.00	18	現代攪乱に切られる。
SK32	B2-6-25	円形	(2.00)	(2.00)	40	

I B区1

遺構番号	グリッド番号	平面形態	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
SK 1	B2-8-1	不整長方形	9.50	3.00	19	
SK 2	B2-19-12	楕円形	1.65	1.50	38	ハンダ土坑
SK 3	B2-19-12	円形	1.30	1.30	49	ハンダ土坑
SK 4	B2-19-18	円形か	(1.70)	(1.70)	36	ハンダ土坑
SK 5	B2-20-11	隅丸長方形	1.70	0.75	9	
SK 6	B2-19-20	楕円形か	1.20以上	1.00	40	
SK 7	B2-20-12	楕円形	1.40	1.05	8	
SK 8	B2-20-7	隅丸方形	1.50	1.35	23	
SK 9	B2-20-7	不整長方形	12.60	2.20	7	
SK10	B2-20-7	隅丸長方形	2.90	1.45	23	
SK11	B2-13-21	〃	2.55	1.60	6	
SK12	B2-20-7	〃	1.45	1.10	24	
SK13	B2-7-23	不整楕円形	(4.30)	2.50	13	SK14に切られる。
SK14	B2-7-23	隅丸方形	1.65	1.50	54	ハンダ土坑。SK13を切る。
SK15	B2-12-2	不整長方形	2.50	1.05	23	SD9・17を切る。
SK16	B2-12-2	隅丸長方形	1.65	1.20	45	ハンダ土坑。SK58を切る。
SK17	B2-12-15	〃	3.10	1.60	4	
SK18	B2-12-4	不整長方形	6.60	1.90	15	

土坑計測表2

I B区2

遺構番号	グリッド番号	平面形態	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
SK19	B2-7-25	不整長方形	3.30	1.40	23	
SK20	B2-8-6	隅丸長方形	4.00以上	2.10	11	SK21, SD13に切られる。
SK21	B2-8-6	不整円形	1.35	1.30	6	SD20を切る。
SK22	B2-8-14	不整楕円形	2.40	1.30	51	SD13と重複
SK23	B2-8-12	円形か	1.45	1.45	13	ハンダ土坑, SK50と重複
SK24	B2-13-8	不整形	7.30以上	2.85以上	9	SK25, SD20に切られる。
SK25	B2-13-4	隅丸長方形	3.30	2.10	18	SK24を切る。
SK26	B2-13-5	隅丸長方形	3.70	3.50	22	
SK27	B2-13-24	不整長方形	5.70	2.80	53	
SK28	B2-13-15	隅丸長方形	1.50	1.10	24	
SK29	B2-13-10	〃	4.25	1.30	35~48	SK63を切る。
SK30	B2-8-23	楕円形	1.10	1.05	48	
SK31	B2-14-11	隅丸長方形	1.60	0.95	20	SD25と柱穴を切る。
SK32	B2-13-15	〃	2.15	1.05	26	
SK33	B2-14-22	不整形	2.90	2.30	29	
SK34	B2-8-12	不整長方形	1.15	0.70	4	
SK35	B2-19-8	隅丸長方形	1.35	1.10	15	
SK36	B2-19-4	不整長方形	1.65	1.10	23	
SK37	B2-14-22	隅丸長方形	1.20	0.85	21	
SK38	B2-18-4	不整方形	0.80	0.80	12	
SK39	B2-14-11	隅丸方形	1.00	0.95	38	
SK40	B2-14-24	不整長方形	5.20	3.25	19	
SK41	B2-14-24	〃	2.80	2.15	27	
SK42	B2-19-5	隅丸長方形	1.70	1.00	22	
SK43	B2-19-3	不整形	2.50	1.90	7	
SK44	B2-14-12	溝状	3.95	0.90	54	
SK45	B2-20-19	隅丸長方形か	1.30以上	0.90	36	
SK46	B2-20-11	不整形	2.75	1.05	12	
SK47	B2-19-20	溝状か	2.15以上	1.20	7	
SK48	B2-14-1	不整長方形	3.36	1.52	33	
SK49	B2-14-7	溝状	1.46	0.20	6	
SK50	B2-8-7	不整形	2.30	2.30	13	ハンダ土坑, SK23と重複
SK51	B2-8-8	楕円形	(1.80)	(1.00)	31	
SK52	B2-7-15	〃	1.25	0.75	4	
SK53	B2-7-15	不整形	1.05	1.00	28	
SK54	B2-8-11	〃	2.20	2.20	16	
SK55	B2-8-18	隅丸台形	0.95	0.65	4	
SK56	B2-8-18	楕円形	0.80	0.60	3	
SK57	B2-12-3	円形	1.60	1.60	3	ハンダ土坑
SK58	B2-12-3	不整形	1.60	0.90	8	ハンダ土坑
SK59	B2-13-1	〃	4.05	1.80	10	
SK60	B2-13-2	〃	2.05	1.95	9	
SK61	B2-13-23	円形	1.60	1.60	-	
SK62	B2-13-23	〃	1.60	1.60	43	
SK63	B2-13-15	不整形	3.70	2.90	12	
SK64	B2-14-16	〃	(2.35)	1.80	11	
SK65	B2-14-13	隅丸方形	1.04	1.00	10	
SK66	B2-14-18	隅丸長方形	2.34	0.90	5	
SK67	B2-14-18	〃	2.08	0.70	7	
SK68	B2-14-18	〃	2.26	0.72	5	
SK69	B2-14-17	隅丸方形	1.20	1.10	-	
SK70	B2-14-22	隅丸長方形	1.60	1.00	16	
SK71	B2-14-22	〃	1.00	0.65	11	
SK72	B2-15-21	不整形	1.80	1.15	19	
SK73	B2-19-4	隅丸長方形	2.25	1.25	20	

I B区3

遺構番号	グリッド番号	平面形態	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
SK74	B2-19-3	隅丸長方形	1.35	(0.90)	9	
SK75	B2-19-3	〃	1.40	1.10	12	ハンダ土坑
SK76	B2-19-4	〃	1.70	0.90	15	
SK77	B2-19-9	〃	1.55	1.25	-	
SK78	B2-19-9	〃	1.05	0.55	8	
SK79	B2-19-9	楕円形	1.20	0.80	9	
SK80	B2-19-9	隅丸長方形	1.30	0.90	7	
SK81	B2-19-9	不整形	1.50	0.65	6	
SK82	B2-19-14	隅丸長方形	1.30	0.60	11	
SK83	B2-19-8	不整円形	1.05	0.95	15	
SK84	B2-19-10	隅丸長方形	1.45	1.00	6	
SK85	B2-19-10	〃	1.50	0.90	23	ハンダ土坑
SK86	B2-19-10	〃	1.20	1.00	-	ハンダ土坑
SK87	B2-20-6	〃	1.35	0.65	12	
SK88	B2-20-6	楕円形	1.15	0.75	8	
SK89	B2-19-15	不整形	2.00	1.50	25	
SK90	B2-19-15	隅丸長方形	2.00	1.30	38	
SK91	B2-19-15	楕円形	1.10	0.55	11	
SK92	B2-20-7	〃	1.20	1.00	39	ハンダ土坑
SK93	B2-20-13	隅丸方形	0.80	0.70	-	ハンダ土坑
SK94	B2-20-19	〃	1.05	(0.50)	15	
SK95	B2-20-20	不整形	0.85	0.75	3	

I C区1

遺構番号	グリッド番号	平面形態	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
SK 1	B2-9-7	楕円形	5.48	2.48	20	
SK 2	B2-9-3	長方形	3.10	0.90	10	
SK 3	B2-9-4	〃	4.30	1.00	18	
SK 4	B2-10-6	〃	7.80	1.50	40	
SK 5	B2-10-1	長楕円形	4.00	0.88	50	
SK 6	B2-4-20	楕円形	2.10	0.50	10	
SK 7	B2-4-20	長方形	2.60	0.84	14	
SK 8	B2-4-19	〃	2.34	0.90	28	SB3と切り合い
SK 9	B2-5-16	隅丸方形	0.80	0.70	45	
SK10	B2-4-15	楕円形	1.18	1.00	5	
SK11	B2-4-19	円形	0.90	0.90	6	
SK12	B2-4-17	隅丸方形	0.90	0.84	15	SB3と重複
SK13	B2-9-12	円形	1.80	1.80	30	
SK14	B2-5-11	〃	1.10	1.10	20	
SK16	B2-4-17	隅丸長方形	3.12	2.20	34	
SK17	B2-5-11	楕円形	1.00	0.52	7	
SK18	B2-4-13	不整形	1.53	1.50	50	SB3と重複
SK19	B2-8-5	円形	1.94	1.94	24	
SK20	B2-8-10	〃	2.00	2.00	26	
SK21	B2-9-6	長方形	1.83	1.48	17	ハンダ土坑
SK22	B2-3-25	楕円形	1.20	0.90	8	ハンダ土坑
SK23	B2-10-2	隅丸方形	0.82	0.70	24	
SK24	B2-8-9	不明	-	-	-	大部分が調査区外に出ている。
SK27	B2-5-25	円形	2.20	2.20	60	
SK28	B2-5-25	楕円形	0.70	0.45	25	
SK29	B2-9-2	〃	1.20	-	17	SK1に大きく切られている。
SK30	B2-5-18	円形	1.96	1.96	40	
SK31	B2-4-25	隅丸方形	1.08	0.94	30	

土坑計測表4

I C区2

遺構番号	グリッド番号	平面形態	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
SK33	B2-14-5	隅丸長方形	3.73	1.90	60	上面にハンダを貼っている。
SK34	B3-11-16	長方形	1.86	0.86	20	
SK35	B3-6-1	長方形?	-	-	20	
SK36	B3-6-1	円形	2.08	2.08	70	
SK37	B3-6-6	隅丸方形	1.45	1.20	18	
SK38	B3-6-7	不整形	3.18	1.80	44	
SK39	B3-6-1	円形	2.08	2.08	80	
SK40	B3-6-6	隅丸長方形	1.60	1.15	23	
SK41	B3-6-8	方形	4.80	3.40以上	50	大部分調査区外に出ている。
SK42	B3-6-1	円形	2.12	2.12	50	
SK43	B3-6-18	方形	1.80	1.70	60	
SK44	B3-6-19	〃	1.84	1.78	70	
SK45	B3-6-19	〃	1.90	1.76	70	
SK46	B3-6-14	隅丸方形	2.58	2.20	66	
SK47	B3-7-17	隅丸長方形	1.40以上	1.30	10	
SK48	B2-9-18	長楕円形	2.70	1.10	26	SD3と重複
SK49	B2-5-18	円形	0.90	0.90	37	
SK50	B2-15-14	不整形	5.70	3.60	22	
SK51	B3-6-9	長方形?	-	-	20	
SK52	B3-6-24	隅丸長方形	0.84	0.68	15	
SK53	B3-11-14	不明	7.00前後	2.40以上	30	SD7を切る。
SK54	B3-6-9	不整形	0.90	0.60	10	
SK55	B3-11-4	楕円形	1.20	0.70	20	
SK56	B3-6-23	隅丸方形	1.65	1.50	35	
SK57	B3-11-9	長方形	2.10	0.80	12	
SK58	B2-10-25	不整形	2.10	1.00	45	
SK59	B2-10-25	長方形	1.40	0.70	30	
SK60	B2-15-5	隅丸長方形	1.70	0.80	15	SK69と切り合い
SK61	B3-11-12	溝状	4.65	1.00	20	
SK62	B3-11-12	〃	4.80	1.10	20	
SK63	B2-15-9	円形	0.80	0.80	44	
SK64	B3-11-1	〃	1.10	1.10	35	SK66と切り合い
SK65	B3-11-7	溝状	4.90	1.00	20	
SK66	B3-11-7	円形	0.70	0.70	25	SK64と切り合い
SK68	B2-15-15	溝状	3.90	0.65	18	
SK69	B2-15-4	長方形	1.40	0.50	20	
SK70	B2-15-7	隅丸方形	1.70	1.70	40	
SK71	B2-15-7	長方形	1.80	1.40	55	
SK72	B2-15-13	楕円形	2.10	-	40	
SK73	B2-15-13	〃	2.20	1.30	53	
SK74	B2-15-13	〃	2.10	1.90	50	
SK75	B2-15-8	隅丸方形	1.90	1.70	50	
SK76	B2-15-12	円形	1.50	1.50	45	
SK77	B3-11-11	不整形	1.40	0.60	25	
SK78	B3-11-7	〃	1.10	0.55	15	
SK79	B2-15-12	〃	2.00	1.70	54	
SK80	B3-7-16	方形	2.00	1.50	20	

I D区1

遺構番号	グリッド番号	平面形態	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
SK 1	B3-17-18	楕円形	1.40	-	12~14	
SK 2	B3-17-18	〃	1.20	-	11~16	
SK 3	B3-17-25	不整形	0.50	0.40	15~32	

I D区2

遺構番号	グリッド番号	平面形態	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
SK 4	B3-17-4	隅丸方形	1.40	1.20	23	
SK 5	B3-17-17	〃	1.80	1.80	62	
SK 6	B3-17-15	隅丸長方形	1.80	0.70	14~20	
SK 7	B3-17-2	〃	2.30	0.60	13~16	
SK 8	B3-12-25	〃	1.90	0.50	15~20	
SK 9	B3-12-25	〃	1.30	0.70	24	
SK10	B3-12-25	不整形	0.70	0.70	17	
SK11	B3-17-4	隅丸長方形	2.10	0.60	13	
SK12	B3-17-4	〃	3.10	0.60	12~24	
SK13	B3-17-16	円形	1.70	1.60	66	
SK14	B3-17-10	隅丸長方形	1.50	-	19	
SK15	B3-17-4	不整楕円形	3.20	0.60	10~14	
SK16	B3-16-20	不整形	1.70	1.20	3~19	
SK17	B3-17-16	〃	1.40	0.40	5	
SK18	B3-17-20	楕円形	0.60	0.50	10	
SK19	B3-17-4	不整隅丸長方形	1.80	0.50	5~20	
SK20	B3-12-18	〃	1.80	0.90	12~16	
SK21	B3-12-24	隅丸方形	1.50	1.40	52	
SK22	B3-17-7	隅丸長方形	1.80	0.70	13	
SK23	B3-17-8	長楕円形	3.30	0.90	4~6	
SK24	B3-17-2	隅丸長方形	3.00	1.20	9~21	
SK25	B3-17-2	〃	3.20	1.10	8~29	
SK26	B3-12-23	〃	2.40	1.30	29~32	
SK27	B3-16-15	不整隅丸長方形	1.50	1.30	14	
SK28	B3-16-9	円形	1.80	1.70	51~54	
SK29	B3-16-14	不整円形	1.20	1.10	21	
SK30	B3-12-22	隅丸長方形	2.50	1.10	17~21	
SK31	B3-12-22	〃	1.20	0.90	19	
SK32	B3-12-22	〃	1.60	1.00	16	
SK33	B3-12-17	楕円形	0.70	0.50	17	
SK34	B3-17-7	隅丸方形	0.70	0.60	6	
SK35	B3-12-16	円形	1.20	1.10	14~17	
SK36	B3-12-17	隅丸長方形	2.10	1.10	9~11	
SK37	B3-12-17	不整隅丸長方形	1.60	0.80	8~10	
SK38	B3-12-16	隅丸方形	1.40	1.20	19~29	
SK39	B3-16-9	楕円形	1.00	0.90	18~29	
SK40	B3-12-19	不整楕円形	1.60	0.80	7~13	
SK41	B3-12-18	不整形	1.90	0.70~1.30	6~11	
SK42	B3-11-20	隅丸方形	1.70	1.50	26~35	
SK43	B3-16-8	隅丸長方形	1.60	0.70	6~12	
SK44	B3-16-11	〃	2.00	-	28	
SK45	B3-16-7	不整隅丸長方形	1.20	0.60	12~14	
SK46	B3-16-5	〃	1.80	1.20	13~15	
SK47	B3-17-1	隅丸長方形	1.60	0.80	19~22	
SK48	B3-16-15	隅丸方形	0.90	0.80	20	
SK49	B3-11-24	隅丸長方形	-	1.30	49	
SK50	B3-16-3	〃	1.80	0.90	11~20	
SK51	B3-16-4	円形	1.40	1.30	47	
SK52	B3-17-6	不整隅丸長方形	1.80	0.80	15	
SK53	B3-16-9	隅丸方形	1.90	1.80	50	
SK54	B3-18-12	不整楕円形	1.10	0.90	13	
SK55	B3-16-4	円形	1.80	1.70	52	
SK56	B3-13-19	不整形	1.90	0.60~0.90	9~15	
SK57	B3-12-23	隅丸長方形	1.00	-	19	
SK58	B3-12-23	〃	2.30	0.70	10~15	

土坑計測表6

I D区3

遺構番号	グリッド番号	平面形態	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
SK59	B3-12-23	隅丸長方形	2.60	-	9~22	
SK60	B3-16-20	円形	0.80	0.70	10	
SK61	B3-12-23	隅丸長方形	1.60	0.90	11~28	
SK62	B3-16-3	楕円形	2.10	1.80	82	
SK63	B3-11-24	不整楕円形	2.00	1.20	20~37	
SK64	B3-8-1	円形	1.50	1.40	29~33	
SK65	B3-8-7	〃	1.00	0.90	12	
SK66	B3-16-4	隅丸長方形	2.10	1.60	2	
SK67	B3-11-25	不整楕円形	1.50	1.20	8~16	
SK68	B3-12-16	〃	0.90	0.50	27	
SK69	B3-16-3	隅丸長方形	-	-	21~51	
SK70	B3-18-7	不整形	2.40	1.00	5~10	
SK71	B3-17-25	隅丸長方形	-	0.90	23~63	
SK72	B3-12-6	円形	1.60	1.60	75~90	
SK73	B3-16-4	〃	1.60	1.50	43	
SK74	B3-16-4	〃	1.70	1.60	8~11	
SK75	B3-16-4	〃	-	-	32	
SK76	B3-12-17	隅丸長方形	1.40	0.70	11	
SK77	B3-11-25	〃	1.20	1.00	17	

I E区

遺構番号	グリッド番号	平面形態	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
SK 1	B2-5-14	溝状	-	0.60	8~17	
SK 2	B2-5-19	-	-	-	3~8	
SK 3	B2-5-20	隅丸方形	1.70	1.60	76~77	
SK 4	B2-5-20	〃	-	1.50	64~68	
SK 5	B2-5-20	円形	1.40	1.40	67~70	
SK 6	B3-1-16	不整楕円形	1.10	0.70	37~43	
SK 7	B3-1-22	円形	1.10	1.00	13~18	
SK 8	B3-1-22	隅丸長方形	1.40	1.00	29~32	
SK 9	B3-1-23	〃	2.20	1.20	9~13	
SK10	B3-1-24	〃	2.00	1.10	14~17	
SK11	B3-1-19	長楕円形	1.30	1.10	12~16	
SK12	B3-2-21	隅丸長方形	1.30	0.80	20~23	
SK13	B3-2-22	隅丸方形	1.40	1.40	22~43	
SK14	B3-1-24	長楕円形	0.90	0.70	10~17	
SK15	B3-1-19	〃	1.20	0.50	6~9	
SK16	B3-1-25	円形	0.80	0.80	9~11	
SK17	B3-2-16	方形	0.70	0.50	8	
SK18	B3-1-11	-	-	-	5	
SK19	B3-2-23	隅丸長方形	-	1.30	34~36	
SK20	B3-7-4	隅丸方形	0.60	0.50	9~36	
SK21	B3-7-6	円形	0.70	0.70	50~52	
SK22	B3-7-7	隅丸長方形	1.60	1.10	6~27	
SK23	B3-7-9	楕円形	0.90	0.50	68~71	
SK24	B3-7-6	〃	0.90	0.50	16	
SK25	B3-2-17	〃	1.20	0.70	10~12	
SK26	B3-1-16	-	-	-	71~75	

I F 区

遺構番号	グリッド番号	平面形態	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
SK 1	B4-16-13	不整形	4.60	1.70	60	F-2区

I G 区

遺構番号	グリッド番号	平面形態	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
SK 1	B4-12-5	不整長方形	1.63	0.65	70	
SK 2	B4-18-1	不整楕円形	-	0.98	24	
SK 3	B4-17-15	〃	0.85	0.50	15	
SK 4	B4-7-16	〃	1.56	0.52	10	
SK 5	B4-7-18	〃	0.91	0.52	9	

II 区

遺構番号	グリッド番号	平面形態	規模			備考
			長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	
SK 1	B5-24-3	円形	0.90	0.90	16	II A 区
SK 1	C7-7-17	隅丸長方形	3.46	1.14	24	II B 区
SK 2	C7-7-13	長方形	2.40	0.87	5	II B 区
SK 3	C7-12-7	円形	0.55	0.55	20	II B 区
SK 4	C7-12-8	楕円形	0.60	0.56	14	II B 区

圖 版

I A 区





東野土居遺跡遠景（北西より）



調査前風景（南西より）

図版2



遺構検出状態(北西より)



遺構検出状態(西より)



調査区南北バンク東壁セクション(東より)



調査区東西バンク南壁セクション(南より)

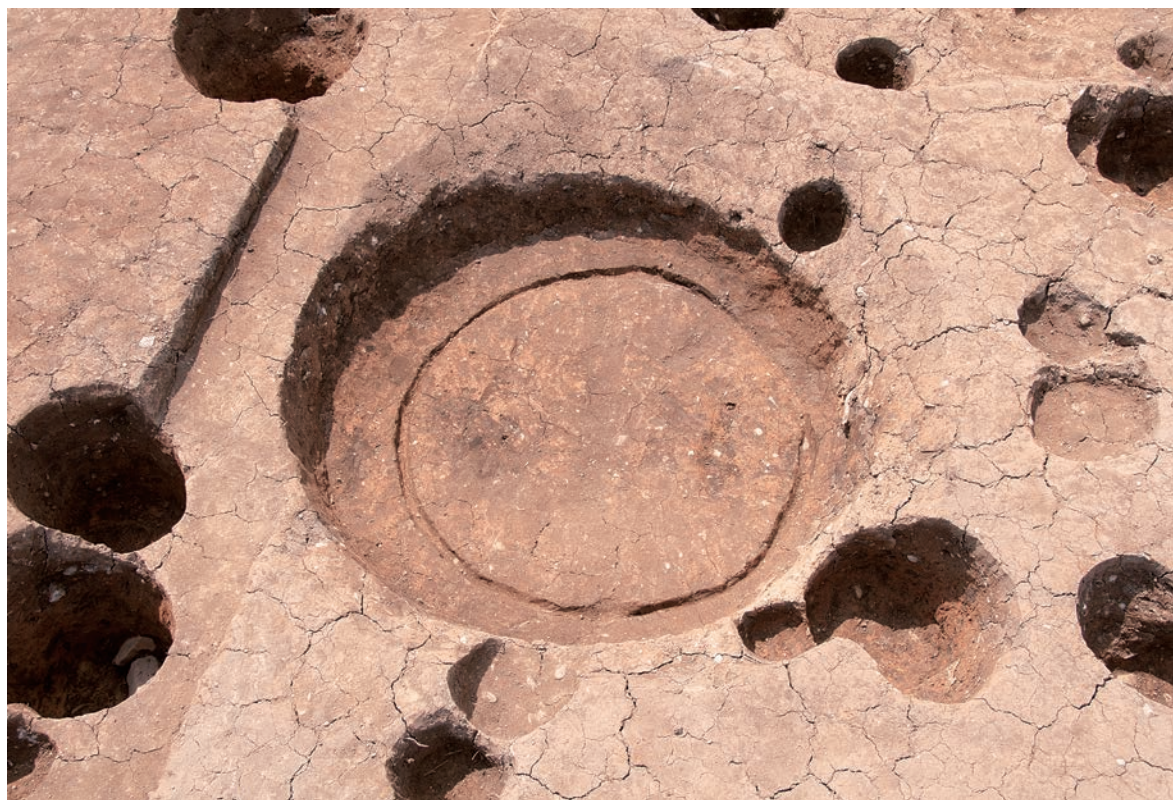
図版4



遺構完掘状態(西より)



遺構完掘状態(南東より)



SK27完掘状態(北より)



SD4～6完掘状態(南より)

図版6



SK2バンクセクション(南より)



SK3バンクセクション(南より)



SK5バンクセクション(南西より)



SK6磁器(11)出土状態



SK27バンクセクション(東より)



SD1バンクセクション(西より)



SD2バンクセクション(南東より)



SD2陶器出土状態



SD3バンクセクション(西より)



SD4バンクセクション(南西より)



SD4陶器(19)出土状態



SD4磁器(37)出土状態



SD4陶器(44)出土状態



SD4陶器(62・73)出土状態



SD4陶器(76)出土状態



SD4石製品(78)出土状態

図版8



SD4石製品(91)出土状態



SD5バンクセクション(南より)



SD7バンクセクション(東より)



SD7陶器(103)出土状態



SD8バンクセクション(南西より)



SD9バンクセクション(南西より)



SD11バンクセクション(東より)



SD15バンクセクション(東より)

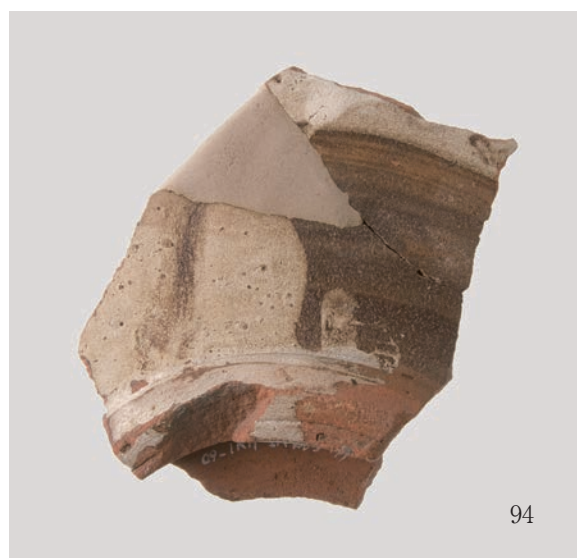


磁器(瓶), 陶胎染付(碗), 陶器(碗·小皿·鉢)

图版10

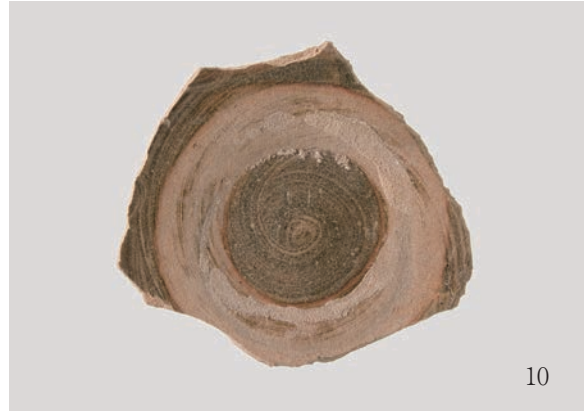


陶胎染付(碗·火入), 陶器(碗)



磁器(瓶), 陶器(碗·皿·鉢·甕·焼締め火入)

图版12



磁器(小皿), 陶胎染付(碗), 陶器(碗·皿)

I B 区





調査前風景(南西より)



調査前風景(北西より)

図版14



遺構完掘状態(北東より)



遺構完掘状態(北より)



SK1バンクセクション(南西より)



SK2~4完掘状態(北より)



SK29バンクセクション(南東より)



SK32バンクセクション(南西より)



SK44バンクセクション(南西より)



SD1バンクセクション(南東より)



SD5・10・11完掘状態(東より)



SD9バンクセクション(南西より)

図版16



SD10・11・13完掘状態(西より)



SD10・11バンクセクション(南東より)



SD12バンクセクション(南西より)



SD15・22完掘状態(北より)



SD15バンクセクション(南西より)



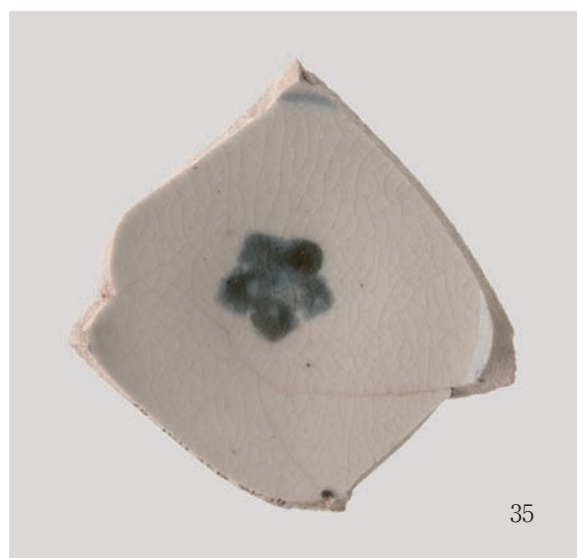
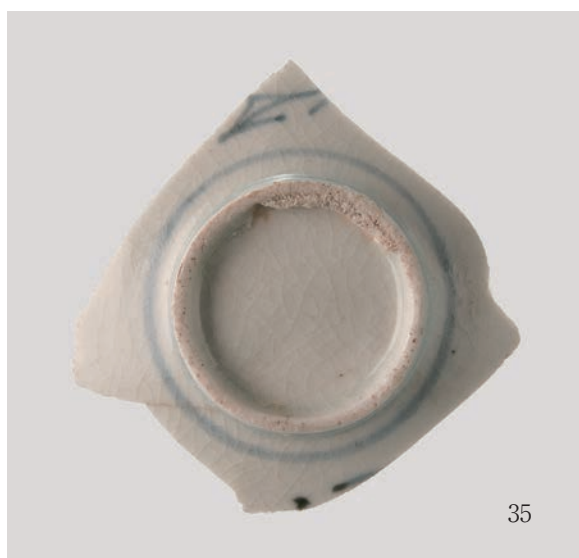
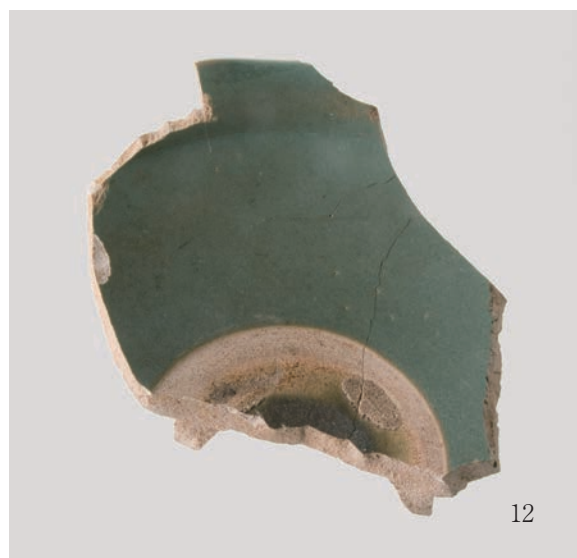
SD21バンクセクション(南西より)



SD21磁器(158)出土状態



SD21瓦質土器(170)出土状態



磁器(碗), 陶器(碗·皿), 石製品(叩石)



74



74



87



87

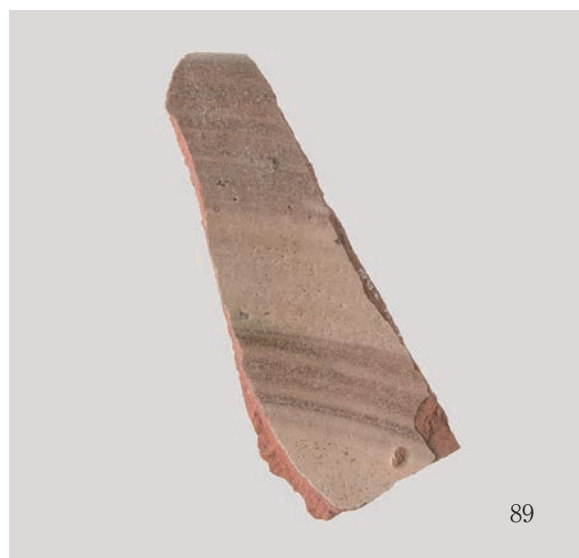


88



88

磁器(皿), 陶器(鉢)



磁器(瓶), 陶器(鉢·甕)

图版20



陶器(碗·片口鉢·甕), 石製品(砥石·不明)

I C ☒





東部遺構完掘状態(南西より)



西部遺構完掘状態(南より)

図版22



SK19・20完掘状態(南西より)



SK27・42完掘状態(北より)



SK33 磔床検出状態 (北東より)



SK33 完掘状態 (北東より)

図版24



SK43～45 礫出土状態(南西より)



SK43～45 完掘状態(南西より)



SK53 遺物出土状態 (北西より)



SD7 遺物出土状態 (北より)



SK4バンクセクション(南より)



SK4石列検出状態(北東より)



SK19・20バンクセクション(南西より)



SK21断ち割りセクション(南西より)



SK21完掘状態(南西より)



SK22完掘状態(南西より)



SK27バンクセクション(南西より)



SK27礫検出状態(北より)



SK27完掘状態(北西より)



SK30完掘状態(南西より)



SK33断ち割りセクション(北西より)



SK38完掘状態(北西より)



SK41バンクセクション(東より)



SK42完掘状態(南西より)



SK46完掘状態(北より)



SK53バンクセクション(南西より)



SK53陶器 (41) 出土状態



SK53磁器・陶器 (43・70) 出土状態



SK53磁器 (57) 出土状態



SK53磁器 (58) 出土状態



SK53磁器 (69) 出土状態



SK53磁器 (69) 出土状態



SK56完掘状態 (南東より)



SK70バンクセクション (南東より)



磁器(碗), 陶器(碗), 石製品(砥石)

图版30

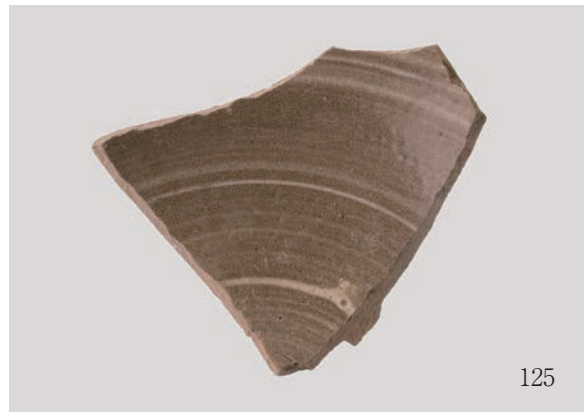
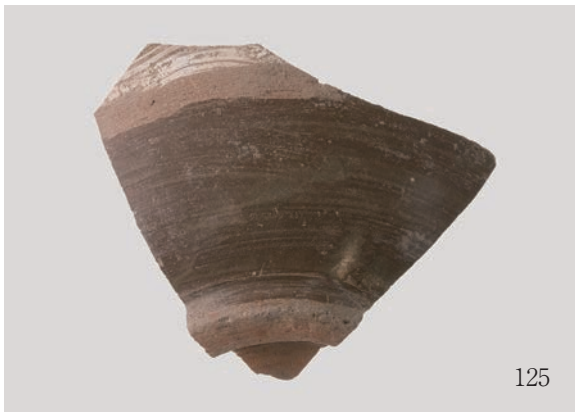


磁器(碗), 陶胎染付(碗), 陶器(碗·小皿)



磁器(碗・瓶・鉢), 陶器(片口または鉢・壺), 石製品(砥石)

図版32



磁器(蓋物・仏飯具), 陶器(碗・片口または鉢), 石製品(大型蛤刃石斧)

I D ☒





調査前風景(北東より)



調査区東壁セクション(西より)

図版34



遺構検出状態(北より)



遺構完掘状態(北より)



遺構完掘状態(南より)



SK24・25完掘状態(北より)

図版36



SK28・49・51・53・55・62・66完掘状態(北東より)



SK30～32完掘状態(北より)



SK5完掘状態(南西より)



SK13バンクセクション(南より)



SK21完掘状態(北東より)



SK28バンクセクション(南東より)



SK28完掘状態(東より)



SK51バンクセクション(北東より)



SK51完掘状態(東より)



SK53完掘状態(東より)

図版38



SK55完掘状態(南東より)



SK62完掘状態(東より)



SK64完掘状態(南東より)



SK72バンクセクション(南より)



SK72完掘状態(東より)



SD9バンクセクション(東より)



SD38完掘状態(西より)



P1須恵器(356)出土状態



磁器(碗·蓋·德利), 陶器(碗·瓶掛)

图版 40



磁器(瓶), 陶器(台付灯明皿・茶釜・甕), 石製品(砥石)



磁器(碗·蕎麦猪口), 陶器(壺), 石製品(砥石)

图版42



須惠器(甕), 磁器(碗), 陶器(甕), 土製品(竈), 石製品(砥石)



磁器(碗·蓋·水滴), 陶器(鉢)

图版 44



73



76



80



108



86



86



121



130

磁器(碗·杯·鉢), 陶器(搗鉢), 瓦質土器(火鉢)



磁器(鉢), 陶器(碗·蓋·土瓶), 土製品(竈·箱庭道具)

图版 46



磁器(碗·杯·鉢), 石製品(有舌尖頭器)

I E ☒



調査前風景(南西より)



調査区北壁セクション(南より)

図版48



遺構検出状態(東より)



遺構検出状態(西より)



遺構完掘状態(東より)



遺構完掘状態(南西より)

図版50



SK3バンクセクション(北より)



SK3～5完掘状態(北より)



SK8完掘状態(北より)



SK13完掘状態(南より)



SK19磁器(26)出土状態



SK13土師質土器(23)出土状態



SD3バンクセクション(南より)



SD2～4完掘状態(南より)



磁器(碗·瓶), 陶器(甕), 土製品(人形)

図版52



磁器(鉢), 白磁(紅皿), 陶器(蓋・土瓶), 土師質土器(羽釜), 土製品(竈)

I F · G ☒



I F - 2区 遺構検出状態(西より)



I F - 2区 遺構完掘状態(西より)



I F-1区 遺構検出状態(南東より)



I F-1区 遺構完掘状態(西より)



I F-1区 SD1完掘状態(北東より)



I F-2区 遺構完掘状態(南東より)



I F-2区 SR1バンクセクション(南東より)



I F-2区 SD1完掘状態(南東より)



I F-2区 SD1バンクセクション(南東より)



I F-2区 SK1完掘状態(東より)



I G - 2区 遺構完掘状態(北西より)



I G - 2区 下面遺構完掘状態(南西より)



I G - 1 区 遺構検出状態 (南より)



I G - 1 区 遺構完掘状態 (南東より)



I G - 1 区 遺構完掘状態 (北東より)



I G - 1 区 北壁セクション (南東より)



I G - 1 区 SD1・2, SU2セクション (北東より)



I G - 2 区 遺構検出状態 (西より)



I G - 2 区 東壁セクション (南西より)



I G - 2 区 SK1完掘状態 (南より)



I G - 2区 SK2完掘状態(北西より)



I G - 2区 SD1完掘状態(北東より)



I G - 2区 SD1バンクセクション(南西より)



I G - 2区 SD2バンクセクション(南東より)



I G - 2区 SD3完掘状態(南西より)



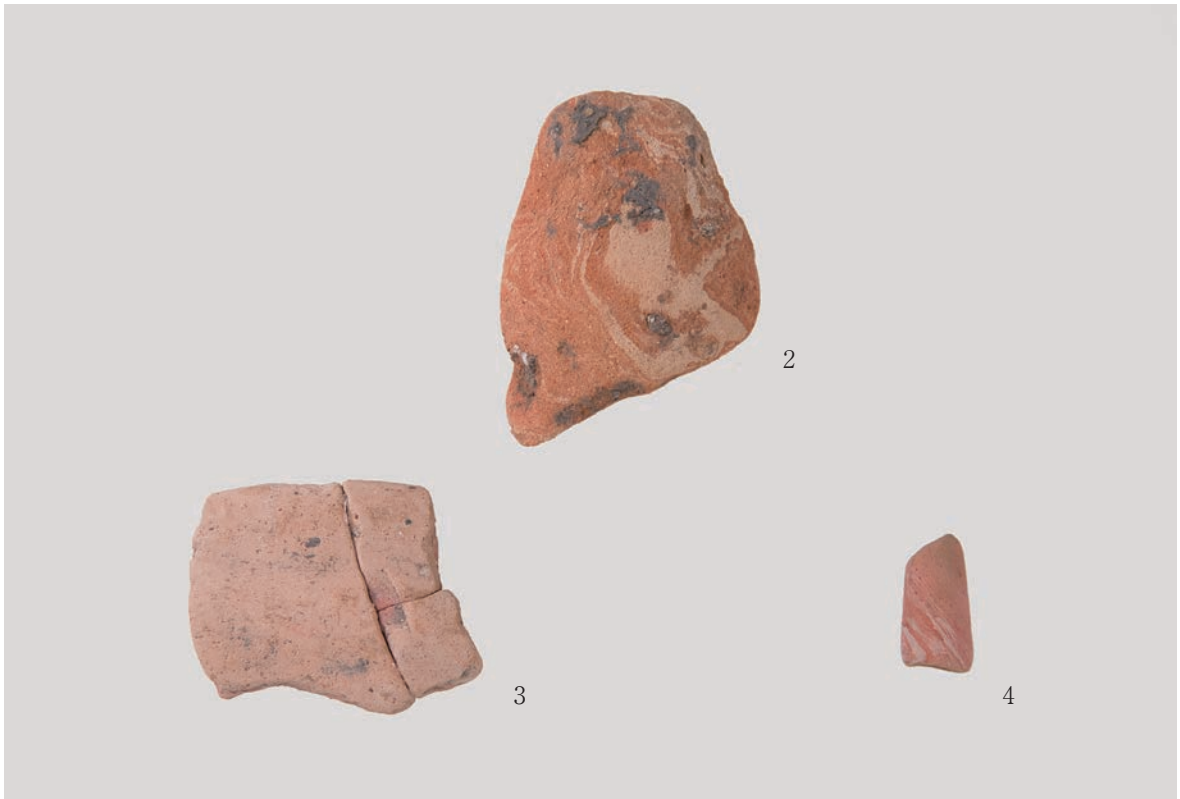
I G - 3区 遺構検出状態(北西より)



I G - 3区 遺構完掘状態(北西より)



I G - 3区 東壁セクション(北西より)



I F区 土師器(皿), 土製品(土錘)



I F区 瓦(平瓦)

II A · B ☒



Ⅱ A 区 西部遺構検出状態(南西より)



Ⅱ A 区 西部遺構完掘状態(西より)



Ⅱ A区 東部遺構検出状態(南東より)



Ⅱ A区 東部遺構完掘状態(南東より)



II A区 西部遺構検出状態(北東より)



II A区 SD5検出状態(南西より)



II A区 調査区東壁セクション(西より)



II A区 調査区北壁セクション(南より)



II A区 SD1・2バンクセクション(南西より)



II A区 SD3バンクセクション(南西より)



II A区 SD4・5バンクセクション(南東より)



II A区 SU13~19バンクセクション(北東より)



Ⅱ A 区 西部遺構完掘状態(北より)



Ⅱ A 区 西部遺構完掘状態(東より)



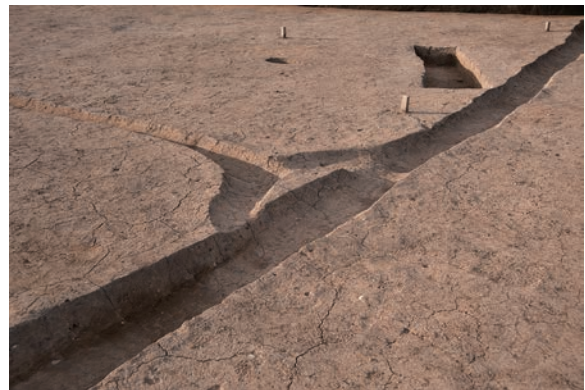
Ⅱ A 区 SD5完掘状態(南西より)



Ⅱ A 区 SD1・2完掘状態(南西より)



Ⅱ A 区 SD3完掘状態(南東より)



Ⅱ A 区 SD4・5完掘状態(南より)



Ⅱ A 区 畝状遺構完掘状態(東より)



Ⅱ A 区 SK1完掘状態(南より)



ⅡB区 西部遺構検出状態(北西より)



ⅡB区 西部遺構完掘状態(西より)

図版64



ⅡB区 中央部遺構完掘状態(南西より)



ⅡB区 東部遺構検出状態(西より)



ⅡB区 SB1完掘状態(西より)



ⅡB区 東部遺構完掘状態(西より)



ⅡB区 調査区西壁セクション(東より)



ⅡB区 SD1バンクセクション(南東より)



ⅡB区 SK1バンクセクション(北東より)



ⅡB区 SK3バンクセクション(南より)



ⅡB区 SK4バンクセクション(南より)



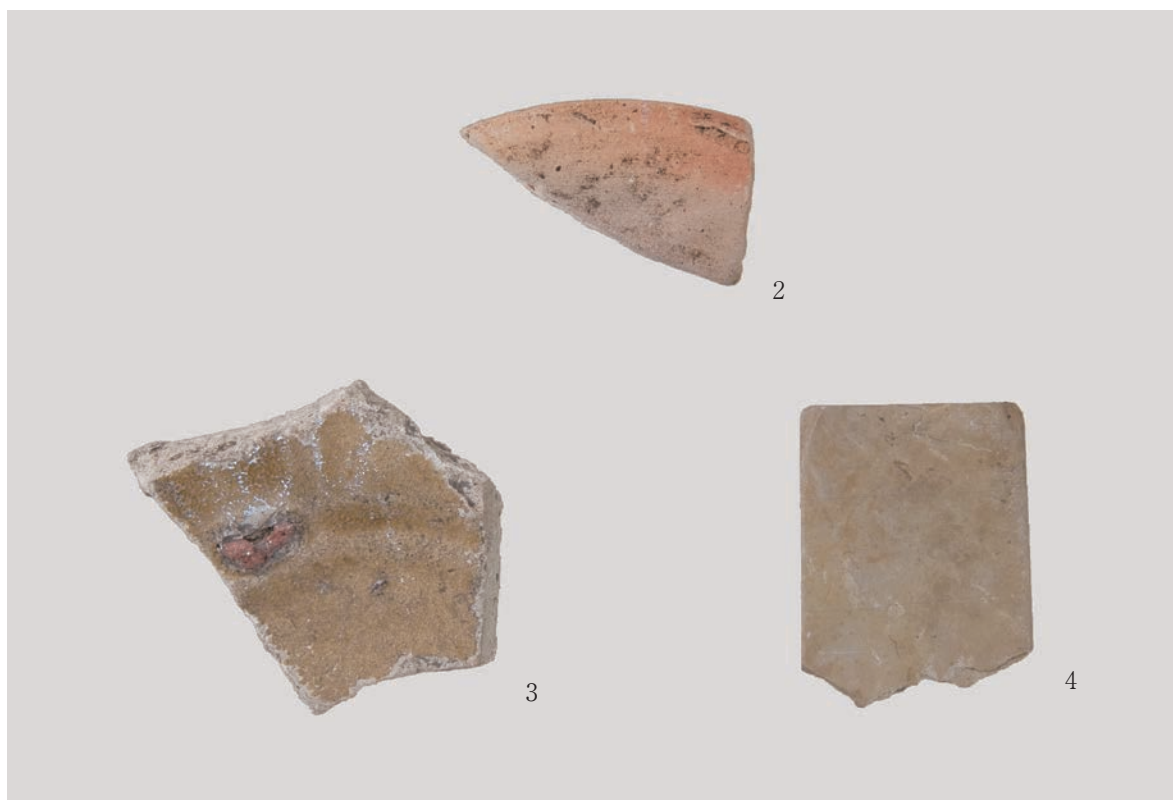
ⅡB区 SB1-P3半裁(南より)



ⅡB区 SB1-P4半裁(南より)



ⅡB区 SB1-P5半裁(南より)



土師質土器(小皿), 陶器(皿), 石製品(砥石)



瓦器(椀), 金属製品(不明)

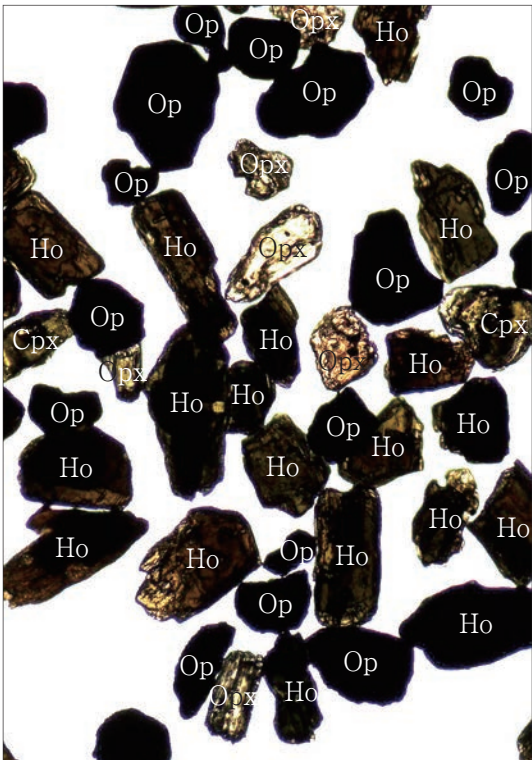


須恵器(杯蓋)

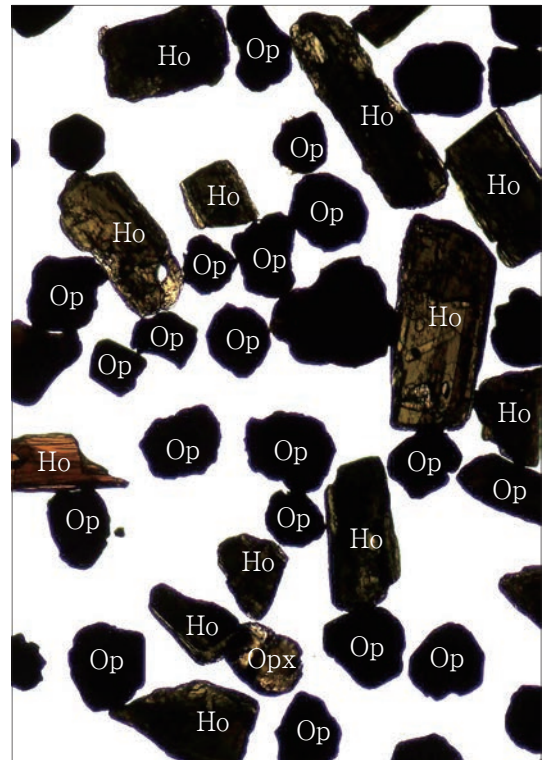


緑釉陶器(碗)

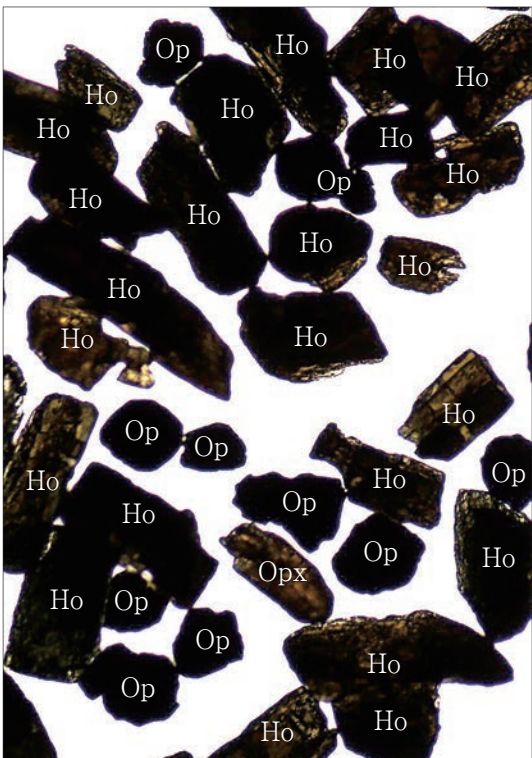
自然科学分析



1. 重鉱物 (試料番号1)



2. 重鉱物 (試料番号3)



3. 重鉱物 (試料番号5)



4. 軽鉱物 (試料番号1)

Opx:斜方輝石,Cpx:単斜輝石,Ho:角閃石,Op:不透明鉱物,Vg:火山ガラス,Pl:斜長石

0.5mm

重鉱物・軽鉱物 (II A 区)

報告書抄録

ふりがな		ひがしのどいいせきいち						
書名		東野土居遺跡 I						
副書名		南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅶ						
シリーズ名		高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号		第137集						
編著者名		出原恵三, 久家隆芳, 菊池直樹, 山崎孝盛, 下村裕, パリノ・サーヴェイ株式会社						
編集機関		公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター						
所在地		高知県南国市篠原1437-1						
発行年月日		2014年3月20日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしのどいいせき 東野土居遺跡	〒781-5213 高知県香南市 のいちちょうひがしのどい 野市町東野・土居	39211	200039	33° 33′ 17″	133° 43′ 01″	2009.5.27 ～ 2009.8.3 2010.12.13 ～ 2011.2.25 2011.4.25 ～ 2012.1.31	20,752㎡	記録保存 調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
東野土居遺跡	集落跡	近世	掘立柱建物	22棟		須恵器 磁器 陶器 土師質土器 瓦質土器 土製品 石製品 金属製品	近世の掘立柱建物などで構成される屋敷が検出されており、本地域における当該期の様相を示す貴重な資料を得ることができた。	
要約	<p>検出遺構・遺物のほとんどは近世に属するものであるが、僅少なながら有舌尖頭器や太形蛤刃石斧が出土していることから遺跡の成立時期は縄文時代草創期や弥生時代に求めることができよう。しかし、古い時代の遺構は後世の開発によって削平されているものと考えられる。</p> <p>近世遺構は、屋敷跡で方形の区画溝に囲われたなかに掘立柱建物や土坑が見られる。その時期は出土遺物から18世紀代～19世紀に属する。I A区では区画溝を把握することができなかったが、I C区は一辺65m、I B・D区は一辺25～30mの長さの方形区画を有しており、屋敷地に大小のあることが判る。この差異は住人の階層性に起因する可能性もあるが、出土遺物には違いを見出すことはできない。これらの屋敷の特徴として肥溜めと考えられる径1.5m前後の円形または方形状の素掘りまたはハンダで固めた密集土坑を挙げることができる。土坑群を覆う掘立柱建物を伴う例も多い。これらの屋敷群は、近世農村を構成するものであるが、先行する中世や近世初期の遺構が見られないことから成立期の村落遺構として捉えることができる。また屋敷地の地割りや区画溝が現在の水田畦畔や畦道に一致することから18世紀に成立した屋敷群が、現在の集落の出発点となっていることが判る。</p>							

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第137集

東野土居遺跡Ⅰ

南国安芸道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅶ

(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ)

2014年3月20日

発行 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

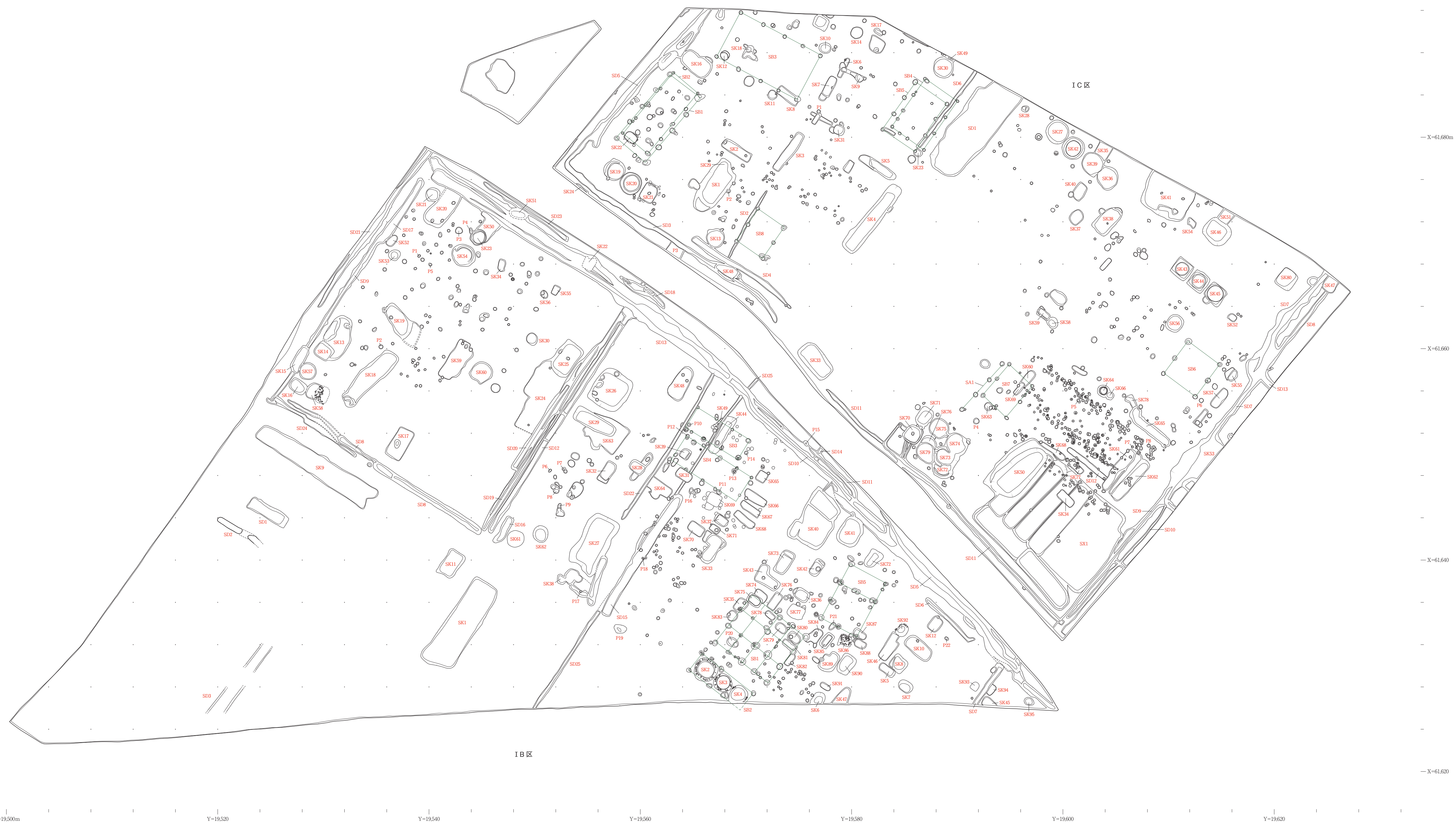
高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社



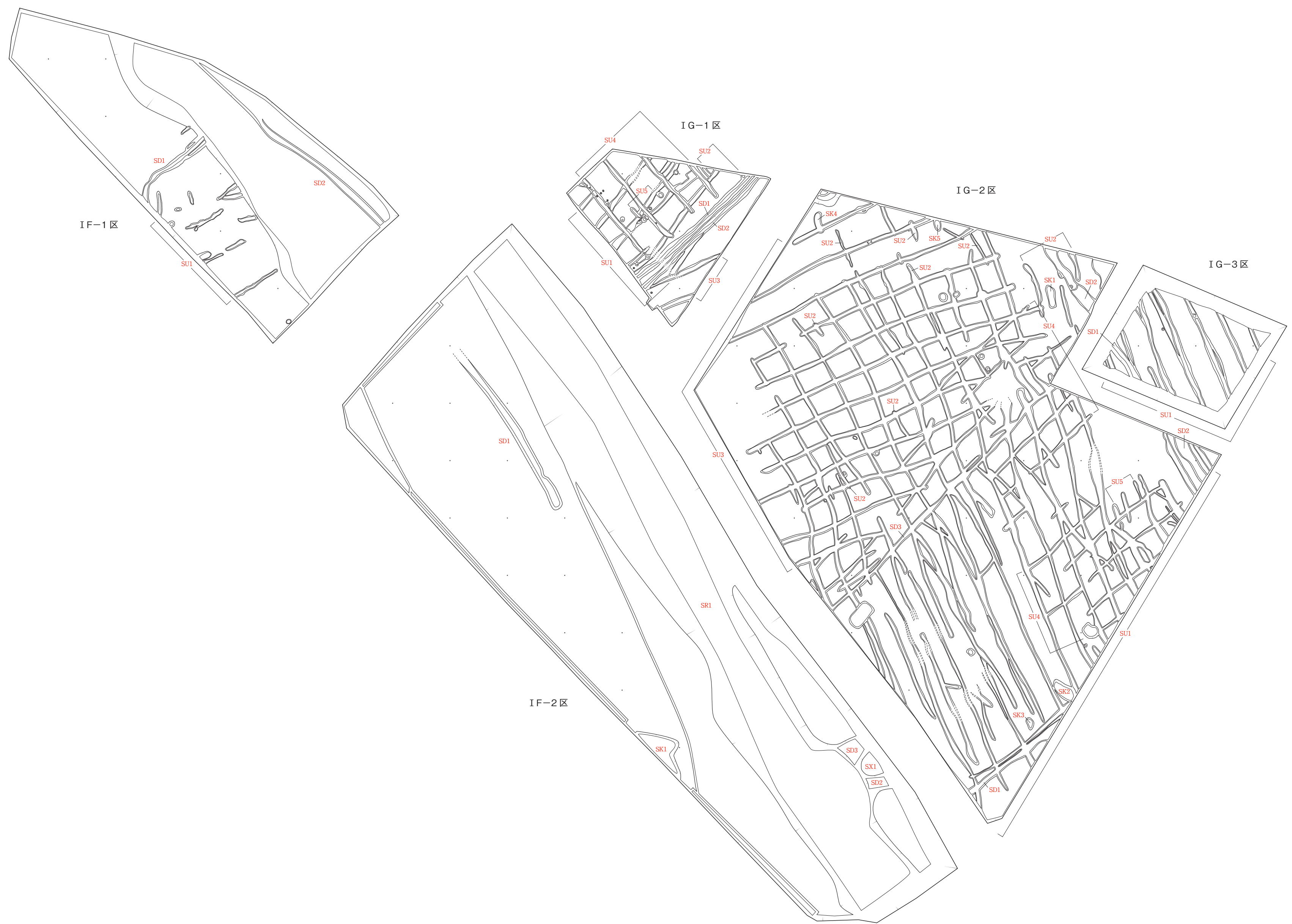
付図1 東野土居遺跡調査第I A区遺構平面図 (S=1/200)



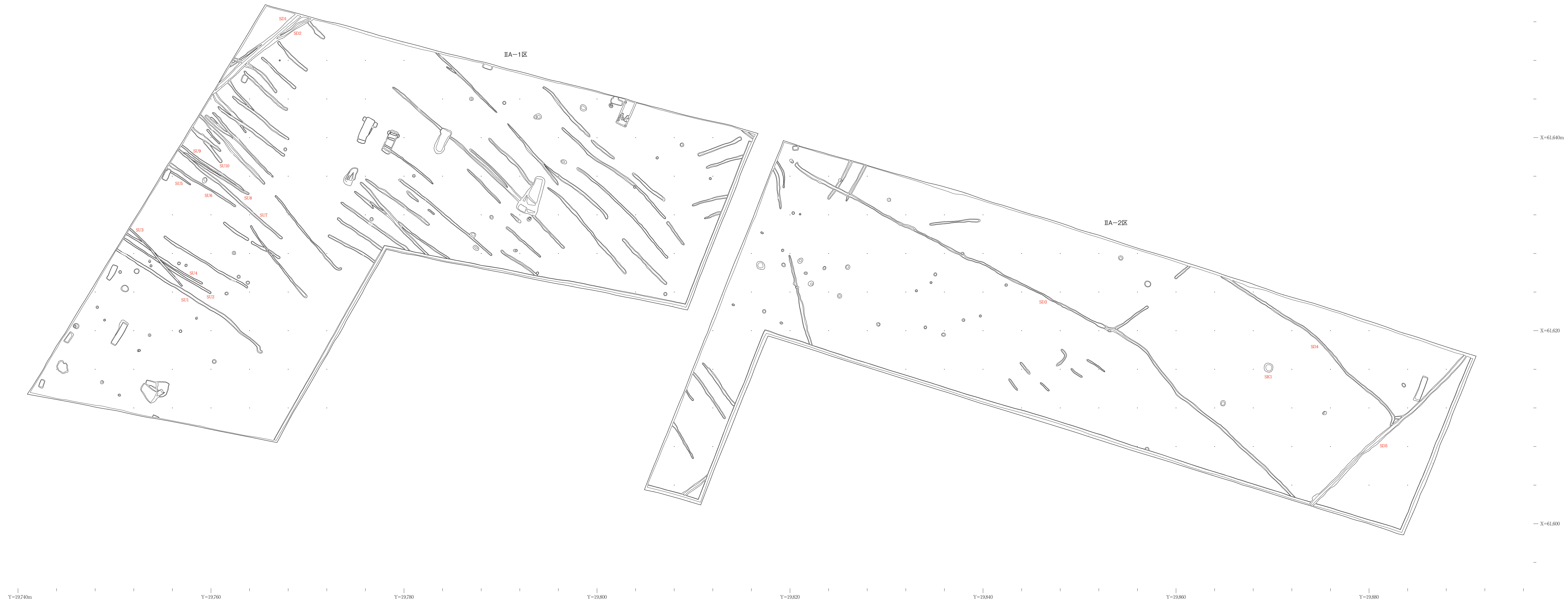
付図2 東野土居遺跡調査第1B・C区遺構平面図 (S=1/200)



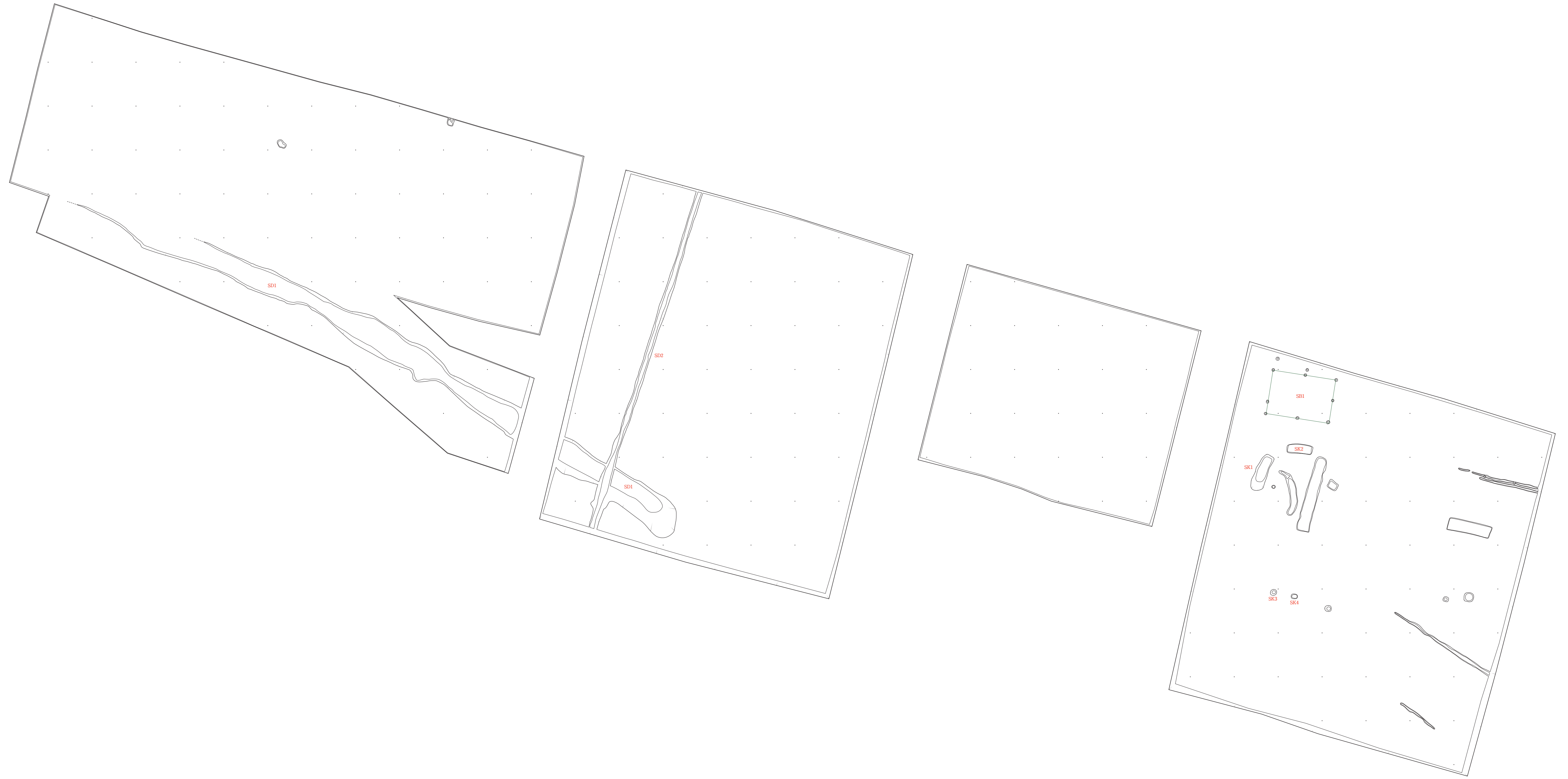
付図3 東野土居遺跡調査第I・E区遺構平面図(S=1/200)



付図4 東野土居遺跡調査第IF・G区遺構平面図(S=1/200)



付図5 東野土居遺跡調査第IIA区遺構平面図 (S=1/200)



Y=19.920m

Y=19.940

Y=19.960

Y=19.980

Y=20.000

Y=20.020

Y=20.040

X=61.600m

X=61.580

X=61.560

X=61.540

付図6 東野土居遺跡調査第ⅡB区遺構平面図 (S=1/200)

